

九州縦貫自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

— XIV —

福岡県山門郡瀬高町所在大道端遺跡の調査

本文篇

1 9 7 7

福岡県教育委員会

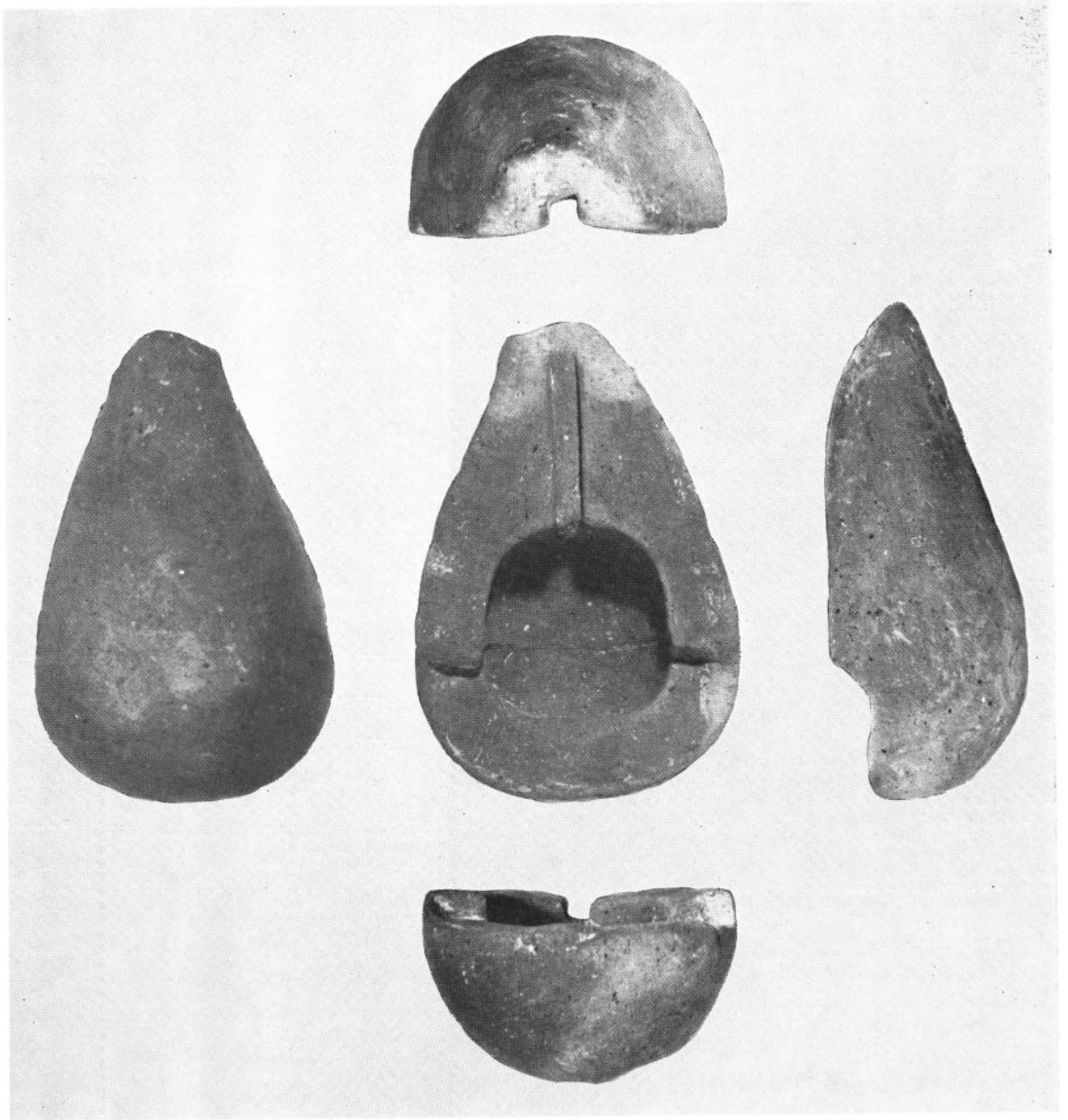
九州縦貫自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

— XIV —

福岡県山門郡瀬高町所在大道端遺跡の調査

1 9 7 7

福岡県教育委員会



鈴の鑄型

B区第1号溝 a 出土。土製の鑄型で、内面は
焼けている。（本文257頁、Fig. 338参照）

序

大道端遺跡は、昭和47年4月から約半年の期間発掘調査を実施した遺跡です。先土器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代・歴史時代とこの地に根をすえて、今日の私達のくらしの基礎を作り上げてくれた先人たちの生活の実態をしのぶ資料がこの遺跡から山のように掘り出されました。

今、ここに報告書を刊行するにあたり、あの夏の暑い日ざしの中で現場で作業にあたられた地元の方々・いろいろとご面倒いただいた瀬高町教育委員会・日本道路公団瀬高工事事務所の皆さん方の日に焼けた笑顔がうかんでまいります。

いろいろな困難を克服して今日をきずいてくれた先人達の笑顔もあのような笑顔だったのではないのでしょうか。

発掘調査にあたられた関係者各位に深くお礼を申し上げるとともに、この報告書が郷土の文化財を守るうえで、また学問の進歩に少しでも役立つことを祈りながら序文といたします。

昭和52年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 森 田 實

例 言

1. この報告書は、九州縦貫高速自動車道建設によって破壊される予定の遺跡について行なった事前調査のうち、昭和47年度に発掘した山門郡瀬高町所在大道端遺跡の調査報告書である。
2. 発掘調査は、日本道路公団の受託事業として、福岡県教育委員会が実施した。
3. 鉄滓の分析は、北九州郷土史研究会 大澤正巳氏の御厚意によるものである。
4. 本書の執筆は、つぎのとおりである。

I	山本 信夫
Ⅰ・Ⅱ	山本 信夫・関 晴彦
Ⅳ—A 遺構 B区	木川 雅樹
C区	高田 弘信
遺物	馬田 弘稔

(遺構については、馬田が加筆した。)

Ⅳ—B 遺構 B区	佐土原祐昌
(11・17・18・26・28・29・36・37・67・71・78・79・80・ 81・84・85・92・93・95・96・97・98・101・102・104・105・ 108・109・110・111・112・113・114・115・116・117・120・124・125)	
B区	杉野 悦郎
(4・8・14・24・33・34・35・64・68・69・70・72・74・ 75・86・87・88・89・90・91・94・106・118・119・121・122・ 123)	
B区	関 晴彦
(6・9・15・20・23・31・32・38・39・40・41・42・43・ 44・45・46・47・48・49・50・51・52・53・54・55・56・ 57・59・60・61・62・66・82・83)	
C区	山本 信夫
遺物	関 晴彦
遺構 D区	佐土原祐昌
遺物	関 晴彦

(B区の遺構については、各執筆者の了承を得て、関が加筆した)

Ⅳ—C	森田 勉
Ⅳ—D	関 晴彦

Ⅳ—E—1	副島 邦弘・平ノ内幸治・稲富 裕和・関晴彦
Ⅳ—E—2	田中 良之・宮内 克己
Ⅳ—E—3	馬田 弘稔
Ⅳ—E—4・5	関 晴彦
Ⅴ	西谷 正
Ⅵ	大澤 正巳

- 遺構の写真は西谷正（現九州大学文学部助教授）、遺物の写真は石丸洋（九州歴史資料館）・岡紀久夫の3氏の撮影による。
- 本書の編集は、山本信夫の協力を得て、関晴彦が担当した。

目 次

	頁
I 位置と環境	1
II 調査の経過	22
III 調査の概要	24
IV 遺構と遺物	27
A 弥生時代の遺構と遺物	27
B区第3号住居跡	27
B区第7号住居跡	28
B区第10号住居跡	30
B区第16号住居跡	32
B区第27号住居跡	33
B区第30号住居跡	35
B区第63号住居跡	37
B区第77号住居跡	39
C区第1号住居跡	41
C区第3号溝	43
小 結	46
B 古墳時代の遺構と遺物	49
B区第4号住居跡	49
B区第6号住居跡	51
B区第8号住居跡	53
B区第9号住居跡	54
B区第11号住居跡	55
B区第14号住居跡	57
B区第15号住居跡	58
B区第17号住居跡	60
B区第18号住居跡	60
B区第20号住居跡	62
B区第23号住居跡	63
B区第24号住居跡	64
B区第26号住居跡	66
B区第28号住居跡	67
B区第29号住居跡	67

B区第31号住居跡	69
B区第32号住居跡	71
B区第33号住居跡	73
B区第34号住居跡	74
B区第35号住居跡	76
B区第36号住居跡	78
B区第37号住居跡	79
B区第38号住居跡	79
B区第39号住居跡	81
B区第40号住居跡	82
B区第41号住居跡	83
B区第42号住居跡	85
B区第43号住居跡	86
B区第44号住居跡	86
B区第45号住居跡	89
B区第46号住居跡	89
B区第47号住居跡	92
B区第48号住居跡	94
B区第49号住居跡	96
B区第50号住居跡	98
B区第51号住居跡	99
B区第52号住居跡	100
B区第53号住居跡	101
B区第54号住居跡	102
B区第55号住居跡	104
B区第56号整穴	105
B区第57号住居跡	107
B区第59号住居跡	107
B区第60号住居跡	109
B区第61号住居跡	111
B区第62号住居跡	112
B区第64号住居跡	113
B区第66号住居跡	114
B区第67号住居跡	114
B区第68号住居跡	116
B区第69号住居跡	117

B区第70号住居跡·····	118
B区第71号住居跡·····	120
B区第72・74号竖穴·····	120
B区第75号竖穴·····	123
B区第78号住居跡·····	124
B区第79号住居跡·····	125
B区第80号住居跡·····	126
B区第81号住居跡·····	126
B区第82号住居跡·····	126
B区第83号住居跡·····	129
B区第84号住居跡·····	131
B区第85号住居跡·····	132
B区第86号住居跡·····	132
B区第87・88・89号住居跡·····	132
B区第90号住居跡·····	134
B区第91号住居跡·····	136
B区第92号住居跡·····	137
B区第93号住居跡·····	137
B区第94号住居跡·····	137
B区第95号住居跡·····	141
B区第96号住居跡·····	142
B区第97号住居跡·····	142
B区第98号竖穴·····	144
B区第101号住居跡·····	145
B区第102号住居跡·····	147
B区第104号住居跡·····	147
B区第105号住居跡·····	148
B区第106号住居跡·····	149
B区第108号住居跡·····	150
B区第109号住居跡·····	151
B区第110号住居跡·····	152
B区第111号住居跡·····	153
B区第112号住居跡·····	153
B区第113号竖穴·····	156
B区第114号竖穴·····	157
B区第115号住居跡·····	157

B区第116号住居跡	159
B区第117号住居跡	160
B区第118号住居跡	161
B区第119号住居跡	161
B区第120号住居跡	161
B区第121号住居跡	165
B区第122号住居跡	165
B区第123号住居跡	165
B区第124号住居跡	167
B区第125号竖穴	167
B区第126号竖穴	168
C区第2号住居跡	169
C区第3号住居跡	169
C区第4号住居跡	170
C区第5号住居跡	171
C区第6号住居跡	171
C区第7号住居跡	173
C区第9号住居跡	173
C区第13号住居跡	173
C区第14号住居跡	173
C区第15号住居跡	174
C区第16号住居跡	175
C区第17号住居跡	176
C区第18号住居跡	180
C区第19号住居跡	182
C区第20号住居跡	182
C区第21号住居跡	185
C区第22号住居跡	188
C区第23号住居跡	188
C区第24号住居跡	190
C区第25号住居跡	192
C区第26号住居跡	194
C区第27号住居跡	198
C区第28号住居跡	200
C区第29号住居跡	202
C区第30号住居跡	202

C区第31号住居跡	205
C区第32号住居跡	206
C区第33号住居跡	207
C区第34号住居跡	208
C区第35号住居跡	209
C区第36号住居跡	210
C区第37号住居跡	213
C区第38号住居跡	213
C区第39号住居跡	214
C区第40号住居跡	220
C区第41号住居跡	221
C区第42号住居跡	223
C区第43号住居跡	224
C区第44号住居跡	225
C区第45号住居跡	227
C区第46号住居跡	228
C区第47号住居跡	229
C区第48号住居跡	230
C区第49号住居跡	232
C区第50号住居跡	232
C区第51号住居跡	234
D区第1号竪穴	235
C 歴史時代の遺構と遺物	246
1. 井戸	246
2. C区 Pit 167	251
3. C区 Pit 933	251
4. C区 Pit 934	253
5. B区第1号溝	253
D その他の遺構と遺物	259
1. 溝	259
B区第2号溝	259
B区第3号溝	259
B区第4号溝	260
B区第5号溝	260
B区第6号溝	260
C区第1号溝	260

C区第2号溝	262
C区第4号溝	262
C区第5号溝	264
C区第6号溝	265
C区第7号溝	265
C区第8号溝	265
C区第9号溝	265
C区第11号溝	265
C区第12号溝	266
C区第13号溝	266
C区第14号溝	266
C区第15号溝	266
D区第1号溝	270
D区第2号溝	270
D区第3号溝	270
2. 掘立柱建物跡	272
3. 工房跡	275
4. ピット	276
小 結	279
E その他の遺物	291
1. 大道端遺跡の石器について	291
a. 先土器時代の石器	292
b. 縄文時代の石器	292
小 結	305
大道端遺跡出土の石器 —その2—	313
2. 縄文式土器	318
a 轟・曾畑式系土器	318
b 阿高式系土器	319
c 後期磨消縄文土器	327
d 御領式系土器	333
e 底 部	339
小 結	339
3. 弥生式土器	347
4. 土師器	350
5. 須恵器	354
V ま と め	362

Ⅵ 大道端遺跡出土の鉄滓について	365
1. 緒 言	365
2. 調査方法	365
3. 調査結果	365
4. 結 論	368

図 版 目 次

	本文対照頁
PL. 1 大道端遺跡付近航空写真	1
PL. 2 小谷遺跡出土石器	6
PL. 3 中園遺跡出土土器	6
PL. 4 (1) 権現塚古墳(東南から)	11
(2) 大谷1号墳出土石棺	11
PL. 5 (1) 金栗ヤンブシ塚古墳	Tab. 1-87
(2) 王塚古墳(西から)	Tab. 1-73
PL. 6 (1) 車塚古墳(北東から)	11
(2) 車塚古墳出土鏡(『耽奇漫録』より)	11
(3) 女山産女谷出土銅銚	8
PL. 7 (1) 女山神籠石	18
(2) 女山神籠石の現状と大道端遺跡(東から)(左下は列石が破壊されている)	18
PL. 8 女山古墳群表採須恵器	12
PL. 9 (1) 女山古墳群中の一基	12
(2) 女山火葬場遺跡表採土器	13
PL. 10 B区第29号住居跡付近から南西を望む	
PL. 11 B区第14号住居跡付近から南西を望む	
PL. 12 B区第31・32号住居跡付近から西を望む	
PL. 13 (1) B区第9・10号住居跡(南から)	30・54
(2) B区第9号住居跡出土土器	54
(3) B区第10号住居跡出土土器	30
PL. 14 (1) B区第11号住居跡(東から)	55
(2) B区第11号住居跡出土土器	55
PL. 15 (1) B区第17号住居跡(東南から)	60
(2) B区第17号住居跡出土遺物	60
PL. 16 (1) B区第18号住居跡(東南から)	60

	(2) B区第18号住居跡カマド（東南から）	60
	(3) B区第18号住居跡出土土器	60
PL. 17	B区第16・27号住居跡（北から）	32・33
PL. 18	B区第27号住居跡（北西から）	33
PL. 19	(1) B区第29号住居跡（南から）	67
	(2) B区第29号住居跡カマド（南から）	67
	(3) B区第29号住居跡出土土器	68
PL. 20	(1) B区第30号住居跡（東南から）	35
	(2) B区第30号住居跡出土土器	35
PL. 21	(1) B区第31・32号住居跡（東から）	69・71
	(2) B区第32号住居跡出土土器	71
PL. 22	(1) B区第14・34・35号住居跡（南西から）	57・74・76
	(2) B区第14号住居跡出土土器	57
	(3) B区第34号住居跡出土轆羽口	75
	(4) B区第34号住居跡出土土器	75
	(5) B区第35号住居跡出土土器	76
PL. 23	(1) B区第36・37号住居跡（北から）	78・79
	(2) B区第36号住居跡出土土器	79
PL. 24	(1) B区第3号溝付近から南東を望む	
	(2) B区第61号住居跡付近から南を望む	
PL. 25	(1) B区第61号住居跡（東南から）	111
	(2) B区第15号住居跡（北西から）	58
PL. 26	(1) B区第8号住居跡出土土器	54
	(2) B区第61号住居跡出土土器	111
	(3) B区第63号住居跡出土遺物	37
	(4) B区第64号住居跡出土土器	113
PL. 27	B区第38・39・40号住居跡付近より東を望む	
PL. 28	(1) B区第6号住居跡（西から）	51
	(2) B区第6号住居跡出土土器	51
	(3) B区第6号住居跡床面下から出土した焼土群	275
PL. 29	(1) B区第38・39・40号住居跡（東から）	79・81・82
	(2) B区第40号住居跡出土土器	82
PL. 30	(1) B区第41号住居跡（西から）	83
	(2) B区第7号住居跡（東南から）	28
PL. 31	(1) B区第44・45号住居跡（南西から）	86・89
	(2) B区第42・43号住居跡（西から）	85・86

PL. 32	(1) B区第44号住居跡 (南西から)	86
	(2) B区第44号住居跡カマド (東南から)	86
	(3) B区第44号住居跡出土遺物.....	88
PL. 33	B区第55号住居跡 (南から)	104
PL. 34	(1) B区第56号竪穴 (東南から)	105
	(2) B区第56号竪穴出土土器.....	105
	(3) 鉄器出土状態.....	105
PL. 35	(1) B区第46号住居跡付近から北東を望む	
	(2) B区第47号住居跡付近から南西を望む	
PL. 36	(1) B区第47・51号住居跡 (南西から)	92・99
	(2) B区第47号住居跡出土土器.....	94
	(3) B区第51号住居跡出土土器.....	99
PL. 37	(1) B区第48号住居跡 (東南から)	94
	(2) B区第48号住居跡カマド (東南から)	94
	(3) B区第48号住居跡出土土器.....	94
PL. 38	(1) B区第49・52号住居跡 (東南から)	96・100
	(2) B区第49号住居跡出土土器.....	96
	(3) B区第50号住居跡 (東南から)	98
PL. 39	(1) B区第53・54号住居跡 (南西から)	101・102
	(2) B区第54号住居跡カマド (北西から)	102
	(3) B区第54号住居跡出土土器.....	102
PL. 40	(1) B区第46・59号住居跡 (南西から)	89・107
	(2) B区第46号住居跡出土土器.....	92
	(3) B区第60号住居跡 (東南から)	109
PL. 41	(1) B区第23号住居跡付近から北東を望む	
	(2) B区第2・3号溝 (西から)	259
PL. 42	B区第71号住居跡付近から北東を望む	
PL. 43	(1) B区第23号住居跡 (南から)	63
	(2) B区第23号住居跡カマド (南から)	63
	(3) B区第23号住居跡出土遺物.....	63
PL. 44	(1) B区第68号住居跡 (北西から)	116
	(2) B区第68号住居跡カマド (南東から)	116
PL. 45	(1) B区第69・70号住居跡 (南から)	117・118
	(2) B区第69号住居跡 (東南から)	117
	(3) B区第69号住居跡出土土器.....	117
	(4) B区第70号住居跡出土土器.....	118

PL. 46	(1) B区第71号住居跡（東から）	120
	(2) B区第67号住居跡（北西から）	114
PL. 47	(1) B区第72・74号竪穴（東から）	120
	(2) B区第72号竪穴出土土器	120
PL. 48	(1) B区第24号住居跡（南から）	64
	(2) B区第24号住居跡出土土器	64
PL. 49	(1) B区第96・97・98・100・101・102号住居跡（南西から）	142～147
	(2) B区第101号住居跡出土遺物	146
PL. 50	B区第78号住居跡付近から南を望む	
PL. 51	B区1号溝b付近から東を望む	
PL. 52	B区第78・79・80・82・85・92・93号住居跡（西から）	124・125・126・132・137
PL. 53	B区第85・86・87・88・89・90・91号住居跡（北西から）	132・134・136
PL. 54	(1) B区第77・81・83・84号住居跡（南西から）	39・126・127・131
	(2) B区第77号住居跡出土土器	39
PL. 55	(1) B区第94号住居跡（東南から）	137・138
	(2) B区第94号住居跡カマド（東南から）	137・138
	(3) B区第94号住居跡出土土器	137・138
PL. 56	(1) B区第3・4・119号住居跡（東から）	27・49・161
	(2) B区第3号住居跡出土鉄器	27—28
	(3) B区第3号住居跡出土土器	27
	(4) B区第4号住居跡出土遺物	49
PL. 57	(1) B区第118号住居跡（北から）	161
	(2) B区第106号住居跡（東から）	149
	(3) B区第106号住居跡床面出土の石	149
PL. 58	B区第108・109・110・111・112号住居跡および第125・113号竪穴（南から）	150～156・167
PL. 59	(1) B区第121・122・123号住居跡（北東から）	165
	(2) B区第124号住居跡	167
PL. 60	(1) B区第101号住居跡床面から出土した石	146
	(2) B区第105号住居跡出土紡錘車（ $\frac{1}{2}$ ）	149
	(3) B区第108号住居跡出土石錘（ $\frac{1}{2}$ ）	150
	(4) B区第108号住居跡出土土器	150
	(5) B区第108号住居跡出土鉄鎌（ $\frac{1}{2}$ ）	150
PL. 61	(1) B区第111号住居跡出土土器	153
	(2) B区第112号住居跡出土土器	153
	(3) B区第114号竪穴出土土器	157
	(4) B区第117号住居跡出土土器	160

	(5) B区第125号竪穴出土砥石(1/2)	167
PL. 62	B区第1号溝 a (南西から)	253
PL. 63	B区第1号溝 a・b・c (南から)	253
PL. 64	B区第1号溝 a (南西から)	253
PL. 65	B区第1号溝出土遺物	256
PL. 66	B区第1号溝出土遺物	256
PL. 67	(1) C区ピット 933 出土土器	251
	(2) C区ピット 934 出土土器	253
	(3) C区ピット 167 出土土器	251
PL. 68	(1) C区第6号溝付近より南を望む	
	(2) C区第1・3・37号住居跡(東から)	41・169・213
PL. 69	C区第2号溝付近より南を望む	
PL. 70	(1) C区第2号溝付近より北を望む	
	(2) C区第44号住居跡付近より南を望む	
PL. 71	(1) C区第3号溝(北東から)	43
	(2) C区第1号住居跡(北東から)	41
	(3) C区第1号住居跡出土土器	41
PL. 72	(1) C区第14・16・17・18・19・20・21号住居跡(北から)	173~185
	(2) C区第16・17号住居跡(南から)	175・176
	(3) C区第17号住居跡出土石斧	176
	(4) C区第16号住居跡出土土器	175
	(5) C区第17号住居跡出土土器	176
PL. 73	(1) C区第14・21号住居跡(北から)	173・185
	(2) C区第14号住居跡カマド(南から)	173・185
	(3) C区第21号住居跡出土土器	185
PL. 74	(1) C区第15号住居跡(西から)	174
	(2) C区第15号住居跡カマド(東から)	174
	(3) C区第15号住居跡出土遺物	174
PL. 75	(1) C区第16号住居跡(南から)	175
	(2) C区第18・19号住居跡(南から)	180
PL. 76	(1) C区第20号住居跡(東南から)	182
	(2) C区第20号住居跡出土土器	182
PL. 77	(1) C区第22・23・24・28号住居跡(東南から)	188~191・200
	(2) C区第24号住居跡出土炭化物(2倍)	190
	(3) C区第25号住居跡	192
	(4) C区第25号住居跡出土砥石	192

	(5)	C区第28号住居跡出土土器	200
PL. 78	(1)	C区第26号住居跡（西から）	194
	(2)	C区第29号住居跡（西から）	202
	(3)	C区第26・29号住居跡出土土器	194・202
PL. 79	(1)	C区第27号住居跡（東から）	198
	(2)	C区第30号住居跡（南から）	202
	(3)	C区第30号住居跡出土土器	202
PL. 80	(1)	C区第31号住居跡（南から）	205
	(2)	C区第31号住居跡カマド（南から）	205
	(3)	C区第32号住居跡出土砥石	206
PL. 81	(1)	C区第33号住居跡（東から）	207
	(2)	C区第33号住居跡カマド（東から）	207
	(3)	C区第33号住居跡出土土器	207
PL. 82	(1)	C区第34号住居跡（東南から）	208
	(2)	C区第34号住居跡カマド（東南から）	208
	(3)	C区第34号住居跡出土土器	208
PL. 83	(1)	C区第35号住居跡（東南から）	209
	(2)	C区第35号住居跡カマドおよび鞆羽口・砥石	209
	(3)	C区第35号住居跡出土土器	209
PL. 84	(1)	C区第36号住居跡（東南から）	210
	(2)	C区第36号住居跡カマド（東南から）	210
	(3)	C区第36号住居跡出土遺物	210
PL. 85	(1)	C区第38号住居跡、第6・7号溝（北東から）	213・265
	(2)	C区第38号住居跡（南西から）	213
	(3)	C区第38号住居跡出土砥石（ $\frac{1}{2}$ ）	213
PL. 86	(1)	C区第39号住居跡（東南から）	214
	(2)	土錘出土状態（北東から）	214
	(3)	C区第39号住居跡出土遺物	214
PL. 87	(1)	C区第40号住居跡（東南から）	220
	(2)	C区第40号住居跡カマド（東南から）	220
	(3)	C区第40号住居跡出土土玉（実大）	220
	(4)	C区第40号住居跡出土土器	220
PL. 88	(1)	C区第41号住居跡（南西から）	221
	(2)	C区第41号住居跡カマド（南西から）	221
	(3)	C区第41号住居跡出土土器	221
PL. 89	(1)	C区第44号住居跡（東南から）	225

	(2) C区第45号住居跡(東南から)	227
	(3) C区第44号住居跡出土土器	226
	(4) C区第45号住居跡出土土器	227
PL. 90	(1) C区第46号住居跡(東から)	228
	(2) C区第46号住居跡カマド(東から)	228
	(3) C区第46号住居跡出土土器	228
	(4) C区第46号住居跡出土鉄器	228
PL. 91	(1) C区第47号住居跡(東南から)	229
	(2) C区第47号住居跡カマド(東南から)	229
PL. 92	(1) C区第6・48号住居跡(南から)	171・230
	(2) C区第48号住居跡土器出土状態(南から)	230
	(3) C区第48号住居跡出土砥石	230
PL. 93	(1) C区第49号住居跡(東南から)	232
	(2) C区第49号住居跡出土遺物	232
	(3) C区第50号住居跡(南西から)	232
	(4) C区第50号住居跡出土土器	232
	(5) C区第50号住居跡出土石錘	232
PL. 94	(1) C区第1号溝出土土器	260
	(2) C区第5号溝出土土器	264
	(3) C区第14号溝出土土器	266
PL. 95	(1) C区第2号溝出土遺物	262
	(2) C区第3号溝出土遺物	43
PL. 96	C区第4号溝出土遺物	262
PL. 97	C区井戸(東から)	246
PL. 98	C区井戸出土土器および土師器格子目タタキ	247
PL. 99	C区井戸出土遺物	249
PL. 100	C区井戸枠の木材	246
	(1) 丸材	
	(2) 角材	
	(3) 板材	
PL. 101	(1) B区ピット458出土耳環および出土状態	276
	(2) C区ピット951出土刀子	276
	(3) B区ピット751出土凹石	276
	(4) B区ピット127出土砥石	276
PL. 102	D区全景(東から)	235・270
PL. 103	D区第1号竪穴(東から)	235

PL. 104	D区第1号竪穴出土須恵器(蓋)	237
PL. 105	D区第1号竪穴出土須恵器(杯・高杯)	238
PL. 106	D区第1号竪穴出土土師器	240・241
PL. 107	大道端遺跡出土石器(剝片尖頭器・ナイフ形石器・台形様石器・台形石器)	292
PL. 108	大道端遺跡出土石器(曽根型石核)	294
PL. 109	大道端遺跡出土石器(曽根型石核)	294
PL. 110	大道端遺跡出土石器(ドリル・柳葉形石鏃)	292・294
PL. 111	大道端遺跡出土石器(石鏃)	294
PL. 112	大道端遺跡出土石器(石鏃)	294
PL. 113	大道端遺跡出土石器(スクレーパー)	297
PL. 114	大道端遺跡出土石器(スクレーパー)	297
PL. 115	大道端遺跡出土石器(スクレーパー)	297
PL. 116	大道端遺跡出土石器(スクレーパー)	297
PL. 117	大道端遺跡出土石器(石核)	308
PL. 118	大道端遺跡出土サヌカイト剝片	308
PL. 119	大道端遺跡出土石器(石斧・凹石)	297
PL. 120	大道端遺跡出土サヌカイト剝片	308
PL. 121	大道端遺跡出土黒曜石縦長剝片	
PL. 122	大道端遺跡出土石器(石鏃)	294
PL. 123	大道端遺跡出土石器	
	(1) 石 鏃	306
	(2) 異形局部磨製石鏃	306
PL. 124	遺跡内出土石器	
	(1) 石 庖 丁	313
	(2) 石 錘	315
PL. 125	遺跡内出土石器(石斧)	314
PL. 126	(1) 轟・曾畑式系土器	318
	(2) 阿高式土器	319
PL. 127	後期前葉阿高式系土器	
	(1) 南福寺式土器	319
	(2) 把手および無文土器	323
PL. 128	後期前葉阿高式系土器(出水式土器)	321
PL. 129	後期中葉阿高式系土器(御手洗A式土器)	323
PL. 130	(1) 後期前葉～後葉磨消縄文土器	327～332
	(2) 同無文土器	332
PL. 131	晩期前葉～後葉土器	

	(1) 深鉢形土器	333~335
	(2) 浅鉢形土器	333~335
PL. 132	(1) 晚期中葉土器	334
	(2) 晚期粗製土器	334
PL. 133	(1) 晚期後葉土器 (山ノ寺式土器)	335
	(2) 底部	339
PL. 134	大道端遺跡出土弥生土器	347
PL. 135	大道端遺跡出土土師器	350~353
PL. 136	大道端遺跡出土土師器	
	(1) 甕	351
	(2) 甌	352
PL. 137	把手の接合部	281
PL. 138	大道端遺跡出土須恵器	354
PL. 139	大道端遺跡出土鉄滓の顕微鏡組織	364
PL. 140	大道端遺跡出土鉄滓および鞆羽口	
PL. 141	大道端遺跡出土鉄滓	

挿 図 目 次

	頁	
Fig. 1	大道端周辺遺跡分布図	1-2
Fig. 2	鉾田遺跡出土遺物実測図	8
Fig. 3	草葉遺跡表採遺物実測図	9
Fig. 4	大草遺跡表採遺物実測図	10
Fig. 5	女山古墳群表採遺物実測図	12
Fig. 6	女山火葬場跡遺跡表採遺物実測図	14
Fig. 7	清水寺本坊保管土器実測図	17
Fig. 8	女山神籠石	19
Fig. 9	大道端遺跡A~E区トレンチ配置図	23-24
Fig. 10	大道端遺跡周辺地形図 (日本道路公団図より作成)	23-24
Fig. 11	A区出土土錘実測図	24
Fig. 12	土器のスクリーン・トーンによる表示	26
Fig. 13	B区第3号住居跡実測図	27-28
Fig. 14	B区第3号住居跡出土遺物実測図 (I)	27-28
Fig. 15	B区第3号住居跡出土遺物実測図 (II)	27-28
Fig. 16	B区第7号住居跡実測図	28
Fig. 17	B区第7号住居跡出土土器実測図	29

Fig. 18	B区第10号住居跡実測図	30
Fig. 19	B区第10号住居跡出土遺物実測図 (I)	31
Fig. 20	B区第10号住居跡出土遺物実測図 (II)	31
Fig. 21	B区第16号住居跡実測図	32
Fig. 22	B区第16号住居跡出土遺物実測図 (I)	33
Fig. 23	B区第16号住居跡出土遺物実測図 (II)	33
Fig. 24	B区第27号住居跡実測図	34
Fig. 25	B区第27号住居跡出土土器実測図	34
Fig. 26	B区第30号住居跡実測図	36
Fig. 27	B区第30号住居跡出土土器実測図	36
Fig. 28	B区第63号住居跡実測図	37
Fig. 29	B区第63号住居跡出土遺物実測図 (I)	38
Fig. 30	B区第63号住居跡出土遺物実測図 (II)	38
Fig. 31	B区第77号住居跡実測図	39
Fig. 32	B区第77号住居跡出土土器実測図	40
Fig. 33	C区第 1 号住居跡実測図	41—42
Fig. 34	C区第 1 号住居跡出土土器実測図 (I)	41—42
Fig. 35	C区第 1 号住居跡出土土器実測図 (II)	41—42
Fig. 36	C区第 3 号溝出土遺物実測図 (I)	44
Fig. 37	C区第 3 号溝出土遺物実測図 (II)	44
Fig. 38	弥生時代の遺構分布図 (宮原真裕美氏製図)	48
Fig. 39	B区第 4 号住居跡実測図	50
Fig. 40	B区第 4 号住居跡焼土断面図	50
Fig. 41	B区第 4 号住居跡出土遺物実測図 (I)	51
Fig. 42	B区第 4 号住居跡出土遺物実測図 (II)	51
Fig. 43	B区第 6 号住居跡実測図	52
Fig. 44	B区第 6 号住居跡出土土器実測図	52
Fig. 45	B区第 8 号住居跡実測図	53
Fig. 46	B区第 8 号住居跡出土土器実測図	53
Fig. 47	B区第 9 号住居跡実測図	54
Fig. 48	B区第 9 号住居跡出土土器実測図	54
Fig. 49	B区第11号住居跡実測図	56
Fig. 50	B区第11号住居跡出土土器実測図	56
Fig. 51	B区第14号住居跡実測図	57
Fig. 52	B区第14号住居跡出土土器実測図	58
Fig. 53	B区第15号住居跡実測図	59

Fig. 54	B区第15号住居跡出土土器実測図	59
Fig. 55	B区第17号住居跡実測図	59—60
Fig. 56	B区第17号住居跡出土遺物実測図 (I)	59—60
Fig. 57	B区第17号住居跡出土遺物実測図 (II)	59—60
Fig. 58	B区第18号住居跡実測図	61—62
Fig. 59	B区第18号住居跡カマド土層断面図	61—62
Fig. 60	B区第18号住居跡出土土器実測図	61—62
Fig. 61	B区第20号住居跡実測図	61—62
Fig. 62	B区第20号住居跡出土遺物実測図 (I)	61—62
Fig. 63	B区第20号住居跡出土遺物実測図 (II)	61—62
Fig. 64	B区第23号住居跡実測図	63—64
Fig. 65	B区第23号住居跡カマド土層断面図	63—64
Fig. 66	B区第23号住居跡出土遺物実測図 (I)	63—64
Fig. 67	B区第23号住居跡出土遺物実測図 (II)	63—64
Fig. 68	B区第24号住居跡実測図	65
Fig. 69	B区第24号住居跡カマド土層断面図	65
Fig. 70	B区第24号住居跡出土土器実測図	65
Fig. 71	B区第26号住居跡実測図	66
Fig. 72	B区第26号住居跡出土土器実測図	66
Fig. 73	B区第28号住居跡実測図	67
Fig. 74	B区第29号住居跡実測図	68
Fig. 75	B区第29号住居跡出土土器実測図	68
Fig. 76	B区第31号住居跡実測図	69
Fig. 77	B区第31号住居跡出土土器実測図	70
Fig. 78	B区第32号住居跡実測図	71
Fig. 79	B区第32号住居跡出土土器実測図	72
Fig. 80	B区第33号住居跡実測図	73
Fig. 81	B区第34号住居跡実測図	74
Fig. 82	B区第34号住居跡出土遺物実測図 (I)	75
Fig. 83	B区第34号住居跡出土遺物実測図 (II)	75
Fig. 84	B区第35号住居跡実測図	77
Fig. 85	B区第35号住居跡出土土器実測図	77
Fig. 86	B区第36号住居跡実測図	78
Fig. 87	B区第36号住居跡出土土器実測図	78
Fig. 88	B区第37号住居跡実測図	80
Fig. 89	B区第37号住居跡出土土器実測図	80

Fig. 90	B区第38号住居迹实测图	81
Fig. 91	B区第38号住居迹出土土器实测图	81
Fig. 92	B区第39号住居迹实测图	82
Fig. 93	B区第39号住居迹出土土器实测图	82
Fig. 94	B区第40号住居迹实测图	83
Fig. 95	B区第40号住居迹出土土器实测图	83
Fig. 96	B区第41号住居迹实测图	84
Fig. 97	B区第42号住居迹实测图	85
Fig. 98	B区第43号住居迹实测图	86
Fig. 99	B区第44号住居迹实测图	87
Fig. 100	B区第44号住居迹出土遗物实测图 (I)	88
Fig. 101	B区第44号住居迹出土遗物实测图 (II)	88
Fig. 102	B区第45号住居迹实测图	90
Fig. 103	B区第45号住居迹出土土器实测图	90
Fig. 104	B区第46号住居迹实测图	91
Fig. 105	B区第46号住居迹出土土器实测图	92
Fig. 106	B区第47号住居迹实测图	93
Fig. 107	B区第47号住居迹出土土器实测图	93
Fig. 108	B区第48号住居迹实测图	95
Fig. 109	B区第48号住居迹出土土器实测图	95
Fig. 110	B区第49号住居迹实测图	97
Fig. 111	B区第49号住居迹出土土器实测图	97
Fig. 112	B区第50号住居迹实测图	97—98
Fig. 113	B区第50号住居迹出土土器实测图	97—98
Fig. 114	B区第51号住居迹实测图	99
Fig. 115	B区第51号住居迹出土土器实测图	99
Fig. 116	B区第52号住居迹实测图	100
Fig. 117	B区第52号住居迹出土土器实测图	101
Fig. 118	B区第53号住居迹实测图	102
Fig. 119	B区第53号住居迹出土土器实测图	102
Fig. 120	B区第54号住居迹实测图	103
Fig. 121	B区第54号住居迹出土土器实测图	103
Fig. 122	B区第55号住居迹实测图	103—104
Fig. 123	B区第55号住居迹出土遗物实测图 (I)	103—104
Fig. 124	B区第55号住居迹出土遗物实测图 (II)	103—104
Fig. 125	B区第56号住居迹实测图	105—106

Fig. 126	B区第56号住居跡出土土器実測図	105—106
Fig. 127	B区第57号住居跡実測図	107
Fig. 128	B区第59号住居跡実測図	108
Fig. 129	B区第59号住居跡出土土器実測図	108
Fig. 130	B区第60号住居跡実測図	110
Fig. 131	B区第60号住居跡出土土器実測図	110
Fig. 132	B区第61号住居跡実測図	111
Fig. 133	B区第61号住居跡出土土器実測図	111
Fig. 134	B区第62号住居跡実測図	112
Fig. 135	B区第62号住居跡出土土器実測図	112
Fig. 136	B区第64号住居跡実測図	113
Fig. 137	B区第64号住居跡出土土器実測図	113
Fig. 138	B区第66号住居跡実測図	114
Fig. 139	B区第67号住居跡実測図	115
Fig. 140	B区第67号住居跡出土土器実測図	115
Fig. 141	B区第68号住居跡実測図	115—116
Fig. 142	B区第68号住居跡カマド土層断面図	115—116
Fig. 143	B区第68号住居跡出土土器実測図	115—116
Fig. 144	B区第69号住居跡実測図	117
Fig. 145	B区第69号住居跡実測図	118
Fig. 146	B区第70号住居跡実測図	119
Fig. 147	B区第70号住居跡出土土器実測図	119
Fig. 148	B区第71号住居跡実測図	120
Fig. 149	B区第72・74号竪穴実測図	121
Fig. 150	B区第72・74号竪穴出土土器実測図	122
Fig. 151	B区第75号竪穴実測図	123
Fig. 152	B区第78号住居跡実測図	124
Fig. 153	B区第79号住居跡実測図	125
Fig. 154	B区第79号住居跡出土土器実測図	125
Fig. 155	B区第80号住居跡実測図	126
Fig. 156	B区第81号住居跡実測図	127
Fig. 157	B区第82号住居跡実測図	128
Fig. 158	B区第82号住居跡焼土土層断面図	128
Fig. 159	B区第82号住居跡出土土器実測図	128
Fig. 160	B区第83号住居跡実測図	130
Fig. 161	B区第83号住居跡出土土器実測図	130

Fig. 162	B区第84号住居跡実測図	131
Fig. 163	B区第85号住居跡実測図	132
Fig. 164	B区第86号住居跡実測図	133
Fig. 165	B区第87・88・89号住居跡実測図	133—134
Fig. 166	B区第88号住居跡出土石錘実測図	133—134
Fig. 167	B区第89号住居跡出土土器実測図	133—134
Fig. 168	B区第90号住居跡実測図	134
Fig. 169	B区第91号住居跡実測図	135
Fig. 170	B区第91号住居跡出土土器実測図	136
Fig. 171	B区第92号住居跡実測図	137
Fig. 172	B区第92号住居跡カマド土層断面図	137
Fig. 173	B区第93号住居跡実測図	138
Fig. 174	B区第94号住居跡実測図	139
Fig. 175	B区第94号住居跡カマド土層断面図	140
Fig. 176	B区第94号住居跡出土遺物実測図 (I)	140
Fig. 177	B区第94号住居跡出土遺物実測図 (II)	140
Fig. 178	B区第95号住居跡実測図	141
Fig. 179	B区第96号住居跡実測図	142
Fig. 180	B区第97号住居跡実測図	143
Fig. 181	B区第97号住居跡出土土器実測図	143
Fig. 182	B区第98号住居跡実測図	144
Fig. 183	B区第101号住居跡実測図	145
Fig. 184	B区第101号住居跡出土遺物実測図 (I)	145
Fig. 185	B区第101号住居跡出土遺物実測図 (II)	146
Fig. 186	B区第102号住居跡実測図	147
Fig. 187	B区第104号住居跡実測図	148
Fig. 188	B区第104号住居跡出土土器実測図	148
Fig. 189	B区第105号住居跡実測図	149
Fig. 190	B区第106号住居跡実測図	149—150
Fig. 191	B区第106号住居跡出土遺物実測図 (I)	149—150
Fig. 192	B区第106号住居跡出土遺物実測図 (II)	149—150
Fig. 193	B区第108号住居跡実測図	149—150
Fig. 194	B区第108号住居跡出土遺物実測図 (I)	149—150
Fig. 195	B区第108号住居跡出土遺物実測図 (II)	149—150
Fig. 196	B区第109号住居跡実測図	151
Fig. 197	B区第110号住居跡実測図	152

Fig. 198	B区第 110 号住居跡出土土器実測図	152
Fig. 199	B区第 111 号住居跡実測図	154
Fig. 200	B区第 111 号住居跡カマド土層断面図	154
Fig. 201	B区第 111 号住居跡出土土器実測図	154
Fig. 202	B区第 112 号住居跡実測図	155
Fig. 203	B区第 112 号住居跡出土土器実測図	155
Fig. 204	B区第 113 号竪穴実測図	156
Fig. 205	B区第 114 号竪穴実測図	157
Fig. 206	B区第 114 号竪穴出土土器実測図	157
Fig. 207	B区第 115 号住居跡実測図	158
Fig. 208	B区第 115 号住居跡カマド土層断面図	158
Fig. 209	B区第 115 号住居跡出土土器実測図	158
Fig. 210	B区第 116 号住居跡実測図	159
Fig. 211	B区第 116 号住居跡出土土器実測図	159
Fig. 212	B区第 117 号住居跡実測図	160
Fig. 213	B区第 117 号住居跡出土土器実測図	160
Fig. 214	B区第 118 号住居跡実測図	161—162
Fig. 215	B区第 118 号住居跡出土遺物実測図	161—162
Fig. 216	B区第 119 号住居跡実測図	162
Fig. 217	B区第 120 号住居跡実測図	163
Fig. 218	B区第 120 号住居跡カマド土層断面図	163
Fig. 219	B区第 121 号住居跡実測図	164
Fig. 220	B区第 121 号住居跡カマド土層断面図	164
Fig. 221	B区第 121 号住居跡出土土器実測図	165
Fig. 222	B区第 122 号住居跡実測図	166
Fig. 223	B区第 124 号住居跡実測図	167
Fig. 224	B区第 125 号竪穴実測図	167—168
Fig. 225	B区第 125 号竪穴出土遺物実測図 (I)	167—168
Fig. 226	B区第 125 号竪穴出土遺物実測図 (II)	167—168
Fig. 227	C区第 2 号住居跡出土土器実測図	169
Fig. 228	C区第 3 号住居跡実測図	169
Fig. 229	C区第 3 号住居跡出土土器実測図	170
Fig. 230	C区第 4 号住居跡出土土器実測図	170
Fig. 231	C区第 5 号住居跡出土土器実測図	171
Fig. 232	C区第 6 号住居跡実測図	172
Fig. 233	C区第14号住居跡実測図	173

Fig. 234	C区第15号住居跡実測図	173—174
Fig. 235	C区第15号住居跡出土遺物実測図 (I)	173—174
Fig. 236	C区第15号住居跡出土遺物実測図 (II)	173—174
Fig. 237	C区第16号住居跡実測図	175—176
Fig. 238	C区第16号住居跡出土土器実測図	175—176
Fig. 239	C区第17号住居跡実測図	177
Fig. 240	C区第17号住居跡出土遺物実測図 (I)	178
Fig. 241	C区第17号住居跡出土遺物実測図 (II)	178
Fig. 242	C区第18号住居跡実測図	181
Fig. 243	C区第18号住居跡出土土器実測図	181
Fig. 244	C区第19号住居跡実測図	182
Fig. 245	C区第20号住居跡実測図	183
Fig. 246	C区第20号住居跡出土土器実測図	184
Fig. 247	C区第21号住居跡実測図	186
Fig. 248	C区第21号住居跡出土土器実測図	186
Fig. 249	C区第22号住居跡実測図	187
Fig. 250	C区第22号住居跡出土土器実測図	188
Fig. 251	C区第23号住居跡実測図	189
Fig. 252	C区第23号住居跡出土土器実測図	189
Fig. 253	C区第24号住居跡実測図	191
Fig. 254	C区第24号住居跡出土土器実測図	191
Fig. 255	C区第25号住居跡実測図	193
Fig. 256	C区第25号住居跡出土遺物実測図 (I)	194
Fig. 257	C区第25号住居跡出土遺物実測図 (II)	194
Fig. 258	C区第26号住居跡実測図	195
Fig. 259	C区第26号住居跡出土土器実測図	196
Fig. 260	C区第27号住居跡実測図	199
Fig. 261	C区第27号住居跡出土土器実測図	200
Fig. 262	C区第28号住居跡実測図	201
Fig. 263	C区第28号住居跡出土土器実測図	201
Fig. 264	C区第29号住居跡実測図	201—202
Fig. 265	C区第29号住居跡出土土器実測図	201—202
Fig. 266	C区第30号住居跡実測図	203—204
Fig. 267	C区第30号住居跡出土土器実測図 (I)	203—204
Fig. 268	C区第30号住居跡出土土器実測図 (II)	203—204
Fig. 269	C区第31号住居跡実測図	205—206

Fig. 270	C区第31号住居跡出土土器実測図	205—206
Fig. 271	C区第32号住居跡実測図	206
Fig. 272	C区第32号住居跡出土遺物実測図	206
Fig. 273	C区第33号住居跡実測図	207—208
Fig. 274	C区第33号住居跡出土土器実測図	207—208
Fig. 275	C区第34号住居跡実測図	207—208
Fig. 276	C区第34号住居跡出土土器実測図	207—208
Fig. 277	C区第35号住居跡実測図	209—210
Fig. 278	C区第35号住居跡出土遺物実測図 (I)	209—210
Fig. 279	C区第35号住居跡出土遺物実測図 (II)	209—210
Fig. 280	C区第36号住居跡実測図	209—210
Fig. 281	C区第36号住居跡出土遺物実測図 (I)	209—210
Fig. 282	C区第36号住居跡出土遺物実測図 (II)	209—210
Fig. 283	C区第37号住居跡実測図	211
Fig. 284	C区第37号住居跡出土遺物実測図	211
Fig. 285	C区第38号住居跡実測図	212
Fig. 286	C区第38号住居跡出土遺物実測図 (I)	212
Fig. 287	C区第38号住居跡出土遺物実測図 (II)	212
Fig. 288	C区第39号住居跡実測図	213—214
Fig. 289	C区第39号住居跡出土遺物実測図 (I)	213—214
Fig. 290	C区第39号住居跡出土遺物実測図 (II)	213—214
Fig. 291	C区第40号住居跡実測図	219
Fig. 292	C区第40号住居跡出土遺物実測図 (I)	220
Fig. 293	C区第40号住居跡出土遺物実測図 (II)	220
Fig. 294	C区第41号住居跡実測図	222
Fig. 295	C区第41号住居跡出土土器実測図	222
Fig. 296	C区第42号住居跡実測図	223
Fig. 297	C区第42号住居跡出土土器実測図	223
Fig. 298	C区第43号住居跡実測図	223—224
Fig. 299	C区第43号住居跡出土土器実測図	223—224
Fig. 300	C区第44号住居跡実測図	225
Fig. 301	C区第44号住居跡出土土器実測図	226
Fig. 302	C区第45号住居跡実測図	227—228
Fig. 303	C区第45号住居跡出土土器実測図	227—228
Fig. 304	C区第46号住居跡実測図	227—228
Fig. 305	C区第46号住居跡出土遺物実測図 (I)	227—228

Fig. 306	C区第46号住居跡出土遺物実測図(Ⅱ)	227—228
Fig. 307	C区第47号住居跡実測図	229
Fig. 308	C区第47号住居跡出土土器実測図	229
Fig. 309	C区第48号住居跡実測図	230
Fig. 310	C区第48号住居跡出土遺物実測図(Ⅰ)	230
Fig. 311	C区第48号住居跡出土遺物実測図(Ⅱ)	230
Fig. 312	C区第49号住居跡実測図	231
Fig. 313	C区第49号住居跡出土遺物実測図(Ⅰ)	232
Fig. 314	C区第49号住居跡出土遺物実測図(Ⅱ)	232
Fig. 315	C区第50号住居跡実測図	233
Fig. 316	C区第50号住居跡出土遺物実測図(Ⅰ)	234
Fig. 317	C区第50号住居跡出土遺物実測図(Ⅱ)	234
Fig. 318	C区第51号住居跡実測図	235
Fig. 319	C区第51号住居跡出土土器実測図	235
Fig. 320	D区第1号竪穴実測図	236
Fig. 321	D区第1号竪穴出土土器実測図(Ⅰ)	237
Fig. 322	D区第1号竪穴出土土器実測図(Ⅱ)	238
Fig. 323	D区第1号竪穴出土土器実測図(Ⅲ)	239
Fig. 324	D区第1号竪穴出土土器実測図(Ⅳ)	240
Fig. 325	D区第1号竪穴出土土器実測図(Ⅴ)	241
Fig. 326	C区井戸実測図	246
Fig. 327	C区井戸出土遺物実測図(Ⅰ)	248
Fig. 328	C区井戸出土遺物実測図(Ⅱ)	249
Fig. 329	C区ピット167実測図	251
Fig. 330	C区ピット167出土遺物実測図	251
Fig. 331	C区ピット933実測図	252
Fig. 332	C区ピット933出土遺物実測図	252
Fig. 333	C区ピット934実測図	253
Fig. 334	C区ピット934出土遺物実測図	253
Fig. 335	B区第1号溝a・b・c実測図	253—254
Fig. 336	B区第1号溝出土遺物実測図(Ⅰ)	254
Fig. 337	B区第1号溝出土遺物実測図(Ⅱ)	255
Fig. 338	B区第1号溝出土遺物実測図(Ⅲ)	256
Fig. 339	B区第2・3号溝実測図	259—260
Fig. 340	B区第2・3号溝出土遺物実測図	259—260
Fig. 341	B区第4・5・6号溝実測図	259—260

Fig. 342	C区第1号溝出土遺物実測図	260
Fig. 343	C区第2号溝出土遺物実測図(Ⅰ)	261
Fig. 344	C区第2号溝出土遺物実測図(Ⅱ)	261
Fig. 345	C区第1・2・8号溝実測図	261—262
Fig. 346	C区第4号溝出土遺物実測図(Ⅰ)	263
Fig. 347	C区第3・4・5・9号溝実測図	263—264
Fig. 348	C区第4号溝出土遺物実測図(Ⅱ)	264
Fig. 349	C区第5号溝出土遺物実測図	264
Fig. 350	C区第6・7号溝実測図	265—266
Fig. 351	C区第6号溝出土遺物実測図	265—266
Fig. 352	C区第7号溝出土遺物実測図	265—266
Fig. 353	C区第8号溝出土遺物実測図	265—266
Fig. 354	C区第11・12・13・14・15号溝実測図	267
Fig. 355	C区第14号溝出土遺物実測図	267
Fig. 356	D区第1・2・3号溝実測図	270
Fig. 357	ピット群Ⅰ	272
Fig. 358	ピット群Ⅱ	272
Fig. 359	ピット群Ⅲ	273
Fig. 360	ピット群Ⅳ	273
Fig. 361	ピット群Ⅴ	273—274
Fig. 362	ピット群Ⅵ	273—274
Fig. 363	ピット群Ⅶ	273—274
Fig. 364	ピット群Ⅷ	273—274
Fig. 365	工房跡焼土・炭化物出土状況実測図	273—274
Fig. 366	B・C区ピット出土遺物実測図	277
Fig. 367	B区ピット420出土土器実測図	277
Fig. 368	須恵器ヘラ記号	279
Fig. 369	古墳時代以後の竪穴および鉄滓・鞆羽石・鉄製品・砥石出土遺構分布図	281—282
Fig. 370	大道端遺跡出土石器実測図(Ⅰ)	291
Fig. 371	大道端遺跡出土石器実測図(Ⅱ)	293
Fig. 372	大道端遺跡出土石器実測図(Ⅲ)	295
Fig. 373	大道端遺跡出土石器実測図(Ⅳ)	296
Fig. 374	大道端遺跡出土石器実測図(Ⅴ)	298
Fig. 375	大道端遺跡出土石器実測図(Ⅵ)	300
Fig. 376	大道端遺跡出土石器実測図(Ⅶ)	301
Fig. 377	大道端遺跡出土石器実測図(Ⅷ)	302

Fig. 378	大道端遺跡出土石器実測図 (K)	303
Fig. 379	大道端遺跡出土石器実測図 (X)	307
Fig. 380	類剥片鍬技法	307
Fig. 381	異形局部磨製石鍬のタイプ	309
Fig. 382	研磨部分の拡大写真	309
Fig. 383	大道端遺跡出土石器実測図 (XI)	313
Fig. 384	大道端遺跡出土石器実測図 (XII)	314
Fig. 385	大道端遺跡出土石器実測図 (XIII)	315
Fig. 386	轟・曾畑式系土器実測図	318
Fig. 387	阿高式系土器実測図 (I)	320
Fig. 388	阿高式系土器実測図 (II)	322
Fig. 389	阿高式系土器実測図 (III)	324
Fig. 390	阿高式系土器実測図 (IV)	325
Fig. 391	阿高式系土器実測図 (V)	327
Fig. 392	磨消縄文系土器実測図 (I)	328
Fig. 393	磨消縄文系土器実測図 (II)	331
Fig. 394	御領式系土器実測図 (I)	333
Fig. 395	御領式系土器実測図 (II)	335
Fig. 396	御領式系土器実測図 (III)	336
Fig. 397	御領式系土器実測図 (IV)	337
Fig. 398	縄文式土器底部実測図	338
Fig. 399	大道跡遺跡出土弥生式土器実測図 (I)	347
Fig. 400	大道端遺跡出土弥生式土器実測図 (II)	348
Fig. 401	大道端遺跡出土土師器実測図 (I)	350
Fig. 402	大道端遺跡出土土師器実測図 (II)	351
Fig. 403	大道端遺跡出土土師器実測図 (III)	352
Fig. 404	大道端遺跡出土須恵器実測図	355
Fig. 405	大道端遺跡出土須恵器甕類タタキ目拓本 (I)	356
Fig. 406	大道端遺跡出土須恵器甕類タタキ目拓本 (II)	357
Fig. 407	大道端遺跡出土須恵器甕類タタキ目拓本 (III)	358
Fig. 408	大道端遺跡出土須恵器甕類タタキ目拓本 (IV)	359

付 図 目 次

Fig. ①	大道端遺跡遺構配置図 (縮尺1/400) (橋本啓子氏製図)
--------	--------------------------------

Fig. ② 大道端遺跡周辺の地形と遺物出土地点 (縮尺 $\frac{1}{6,000}$) (高田弘信製図)

Fig. ③ 大道端遺跡縄文式土器編年図 (縮尺 $\frac{1}{4}$) (田中良之・宮内克己作成)

表 目 次

Tab. 1	大道端周辺遺跡地名表	2-5
Tab. 2	草場遺跡表採遺物一覧表	9
Tab. 3	大草遺跡表採遺物一覧表	10
Tab. 4	女山古墳群表採遺物一覧表	13
Tab. 5	女山火葬場跡遺跡表採遺物一覧表	15
Tab. 6	清水寺本坊保管土器一覧表	17-18
Tab. 7	大道端遺跡住居跡および堅穴一覧表	25-26
Tab. 8	B区第3号住居跡出土土器一覧表	27
Tab. 9	B区第7号住居跡出土土器一覧表	29
Tab. 10	B区第10号住居跡出土土器一覧表	31
Tab. 11	B区第16号住居跡出土土器一覧表	33
Tab. 12	B区第27号住居跡出土土器一覧表	35
Tab. 13	B区第30号住居跡出土土器一覧表	35
Tab. 14	B区第63号住居跡出土土器一覧表	38
Tab. 15	B区第77号住居跡出土土器一覧表	40-41
Tab. 16	C区第1号住居跡出土土器一覧表	42
Tab. 17	C区第3号溝出土土器一覧表	45
Tab. 18	弥生時代の住居跡一覧表	46
Tab. 19	B区第4号住居跡出土土器一覧表	51
Tab. 20	B区第6号住居跡出土土器一覧表	53
Tab. 21	B区第9号住居跡出土土器一覧表	55
Tab. 22	B区第11号住居跡出土土器一覧表	55
Tab. 23	B区第14号住居跡出土土器一覧表	58
Tab. 24	B区第15号住居跡出土土器一覧表	59
Tab. 25	B区第18号住居跡出土土器一覧表	61~62
Tab. 26	B区第20号住居跡出土土器一覧表	62
Tab. 27	B区第23号住居跡出土土器一覧表	63~64
Tab. 28	B区第24号住居跡出土土器一覧表	66
Tab. 29	B区第29号住居跡出土土器一覧表	69
Tab. 30	B区第31号住居跡出土土器一覧表	70

Tab. 31	B区第32号住居跡出土土器一覽表	72~73
Tab. 32	B区第34号住居跡出土土器一覽表	76
Tab. 33	B区第35号住居跡出土土器一覽表	76
Tab. 34	B区第36号住居跡出土土器一覽表	79
Tab. 35	B区第44号住居跡出土土器一覽表	89
Tab. 36	B区第46号住居跡出土土器一覽表	92
Tab. 37	B区第47号住居跡出土土器一覽表	94
Tab. 38	B区第48号住居跡出土土器一覽表	96
Tab. 39	B区第49号住居跡出土土器一覽表	96
Tab. 40	B区第50号住居跡出土土器一覽表	98
Tab. 41	B区第51号住居跡出土土器一覽表	100
Tab. 42	B区第52号住居跡出土土器一覽表	101
Tab. 43	B区第53号住居跡出土土器一覽表	101
Tab. 44	B区第54号住居跡出土土器一覽表	104
Tab. 45	B区第55号住居跡出土土器一覽表	104
Tab. 46	B区第56号竪穴出土土器一覽表	105~107
Tab. 47	B区第59号住居跡出土土器一覽表	109
Tab. 48	B区第60号住居跡出土土器一覽表	109
Tab. 49	B区第64号住居跡出土土器一覽表	113
Tab. 50	B区第67号住居跡出土土器一覽表	116
Tab. 51	B区第68号住居跡出土土器一覽表	116
Tab. 52	B区第69号住居跡出土土器一覽表	118
Tab. 53	B区第70号住居跡出土土器一覽表	119
Tab. 54	B区第72・74号竪穴出土土器一覽表	122~123
Tab. 55	B区第82号住居跡出土土器一覽表	129
Tab. 56	B区第83号住居跡出土土器一覽表	129
Tab. 57	B区第91号住居跡出土土器一覽表	136
Tab. 58	B区第94号住居跡出土土器一覽表	141
Tab. 59	B区第101号住居跡出土土器一覽表	146
Tab. 60	B区第106号住居跡出土土器一覽表	150
Tab. 61	B区第108号住居跡出土土器一覽表	149—150
Tab. 62	B区第111号住居跡出土土器一覽表	153
Tab. 63	B区第112号住居跡出土土器一覽表	156
Tab. 64	B区第125号竪穴出土土器一覽表	168
Tab. 65	C区第3号住居跡出土土器一覽表	170
Tab. 66	C区第4号住居跡出土土器一覽表	171

Tab. 67	C区第5号住居跡出土土器一覽表	171
Tab. 68	C区第15号住居跡出土土器一覽表	175
Tab. 69	C区第16号住居跡出土土器一覽表	176
Tab. 70	C区第17号住居跡出土土器一覽表	179~180
Tab. 71	C区第18号住居跡出土土器一覽表	180
Tab. 72	C区第20号住居跡出土土器一覽表	184
Tab. 73	C区第21号住居跡出土土器一覽表	185
Tab. 74	C区第22号住居跡出土土器一覽表	188
Tab. 75	C区第23号住居跡出土土器一覽表	190
Tab. 76	C区第24号住居跡出土土器一覽表	192
Tab. 77	C区第25号住居跡出土土器一覽表	192
Tab. 78	C区第26号住居跡出土土器一覽表	197~198
Tab. 79	C区第27号住居跡出土土器一覽表	198
Tab. 80	C区第28号住居跡出土土器一覽表	200
Tab. 81	C区第29号住居跡出土土器一覽表	202
Tab. 82	C区第30号住居跡出土土器一覽表	204~205
Tab. 83	C区第31号住居跡出土土器一覽表	205
Tab. 84	C区第33号住居跡出土土器一覽表	207~208
Tab. 85	C区第34号住居跡出土土器一覽表	208
Tab. 86	C区第35号住居跡出土土器一覽表	209
Tab. 87	C区第36号住居跡出土土器一覽表	210~211
Tab. 88	C区第38号住居跡出土土器一覽表	213
Tab. 89	C区第39号住居跡出土土器一覽表	215
Tab. 90	C区第39号住居跡出土土器一覽表(鍬計測表)	215~218
Tab. 91	C区第40号住居跡出土土器一覽表	221
Tab. 92	C区第43号住居跡出土土器一覽表	224
Tab. 93	C区第44号住居跡出土土器一覽表	227
Tab. 94	C区第45号住居跡出土土器一覽表	228
Tab. 95	C区第46号住居跡出土土器一覽表	228
Tab. 96	C区第50号住居跡出土土器一覽表	234
Tab. 97	C区第51号住居跡出土土器一覽表	234
Tab. 98	D区第1号竪穴出土土器一覽表(Ⅰ)	242
Tab. 99	D区第1号竪穴出土土器一覽表(Ⅱ)	243
Tab. 100	D区第1号竪穴出土土器一覽表(Ⅲ)	244
Tab. 101	D区第1号竪穴出土土器一覽表(Ⅳ)	244~245
Tab. 102	D区第1号竪穴出土土器一覽表(Ⅴ)	245

Tab. 103	C区井戸出土土器一覧表	249～250
Tab. 104	B区第1号溝出土土器一覧表	257～258
Tab. 105	C区第1号溝出土土器一覧表	268
Tab. 106	C区第2号溝出土土器一覧表	268～269
Tab. 107	C区第14号溝出土土器一覧表	269
Tab. 108	B・C・D区溝一覧表	270
Tab. 109	鉄滓・鞆羽口・鉄製品・砥石出土堅穴一覧表	283～286
Tab. 110	古墳時代以後の堅穴式住居跡を発見した遺跡	289～290
Tab. 111	大道端遺跡出土石器一覧表	291～292
Tab. 112	スクレーパー一覧表	303～304
Tab. 113	石庖丁計測表	313
Tab. 114	石斧および石鑿計測表	316
Tab. 115	石錘計測表	316
Tab. 116	大道端遺跡出土弥生式土器一覧表	349
Tab. 117	大道端遺跡出土土師器一覧表	352～353
Tab. 118	大道端遺跡出土須恵器一覧表	360～361
Tab. 119	供試鉄滓の履歴および調査項目	365～366
Tab. 120	鉄滓の化学分析結果	365～366
Tab. 121	鉄滓及び羽口先端付着スラグの分光分析結果	365～366

I 位置と環境

オオミチバク

大道端遺跡は、福岡県山門郡瀬高町大字大草字栗ノ内と字大道端にわたって所在する。

山門郡は福岡県の西南部に位置し、大和町・三橋町・瀬高町・山川町の4町からなり、筑後平野の南半部である南筑平野と筑肥山地の西端部にわたっている。

筑後平野は、九州最大の筑後川や、矢部川その他の諸河川の運搬してきた土砂で埋められ、一部人工の干拓も加わってできた九州最大の平野であり、福岡・佐賀両県にまたがるが、福岡県側を一般に筑後平野と称している。この平野を形成した2つの主要河川である筑後川と矢部川を中心にして、前者を筑後川中流平野、後者を南筑平野と称するが、いずれも砂・粘土・淤泥・礫の堆積である未固結堆積物の灰色低地土壌・細粒グライ土壌などからなり、排水良好で生産力が高い。

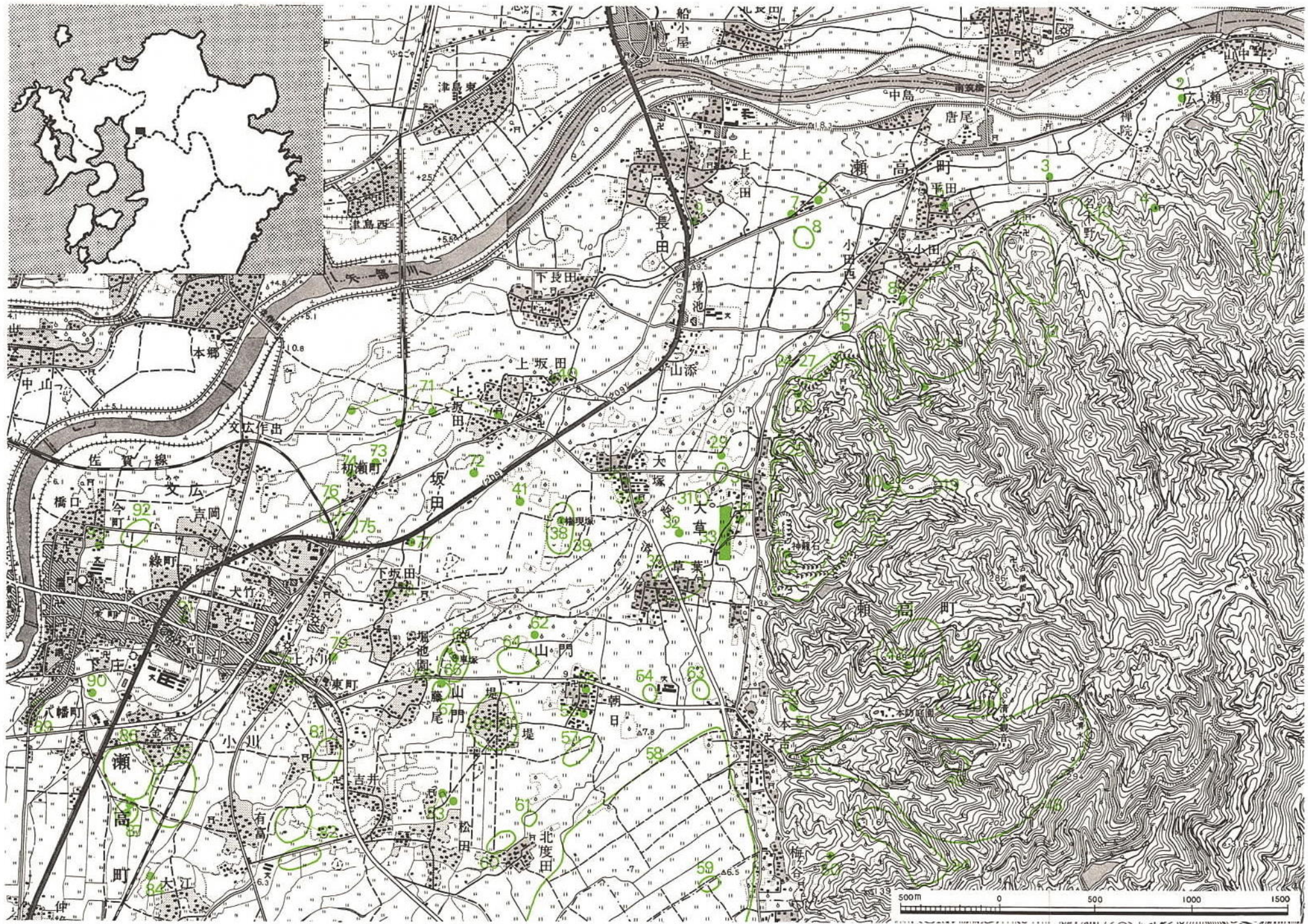
筑肥山地は起伏量200~400mの小起伏山地と、起伏量200m以下の緩斜面となる山麓地に分けられ、やや起伏の強い山地であるが、基盤はおもに変成岩からなっている。⁽¹⁾

矢部川下流の三角洲性低地には三橋町・大和町があり、矢部川中流の扇状地性低地には瀬高町がある。

大道端遺跡は、瀬高町の東端に近い標高9mほどの水田地帯に位置しているが、すぐ東には筑肥山地の西端部である古僧都山とこまづや清水山の山なみが連なる。また遺跡地は、この山麓部に接して南北に走る道路があり、これに沿って営まれている女山の集落そやまに近い。

山門郡における考古学的調査はまだ歴史が浅く、遺跡の内容が知られるものも少ない現状である。比較的早い時期の1930年頃には、永沢譲次氏が瀬高町車塚古墳の銅鏡について注意され(1927年)⁽²⁾、石野義助氏による瀬高町女山神籠石の調査(1935年)があった⁽³⁾。1950年代には鏡山猛氏がこの地方に注目され、折から土取り工事によって破壊をうけていた多くの遺跡に対して調査・記録を行なわれた。これには瀬高町金栗・鉾田・藤ノ尾(北ノ前)・下庄瀬高幼稚園内、大和町枇杷園・中島、三橋町垂見・木坪などの諸遺跡がある⁽⁴⁾。また、鈴木尚・近藤四郎両氏による瀬高町女山の古墳群の調査(1959年)があり、その成果は村山健治氏⁽⁵⁾や岩崎光氏により発表された⁽⁶⁾。さらに波多野院三氏による瀬高町坂田遺跡(1954年)、大和町鷹尾神社境内遺跡の調査⁽⁷⁾(1960年)、東原嘉範・久賀愛策氏による山川町赤山横穴古墳の調査⁽⁸⁾(1959年)、宮小路賀宏氏による瀬高町本吉の地下式土壙(横穴)の調査(1969年)、福岡県教育委員会の渡辺正気氏らによる埋蔵文化財包蔵地台帳の作製と分布調査(1960年頃)などがある。

いっぽう、地元の郷土史家として村山健治氏の活躍が注目される。村山氏は早くから山門郡



Tab. 1 大道端周辺遺跡地名表

地図 番号	遺跡名	所在地	時代	概要	全国遺跡地区 (福岡県)1968	備考
1	山中古墳群	瀬高町 広瀬字山中	古墳	古墳14基、須恵器	4232~4245	
2	藤ノ森古墳	〃	〃 後期		4053	
3		〃 小田	〃	散布地		
4		〃 広瀬	歴史	蔵骨器		
5	平田遺跡	〃 小田字小田	古墳	散布地	4269	
6	日掛遺跡	〃	弥生~中 ・近世	旧河川堆積あり、 遺物包含		西谷正「ヤマト発掘(一)」 『朝日新聞』9月26日付 (1972)、福岡県教育委員 会「昭和47年度九州縦貫 自動車道関係埋蔵文化調 査概報」(1972)
7	長田遺跡	〃 長田	縄文中期	散布地、南福寺式 土器片	3978	
8		〃	古墳後期	散布地		
9	上長田遺跡	〃 長田字 上長田・壇 ノ池		散布地	3967	
10	名木野古墳 群	〃 小田字 ナギノ	古墳	横穴式石室、竪穴 式石室、須恵器	4171~4177	福岡県山門郡瀬高町役場 「広報せたか」12 (1976)
11	善光寺古墳 群	〃 〃 字 小田西	古墳後期	横穴2基 古墳8基、須恵器	4149~4158	
12	幽霊谷古墳 群	〃 〃 字 平田	古墳	古墳11基	4178~4188	
13	平田古墳群	〃	古墳	古墳10基、須恵器 (消滅)	4159~4168	真野和夫「周辺の遺跡遺 物」『狐塚遺跡—福岡県 筑後市上北島集落跡の調 査』筑後市教育委員会 (1970)
14	小田谷古墳 群	〃	古墳	横穴・古墳20基	4191~4210	
15	長田大谷	〃 長田大 谷	古墳後期	散布地	3963	
16	大谷1号墳	〃	古墳	円墳、石棺(石持 形及び冢形)	4066	村山健治「山門郡大川村 面ノ上古墳概報」『筑後 地区郷土研究』創刊号 (1968)
17	大谷2号墳	〃	古墳	石棺(長持形及び 冢形)	4067	村山健治「山門郡大川村 面ノ上古墳概報」『筑後 地区郷土研究』創刊号 (1968)
18	長田山古墳 群	〃	古墳	古墳6基	4212~4217	
19	相撲場古墳 群	〃 大草字女山	古墳	古墳14基	4218~4231	
20	古塚山古墳	〃 字女山 山内	古墳	古墳および散布地 (石剣)	4151	
21		〃 大草	歴史	蔵骨器		村山健治「山門郡の遺跡」 『邪馬台のふるさと』1 号(1975)
22	女山産女谷	〃 女山産女谷	弥生後期	中広銅鏃2		森貞次郎「銅剣、銅矛、 銅戈の鑄造」『世界考古 学大系』第2巻(1960)
23	女山古墳群	〃 大草字 女山・中須畑	古墳	横穴古墳群、貝製 雲珠	4069~4148	

地図番号	遺跡名	所在地	時代	概要	全国遺跡地図 (福岡県)1968	備考
24	日吉坊古墳群	瀬高町大草字 女山小田字 小田西	古墳	古墳8基、須恵器 玉類、冢形石棺1	4098~4102 4146~4148	村山健治「山門郡瀬高町 日吉坊遺跡」『筑後地区 郷土研究』第2号(1971)
25	女山長谷古墳群	〃 山内 字	古墳後期	古墳35基、横穴石 室、横穴、人骨、 須恵器、土師器・ 玉類、鉄器、馬具、 耳環、貝輪、銅 剣、鈴	4108~4144	村山健治「女山長谷古墳 群」パンフレット(1972) 岩崎光「各地域の後期古 墳—筑後—山門郡女山長 谷古墳群」『古代学研 究』第30号(1962)
26	大谷遺跡	〃 長田字 大谷	先土器	散布地、礫器		
27	日吉坊遺跡	〃 横尾谷 字	古墳~ 歴史 先土器	横穴?礫器、古銭 墓地(五輪塔)	3965 4330	村山健治「山門郡瀬高町 日吉坊遺跡」『筑後地区郷 土研究』第2号(1971)
28	女山神籠石	〃 女山	歴史			石松好雄「女山神籠石— 特集—神籠石研究の現 状」『考古学ジャーナ ル』No.117(1976)国指 定(昭28)
29	女山火葬場 遺跡	〃 大草	古墳~ 歴史	散布地、須恵器、 土師器		本書
30		〃 女山 字	古墳	散布地、土師器、 須恵器	4211	
31	女山遺跡	〃 〃 字 女山	縄文~ 古墳	散布地、土師器、 土錘	4317	
32	大草遺跡	〃	弥生~ 古墳	散布地、弥生式土 器、須恵器、土師器		本書
33	大道端遺跡	〃 大道端ノ 字 内	先土器~ 歴史			本書
34		〃	弥生	散布地		
35	草葉遺跡	〃 大草字 草葉	弥生中期 ~歴史	散布地、須恵器、 土師器、弥生中期 土器	3979	本書
36	大塚遺跡	〃 大草字 大塚	弥生前、 中期	散布地		
37	大塚(蜘蛛 塚)古墳	〃	古墳	横穴式石室		
38	権現塚古墳	〃 坂田字 権現	古墳	円墳	4051	
39		〃	弥生	箱式石棺、甕棺 墓、住居跡	3997~3998	
40	上坂田遺跡	〃 坂田字 上坂田	弥生中期	住居跡	3983	
41	中園遺跡	〃 坂田字 中園	縄文後~ 晩期	散布地、縄文後晩 期土器、注口土 器、石斧、砥石	3968	鏡山猛「筑後坂田の縄文 土器」『九州考古学』第 2号(1957)久賀愛策 「坂田の注口土器」『筑 後史学』第5号(1960)
42	獅子穴古墳 群	〃 獅子穴 字	古墳	古墳11基、須恵器	4055~4065	
43	獅子穴遺跡 I	〃	先土器	散布地、礫器	3973	『朝日新聞』3月11日付 (1973)
44	II	〃	歴史	蔵骨器(清水寺 蔵)	4312	
45	保海遺跡	〃 本吉字 清水谷	歴史	古銭出土	4327	
46	清水 保海古墳群	〃	古墳	横穴式石室、須恵 器		
47	大中尾遺跡	〃 大草字 中尾	先土器、 縄文	散布地、石斧、礫 器	3962	

地図 番号	遺 跡 名	所 在 地	時 代	概 要	全国遺跡地図 (福岡県)1968	備 考
48	清水山(清水谷)古墳群	瀬高町本吉字清水谷	古 墳	横穴、横穴式石室、須恵器	4023~4042	
49	〃	〃	古 墳	須恵器(清水寺保管)	〃	
50	蛇谷古墳	〃 字 蛇谷	古 墳	円墳?、竪穴式石室、鉄鏃、人骨		村山健治・近沢康治「山門郡瀬高町蛇谷古墳調査概報」『筑後考古』第3号(1976)
51	清水谷遺跡	〃 字 清水谷	弥生前、中期	住居跡、箱式石棺	3992~3993	
52	三船山遺跡	〃 本吉字 三船	先土器 弥生前期	散布地	3991	
53	小谷遺跡	〃 本吉字 小谷	先土器	散布地、ポイント、礫器	3961	村山健治「東山先縄文遺跡」パンフレット(1963)
54	朝日遺跡	〃 山門字 朝日	弥生後期	集落	4003 4265	
55		〃	弥生中期 ~歴史	散布地		
56		〃	弥生中期	甕棺墓		
57	南の前遺跡	〃	弥生~ 歴史	散布地、青、白磁		
58	本吉遺跡	〃 本吉	歴 史	条里跡	4332	西谷正「ヤマト発掘(-)」『朝日新聞』9月26日付(1972)
59		〃	縄文晩期	散布地		
60	北広田大石遺跡	〃 松田字 北広田大石	弥 生	墓地	3981	
61	フミアガリ遺跡	〃 松田字 北松田	弥生(中期?)	甕棺墓	4004	
62		〃 山門字 御二田	古 墳	(円墳)	4050	
63		〃 大草	縄文晩期	散布地		
64	御二田遺跡	〃 山門字 御二田	縄文後晩期・弥生~古墳	散布地、御領式土器片、石斧、石匙、土師器	3969	村山健治「邪馬台国」パンフレット(1969)
65	藤ノ尾遺跡	〃 藤ノ尾 字	弥生前期~古墳	甕棺墓、住居跡、鉄剣、銅鏡	4008	村山健治「邪馬台国」パンフレット(1969)
66	車塚古墳	〃	古 墳	前方後円墳、獣帯鏡1、ほか銅鏡2	4049	西原一甫『耽奇漫録』(1824)
67	北ノ前遺跡	〃	弥生前~後期 平安後期	甕棺墓、溝、竪穴		鏡山猛『九州考古学論攷』(1972) 村山健治「邪馬台国」パンフレット(1969)
68		〃	古 墳	古墳(消滅)		
69	堤古墳群	〃 〃 字 東塚原 西塚原	古 墳	古墳10~12基、横穴式石室、勾玉	4246~4255	松村健治「堤古墳群」パンフレット(1967)
70	堤遺跡	〃	弥生中後期	甕棺墓、箱式石棺墓	4009	村山健治「堤古墳群」パンフレット(1967)
71		〃 坂田	弥生~古墳	散布地		
72	定角遺跡	〃 定角 字	弥生中~後期	甕棺墓、箱式石棺墓	3986	村山健治「邪馬台国パンフレット」(1969)
73	王塚古墳	〃 文広	古 墳	円墳、須恵器		
74	坂田遺跡	〃 坂田 下	縄文後期~鎌倉	散布地	3988	

地図 番号	遺跡名	所在地	時代	概要	全国遺跡地図 (福岡県)1968	備考
75	初瀬町 第1遺跡	瀬高町下庄字 初瀬町		集落	3985	
76	“ 第2”	“ 坂 田字下坂田	弥生前～ 後期	集落、墓地	3987	
77	坂田ブロッ ク工場遺跡	“ 坂田	弥 生	住居跡	4005付近	
78	下坂田遺跡	“ 字 下坂田	弥生前～ 後期	散布地	3989	
79		“	弥 生	散布地		
80	上小川遺跡	“ 小川字 上小川	弥 生	散布地	4002	
81	寺中遺跡	“ 寺中 字	弥生中期	住居跡	3982	
82	吉井松田遺 跡	“ “ 字 吉井・字松 田	弥生中～ 後期 古墳時代	住居跡	3984	
83	松延二の丸 遺跡	“ 松田字 二の丸	弥 生	散布地、住居跡	4322	
84		瀬高町	古 墳	散布地		
85	銚田遺跡	“ 小川字 銚田	弥生中期 奈良～ 鎌倉	甕棺、石棺墓(集 落、井戸、溝)銅 剣、磨製石鏃、紡 垂車、小形仿製鏡	3990 3999	鏡山猛『九州考古学論 攷』(1972)
86	金栗遺跡	“ 字 金栗	古墳後期 ～鎌倉前 期	集落、井戸、溝、 竪穴、櫛、土師 器、須恵器、石 鍋、青白磁、瓦、菊 花双雀鏡、土製甕	4307	鏡山猛『九州考古学論 攷』(1972)井戸は県指 定(昭33)
87	金栗ヤンプ ン塚古墳	“	古 墳	古墳2～3基	4325	
88	七社宮裏遺 跡	“ 小田字 小田	先土器	散布地	3966	
89		“	弥 生	“		
90	安ノ内遺跡	“	“	“		
91	瀬高幼稚園 内遺跡	“ 下庄	平安後期	“ 土師器、須 恵器		鏡山猛『九州考古学論 攷』(1972)
92		“ 文広	弥 生	散布地		
93		“	古 墳	“		
94	清水高塚古 墳群	“ 本吉字 高塚稲荷山	古 墳	古墳10基、横穴式 石室	4043～4048	

一帯の分布調査などを行ない、その成果を謄写印刷のパンフレットなどにより公刊してきた。瀬高町日吉坊遺跡の調査⁽⁹⁾ (1964年)、山川町面ノ上古墳の調査⁽¹⁰⁾ (1966年)、瀬高町蛇谷古墳の調査⁽¹¹⁾ (1973年)などはその一端を示すものである。

最近では、福岡県教育委員会による女山神籠石の調査⁽¹²⁾ (1971年)、瀬高町日掛遺跡⁽¹³⁾ (1972年)、本吉遺跡の調査⁽¹³⁾ (1971年)、瀬高町名木野古墳群の調査⁽¹⁴⁾ (1976年)、平安博物館による瀬高町小谷・獅子穴の調査⁽¹⁵⁾ (1976年)などがあり、なかでも日掛遺跡、本吉遺跡は大道端遺跡と同様、九州縦貫自動車道の建設に際して行なわれた事前調査であった。これらを総合してみると、個々の遺跡の内容は、具体的に知られるものは少ないのではあるが、山麓部では古墳時代後期を中心とした多数の古墳群があり、平野部ではとくに弥生時代以降から集落・墳墓の多数の分布が想定されるのである。このように多数の遺跡の分布をみることは生産性の高い土地条件と、あながち無関係ではないであろう。大道端遺跡の周辺では次のようなものが知られる。^(※注)

〈先土器時代〉

1962年から1963年頃にかけて、瀬高町東山（女山）の一帯で村山健治氏により石器が採集されている。1974年までに清水小谷・大谷・大中尾・日吉坊・七社宮裏・獅子穴など14遺跡が知られている。これらの遺跡には硅質凝灰岩製の礫器（チョッピング・ツール）が多くみられ、この地方における先土器文化の究明に大きな問題をなげかけている。

小谷遺跡 (Fig. 1-53, PL. 2)

標高50mほどの南面の台地にあり、1962年、村山氏によりサヌカイト製の尖頭器1点、硅質凝灰岩製の礫器3点 (PL. 2) のほか細石器らしいもの2点が採集されている。これらはミカン園造成による削平工事中に発見されたが、阿蘇山の噴火によって堆積した火山灰層である筑後ローム層の下部から出土したといわれる。⁽¹⁶⁾

大谷遺跡 (Fig. 1-26)

標高50mほどの南面の傾斜地に石器が散布する。1963年、硅質凝灰岩製の礫器や、黒曜石破片、その他黒曜石製の石鏃なども採集されている。⁽¹⁷⁾

獅子穴遺跡 I (Fig. 1-43)

小谷遺跡の東北方向の、古僧都山南面山麓にある獅子穴古墳群の近辺で、1973年ミカン園開墾の際に礫器が採集されている。⁽¹⁸⁾

〈縄文時代〉

これまで認められたものでは中期からの遺跡が知られる。中期に属するものでは、1964年、南福寺式土器片の発見された瀬高町長田遺跡があり、後期では瀬高町御二田・坂田（中園）、山川町河原内、晩期では瀬高町梅ヶ谷・草葉・坂田（中園）、山川町九折^{つづら}・河原内などの遺跡が知られる。これらは標高8～10mの平野部の微高地や、標高20mほどの山麓部丘陵地に分布する。

中園遺跡 (Fig. 1-41, PL. 3)

標高9mほどの微高地に所在する。1953年と1955年に地下げされ、遺物が採集された。遺跡の範囲は東西100m、南北300mで、中心部は地下げにより破壊されている。1954年には波多野氏が、1956年には鏡山・久賀・村山氏らが調査を行なった。遺物は御領式に属する鉢形土器2点、注口土器1点(PL. 3)、局部磨製石斧3点などがあり、とくに鉢形土器の一つは底部穿孔され、甕棺と推定されている。⁽¹⁹⁾

〈弥生時代〉

前期から、遺跡の立地に大体二つの傾向が認められる。その一つは、縄文後晩期の遺跡分布と同様に微高地や低丘陵に立地するものであり、別の一つは新たに標高4mほどの沖積地に立地するものである。前者は瀬高町三船山・初瀬第2・下坂田・御二田、山川町河原内などの遺跡があり、後者は瀬高町下小川宮(下小神宮)遺跡などがある。やや離れるが、柳川市西蒲池天神前⁽²⁰⁾、大川市酒見貝塚⁽²¹⁾などにも認められる。後者にあたるものは低地においても、比較的立地条件としては安定した土地——河川によって形成された自然堤防を中心に利用したのであろう。山麓部および微高地では弥生時代の全期間を通じて遺跡は分布するが、低地ではその後の中・後期においても遺跡の分布がひろがり、集落とそれに関連する生産の拡大を暗示させるものがある。たとえば、中期では大和町下棚町・塩塚など、後期では大和町鷹尾中島・枇杷園、瀬高町小田などの遺跡があげられる。いっぽう、この頃から銅剣、銅鏡などを副葬した遺跡も出現し、集落間の格差のめばえを示唆するものもある。これには瀬高町鉾田・藤ノ尾・産女谷などの遺跡がある。

鉾田遺跡 (Fig. 1—85・2)

1955年から1966年にわたり調査された。東西600m、南北1kmほどの広大な遺跡で、弥生中期から中世までに及ぶが、地下げ工事の際に調査されたために未調査のまま破壊されたものも多くある。弥生中期の甕棺墓は計55基以上、その他時期不詳の石棺墓が発見された。甕棺墓群の分布は3区に大別され、第1区の甕棺墓・石棺墓10基ほどは未調査のまま消滅したが、第2区では甕棺墓48基、第3区では甕棺墓7基が調査された。第2区では10基内外の甕棺墓群に分類され、うち最大埋葬数17基を示すB群において、細形銅剣破片、磨製石鏃、紡錘車の副葬が認められた(Fig. 2—1~3)。細形銅剣は破片副葬の例で⁽²²⁾、20号甕棺の棺上に接して置かれ棺外副葬とみられる。磨製石鏃は10号甕棺、紡錘車は13号甕棺の棺外において認められた。また、後期のものでは直径7.2cmの小形の仿製鏡である内行花文鏡(九弧文鏡, Fig. 2—4)があり、出土遺構は明確ではないが、墳墓に副葬された可能性もある。⁽²³⁾

定角遺跡 (Fig. 1—72)

1962年、地下げ工事により確認され、中~後期と推定される甕棺墓26基以上、石棺墓12基以上、計約40~50基が約750m²の範囲で認められている。⁽²⁴⁾

藤ノ尾遺跡 (Fig. 1—65)

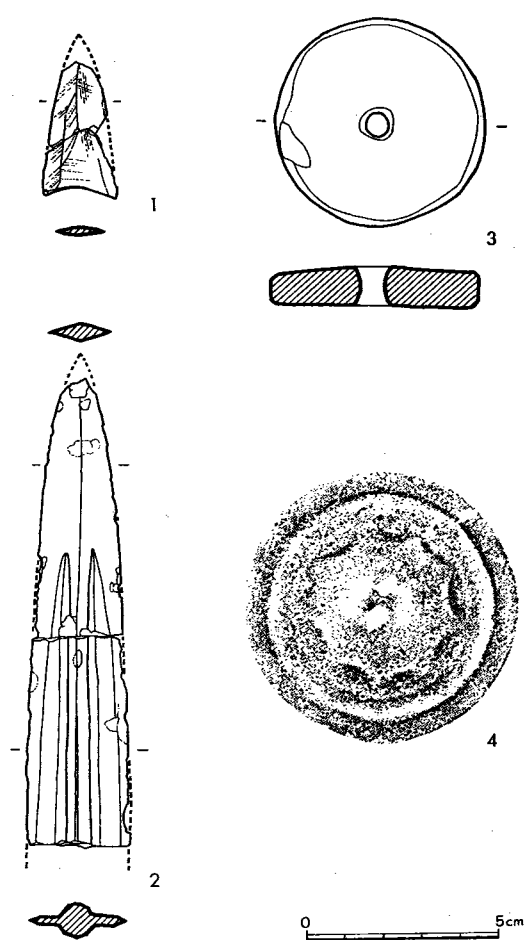


Fig. 2 銚田遺跡出土遺物実測 (図縮尺1/2)
(4は高倉洋彰氏手拓)

北ノ前遺跡 (Fig. 1-67)

車塚古墳の南方に位置する。1959年地下げされ、鏡山・村山両氏により調査された。弥生前期から後期、および平安後期にわたり遺物が認められたが、弥生時代に属する確実な遺構は認められていない。(28)

枇杷園遺跡 (大和町鷹尾字枇杷園)

1956年、地下げ工事により認められた遺跡で、鏡山氏により約200m²が調査された。弥生・古墳時代、および平安末～鎌倉時代までの堅穴が認められているが、弥生時代に属する遺構は、用途不明の堅穴・溝など7か所であった。(29)

草葉遺跡 (Fig. 1-35, Tab. 2)

標高8～9mの微高地一面に弥生中期～歴史時代までの遺物が散布する。こん回、大道端遺

車塚古墳の周辺では1958年頃からの地下げ工事で多数の甕棺墓などが認められた。これより古く享保20年(1735年)9月14日、車塚古墳の傍の畑から1面の銅鏡の出土が伝えられており(25)、甕棺墓副葬品の可能性もある。また車塚古墳より南方へ100mほどの所で、1964年、道路工事中に、中～後期と推定される甕棺と鉄剣が工事関係者により掘り出されている。(26)

女山産女谷遺跡 (Fig. 1-22, PL. 6)

女山神籠石の列石の内側にあたる標高64mほどの女山の中腹において、1960年頃、中広形銅矛2点が発見されている。(27) これはミカン園造成の際、土地所有者の杉本修・博両氏により発見され、現在、杉本博氏が保管されている。不確実ではあるが、銅矛2本は石囲いされた小石棺状の遺構から、交互に刃を重ねた状態で出土したといわれる。出土地点は集落とは隔絶した位置であり、共同祭祀品として埋蔵された可能性が強い。

跡の調査中に遺物が採集された。

弥生式土器 (Fig. 3-1~3) 1~3は甕形土器の破片である。1は黄灰色を呈し、復原口径22.5cmで体部外面にタタキ目が施され、体部内面には斜め方向、口縁部内面には横方向のハケ目が、それぞれ施されている。3は黄褐色を呈し、口縁部にキザミ目が施されている。

須恵器 (Fig. 3-4・5・6・9) 4は蓋で、上面中央が凹む鈕がつく。5は杯蓋で、復原口径14.5cmあり、ツマミを欠損する。口縁部は断面長方形をなす。6・9は杯身であるが、6は蓋受けのかえりを持ち、赤褐色を呈する。9は復原口径14.0cmである。

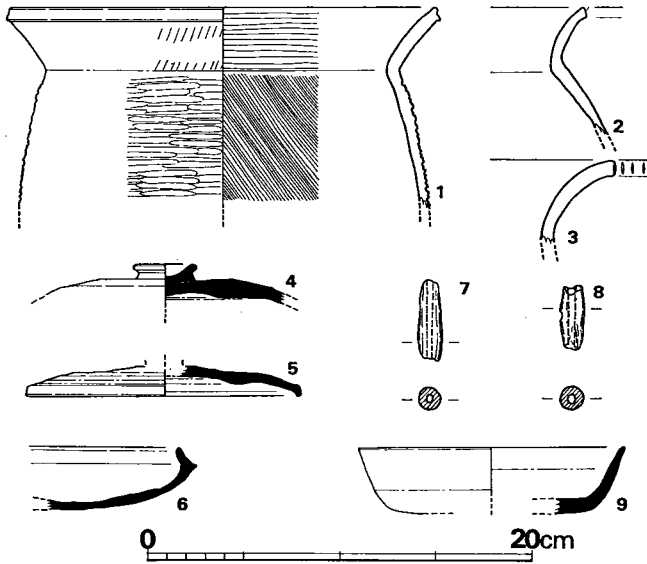


Fig. 3 草葉遺跡表採遺物実測図 (縮尺1/4)

土錘 (Fig. 3-7・8) 8は一端を欠くが、7は重さ6.5gある。

大草遺跡 (Fig. 1-32, Tab. 3) 標高9mほどの微高地に位置し、大道端遺跡の調査中に遺物が採集された。

弥生式土器 (Fig. 4-1~4・6・7) 7は甕で、頸部から口縁中央部までは内傾し、上半部で外彎する。口唇部は上下にのびてその外面に整形具によるキザミ目を施す。内外ともにハケ目状整形痕を残す。6の高杯は内外ともに丹塗り仕上げであるが、

Tab. 2 草場遺跡表採遺物一覧表 ()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高			
1	Y 甕	下半欠	(22.5)		少量の砂粒を含み、焼成良	黄褐色	
2	Y 甕	口縁部			砂粒を含み、焼成良	〃	
3	Y 甕	〃			〃	〃	
4	S 蓋	口縁部欠			胎土精良、焼成不良	灰白色	鈕径 (3.4)
5	S 蓋	鈕欠	(14.5)		胎土精良、焼成良	青灰色	
6	S 杯	口縁部			胎土精良、焼成やや不良	茶褐色	
7	土錘		長さ4.3	径1.2	胎土精良、焼成良	黄褐色	重さ6.5g
8	土錘		孔径0.3		〃	灰白色	
9	S 杯	底部欠	(14.0)		胎土精良、焼成良	灰褐色	

ハケ目状整形痕を一部に残す。1～4はいずれも蓋で、内外ともにハケ目状整形痕を残す。

須恵器 (Fig. 4-5) 復原口径9.7cmの杯身である。外底部はヘラ削り、内底部はナデ、体部内面はヨコナデが施されている。

把手 (Fig. 4-8) 粘土を円筒状につくり、なかに粘土を充填して把手としたもので、その製作過程を窺わせる好例である。

〈古墳時代〉

これまで集落について行なわれた調査はあまりないが、土師器・須恵器などを包含する遺跡は多く、こん後、認められる可能性は大きい。古墳については、前述したもののほか、瀬高町小田薬師堂古墳の紹介がある。⁽³⁰⁾ ところで、女山に所在す

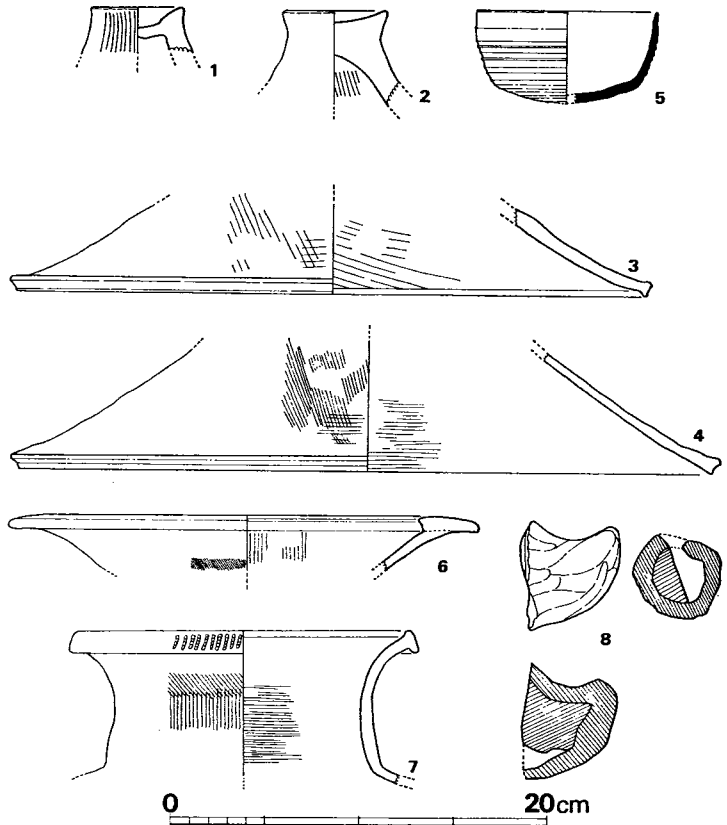


Fig. 4 大草遺跡表採遺物実測図 (縮尺1/4)

Tab. 3 大草遺跡表採遺物一覧表 () は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高			
1	Y 蓋	ツマミ部片			砂粒を多く含み、 焼成は良	黄褐色	
2	Y 蓋	"			"	"	
3	Y 蓋	下半部片	(33.5)		"	"	
4	Y 蓋	"	(38.0)		砂粒を含み、焼 成は良	褐色	
5	S 杯	½	(9.7)	(4.9)	細砂を含み、焼 成は良	青灰色	
6	Y高杯	口縁部	25.0		胎土は精製され、 焼成は良	黄褐色	丹塗り
7	Y 甕	口縁部	(18.3)		砂粒を多く含み、 焼成は良	黄褐色	器周残 1/3
8		把手			砂粒を含み、焼 成やや不良	黄褐色	

る多くの後期古墳群は、大道端遺跡で検出された大半の古墳時代後期～奈良時代前期に属する集落との関連が考えられるので、こん後、両者の内容に関して精査することが望まれる。

車塚古墳 (Fig. 1-66, PL. 6)

山門郡では確実な唯一の前方後円墳である。周囲の地下げによりかなり変形しているが、南北55m、東西27mの西北向きで周溝の痕跡を残している。明治20年(1887年)頃までには陪冢があったといわれているが現存していない。明和4年(1767年)に銅鏡が2面出土し、享保20年(1735年)にも古墳の近傍で1面出土している。この計3面のうち1面は『耽奇漫録』⁽³¹⁾に図示され(PL. 4)ており、流雲文縁の獣帯鏡で後漢時代に属するものであることがわかる。したがって、車塚古墳出土品とみることもできる。その後、これらの銅鏡は墳丘上に建てられたお堂に収められていたが、後に火災、盗難にあい現存していない。車塚古墳は5世紀代に考えられるが、内部構造などが不明であり確実ではない。

権現塚古墳 (Fig. 1-38, PL. 4)

車塚古墳より東北方へ約1kmほどの微高地にある。直径48mの大形の円墳で周溝の痕跡を残している。墳丘は盗掘をうけた痕跡がなく、比較的良好に残存する。古墳の南方近くで甕棺墓や箱式石棺墓などが認められている。

大谷 1・2 号墳 (Fig. 1-16・17, PL. 4)

別名は長田山古墳群ともいわれる。1・2号墳とも蓋に縄掛突起のある石棺が発見され、長持形石棺と報告されている。遺物は勾玉・鉄斧・須恵器が出土している。現在、古墳は消滅したが、石棺1基は瀬高町水上小学校に保管されている。⁽³²⁾ また、日吉坊遺跡からも同種の石棺が発見されたという報告がある。

面ノ上古墳 (山門郡山川町清水字面ノ上1411-2)

低丘陵に立地する。直径12.5m、高さ2.8mほどの円墳で、1972年、土取り工事により破壊され、家形石棺と推定されるものが認められた。石棺内には人骨が遺存しており、副葬品として獣形鏡1点、銅釧1点、鹿角装鉄剣1点が出土している。⁽³³⁾

蛇谷古墳 (Fig. 1-50)

1973年、ミカン園開墾により主体部が露出していたものを村山健治氏が調査した。墳丘は明確ではないが、内部構造は下半部に板石を箱式石棺状に囲い、上半部には10~40cmの平石を小口積みにした竪穴式石室である。人骨2体が遺存し、鉄鎌などが副葬されていた。⁽³⁴⁾

堤古墳群 (Fig. 1-69)

標高7mほどの微高地に所在する。石材の残存から10~12基からなる古墳群と推定され、1923年に石田昌・白鳥庫吉・渡辺村男氏らが調査している。ほとんどの古墳は墳丘が破壊され、石材が抜き取られているために、構造については不明のものが多く、そのうち2基は横穴式石室の面影をとどめている。1号墳は長さ1.4m~3.2mの石材がコ字形に配列される。8

号墳は墳丘が残存し円墳と考えられ、墳丘上に石材がL字形に残存している。遺物としては、3号墳の近傍で勾玉が採集されている。また古墳群周辺では、弥生時代中～後期にいたる甕棺墓数基と箱式石棺墓1基が認められるので弥生時代の墓地でもある。(35)

女山古墳群 (Fig. 1-23, Tab. 4, PL. 8)

女山神籠石の列石がある標高50~200mの山麓地帯には、総数100以上と推定される群集墳が営まれていたが、現在までにミカン園の開墾などによって多数が消滅した。これらの古墳群は山麓部の各支脈上に営まれており、数群に分かれるが、そのうちの一つである女山長谷・山内古墳群の35基は、1959年鈴木尚・近藤四郎氏により調査された。この成果は岩崎光氏により発表されたが(36)、それによると内部構造は横穴式石室と横穴が大半を占め、人骨の遺存するものもある。現在知られるものでは、土器(須恵器・土師器)、玉類(丸玉・小玉・管玉)、鉄器(刀子・刀・鏃)、馬具、耳環、貝輪、銅釧、鈴、貝製雲珠などが出土しており、古墳時代後期を中心とする古墳群であることがわかる。なかでも貝製雲珠3個は1959年に県指定を受けている。

ところで、大道端遺跡の調査中に、女山の古墳群近辺で採集された土器がある。(37)

須恵器 (Fig. 5-1~14) 1~5は杯蓋である。天井部の外面にヘラ削り、内面にナデ、体

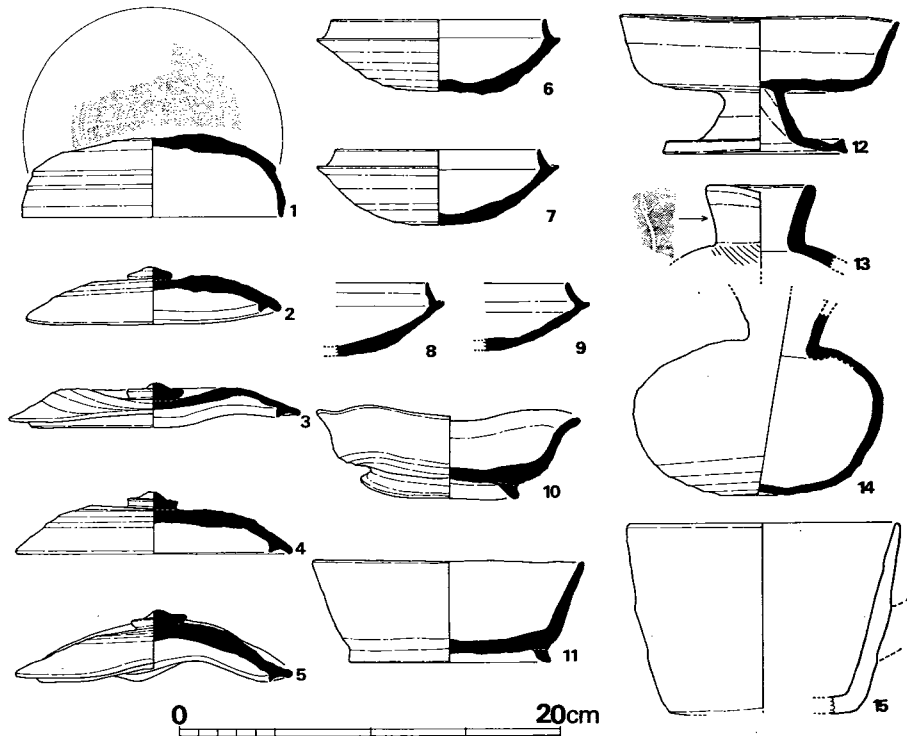


Fig. 5 女山古墳群表採遺物実測図 (縮尺1/4)

Tab. 4 女山古墳群表採遺物一覧表 () は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高			
1	S 蓋	略 完	(13.8)	4.4	砂粒を含み、焼成良	青 灰 色	天井部外面ヘラ記号
2	S 蓋	〃	13.6	3.1	砂粒を含み、焼成良	青 黒 色	歪み大
3	S 蓋	〃	13.1	2.4	砂粒を含み、焼成良	青 黒 色	歪み大
4	S 蓋	〃	14.8	3.2	砂粒を含み、焼成良	青 灰 色	
5	S 蓋	〃	12.3	3.8	砂粒を含み、焼成良	青 黒 色	歪み大
6	S 杯	〃	11.4	4.0	砂粒を含み、焼成良	青 黒 色	
7	S 杯	〃	(11.0)	4.0	砂粒を含み、焼成良	青 黒 色	
8	S 杯	口縁部片			砂粒を含み、焼成良	青 灰 色	
9	S 杯	〃			砂粒を含み、焼成良	青 灰 色	
10	S 杯	略 完	14.0~ 14.2	3.6~ 5.0	砂粒を含み、焼成良	青 灰 色	歪み大
11	S 杯	復原完	14.2	4.3	砂粒を多く含み、焼成やや不良	灰 色	
12	S高杯	〃	14.9	7.4	砂粒を含み、焼成良	青黒色~ 紫灰色	
13	S提瓶	口頸部	5.6~ 6.3		砂粒を含み、焼成良	茶 褐 色	頸部外面ヘラ記号
14	S平瓶	口縁部欠			砂粒を含み、焼成良	灰 色	頸部径 3.8 体部最大径 13.3
15	H把手付鉢	底部把手欠	(14.2)	(10.1)	胎土精良、焼成良	茶 褐 色	

部内外面ともヨコナデが施されている。1は天井部と体部の境に明瞭な段を有し、2~5は器形の歪みが著しいが天井部に偏平な宝珠形の鈕がつけられ、口縁端部に身受けのかえりがある。6~11は杯身である。6~9は蓋受けのかえりを持つもので内底部はナデ、外底部はヘラ削り、その他はヨコナデである。10・11は外に開く高台をもち、内底部にナデ、体部内外面にヨコナデが施されている。12は高杯で、2/3ほど残存する。杯部の内底部はナデ、体部内外面はヨコナデ、外底部はヘラ削りが施される。脚部の内面はナデ、外面はヨコナデである。13は提瓶の口頸部と思われ、頸部の外面にヘラ記号状のものがある。14は平瓶であるが口縁部を欠損し、体部下方にはヘラ削り、それ以上にはヨコナデが、また頸部内外面にはヨコナデが施されている。

土師器 (Fig. 5—15) 15は把手付の鉢と考えられ、2ヶ所に把手の剝離した面が残っている。調整は磨滅のため明らかではない。

以上のほかに、土師器の小破片があるが図示できるものはない。須恵器の中には7世紀代に入るものも見られ、少なくともこの頃まで古墳の追葬が行なわれたことが推定される。

女山火葬場遺跡 (Fig. 1—29, Tab. 5, PL. 9)

標高10mほどの微高地に遺物が散布し、大道端遺跡の調査中に遺物が採集された。

須恵器 (Fig. 6-1~15・17・18) 1は蓋で、天井部外面はカキ目が施される。2~4は杯蓋で、3は宝珠形の扁平な鈕がつき、口縁部には身受けのかえりをもつ。5~12は杯身である。5~8はやや立ち上りが高い蓋受けのかえりをもち、外底部にはヘラ記号状のものがある。と

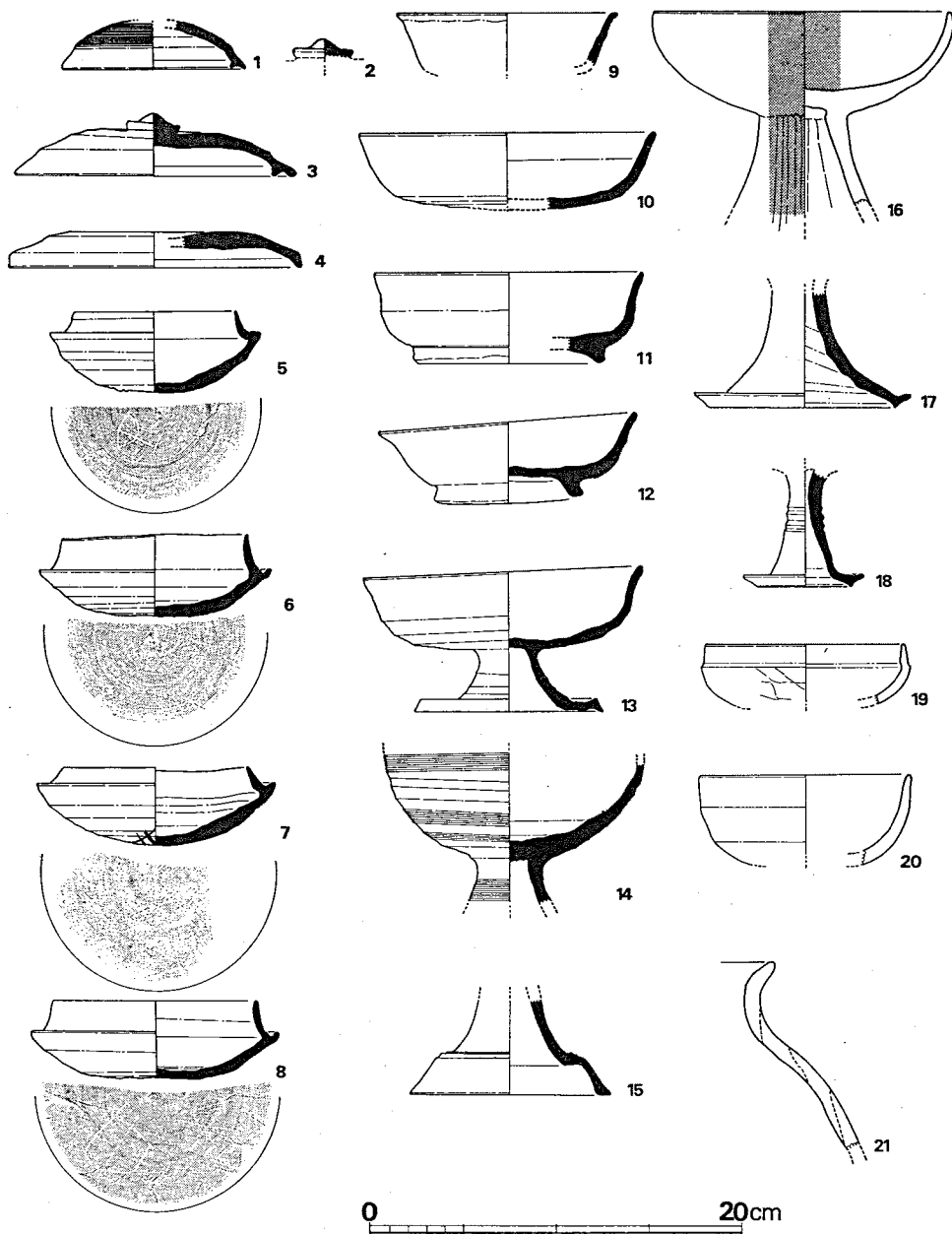


Fig. 6 女山火葬場跡遺跡表採遺物実測図 (縮尺1/4)

くに5のヘラ記号は大道端遺跡D区出土の須恵器と共通するものである (Fig. 321—14参照)。10は無高台、11・12は有高台のもので、12は歪みがひどい。13・17・18は高杯である。17・18は黄褐色を呈し、やや軟質である。14・15は脚台付壺と思われる。14は外面の数ヶ所にカキ目が施されている。

土師器 (Fig. 6—16・19~21) 16は高杯で、外面全体と杯内部は丹で彩色されている。19・20は杯であり、底部を欠損する。19は口縁部に短い立ち上りをもつ。21は甕の小破片で胴部外面はハケ目、内面はヘラ削り、口縁部内外面はヨコナデが施されている。

清水山古墳群 (Fig. 1—23, Tab. 6)

標高 300m ほどの清水山の西側斜面から平野部の本吉の集落にかけて清水谷が開けている。

Tab. 5 女山火葬場遺跡表探遺物一覧表 () は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高			
1	S 蓋	天井部欠	10.0		細砂を含み、焼成良	青灰色	
2	S 蓋				胎土精良、焼成良	灰色	鈕のみ
3	S 蓋	復原完	12.9	3.4	細砂を含み、焼成良	灰色	
4	S 蓋	天井部欠	(15.7)		細砂を含み、焼成良	灰色	
5	S 杯	復原完	8.8	4.4	細砂を含み、焼成良	内面 茶褐色 外面 灰色	底部外面ヘラ記号
6	S 杯	〃	(10.2)	4.4	大きめの砂粒を含み、焼成良	青灰色	底部外面ヘラ記号
7	S 杯	〃	10.0~10.6	3.9~4.1	大きめの砂粒を含み、焼成良	青灰色	底部外面ヘラ記号
8	S 杯	〃	11.1	4.1	細砂を含み、焼成良	青灰色	底部外面ヘラ記号
9	S 杯	底部欠	11.9		細砂を含み、焼成良	口縁部 灰色 体部 黄灰色	
10	S 杯	〃	(16.0)	(4.1)	細砂を含み、焼成良	灰色	
11	S 杯	〃	(14.4)	4.9	砂粒を含み、焼成良	黄灰色	
12	S 杯	復原完	13.8±	3.9~4.8	砂粒を含み、焼成良	黒灰色	
13	S高杯	〃	(14.9)	7.3~7.9	細砂を含み、焼成良	黒灰色	
14	S台付壺	口縁部・脚部欠			細砂を含み、焼成良	青灰色	
15	S脚台				砂粒を含み、焼成良	青灰色	端部径(10.8)
16	H高杯	裾部欠	(16.4)		胎土精良、焼成良	黄褐色	丹塗り
17	S高杯	杯部欠			胎土精良、軟質	黄灰色	端部径 10.2
18	S高杯	〃			細砂を含み、焼成良	黄褐色	端部径 5.2
19	H杯	底部欠	(11.0)		胎土精良、焼成良	黄褐色	
20	H杯	〃	(11.6)		砂粒を含み、焼成良	黄褐色	一部黒色
21	H甕	口縁部片			砂粒を含み、焼成良	黄褐色	

鬱蒼とした照葉樹林のなかに名利清水寺が鎮座する。清水山古墳群は清水谷の東西両斜面に総数48基ほど営なまれている。発掘調査を行なったものは少数に過ぎないが、内部構造は横穴式石室や横穴などが知られる。大道端遺跡の調査中に実査したところ、破壊されたものや完存する横穴式石室が認められた。また、これらの古墳群から出土したと推定される遺物の一部は、現在清水寺本坊に保管され、こん回、実見する機会を得た。⁽³⁸⁾ これは清水寺第32代住職の鍋島隆道氏が明治36年に、寺が所有する山林中の古墳から発掘したものである。

須恵器 (Fig. 7) 1～4は杯蓋である。すべて天井部外面はへら削りされ、その内面はナデが、体部の内外面はヨコナデが施される。ツマミをもつものは、さらにこの部にヨコナデが施される。1は小形であるが完形品で天井部の器壁は厚い。その外面にはへら記号がある。2は2/3、3は1/3ほど残存する。4は口縁部に身受けのかえりを持ち、そのかえりは受け部より上方にある。5～8は杯身である。外底部はへら削り、内底部はナデ、体部内外面はヨコナデが施される。5は外底部にへら記号状のものがあ、8は外底部に数本の平行線からなる圧痕状のものがあ。9～11は高杯で、9・10は杯部のみ残存する。9は杯部の外底部がへら削りの後に、縦方向のクシ目状の圧痕を一周させる。その他の調整は杯身と同様である。10は外底部にカキ目、体部外面に5本の凹線が施される。11は脚部内面の中位までにしぼりの痕跡があり、それ以下と外面はヨコナデが施される。脚部中位と杯部の下位には凹線が施される。12は蓋、13は短頸壺で蔵骨器のセットとなり、昭和28年清水寺所有地内で採集されたものである。12は天井部外面にへら削りが施され、偏平な擬宝珠形の鈕を貼付けた後にヨコナデが施される。体部内外面、天井部内面はヨコナデが施される。14は小形蓋、15は小形の罎でセットをなすものと考えられる。14は天井部外面に回転へら削りの後、静止へら削りが、肩部にはナデが施される。15は全面ヨコナデが施される。16は提瓶で口縁部の一部を欠損する。体部の平坦面側はへら削りが、その凸面側はカキ目が施される。口頸部を接合した後に肩部にカキ目が施され、へら記号が刻まれる。17は朝鮮製の高杯と考えられる。胎土は細かく焼成は良い。口縁端部は歪みがあるが、うすく尖る。脚部は大半を欠損するが、4孔ずつの2段透しと思われる。内外面の一部に自然の灰が付着する。

以上のほかに、平田古墳出土須恵器や金栗出土須恵器の紹介がある。⁽³⁹⁾

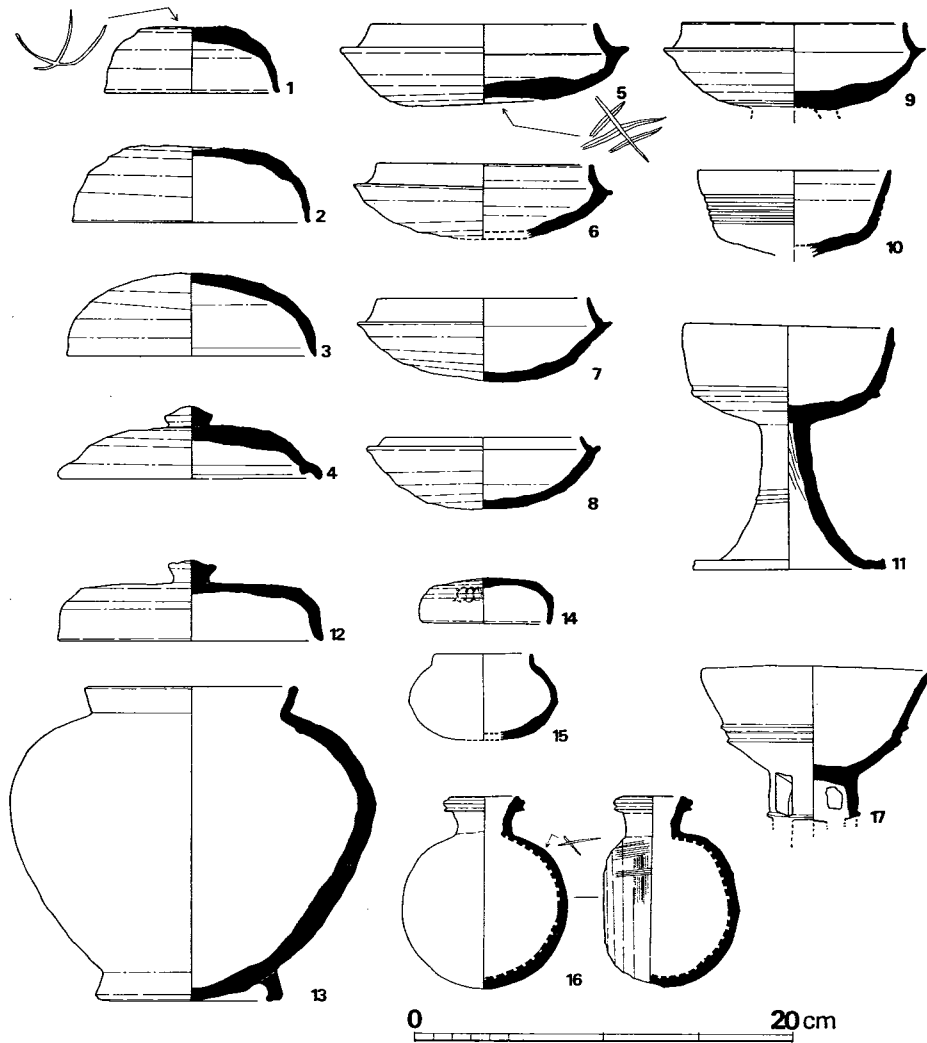


Fig. 7 清水山本坊保管土器実測図 (縮尺1/4)

Tab. 6 清水寺本坊保管土器一覧表 ()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	S 蓋	完形	9.2	3.5		砂粒を含み、焼成良	外面 灰褐色 内面 明青灰色	天井部外面へラ記号
2	S 蓋	復原完	12.6	4.0		大きめの砂粒を含み、焼成良	灰色	
3	S 蓋	"	(13.2)	4.4		砂粒を含み、焼成良	暗青灰色	
4	S 蓋	略完	14.1	3.9		大きめの砂粒を含み、焼成良	灰色	

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
5	S杯	略完	12.0	4.2		大きめの砂粒を含み、焼成良	青灰色	外面底部へラ記号?
6	S杯	底部欠	11.3	(4.0)		細砂を含み、焼成良	暗青灰色	
7	S杯	略完	11.2	4.4		砂粒を多く含み、焼成良	青灰色	
8	S杯	〃	10.3	3.8		細砂を含み、焼成良	青灰色	
9	S高杯	脚部欠	11.8			大きめの砂粒を含み、焼成良	灰色	
10	S高杯	〃	(10.2)			胎土精良、焼成良	灰色	
11	S高杯	復原完	10.9	13.0~ 13.3		細砂を含み、焼成やや不良	青灰色	
12	S蓋	略完	13.9	4.3		大きめの砂粒を含み、焼成良	青灰色	13とセット
13	S壺	〃	11.2	16.8	中位やや上	大きめの砂粒を含み、焼成良	青灰色	12とセット
14	S蓋	〃	6.7	2.4		細砂を含み、焼成良	灰褐色	15とセット
15	S埴	底部欠	(5.1)	(4.6)		細砂を含み、焼成良	灰褐色	14とセット
16	S提瓶	略完	3.5	10.1		大きめの砂粒を含み、焼成良	灰色	
17	S高杯	脚部欠	11.6~ 12.2			胎土精良、焼成良	灰黒色	"新羅焼"

※以上のほかに、若干の土師器がある。

<歴史時代>

女山神籠石 (Fig. 1—28・Fig. 8, PL. 7)

矢部川の中流をのぞむ標高200mほどの古僧都山頂を中心として、西側の山麓斜面に扇形にひらいた形状を呈して列石がめぐる。全周は約2.9kmと推定され、西辺部の列石がもっとも長く、北から順に横尾谷、長谷、源吾谷、産女谷があり、おのおの水門が築かれている。昭和28年に国指定をうけたが昭和40年以降、たびたび列石内の土取り工事によって破壊をうけた。とくに産女谷水門付近は回復困難な状態に至っている。1935年には石野義助氏が⁽⁴⁰⁾、1971年には福岡県教育委員会により調査が行なわれた。⁽⁴¹⁾

石野氏の調査では横尾寺谷水門と古僧都山の最高所を結ぶ南半部に列石が確認され、それより北半分の延長約1.4kmは列石が確認されていない。福岡県教育委員会の調査は、この列石の北半分について行なわれたが、列石・土塁などは認められなかった。しかし、部分的に試堀溝を入れた結果、列石前面には10尺等間の柵列状のものが検出され、列石の背面では版築状の積み土が確認されている。おつぼ山神籠石の調査⁽⁴²⁾では、列石前面に10尺等間の柵列が検出され、水門・土塁とも合わせて唐尺の使用が想定されており、このことから神籠石の時期は7世紀中頃に比定されている。女山神籠石の場合もこれとほぼ同様な結果を示している。

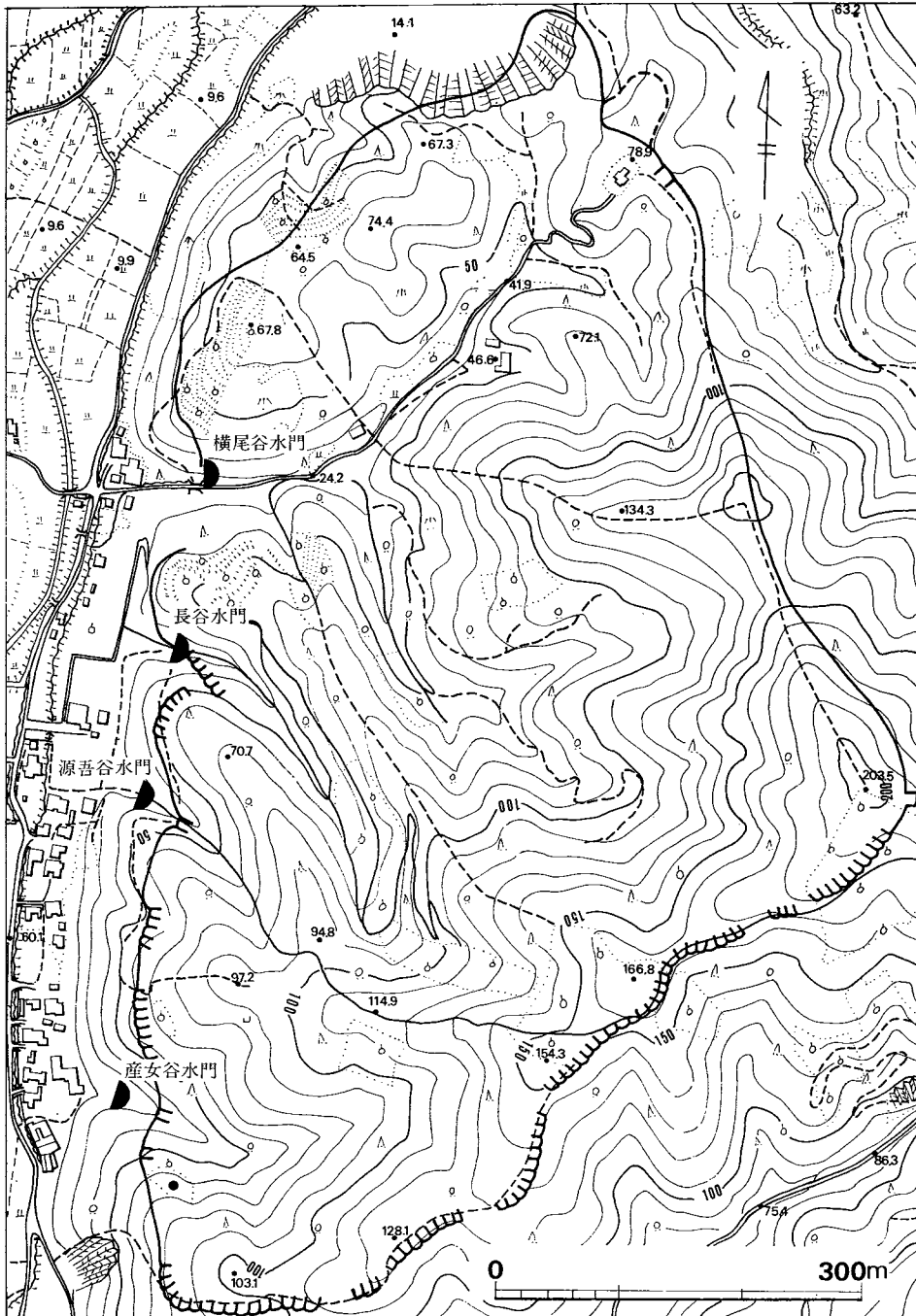


Fig. 8 女山神籠石 (縮尺1/6,000)
 (産女谷水門南東の●は銅矛出土地点)

金栗遺跡 (Fig. 1—86)

銚田遺跡の西方1 kmの所にあり、奈良～鎌倉前期までの集落遺構が認められた。環溝と推定される内側には井戸6基、炉址3ヶ所、灰のつまった竪穴4ヶ所、小形竪穴16基ほどがあり、遺物は井戸から櫛などの奈良時代に属するものが、環溝から土師器・須恵器・青白磁・石鍋・菊花双雀鏡など平安～鎌倉時代におよぶものが出土した。青磁には「金玉満堂」の刻印をもつものがあり、また老司系軒丸瓦も採集されている。鏡山氏によれば古代集落跡は金栗遺跡のほか前述した銚田遺跡や、三橋町垂見、大和町枇杷園なども検出され、この地方における歴史時代集落論の先駆をなしたものとして注目される。

本吉遺跡 (Fig. 1—58)

福岡県教育委員会により昭和47年2月～3月にかけて調査が行なわれた。現在整理中であり詳細に報告することはできないが、古い時期の畦畔、水路、土木工事の跡が認められ、条里制の遺構と考えられる。⁽⁴³⁾ 現在でも本吉条里跡周辺の土壌は、段丘の下に発達した生産性の高い細粒グライ土壌を示している。

(注)

※周辺遺跡分布図は村山健治氏の御教示によるところが多い。

- (1) 経済企画庁総合開発局『土地分類図(福岡県)』1970
- (2) 永沢謙次「北九州2・3地方の甕棺の遺跡、並に出土人骨及銅鏡」『人類学雑誌』第46巻第7号、1931
- (3) 石野義助「筑後女山神籠石」『福岡県史跡名勝天然記念物調査報告書第10輯』1935
- (4) 鏡山猛『九州考古学論叢』1972
- (5) 村山健治『女山長谷古墳群』パンフレット、1962
- (6) 岩崎光「各地域の後期古墳—筑後—山門郡女山長谷古墳群」『古代学研究』第30号、1962
- (7) 田中幸夫・波多野皖三ほか『筑後地区先史遺跡地名表』1966
- (8) 東原嘉範・久賀愛策「赤山横穴古墳発掘報告」『九州考古学』7.8、1959
- (9) 村山健治「山門郡瀬高町日吉坊遺跡」『筑後地区郷土研究』第2号、1971
- (10) 村山健治「山門郡大川村面上古墳概報」『筑後地区郷土研究』創刊号、1968
- (11) 村山健治・近沢康治「山門郡瀬高町蛇谷古墳調査概報」『筑後考古』第3号、1976
- (12) 石松好雄「女山神籠石—特集“神籠石研究の現状”」『考古学ジャーナル』No.117、1976
- (13) 西谷正「ヤマト発掘(-)」『朝日新聞』9月26日付、1972
福岡県教育委員会『昭和47年度九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査概報』1972
- (14) 福岡県山門郡瀬高町役場『広報せたか』12、1976
- (15) 渡辺正気氏の御教示による
- (16) 村山健治『東山先縄文遺跡』パンフレット、1963
- (17) 村山健治「山門郡の遺跡」『邪馬台のふるさと』第1号、1975
- (18) 『朝日新聞』3月11日付、1973
- (19) 鏡山猛「筑後坂田の縄文土器」『九州考古学』2、1957
久賀愛策「坂田の注口土器」『筑後史学』第5号、1960

- (20) 甲木清「郷土の歴史」『新考三潞郡誌』1953
- (21) 甲木清、前掲、注(20)
- (22) 高倉洋彰「弥生時代副葬遺物の性格」『九州歴史資料館研究論集』2、1976
- (23) 鏡山猛、前掲、注(4)
- (24) 村山健治『邪馬台国』パンフレット、1969
- (25) 渡辺村男『邪馬臺国探見記』1915
- (26) 村山健治、前掲、注(23)
- (27) 森貞次郎「銅剣、銅矛、銅戈の铸造」『世界考古学大系』第2巻、1960
- (28) 鏡山猛、前掲、注(4)
村山健治、前掲、注(23)
- (29) 鏡山猛、前掲、注(4)
- (30) 島田寅次郎「箱式石棺内に於ける合葬遺跡の調査」『福岡県史跡名勝天然記念物調査報告書』第7輯、1932
- (31) 西原一甫『耽奇漫録』1824
- (32) 村山健治、前掲、注(10)
- (33) 村山健治、前掲、注(10)
- (34) 村山健治、前掲、注(11)
- (35) 村山健治『堤古墳群』パンフレット、1967
- (36) 岩崎光、前掲、注(6)
- (37) この中には瀬高町在住の梅野茂芳、壇栄造両氏の御厚意によって寄贈されたものもある。
- (38) 清水寺住職の鍋島隆潤氏の御厚意による。
- (39) 真野和夫「周辺の遺跡、遺物」『狐塚遺跡—福岡県筑後市上北島集落跡の調査』筑後市教育委員会、1970
- (40) 石野義助、前掲、注(3)
- (41) 石松好雄、前掲、注(12)
- (42) 佐賀県教育委員会『おつぼ山神籠石』『佐賀県文化財調査報告書』第14集、1965
- (43) 西谷正、前掲、注(13)

※注 周辺遺跡の先土器～弥生時代については、西谷正「山門郡の考古学」『九州文化史研究所紀要』第21号、1976の引用による。

また、大道端遺跡の概要については、これまでに次のような関連文献があり、合せて参照されたい。

- ・西谷正「ヤマト発掘」『ふるさとの自然と歴史』第13号、1972
- ・西谷正「続ヤマト発掘」『ふるさとの自然と歴史』第18号、1972
- ・西谷正「発掘現場紹介—大道端遺跡」『教育福岡』第25巻第11号、1972
- ・西谷正「大道端遺跡の問題点」『筑紫古代文化研究会会報』第13号、1972
- ・西谷正「福岡県大道端遺跡の調査」『考古学ジャーナル』第75号、1972

Ⅱ 調査の経過

大道端遺跡の発掘調査を実施した端緒は、読売新聞記者の原茂生氏から女山でかつて住居跡や出土品が見つかったことを知らされ、1972年2月に現地を踏査したのが最初である。その後3月に入り、地元で永年にわたって郷土史の研究に情熱を傾けていられる村山健治氏の案内を受けて女山付近を踏査したときにも、かつて出土品を見たという場所を教わった。それらの出土地点は、いずれも縦貫道の予定地を挟んで両側に位置していたので、縦貫道用地内にも当然のこととして埋蔵文化財が発見される可能性が強く、当該地に対する発掘調査の必要性が痛感された。

村山健治氏の御教示により、女山から草葉地区にわたって土器類の散布する南北約700mの間に対して、4月10日～4月23日までに予備調査を行なった。予備調査では幅3mの試掘溝（トレンチ）を道路用地内に縦横に設定した。南北方向（STA 192+80～200+60）には道路用地内の中心線に沿い約700mのトレンチを、東西方向（STA 195+80～199+20）には、これと20mごとに直交するトレンチを設定した。この結果、女山地区の南北約300mにわたる範囲において、古墳時代後期を中心とする竪穴式住居46軒が確認されたので、住居跡の分布する全域にわたって、4月24日から9月30日まで本格的な全面調査を実施した（Fig. 9,10）。

遺跡の調査関係者は次のとおりである。なお、整理期間中文化課嘱託の岩瀬正信氏から多大の指導・助言をいただき、遺物の実測・製図には、中島倫子・橋本啓子・木川雅樹・木川恵子の4氏の助力を得た。

総 括 福岡県教育委員会

教 育 長	森 田 實	教 育 次 長	西 村 太 郎
文 化 課 長	古 川 善 久	文化課々長補佐	管 隆
文化課々長技術補佐	渡 辺 正 気	文化課々長技術補佐	藤 井 功
文化課調査係長	松 岡 史		

庶 務 会 計

文化課庶務係長（前任）	姫 野 博	文 化 課 主 事	小 川 浩 一 郎
文化課庶務係長	前 田 栄 一	文 化 課 主 事	植 田 實

発 掘 調 査 員

文化課技術主査	西 谷 正	文 化 課 技 師	森 田 勉
---------	-------	-----------	-------

発掘調査補助員

馬田 弘稔	高田 一弘	山本 信夫	岩崎(佐土原) 逸 男	菊地 法信
渡辺由紀子	永利真由美	豊田 芳枝	高田 弘信	鹿子島愛里
井沢 洋一	山本 光子	杉野 悦郎	山崎 謙	関 晴彦

日本道路公団福岡支社

支 社 長	吉 田 喜 市	工 務 課 長	政 野 光 男
副 支 社 長	寺 本 貢	技 術 第 一 課 長	田 尻 賢 英
総 務 部 長	白 石 孔 美	技 術 第 二 課 長	権 藤 那 彦
総 務 課 長	岩 本 晴 美	瀬高工事々務所 所 長	飛 永 良 一

瀬高町教育委員会

教 育 長	浜 武 健 二 郎	次 長 兼 総 務 課 長	樺 島 水 城
社 会 教 育 係 長	坂 田 智 幸	係 員	壇 立 巳

地元協力者

瀬 高 町 長	佐 田 進	女 山 地 区 々 長	今 村 栄
公 民 館 々 長			
館 員	倉 吉 啓 介	本 吉 地 区 々 長	田 島 十 次 郎
瀬 高 町 長	由 留 部 英 雄	筑 後 郷 土 史 会	村 山 健 治
記 念 館 々 長		研 究 会	
草 葉 地 区 々 長	河 野 勝 次	現 場 本 部	野 田 広 稔



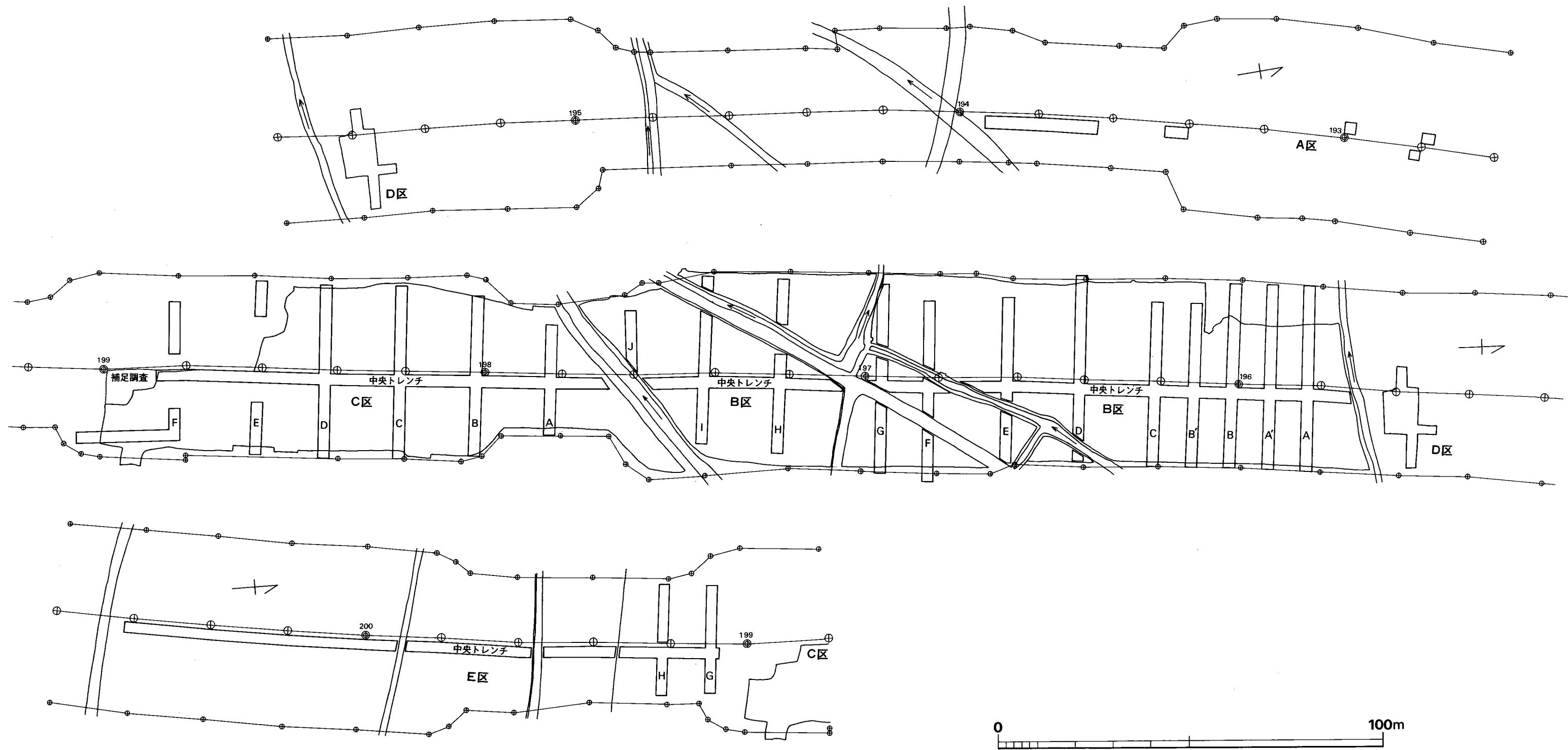


Fig. 8 大道端遺跡A~E区トレンチ配置図(縮尺1/1,000)



Fig. 10 大道端遺跡周辺地形図(日本道路公団図より作成 縮尺1/2,000)

15/15/15

Ⅲ 調査の概要

発掘調査を行なった範囲は延長約700mに及ぶので、適宜A～Eまでの小地区に分割し、調査の順に地区名を表示した。したがって地区名が多少前後するところもあるが、北から順にA・D・B・C・E区とした。なお、B・C区は現在の小河川を境としてこれより北側をB区、南側をC区と分けた (Fig. 10)。

遺構の番号は発掘調査順に付したために、場所によっては近接する遺構の間に番号がとび離れたものもある。また、予備調査の際に堅穴式住居と誤認して番号を付したものもあり、これらはそのまま欠番とした。

調査した範囲ではそれぞれの地区について数層の間層をかむ所もあるが、全体をみれば大きな土層の変化はなく、次のⅠ～Ⅴ層に大別される。

第Ⅰ層 褐色粘質土層 (表土及び耕土層)、地表下約0.3mまで。

第Ⅱ層 黄褐色粘質土層 (水田の床土層)、地表下約0.4mまで。

第Ⅲ層 茶褐色粘質土層、地表下約1.2mまで。

第Ⅳ層 青灰色砂質土層、地表下約1.5mまで。

第Ⅴ層 青灰色砂礫層、地表下約1.5m以下。

第Ⅰ・Ⅱ層は近世以降の耕作による攪乱土であり、第Ⅲ層は遺構面で、弥生後期から歴史時代までの遺構がこの上面から検出された。ただし、堅穴式住居の断面は全体的に浅いものが多く、後世に上面を幾分か削平されたようである。また、第Ⅲ層の内部には縄文時代中期から弥生時代中期までの遺物を包含するが、これらの生活面は検出されなかった。第Ⅳ～Ⅴ層は無遺物層で、遺構などもまったく認められない。第Ⅲ～Ⅴ層は扇状地の形成過程でできた自然堆積層と考えられる。

A・E区は予備調査の際に試掘溝を入れたのみで、遺構はほとんど検出されなかった。E区では、C区の堅穴式住居群の南端から南方へ約60mのところにある現在の畦畔と水路が東西方向に通っているが、この下層から別の畦畔と水路が認められ、条里制の遺構と思われた。

A区では須恵器・土師器・陶器・土錘 (Fig. 11) が、E区では須恵器・土師器・石器などが検出された。

B・C区では予備調査の際に多数の遺構が認められ、現在使用されている道路・水路などを残して、道路用地内全域にわたって発掘調査を行なった。この結果、B区では堅穴式住居108軒と溝6条、小ピットなど914個が検出され、C区では堅穴式

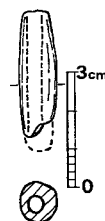


Fig. 11

A区出土土錘実測図
(縮尺1/2)

住居41軒、溝14条、小ピットなど1072個、土壇3基、井戸1基が検出され、B・C区から土器（須恵器・土師器・陶磁器・縄文土器・弥生土器など）石製品（打製石器・磨製石器・玉類など）、金属製品（各種の鉄器・耳環など）、および鉄滓、土製品（土錘など）が多数にわたって出土した。

D区では168㎡の範囲を発掘調査し、機能不明の大形堅穴1基、溝3条、小ピットなど約10個あまりが検出され、機能不明大形堅穴からは須恵器・土師器が多量に出土した。

以上のように、検出された遺構のうち堅穴式住居は弥生後期、古墳後期～奈良前期（7世紀末）に属するものであるが、これらの分布はほぼB・C区に限定され、この両端部が集落の南北の限界を示すものと思われる。また、集落の東西の範囲は未調査のために確証することはできないが、東は女山地区の山麓部に接する微高地にまで及ぶものと推定される。



()は推定

B区 No. 20~39

番号	位置	形態	時期	規模 m	面積 m ²	主軸方位	炉の場所	カマド			焼土	溝	貯蔵穴	備考
								場所	奥行×巾cm	支脚 形態				
20	N 165 W 10	(方形)	古墳後期	3.6×										西半は道路下
21														欠番
22														欠番
23	N 100 W 5	方形	古墳後期	4.6×4.3	19.8	N10°E	北壁中央 やや西寄り		把手付 鉢		あり カマド内			
24	N 180 O	方形	古墳後期	3.4×3.6	12.2	N20°E	北壁中央	57×50	石	B	あり カマド内			
25														欠番
26	N 103 W 28	(方形)												後世の溝(小川)に切られ一部残る
27	N 110 W 25	隅丸 長方形	弥生後期	3.4×4.3	14.6	N47E	中央部				あり		P3・P4 ?	
28	N 119 W 12													後世の溝(小川)に南半を切られる
29	N 124 W 13	方形	古墳後期 ~奈良?	3.9×3.8	16.0	N10°E	北壁中央	(50+)× (70+) (巾70+?) ×(50+?)	高杯	C?				
30	N 126 W 30	長方形		6.2×3.4	20.6	N40°E	中央部						P7	
31	N 130 W 20	方形		4.1×3.9	15.6 17.6	N77°W	西壁中央				あり			32→31
32	N 125 W 20	(方形)	古墳後期 ~奈良?	3.5×										32→31
33	N 130 O	(方形)									あり P1南東			
34	N 140 W 5	方形	古墳後期 ~奈良	4.0×3.9	15.6	N18°E							P8	14→35→34
35	N 140 W 5	方形	古墳後期 ~奈良	3.6×3.1	11.2	N27°E	北東壁 中央	20×20		C	あり カマド内			14→35→34
36	N 128 W 14	方形	古墳後期 ~奈良	4.0×3.5	14.0	N13°E	北壁中央 作り出し		壺?	C				・37→36 ・支脚として壺を使用?
37	N 128 W 15	方形		3.6×3.0	10.8	N15°E	北壁中央 やや西		河原石	B(?)				37→36
38	N 208 W 38	方形		4.7×										38→39
39	N 204 W 35	台形		W3.6・E2.6 S3.2・N3.6	10.4									38→39 40→39

() は推定

B区 No. 40~59

番号	位置	形態	時期	規模 m	面積 ㎡	主軸方位	炉の場所	カマド			焼土	溝	貯蔵穴	備考
								場所	奥行×巾cm	支脚形態				
40	N 205 W 35	方形	古墳後期 ?	4.6×4.1	18.6	N57°W		北西壁 中央						40→39
41	N 200 W 25	長方形		(4.3)×(5.7)	(24.5)	N2°W								
42	N 209 W 11	方形		2.9×2.7	7.8						あり			43→42
43	N 210 W 9	(方形 or 長方形)		5.2×										43→42
44	N 225 W 5	方形	古墳後期 ~奈良	(4.5)×(4.6)	(20.7)	N55°W					あり	P12?		44→45
45	N 220 O	方形		4.9×5.1	25.0	N52°W		北西壁			あり			44→45
46	N 195 W 5	長方形	古墳後期 ?	4.8×5.7	27.4	N65°W		北西壁 中央			あり			59→46
47	N 203 W 6	長方形	古墳後期	5.1×4.4	22.4	N57°W								51→47→溝
48	N 220 E 4	(長方形)	古墳後期 ~奈良?	3.7×(4.3)	(15.9)	N54°W		北西壁	70×120			南西壁下の 南寄り	P9	溝→48
49	N 215 E 5	(長方形)	古墳後期											49→52
50	N 210 O	長方形	古墳後期 ~奈良											
51	N 205 W 5	(長方形)	古墳後期 ?	(5.5)×(4.5)	(24.8)									51→47
52	N 215 E 4	台形	古墳後期 ~奈良?	NW3.4・SW3.3 SE3.5・NE3.9	(12.2)	(N48°W)								49→52
53	N 230 E 10	(方形)	古墳後期 ?	4.3×							あり			53→54
54	N 230 E 10	(方形)	古墳後期 ?	3.1×										53→54
55	N 190 W 30	方形		3.8×3.9	14.8	N9°W								
56	N 190 W 37	不整形	古墳後期											2軒重複か?
57	N 185 W 33	(方形)												北西隅のみ検出
58														欠番
59	N 195 W 10	方形	古墳後期 ~奈良?	4.8×4.8	23.0	N57°W					あり			59→46

()は推定

B区 No. 60~79

番号	位置	形態	時期	規模 m	面積 ㎡	主軸方位	炉の場所	カマド			焼土	溝	貯蔵穴	備考
								場所	奥行×巾cm	支脚 形態				
60	N 183 W 12	方形	古墳後期 ~奈良?	4.6×4.8	22.1	N57°W		北西壁						
61	N 168 W 30	方形		4.7×4.5	21.2	N70°W					あり 西壁や 南寄り			
62	N 150 W 30	(方形 or 台形)		3.9×		(N20°E)					あり 北壁			
63	N 145 W 35	長方形		3.6×4.7		N31°E						P5?	63→64	
64	N 140 W 37							北東壁			C			63→64
65														欠番
66	N 155 W 37	(方形 or 長方形)												北東隅のみ検出
67	N 157 E 10	方形		4.0×(3.7+) 4.0×(3.7+)										
68	N 145 E 10	方形	古墳後期 ~奈良	3.7×3.4	12.6	N71°W		西壁中央や や北寄り	70×18	石	B	あり カマド内		
69	N 165 O	方形	古墳後期 ?	4.8×4.2	19.9	N12°W						P3P4間 や側 北側		70→69
70	N 168 E 5	方形	古墳後期 ?	3.2×2.9	9.1	N11°E						全面		
71	N 145 W 20	方形		2.8×2.8	7.8	N74°W								
72	N 145 O	方形	古墳後期 ?	3.6×3.4	12.2			北東壁 中央部	60×		C	カマド 内		72→74
73														欠番
74			古墳後期 ?											72→74
75	N 145 E 5	不整形		2.9×2.2										住居跡とは考えられない
76														欠番
77	N 308 W 3		弥生後期			(N39°W)								77→83
78	N 282 E 5					N18°E		北壁中央			B?			78→79 78→80
79	N 284 E 7	方形		4.5×4.0	18	N12°E		北壁中央			B?			78→79

()は推定

B区 No. 100~119

番号	位置	形態	時期	規模 m	面積 m ²	主軸方位	炉の場所	カマド			焼土	溝	貯蔵穴	備考
								場所	奥行×巾cm	支脚形態				
100													欠番	
101	N 198 E 4		古墳後期 ?											
102	N 204 E 10													
103													欠番	
104	N 264 E 6	方形		3.6×3.2	8.5	N9°W				B?			105→104	
105	N 262 E 7			4.8×11.0?									105→104	
106	N 263 W 5	方形		5.0×4.7	23.5	N74°W	西壁中央 やや北寄り	80×40		B	カマド内			
107													欠番	
108	N 256 E 7	方形	古墳後期 ~奈良	3.8×4.1	15.5								108↙109 ↘110	
109	N 256 E 2	長方形		3.9×3.3	11.8	S26°W							↗108 109→110 ↘105	
110	N 259 E 3												108→ 107→110	
111	N 253 O	方形	古墳後期 ~奈良?	3.6×3.9	14.0	N66°W	西壁中央			B?	円形状 径 25		112→111	
112	N 250 E 1	長方形	古墳後期 ~奈良?	3.5×4.8	17.0	N75°E	西壁中央						112→111 113↘ 114→112 115↗	
113	N 251 E 4												113→112	
114	N 149 E 4		古墳後期 ?										↗112 114→115 ↘4号溝	
115	N 247 E 2	長方形	古墳後期 ~奈良?	4.1×3.2	13.1	N99°W	西壁 南寄り			B?			115→112	
116	N 243 W 1	方形					西壁中央						116→120	
117	N 243 E 3	(方形)		2.8×3.3	9.2		西壁中央			B?			117→115	
118	N 237 O	方形		7.0×5.7	39.9	N10°E					南壁中央 部 P2、P3 間中央部		118→122 118→123	
119	N 245 W 5	方形		5.3×4.8	25.4	N79°W								

()は推定

C区 No.13~33

番号	位置	形態	時期	規模 m	面積 m ²	主軸方位	炉の場所	カマド			焼土	溝	貯蔵穴	備考
								場所	奥行×巾cm	支脚 形態				
13														欠番
14	S 5 E 5	(方形)		W 3.5・S 3.0 N(3.6)・E 3.5				北壁中央?	75×100		C ?	あり		21→14 壁8~18cm残
15	N 65 W 10	方形	古墳後期	3.8×3.8	14.4			西壁中央	100×74		C	あり		壁12cm残
16	S 15 E 10	台形	古墳後期? ?	N 3.1・S 3.2 E 2.8・W 3.5	9.9			北壁中央の東寄り	79×60		C	あり	長方形 P7?	壁30cm残
17	S 15 E 5	隅丸方形	古墳後期	N 3.9・S 3.3 E 3.8・W 4.1	14.3	N13°E		北壁中央やや東寄り			B		P7?	
18	S 15 E 15	台形	古墳後期? ?	N 3.3・S 2.6 E 3.1・W 3.0	9.0									壁28cm残
19	S 15 O	方形	古墳後期	2.8×2.5	7.0			西壁中央						壁5cm残
20	S 5 O	隅丸方形	古墳後期 ~奈良	N 3.0・S 3.1 E 3.8・W 3.5	11.2	N65°W		西壁中央よりやや南寄り	66×90		B	あり	P3 貯蔵穴様の掘り込みあり	壁15~20cm残
21	S 5 E 10	長方形	古墳後期? ?	3.5×4.0	14.0									北壁の東端には1.05×0.55の台形の張り出しを持つ、壁14~20cm残14と重複
22	N 15 O	長方形	古墳後期	4.8×2.6	12.5	N80°W								22→23 壁5~10cm残
23	N 15 O	隅丸方形	古墳後期	3.3×3.6	(11.8)	N65°W			東西壁にはない					22→23→24、28号とは不明 壁15~17cm残
24	N 20 O	長方形	古墳後期 ~奈良?											23→24 28→24 壁5~10cm
25	N 20 W 5	方形	古墳後期	N 3.6・W 3.9 S 3.6・E 3.6	13.5	N23°E		北壁中央						北壁中央に竪穴から若干の張り出しがある
26	N 25 O	隅丸方形	古墳後期	4.0×3.9	15.6	N5°E								東壁中央には0.4×1.5程の長方形の張り出しを持つ
27	N 25 W 5	方形		S 3.5・E 4.0 N 3.4・W 3.7	14.0	N6°W								北壁の南半部に1.0×1.9程の三角形の突出部がある
28	N 20 O	方形		N 3.9×W 4.3	(16.8)	N26°E								28→24、23とは不明、壁10~19cm残
29	N 25 E 10	方形	奈良	S 4.8×W 4.5	21.6	N87°W		西壁中央	70×80		B	あり		東側は調査区外で東壁を未検出 壁25cm
30	N 35 O	方形	古墳後期 ~奈良	4.7×4.2	19.7	N10°E		北壁中央	88×110		B	あり	南北壁の一部を除き、壁に沿って周溝がある	P8の東側からは径12cmの礫が出土
31	N 35 0	隅丸方形		N 3.1×W 2.9	9.0	N14°E		北壁中央	75×55		C			南東隅は溝1aと重複 壁5cm
32	N 80 E 10													東半部は調査外 壁4~8cm残
33	N 65 E 10	長方形	奈良?	N 3.2・S 3.6 E 4.2・W 3.9	13.7	N72°W		西壁中央やや北寄り	95×65		B	あり		溝1a→33 壁16~24cm残

住居跡および竪穴一覧表について

- 位置は Fig ①を参照。
 - 規模は1/20原図より算出のため、小数点第2位以下は四捨五入した。
 - 面積は小数点第2位以下を四捨五入した。
 - 主軸方位は長軸またはカマド（焼土）の中心を通る線とした。
 - カマドの形態は下の分類によるが、あくまで便宜的なものである。
- A類 焼土が壁よりも外方に中心部分のあるもの
 B類 焼土の中心部分が壁の内側にあるもの
 C類 A類とB類の中間的なもの

土器実測図について

- 須恵器の断面を黒、その他は白とした。
- 床面出土またはカマド内（および周辺）出土の土器は、実測図中の番号を丸で囲んで示した。
- スクリーン・トーンの表示は下の分類による。
 - 1 丹塗り
 - 2 黒色
 - 3 赤褐色等の薄い膜（化粧土）

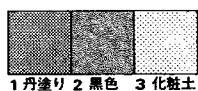


Fig. 12

土器のスクリーン・トーンによる表示

IV 遺構と遺物

A 弥生時代の遺構と遺物

次節で述べる古墳時代の遺構と遺物に比べると、弥生時代のそれらは非常に少なく、B区で住居跡8軒、C区で住居跡1軒および溝1条を検出し、その他に小ピットを多少認めた。しかし、小ピットは群をなさず、また掘立柱建築物との関係で認められるようなまとまりでもない。

以下、順次説明を加えるが、遺構・遺物を含めての時期決定等はすべて小結で言及する。

B区第3号住居跡 (Fig. 13, PL. 56)

東壁および南壁を古墳期の第4号住居跡に切られており、支柱穴および炉跡は検出していない。3.85×5.05mをはかり、面積19.4m²を有する長方形プランを呈する。主軸方向はN40°Eとなる。

遺物 (Fig. 14・15, Tab. 8, PL. 56)

甕(1~6) 1・2は口縁部をヨコナデし、胴部外面はハケ目状整形痕を残し、内面は丁寧なナデ整形で仕上げる。2はとくに器壁が薄く、3につづくものと思われる。4は前者と異なった口縁形を呈し、上面が大きく凹み、器内面へも大きく突き出す。胴部外面に粗いハケ目状整形痕を残し、屈折部への強いヨコナデにより若干の稜をなす。内面には丁寧なナデを施す。

以上のように、炉跡・ベッド状遺構等は検出されず、また図示し得る資料は甕形土器のみであるが、ほかに破片が約200個近くあり、これらに須恵器・土師器は含まれない。弥生期に属するものとする。

Tab. 8 B区第3号住居跡出土土器一覧()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	Y 甕	略 完	(28.2)	27.4	(25.7)胴上位	砂粒を含み、焼成良	黄褐色	器周残 2/3
2	Y 甕	胴下半欠	(32.1)		(29.7)胴上位	砂粒を多く含み、焼成良	黄褐色	器周残 1/3
3	Y 甕	胴下半部				砂粒を多く含み、焼成良	茶褐色	
4	Y 甕	胴下半欠	(34.7)		(31.6)胴上位	砂粒を含み、焼成良	茶褐色	器周残 1/4
5	Y 甕	底部				細砂を含み、焼成良	内面 灰褐色 外面 褐色	
6	Y 甕	底部				砂粒を多く含み、焼成普通	褐色	

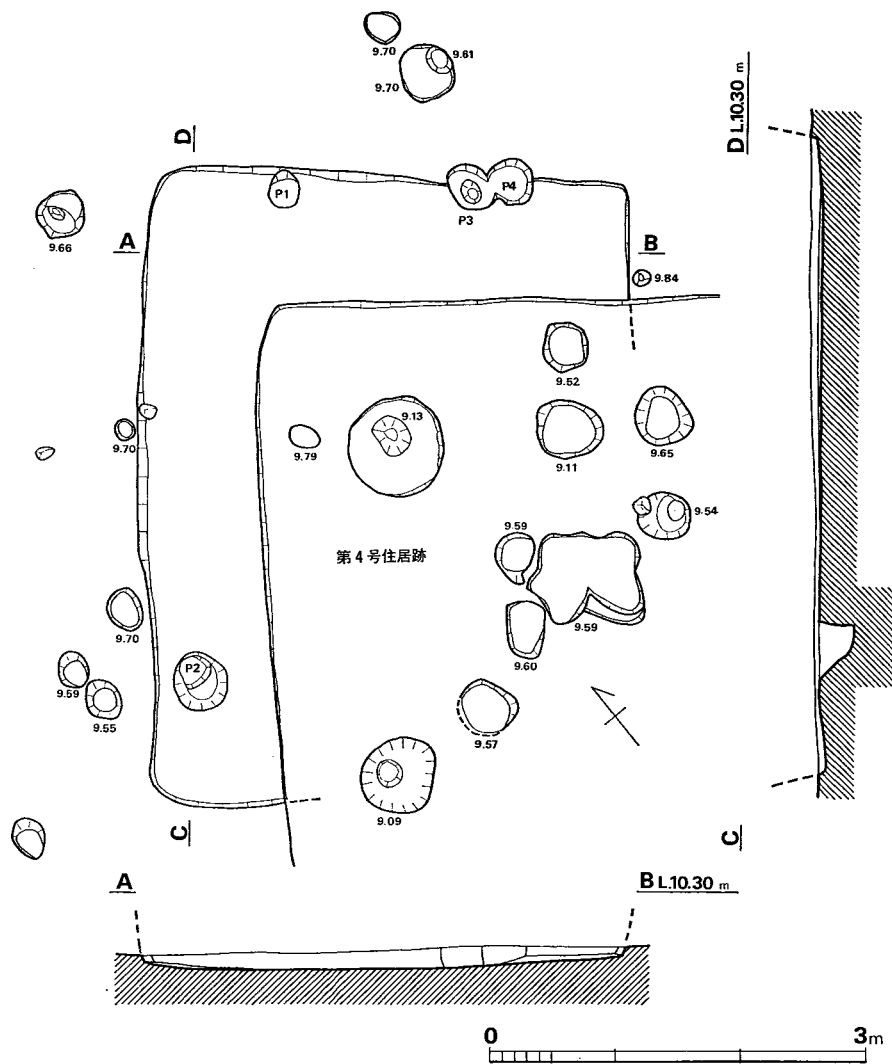


Fig. 13 B区第3号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)

P 1 (-8.0) · P 2 (-32.0) · P 3 (-10.0) · P 4 (-11.0)

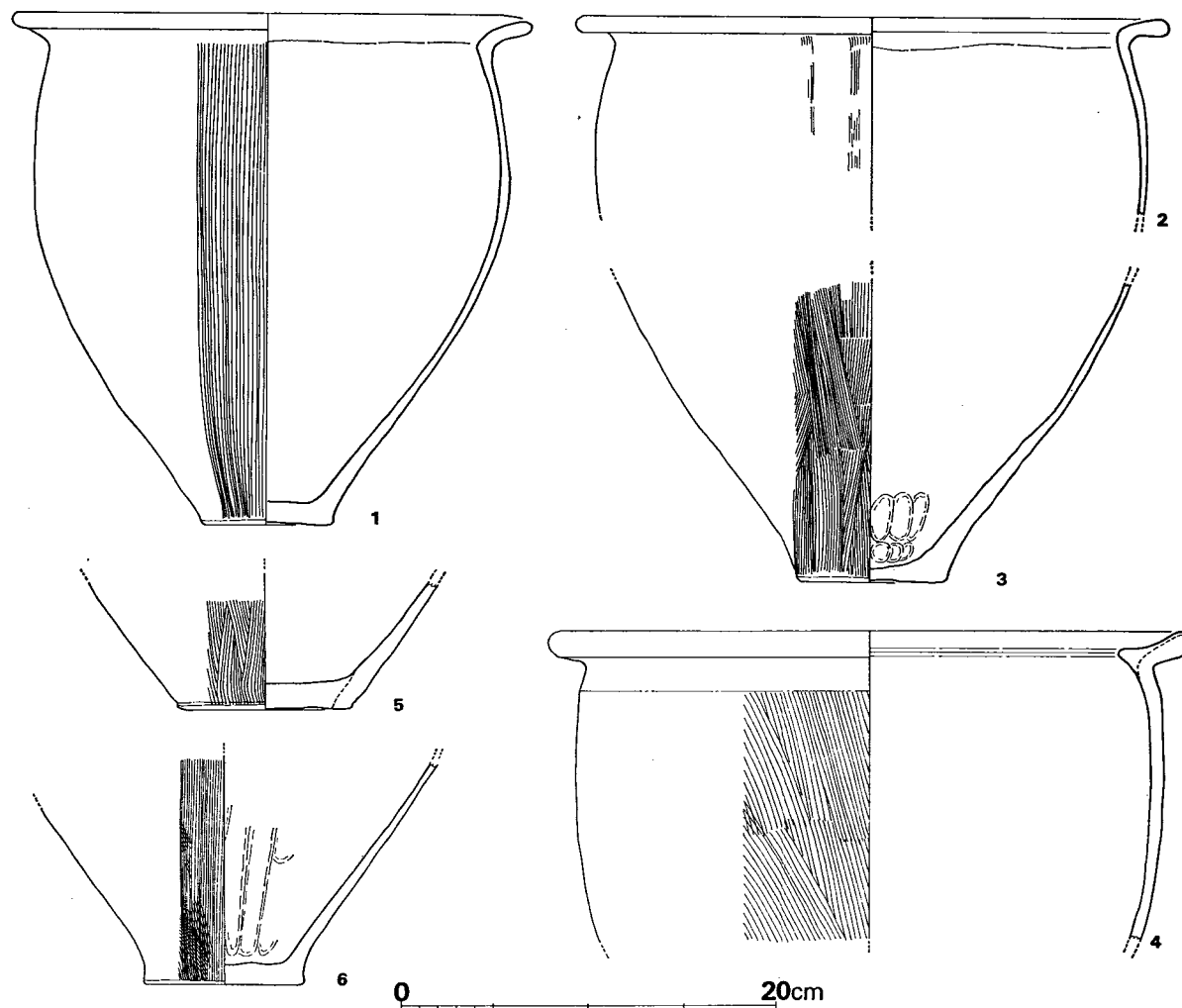


Fig. 14 B区第3号住居跡出土遺物実測図 (I) (縮尺1/4)

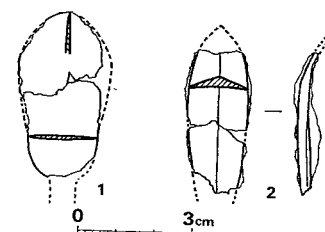


Fig. 15 B区第3号住居跡出土遺物実測図 (II) (縮尺1/2)

B区第7号住居跡 (Fig. 16, PL. 30)

東壁と南壁は一直線であるが、北壁は二段に差が認められ、また、西半部が削平されているなど平面プランの確定はできないが、ここでは一応、新旧二つの住居が切り合っている可能性を示して、図上による復元を行なってみたい。最北壁と北壁コーナー部をa期の壁面として、東壁と南壁で旧期の平面プランとすれば、 $5.75 \times 3.05m$ で、面積 $17.5m^2$ の長方形を呈することになる。この期の支柱穴は、P1とP4内の南寄りの部に位置することになり、最北壁～P1間は $1.70m$ 、P1～P4間は $2.35m$ 、P4～南壁間は $1.75m$ 前後となる。b期は内側の北壁を使用したものとすれば、支柱穴はP1・P2・P4のいずれかであり、南北×東西は $5.45 \times 約4.5m$ で面積は約 $24.53m^2$ 前後である。面積比からいえば、a期からb期への拡張とすることもできよう。P3は貯蔵用か。いずれも主軸方向は $N21^\circ E$ となる。遺存壁高 $2 \sim 18.5cm$ 。なおP4の中

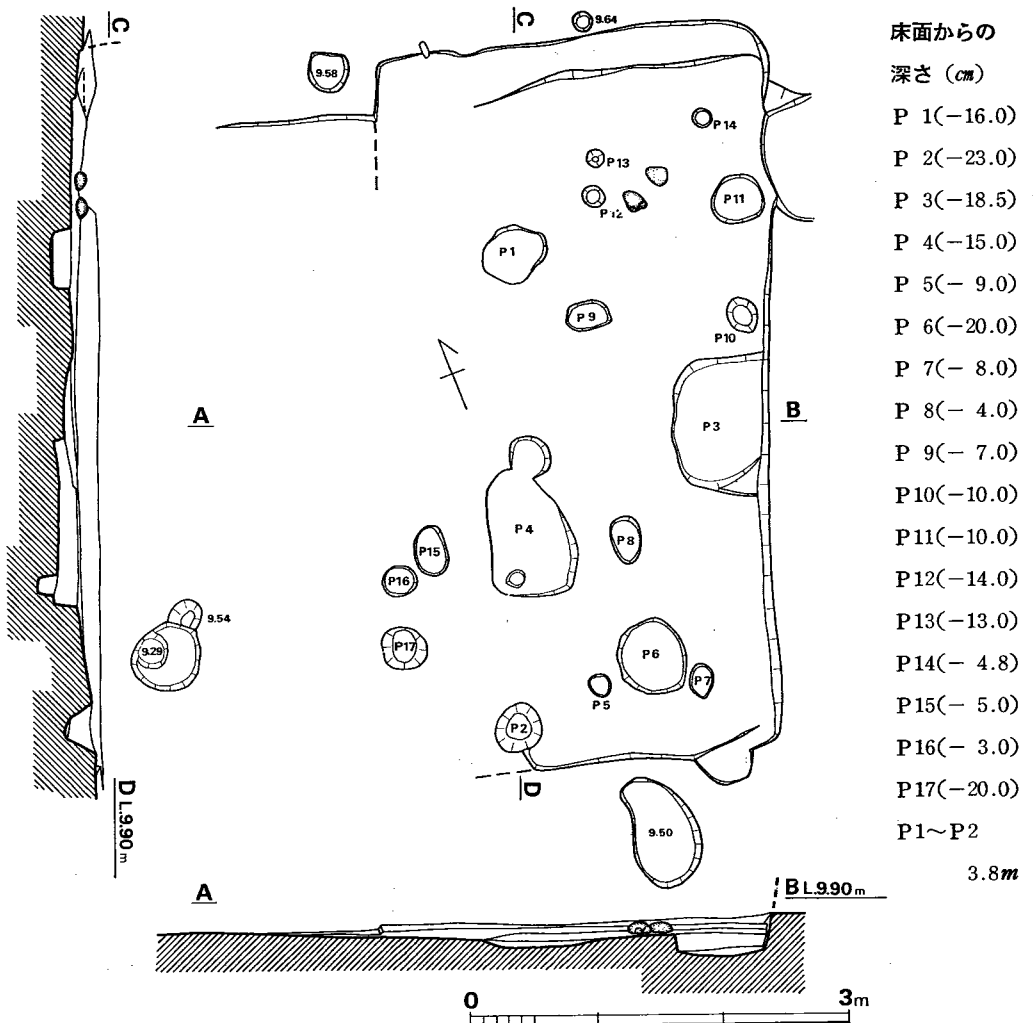


Fig. 16 B区第7号住居跡実測図 (縮尺1/60)

で北寄りの部所はb期の炉跡と考えてもよい。

遺物 (Fig. 17, Tab. 9)

壺(1) 頸肩部に楕目状沈線を施し、肩部に楕目波状文が一周するが整然としたものではない。球形に近い胴部外面は細かいハケ目状整形痕をそのまま残し、内面は整形後ナデ調整を丁寧に施すが、接合面の段差は残っている。

甕(3) 胴下半部片で、内外ともに剥落が著しいが、一部にハケ目状整形痕を認め、また、底部近くは指による成形痕を残す。底部近くで器壁は厚くなるが、底部は非常に薄手に仕上げる。底部外面は下ぶくれ気味で、この時期の特徴をよく示している。

壺(2) 口縁はヨコナデ整形し、胴部内面は底部近くまで粗いハケ目状整形痕を残す。外面は磨滅しているが、一部整形痕を認める。底部内面はその最下部のみナデを施す。

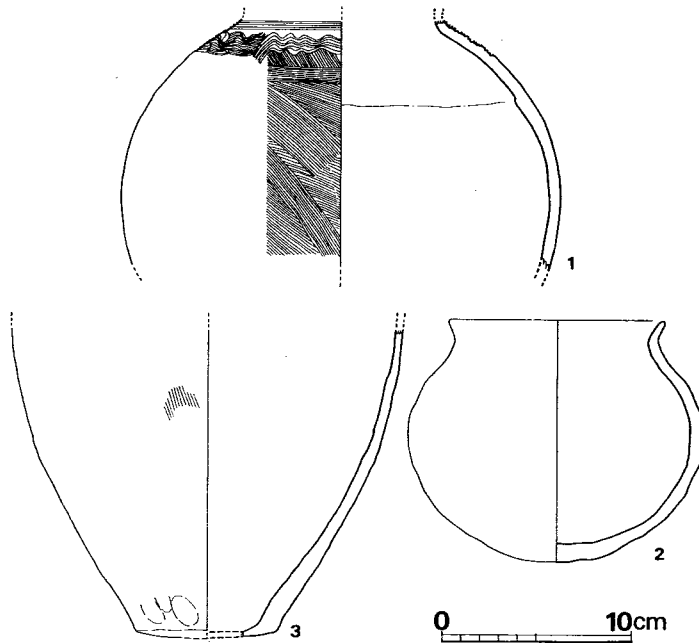


Fig. 17 B区第7号住居跡出土土器実測図(縮尺1/4)

Tab. 9 B区第7号住居跡出土土器一覧()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	Y 壺	胴上半片			(23.8)胴中位	砂粒を若干含み、 焼成良	茶褐色	器周残 1/3
2	Y 壺	復原完	(11.5)	12.8	(15.8)胴中位	砂粒を含み、 焼成良	灰黄色	
3	Y 甕	胴下半片				砂粒を若干含み、 焼成良	暗黄褐色	器周残 1/6

B区第10号住居跡 (Fig. 18, PL. 13)

北東隅を農道の一部で切られ、遺存壁高2.5~13cmであることから、南西隅および南東隅の張り出し部をベッド状遺構と考える。また支柱穴をP1・P2とすれば、3.3×5.7mの長方形プランを呈することになる。中央部に狭い範囲で焼土を検出した。長軸方向N72°Eを測る。

遺物 (Fig. 19・20, Tab. 10, PL. 13)

甕(1)口縁部外面はハケ目状整形後ヨコナデ調整を施すが、内面は整形のみである。口唇部は指先による引き伸ばし的ヨコナデ整形が強いため、平坦となりシャープな稜を呈するが、下端部に若干の突起を一周させる結果となり、斜方向にキザミ目を入れる。胴部外面は細いハ

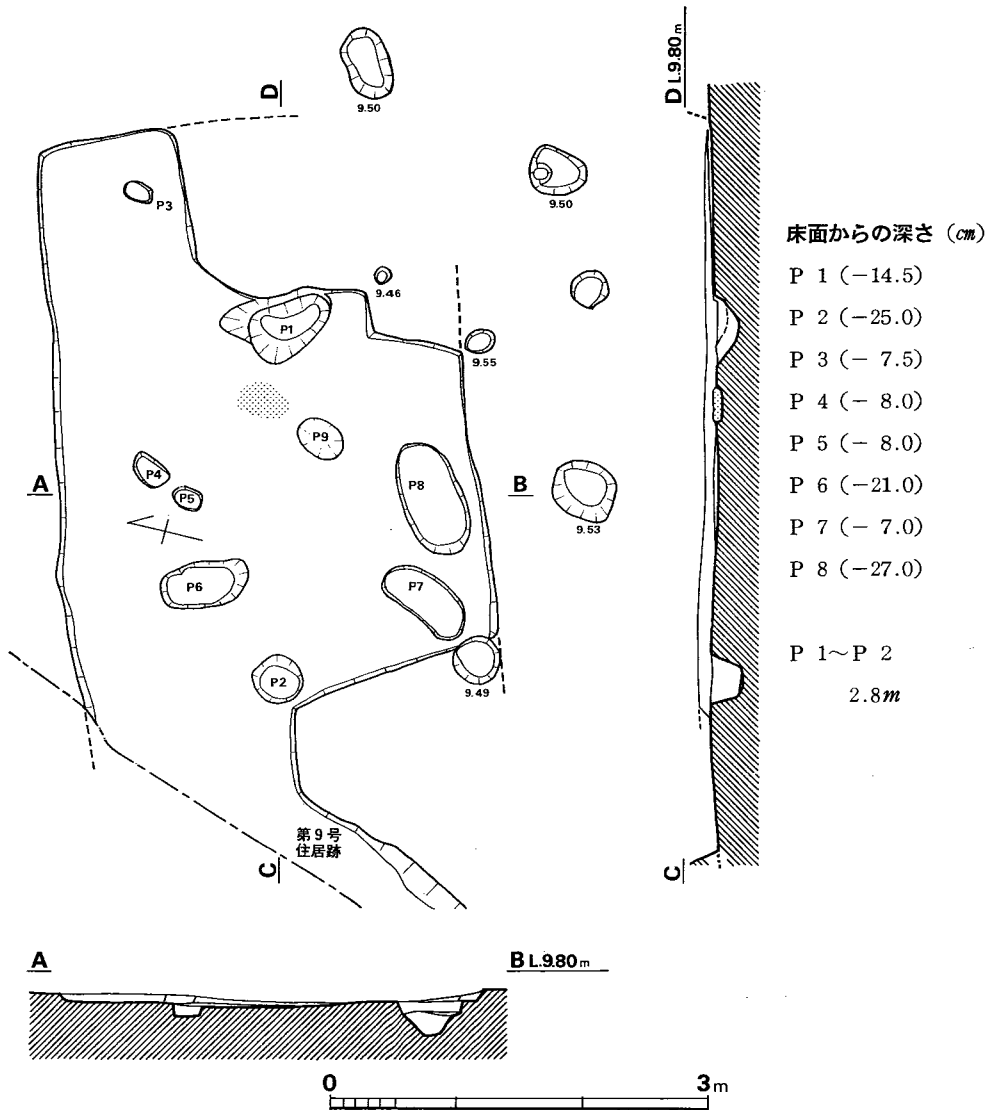


Fig. 18 B区第10号住居跡実測図 (縮尺1/60)

ケ目状整形を施し、内面は最上部に指先による押え成形痕を明瞭に残すが下半部は丁寧なナデ整形を施し、器壁は薄手に仕上げる。

高杯(3)内彎する杯部を成形後、その端部上面にはほぼ直線的に開く口縁部を接合し、その接着面を内側ではヨコナデ整形を丁寧に施すが、外側は若干ナデ整形のみで、その屈折部が著しく稜をなす。全体に磨滅してその他の調整は不明である。

器台(2)ゆるく外彎しつつ開く口縁部は、外面に縦方向のハケ目状整形痕を認め、内面は横方向の整形痕を残すが、ともに磨滅が著しい。口唇部は平坦にヨコナデ整形後、キザミ目を施す。

その他に須恵器の杯蓋、土師器の杯を出土している。

以上のように、ベッド状遺構を有し、弥生時代後期に属するものと考えられる。炉跡は確認されず、須恵器・土師器が混入していた。

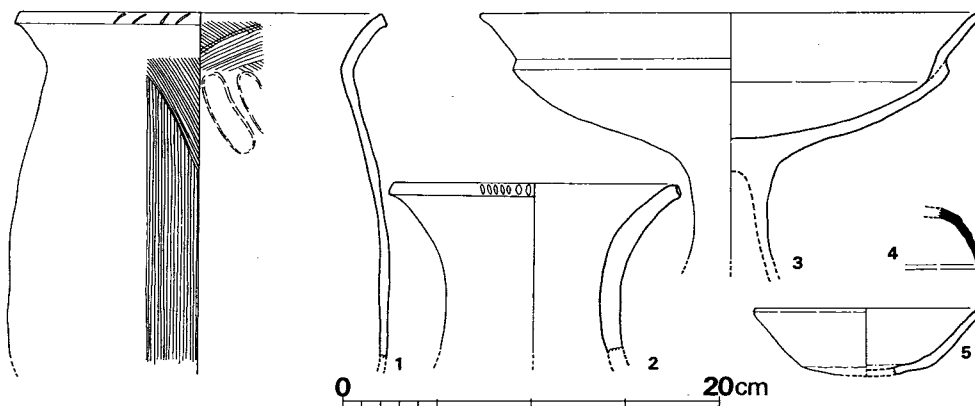


Fig. 19 B区第10号住居跡出土遺物実測図(Ⅰ) (縮尺1/4)

Tab. 10 B区第10号住居跡出土土器一覧()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	Y甕	胴下半欠	(20.6)		20.9 胴中位	砂粒を多く含み、焼成良	黄褐色	
2	Y器台	上半部片	15.5			砂粒を多く含み、焼成良	黄褐色	
3	Y高杯	脚部欠	(26.8)			砂粒を多く含み、焼成普通	淡黄褐色	杯部周残1/3
4	S杯蓋	口縁部片				細砂を含み、焼成良	青灰色	
5	H杯	底部欠	(12.0)	(3.6)		精製胎土で、焼成良	淡黄褐色	器周残 1/3

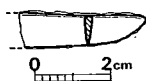


Fig. 20 B区第10号住居跡出土遺物実測図(Ⅱ) (縮尺1/2)

B区第16号住居跡 (Fig. 21, PL. 17)

南東隅の一部を第27号住居跡によって切られているが、東北隅の張り出し部はベッド状遺構であろう。中心部に掘り込まれた炉が検出され、中から焼土が出土した。南壁に比較的大きめのピットがあり、貯蔵用とも考えられる。また、北壁に沿って溝状のものが検出された。支柱穴P1・P2間は約2.8mを測り、3.26×4.0mで、面積15.44㎡のおよそ長方形プランを呈し、主軸方向はN87°Wである。遺存壁高6～10.5cmを測る。

遺物 (Fig. 22・23, Tab. 11)

甕(1・2)1は、口縁部が胴部から「く」字状に屈折してほぼ直線的に外開きする。口唇部は指先による上下からの引き伸ばしのヨコナデ調整により若干凹みを呈している。外面はハケ

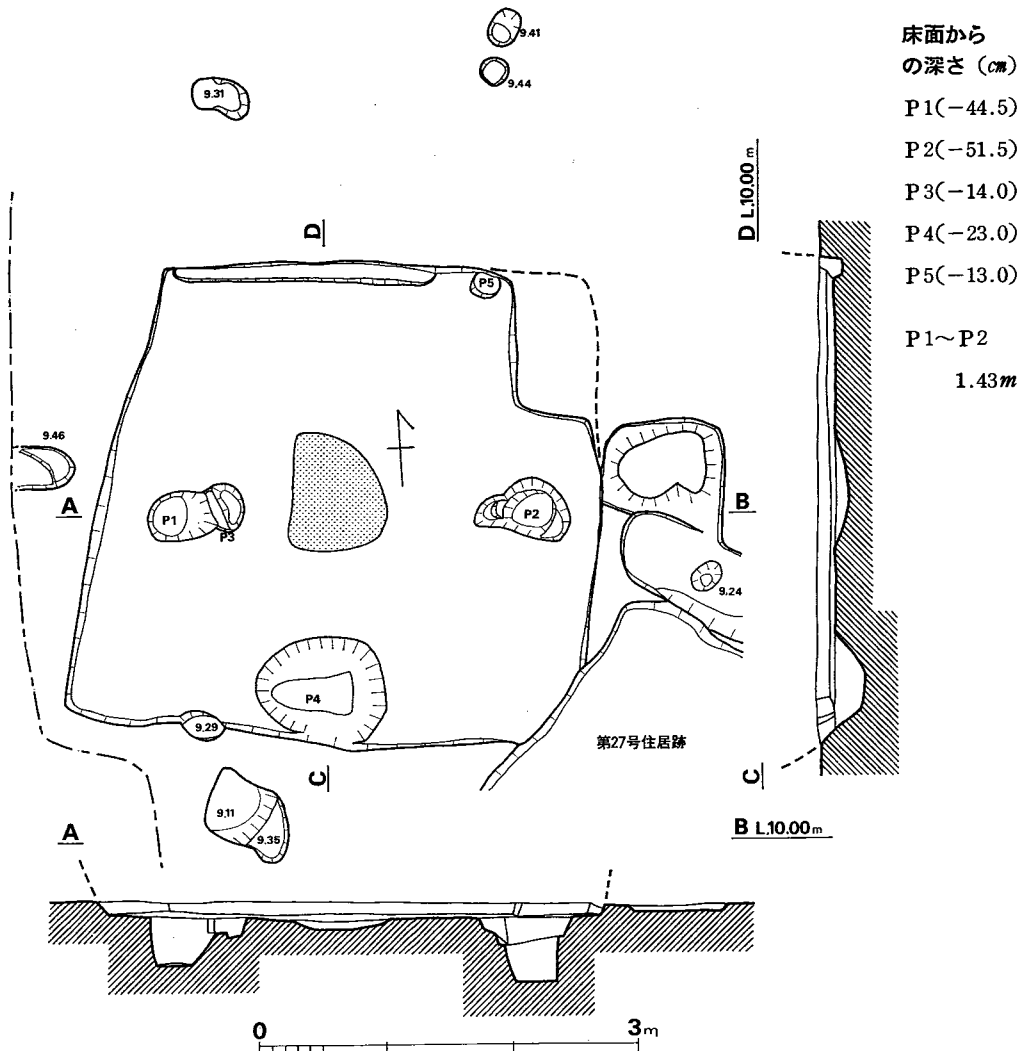


Fig. 21 B区第16号住居跡実測図 (縮尺1/60)

目状整形の後若干ナデを施す部分も認める。内面も同様であるが、より密なハケ目状整形痕である。2は、口縁部が外彎気味に開き、ヨコナデを上下に受けて口唇部はシャープで若干凹みを呈する。外面はハケ目状整形後ナデを施すが、内面は粗い整形痕をそのままに残す。胴部は最上部にタタキ成形痕を残すが、下半部はその後にハケ目状整形を施し、一部ナデ調整を施す。内面には非常に粗い整形痕を残す。

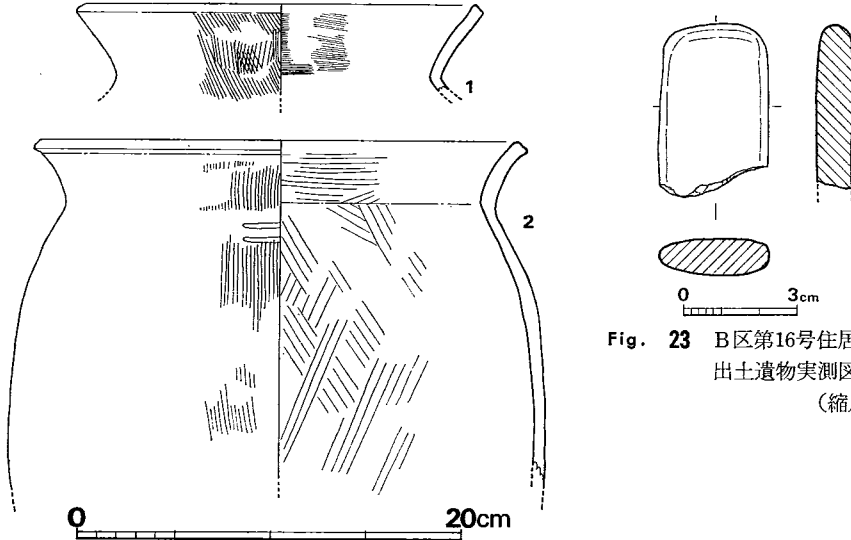


Fig. 23 B区第16号住居跡
出土遺物実測図(Ⅱ)
(縮尺1/2)

Fig. 22 B区第16号住居跡出土遺物実測図(Ⅰ) (縮尺1/4)

Tab. 11 B区第16号住居跡出土土器一覧()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	Y 甕	口縁部片	(23.4)			砂粒を含み、焼成良	黄褐色一部黒褐色	器周残 1/3
2	Y 甕	胴下半欠	24.8		(27.9)胴中位	大粒の砂を含むが、焼成良	内面 黄灰色 外面 黄褐色	器周残 1/2

B区第27号住居跡 (Fig. 24, PL. 18)

第16号住居跡を西壁で切っており、 $3.4 \times 4.3m$ の面積 $14.62m$ を有する隅丸長方形プランを呈する。中央部に若干掘り込まれた炉が検出され、焼土が出土した。東壁にP3・P4のピットが検出され、P4からは石が出土した。貯蔵穴であろうか。支柱穴はP1・P2で約 $3.3m$ を測り、主軸方向はN47°Eである。遺存壁高 $4 \sim 18.5cm$ を測る。

遺物 (Fig. 25, Tab. 12)

甕(2~5) 3は胴部外面の上半部は磨滅しているが、下半部に密なハケ目状整形痕を残し、一部ナデ調整を施す。器内面は丁寧にナデる。2は口唇部を平坦に仕上げ、ほぼ直立した口縁部からゆるやかに頸部に移行する。口縁部外面に一部ハケ目状整形痕を認めるが、器内外面ともに磨滅が著しい。なお、肩部以下胴部にかけてタタキが認められる破片も出土している。

碗(1) 磨滅が著しい。

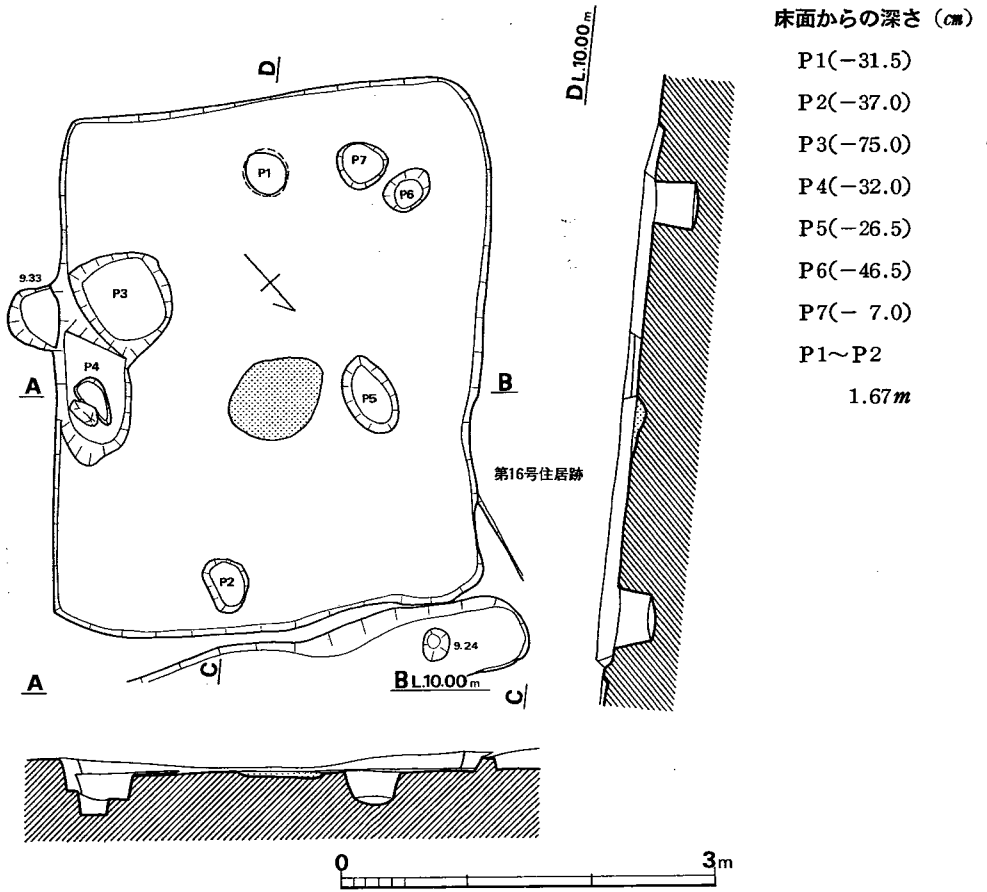


Fig. 24 B区第27号住居跡実測図 (縮尺1/60)

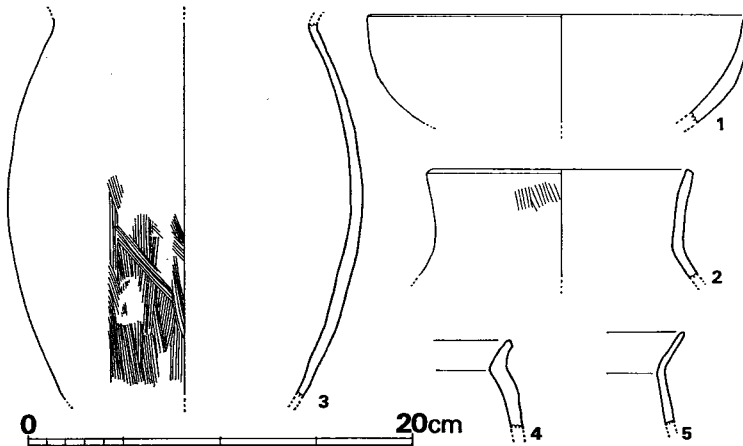


Fig. 25 B区第27号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

Tab. 12 B区第27号住居跡出土土器一覧()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	Y 碗	底部欠	(20.0)			砂粒を多く含み、焼成普通	淡茶黄色	器周残 1/6
2	Y 甕	口頸部片	(13.9)			砂粒を含み、焼成普通	淡茶黄色	器周残 1/6
3	Y 甕	底部欠				砂粒を多く含み、焼成不良	黄褐色	18.7 胴中位
4	Y 甕	口縁部片				砂粒を多く含み、焼成良	黄褐色	
5	Y 甕	口縁部片				砂粒を多く含み、焼成良	淡赤黄褐色	

B区第30号住居跡 (Fig. 26, PL. 20)

6.15×3.35m の長方形プランを呈し、20.60m² を測る。屋内中央の炉跡をはさむ P1・P2 の主柱穴間は 3.2m で、長軸方向は N40°E である。東壁の P7 は貯蔵用のものか。遺存壁高 4 ~ 21cm。

遺物 (Fig. 27, Tab. 13, PL. 20)

甕 (5~7) 6 の口縁部はヨコナデ整形であるが、端部は強いツマミナデが加わり、特徴ある口縁断面形を呈しており、頸屈折部外面も強いヨコナデ整形によって若干凹んでいる。胴部は内外面ともに、粗いハケ目状整形痕をそのまま残す。7 の口縁部は内外面ともにハケ目状整形の後にヨコナデ整形を施し、口唇部のみ上下からの強いヨコナデにより若干凹む。胴部は外面でハケ目状整形のみ、内面は整形後丁寧なナデ調整を施す。

高杯 (3) 杯部に外彎しつつ開口する口縁部の接合部はとくに内面に明瞭な段差を認め、接合時の指押え成形痕を外面に残す。内面および口縁部外面まではヨコナデを施すが、杯部外面に一部ハケ目状整形痕を残す。

碗 (1) 厚い丸味を有した底部から内彎しつつ薄手の口縁に全体をナデて仕上げる。

Tab. 13 B区第30号住居跡出土土器一覧()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	Y 碗	略完	(12.1)	(6.7)		多くの砂粒を含み、焼成は普通	黄灰褐色	
2	Y 鉢	底部				精製胎土で、焼成良	赤褐色	
3	Y 高杯	杯部片	(36.6)			精製胎土で、焼成良	黄褐色	器周残 1/4
4	Y 甕	口縁部片				細砂を含み、焼成良	赤黄色	
5	Y 甕	口縁部片				砂粒を含み、焼成良	黄灰色	
6	Y 甕	胴中半欠	(25.0)			砂粒を含むが精製で、焼成良	黄褐色	器周残 1/10
7	Y 甕	胴下半欠	(20.0)		(18.2) 胴中位	砂粒を含み、焼成良	黄褐色	器周残 1/3

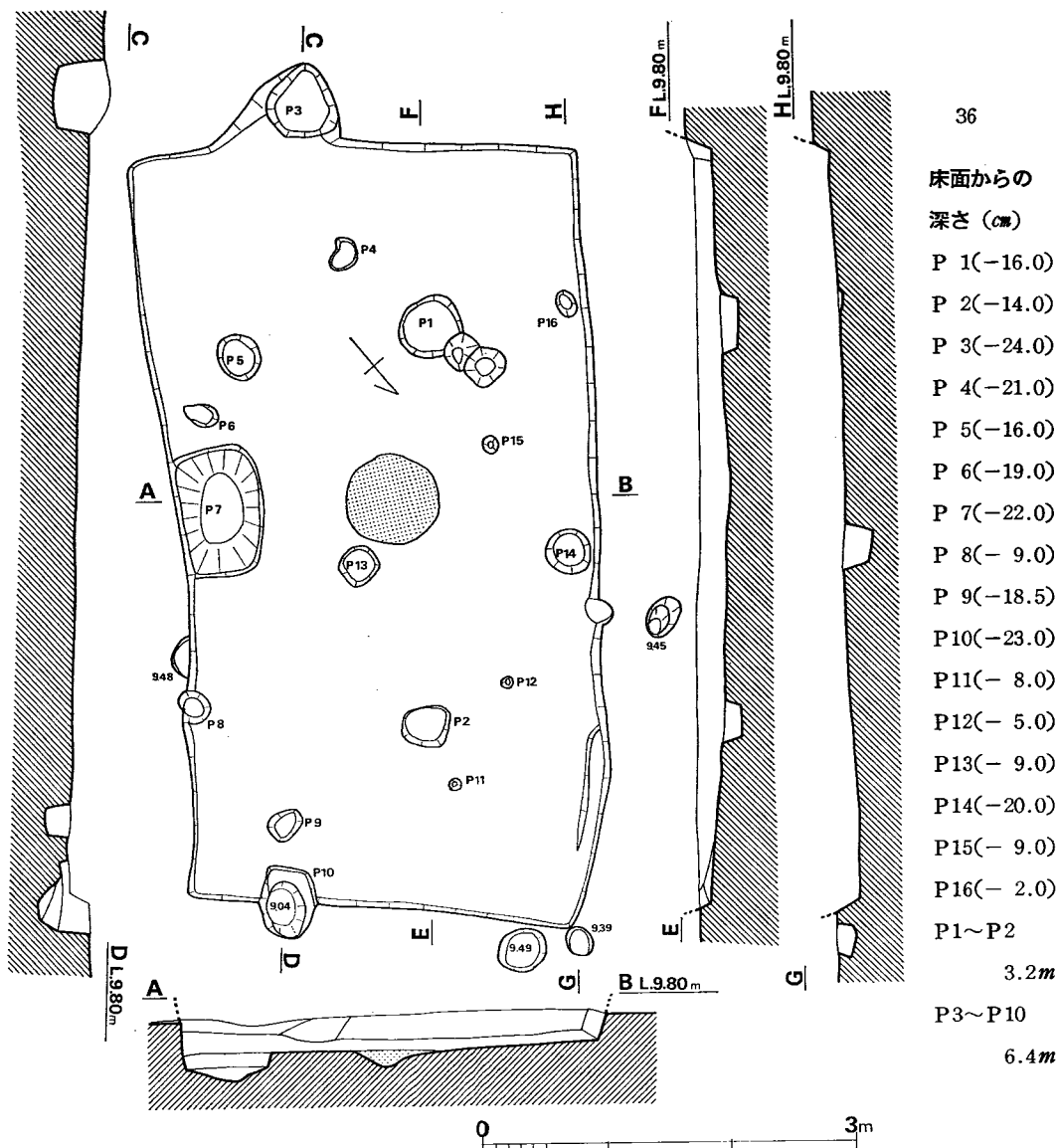


Fig. 26 B区第30号住居跡実測図 (縮尺1/60)

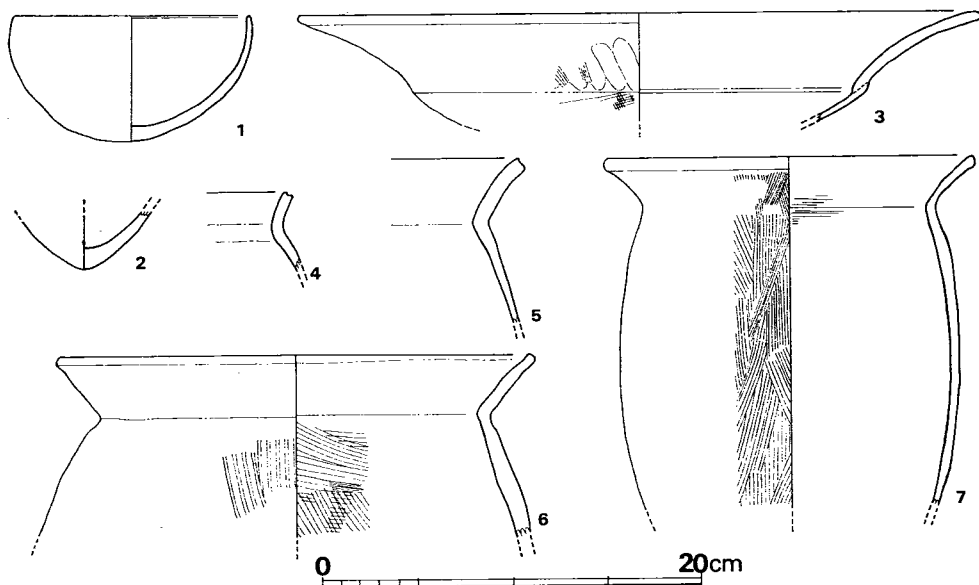


Fig. 27 B区第30号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

B区第63号住居跡 (Fig. 28)

N145・W35に位置する。住居跡の南東コーナー付近を第64号住居跡に切られているが、約 $3.60 \times 4.70m$ を測り、面積は約 $16.9m^2$ である。支柱穴はP1のみ確認できるが、中央の炉および南西部の支柱穴は未調査区に残されている可能性が強い。南東壁はほぼ中央部のP5は壁に接しており台形プランに近い。長辺 $1.2 \times$ 短辺 $0.9m$ 、深さ $30cm$ をはかる。貯蔵穴であろうか。主軸の方位は $N31^\circ E$ をとる。壁は $15cm$ ほど残っていたが、ベッド状遺構は検出されなかった。第64号住居跡との重複部付近から尖底土器 (Fig. 29-2) が、尖底部を北側にむけた状態で床面直上から出土した。また、抉入磨製石斧 (Fig. 30) がP5より、鉄鏃が埋土中より出土している。

遺物 (Fig. 29・30, Tab. 14, PL. 26)

弥生式土器・土師器・須恵器・鉄鏃・抉入石斧が出土した。鉄鏃は小片にくずれてしまっている。

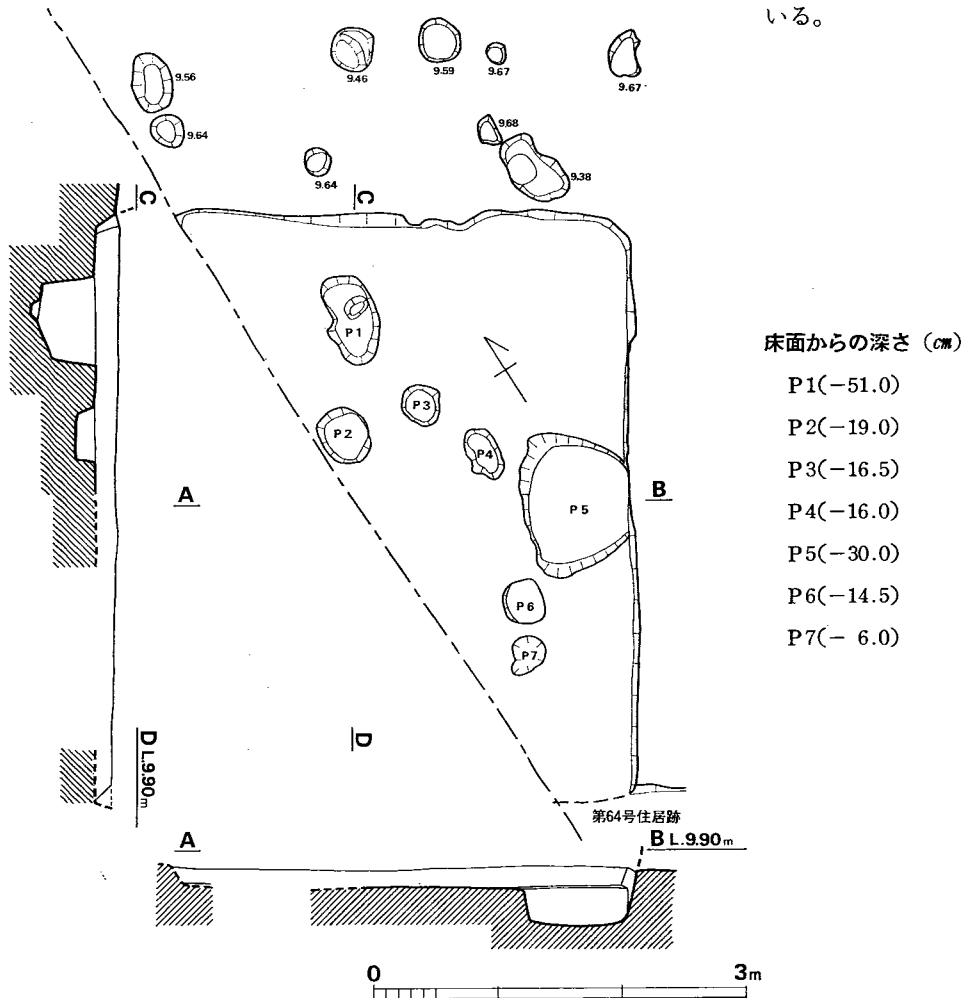


Fig. 28 B区第63号住居跡実測図 (縮尺1/60)

弥生式土器 (Fig. 29—2・4) 2は床面直上出土の尖底の鉢で、全形がわかるのはこの一例のみである。内外面ともナデにより仕上げている。4は碗である。外面は体部では斜方向に、底部近くでは縦方向にハケ目状整形を施し、ナデ調整で仕上げるが、整形痕を多く残す。内面は丁寧なナデ調整。口縁部はヨコナデを施し、明瞭な平坦面をなす。

土師器 (Fig. 29—3・5~7) 3は器肉の薄い杯で、口縁端部はやや肥厚する。5・6は碗で、5は口縁端部が内彎する。7は甕の口縁部で、内面は上へ向うへら削りである。

須恵器 (Fig. 29—1) 高台のある杯底部で、内面はナデ、高台の内側はへら削り、その他はヨコナデである。

以上のほかに、弥生土器片169、土師器片147、須恵器片11が出土した。

扶入石斧 (Fig. 30) P5から出土した。砂岩製で、抉り部分は打撃による剝離ののち研磨している。基部にも研磨を加えている。

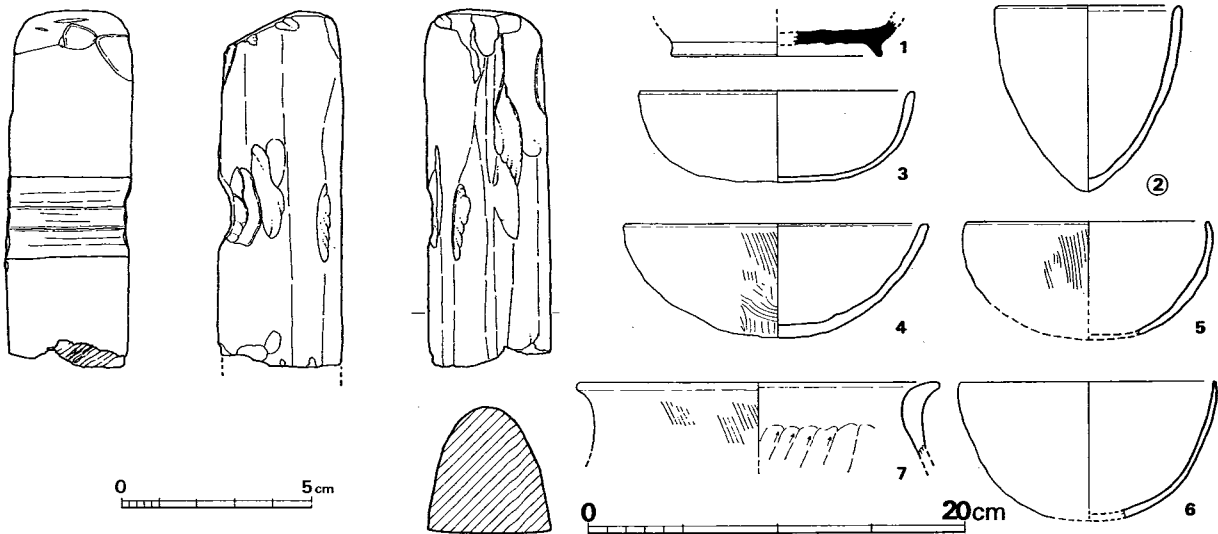


Fig. 30 B区第63号住居跡出土遺物実測図 (II) (縮尺1/2) Fig. 29 B区第63号住居跡出土遺物実測図 (I) (縮尺1/4)

Tab. 14 B区第63号住居跡出土土器一覧 ()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	S高台杯	底部				少量の砂粒を含み、焼成良	青灰色	
2	Y尖底鉢	1/3	(9.6)	9.9	口縁部	砂粒を含み、焼成良	赤褐色	
3	H杯	1/2	(14.6)	4.8	口縁部	胎土精良、軟質	黄褐色	
4	Y碗	2/3	(16.0)	6.1	口縁部	砂粒を多く含み、焼成良	茶褐色	
5	H碗	底部欠	(12.6)	(6.3)	口縁直下 (13.3)	砂粒を含み、焼成良	赤褐色	
6	H碗	底部欠	(13.4)	(7.4)	口縁部	砂粒を含み、焼成良	赤褐色	
7	H甕	口縁部	(19.5)			黒雲母を含み、焼成良	赤褐色	

B区第77号住居跡 (Fig. 31, PL. 54)

北半部を農道に切られ、東壁を古墳期の第83号住居跡との重複で失っており、プランは不明である。しかし、他の弥生期に属するものは支柱穴を床面の中央部に2個有する例からして、一応P2を支柱穴とすれば、その主軸方向はN39°Wとなる。遺存壁高5~8.5cm。

遺物 (Fig. 32, Tab. 15, PL. 54)

甕(2~8) 4は口縁部が厚く丸味を有し、ヨコナデ整形を施す。屈折部外面はとくに強いヨコナデにより若干の稜を有す。胴部外面は縦方向のハケ目状整形痕を残し、内面は丁寧なナデを施す。5はT字状口縁をなすが、上面はヨコナデ整形により若干凹凸をもって一周する。胴部外面は剝落しているが、内面はナデ整形を施す。8は台付甕の一部と思われる。内外ともに丁寧なナデ整形を施し、砂粒および黒雲母を含み焼成は良く黄褐色を呈す。

高杯(11・12) 脚部外面は丁寧に全体をヘラ研磨し、裾端部のみヨコナデ整形を施す。内面は、上部は成形時のシボリ目痕をそのままとし、下部は指先によりナデ、最下部のみハケ目状

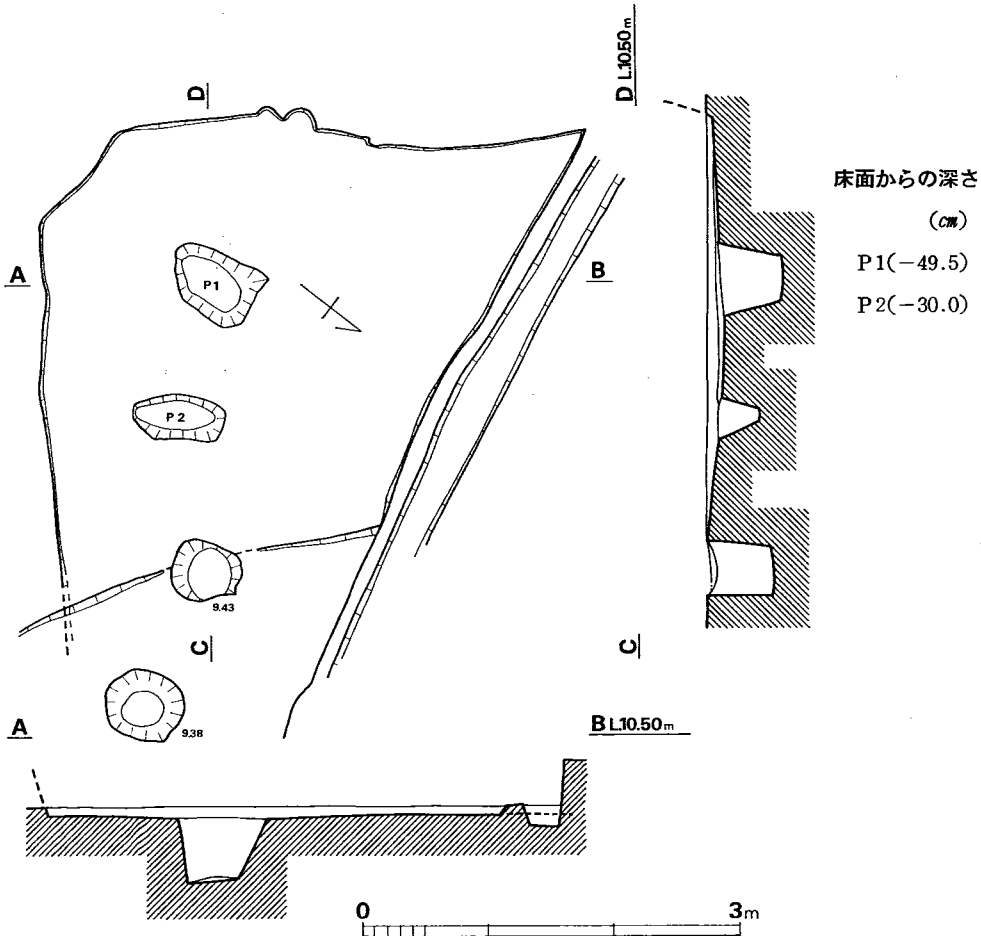


Fig. 31 B区第77号住居跡実測図 (縮尺1/60)

整形を施す。砂粒を若干含むが胎土は精製され、焼成は良く赤褐色で、一部黒褐色を呈す。なお、外面は丹塗りである。11は杯部で、外面にハケ目状整形痕を残し、内面は丁寧にナデて仕上げる。内外面ともに丹塗りを施す。

鉢（1）若干上げ底気味の底部に、内彎しつつ立ち上がる体部は口縁部近くで屈折する。この屈折は、指押え成形によるものと思われ、口縁上端は水平とならず、ナデは外面よりも内面で丁寧であるが、下半部で指押え成形痕が残る。

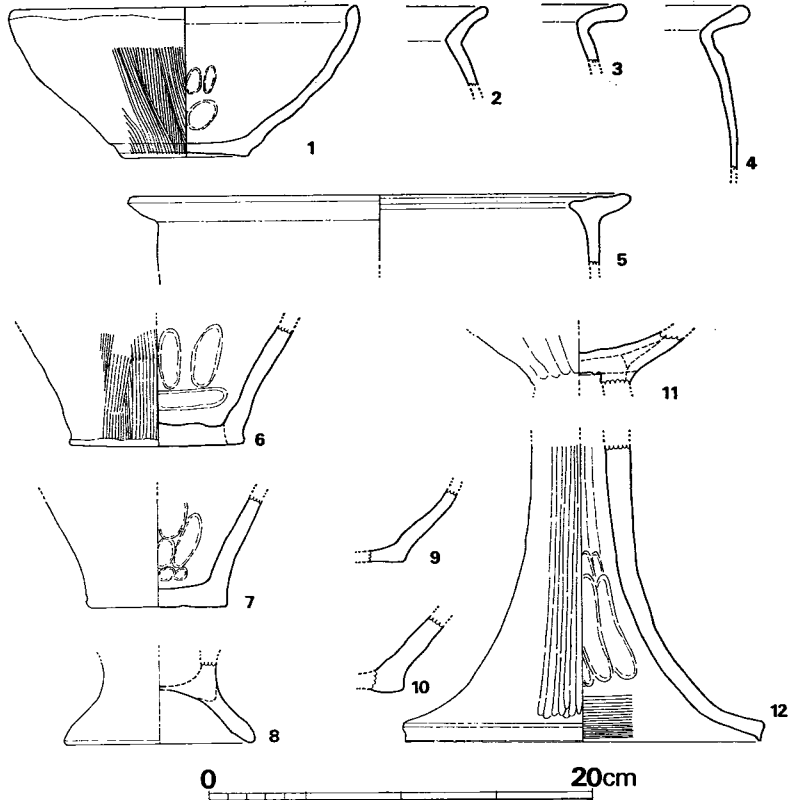


Fig. 32 B区第77号住居跡出土土器実測図（縮尺1/4）

Tab. 15 B区第77号住居跡出土土器一覧（ ）は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	Y 鉢	完形	17.8	7.8	18.3 口縁下	細砂を含み、焼成良	茶褐色	
2	Y 甕	口縁部片				細砂を含み、焼成良	黄褐色	
3	Y 甕	口縁部片				細砂を含み、焼成良	黄褐色	
4	Y 甕	胴中位下欠				細砂を含み、焼成普通	内面 茶褐色 外面 黄褐色	

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
5	Y 甕	胴部欠	(26.2)			細砂及び黒雲母を含み、焼成良	淡黄灰褐色	器周残 1/6
6	Y 甕	底部				砂粒を含み、焼成良	黄褐色	
7	Y 甕	底部				砂粒及び黒雲母を含み、焼成良	内面 黒褐色 外面 黄褐色	
8	Y 甕	底部片				砂粒及び黒雲母を含み、焼成良	黄褐色	
9	Y 甕	底部片				砂粒を含み、焼成良	内面 黄褐色 外面 黒褐色	
10	Y 甕	底部片				砂粒を含み、焼成良	内面 灰褐色 外面 赤黄褐色	
11	Y高杯	杯部底片				細砂及び黒雲母を含み、焼成良	黄褐色	器内外面丹塗り
12	Y高杯	脚部片				砂粒を若干含むが精製され、焼成良	赤褐色一部黒褐色	器外面丹塗り

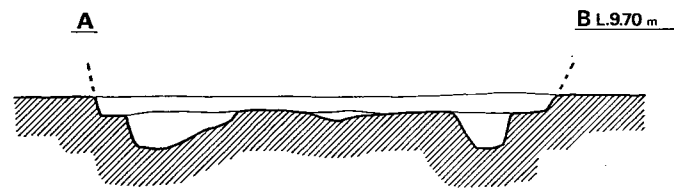
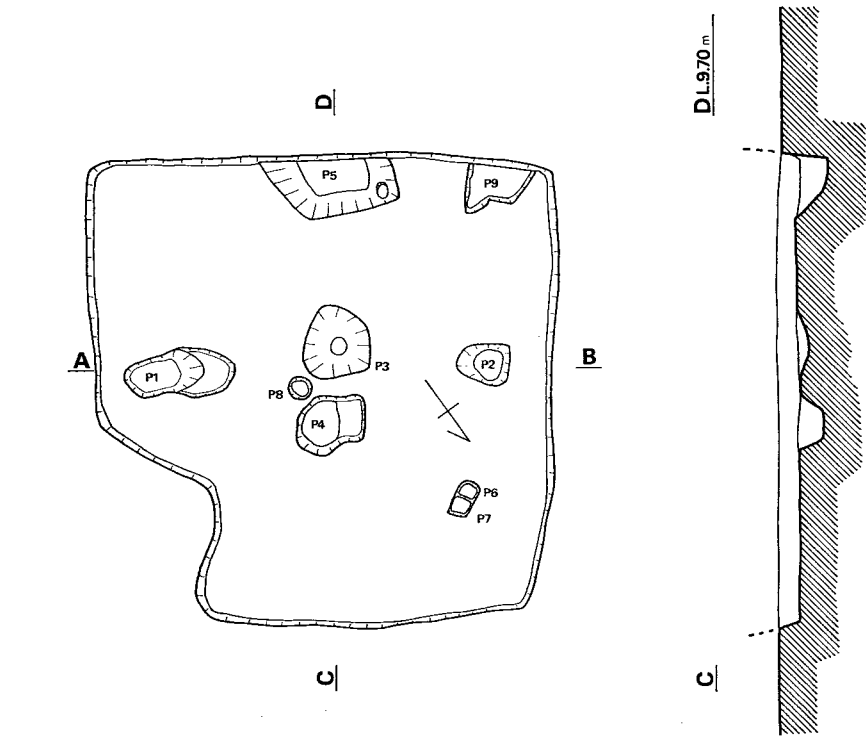
C区第1号住居跡 (Fig. 33, PL. 71)

N110・W5に位置する。東コーナーの一部の張り出しは、ベッド状遺構と考えられ、P3は炉跡であろう。プランは、3.7×3.5mの方形を呈し、面積12.95㎡を有する。支柱穴はP1・P2で、その間は約2.6mを測り、その主軸方向はN55°W。P5は貯蔵用か。遺存壁高15cm。

遺物 (Fig. 34・35, Tab. 16, PL. 71)

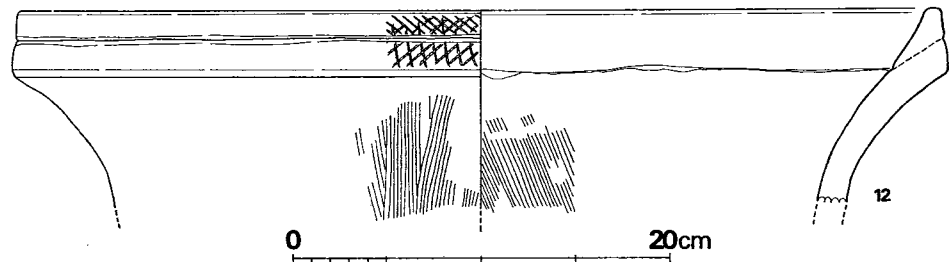
大形甕 (Fig. 35) 口縁部上面に新たな粘土を接合するが、内外面ともに接着面はそのまま若干のナデを施すのみである。先端部は平坦に横ナデを施し、口縁帯外部にヘラ状のもので斜格子を刻む。口縁下半部は、内外ともに粗いハケ目状整形痕を認める。

甕 (Fig. 34—3・4・6～11) 3は直立気味に若干外反する口縁部をもち、器内外面ともに横ナデを丁寧に施す。口縁部上面は平坦に仕上げ、上部外面の断面に示された凹みは意識的な沈線ではなく、整形時の砂粒によるもので一周しない。胴部は外面に細いハケ目状調整痕を整然と残し、内面に粗い板目状整形痕を残すが、削りまでには至らない。4は口唇部をとくに丁寧にヨコナデ調整し、若干内外から指頭で引き伸すために上面に若干の凹みを生じている。外面はハケ目状整形を施し、その後を若干ナデ調整する。口頸部の屈折は明瞭でなく、口縁部は、やや外方に開くのみである。なお、胴内面は剝離して整形技法は不明である。6は器内外面ともに磨滅が著しく、技法は明らかでない。7は口唇部を若干引き伸ばして上面に凹みが生じ、口縁部は内外面ともにハケ目状整形痕を残す。胴部は外面が粗く内面は密なハケ目状整形痕を残す。なお、口縁部が二段階的に外開きするが、これは成形的なものよりもむしろ、内面のナデ整形によるものであろう。8は口縁部内面および端部にかけて丁寧にヨコナデを施し、口唇部は平坦に仕上げる。外面は密なハケ目状整形具で丁寧に整形するが、胴部外面はタタキ成形を明瞭に残し、下半部は密なハケ目状整形痕を残す。胴部内面は、粗いハケ目状整形痕を若干残すだけにナデ調整が施されている。胴部は張らず、頸部で「く」字に屈折して直線的に外開きする口縁部に、平底がつくものである。9は口縁部のヨコナデ整形で若干内彎気味に開口し、



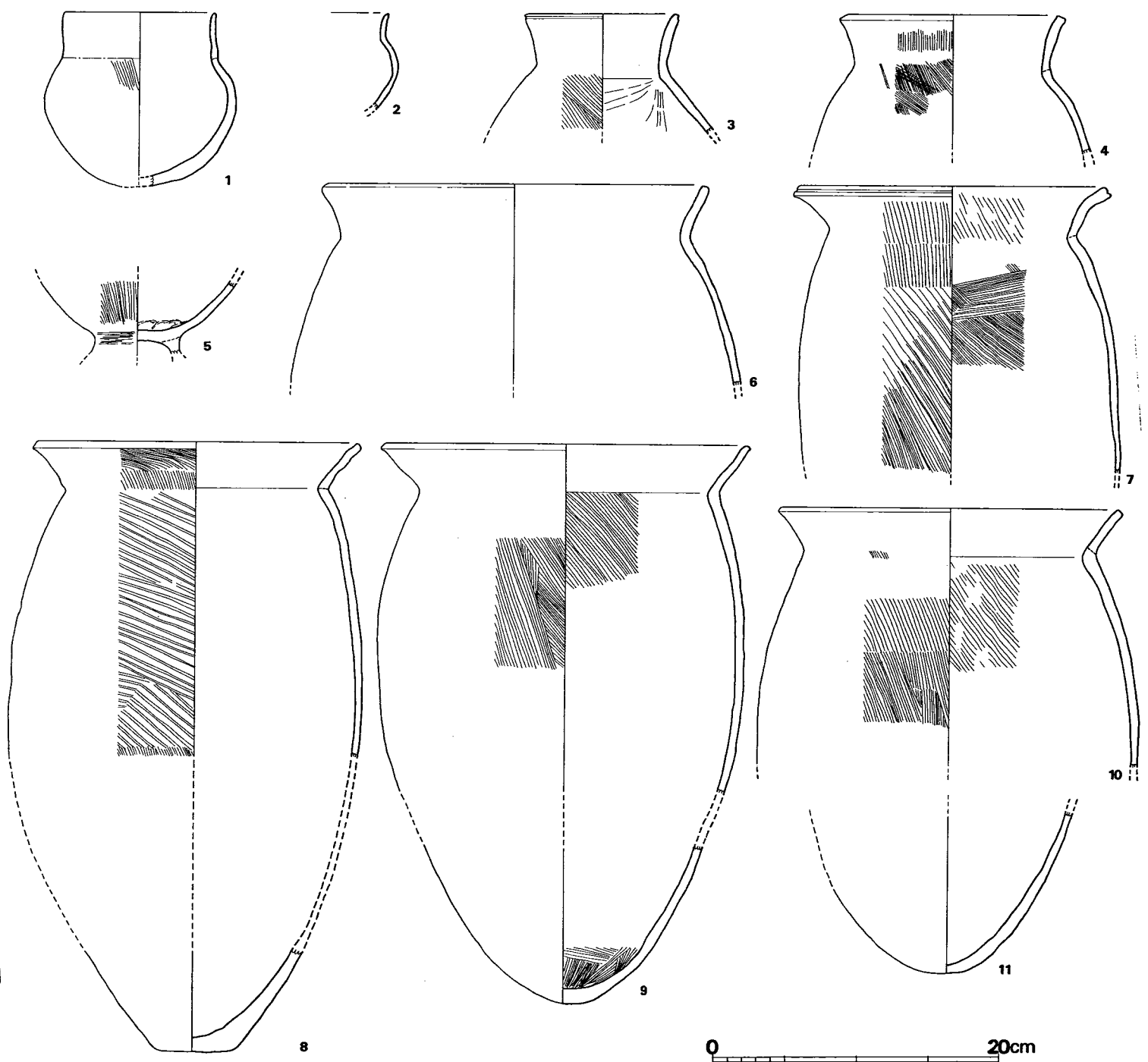
0 3m

Fig. 33 C区第1号住居跡実測図 (縮尺1/60)
 床面からの深さ (cm)
 P1(-26.0)・P2(-27.0)・P3(-12.0)・P4(-23.5)・P5(-24.0)・
 P6(-21.0)・P7(-24.0)・P8(-9.5)・P9(-16.0)
 P1~P2 2.6m



0 20cm

Fig. 35 C区第1号住居跡出土土器実測図 (II) (縮尺1/4)



0 20cm

Fig. 34 C区第1号住居跡出土土器実測図 (I) (縮尺1/4)

口唇部は稜を有して平坦に仕上げる。胴部は内外面ともにハケ目状整形痕を残し、頸部のみナデ調整を施す。底部は丸底で、外面はハケ目状整形で内面は蜘蛛巣状のヘラ整形痕を残す。

壺 (Fig. 34—1・2) 1 の口縁部は内外ともにヨコナデ整形。胴部外面は一部にハケ目状整形痕を認めるだけで、よくナデ調整をし、内面は丁寧なナデを施す。直立した口縁部であり、底部を欠失するが丸底であろう。

他に台付碗5が出土している。

Tab. 16 C区第1号住居跡出土土器一覧 () は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	Y 壺	底一部欠	(10.7)	12.5	13.7 胴中位	砂粒を若干含むが、精製され、焼成良	黄褐色	器周残 1/3
2	Y 壺	底部欠				砂粒を多く含む、焼成良	内面 黄褐色 外面 黒褐色	
3	Y 甕	口肩部片	10.7			砂粒を含み、焼成悪	淡黄褐色	
4	Y 甕	口肩部片	(15.6)			砂粒を多く含む、焼成普通	淡黄色	器周残 1/6
5	Y台付碗	破片				砂粒を含み、焼成良	淡黄褐色	
6	Y 甕	胴下半欠	(26.7)			砂粒を多く含む、焼成良	淡黄褐色	器周残 1/6
7	Y 甕	胴下半欠	21.4		17.6 胴中位	細砂を含み、焼成良	内面 黄褐色 外面 茶褐色	
8	Y 甕	胴一部欠	22.7	43前後	23.6 胴中位	細砂を含み、焼成良	明黄褐色	
9	Y 甕	胴一部欠	26.1	39前後	25.9 胴中位	砂粒を多く含む、焼成普通	褐色	
10	Y 甕	胴下半欠	23.6		20.7 胴中位	細砂を含み、焼成良	淡黄褐色	器周残 1/6
11	Y 甕	底部片				砂粒を多く含む、焼成良	淡黄褐色	
12	Y大形甕	口縁部片	50.1			砂粒を多く含む、焼成普通	黄褐色	器周残 1/6

C区第3号溝 (Fig. 347, PL. 71)

調査区をほぼ斜めに走り、未調査区にはほぼ直線状に N32°E で続く。断面はU字形とV字形の中間形状を呈し、底面レベルは発掘区東端で標高8.81m、中央部同8.80m、西端同9.78mと東西端比高差はわずか3cmである。発掘全長64.8mを測る。

遺物 (Fig. 36・37, Tab. 17, PL. 97)

壺(1) 口縁部はナデ整形時に上方に若干立ち上がり、また、調整時に下方にも若干さがり、全体に幅広の口縁唇部外面に縦方向にキザミ目を一周させる。頸部は縦および斜め方向の粗いハケ目状整形痕を残す。口頸部はヨコナデを丁寧に施し、屈折部にそれによる若干の凹みを一周させる。肩部は密なハケ目状調整痕を整然と残す。口縁内面は粗い横方向ハケ目状整形痕を明瞭に残し、一部斜め方向のものも認めるが、上部には丁寧なヨコナデ調整を施す。肩部内面は指押え成形痕を認める。砂粒を多く認めず、焼成は良く淡黄褐色を呈す。現存器周1/3からの復原口径18.3cm、口頸部径12.6cmを得る。

甕(3~5) いずれも小破片で断面のみ示す。3は口縁部の断面が厚く内面にも伸びて平坦面をなし、胴部は張らないものであろう。4は口縁上面がナデにより若干凹み、胴部は無果花状を呈するものであろう。5は強いナデ整形痕そのままに上面および内面に凹凸を残して一周し、跳ね上げの的である。

鉢(2・11) 11は口縁上端面が若干ふくらみ、口唇部内面は稜を有し、胴部との屈折も明瞭である。外面口縁端部は、若干の丸味ももつが、口縁全体の断面形は厚い。胴部は、口縁下に一条の凸帯を低く一周させる。砂粒を多く含むが焼成は良く、淡赤黄褐色を呈す。剝離が著しい。残存器周1/3からの復原口径29.0cmを得る。砂粒を含み、焼成は良く赤黄色を呈す。

高杯(10) 脚部外面は縦方向ハケ目状整形後ナデ調整を施す。内面はシボリ目成形痕を残すが、下半部はナデ整形を施す。杯部との接合部は、接合面にキザミ目を入れてその強化をはかっている。脚末端部は稜を有し、一部断面図に示す凹みを残して、ナデ整形する。

蓋(7~9) 握部上面は凹み、丁寧にナデ整形する。外面は強く一気にイタ目状整形を縦方向に施し、内面は天井部に指押え成形痕を残すが、他は丁寧にナデ整形を施す。砂粒を多く含むが、焼成は良く赤黄色を呈す。

器台(12) 口縁部は内外ともにナデ整形を丁寧に施す。外面屈折部から脚上部にかけてはタタキ成形後をナデているが、下半部はタタキ痕を明瞭に残す。脚末端部は丁寧なナデを施し、明瞭な稜を有す。内面は縦方向に指頭でナデて、シボリ目痕は認めない。細砂粒を含み、焼成は良く、淡黄色を呈す。

溝の性格上、遺物は弥生時代中期~後期に及ぶが、壺・高杯・器台等から、後期後半に属するものと思われる。

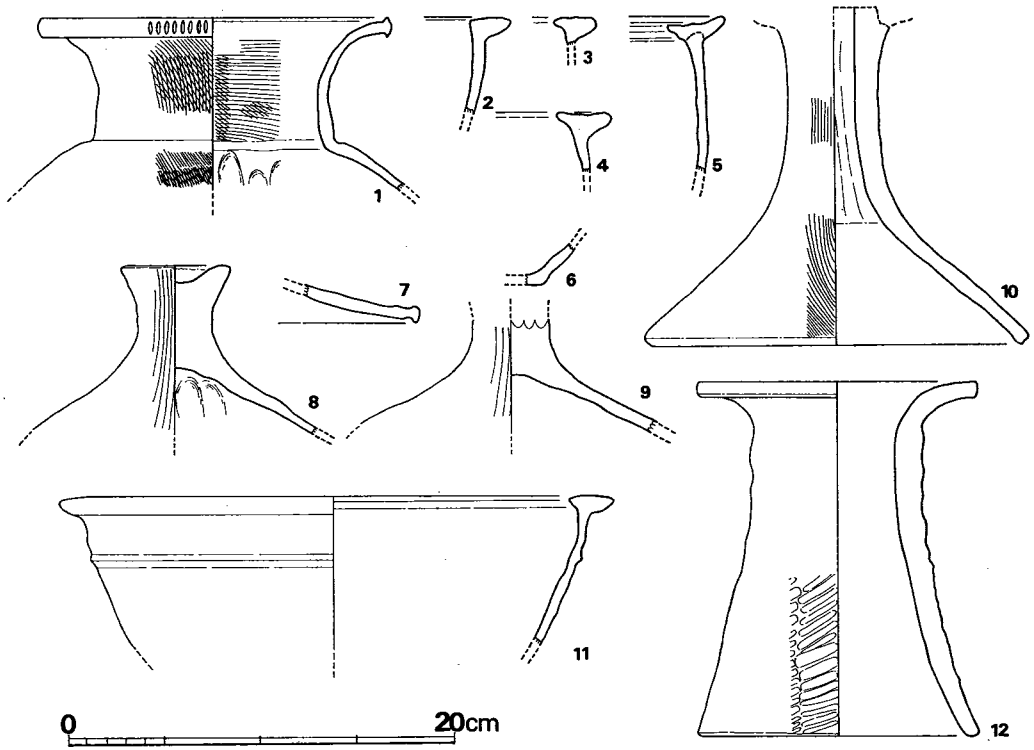


Fig. 36 C区第3号溝出土遺物実測図 (I) (縮尺1/4)

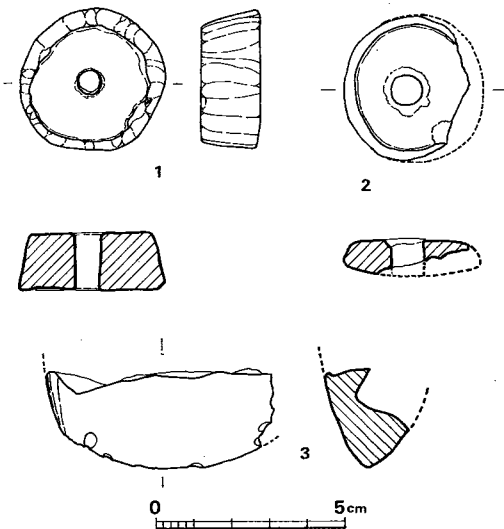


Fig. 37 C区第3号溝出土遺物
実測図 (II) (縮尺1/2)

滑石製紡錘車 (Fig. 37-1・2) 1は、上面径3.0~3.2cm、下面径3.6cm前後、厚さ1.5~1.6cm、孔径0.6cmの、ほぼ完形に近い紡錘車である。側面は上下方向に削られている。上・下面は灰黄色を呈し、重さ40g以上である。2は一部破損しているが、径約3.7cmで、14.5g以上である。断面は台形状で、青黒色を呈し、表面は滑らかである。

石斧 (Fig. 37-3) 玄武岩製の磨製石斧の刃部破片で、蛤刃の一部と思われる。

Tab. 17 C区第3号溝跡出土土器一覧()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	Y甕	口頸部	18.3			砂粒を含み、焼成良	淡黄褐色	
2	Y甕	口縁部				砂粒を多く含み、焼成不良	黄褐色	
3	Y甕	口縁部				砂粒を多く含み、焼成不良	〃	
4	Y甕	口縁部				細砂を含み焼成良	〃	
5	Y甕	口縁部				砂粒を多く含み、焼成良	赤黄色	
6	Y甕	底部				砂粒を多く含み、焼成良	黄褐色	
7	Y蓋	口縁部				細砂を含み焼成良	茶黄色	
8	Y蓋	天井部				砂粒を含み、焼成良	茶黄色	
9	Y蓋	天井部				細砂を含み焼成良	茶黄色	
10	Y鉢	底部欠				砂粒を多く含み、焼成良	淡赤黄色	
11	Y高杯	脚部				砂粒を多く含み、焼成良	赤褐色	
12	Y器台	復原完	(14.6)	18.4	(14.9)底部	細砂を含み、焼成良	淡褐色	

小 結

まず、遺構と遺物の出土状態から述べよう。後代にあたる古墳時代の大集落との複合によって、また水田として現在まで使用されてきたため、削平および攪乱等で消滅・破壊された遺構も多いと思われ、完形の遺物は数少なく、図示できる資料は少なかった。調査については路線幅のみの発掘で、未調査部分を残しており、とくにB・C区境界の西側に弥生時代の住居跡が検出される可能性は強い。それに加えて、第7号住居跡と第3号住居跡を結ぶ線より西側は削平が著しく、現に第7号住居跡西半部を失っており、他の住居跡とともにピットについても消滅したことを考えなければならない。遺物については、住居跡の遺存壁高で10cmに満たぬものもあり、床面出土の好資料が少なく、住居跡内一括出土とした破片も多い。

ところで、前述のような状況にあって遺構のあり方を中心に表にまとめると次のとおりである。

Tab. 18 弥生時代の住居跡一覧表

住居番号	分類	床面積 (m^2)	支柱穴数	支柱穴間 距離(m)	支柱穴間 主 軸	炉位置	貯蔵穴 位 置	ベッド状 遺 構	その他	備 考
B区 3	A	3.85×5.05 19.4			N40°E		無(?)	無(?)		後期後半の遺物を含まない
B区 77	B		2(?)		N39°W					後期後半の遺物を含まない
C区 1	C	3.5×3.7 12.95	2	2.6	N55°W	中央	南壁	有		
B区 10	C	3.3×5.7 18.81	2	2.8	N72°E	中央	南壁			
B区 16	C	3.26×4.0 15.44	2	2.8	N87°W	中央	南壁	有	北溝 壁有	27より古い
B区 27	D	3.4×4.3 14.62	2	3.3	N47°E	中央	南壁	無		16より新しい
B区 30	D	3.35×6.15 20.60	2	3.2	N40°E	中央	南壁	無	北溝 壁有	
B区 63	D	3.6×5.7 16.9	2(?)	3.2(?)	N31°E		南壁	無(?)		
B区 7	E	3.05×5.75 17.54	2	2.7	N21°E	中央	南壁	無		後期末の遺物を含む

第3号住居跡は、古墳期の第4号住居跡に切られているが、C・Dグループに通有の南壁貯蔵穴が検出されておらず、また出土遺物に後期後半の土器を含まず、すべてが後期前半であることから、当住居跡から削平度の強い西部にかけての周辺に、後期前半にAグループの居住集団が存在したものと考えられる。

つぎに、第77号住居跡は、後期後半とも考えられる台付甕形土器 (Fig. 32—8) を含んでいるが、第3号住居跡同様に貯蔵穴が認められず、第3号住居跡同様の甕形土器 (同3・4) を出土することから、第3号住居跡よりやや新しい後期前半の時期に、当住居跡から未掘部の北側にかけての周辺に、Aグループとは別に併行ないしすぐ後出してBグループの居住集団が存在したものと考えられる。

第16号住居跡は第27号住居跡に切られており、明らかにそれよりも前出のもので、ベッド状遺構を第1号住居跡と同様に検出し、支柱穴間距離が第10号住居跡と同じで、第1号住居跡のそれに近い。また、第1号住居跡と第16号住居跡間、および第16号住居跡と第10号住居跡間の距離がほぼ等しく、Dグループの主軸方向とは明確に差があり、一応Cグループの居住集団が3軒ないし未掘部の西側に存在したものと考えられる。

第27号住居跡は、前述のとおり第16号住居跡より後出のもので、ベッド状遺構が第30号住居跡とともに認められず、Cグループでは東壁にそれが検出されていることから、第63号住居跡も認められない可能性が強い。また、Dグループすべてがその支柱穴間距離が3.2m前後で、その主軸方向および第30号住居跡を中心とする住居跡間距離がほぼ等しい。これらの点から、Cグループとは別に一応3軒ないし未掘部の西側に、Dグループが存在したものと考えられる。

第7号住居跡はC・Dグループとは離れて存在し、後期末の壺形土器 (Fig. 17—1) を出土しており、削平度の強い西側にかけてEグループの居住集団が存在したものと考えられる。

以上は、おもに住居跡の内部施設およびそのあり方から概観したものであるが、Cグループの第16号住居跡とDグループの第30号住居跡はともに北壁に一部溝状のものが検出され、Eグループの第7号住居跡に拡張の可能性が指摘できることからして、C・Dグループは関連性が強く、時期的差異はあまりないものと思われる。このことは、両者の出土土器にも併行期のものが多く認められることからいえよう。

また、第3号溝状遺構については、その方向がCグループの主軸にほぼ一致し、弥生期の住居跡はこれを境としてその南側では検出されず、出土土器は後期後半に属するものであることからして、CまたはD・Eグループも含めてその関係は深いものと考えられる。第4号溝状遺構も第3号のそれとの関係が指摘できるかも知れないが、高杯 (Fig. 346—4) の出土があり、弥生期の所産と考えるに至らなかった。

最後に、当遺跡を弥生時代を通してみれば、縄文時代最終末期の夜臼式土器が表採され、

中期前葉の甕形土器・鉢形土器 (Fig.36—2・16) が第3号溝状遺構から、また、中期中葉の高杯形土器 (Fig. 32—12) が第77号住居跡から混入して出土している。これらは遺構を伴っていないが、弥生期の開始とともに農耕の足跡をとどめ、その後、後期前半のA・Bグループ、後期後半のCグループ、そしてさらにDグループの後期末葉へと、ほぼ弥生時代全般にわたるが、後代の古墳期とは異なり、後期の居住集団は3軒またはそれに若干を加えた数でC・Dグループにみたような形態を示していたものと思われる。

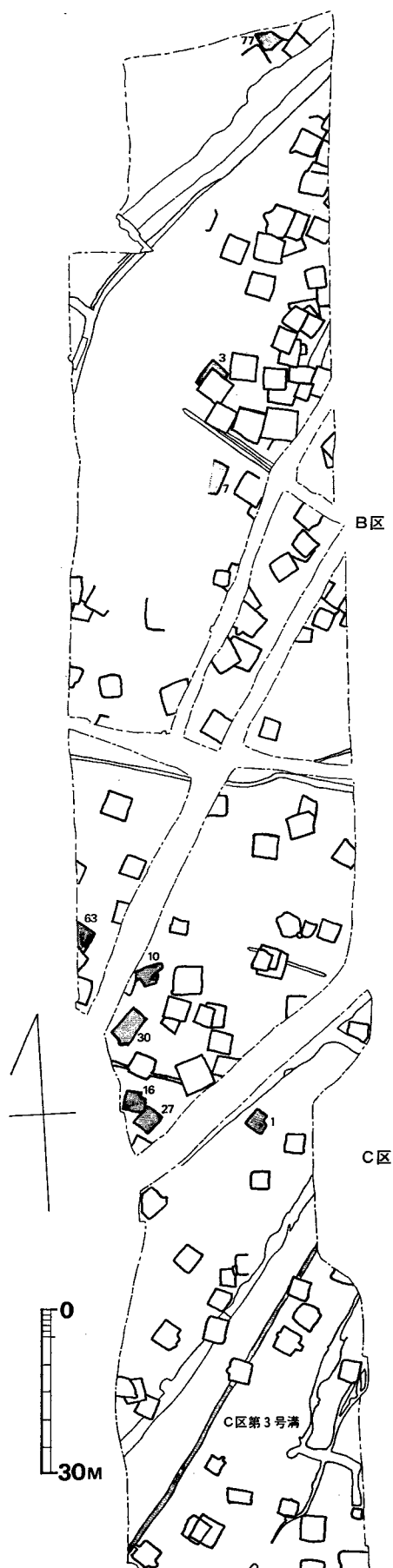


Fig. 38 弥生時代の遺構分布図 (縮尺1/1,200)
(宮原真裕美氏製図)

B 古墳時代の遺構と遺物

本項では古墳時代の住居跡を中心として前述の弥生時代以外の住居跡および竪穴を番号順に一括して説明してゆく。一般的に床面出土遺物のない遺構は、重複関係や遺物群としてのまとまりから時期を比定するのだが、それらが得られない場合、もっとも新しい遺物によってそれを出土した遺構の下限とする 他はない。本遺跡では住居跡の上部が削平されているものが多く、また半掘の住居跡がかなりみられるため、住居跡に伴う完形またはそれに近い遺物が遺構の数に比べて少ないこと、遺構番号が前後することによる混乱をできるだけ避けるためなどから、本項で一括する。

B 区第 4 号住居跡 (Fig. 39・40、PL. 56)

N244・W12に位置する住居跡である。主軸をN47.5°Wにとり、長軸5.0×短軸4.84mをもつ隅丸方形プランの住居跡で、床面積24.2㎡をはかる。住居跡は北側で第3号住居跡を3/5ほど切り、南側コーナーを第121号住居跡に切られている。ピットは14個検出されたが、住居跡に付属すると考えられるものは少ない。そのうち支柱穴は3個(P1～P3)検出されたが、東側の該当する位置に柱穴は確認できなかった。支柱穴径は60～80cm、床面からの深さは45～69cmである。壁はほぼ垂直で、高さは3～8cmと残りはよくない。北西壁中央部付近で50×60cmの範囲に焼土がひろがっている。あるいはカマドかもしれない。

遺物 (Fig. 41・42、Tab. 19、PL. 56)

弥生土器・土師器・須恵器が出土した。

弥生土器 (Fig. 4—1・2) 1は鉢である。口縁内面および胴部はナデによる整形であるが、むしろ成形の方に重きをおいている。外面底部近くは指押え成形痕を残すが、底部外面および内面は丁寧なナデ整形を施す。器壁は厚く、口唇部は水平な仕上げではないが、底部は平底をなす。2は器台である。外面は全体にハケ目状整形痕を残し、脚端部はヨコナデ整形を施す。内面は指押え成形後、ハケ目状整形を施す。

以上の土器は、弥生後期のものであり、遺構に伴うものではない。

土師器 (Fig. 41—3・4) いずれも丹塗りの高杯である。胎土・焼成とも良好な精製品で、内外面ともナデで仕上げている。

須恵器 (Fig. 41—5) 高台を有する杯で、端部は薄くなる。

不明鉄製品 (Fig. 42) 長さ約4cmの鉄器で、中央が厚く、両端は薄くなる。刀子または鏃であろう。

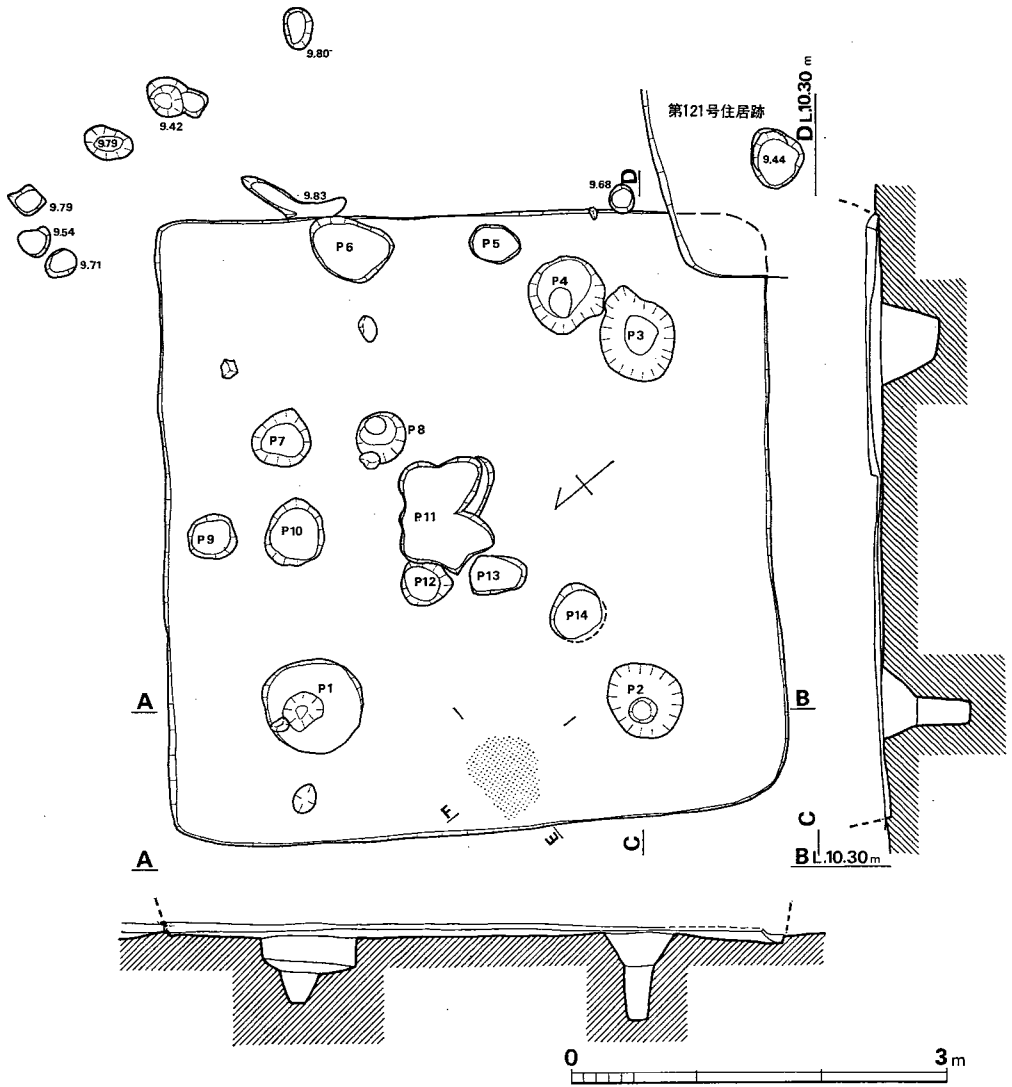


Fig 39 B区第4号住居跡実測図 (縮尺1/60)

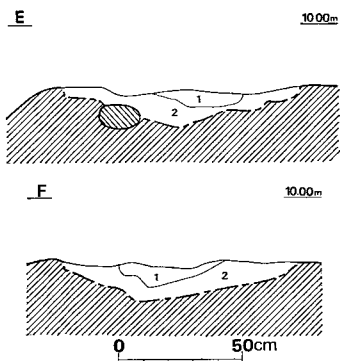


Fig. 40 B区第4号住居跡
焼土断面図 (縮尺1/30)

床面からの深さ (cm)

P1(-55.5)・P2(-69.0)・P3(-45.0)・P4(-37.0)・P5
(-18.0)・P6(-8.0)・P7(-20.0)・P8(-30.0)・P9(-38
.0)・P10(-69.0)・P11(-22.0)・P12(-20.0)・P13(-1
8.5)・P14(-21.0)

P1~P2 2.7m P2~P3 3.0m

土層

- 1 焼土 赤褐色レンガ質土
- 2 暗茶褐色粘質土

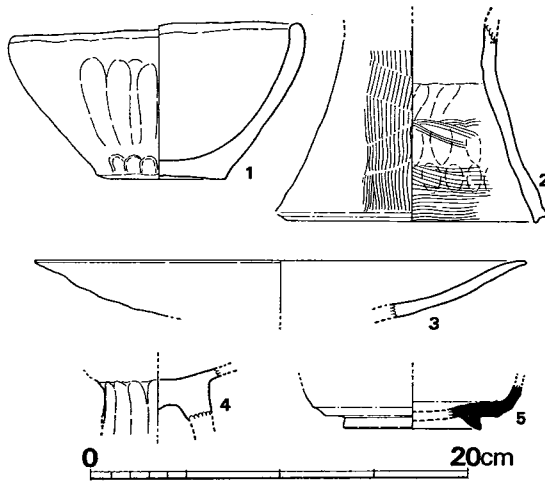
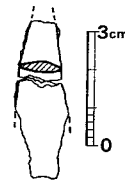


Fig. 41 B区第4号住居跡出土遺物実測図(I) (縮尺1/4)

Fig. 42 B区第4号住居跡
出土遺物実測図(II)
(縮尺1/2)

Tab. 19 B区第4号住居跡出土土器一覽 ()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	Y鉢	完形	15.3	7.9		砂粒をあまり含まず焼成良	黄褐色	
2	Y器台	上半部欠				砂粒をあまり含まず焼成良	黄褐色	
3	H高杯	杯部	(26.0)			砂粒をあまり含まず焼成良	黄褐色	内外面丹塗り
4	H高杯	脚部				砂粒をあまり含まず焼成良	黄褐色	杯部内面丹塗り
5	S杯	底部				細砂を含み焼成良	青灰色	

B区第6号住居跡 (Fig. 43, PL. 28)

N185・W20に位置する。東南隅は現在の水路によって切られているが、その隅の一部と思われる部分を検出することができた。残存する壁から推定復原すると、南北5.2m、東西5.5mのほぼ方形のプランとなる。焼土および炭化物が北壁の内外に認められたが、カマドであったかどうかは不明である。支柱穴はP1～P3と思われるが、南東の該当する部分は水路があるため、検出できなかった。壁は、深さが4.5～15cmと残りは良くない。

遺物 (Fig. 44, Tab. 20, PL. 28)

須恵器・土師器を出土した。

須恵器 (Fig. 44—1～3) 1・3は蓋で、1は肩部に鈍い凹線をもち、口縁部内面は凹む。天井部外面はへら削り、そのほかはヨコナデである。3の口縁部内面には、端部より少し離れて凹線がある。2の杯は底部内面をナデ、外面はへら削りし、ほかの部分はヨコナデである。

土師器 (Fig. 44—4) 図示できるのは4の把手のみである。

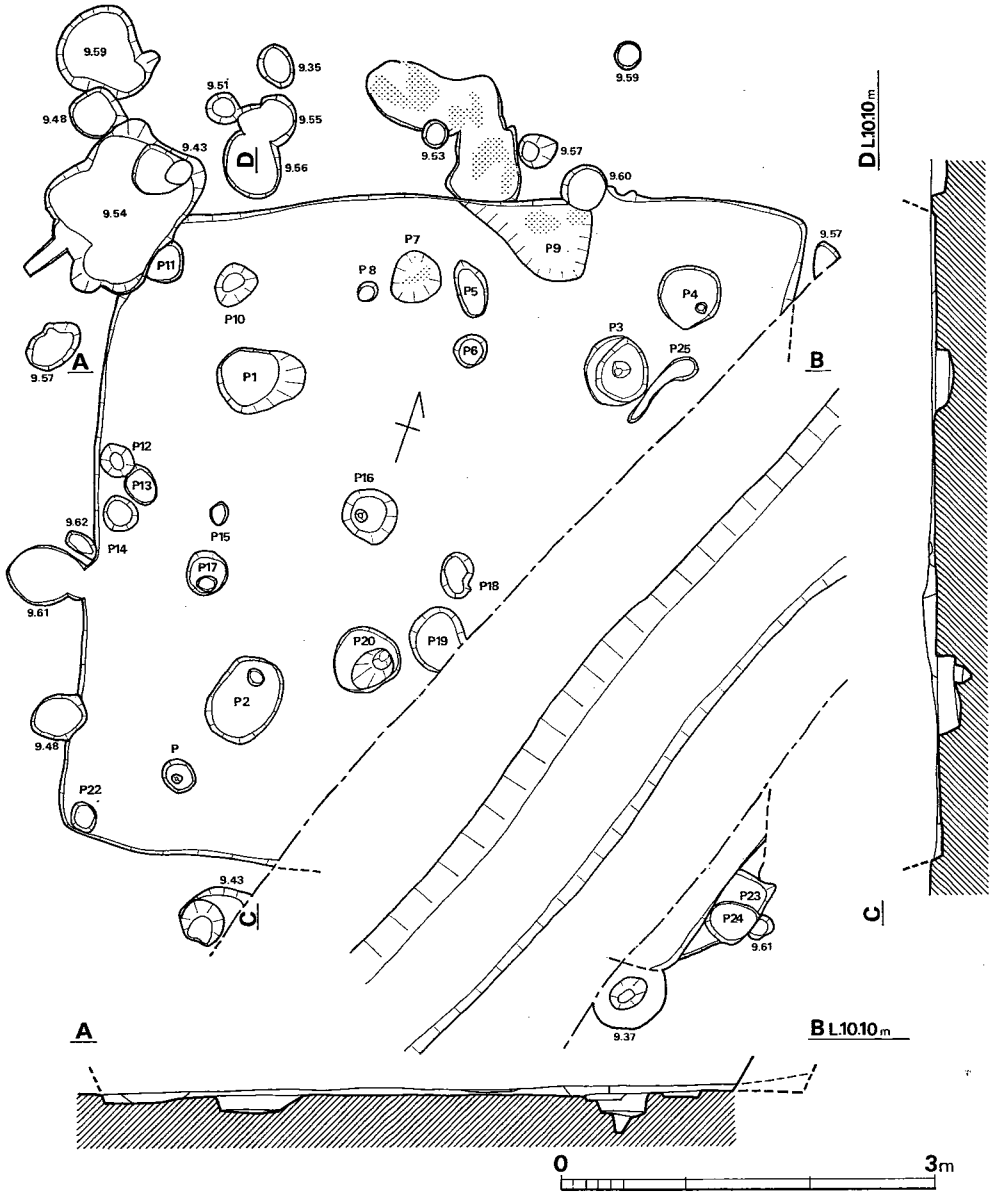


Fig. 43 B区第6号住居跡実測図 (縮尺1/60)

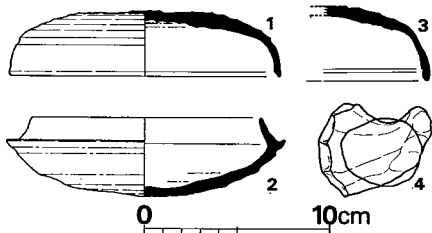


Fig. 44 B区第6号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

床面からの深さ (cm)

- P 1(-16.0)・P 2(-23.0)・P 3(-18.0)・P 4(- 6.5)
 P 5(- 6.0)・P 6(-15.0)・P 7(- 2.0)・P 8(- 6.0)
 P 9(-12.0)・P10(-11.7)・P11(- 9.0)・P12(-26.0)
 P13(-14.5)・P14(-17.7)・P15(- 6.0)・P16(-22.0)
 P17(-12.5)・P18(- 6.0)・P19(- 5.5)・P20(-60.0)
 P21(- 6.0)・P22(- 5.0)・P23(-16.5)・P24(-26.5)
 P25(- 4.5)
 P1~P2 2.38m・P1~P3 2.95m

以上のほかに、二次的な火熱を受けた土師器小形甕底部片・甕口縁部片・甕口縁部片と、土師器小片約200が出土した。

Tab. 20 B区第6号住居跡出土土器一覧()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	S 蓋	1/3	(14.8)	3.5	口縁部	砂粒を含み密、堅緻	青灰色	
2	S 杯	1/2	(12.4)	4.3	受け部(15.6)	砂粒を含み密、堅緻	青黒色	
3	S 蓋	口縁部~体部				砂粒を含み密、堅緻	赤紫色	
4		把手				砂粒を含み、焼成不良	黄白色	

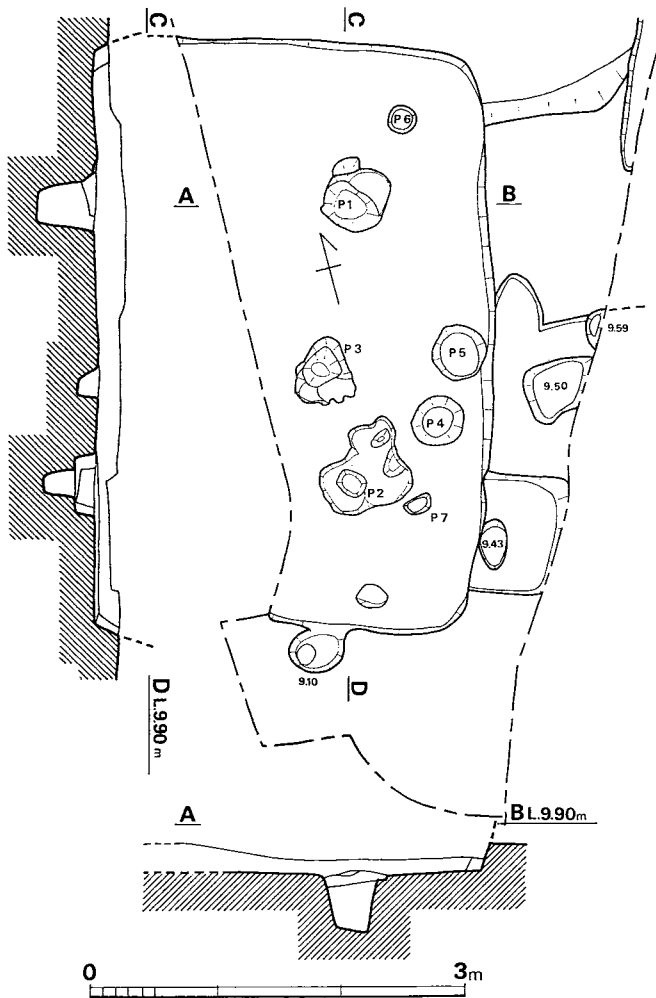


Fig. 45 B区第8号住居跡実測図(縮尺1/60)

B 区第 8 号住居跡(Fig. 45)

N134・W26に位置する住居跡である。住居跡の西半分が調査区域外であるため全体のプランは不明であるが、方形をなすものと思われる。支柱穴は二個(P1・P2)検出

床面からの深さ (cm)

P1(-48.0)・P2(-40.0)・

P3(-30.0)・P4(-9.0)・

P5(-10.0)・P6(-8.0)・

P7(-34.0)

P1~P2 2.25m

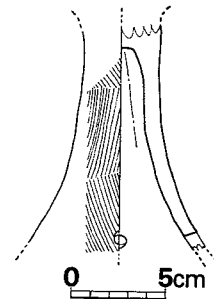


Fig. 46 B区第8号住居跡出土土器実測図(縮尺1/4)

されており、その直径はP1 50cm、P2 70cm、床面からの深さ40~48cmで、柱穴間は2.25mをはかる。床面は全体に踏み固められておらず、地層そのものも乱れており判別が難しい。わずかに中央部付近が黄褐色をなし、よく踏み固められている。炉・カマドは不明である。壁の残りは比較的良好方で、深さ11.5~19.5cmを測る。住居跡の東側を他の遺構によって切られていたが、住居跡かどうかは地層が乱れており、また調査地区の狭さもあって確認できなかった。

遺物 (Fig. 46, PL. 26)

高杯脚部外面は細かいハケ目状整形痕を全体に残し、内面は上半部にシボリ目成形痕をそのままに残す。下半部は縦方向に指先ナデ整形を施す。現在、2孔を認める。胎土は精製され、焼成は普通で暗黄褐色を呈する。

B区第9号住居跡 (Fig. 47, PL. 13)

西辺約3mを検出し、東側のほぼ対応する位置に南東隅と思われる部分を確認した。中央の大部分が道路下にあるため詳細は不明である。東西の床面に30cmほどの差があり、住居跡としては疑問が多い。ここでは発掘時に番号を付したので、一応あげておくことにする。

遺物 (Fig. 48, Tab. 21, PL. 13)

弥生土器・土師器を出土した。弥生土器は6片出土したが図示できるものはない。

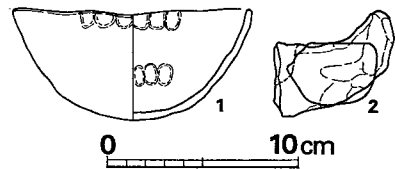


Fig. 48 B区第9号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

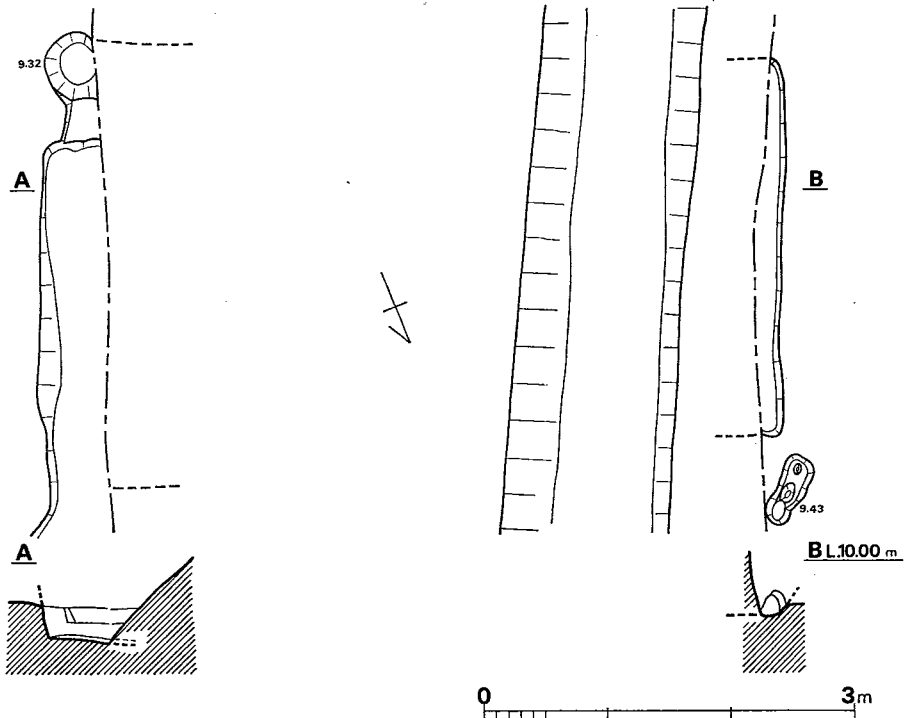


Fig. 47 B区第9号住居跡実測図 (縮尺1/60)

土師器 (Fig. 48—1・2) 1は椀で、口縁部が磨滅しており、指頭によるナデを施している。2の把手は本体との接合面を残している。

土師器は以上のほか、小片32が出土した。

Tab. 21 B区第9号住居跡出土土器一覧()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	H 椀	底部欠	12.3	(5.5~5.8)		砂粒を多く含み、焼成良	灰褐色	
2		把手				砂粒を多く含み、焼成良	黄褐色	

B区第11号住居跡 (Fig. 49, PL. 14)

N135・W19に位置する。プランは各隅が若干丸味を持つ方形である。南北5.2m、東西5.1mで、床面積約26㎡を測る。焼土が北辺中央に壁に接して検出され、おそらくカマドと思われる。焼土の範囲は約40×50cmである。ピット番号中P1・P2・P3・P4の4穴で組合せができ4本支柱が考えられる。また、P8・P9はP1の補助柱穴とも考えられる。その他のピットは、本遺構に伴うものかどうか判別できない。現存壁高は東壁で8cm前後、西壁で4cm前後、南壁で8cm前後、北壁で7cm前後である。床面は4本の柱穴の間が若干低く、断面図では焼土の方向へ下るが、柱穴を検出する際に掘り過ぎたもので、本来は、この逆になるものである。

遺物 (Fig. 50, Tab. 22, PL. 14)

須恵器・土師器を出土した。

須恵器 (Fig. 50—1・2) 1は立ち上りが短く内傾の強い杯で、底部を欠く。2は杯の可能性もあるが、ここでは蓋としておく。

土師器 (Fig. 50—3~5) 3は外面丹塗りの椀で、内面は磨滅している。4は底部の一部を欠くが内外面とも丹塗りの皿で、内面はナデ、外面はヘラ削りである。5は小形甕の底部と思われる、外面にススが付着している。

以上のほか、土師器には外面丹塗りの高杯脚部片と甕破片2が出土した。

Tab. 22 B区第11号住居跡出土土器一覧()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	S 杯	底部欠	(9.5)	(2.5)	受け部11.3	細砂を含み、やや軟	灰色	
2	S 蓋	口縁部				胎土精良、焼成良	茶黄色	
3	H 椀	口縁部~体部				胎土精良、焼成良	茶褐色	外面丹塗り
4	H 皿	底部欠	(25.2)	(3.0)	口縁部	砂粒を含み、やや軟	黄褐色	内外面丹塗り
5	H小形甕	底部				砂粒を含み、焼成良	茶赤色	外面スス付着

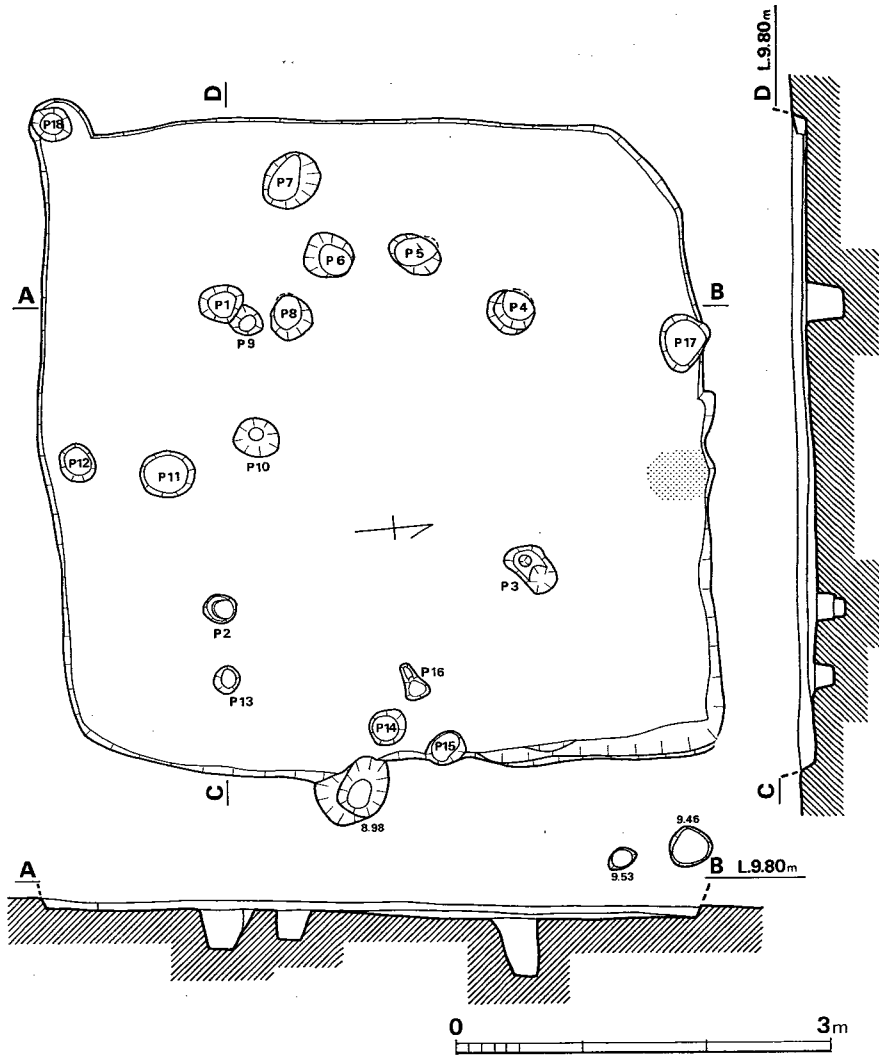


Fig. 49 B区第11号住居跡実測図 (縮尺1/60)

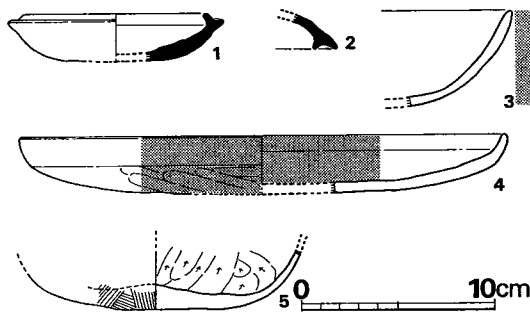


Fig. 50 B区第11号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

床面からの深さ (cm)

- P1(-30.5)・P2(-21.0)・P3(-30.5)・
 P4(-26.0)・P5(-25.0)・P6(-26.0)・
 P7(-21.0)・P8(-21.0)・P9(-26.0)・
 P10(-38.0)・P11(-17.0)・P12(-12.0)・
 P13(-14.0)・P14(- 6.0)・P15(-14.0)・
 P16(-15.0)・P17(-21.0)・P18(-10.0)
- P1~P2 2.43m
 P2~P3 2.4 m
 P3~P4 2.05m
 P4~P1 2.35m

B区第14号住居跡 (Fig. 51, PL. 22)

N140・W5に位置する。主軸を南北方向よりやや東にふっている方形プランの住居跡で、長軸5.1×短軸4.6mを測り、住居跡の北西部でその半分以上を第35号および第34号住居跡に切られており、東西に走る溝を切っている。床面積は23.5m²である。支柱穴はP1・P2が考えられるが、これに対応する柱穴がないため不明である。径はP1 30cm、P2 40cm、床面からの深さはそれぞれ13cm、15cmで、P1・P2間2.5mを測る。現存する部分では炉・カマドとも確認されていない。壁は上部をほとんど削られており、わずかに6~13cmしか残っていない。

遺物 (Fig. 52, Tab. 23, PL. 22)

須恵器・土師器が出土した。土師器は小片のため図示しなかった。

須恵器 (Fig. 52—1~6) 1の蓋は端部がわずかに屈曲する。ツマミがつくかもしれない。

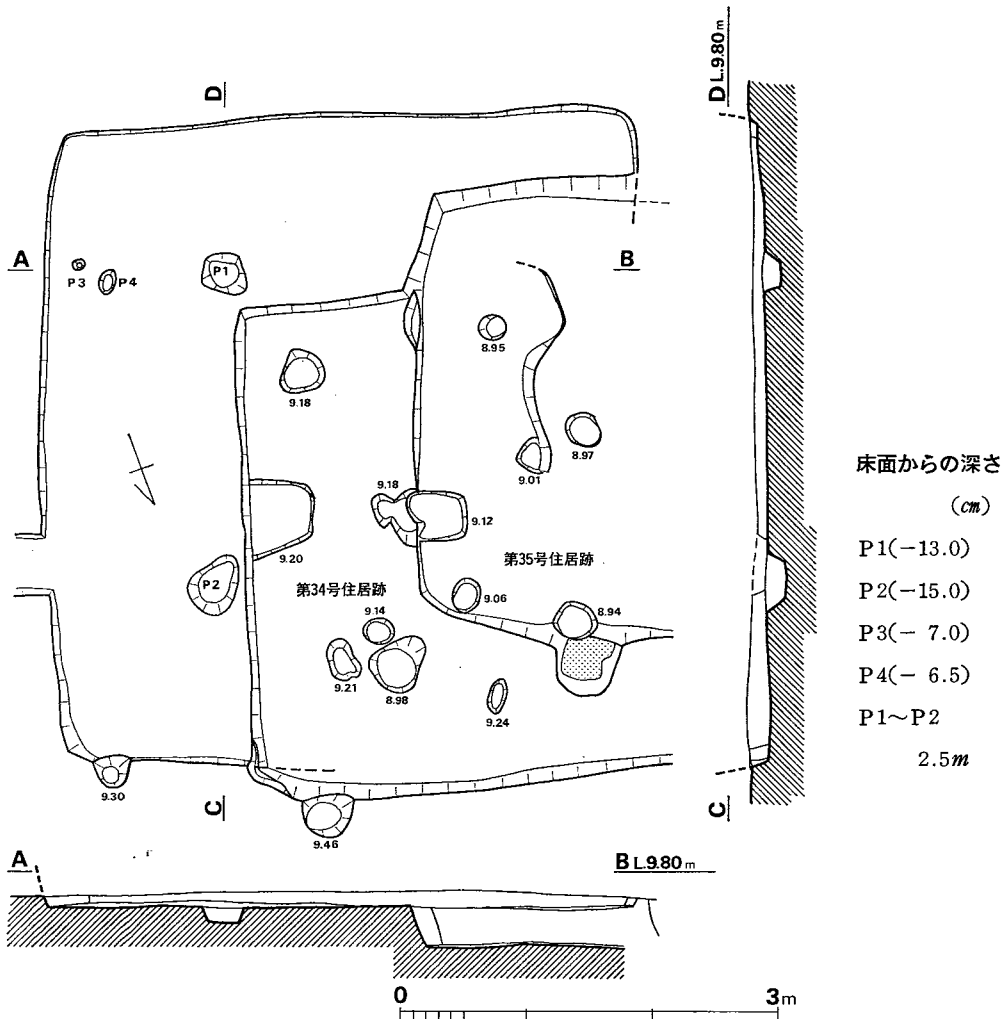


Fig. 51 B区第14号住居跡実測図 (縮尺1/60)

2は完形の杯で、口縁部の立ち上りは、途中で屈曲し、ほぼ垂直に立ち上る。内面底部はナデ、外面はヘラ削り、そのほかはヨコナデである。3は高台のつく杯で、しっかりした高台がつく。4・5は高杯脚部で、5の脚部高は3.2cmと短い。6は甕の口縁部で、端部には段がある。

以上のほか、土師器甕小片2が出土した。

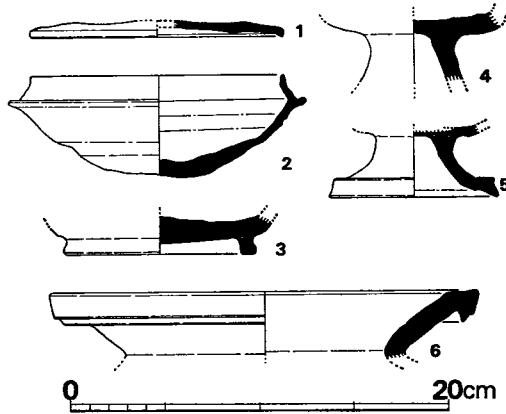


Fig. 52 B区第14号住居跡出土土器実測図（縮尺1/4）

Tab. 23 B区第14号住居跡出土土器一覧（ ）は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	S蓋	天井部欠	(13.3)		口縁部	細砂を含み、堅緻	外面 青黒色 内面 青灰色	
2	S杯	完	13.3	5.4	受け部15.8	細砂を含み、焼成不良	外面 紫灰色 内面 灰色	
3	S高台杯	底部				砂粒を含み、やや軟	灰色	
4	S高杯	脚部				少量の細砂を含み焼成不良	灰色	
5	S高杯	脚部				胎土精良、堅緻	青黒色	
6	S甕	口縁部	(22.8)			細砂を含み、堅緻	黒色	

B区第15号住居跡 (Fig. 53, PL. 25)

N155・W30付近に位置する。各辺の長さは、南東・北西壁3.7m、南西・北東壁3.9mで、床面積14.4m²の隅丸方形プランである。焼土は北西壁の中央に壁に接して検出され、おそらくカマドの痕跡と思われる。この焼土を通る主軸の方位はN67°Wをとる。壁の残存は悪く、深さ3～8cmしかない。支柱穴はP1～P4の4本柱であろう。P1は床面から10cmほどの深さしかなく、やや浅い。

遺物 (Fig. 54, Tab. 24)

須恵器は図示できるものはなく、土師器のみである。

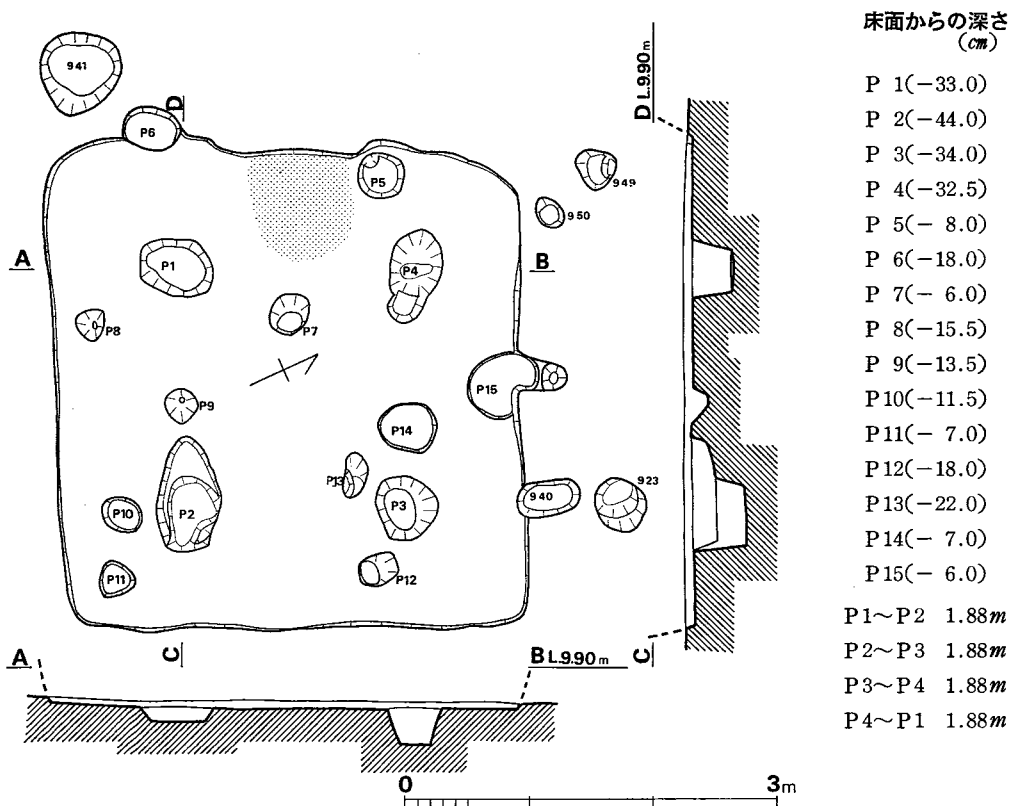


Fig. 53 B区第15号住居跡実測図 (縮尺1/60)

土師器 (Fig. 54-1・2) 1・2 の甕口縁部はいずれも頸部近くで立ち上り、さらに外反する。

以上の他、丹塗り土師器片3、甌片1、内面黒色の杯口縁片1と鉄滓1が出土した。

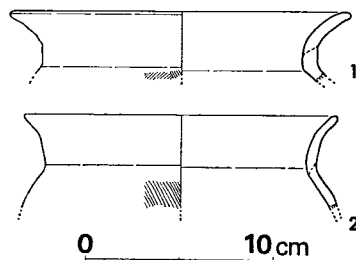


Fig. 54 B区第15号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

Tab. 24 B区第15号住居跡出土土器一覧 () は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	H 甕	口縁部	(18.1)			砂粒を含む	灰褐色	
2	H 甕	口縁部~肩部	(16.6)			細砂を含み、焼成良	黄褐色	

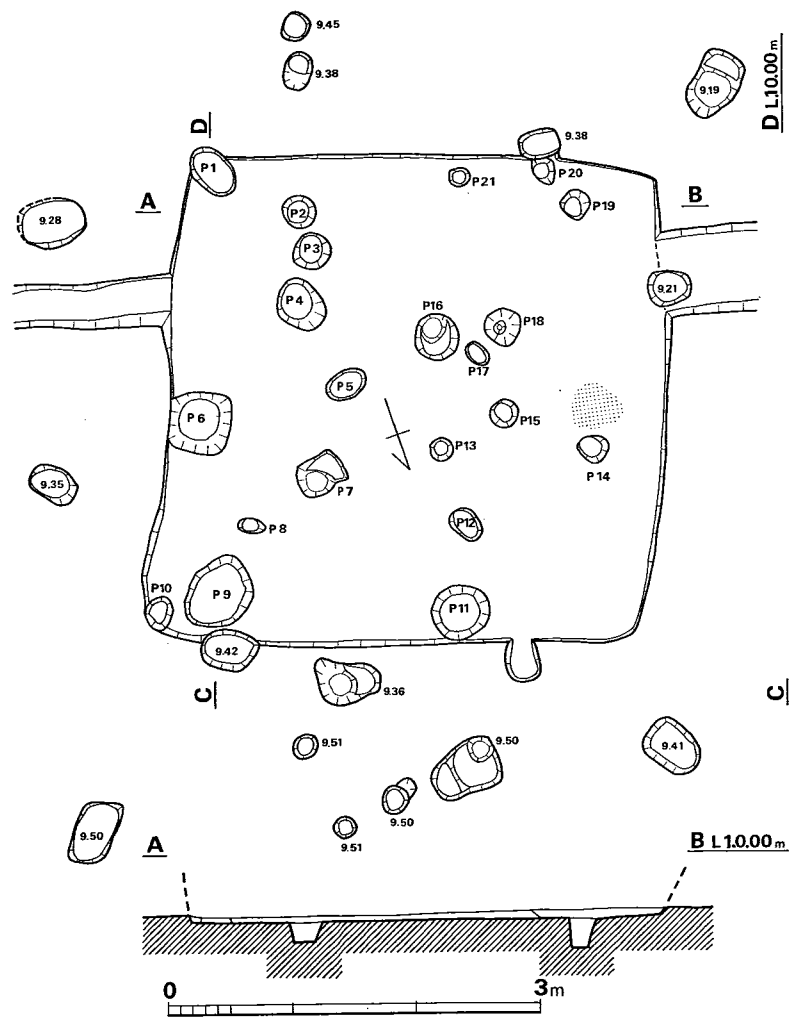


Fig. 55 B区第17号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)

P 1(-13.0)・P 2(-19.5)・P 3(-18.2)・P 4(-19.5)・
 P 5(- 7.8)・P 6(-20.0)・P 7(- 9.0)・P 8(- 9.2)・
 P 9(-14.5)・P 10(-30.5)・P 11(-36.0)・P 12(-11.0)・
 P 13(-17.0)・P 14(-24.5)・P 15(-17.9)・P 16(-42.3)・
 P 17(- 9.0)・P 18(-28.0)・P 19(-23.9)・P 20(-10.6)・
 P 21(- 7.7)

Pit 組み合わせ案 (P2, P9, P11, P19) (P1, P9, P11, P20)
 (P4, P9, P11, P18) (P4, P8, P12, P18)

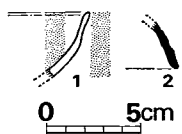


Fig. 56 B区第17号住居跡
 出土遺物実測図 (1) (縮尺1/4)

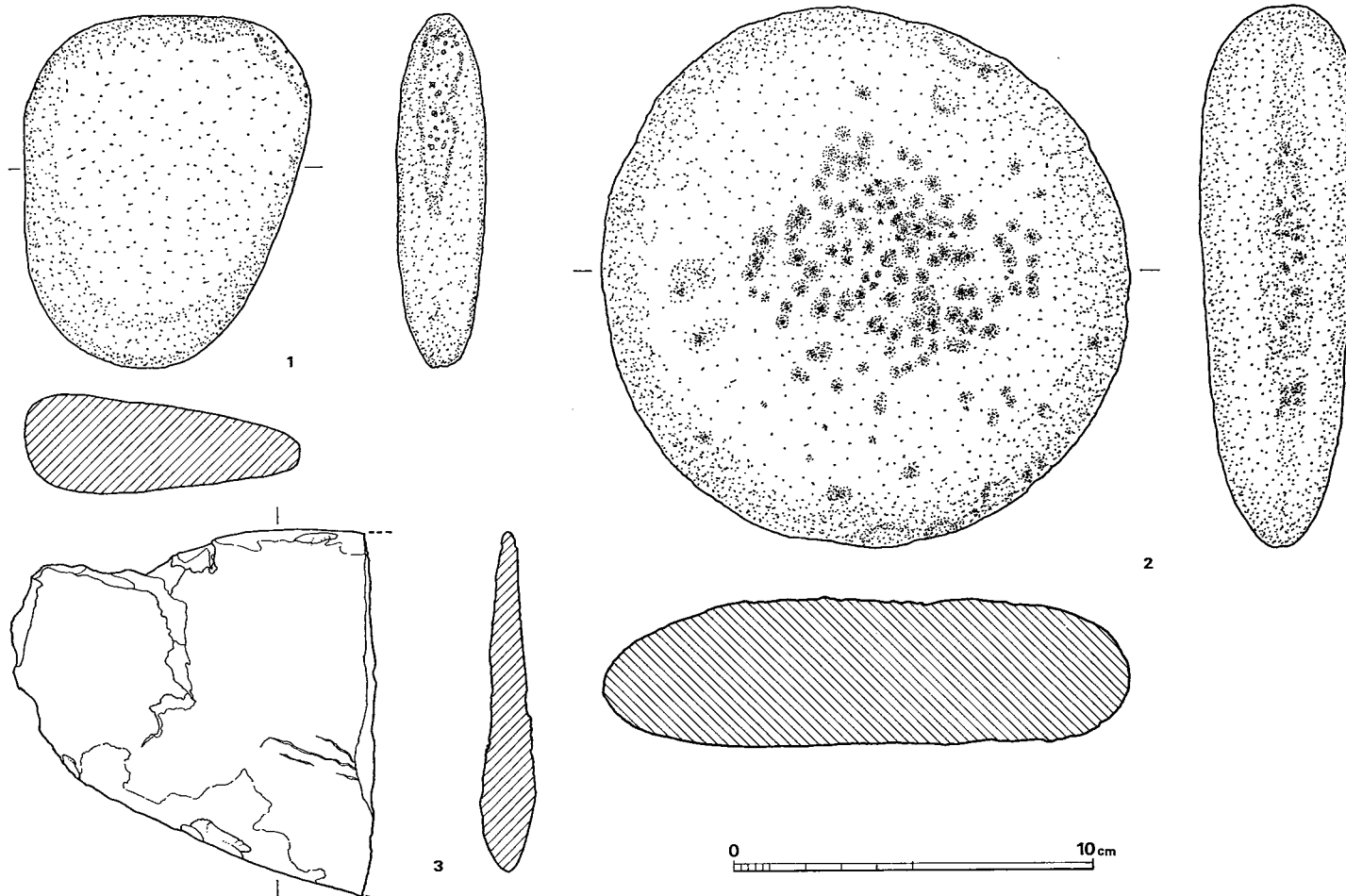


Fig. 57 B区第17号住居跡出土遺物実測図 (II) (縮尺1/2)

B 区第17号住居跡 (Fig. 55, PL. 15)

N120・W27に位置し、北西～南東に傾斜する溝に切られている。方形プランで、各辺とも3.8mを測り、床面積は約14m²である。主軸の方向はN80°Wである。西壁中央よりやや内側に焼土があり、本遺跡例からカマドと推定される。焼土は50×40cmの楕円形である。住居跡内より検出したピットは21個を数えるが、支柱穴の組合せには疑問がある。残存する壁高はそれぞれ東壁7cm、西壁4cm、南壁6cm、北壁6cmである。床面は西壁側の焼土付近が高く、北東隅の南辺付近がもっとも低い。

遺物 (Fig. 56・57, PL. 15)

須恵器・土師器・石器3が出土した。

須恵器 (Fig. 56—2) 2は蓋の口縁片で、内外面ともにヨコナデである。青灰色を呈し、焼成は堅緻である。

土師器 (Fig. 56—1) 1は椀口縁部と思われる。内外面ともに黒色を呈する精製品である。

石器 (Fig. 57—1～3) 1は床面から出土したもので、薄い方の側面に敲打痕[?]がある。重さ310g。2は径15cmほどの円形を呈し、表面に敲打痕がある。これも床面出土である。3は石庖丁の未製品と思われ、刃部・背部は磨かれている。

B 区第18号住居跡 (Fig. 58・59, PL. 16)

N117・W8に位置する。第17号住居跡と同じく、溝に切られている。方形を呈し、東西両辺5.4m、南北両辺5.8mで床面積31m²である。主軸はN20°Eをとる。北壁ほぼ中央に壁に接してカマドがあり、巾1.1m・奥行約1mで、中央部には土製支脚がやや内側に傾いて出土した。柱穴はP1～P6の6本支柱が考えられる。P21・P22はピット間約2mを測り、カマドが中心に位置していることからカマド直上の屋根構造に関連する柱穴と思われる。このほかにも内外にピットがあるが、直接この住居跡に関連するものかどうか疑問である。残存する壁高は東壁30cm、西壁30cm、南壁10cmである。床面はカマドを中心に南側へ長軸柱間が高く、南へ向って若干の傾斜がある。また、西壁下に巾10cm・長さ300cm、南壁下に巾20cm・長さ130cmの溝状落込みがみられ、周溝を有していたと思われる。

遺物 (Fig. 60, Tab. 25, PL. 16)

弥生土器・土師器・須恵器・不明鉄製品・土製支脚が出土した。

弥生土器 (Fig. 60—10・14) 10の壺は丸い体部に「く」字形の口縁部がつく。外面はハケ目調整である。14は頸部近くで一度立ち上り、さらに外反する口縁部をもち、内面は横方向、外面は縦方向のハケ目調整を施す。

須恵器 (Fig. 60—1～3・8) 1～3はいずれも床面出土である。1は肩部に浅い凹線をもち、口縁端部がくぼむ。天井部内面はナデ、外面はヘラ削り、そのほかはヨコナデである。この蓋はかえりが受部より突出する。3の杯は内外面ともヨコナデで、口縁端部は丸く肥厚す

る。8は鉢の底部と思われる。底部は外面から円板状の粘土を貼り付けている。

土師器 (Fig. 60—4~7・9・11~13・16~19) 4~6は杯であるが、4は高杯の可能性もある。7の高杯は脚部内面を除き丹塗りで、杯部はよく磨かれている。脚部外面はヘラ削りの痕が顕著である。9・12・13は甕で、12は床面出土である。いずれも下半以下を欠いているが12の体部は丸味が強い。11は鉢になると思われる。16は把手の欠落した痕がある。17は外面丹塗りである。16・17とも底部を欠き、小形の甕または甗と考えられる。18は焼成後に穿孔された甗で、底部外面に木葉痕がある。16・18は床面出土である。19は大形の甗で、略完形である。把手のやや上がわずかにすぼまり、口縁部は大きくひらく。孔径8.3cmで、床面出土である。

以上のほかに、立ち上りのある黒色の土師器杯、内外面丹塗りの大形の高杯片がある。須恵器では、外面格子目タタキ、内面ヘラ削りで雲母を含み、赤褐色を呈する、やや特殊な土器片が出土した。

不明鉄製品 東南隅付近の床面から出土したが、何であるか不明。

土製支脚 (Fig. 60—15) カマド内より出土した。本遺跡中 確実なのは、この一例のみである。円柱状を呈し、やや傾いている。上面は中央がやや凹む。底部周辺は剥落しているが、現存器表面はナデを施す部分が多い。上端径5.3cm、下端径8.8cm、器高15.0~15.3cmを測る。

Tab. 25 B区第18号住居跡出土土器一覧 ()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	S 蓋	復原完	(13.2)	(4.7)	口縁部	砂粒を含み、堅緻	青灰色	
2	S 蓋	天井部欠	(8.5)		受け部(9.9)	細砂を含み、堅緻	青灰色	
3	S 杯	底部欠	(11.6)		受け部(13.7)	細砂を含み、堅緻	青灰色	
4	H 杯	底部欠	(16.5)		口縁部	胎土精良、焼成良	赤褐色	
5	H 杯	底部欠	(12.9)			胎土精良、焼成良	黄褐色	
6	H 杯	底部				胎土精良、焼成良	黄褐色	
7	H高杯	脚部下半欠	12.5			胎土精良、焼成良	淡黄褐色	内外面丹塗り
8	S 鉢	底部				胎土良、焼成良	灰色	
9	H 甕	口縁部~肩部	(26.3)		胴部	砂粒を含み、焼成良	暗茶色	
10	Y 甕	下半欠	(16.4)		胴部(24.1)	砂粒を含み、焼成良	外面黄灰色 内面灰色	
11	H 鉢	下半欠	(33.2)		胴部(34.8)	砂粒を含み、焼成良	外面黄灰色 内面赤灰色	
12	H 甕	下半欠	(17.5)		胴部	砂粒を多く含み、焼成良	外面黄褐色 内面黄灰色	

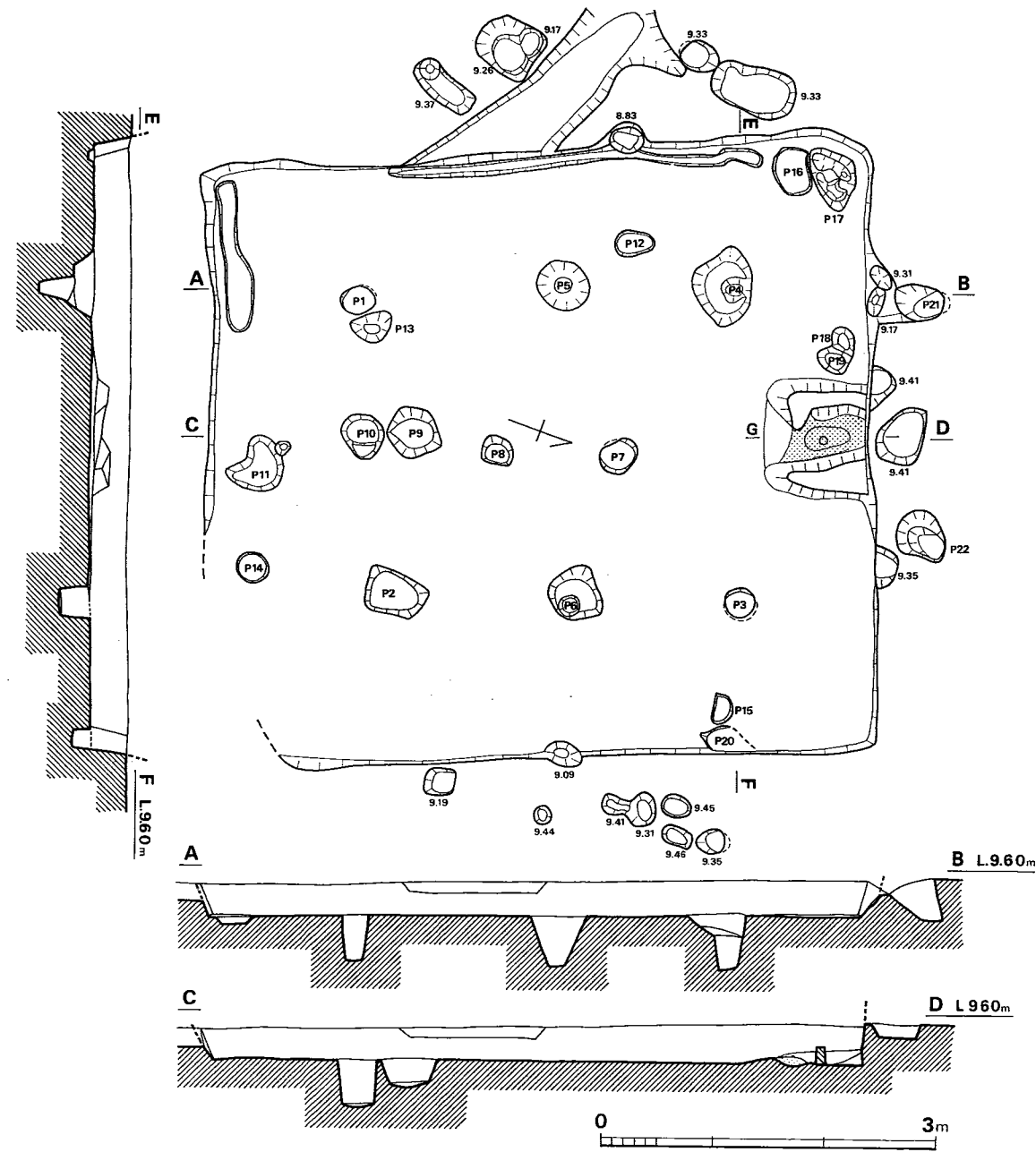


Fig. 58 B区第18号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm) P 1(-43.0)・P 2(-39.5)・P 3(-26.0)・P 4(-48.0)・
 P 5(-48.0)・P 6(-50.0)・P 7(-30.5)・P 8(-18.0)・P 9(-24.0)・P 10(-43.0)・
 P 11(-11.0)・P 12(-13.5)・P 13(-10.0)・P 14(-12.0)・P 15(- 6.0)・P 16(-12.5)・
 P 17(- 8.5)・P 18(- 7.0)・P 19(-10.0)・P 20(-15.0)

P1~P2 2.75m P2~P3 3.20m P3~P4 2.82m P4~P1 3.28m P1~P10 1.25m
 P10~P2 1.50m P2~P6 1.68m P6~P3 1.52m P1~P5 1.55m P5~P4 1.73m

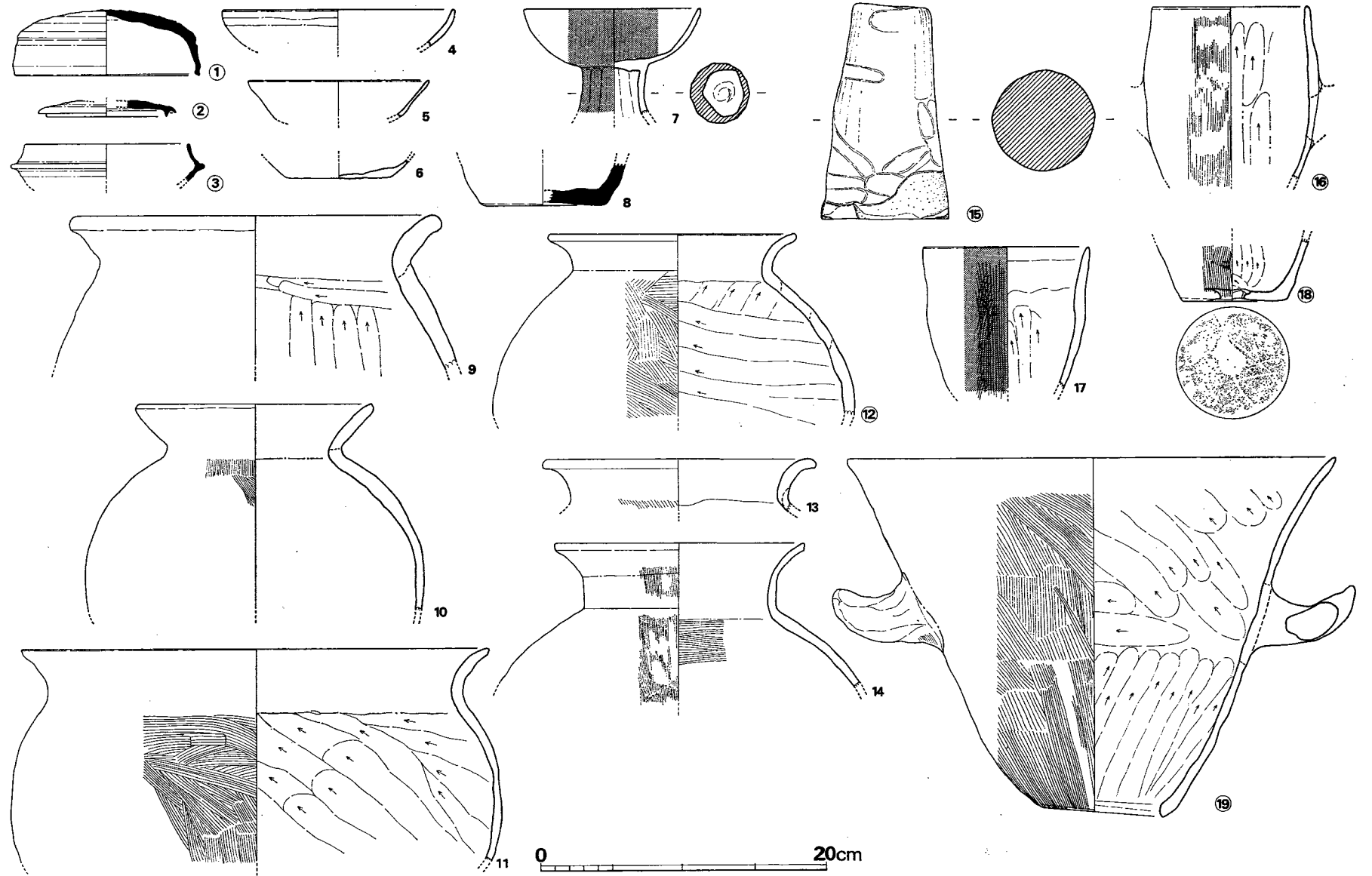


Fig. 60 B区第18号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

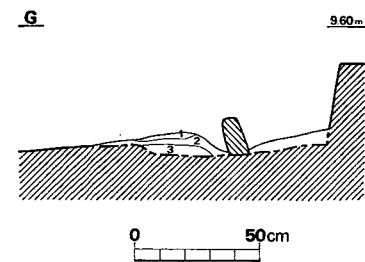


Fig. 59 B区第18号住居跡カマド土層断面図 (縮尺1/30)

土層

- 1 黒褐色粘質土 (赤褐色小ブロックを含む)
- 2 茶褐色粘質土 (灰まじり)
- 3 焼土

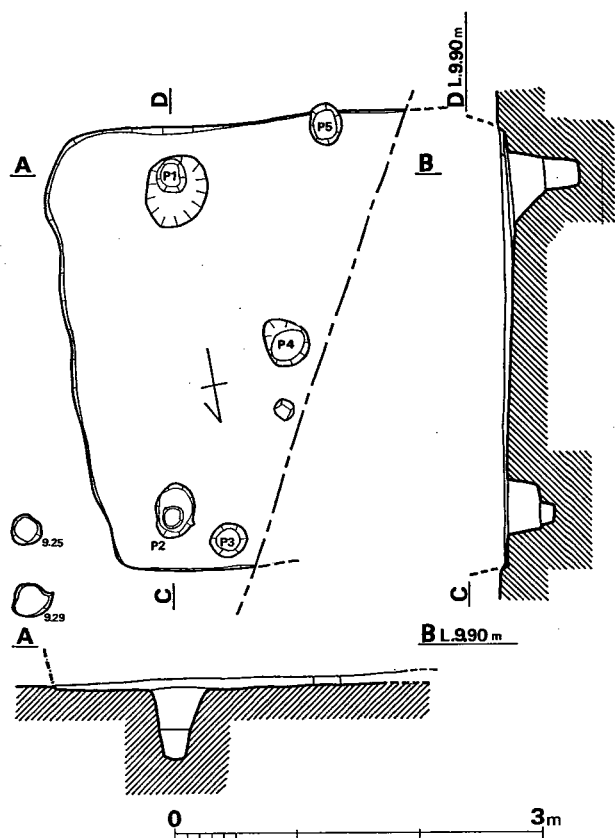


Fig. 61 B区第20号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)

P1(-54.0)・P2(-36.5)・

P3(- 6.5)・P4(-11.0)・

P5(-20.0)

P1~P2 2.75m

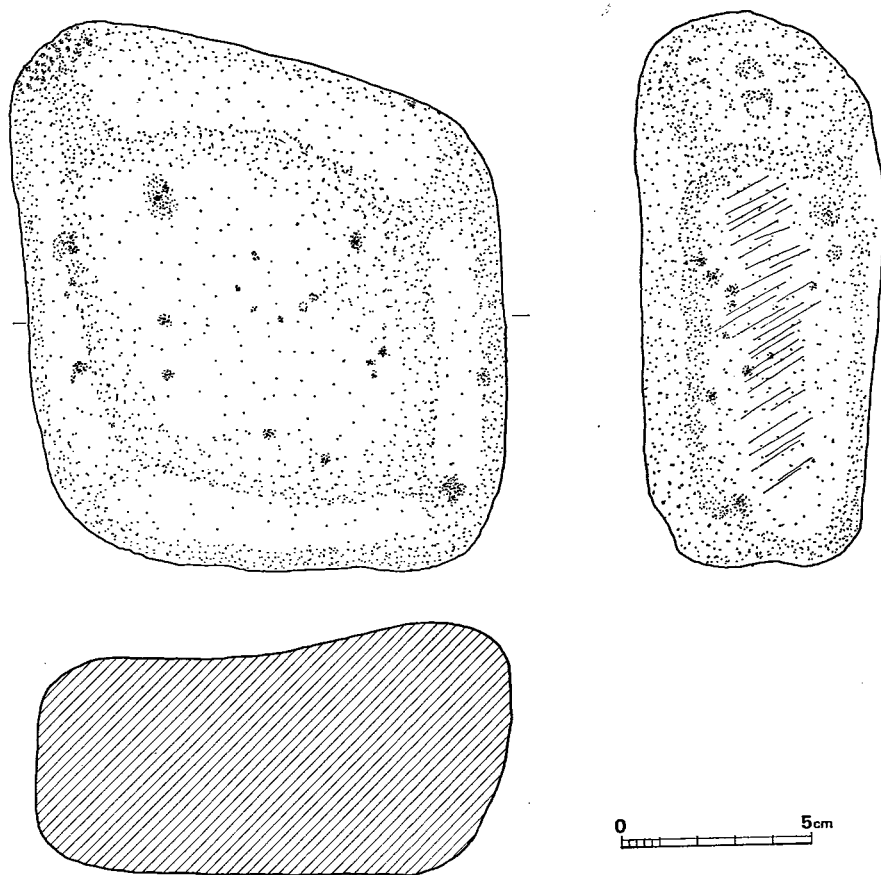


Fig. 63 B区第20号住居跡出土遺物実測図 (Ⅱ) (縮尺1/2)

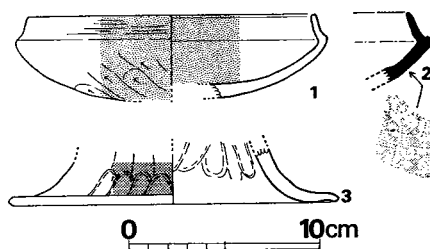


Fig. 62 B区第20号住居跡出土遺物実測図
(Ⅰ) (縮尺1/4)

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
13	H 甕	口縁部	(19.3)			砂粒及び黒雲母を含み、焼成良	黄褐色	
14	Y 壺	口縁部～肩部	(17.4)		胴部	砂粒を含み、焼成良	淡黄灰色	
15	支脚	底部の一部欠		15.3		胎土精良、焼成良	黄褐色	二次加熱、上端部径5.3、下端部径8.8
16	H 甌	底部欠	(11.4)		胴部中位12.5	胎土良、焼成良	茶褐色	
17	H 甌	底部欠	(12.0)		口縁部	胎土良、焼成良	褐色	外面丹塗り
18	H 甌	底部				砂粒を含む	茶褐色	底部に木葉痕
19	H 甌	略完	34.6	25.6	口縁部	大きめの砂粒を含み、焼成良	黄褐色	

B 区第20号住居跡 (Fig. 61)

N165・W10付近に位置する。西半は道路下にあるため検出できなかった。方形または長方形のプランと推定され、東辺の長さは3.6mである。焼土、支柱穴等是不明である。残存壁高3～11cm。

遺物 (Fig. 62・63, Tab. 26)

土師器・須恵器・用途不明石製品が出土した。

須恵器 (Fig. 62—2) 内外面ともヨコナデで、外面にヘラ記号の一部を残している。

土師器 (Fig. 62—1・3) 1は立ち上りのある杯で、内外面とも光沢ある黒色の薄い膜をもつ。3は高杯裾部で、外面は丹塗りである。

用途不明石製品 (Fig. 63) 略方形を呈し、一角が突き出ており、その先端に敲打痕がある。側面には擦痕をもつ。上面は凹んでいるが自然面で、使用の痕跡はない。

なお、P3とP4より炭化物が出土した。

Tab. 26 B区第20号住居跡出土土器一覧()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	H 杯	底部欠	(15.0)	(4.6)	外稜 16.3	胎土精良、焼成良	黄褐色	内外面黒色
2	S 杯	口縁部～体部				胎土精良、焼成良	青灰色	ヘラ記号(一部)
3	H高杯	脚部				胎土精良、焼成良	淡黄褐色	脚端部径16.4 外面丹塗り

B区第23号住居跡 (Fig. 64・65, PL. 43)

N160・W5に位置する。東西4.6m、南北4.3mで、ほぼ方形のプランを有し、床面積19.8㎡である。カマドを通る軸線はN10°Eをとる。カマドは北辺中央のやや西寄りにあり、焼土面上に把手付の鉢が破片となって発見された。また、カマド左脇から甔が倒立して発見された。支柱穴はP1～P4の4本柱と思われる。各隅にはこれら4本よりもやや小さめのピットがそれぞれ検出されているが、補助柱穴であろうか。P1・P3を結ぶ線にほぼ平行して50×110cmの長方形の掘り込みが検出された。また、カマドの両脇は壁に沿って浅く帯状に掘り込まれている。堅穴外に壁より約50cmほど離れてカマドと対称の位置に2つのピットが検出されているが、本住居跡に伴うものか不明である。残存壁高は25～30cmで、本遺跡では残りの良好な例である。

遺物 (Fig. 66・67, Tab. 27, PL. 43)

須恵器・土師器、不明鉄製品・石庖丁が出土した。

須恵器 (Fig. 66—1～13・17) 1～9は蓋である。いずれも外面肩部に凹線をもち、口縁部内面は段状または凹線状を呈する。10～13は杯で、10・11は12・13に比べやや小形である。また立ち上りも12・13の方が長い。17は平瓶の口縁部と思われる。口縁端部内面に凹線をもつ。

土師器 (Fig. 66—14～16・18～25) 14～16は杯で、15は床面出土である。外面は黒色を呈し、光沢がある。16は内面丹塗りである。18は内外面丹塗りの高杯杯部で、復原口径26.3cmを測る大形品である。19・20は小形の甔で、20はとくに小形品と思われる。24は甔の大形品で、上半に補修孔をもち、外面に赤黄色の薄い膜がある。カマド左横から倒立して出土した。(PL. 43)。25は内外面丹塗りで片把手の欠失した痕がある。カマド内より出土した。21～23は把手で、21・23は一部にハケ目を残している。以上の他に、須恵器では壺・腺・提瓶の小片があり、土師器では立ち上りのある杯口縁片が出土した。

石庖丁 (Fig. 67) 結晶片岩製の小片で、背部の一部と1孔を残している。ピット内から出土した。

Tab. 27 B区第23号住居跡出土土器一覧()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	S 蓋	1/2	(13.5)	4.7	口縁部	砂粒を含み、堅緻	灰色	
2	S 蓋	天井部欠	(13.6)		口縁部	砂粒を含み、堅緻	青紫灰色	
3	S 蓋	天井部欠	(13.5)		口縁部	砂粒を含み、堅緻	明黄褐色	
4	S 蓋	略完	13.5	3.6	口縁部	少量の砂粒を含む、やや軟	外面 黄褐色 内面 青灰色	
5	S 蓋	天井部欠	(12.8)		口縁部	砂粒を含み、堅緻	紫灰色	
6	S 蓋	天井部欠	(12.2)		口縁部	砂粒を含み、やや軟	茶褐色	

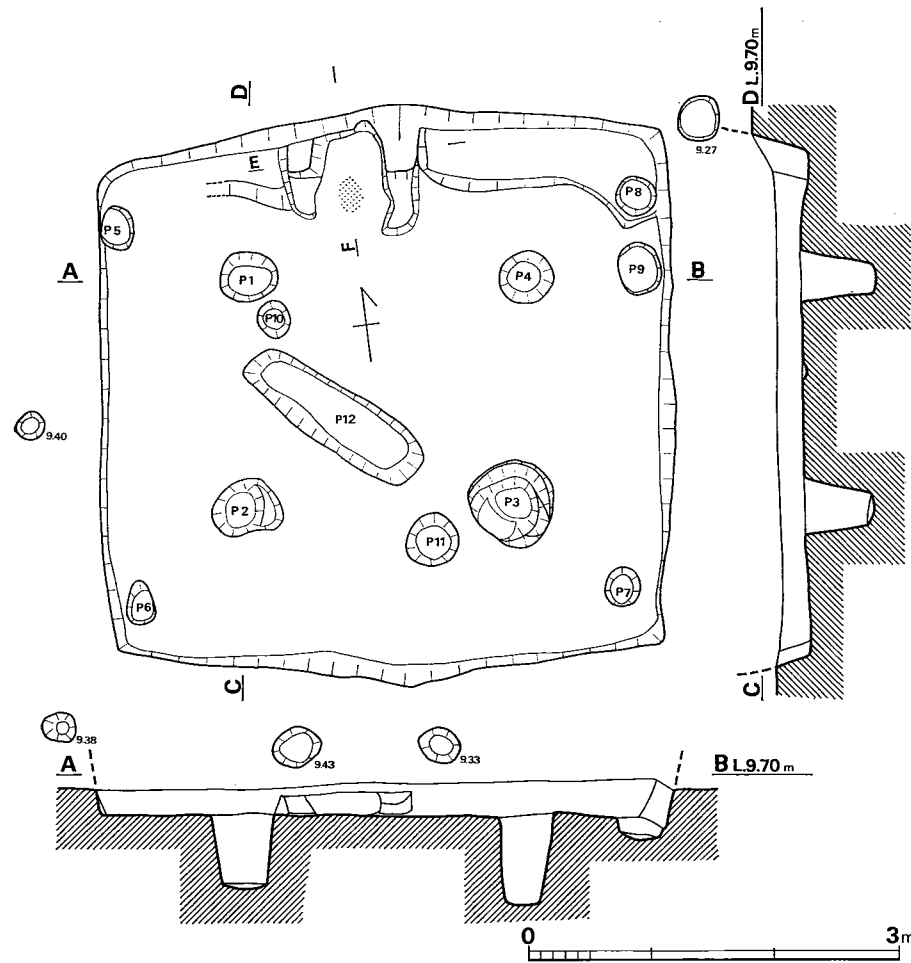


Fig. 64 B区第23号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm) P 1(-60.0)・P 2(-57.0)・P 3(-57.5)・
 P 4(-69.0)・P 5(-47.0)・P 6(-40.0)・P 7(-49.0)・P 8(-50.0)・
 P 9(-13.0)・P 10(-24.0)・P 11(-40.0)・P 12(-17.0)

P1~P2 1.96m P2~P3 2.15m P3~P4 1.82m P4~P1 2.25m
 P1~P5 1.15m P2~P6 1.16m P3~P7 1.13m P4~P8 1.15m
 P5~P6 3.07m P6~P7 3.88m P7~P8 3.22m P8~P5 4.19m

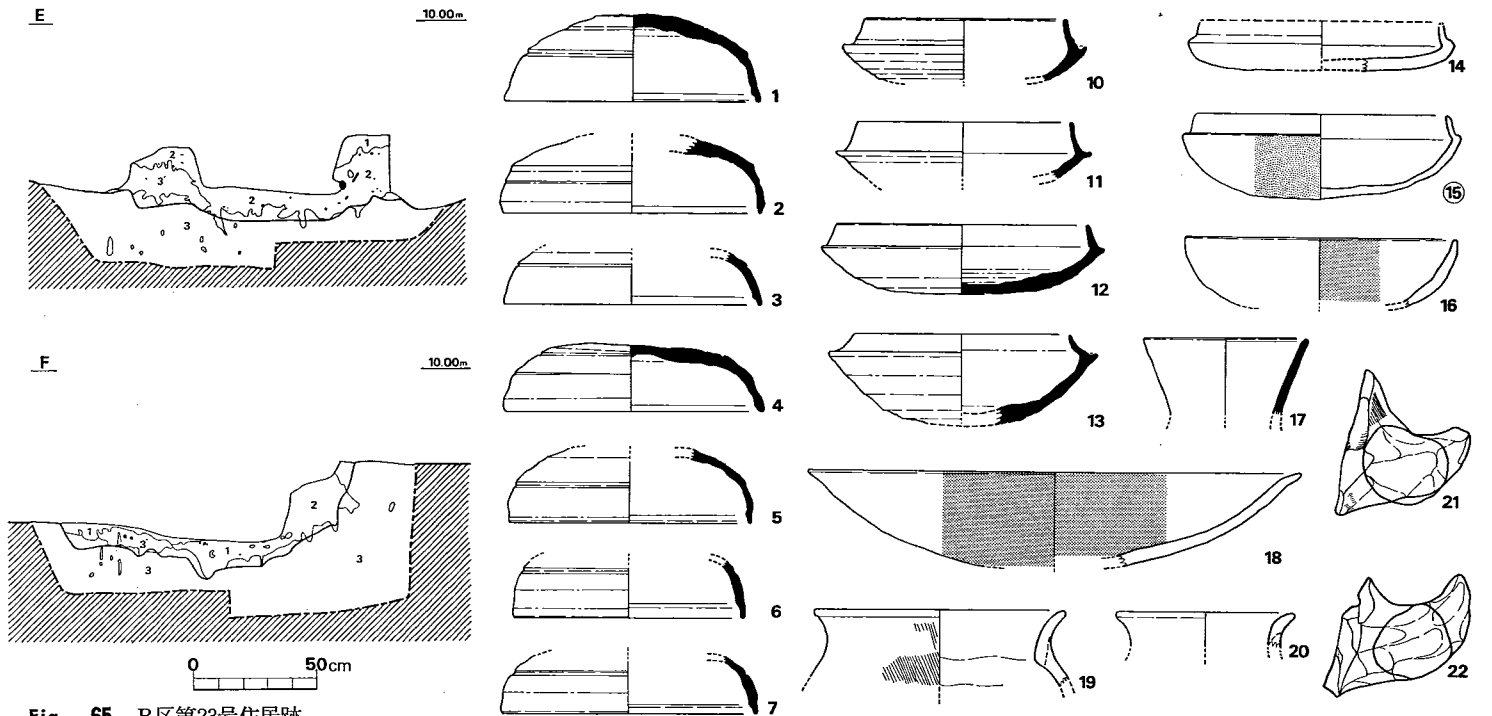


Fig. 65 B区第23号住居跡
 カマド土層断面図 (縮尺1/30)

土層

- 1 黒茶褐色粘質土 カマド西ソデの最上層部を構成する。
- 2 暗茶褐色粘質土 カマド両ソデと中央部を構成し、土層と共に「つくりつけ」を裏付ける。
- 3 茶褐色粘質土地山。

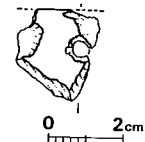


Fig. 67 B区第23号住居跡出土遺物実測図 (II) (縮尺1/2)

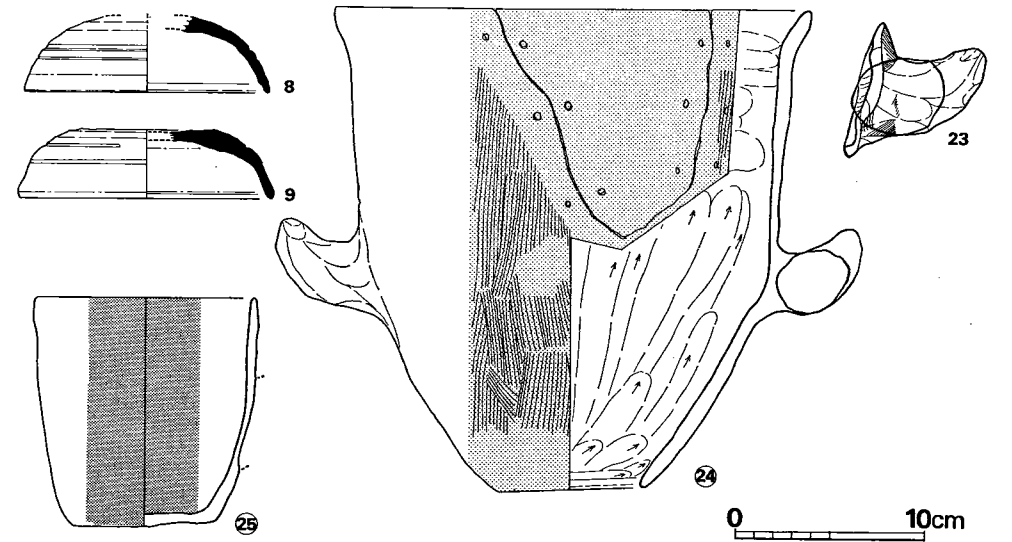


Fig. 66 B区第23号住居跡出土遺物実測図 (I) (縮尺1/4)

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
7	S 蓋	天井部欠	(13.8)		口縁部	砂粒を含み、やや軟	青灰色	
8	S 蓋	天井部欠	(13.0)		口縁部	砂粒を少量含み、堅緻	外面 青黒色 内面 紫灰色	
9	S 蓋	天井部欠	(13.6)	3.6	口縁部	砂粒を少量含み、堅緻	青灰色	
10	S 杯	底部欠	(10.8)		受け部(12.9)	細砂を含み、堅緻	青灰色	
11	S 杯	底部欠	(11.4)		受け部(13.5)	細砂を含み、堅緻	青灰色	
12	S 杯	復原完	(13.3)	3.8	受け部(14.9)	細砂を含み、やや軟	黄灰色	
13	S 杯	底部欠	(11.4)	(4.9)	受け部(14.2)	細砂を含み、堅緻	黄褐色	
14	H 杯	底部と口縁端部欠	(12.8)	(2.6)	外稜 (14.2)	胎土精良、焼成良	黄褐色	
15	H 杯	略完	13.2	4.6	外稜 14.7	胎土精良、焼成良	外面 黄灰色 内面 茶黄色	外面黒色
16	H 杯	底部欠	(14.5)		口縁部	胎土精良、焼成良	黄褐色	内面丹塗り
17	S 平瓶	口縁部	(8.0)			胎土精良、焼成良	青黒色	
18	H 高杯	杯部	(26.3)		口縁部	胎土精良、焼成良		内外面丹塗り
19	H 小形甕	口縁部	(13.4)			少量の砂粒を含み、焼成良	黄褐色	
20	H 小形甕	口縁部	(9.6)			少量の砂粒を含み、焼成良	黄褐色	
21		把手				少量の砂粒を含み、焼成良	黄褐色	
22		把手				大きめの砂粒を含み、焼成良	黄褐色	
23		把手				砂粒を含み、焼成良	黄褐色	
24	H 甌	略完	25.3	25.5	口縁部	砂粒を含み、焼成良	赤黄色	外面化粧土
25	H 把手付鉢	把手欠	11.4	12.1	口縁部	胎土精良、焼成良	赤黄色	内外面丹塗り

B 区第24号住居跡 (Fig. 68・69, PL. 48)

N181・W4に位置する。主軸を南北方向より20°東へふった方形プランの住居跡で、北東部がややふくらんでいる。長軸3.6×短軸3.1m、床面積12.24㎡をはかり、やや小形の住居跡で、北壁中央部にカマドをもっている。カマドは巾50cm、奥行約57cmで、上部をほとんどけずられているため構造は不明である。カマドの支脚として石を用いており、焼土も直径40cmの範囲で認められる。住居跡内にピットは12個検出されたが、支柱穴は4個(P1～P4)確認されており、径は35～55cm、深さ23～41cmをはかる。壁の高さは6～11cmと残りはよくない。

遺物 (Fig. 70, Tab. 28, PL. 48)

弥生土器・土師器・須恵器を出土した。弥生土器は甕頸部小片で図示しなかった。

須恵器 (Fig. 70—6) ツマミのみで、頂部は断面三角形を呈する。

土師器 (Fig. 70-1~5) 1~4は杯で、そのうち1・2は立ち上りをもつ。1は内面黒色を呈し、外面は黄褐色の薄い膜をもつ。2の口縁部はほぼ垂直に立ち上り、わずかの段状を呈している。3の口縁部は内彎する。5は小形の甕で、内面は横方向のヘラ調整である。

以上のほか、床面より約150片の土師器小片が出土した (鉢1片を含む)。また須恵器には杯口縁片がある。

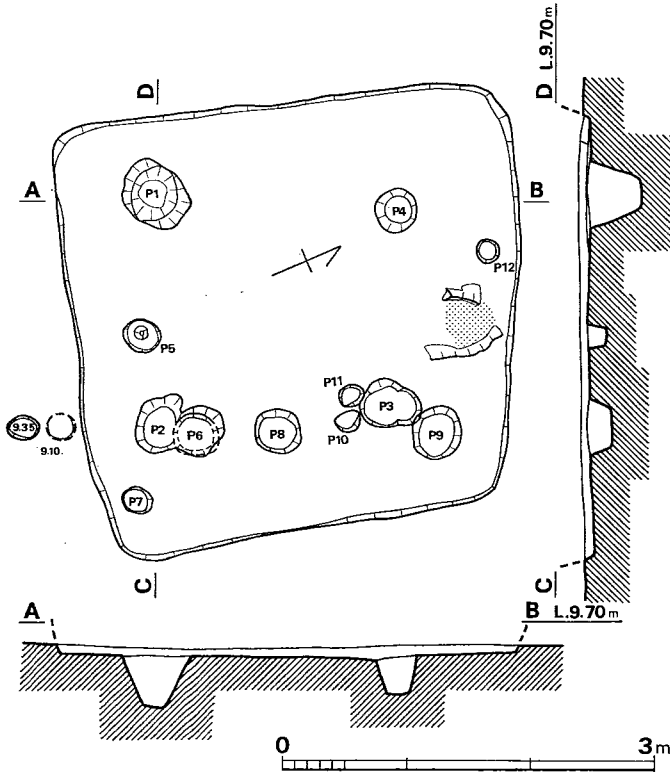


Fig. 68 B区第24号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm) P 1(-41.0)・
 P 2(-20.0)・P 3(-23.0)・P 4(-28.0)・
 P 5(-20.0)・P 6(-14.0)・P 7(-21.0)・
 P 8(-20.0)・P 9(-20.0)・P 10(- 1.5)・
 P 11(- 7.0)・P 12(-11.0)
 P1~P2 1.88m P2~P3 1.82m
 P3~P4 1.58m P4~P1 1.96m

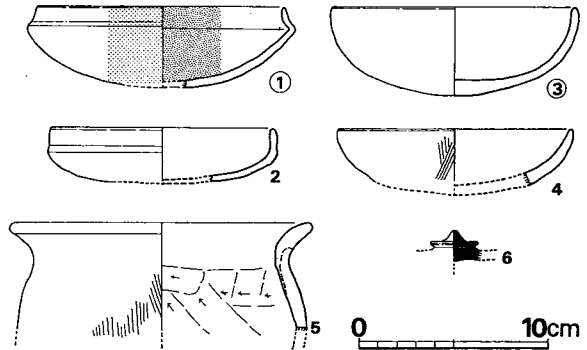


Fig. 70 B区第24号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

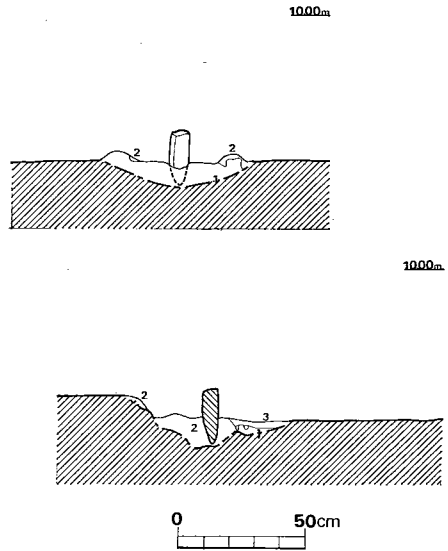


Fig. 69 B区第24号住居跡
 カマド土層断面図 (縮尺1/30)

土層

- 1 茶褐色粘質土
- 2 暗茶褐色粘質土
- 3 赤褐色粘質土 (焼土)

Tab. 28 B区第24号住居跡出土土器一覧 () は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	H杯	底部欠	(13.1)	(4.4)	外稜(14.2)	胎土精良、焼成良	外面 黄褐色 内面 黒色	外面 化粧土 内面 黒色化
2	H杯	底部欠	(11.9)		外稜(12.2)	胎土精良、焼成良	黄褐色	
3	H杯	1/2	(13.3)	4.7		砂粒を含み、焼成良	黄褐色	
4	H杯	底部欠	(12.6)			砂粒を含み、焼成良	黄褐色	
5	H小形甕	口縁部～肩部	(16.2)			砂粒を含み、焼成良	暗黄褐色	
6	S蓋	ツマミ				胎土精良、堅緻	青灰色	

B区第26号住居跡 (Fig. 71)

N103・W28に位置する。後世の溝（B区とC区を分けた小川）によりその大半を失い、詳細は不明である。

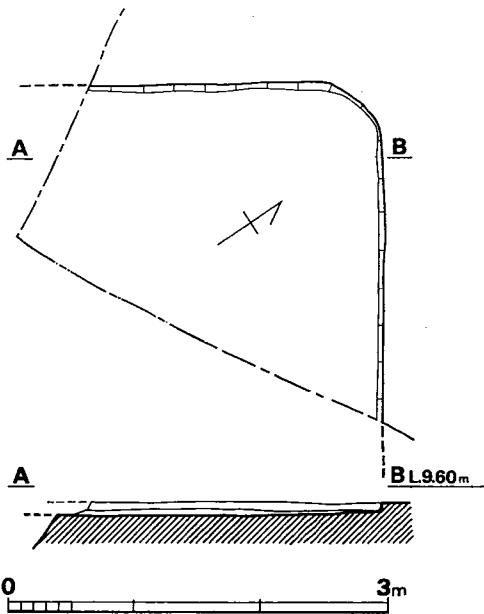


Fig. 71 B区第26号住居跡実測図 (縮尺1/60)

Fig. 72 B区第26号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

遺物 (Fig. 72)

縄文土器片2、弥生土器片1、土師器11片、須恵器1片が出土した。土師器には甕、甕があり、図示できるのはFig. 72の甕口縁部片のみである。

B区第28号住居跡 (Fig. 73)

N119・W12に位置する。南側約半分を後世の溝（B区とC区を分ける小川）に切られており、全体を知ることができない。西壁のみが残存し、長さ3.4mを測る。

遺物

図示できるものは一片もない。

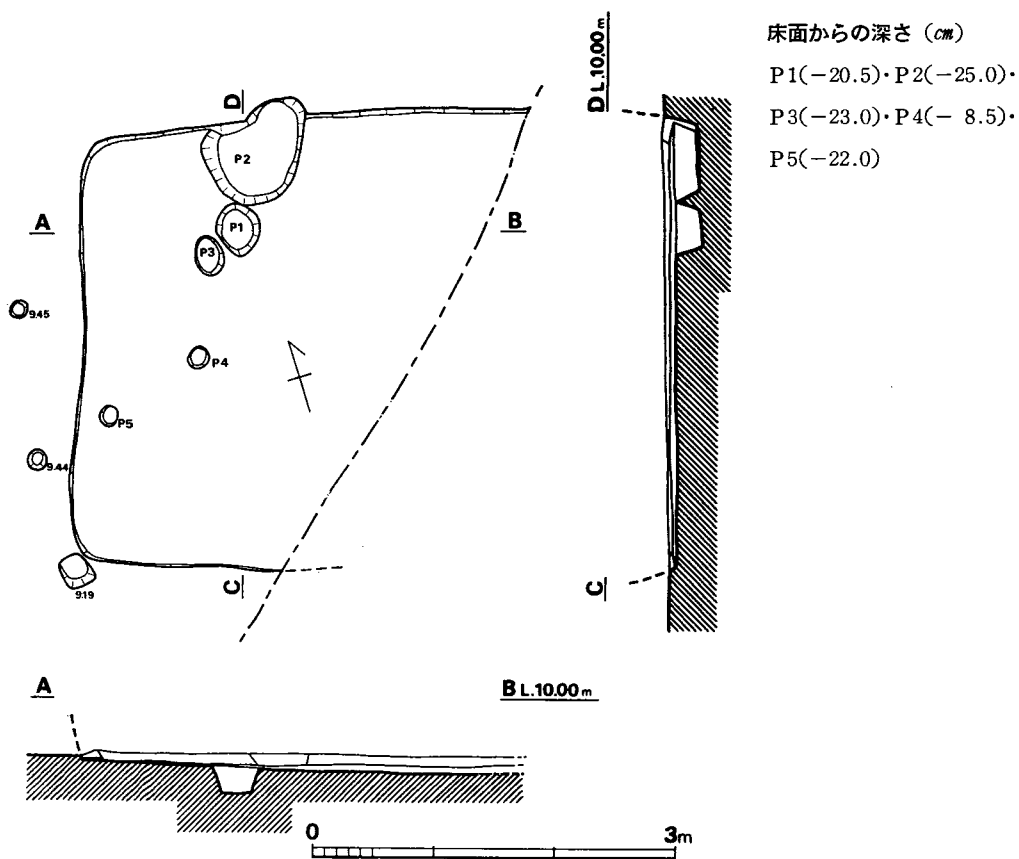


Fig. 73 B区第28号住居跡実測図 (縮尺1/60)

B区第29号住居跡 (Fig. 74, PL. 19)

N124・W13に位置する。方形プランで、東辺4.6m、西辺3.9m、南辺4.0m、北辺3.8m、床面積は約16m²である。各辺とも残存壁高は8cm前後である。主軸はN10°Eをとる。カマドは北壁中央やや西側にあり、焼土範囲は50×70cmと北壁外へ若干突き出ている。焼土中央の壁寄りに高杯が倒立して出土した。おそらく支脚として使用されたものであろう。支柱穴はP2・P4・P6・P11・P13・P14の6本が考えられる。床面は6本の支柱穴の間が高く、壁近くは低い。全体的には南側へ若干傾斜している。

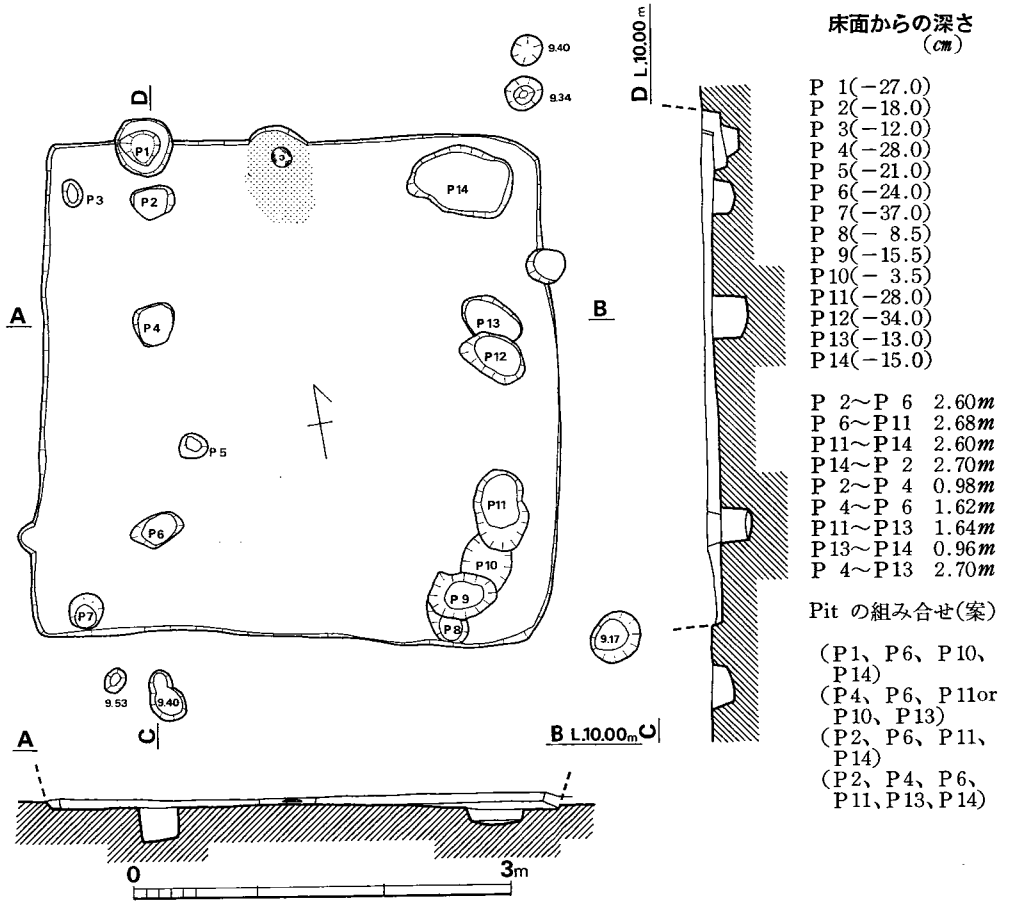


Fig. 74 B区第29号住居跡実測図 (縮尺1/60)

遺物 (Fig. 75, Tab. 29, PL. 19)

土師器・須恵器が出土した。

須恵器 (Fig. 75—1) 1は高台のつく杯で、内面はナデ、外面底部はヘラ削り、高台から底部にかけてはヨコナデである。

土師器 (Fig. 75—2・3) 2の高杯はカマド内から倒立して発見されたもので、略完形である。脚端部などに須恵器の形態が見られるが、胎土・調整および器面に赤褐色の薄い膜があることなどから土師器とした。全体に二次的な火熱を受けている。3は小形の甕と思われる。内

面はヘラ削り、口縁部ヨコナデ、外面はハケ目調整である。二次的な火熱を受けている。

このほか須恵器杯口縁部片がある。

骨片が出土しているが、すべて小片にくずれており、何の骨であるか不明である。

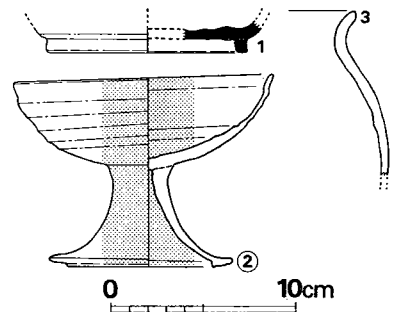


Fig. 75 B区第29号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

Tab. 29 B区第29号住居跡出土土器一覧 () は推定値、単位 *cm*

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	S高台杯	底部				胎土精良、焼成良	灰褐色	
2	H高杯	略完	19.1	9.9~10.5		胎土精良、焼成良	赤褐色	化粧土
3	H小形甕	口縁部~体部				胎土精良、焼成良	外面 赤褐色 内面 明茶褐色	二次加熱

B区第31号住居跡 (Fig. 76, PL. 21)

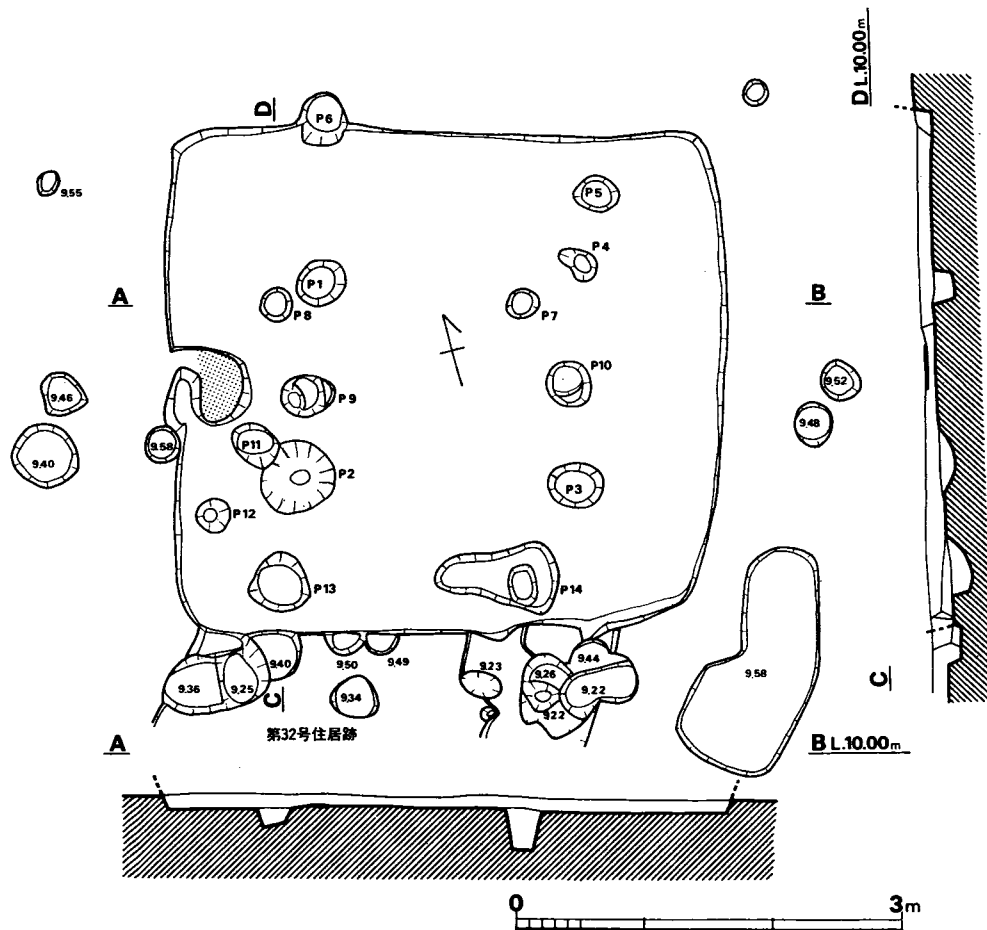


Fig. 76 B区第31号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm) P 1(-56.0)・P 2(-49.5)・P 3(-22.0)・P 4(- 5.0)・
P 5(-15.5)・P 6(-15.5)・P 7(-35.0)・P 8(-14.0)・P 9(-14.0)・P 10(-17.0)・
P 11(-14.5)・P 12(-24.5)・P 13(-32.5)・P 14(-12.0)
P 1~P 2 1.58m P 2~P 3 2.13m P 3~P 4 1.88m P 4~P 1 2.06m

N130・W20付近に位置する。第32号住居跡と重複しており、本住居跡の方が新しい。北辺4.1m、西辺3.9m、南辺3.9m、東辺3.8mのほぼ方形のプランで、面積は15.6㎡である。西壁中央に、壁に接して焼土が検出され、これをカマドの痕跡とすると、焼土を通る軸線はN77°Wをとる。ピットは住居内に14個検出されたが、支柱穴はP1～P4の4個と思われる。北から順にP6・P1・P9・P2・P13は一直線上に並び、またP5・P4・P10・P3も一直線上にある。壁の残存は9.5～15cmと良くない。

遺物 (Fig. 77, Tab. 30)

弥生土器・土師器・須恵器を出土したが、図示できるのは弥生土器のみである。

弥生土器 (Fig. 77—1～3) 1・3は高杯である。3は口縁部外端をヨコナデした後、端部の上下をつまんでヨコナデを施したため、若干の凹みを呈し、口縁下半部へと大きく屈折する。下半部は、ほぼ直線的に外方向に開くが、杯部との接合部で内外ともに明瞭な稜を有して屈折するが、外面接合部に段差があり、一種の三角突帯様の感をうける。杯部は内外面ともにナデ整形後に、内面ヘラによる暗文的な痕を認める。胎土は精製されている。

他に鉢の口縁部片と思われる2が出土しているが、破片で明確な時期は示せない。高杯は弥生後期後半であるが、住居跡からはカマド施設が検出されており、古墳期の住居跡と考えられ、遺構に直接伴うものではない。

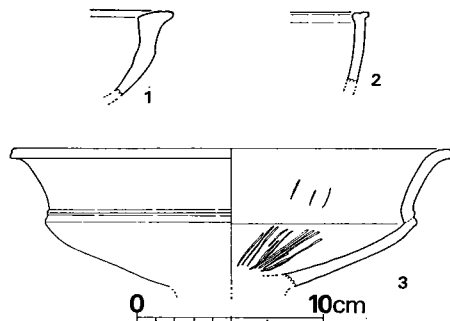


Fig. 77 B区第31号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

Tab. 30 B区第31号住居跡出土土器一覧 ()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	Y高杯?	杯部片				砂粒を多量に含み、焼成は良	黄褐色	
2	Y鉢	口縁部片				砂粒を含み、焼成は良	黄褐色	
3	Y高杯	杯部	23.5			精製されており、焼成は良	黄褐色、一部黒褐色	暗文有り

B区第32号住居跡 (Fig.78, PL. 21)

N125・W20付近に位置する。第31号住居跡と重複しており、本住居跡の方が古い。南西辺は3.5mで、北西辺は1.4mを検出した。南東辺は新しいピット (P8・P10) によって切られている。焼土・柱穴等は不明である。残存壁高は10cm前後しかない。

遺物 (Fig.79, Tab. 31, PL. 21)

弥生土器・土師器・須恵器が出土した。須恵器は小片のみで、図示しなかった。

弥生土器 (Fig.79—1・5) 1は壺で、若干外彎気味ではあるがほぼ直線的に開く口縁部は、外面ハケ目状整形後にヨコナデ調整を一部に施し、内面は整形痕をそのまま残す。内外面ともに整形痕は粗く、口縁部中位で器壁が若干ふくらみ、口縁端部は稜を有しているが、これはヨ

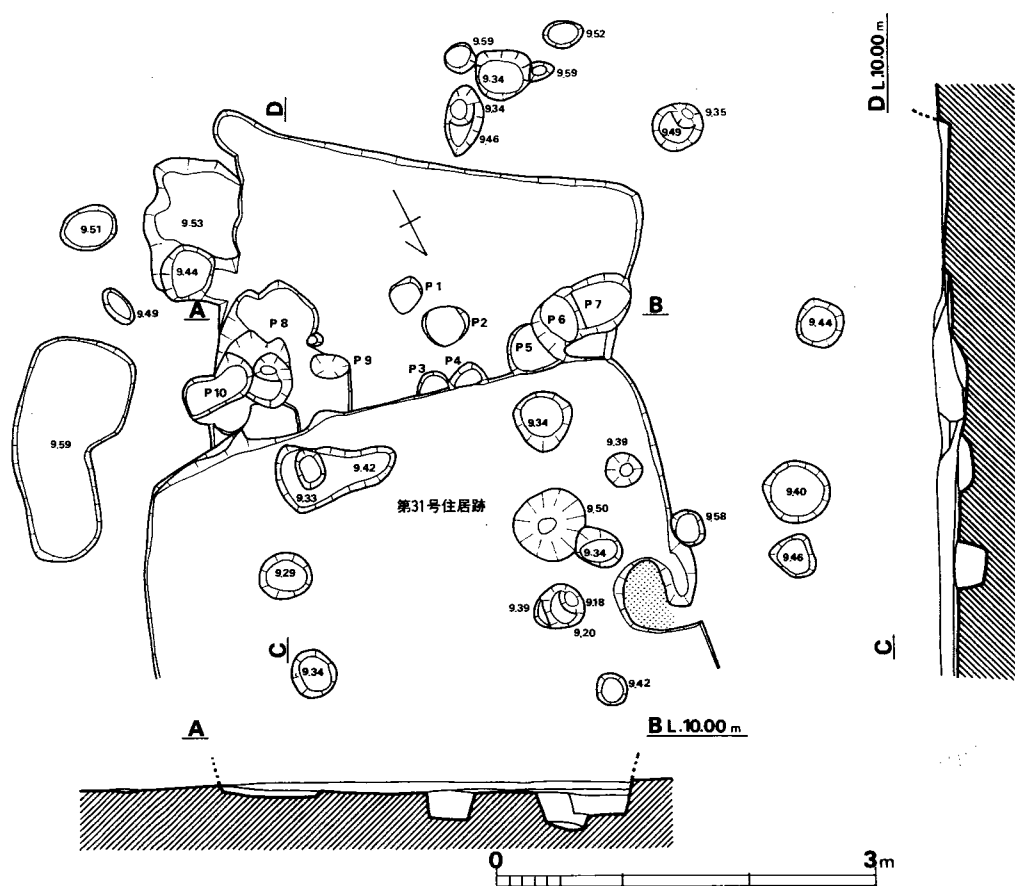


Fig. 78 B区第32号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm) P 1 (-18.0)・P 2 (-31.0)・P 3 (-14.5)・P 4 (-20.0)・
P 5 (-5.0)・P 6 (-3.5)・P 7 (-13.0)・P 8 (-31.0)・P 9 (-10.0)

コナデ調整が強いため、引き伸ばされて若干凹みを呈する。この期の甕の特徴に通じるものである。5の甕は、口縁部および胴部内面に粗いハケ目状整形を施し、口唇部のみ丁寧なヨコナデでシャープな平坦に仕上げる。胴部外面はタタキ成形後、上半部のみ縦方向のハケ目状整形を施す。

以上の土器は、弥生後期後半のものであり、直接本遺構に伴うものではない。

土師器 (Fig.79—2~4・6~9) 2は高杯杯部片と思われる。口縁部および内面はナデ、外面はヘラ調整である。3・4は鉢であろう。4の口唇上端は丸味をもち、端部外面はわずかにふくらむ。内外面ともハケ目調整の後ナデている。6は平底の杯で、底部外面はヘラ切りである。7の碗は、底部の一部を欠くが、ほぼ全形がわかる。底部は凸面状を呈している。内面はナデ、外面は一部にハケ目を残している。8は高杯の脚部で、内面上部は縦方向のヘラ削り、下部は横方向のハケ目調整である。9の甕は肩部から口縁部へ滑らかに移行し、端部は内側へわずかに肥厚する。内面は斜め方向のハケ目、外面は縦方向のハケ目調整である。

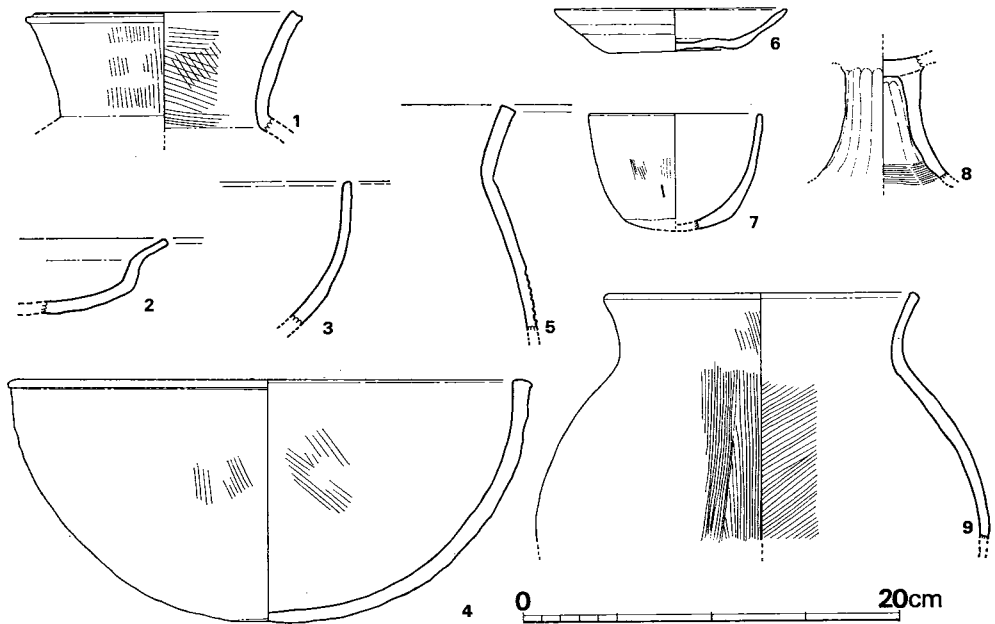


Fig. 79 B区第32号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

Tab. 31 B区第32号住居跡出土土器一覧 ()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	Y 壺	口縁部片	(14.8)			砂粒を含み、焼成は普通	器内 淡黄色 器外 黄褐色	器周残 1/4
2	H高杯?	杯部片?				砂粒を含み、焼成は良	黄灰色	

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
3	H鉢	口縁部片					黄褐色	
4	H鉢	略完	27.8	12.8		細砂を多く含み、焼成良	淡茶黄色	器周残 2/3
5	Y甕	破片				砂粒を含むが、焼成は非常に良	褐色	
6	H杯	復原完	(12.4)	(2.3)	口縁部	胎土精良、焼成良	淡黄色	
7	H碗	底部	(9.2)	(6.2)	口縁部	胎土精良、焼成良	茶黄色	
8	H高杯	脚部				胎土精良、焼成良	茶黄色	
9	H甕	口縁部～体部	(16.8)		体部	砂粒を含み、焼成良	黄褐色	

B区第33号住居跡 (Fig. 80)

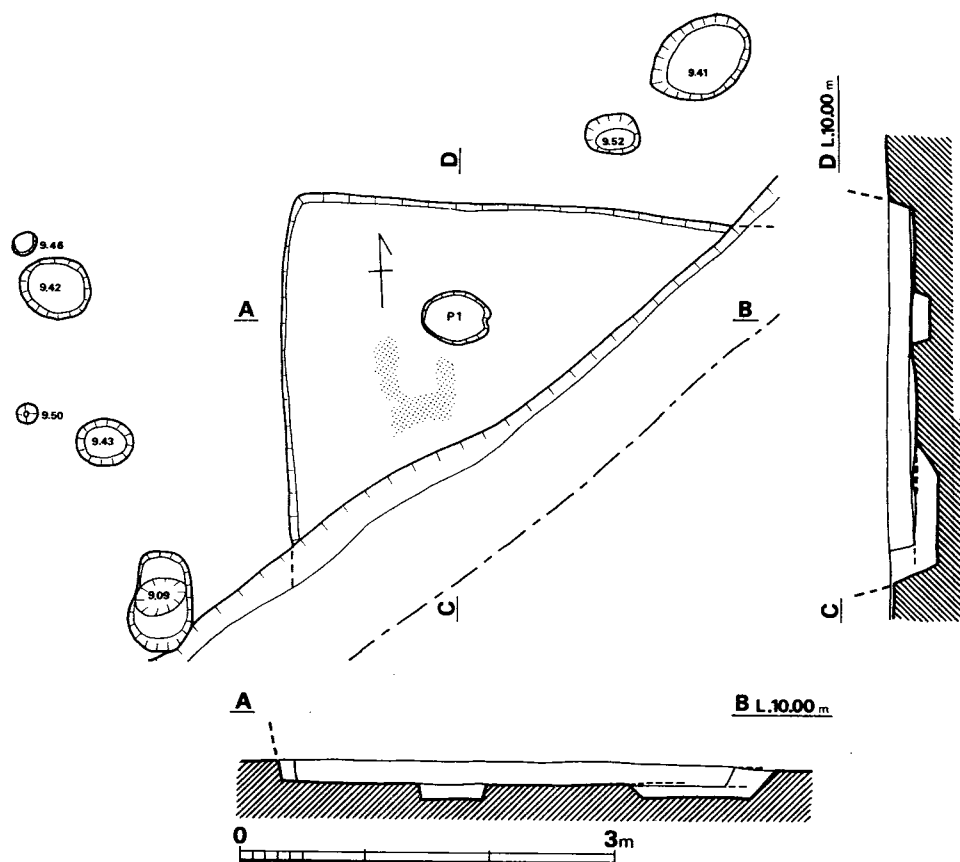


Fig. 80 B区第33号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm) P1(-14.5)

N130・Oに位置する住居跡である。住居跡の南側が水路のため大部分ははずられ、北東コーナーを中心とする部分しか残っていなかった。プランは不明であるが、方形プランの住居跡であろうか。柱穴は一個（P1）検出され、支柱穴と考えられる。直径は50cm、床面からの深さ14.5cmをはかる。柱穴の南に70×60cmの範囲でC字状に焼土が残っていた。壁は比較的残りがよく、平均19cmほど残存していた。

遺物

出土遺物は少なく、弥生土器甕口縁片1、土師器片7、須恵器片1が出土しただけである。いずれも小片なので図示しなかった。

B区第34号住居跡 (Fig. 81, PL.22)

N140・W5に位置する住居跡である。主軸を東西方向よりやや南側にふっており方形プラン

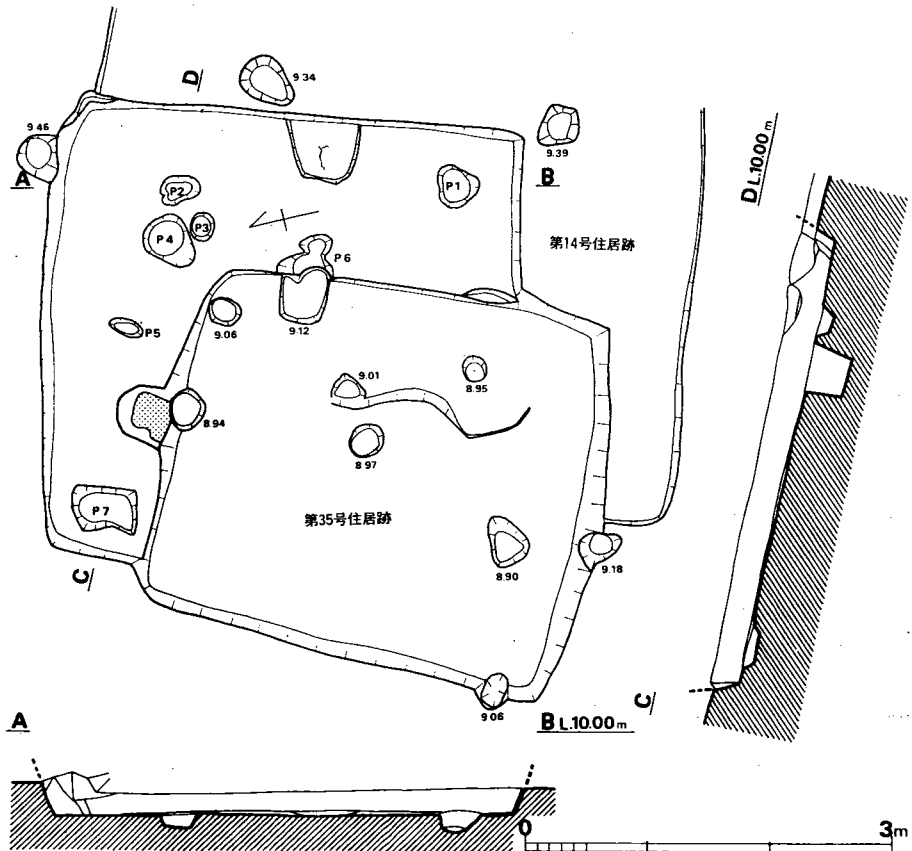


Fig. 81 B区第34号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm) P 1(-12.0)・P 2(-9.0)・P 3(-17.0)・P 4(-31.0)・
P 5(-6.0)・P 6(-9.0)・P 7(-5.0)

ンをなす。長軸4.0×短軸3.9mをはかり、住居跡の東側で第14号住居跡を、南東部で第35号住居跡を切っている。ピットは第34号・第35号住居跡内であわせて17個検出されたが、住居跡に属すると考えられるものは少ない。そのうち、東壁中央部付近のP8は60×50cm、深さ10cmの台形プランをなし貯蔵穴と考えられる。支柱穴はP1・P2および第35号住居跡のP7が考えられるが、南西部に該当する柱穴は検出されなかった。直径は20~35cm、床面からの深さは9~40cm、P1~P2間2.4m、P2~P7間2.0mをはかる。床面積は15.6㎡で、やや小形の住居跡である。炉・カマドとも検出されておらず、壁は12~20cm残っていた。

遺物 (Fig.82・83、Tab.32、PL.22)

土師器・須恵器・鞆羽口が出土した。

須恵器 (Fig.82—1~4・6・7) 1~3は蓋で、1は口縁が折れ曲り、2は内面に段がつく。3はかえりが受け部より突出する。4は杯で、底部内面をナデ、外面をへら削り、そのほかはヨコナデ調整である。6は上げ底状を呈し、歪みをもつ。一部に暗緑色の釉?がみられる。7は底部を欠くが、碗と思われる。体部中位に断面三角形の突帯をもち、口縁部は折れ曲る。

土師器 (Fig.82—5・8・9) 5は須恵器的器形をもつが、胎土・焼成・調整等から土師器である。8は小形の甕と思われる。9の甕は頸部内面に明瞭な稜線をもち、稜線以下はへら削りを施す。

以上のほか土師器甕口縁片が出土した。

鞆羽口 (Fig.83) 復原した外径は5.4cm、内径2.8cmであるが、小片であるため疑問がある。焼けて硬い部分と、黄灰色~青灰色を呈する比較的軟質の部分とがある。一部に鉄分が付着している。

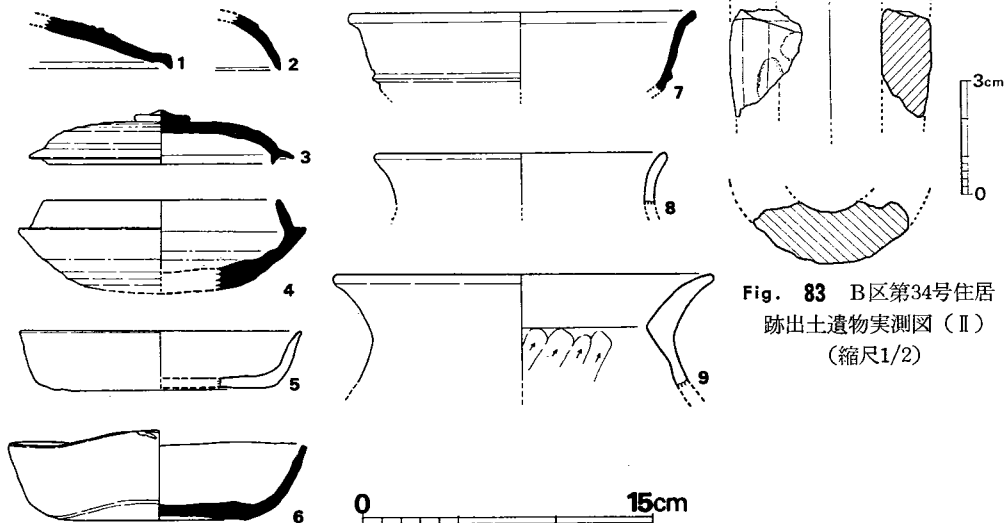


Fig. 82 B区第34号住居跡実測図 (縮尺1/4)

Fig. 83 B区第34号住居跡出土遺物実測図 (II) (縮尺1/2)

Tab. 32 B区第34号住居跡出土土器一覧()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調		備考
			口径	器高					
1	S 蓋	口縁部～体部				細砂を含み、やや軟	黄	灰 色	鈕欠
2	S 蓋	口 縁 部				細砂を含み、堅緻	青	灰 色	
3	S 蓋	1/2	(11.9)	2.9	受け部14.0	砂粒を含み、焼成良	灰	褐 色	
4	S 杯	底 部 欠	(12.4)	(5.1)	受け部15.1	細砂を含み、堅緻	青	灰 色	
5	H 杯	底 部 欠	(14.9)	3.2	口 縁 部	砂粒を含む	外面 内面	黄褐色 赤褐色	
6	S 杯	2/3	15.4	3.9 ～4.7	口 縁 部	少量の砂粒を含み、堅緻	灰	褐 色	一部に緑色の釉状部あり、歪みあり
7	S 碗	底 部 欠	(18.2)		口 縁 部	胎土精良、焼成良	外面 内面	灰褐色 灰黄色	
8	H小形甕	口 縁 部	(15.5)			砂粒を含み、焼成良	茶	褐 色	
9	H 甕	口 縁 部	(20.0)			砂粒を含み、焼成良	茶	褐 色	

B 区第35号住居跡 (Fig.84, PL.22)

N140・W5に位置する住居跡である。重複する第14号・第34号・第35号住居跡の南東に位置し、切合い関係は14→35→34となり、その半分以上を第34号住居跡に切られていたが、住居跡が深かったため全体のプランを確認することができた。また東西に走る溝を住居跡の北西部で、また第14号住居跡を南東部で切っている。主軸は南北方向よりやや東へふっており、長軸3.6×短軸3.1mの方形プランをなし、やや小形の住居である。床面積は11.16㎡をはかる。北壁ほぼ中央部に突出部があり、カマドをつくりだし、幅20cm、奥行20cmである。突出部15cmの範囲で焼土が残っている。ピットは7個検出されたが、支柱穴と考えられるものはなかった。P5は径40cm、深さ7cmの方形をなす。貯蔵穴であろうか。壁は現存8.5～36cmを測る。

遺物 (Fig.85, Tab. 33, PL. 22)

土師器が出土した。

土師器 (Fig.85—1～3) 1は杯で口縁部が薄くなり、わずかに外反する。胎土・焼成とも良く精製品である。2・3は甕で頸部以下は不明である。いずれも二次的な火熱を受けている。

以上のほかに、立ち上りのある杯口縁部片、内外面に赤褐色の薄い膜のある杯口縁部片が出土した。

Tab. 33 B区第35号住居跡出土土器一覧()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調		備考
			口径	器高					
1	H 杯	底 部 欠	(13.0)	(4.0)	口 縁 部	胎土精良、焼成良	外面 内面	茶黄色 黄灰色	
2	H 甕	口 縁 部	(19.0)			砂粒を含み、焼成良	茶	褐 色	
3	H 甕	口 縁 部	(19.1)			砂粒を含み、焼成良	茶	褐 色	

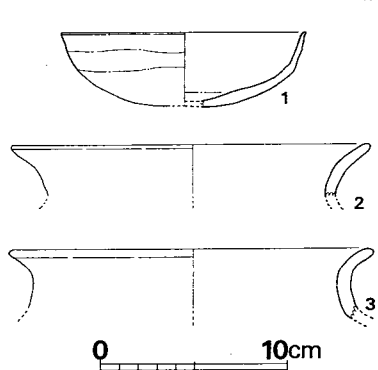
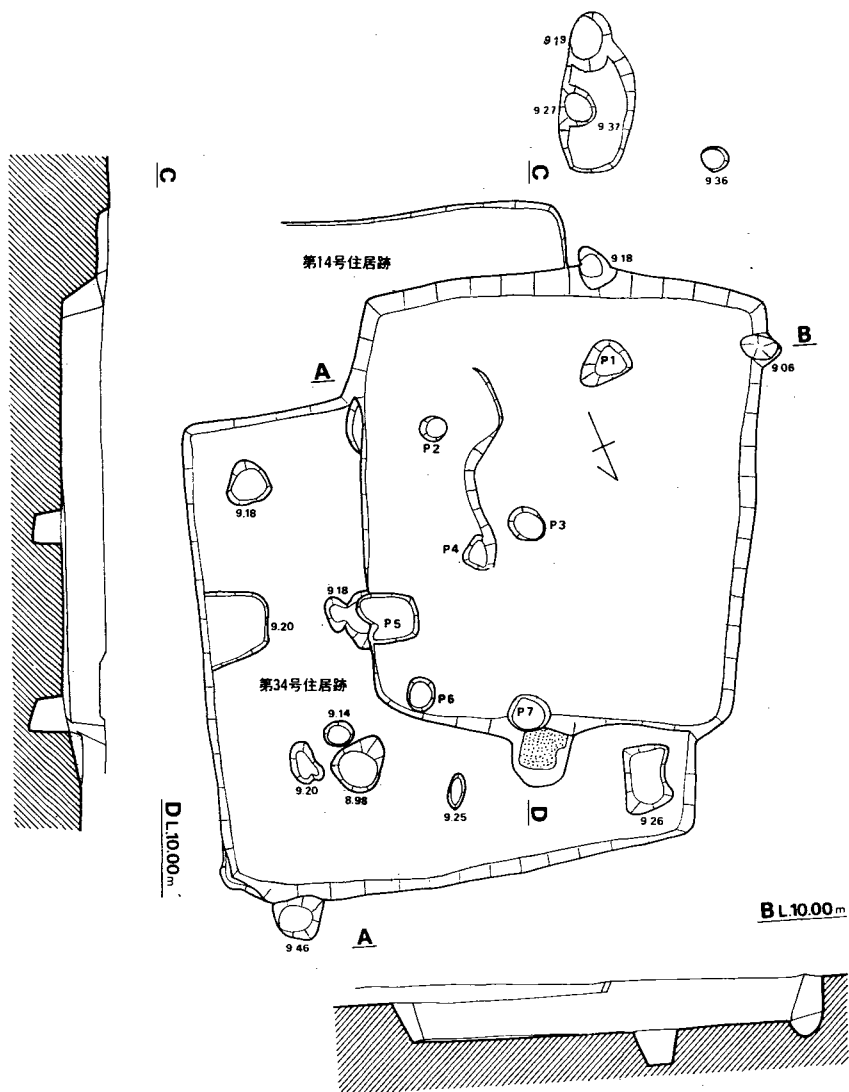


Fig. 84 B区第35号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm) P1(-29.0)・
 P2(-18.0)・P3(-23.0)・P4(-15.0)・
 P5(-7.0)・P6(-13.0)・P7(-26.0)

Fig. 85 B区第35号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

B区第36号住居跡 (Fig. 86, PL. 23)

N128・W14に位置する。第37号住居跡と重複し、第36号住居跡の方が新しい。調査日程の関係で第36号住居跡の西壁を取り除いたため、図面上新旧関係が逆に見えるので、ここに注記する。本住居跡は方形を呈し、東西両辺4.0m、南北両辺3.5mで、床面積14㎡である。各壁とも高さ約8cmを残している。主軸をN13°Eにとり、カマドは北辺中央やや西側に、径40cmほ

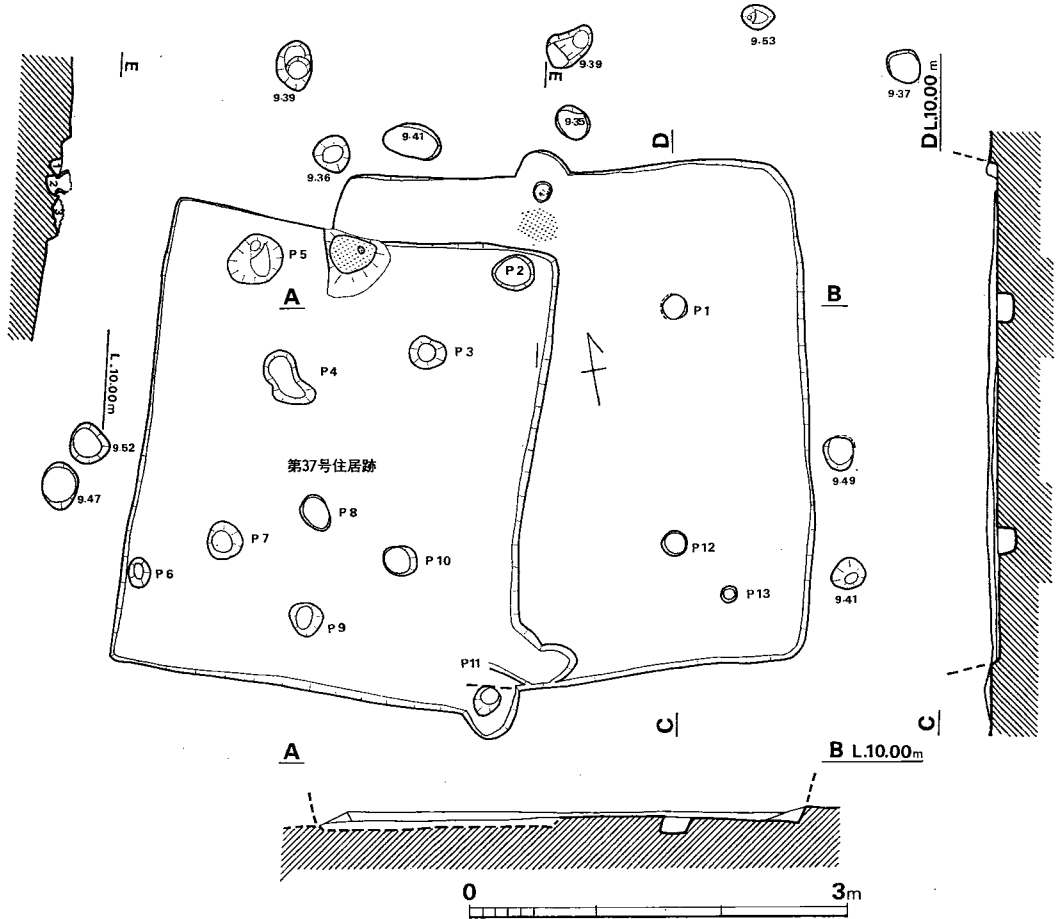


Fig. 86 B区第36号住居跡実測図 (縮尺1/60)

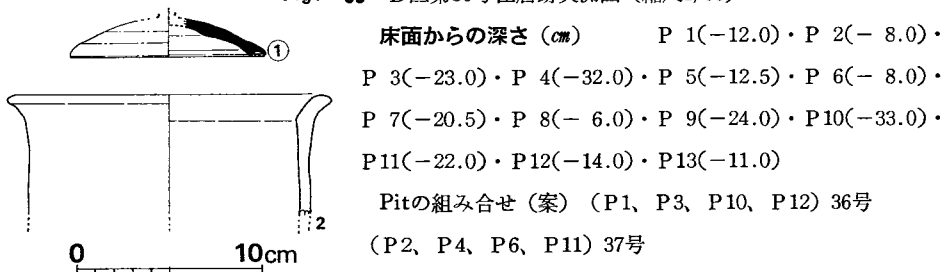


Fig. 87 B区第36号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

どで半円状に作り出されていた。カマドの構造は削平を受け不明である。焼土中のやや壁よりの位置で甕（体部～底部を欠損している）が倒立して検出された。柱穴は第36号・37号両住居跡内のうち、P1・P10・P12と不明1を加えて主柱4本が考えられる。床面は主柱穴の間がやや高く、カマド前面付近がもっとも高く、南壁に向って低くなる。第37号と重複する部分は粘土（地山とほとんど同質）を5cmほど貼り整形されていた。

遺物 (Fig. 87, Tab. 34, PL. 23)

土師器・須恵器が出土した。

須恵器 (Fig. 87—1) 1はツマミを欠く蓋で、かえりは鈍く、受け部より内側にある。磨滅部分が多く軟質である。床面から出土した。

土師器 (Fig. 87—2) 2は体部の張らない小形の甕で、頸部内面に明瞭な稜線をもつ。外面にススが付着している。

以上のほか、丹塗りの土師器片1が出土した。

Tab. 34 B区第36号住居跡出土土器一覧 ()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	S 蓋	ツマミ欠	8.7		受け部10.6	胎土精良	淡黄褐色	
2	H小形甕	下半欠	(17.6)		口縁部	砂粒を含み、焼成良	茶褐色	外面黒褐色の付着物

B区第37号住居跡 (Fig. 88, PL. 23)

N128・W15に位置する。第36号住居跡と重複するが、本住居跡の先行が確認できた。略方形を呈し、南北辺が若干長く東西両辺3.6m、南北両辺3.0cmを測り、床面積約11m²である。残存壁高は、第36号に切られた東壁で6cmほど、西壁では10cm前後である。床面は若干掘り過ぎているが、北側がやや高い。

遺物 (Fig. 89)

土師器片71、須恵器片3が出土したが、そのうち図示できるのはFig. 89の須恵器のみである。外面はへら削りで、口縁部と内面はナデている。皿と思われる。

B区第38号住居跡 (Fig. 90, PL. 29)

N208・W38付近に位置し、西半は用地外のため確認できなかった。第39号住居跡と重複し、本住居跡の方が古い。東辺は4.7m、北・南辺は一部を検出したのみであるが、方形プランと思われる。東辺中央のやや北寄りに突出部がある。P1・P2が主柱穴の一部と思われるが、これに対応する柱穴は未掘のため不明である。残存壁高は10cm前後である。焼土・灰・カマド等は検出されなかった。なお、本住居跡のP8・P9・P10は第39号住居跡のP2・P6・

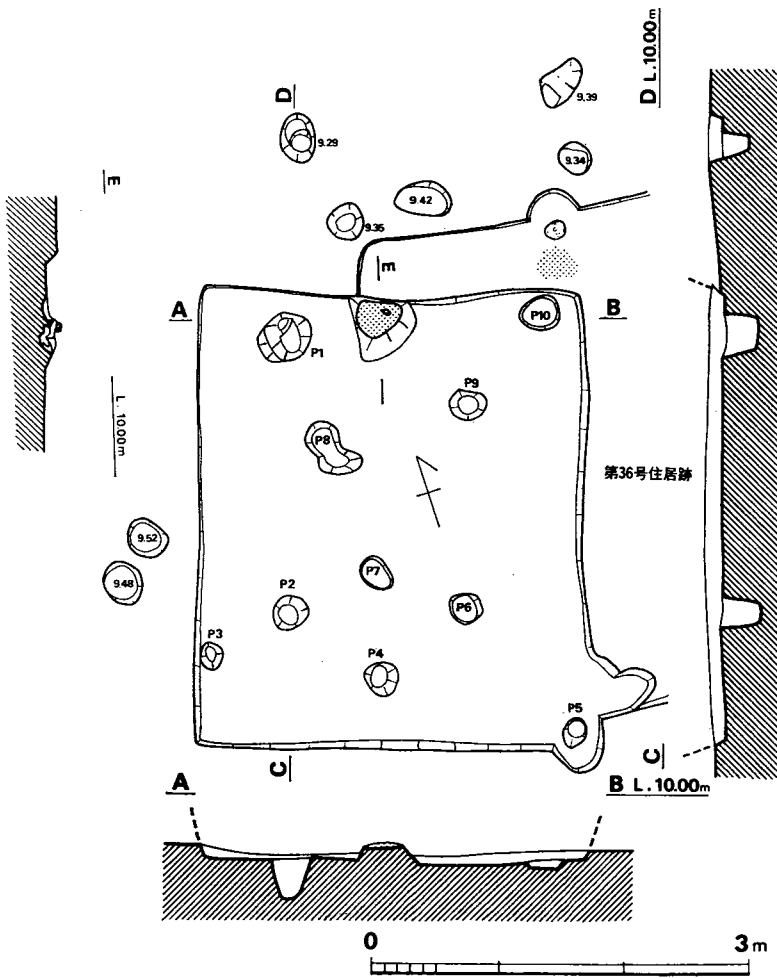


Fig. 89 B区第37号
住居跡出土土器実測
図 (縮尺1/4)

Fig. 88 B区第37号住居跡実測図 (縮尺1/60)

P7とそれぞれ同じピットである。

遺物 (Fig.91)

床面から土師器21片が出土したが、実測できたのはFig.91の杯のみである。内外面とも磨かれており、胎土も精良で暗茶褐色を呈する精製品である。

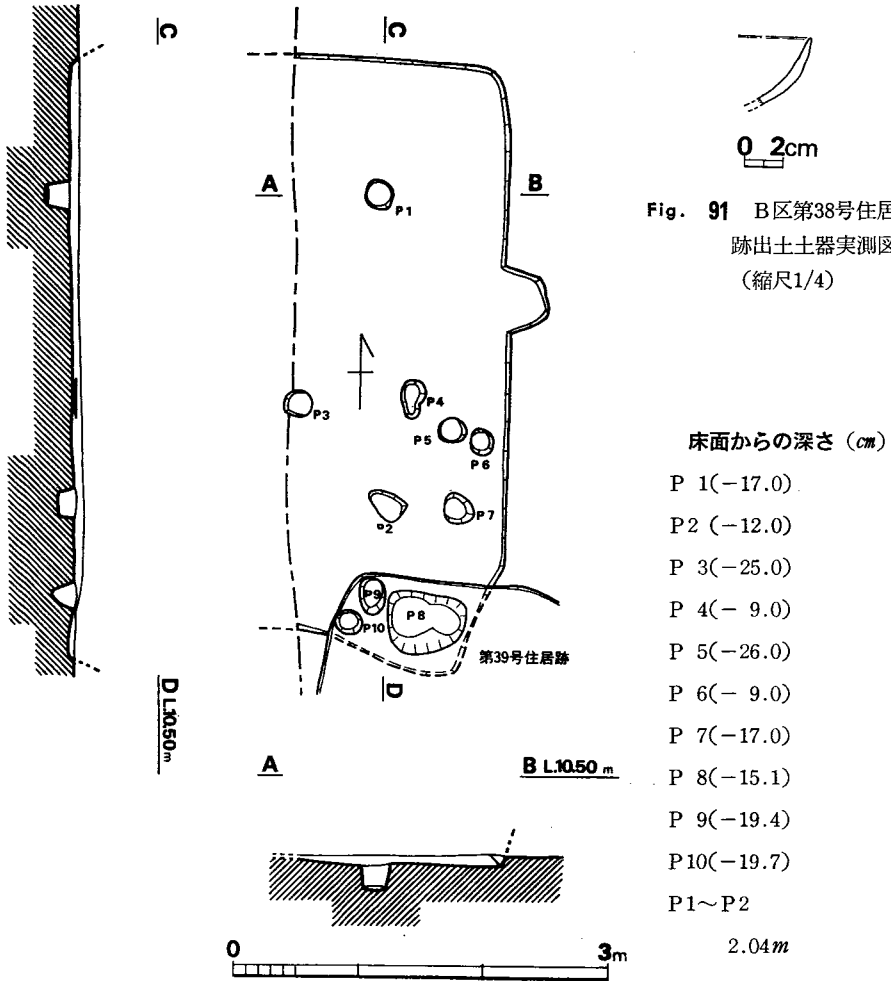


Fig. 90 B区第38号住居跡実測図 (縮尺1/60)

B区第39号住居跡 (Fig.92, PL. 29)

N204・W35付近に位置し、第38号・第40号住居跡と重複しており、第39号住居跡が他の2軒を切っている。南西隅は用地外のために西辺、南辺は推定値であるが、西辺3.6m、南辺3.2m、東辺2.6m、北辺3.6mで、台形のプランと思われる。南側に焼土が検出されたが、本住居跡のものであるかは不明である。また支柱穴も不明である。P12から、15cm大の石が出土している。

遺物 (Fig.93)

須恵器、土師器が出土した。須恵器には蓋・杯・甕があり、土師器では甌・甕がある。これらの土器のうち実測できたのはFig.93の土師器甕のみである。外面は磨減しているが、内面は口縁部ヨコナデ、頸部以下は横方向のへら削りである。復原口径19.8cmを測る。

以上の他、小石1が出土した。

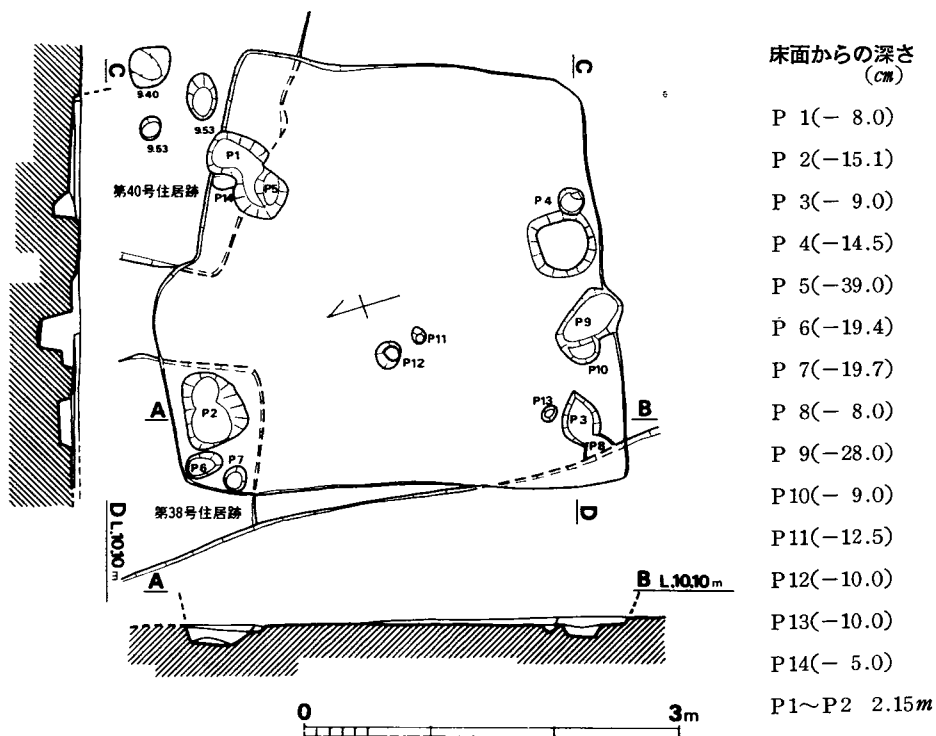


Fig. 92 B区第39号住居跡実測図 (縮尺1/60)

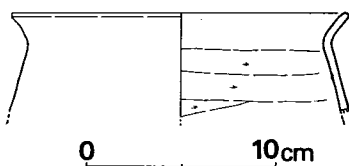


Fig. 93 B区第39号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

B区第40号住居跡 (Fig.94, PL. 29)

N205・W35付近に位置する。第39号住居跡と西隅で重複しており、本住居跡の方が古い。東北隅は削平されて消滅しているが、北西辺4.6m、南西辺4.1mが残存しており、これらから復原すると面積は18.6㎡である。カマドは北西辺中央にあり、中央部から焼土が検出されている。カマドを通る軸線の方位はN57°Wである。住居跡内からは18個のピットが検出されたが、支柱穴は不明である。残存壁高は5～11.5cmで、残りは悪い。

遺物 (Fig.95, PL. 29)

カマド内より土師器片7、須恵器片1が出土し、他に土師器67片、須恵器1片が出土した。

これらのうち実測できたのはFig. 95の土師器杯のみである。内外面に赤褐色の薄い膜があり、胎土・焼成とも良好な精製品である。復原口径12.1cm、器高3.8cm、を測る。

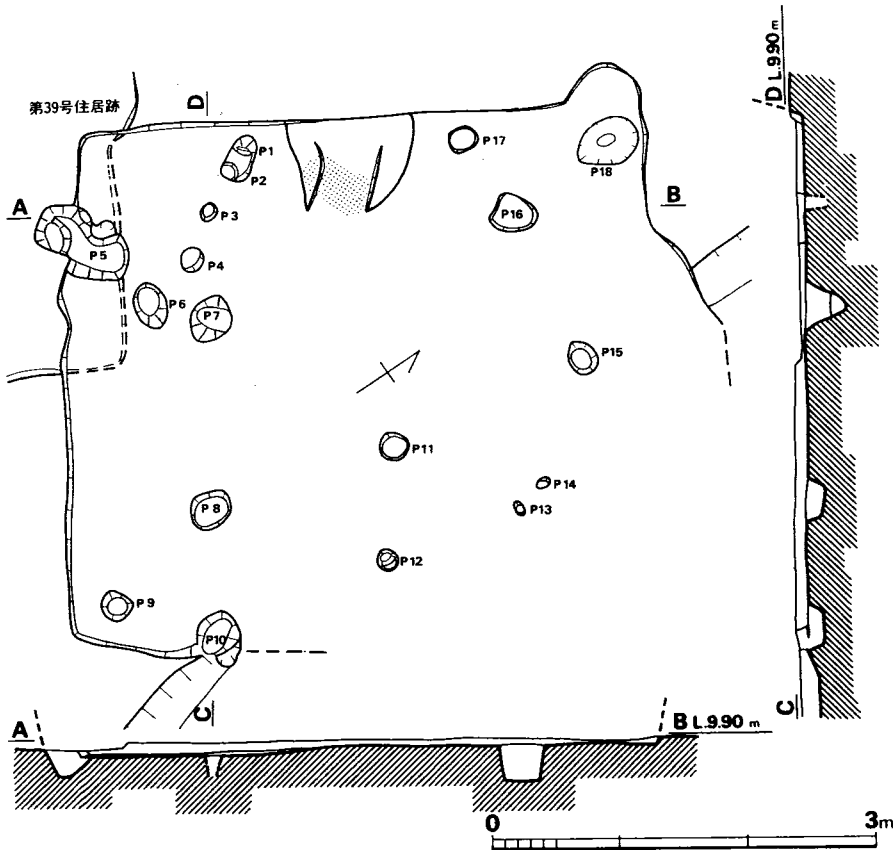


Fig. 94 B区第40号住居跡実測図 (縮尺1/60)

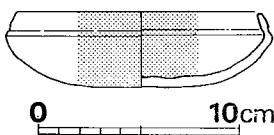


Fig. 95 B区第40号住居跡出土
土器実測図 (縮尺1/4)

床面からの深さ (cm) P 1(-20.5)・P 2(-19.2)・
P 3(- 8.0)・P 4(-24.0)・P 5(-22.5)・P 6(-14.0)・
P 7(-39.0)・P 8(-16.0)・P 9(-11.5)・P 10(-12.0)・
P 11(-16.7)・P 12(-10.0)・P 13(- 9.7)・P 14(- 9.3)・
P 15(-23.0)・P 16(-28.5)・P 17(-16.0)・P 18(-20.0)

B区第41号住居跡 (Fig. 96, PL. 30)

N200・W25付近に位置する。東半は削平によって消滅しているが、P 10付近で壁が北に曲る可能性がある。これを仮定すると、東辺はP 13の東側に想定することができ、東西約4.3 m、南北約5.7 mのほぼ長方形のプランが復原される。長軸方位はN2°Wをさす。焼土・炉などは検出されず、支柱穴も不明である。残存壁高は8~17 cmで残りは良くない。

遺物

床面より土師器片19、須恵器片1が出土し、そのほか弥生土器甕口縁片が出土した。図示できるものは1片もない。また、鉄鎌かと思われる鉄製品が出土したが、小片になっており図示

することができない。

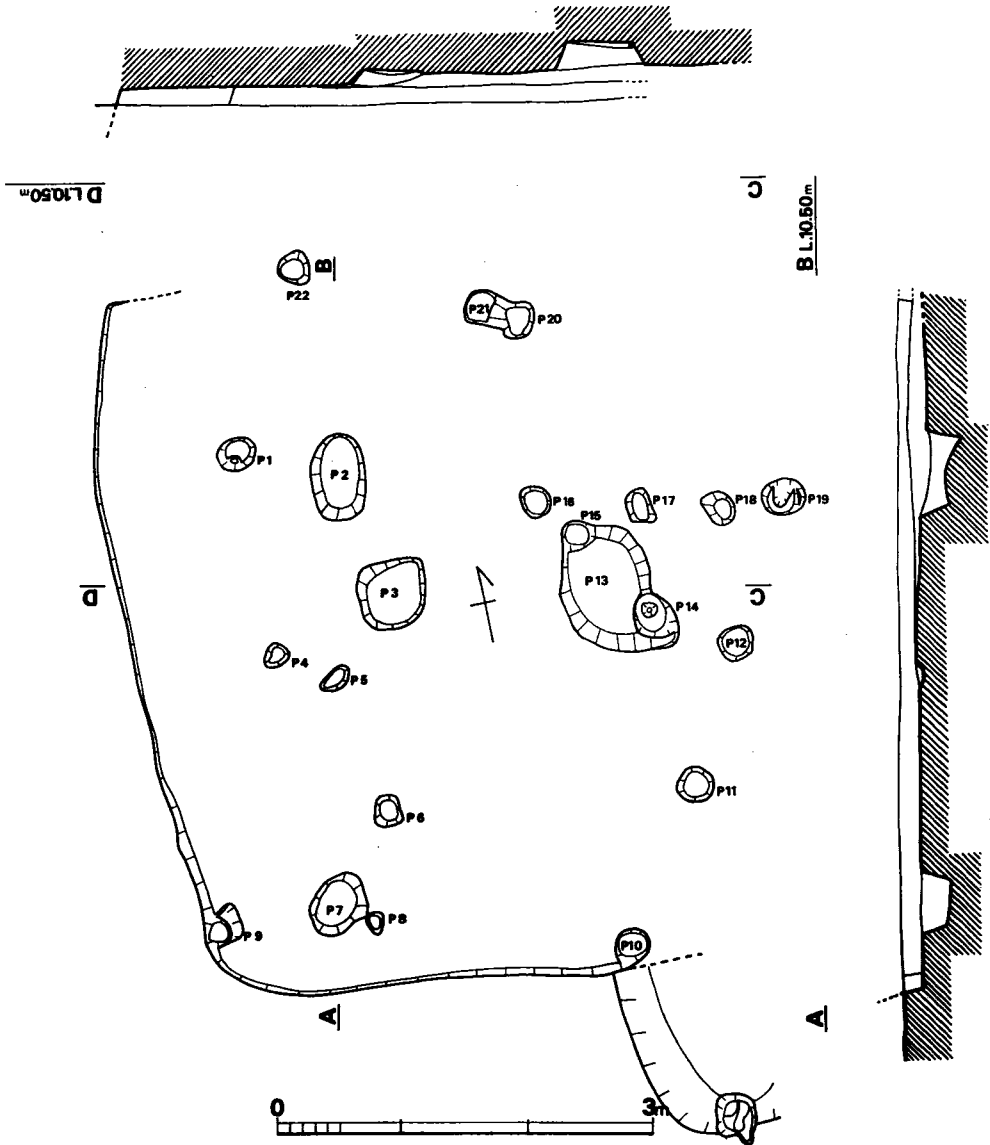


Fig. 96 B区第41号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm) P 1(-21.0)・P 2(-24.0)・P 3(-10.0)・
 P 4(- 4.0)・P 5(- 4.5)・P 6(- 9.0)・P 7(-23.0)・P 8(-22.0)・
 P 9(-14.0)・P10(-17.0)・P11(-13.0)・P12(-13.5)・P13(-21.0)・
 P14(-20.0)・P15(-29.5)・P16(- 7.0)・P17(-30.0)・P18(-14.0)・
 P19(-20.0)・P20(-20.0)・P21(- 4.0)・P22(-23.0)

B区第42号住居跡 (Fig.97, PL.31)

N209・W11に位置する。第43号住居跡と重複しており、本住居跡の方が新しい。南北2.9m、東西2.7mで、南北にやや長い略方形のプランである。南東隅のP2は第43号住居跡の支柱穴の一つと考えられるので、本住居跡の支柱穴はP8とP7またはP6のどちらかの2本柱を想定した方が良いだろう。焼土はP8の東側、中央西寄り、P6の北寄りの3カ所で検出されている。P6の北寄りのピットは炉の可能性もあろう。残存壁高は3~8.5cmで残りは悪い。

遺物

土師器片31が出土した(そのうち丹塗りの土器片1、把手1を含む)。須恵器は1片出土したのみである。

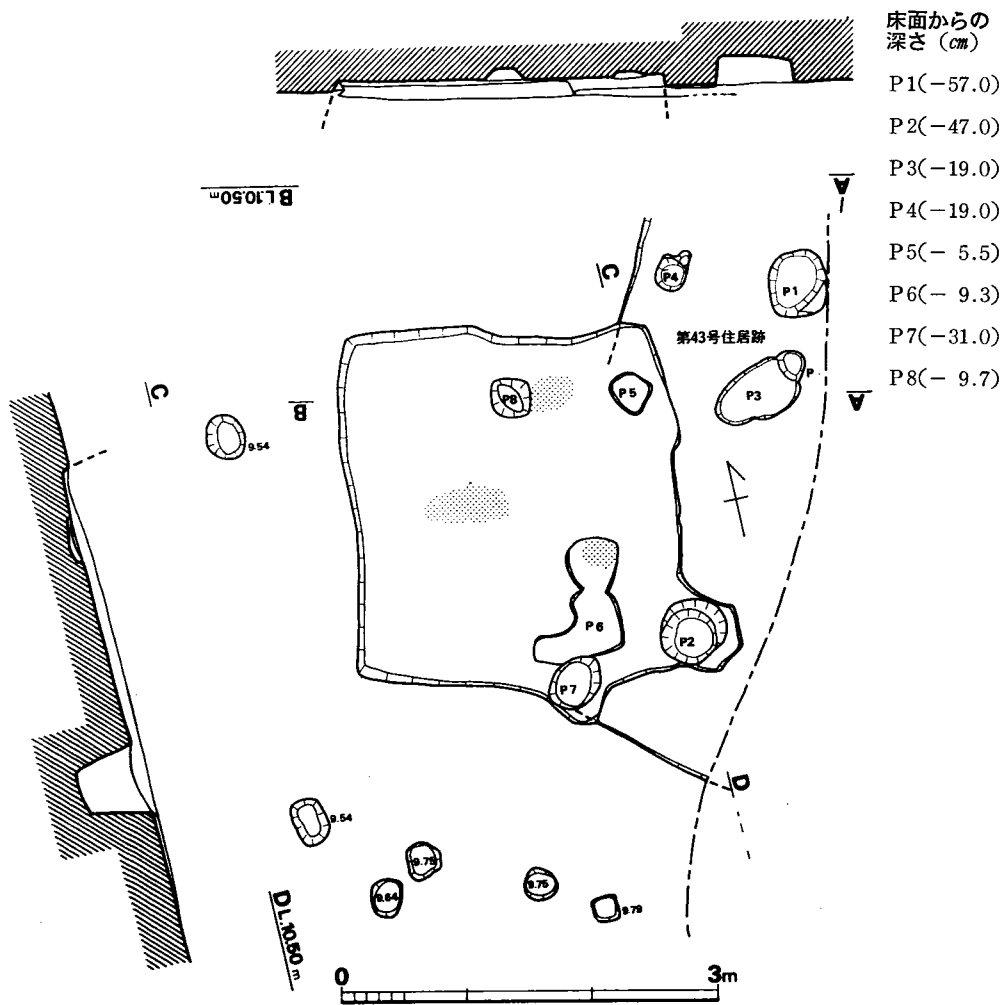


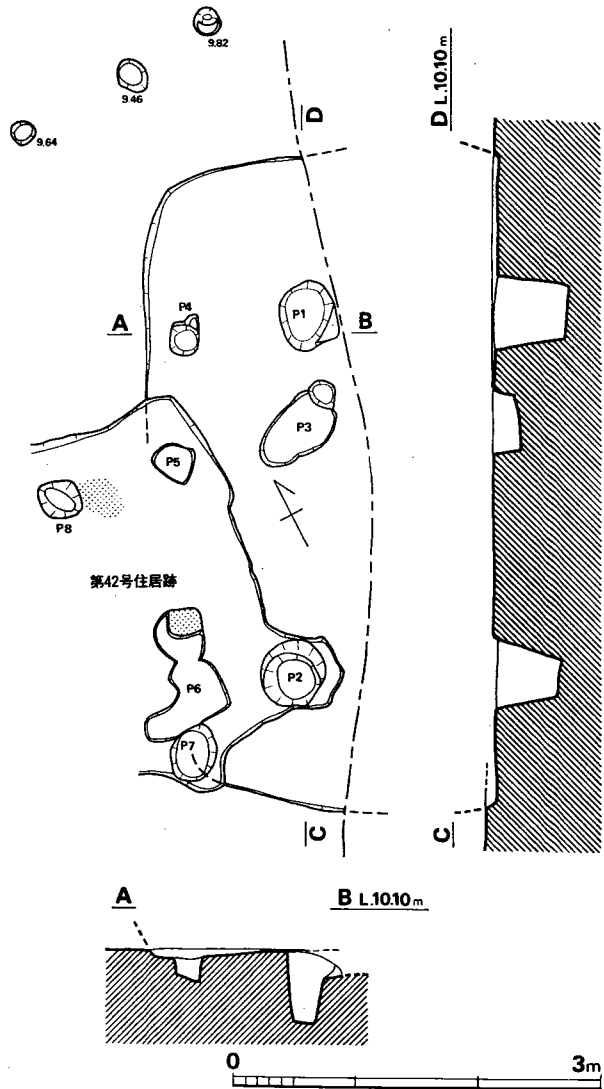
Fig. 97 B区第42号住居跡実測図(縮尺1/60)

B 区第43号住居跡 (Fig.98、PL.31)

N210・W9付近に位置する。第42号住居跡と重複しており、本住居跡の方が古い。東側の大部分が現在の水路に破壊されており、詳細は不明であるが、検出された範囲では南北5.2m（最大値）で、方形または長方形プランになると思われる。焼土は、第42号住居跡と重複する部分に2カ所検出されたが（P8の東側・P6の北側）、どちらが本住居跡に伴うかは不明である。あるいは第42号住居跡に伴うものかもしれない。柱穴はP1・P2に可能性があらう。残存壁高は3～8cmで残りは悪い。

遺物

土師器小片6が出土しただけである。



ピット番号および床面
からの深さはFig.97と同じ

Fig. 98 B区第43号住居跡実測図（縮尺1/60）

B 区第44号住居跡 (Fig.97、PL.31・32)

N225・W5付近に位置する。第45号住居跡と南隅で重複しており、本住居跡の方が古い。北東辺は半分ほどが削平されており、東隅は畦畔下にあるため検出できなかったが、北西辺4.5m、南西辺4.6mから復原すると、面積約20.7m²のほぼ方形のプランとなる。焼土は北西壁から50cmほど離れて検出され、カマドの袖部と思われる部分も認められるので、ここにカマドが付設されたのであろう。焼土の中心を通る軸線の方位はN55°Wをさす。支柱穴はP1～P4の4本柱と思われる。P1・P2は2段掘りである。南東辺の中央付近に110×70cmほどのP12があり、貯蔵穴かと思われる。また、住居跡内のピットはほぼ壁に沿ったように並んでおり、

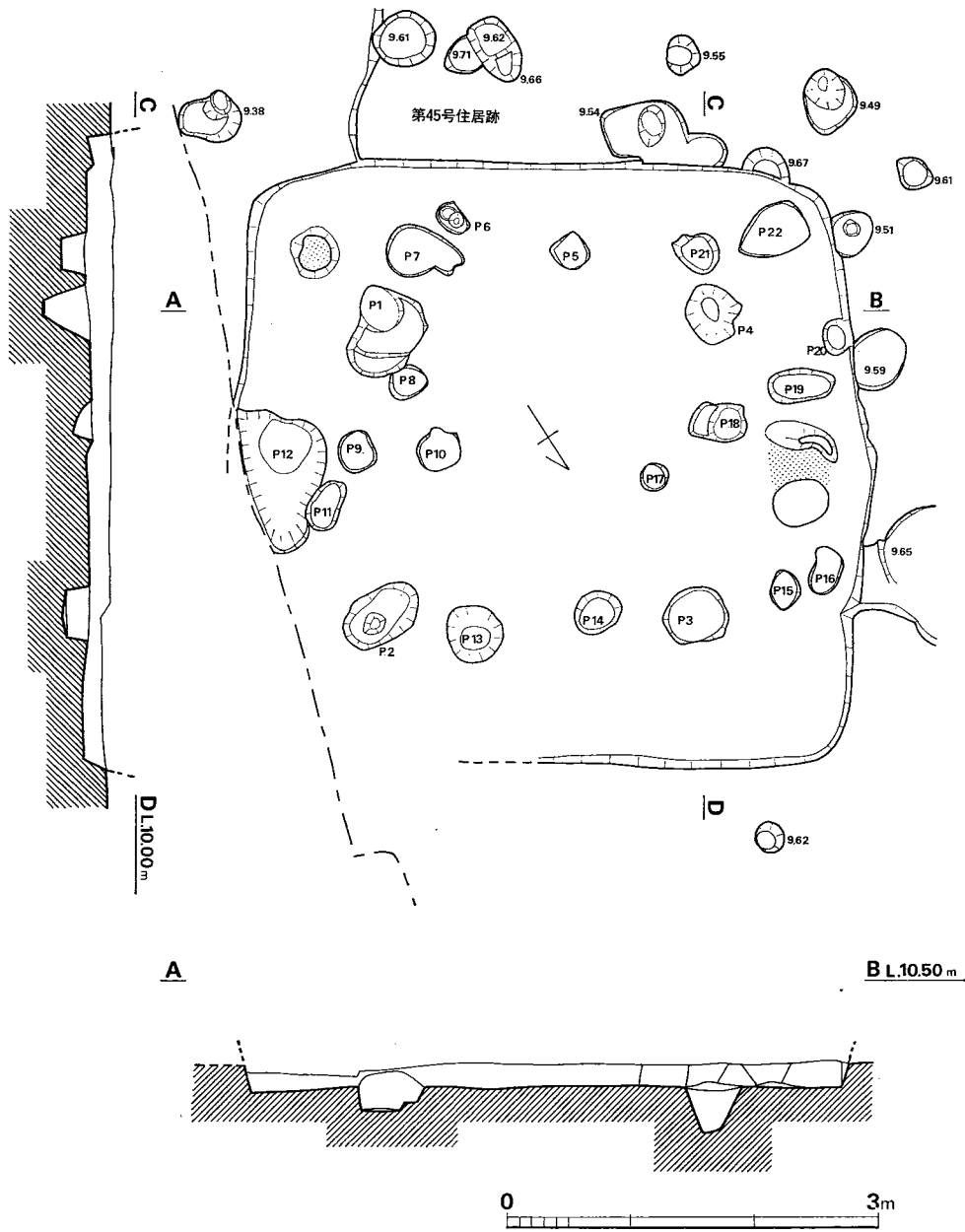


Fig. 99 B区第44号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm) P 1(-19.0)・P 2(-63.0)・P 3(-22.5)・P 4(-35.0)・
 P 5(- 7.0)・P 6(-17.4)・P 7(-17.5)・P 8(- 3.0)・P 9(-15.0)・P10(-15.0)・
 P11(-15.0)・P12(-15.0)・P13(-34.0)・P14(-12.0)・P15(- 6.0)・P16(- 6.5)・
 P17(- 8.5)・P18(-19.0)・P19(-11.0)・P20(-14.0)・P21(-19.0)・P22(- 2.5)
 P1~P2 2.52m P2~P3 2.64m P3~P4 2.52m P4~P1 2.64m

中央部にはないことは注目される。残存壁高は4.5~22cmで、残りは良くない。なお、南隅付近に焼土が検出されているが、床面から浮いた状態であり、本住居跡に伴うものではない。

遺物 (Fig.100・101, Tab.35, PL.32)

土師器・須恵器・砥石が出土した。須恵器は床面から甕口縁片1が出土しただけで、図示しなかった。

土師器 (Fig.100—1~8) 1・2は杯で、1の底部は突面状を呈する。内外面とも赤黄色の薄い膜がある。床面から出土した。2は内面が黒色で立ち上りをもつ。3は内外面とも丹塗りで、小形丸底壺の口縁部と思われる。床面出土。4はカマド内から出土した内外面丹塗りの高杯で、略完形である。脚部内面は縦・横のへら削り、外面は縦方向のへら削りで、杯部口縁は歪んでいる。5の鉢は体部が丸味をもち、外面はハケ目調整である。6・8は小形の甕で、8はカマド内より出土した。6は内面に汚れが目立ち、外面はススが付着しており、二次的な火熱を受けている。7は脚台で、鉢か甕のものと思われる。

以上のほか、カマド内より甕口縁片と把手が出土した。

砥石 (Fig.101) カマド近くの床面から出土した。凝灰岩製で4面を使用している。キメは細かい。長さ約4.8cm。

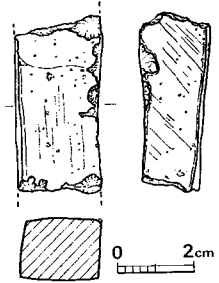


Fig. 101 B区第44号住居跡実測図 (Ⅱ)
(縮尺1/2)

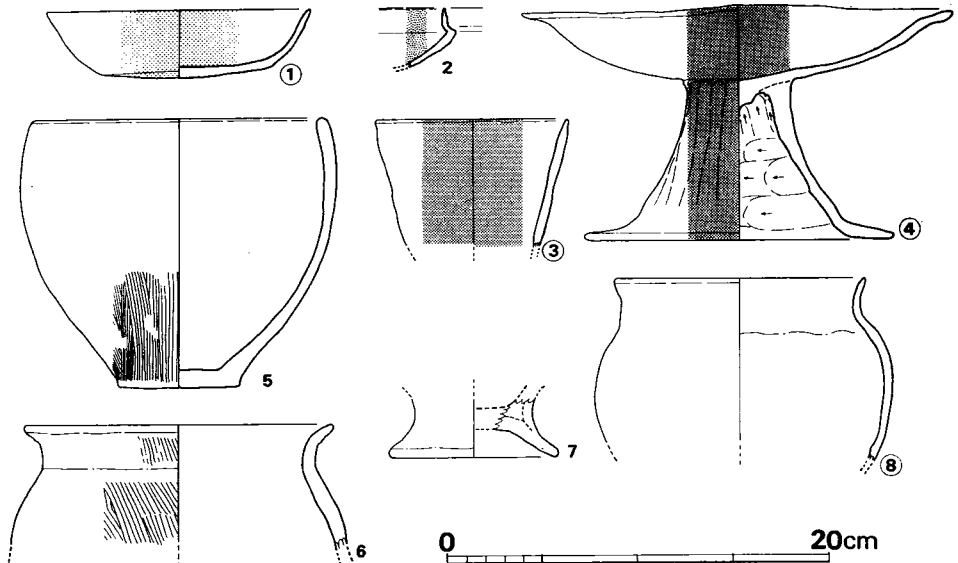


Fig. 100 B区第44号住居跡出土遺物実測図 (Ⅰ) (縮尺1/4)

Tab. 35 B区第44号住居跡出土土器一覧 () は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	H杯	2/3	18.4	3.6	口縁部	砂粒を含み、焼成良	淡黄褐色	内外面化粧土
2	H杯	口縁部～体部				胎土精良、焼成良	淡茶色	内面黒色
3	H壺	口縁部	10.0			胎土精良、焼成良	赤黄色	内外面丹塗り
4	H高杯	略完	22.8	12.2 ～12.5		胎土精良、焼成良	淡黄褐色	杯部内面及び 全外面丹塗り
5	H鉢	復原完	(15.3)	14.2	胴部上位 (16.9)	砂粒を含み、焼成良	灰黄色	
6	H小形甕	口縁部～肩部	(16.5)		胴部	砂粒を少量含み、 焼成良	外面 赤黄色 内面 黒色	二次加熱
7	H	底部				細砂を含み、 焼成良	黄灰色	
8	H小形甕	下半欠	13.0		胴部中位 15.6	細砂を含み、 焼成良	茶灰色	

B区第45号住居跡 (Fig. 102, PL.31)

N220・O付近に位置する。第44号住居跡と重複しており、本住居跡の方が新しい。中央部を現在の水路により破壊されているが、南東辺4.9m、南東辺～北西辺5.1mの略方形のプランになると思われる。面積は約25㎡である。焼土は北西辺付近の第44号住居跡との重複部付近に検出されているが、やや浮いている状態であり、本住居跡に伴うかどうか疑問である。長軸の方位はN52°Wをさす。支柱穴は不明である。残存壁高は5.5～14cmで、残りは悪い。

遺物 (Fig. 103)

須恵器・土師器が出土した。

須恵器 (Fig. 103—1) 1は肩部に凹線をもつ。内外面ともヨコナデ調整で、復原口径13.2cmを測る。外面は紫灰色、内面は青灰色を呈し、焼成は良好である。

土師器 (Fig. 103—2) 2は内面と口縁部外面が黒色を呈する椀である。磨滅しており、調整は不明だが、胎土は良好である。

以上のほかに、須恵器片5 (そのうち蓋1)、土師器片125 (そのうち高杯1) が出土した。

B区第46号住居跡 (Fig. 104, PL.40)

N195・W5付近に位置する。第59号住居跡と重複しており、本住居跡の方が新しい。北東辺～南西辺4.8m、東南辺～北東辺5.7mの長方形プランで床面積約27.4㎡である。焼土は北西辺の中央にあたる位置に検出されており、第46号住居跡の焼土は別にもとめられるので、おそらく本住居跡に伴うと思われる。この焼土をカマドの痕跡とすれば、主軸の方位はN65°Wを

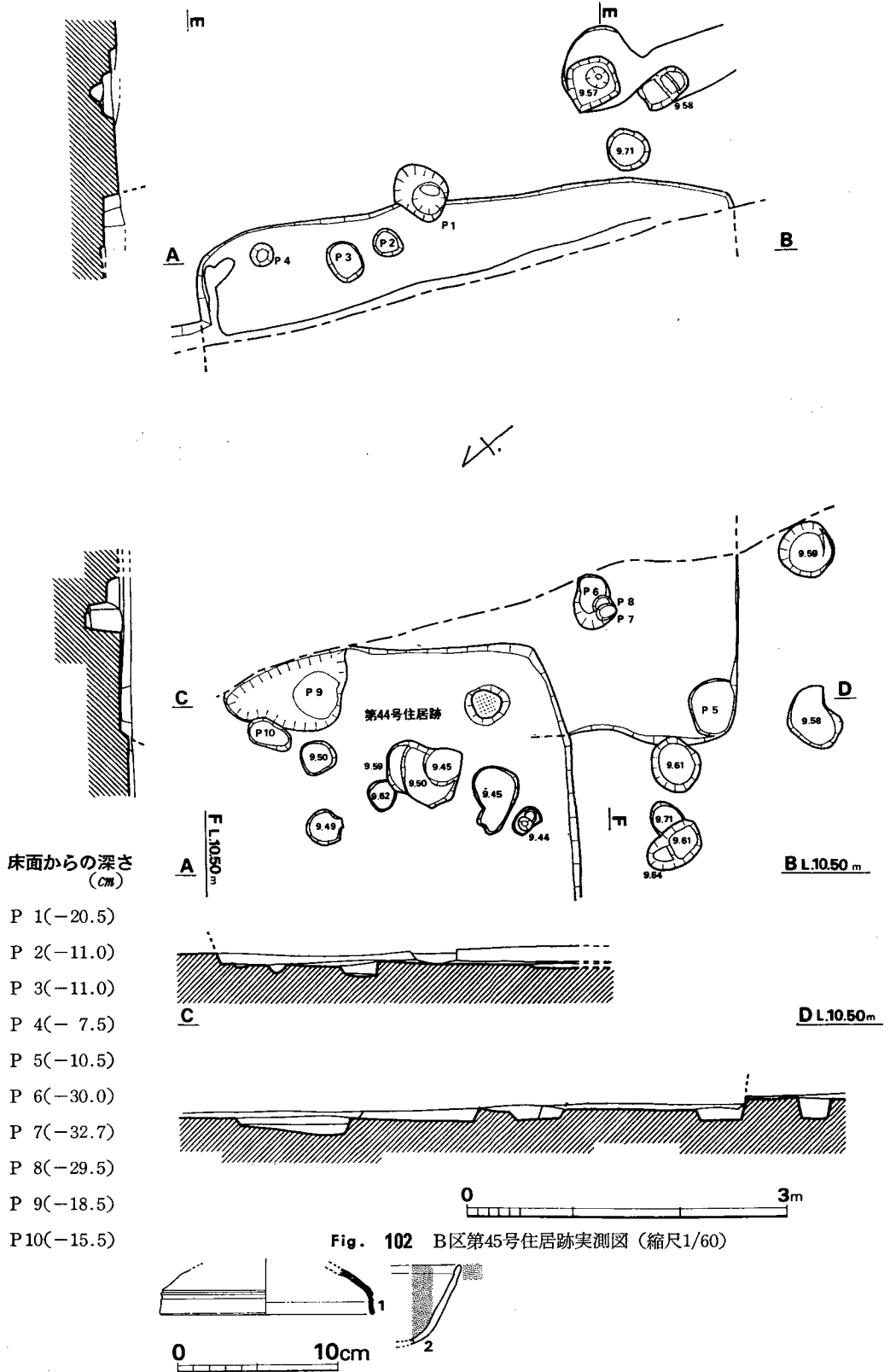


Fig. 103 B区第45号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

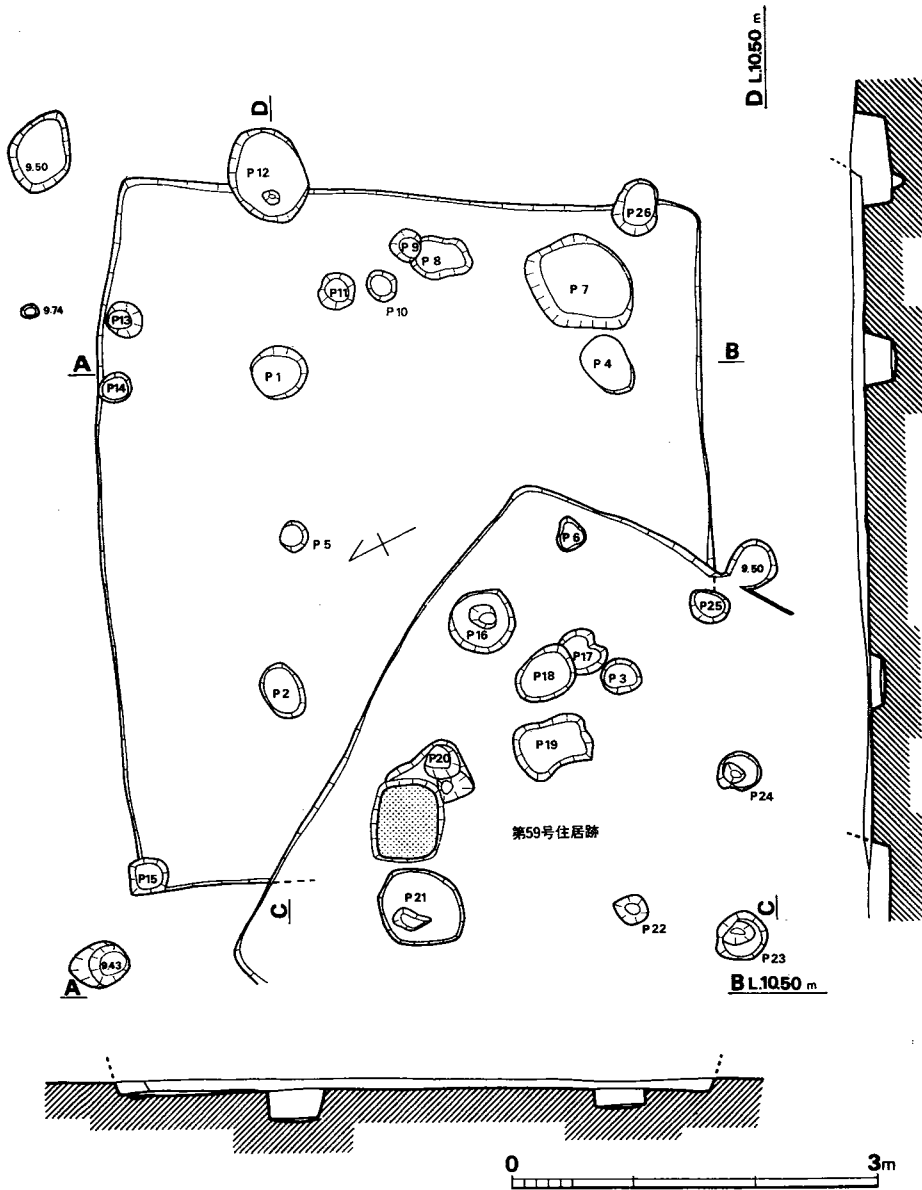


Fig. 104 B区第46号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm) P 1(-26.0)・P 2(-10.0)・P 3(- 9.0)・P 4(-18.0)・
 P 5(-11.0)・P 6(-10.0)・P 7(-16.0)・P 8(-11.0)・P 9(- 8.0)・P10(-11.0)・
 P11(-10.0)・P12(-30.0)・P13(-27.5)・P14(- 9.0)・P15(- 9.0)・P16(-17.0)・
 P17(-11.0)・P18(-49.0)・P19(- 9.0)・P20(-21.0)・P21(-15.0)・P22(-14.0)・
 P23(-31.5)・P24(-17.5)・P25(-11.5)・P25(-18.0)
 P1~P2 2.56m P2~P3 2.77m P3~P4 2.56m P4~P1 2.78m

とる。支柱穴はP1～P4の4本柱であろう。残存壁高3～12cmで残りは良くない。

遺物 (Fig. 105、Tab.36、PL.40)

土師器・須恵器が出土した。

須恵器 (Fig. 105—1・2) 1は高杯の可能性もあるが、ここでは蓋としておく。外面天井部はヘラ削りで、そのほかはヨコナデである。2は杯と思われ、体部に浅い凹線が4本ある。茶黄色を呈し軟質である。

土師器 (Fig. 105—3・4) 3は蓋で、内外面とも茶黄色の薄い膜がある。胎土・焼成とも良好な精製品で、この種の蓋は本遺跡ではこの例ただ一つである。4はやや細長い把手で、甗のものであろう。

以上のほかに、丹塗りの土師器片1が出土した。土師器片は赤褐色に焼けたものが多い。

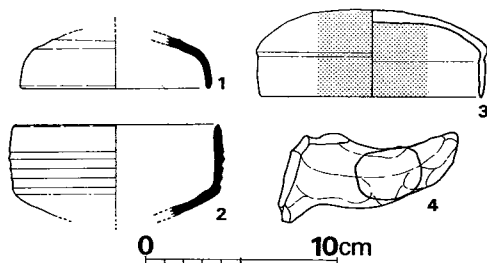


Fig. 105 B区第46号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

Tab. 36 B区第46号住居跡出土土器一覧 ()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調		備考
			口径	器高			外面	内面	
1	S 蓋	杯部	(10.0)			砂粒を含み、焼成良	外面 灰褐色 内面 青灰色		
2	S 杯	杯部	(10.0)			胎土精良	茶黄色		
3	H 蓋	復原完	(11.6)	4.6	肩部 (12.2)	胎土精良、焼成良	黄褐色	内外面化粧土	
4		把手				大きめの砂粒を含み、焼成良	茶赤色		

B区第47号住居跡 (Fig. 106、PL.36)

N203・W6に位置する。南西辺中央部が丸く突出しているが、これは本住居跡より後に掘られた溝の一部である。また、第51号住居跡と重複しており、これら3者の関係は51→47→溝の順に新しい。北東辺5.1m、南東辺4.4mの方形プランと思われ、面積22.4m²が推定される。南西部に不整形の浅い掘り込みがあり、中から石が検出されたが、焼土・炭等は認められなかった。カマドの痕跡とするには疑問がある。軸線は長軸方向に求めると、N57°Wをさす。支柱はP1～P4の4本柱であろう。P1・P4は二段掘りである。壁は4～17.5cmと残りは良くない。

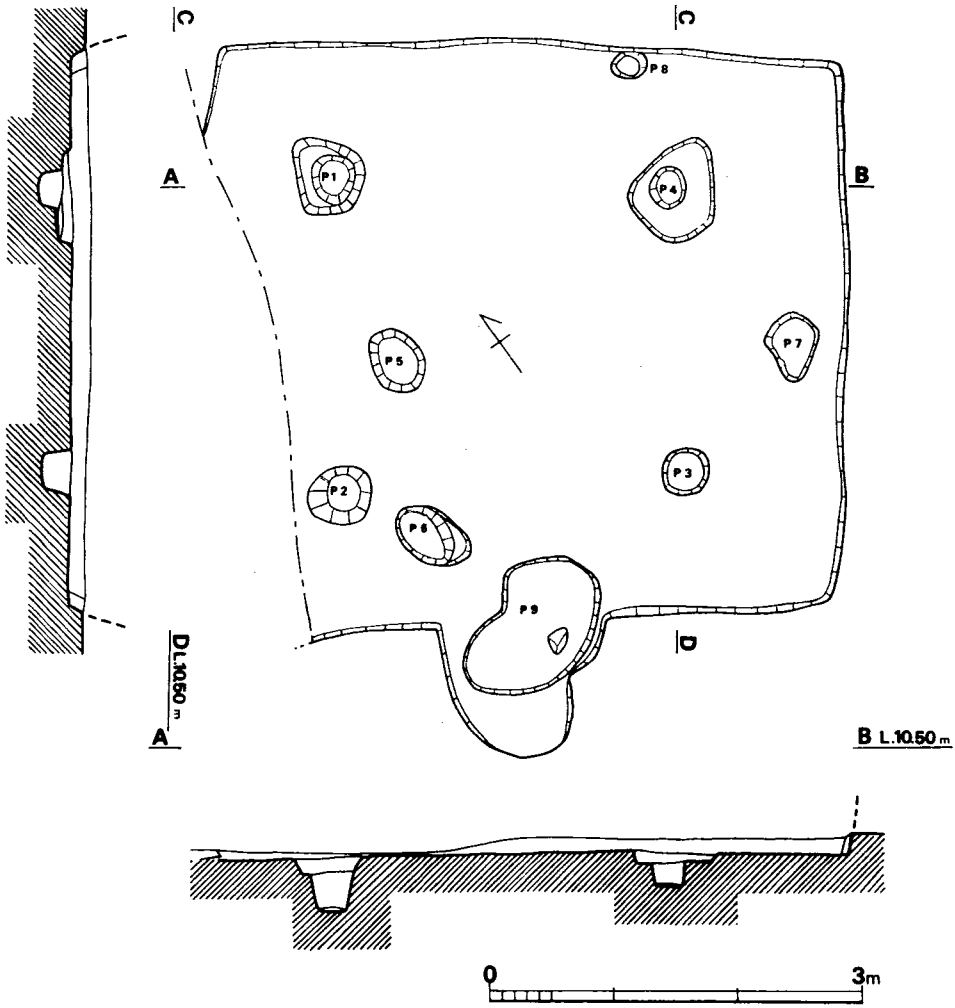


Fig. 106 B区第47号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm) P 1(-49.0)・
 P 2(-32.0)・P 3(-27.0)・P 4(-28.0)・
 P 5(-24.0)・P 6(-10.5)・P 7(-10.0)・
 P 8(-25.0)・P 9(- 7.5)
 P1~P2 2.40m P2~P3 2.73m
 P3~P4 2.40m P4~P1 2.73m

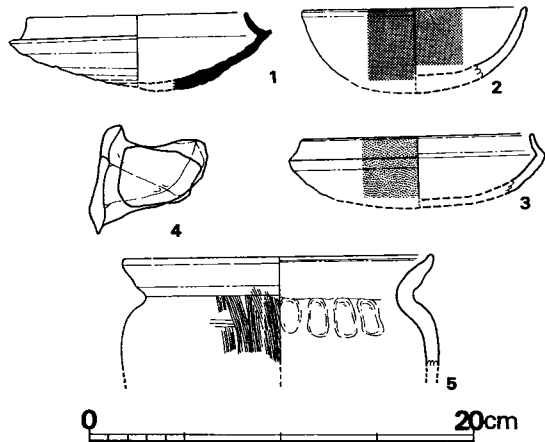


Fig. 107 B区第47号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

遺物 (Fig. 107, Tab. 37, PL.36)

須恵器・土師器が出土した。

須恵器 (Fig. 107—1) 床面出土の杯で、底部外面にヘラ記号をもつ。

土師器 (Fig. 107—2~5) 2・3は杯で、3は立ち上りをもち、外面は黒色化されている。5は小形の甕で、頸部の屈曲が強い。4は甑の把手であろう。

以上のほかに、須恵器片32 (蓋2、杯2、高杯4、隴1、甕2)、土師器片564 (甕11、甑2) が出土した。

Tab. 37 B区第47号住居跡出土土器一覧 () は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	S杯	底部欠	11.6	(4.2)	受け部13.9	胎土精良、堅緻	青灰色	底部外面にヘラ記号
2	H杯	底部欠	(11.8)	(4.5)	口縁部	砂粒を含み、焼成良	黄褐色	内外面丹塗り
3	H杯	底部欠	(12.1)		外稜 13.5	胎土精良、焼成良	淡茶色	外面黒色
4		把手				砂粒を含み、焼成良	黄褐色	
5	H小形甕	口縁部~肩部	(16.3)			胎土精良、焼成良	茶褐色	

B区第48号住居跡 (Fig. 108, PL.37)

N220・E4付近に位置する。北東部は現在の水路によって切れ、西隅は溝と重複している。この溝は本住居跡よりも古い。南西辺は3.7mあり、北西辺・南東辺は3.3mほど検出した。カマドは北西辺に付設され、内部から固くしまった焼土と焼けた小石3個が検出された。このカマドが北西辺中央に位置していたと仮定すれば、北西辺の長さは約4.3mで面積15.9m²の方形プランが推定できる。カマドを通る軸線の方位はN54°Wである。南西辺の南寄りに溝状の遺構が検出されており、周溝があったかもしれない。また、カマドと対称の位置に径140×90cm、深さ20cmほどのP9が検出されているが、貯蔵穴であろうか。支柱穴はP1~P3と思われるが、北東部に該当するピットは検出できなかった。残存壁高は9~15cmで浅い。

遺物 (Fig. 109, Tab.38, PL.37)

土師器・須恵器を出土した。

須恵器 (Fig. 109—1・2・4~6) 1の杯は、底部内面をナデ、外面はヘラ削りし、そのほかはヨコナデである。蓋の可能性はある。2は上端の破損部分に上へ向う部分がわずかに残っており、壺の類と思われる。4は皿と思われるが小片のため大きさは不明である。5・6は高杯で、6はカマド内より出土した。5は茶灰色、6は赤褐色を呈する。

土師器 (Fig. 109—3・7) 3の杯は内外面とも黒色化された痕跡があり、胎土・焼成とも良

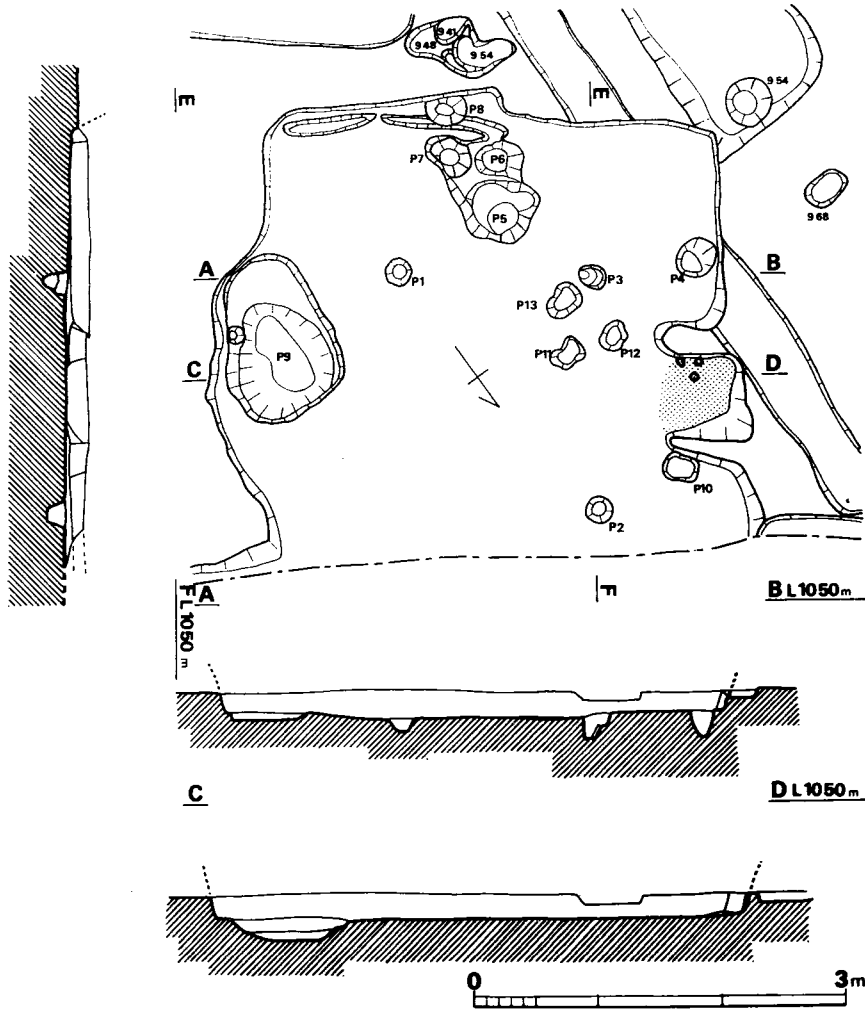


Fig. 108 B区第48号住居跡実測図 (縮尺1/60)

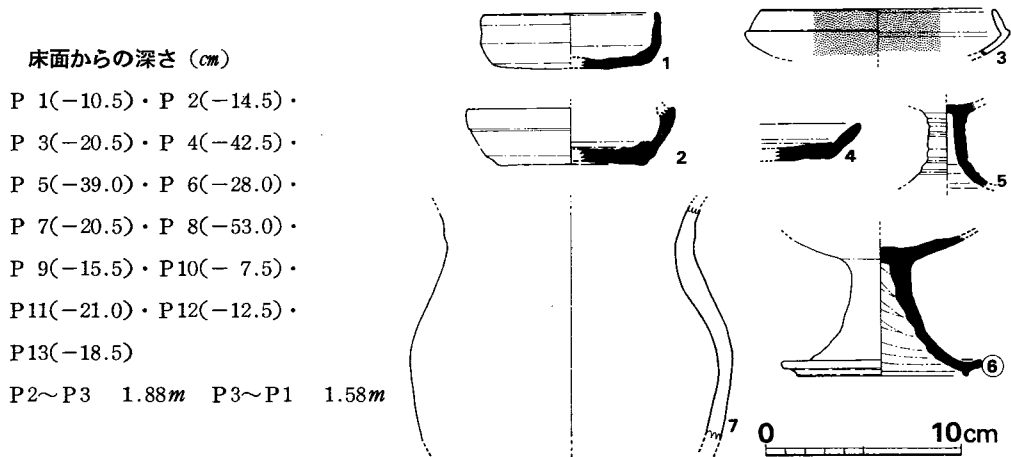


Fig. 109 B区第48号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

好な精製品である。7は小形の甕と思われるが、口縁部・底部を欠き、復原径には疑問がある。

Tab. 38 B区第48号住居跡出土土器一覧()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	S杯	底部欠	(9.0)	(2.9)	体部中位 (9.5)	少量の砂粒を含む焼成良	灰褐色	蓋の可能性あり
2	S壺	底部				砂粒を含む焼成良	灰色	
3	H杯	底部欠	(12.0)		外稜(13.8)	胎土精良、焼成良	茶灰色	内外面黒色化
4	S皿	口縁部～体部				胎土精良、焼成良	灰色	
5	S高杯	脚部				胎土精良、酸化炎焼成	茶灰色	
6	S高杯	脚部				砂粒を含む	赤褐色	
7	H小形甕	胴部				大きめの砂粒を含む焼成良	赤褐色	

B区第49号住居跡 (Fig. 110, PL.38)

N215・E5付近に位置する。第52号住居跡と重複しており、本住居跡の方が古い。第52号住居跡によって北東部が破壊されており、西隅は削平されているため、規模は不明であるが、長軸をN38°W前後にとる長方形プランと思われる。焼土は第52号住居跡との重複部にあり、いずれに伴うものか明確でないが、おそらく本住居跡に伴うものではないであろう。支柱穴は不明である。壁は8cm前後を残している。

遺物 (Fig. 111, Tab.39, PL.38)

弥生土器・土師器・須恵器が出土した。弥生土器はわずか小片2であった。

須恵器 (Fig. 111—1・2) 1は床面出土の蓋で、肩部に浅い凹線をもつ。この口縁部はわずかに折れ曲る。

土師器 (Fig. 111—3) 床面から出土した。甕底部と思われ、へら削りは上へ向う。

以上のほかに、土師器56片、須恵器11片が出土した。須恵器には甕口縁片2が含まれる。

Tab. 39 B区第49号住居跡出土土器一覧()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	S蓋	2/3	13.6	4.8	口縁部	砂粒を含む、酸化炎焼成	茶黄色	
2	S蓋	口縁部～体部				細砂を含み、焼成良	青灰色	
3	H甕	底部				砂粒を含み、焼成良	茶褐色	

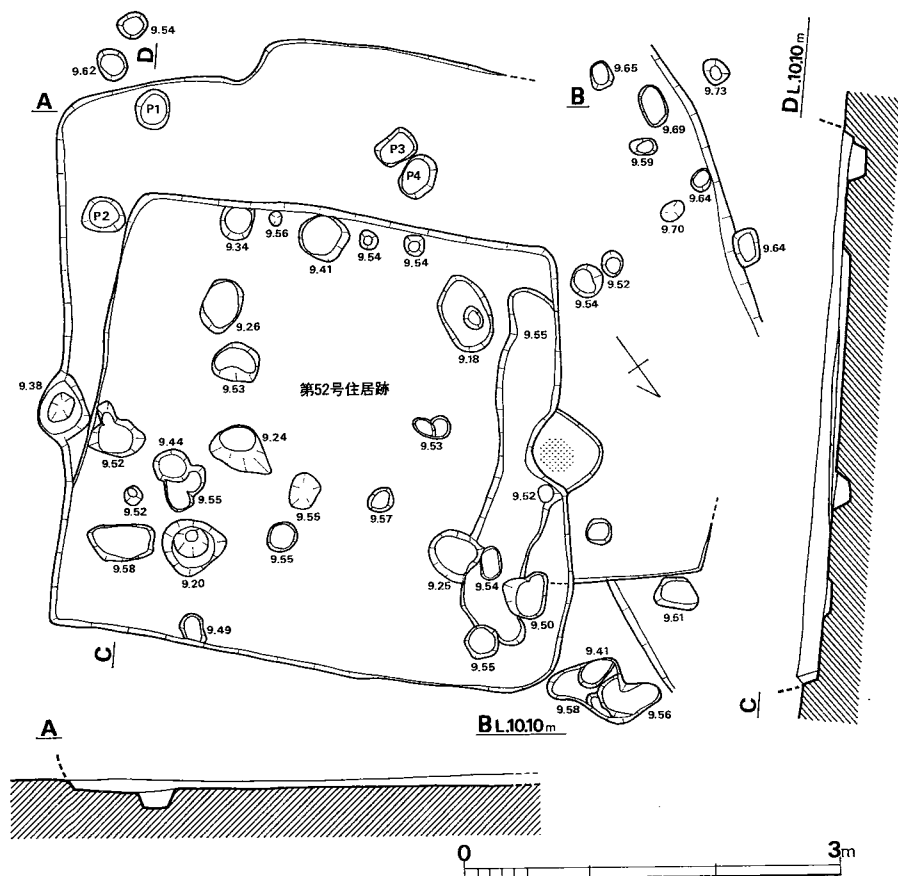


Fig. 110 B区第49号住居跡実測図 (縮尺1/60)

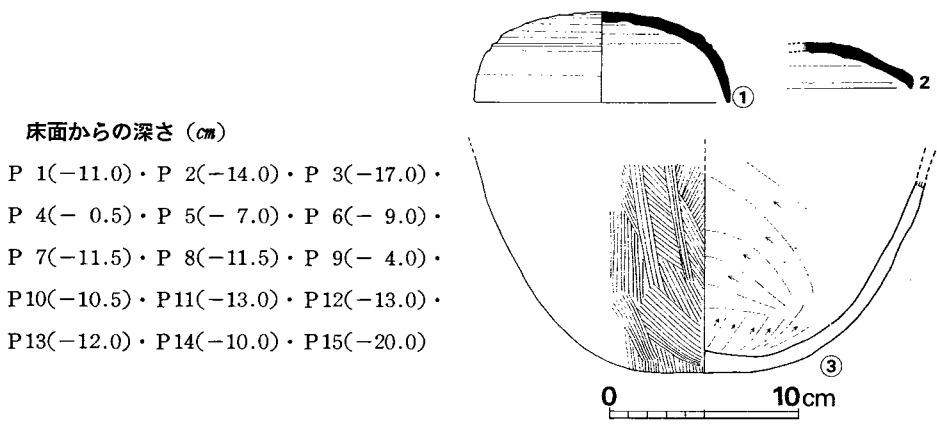


Fig. 111 B区第49号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

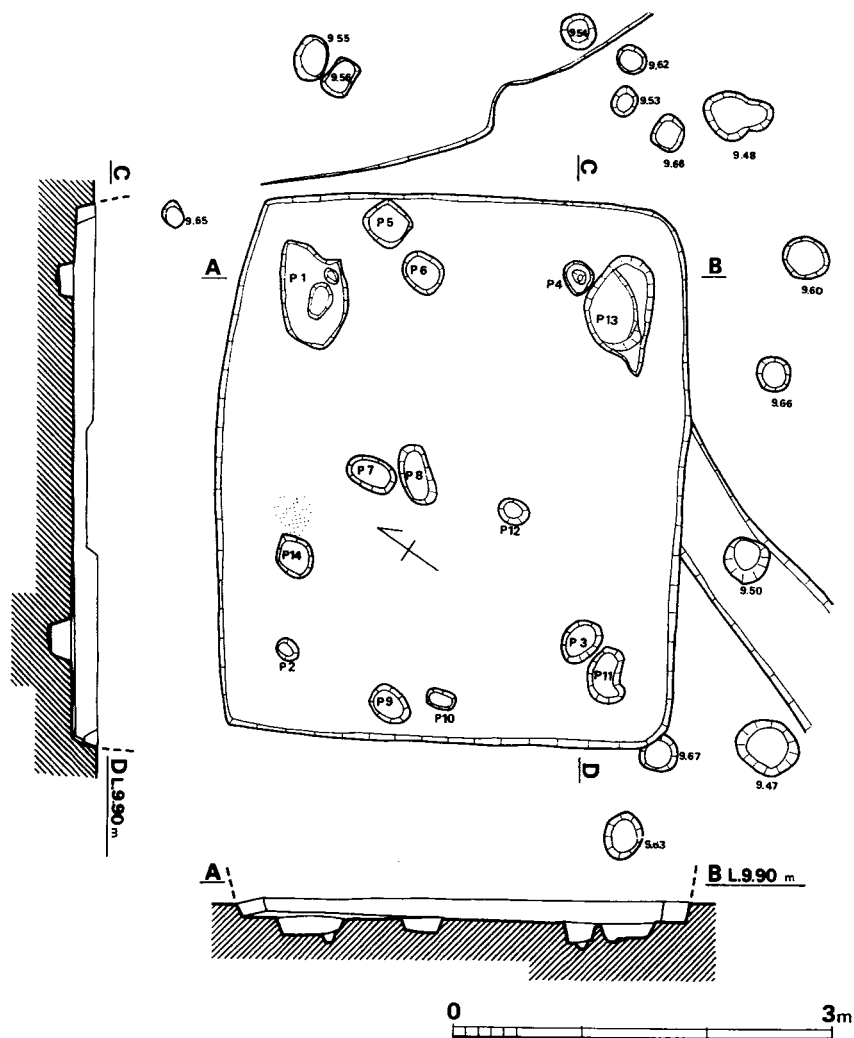


Fig. 112 B区第50号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)

P 1(-22.5)・P 2(- 9.5)・P 3(-18.5)・P 4(-15.0)・
 P 5(-12.5)・P 6(-10.0)・P 7(-16.0)・P 8(-14.0)・
 P 9(-14.5)・P 10(- 8.0)・P 11(-20.0)・P 12(-16.0)・
 P 13(-14.5)・P 14(-15.0)
 P1~P2 2.95m P2~P3 2.33m P3~P4 2.94m
 P4~P1 2.33m

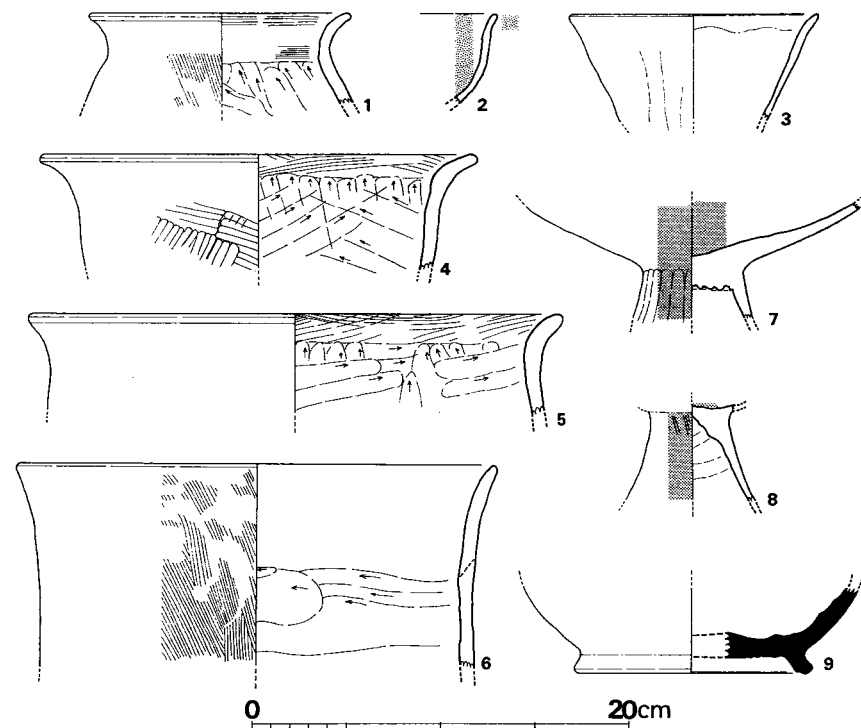


Fig. 113 B区第50号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

B 区第50号住居跡 (Fig. 112, PL. 38)

N210・Oに位置する。溝と重複しており、本住居跡の方が新しいが、溝からの遺物は不明である。各辺の長さは、北西辺4.2m、南西辺3.4m、南東辺4.2m、北東辺3.2mの長方形プランで面積は13.8m²である。長軸をN57°Wにとるが、焼土はP14の北東部に検出されている。主柱穴はP1・P2・P3またはP11・P4またはP13の4本柱と思われるが、不確定である。壁は10~21.5cmで残りは良くない。

遺物 (Fig. 113, Tab. 40)

土師器・須恵器が出土した。

須恵器 (Fig. 113—9) 黄白色を呈する焼成不良の長頸壺である。

土師器 (Fig. 113—1~8) 2は黒色化された碗の小片で、内面は磨かれている。3は壺の口縁部と思われる。1は小形の甕で、内面頸部以下はヘラ削りである。4~6は甕で、4の外面はタタキ目の上から、さらにハケ目調整を加えている。7・8は、脚部内面を除き、ともに丹塗りの高杯である。

以上のほかに、須恵器杯の底部片、甕小片3を出土した。

Tab. 40 B区第50号住居跡出土土器一覧 ()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調		備考
			口径	器高					
1	H小形甕	口縁部~肩部	(11.9)		胴部	胎土精良、焼成良 硬い	褐色		
2	H碗	口縁部~体部				胎土精良、焼成良	外面 褐色 内面 黒色	内面黒色化	
3	H壺	口縁部	(13.3)			胎土精良、焼成良	明褐色		
4	H甕	口縁部	(23.2)		口縁部	大きめの砂粒を含み、焼成良	黄灰色		
5	H甕	口縁部	(28.3)			大きめの砂粒を含み、焼成良	黄白色		
6	H甕	口縁部~体部	(25.5)			胎土精良、焼成良	黄褐色		
7	H高杯	杯部~脚部				胎土精良、焼成良	赤黄色	内外面丹塗り	
8	H高杯	脚部				胎土精良、焼成良	赤黄色	内外面丹塗り	
9	S長頸壺	底部				砂粒を含み、焼成不良	黄白色	底部径 12.7	

B区第51号住居跡 (Fig. 114, PL. 36)

N205・W5付近に位置する。第47号住居跡と重複しており、第47号住居跡の方が新しい。本遺構は北東辺の一部と東隅を検出したのみで、大部分は水路下にあるため、規模等は不明である。しかし、水路をはさんで、第42号住居跡の南側の略三角形の掘り込みを本住居跡の西隅とすれば、 $5.5 \times 4.5m$ ほどの長方形プランとなる。焼土・炉などは検出されず、柱穴も不明である。残存壁高6~8cm。

遺物 (Fig. 115, Tab. 41, PL. 36)

須恵器・土師器・鉄滓を出土した。

須恵器 (Fig. 115—2) 1.5cmの立ち上りをもつ杯の小片で、内外面ともヨコナデ調整である。

土師器 (Fig. 115—1・3) 1は床面出土の杯で、全体にやや歪んでいる。3は外面円塗りの甗底部片で、本遺跡中唯一の例である。

以上のほかに、須恵器杯口縁片2、土師器甗口縁片2が出土した。

鉄滓 1個出土した。重さ28.5g。

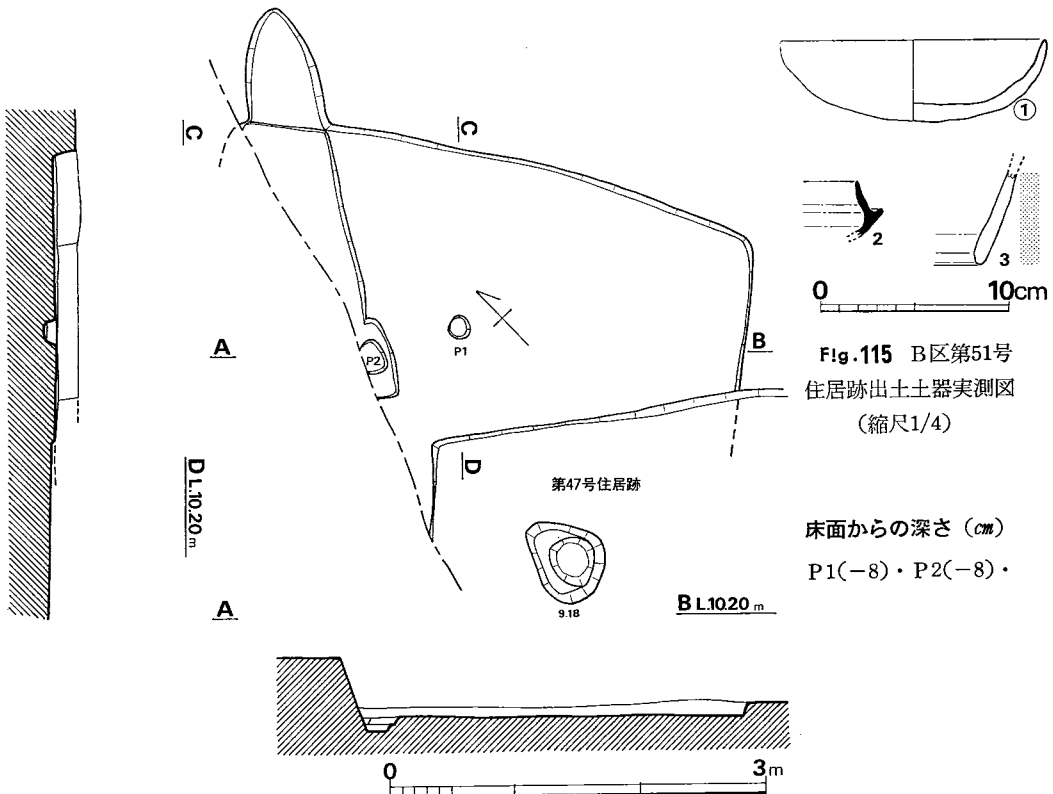


Fig. 114 B区第51号住居跡実測図 (縮尺1/60)

Fig. 115 B区第51号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

床面からの深さ (cm)
P1(-8)・P2(-8)・

Tab. 41 B区第51号住居跡出土土器一覧 () は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	H杯	略完	14.0	4.3	口縁部	砂粒を多く含み、焼成良	黄褐色	
2	S杯	口縁部~体部				胎土精良、焼成良	青灰色	
3	H甑	底部				少量の砂粒を含み、焼成良	外面 赤褐色 内面 赤黄色	外面丹塗り

B区第52号住居跡 (Fig. 116, PL. 38)

N215・E4に位置する。第49号住居跡と重複しており、本住居跡の方が新しい。北西辺3.4m、南西辺3.3m、南東辺3.5m、北東辺3.9mの台形状のプランで、北西辺の第52号住居跡と重複している部分の焼土をカマドの痕跡とすれば、軸方位はN48°Wをとる。面積は12.2㎡。支柱穴はP1~P4の4本柱と思われる。北西辺に沿った形で、280×45cmの浅い掘り込みが認められたが、何であるかは不明。壁は4~17cmと残りは良くない。

遺物 (Fig. 117, Tab. 42)

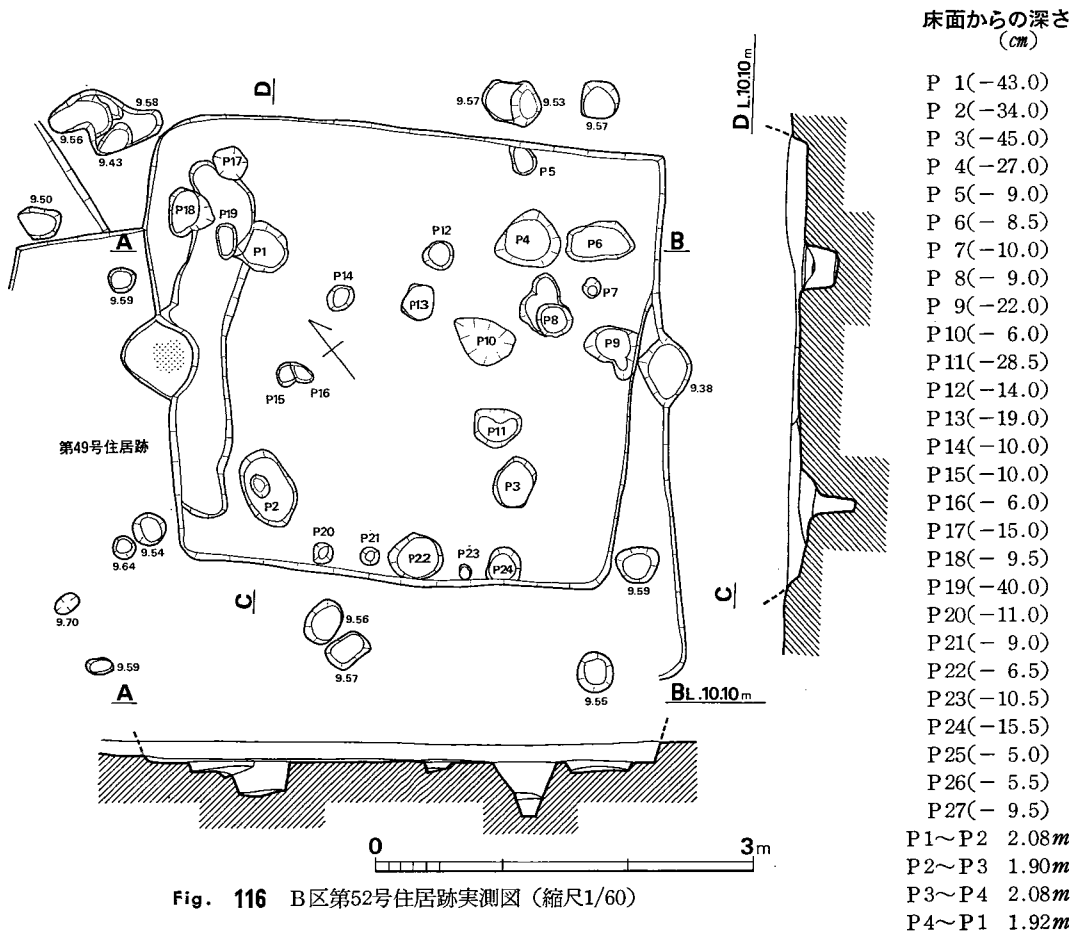


Fig. 116 B区第52号住居跡実測図 (縮尺1/60)

土師器・須恵器が出土した。

須恵器 (Fig. 117—1・2) 1・2ともに床面出土で、1は蓋の可能性もあるが高杯とした。2は杯の可能性はあるが、底部外面のカキ目から高杯とした。2は体部に4本の凹線をもつ。

以上のほか、須恵器では甕小片1、平底杯片1など17片が出土した。土師器では、杯口縁片1を含めて125片が出土した。

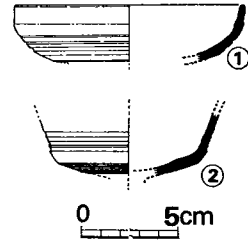


Fig. 117 B区第52号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

Tab. 42 B区第52号住居跡出土土器一覧 ()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	S高杯	杯部	(11.3)			細砂を含む、焼成良	青灰色	
2	S高杯	杯部				胎土精良、焼成不良	黄褐色	

B区第53号住居跡 (Fig. 118, PL. 39)

N230・E10付近に位置する。第54号住居跡と重複しており、本住居跡の方が古い。東部は用地外にあるため検出できなかったが、西辺は4.3mほど確認できた。方形または長方形のプランと思われる。第54号住居跡の南西辺に接する位置で焼土が検出されており、カマドの痕跡と考えられる。重複部分を除く住居跡内には、ピットは1個確認されたのみであるが、P1は支柱穴の一つと思われる。壁高は8.5~12cmで残りは悪い。

遺物 (Fig. 119, Tab. 43)

土師器・須恵器が出土した。

須恵器 (Fig. 119—2) 高杯の脚部で、赤褐色を呈する。

土師器 (Fig. 119—1) 小形の甕で口縁部は強く外反する。

以上のほか、須恵器小片2、土師器小片92が出土した。

Tab. 43 B区第53号住居跡出土土器一覧 ()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	H小形甕	口縁部~肩部	(14.3)		胴部	胎土精良、焼成良	淡褐色	
2	S高杯	脚部				胎土精良	赤褐色	

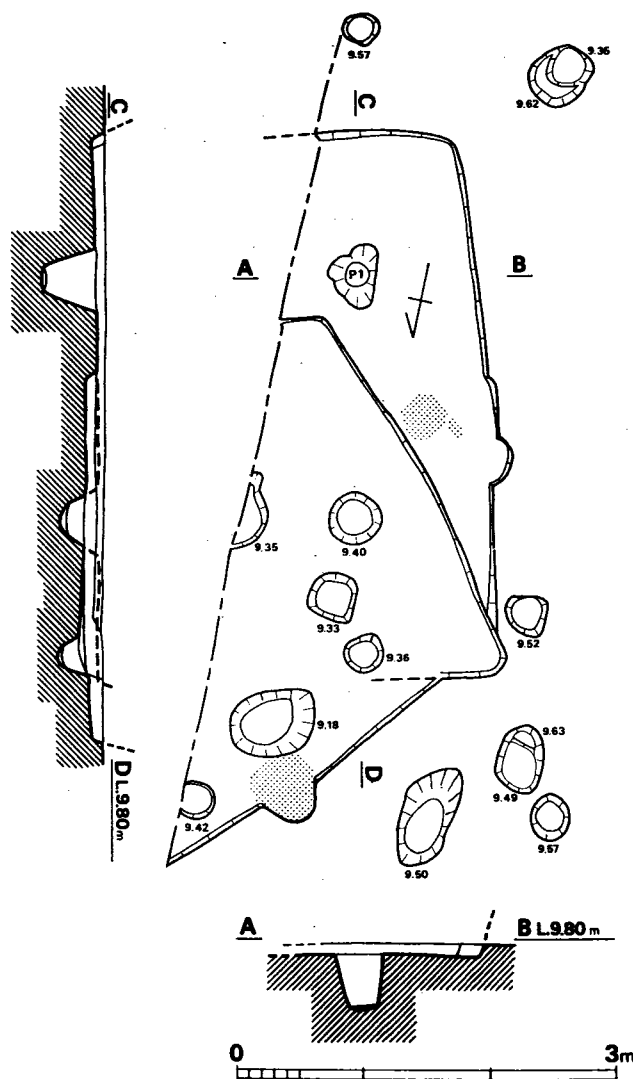


Fig. 181 B区第53号住居跡実測図(縮尺1/60)

穴は不明である。壁は8~15cmと浅く残りは悪い。

遺物 (Fig. 121、Tab. 44、PL. 39)

須恵器・土師器が出土した。

須恵器 (Fig. 121—1) ツマミを欠く蓋で、かえりは受け部より突出する。天井部外面に「×」のヘラ記号をもつ。

土師器 (Fig. 121—2~4) 2は高杯脚部で、外面は縦方向のヘラ削りを施す。3・4は甕で、4は頸部がやや立ち上る。

以上のほかに、須恵器杯小片1、土師器小片50(そのうち、丹塗り片1、壺? 1、碗2)が出土した。

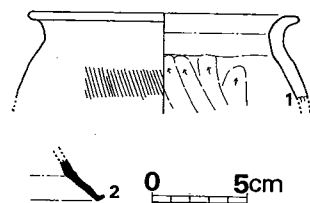


Fig. 119 B区第53号住居跡出土土器実測図(縮尺1/4)

床面からの深さ (cm)

P1(-42.0)

B区第54号住居跡

(Fig. 120、PL. 39)

N230・N10に位置する。第53号住居跡と重複しており、本住居跡の方が新しい。東半は用地外にあるが、検出した範囲からみると、方形または長方形プランになると思われる。北西辺は約3.2m検出し、南西辺3.1mで、南端部は南隅と思われる。焼土は北西辺に検出され、25cmほど外方へ突き出ている。また、西隅は丸く外側へ突き出ているが、第53号住居跡と重複したためであろう。ピットは住居跡内に5個検出されたが、支柱

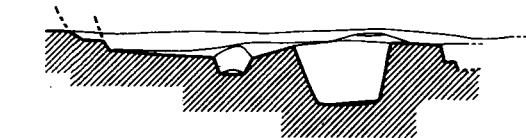
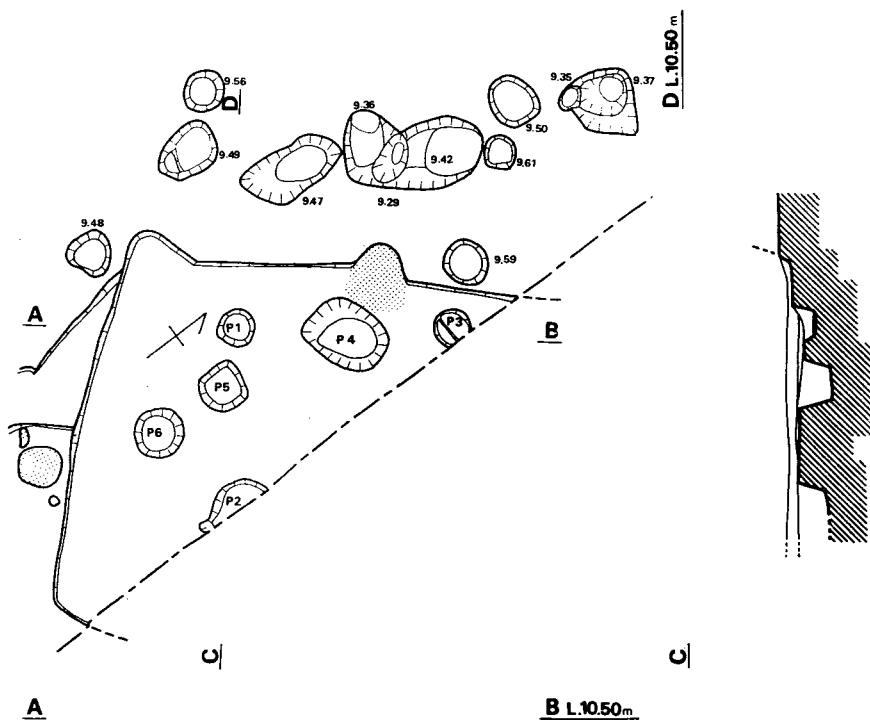


Fig. 120 B区第54号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)

P 1(-18.5)・P 2(-25.0)・P 3(-22.0)・

P 4(-46.5)・P 5(-24.0)・P 6(-19.5)

P1~P2 1.5m P1~P3 1.8m

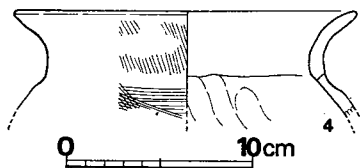


Fig. 121 B区第54号住居跡出土
土器実測図 (縮尺1/4)

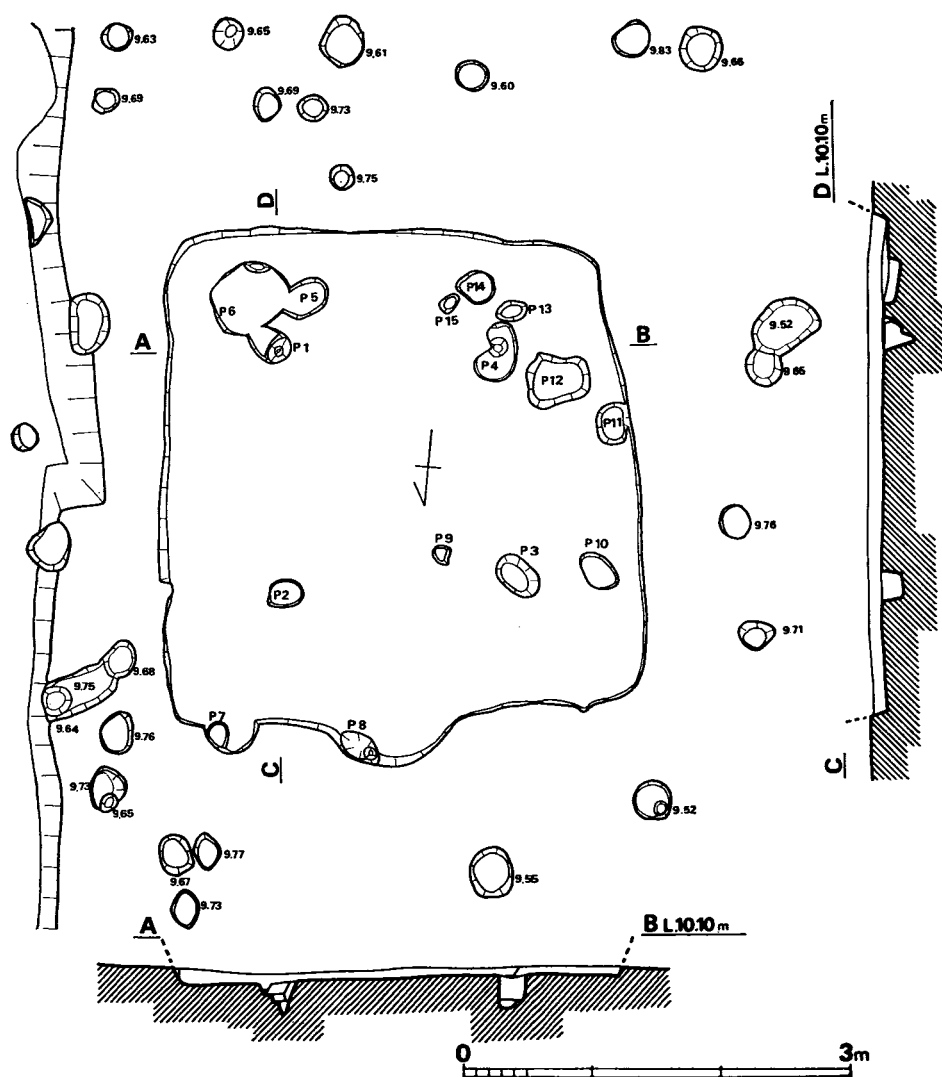


Fig. 122 B区第55号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)

P 1(-25.5)・P 2(-15.5)・P 3(-13.5)・P 4(-29.0)・

P 5(-10.0)・P 6(-10.0)・P 7(-11.5)・P 8(-30.0)・

P 9(-17.0)・P10(-13.5)・P11(-10.0)・P12(- 8.0)・

P13(- 5.0)・P14(-16.0)・P15(- 6.0)

P1~P2 1.85m P2~P3 1.80m P3~P4 1.87m

P4~P1 1.80m

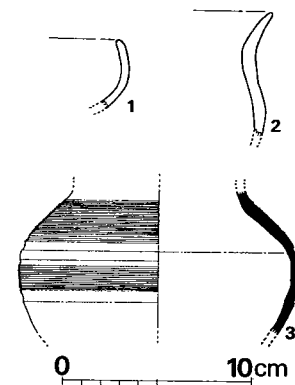


Fig. 123 B区第55号住居跡出土遺物実測図 (I) (縮尺1/4)

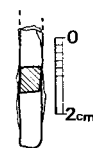


Fig. 124 B区第55号住居跡出土遺物実測図 (II) (縮尺1/2)

Tab. 44 B区第54号住居跡出土土器一覧()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	S 蓋	ツマミ欠	(8.0)		(10.5)	砂粒を含み、堅緻	灰色	
2	H高杯	脚部				胎土精良、焼成良	茶褐色	
3	H甕	口縁部	(17.8)			砂粒を含み、焼成良	黄褐色	
4	H甕	口縁部～肩部	(13.7)			砂粒を含み、焼成良	黄褐色	

B区第55号住居跡 (Fig. 122, PL. 33)

N190・W30に位置する。東西3.8m、南北3.9mのほぼ方形のプランを有し、北辺中央部は突出している。床面積は約14.8m²で、長軸方位はN9°Wをさす。支柱穴はP1～P4の4本柱と思われる。焼土・炉は検出されなかった。壁は6.5～14cmと残りはよくない。

遺物 (Fig. 123・124, Tab.45)

土師器・須恵器・不明鉄製品が出土した。

須恵器 (Fig. 123—3) 口縁部・底部を欠くが壺と思われる。体部に2本の浅い凹線があり、その上下はカキ目調整である。底部近くはヨコナデをしている。

土師器 (Fig. 123—1・2) 1は杯の小片、2は小形甕の小片と思われる。

以上を含めて、須恵器片4、土師器片139(そのうち、甕口縁部片4、甕口縁部片1、高杯杯部片1)が出土した。

不明鉄製品 (Fig. 124) 断面方形で、長さ約3.3cmが残っている。

Tab. 45 B区第55号住居跡出土土器一覧()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	H杯	口縁部				細砂を多く含む	淡茶黄色	
2	H小形甕	口縁部				砂粒を含む	茶褐色	
3	S壺	体部			胴部 (15.0)	少量の砂粒を含み焼成良	青灰色	

B区第56号竪穴 (Fig. 125, PL. 34)

N190・W37に位置する。全体に不整形で、2軒の住居が重複していたのかもしれない。壁の高さは8.5~22cmほどあり、比較的保存の良い方である。床面は平坦でP2の北側床面に石が検出された。焼土・支柱穴等は不明である。遺物は豊富であるが、住居跡とするには疑問があるため、ここでは竪穴とした。

遺物 (Fig. 126, Tab. 46, PL. 34)

須恵器・土師器・不明鉄製品が出土した。

須恵器 (Fig. 126—1~13, 15・17・24・26・34) 1~3は蓋で、3はやや径が小さい。1は肩部に2本の凹線をもち、口縁部内面に段がある。2は口縁端部が薄い。3は肩部に2本の凹線をもつ。4~13は杯で、そのうち10~12が比較的小形であり、13は蓋の可能性もある。7・8・13はヘラ記号をもつ。底部内面をナデ、外面をヘラ削り、そのほかをヨコナデするものが多い。15は杯の可能性もあるが、底部外面のカキ目から高杯とした。24は茶黄色、26は赤褐色を呈するが、器形と調整から須恵器とした。17は甗で、口縁部内面に段がある。32は大形の甗口縁部と思われる。口縁端部の外面に2本の凹線をもち、頸部を境として上はタタキ→ヨコナデ、下はタタキ→カキ目の調整をする。なお、縦方向のヘラ痕がある。34は壺で、体部に浅い凹線2本があり、その上下はカキ目を施す。

土師器 (Fig. 126—14・16・18~23・25・27~31・33) 14・16は杯で、14は立ち上りがある。18は茶赤色を呈する壺で、内外面ともヘラ調整を施し、胎土・焼成とも良好な精製品である。33も壺であるが、口縁部の形態は不明である。25は大形品の杯部片で、内外面とも丹塗りである。19~23は小形の甗で、いずれも体部以下を欠いている。口縁部に若干の差がある。27~31は甗で、27・28は小形品の可能性もあるが、頸部の開き方から大形品とした。30・31はやや立ち上ってから外反する。35・36は甗の把手であろう。35は赤黄色の薄い膜がある。

本遺構は比較的遺物が豊富で、以上のほかに、須恵器蓋口縁片6、杯6、高杯2、甗体部片6、不明12が出土した。土師器では、杯口縁片4（そのうち丹塗り片1）、高杯杯部片3、脚部片5（そのうち丹塗り片3）、甗口縁部片11、底部片2、甗口縁部片41、その他716片（多くは甗または甗の体部片である）が出土した。

Tab. 46 B区第56号竪穴出土土器一覧（ ）は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	S 蓋	天井部欠	(12.2)	(4.6)	口縁部	砂粒を多く含み、焼成良	外面 紫灰色 内面 灰色	

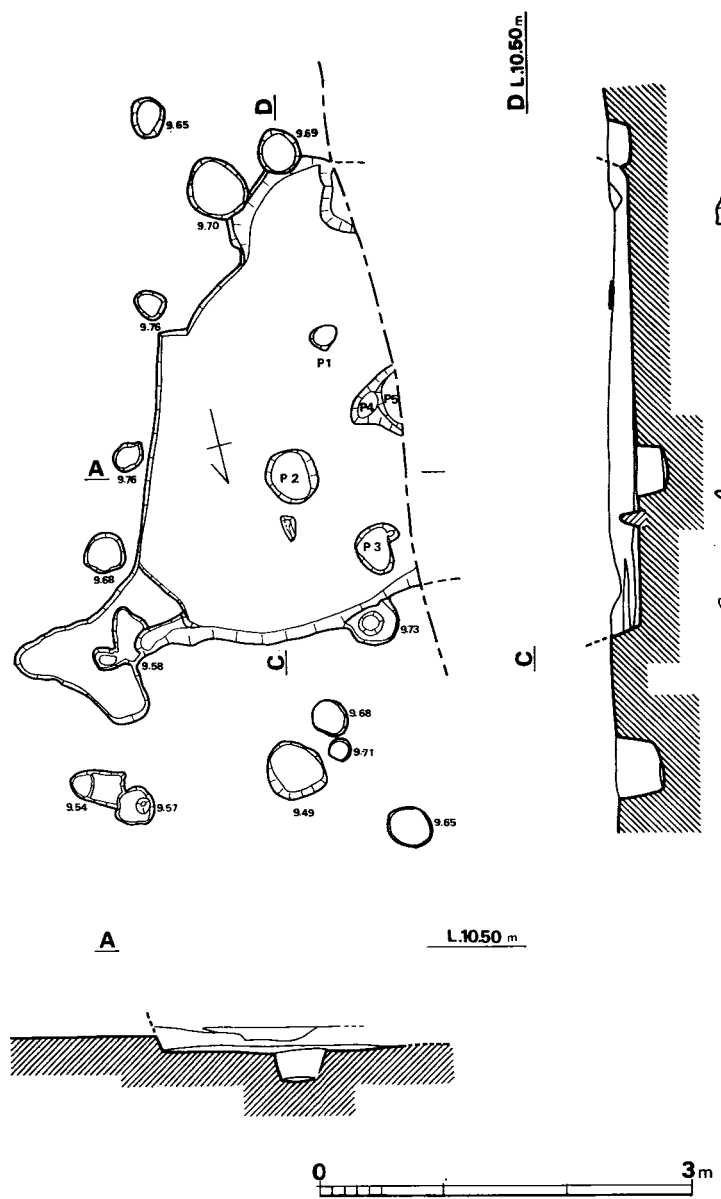


Fig. 125 B区第56号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)
 P1(-13.0)・P2(-23.5)・P3(-17.5)・
 P4(-10.0)・P5(-10.5)

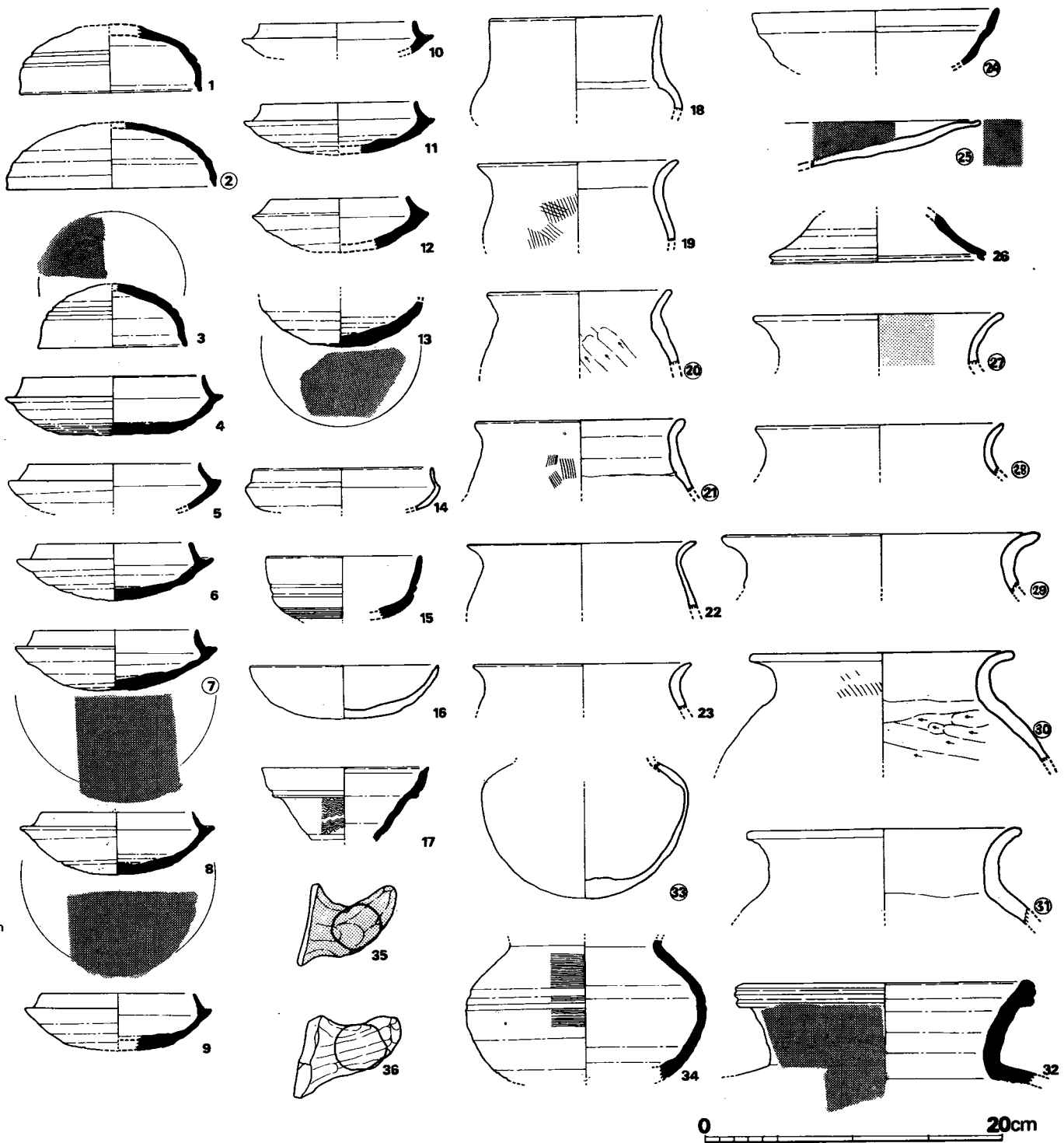


Fig. 126 B区第56号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

0 20cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
2	S 蓋	天井部欠	(15.1)	(4.5)	口縁部	少量の砂粒を含む、酸化炎焼成	赤褐色	
3	S 蓋	天井部欠	(10.1)	(4.5)	口縁部	細砂を含み、焼成良	外面 灰紫色 内面 紫灰色	天井部にヘラ記号
4	S 杯	1/3	(12.4)	(4.0)	受け部 14.8	細砂を含み、堅緻	灰紫色	
5	S 杯	底部欠	(11.7)		受け部 14.4	細砂を含み、堅緻	外面 灰紫色 内面 紫灰色	
6	S 杯	1/2	(10.5)	3.9	受け部 13.4	胎土精良、堅緻	灰紫色	
7	S 杯	2/3	(11.1)	4.2	受け部 13.7	胎土精良、やや軟	灰紫色	外底にヘラ記号
8	S 杯	1/2	(10.3)	4.3	受け部 13.1	少量の砂粒を含み、堅緻	灰紫色	外底にヘラ記号
9	S 杯	底部欠	(10.5)	4.0	受け部 12.8	砂粒を含み、堅緻	外面 灰紫色 内面 紫灰色	
10	S 杯	底部欠	(10.6)		受け部(13.2)	細砂を含み、堅緻	灰紫色	
11	S 杯	底部欠	(10.6)	(3.5)	受け部(13.0)	砂粒を含み、堅緻	灰紫色	
12	S 杯	底部欠	(9.5)	(3.8)	受け部(12.1)	砂粒を含み、堅緻	灰紫色	
13	S 杯	上半欠				砂粒を含み、堅緻	紫灰色	蓋の可能性あり
14	H 杯	底部欠	(12.2)		外稜 (13.2)	胎土精良、焼成良		
15	S 高杯		(10.7)			胎土精良、焼成良	明茶褐色	
16	H 杯	復原完	(12.9)	3.6	口縁部	胎土精良、焼成良	黄褐色	
17	S 壺	口縁部～頸部	(11.3)			胎土精良、焼成良	外面 紫灰色 内面 灰紫色	
18	H 壺	口縁部～体部	(11.3)		胴部	胎土精良、焼成良	茶赤色	
19	H小形甕	口縁部～体部	(13.4)		口縁部	胎土精良、焼成良	褐色	
20	H小形甕	口縁部～体部	(12.3)			細砂を含み、焼成良	外面 茶黄色 内面 黄灰色	
21	H小形甕	口縁部～体部	(14.0)			細砂を含み、焼成良	暗茶褐色	
22	H小形甕	口縁部～体部	(15.5)			細砂を含み、焼成良	褐色	
23	H小形甕	口縁部	(14.5)			砂粒を含み、焼成良	茶褐色	
24	S 高杯	杯部	(16.4)			胎土精良、焼成良	茶黄色	
25	H 高杯	杯部				胎土精良、焼成良	茶黄色	内外面丹塗り
26	S 高杯	脚部				胎土精良、焼成良	赤褐色	脚端部径 14.5
27	H 甕	口縁部	(16.9)			胎土精良、焼成良	茶灰色	内面化粧土
28	H 甕	口縁部	(16.6)			砂粒を多く含み、焼成不良	黄褐色	
29	H 甕	口縁部	(21.3)			少量の砂粒を含む	茶黄色	
30	H 甕	口縁部～肩部	(17.8)		胴部	砂粒、黒雲母を含み、焼成良	暗茶褐色	

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
31	H 甕	口縁部～肩部	(18.5)		胴部	少量の細砂を含み、焼成良	茶灰色	
32	S 甕	口縁部	(18.8)			少量の砂粒を含み、焼成良	外面 紫灰色 内面 灰色	頸部外面にへラ平行線
33	H 壺	体部				砂粒を含み、焼成良	黄褐色	
34	S 壺	体部				砂粒を含み、焼成良	灰色	
35		把手				砂粒を含み、焼成良	茶黄色	化粧土
36		把手				砂粒を含み、焼成良	赤褐色	

B区第57号住居跡 (Fig. 127)

N185・W33付近に位置する。わずかに北西隅を検出したのみで、壁の残存も悪く、削平されたと思われる、詳細は不明である。

遺物

縄文土器片 1、弥生土器片 3、土師器片 4 が出土したのみである。

B区第59号住居跡

(Fig. 128, PL. 40)

N195・W10に位置する。第46号住居跡と重複しており、本住居跡の方が古い。北東辺4.8m、南東辺4.8mの方形プランで、床面積23㎡である。住居内に焼土が2カ所検出されているが、第46号住居跡との重複を考えると、北西の道路下に広がる焼土が本住居に伴うと思われる。この焼土をカマドの痕跡とみれば、主軸の方位はN57°Wをとる。残存壁高は17～22cmで、比較的残りは良い。住居内では多くのピットが検出されたが、支柱穴はP1～P4の4本柱であろう。

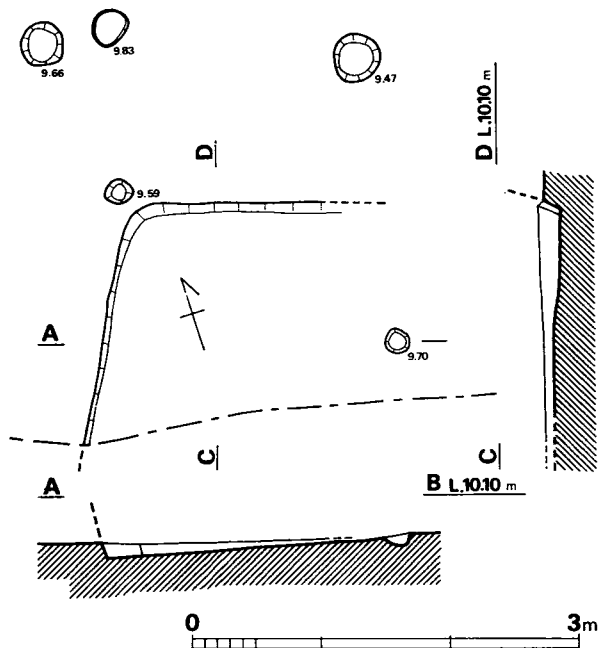


Fig. 127 B区第57号住居跡実測図 (縮尺1/60)

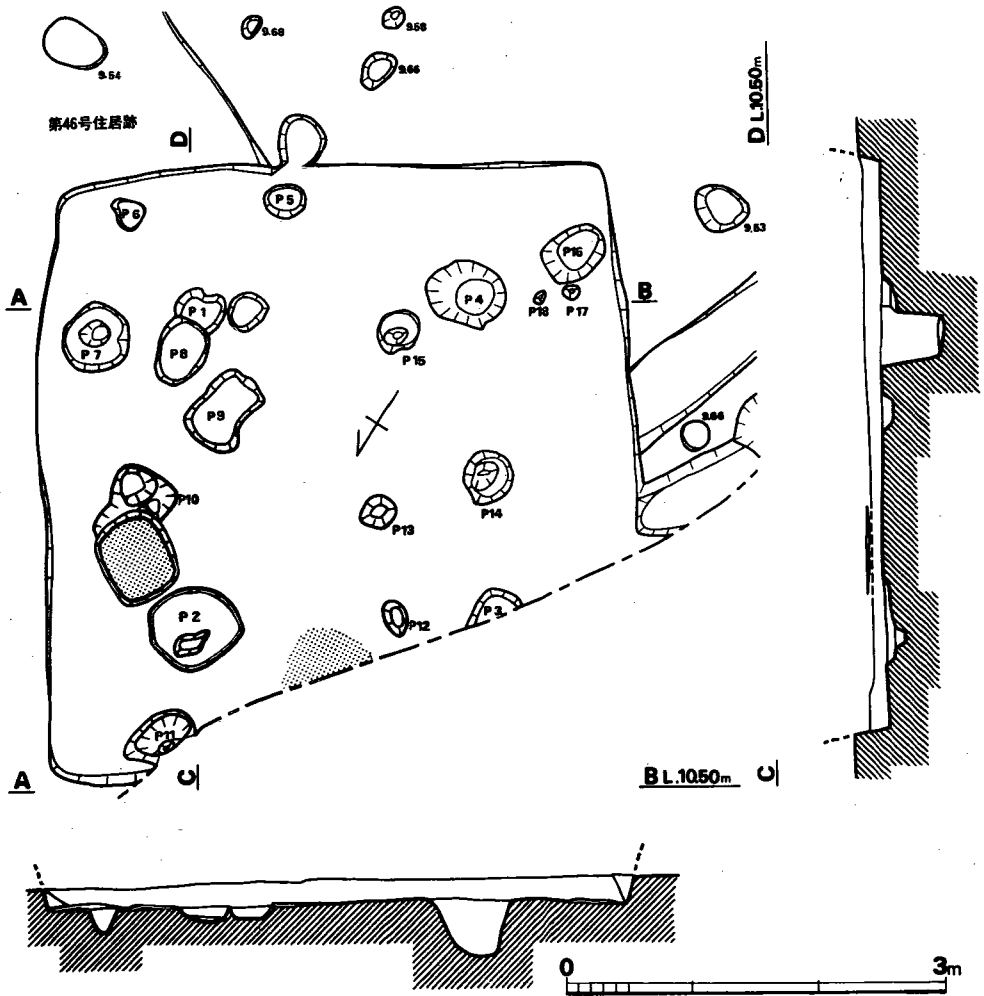


Fig. 128 B区第59号住居跡実測図 (縮尺1/60)

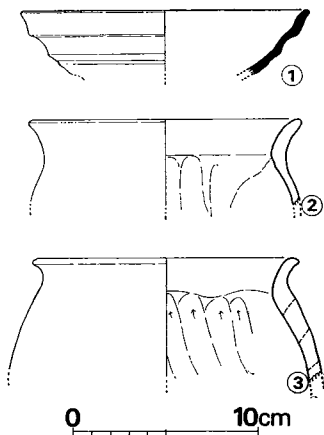


Fig. 129 B区第59号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

床面からの深さ (cm)

P 1(-11.0)	P 2(-15.0)	P 3(- 6.5)	P 4(-44.0)
P 5(-11.5)	P 6(-12.5)	P 7(-27.5)	P 8(-49.0)
P 9 (- 9.0)	P10(-21.0)	P11(-25.5)	P12(- 5.5)
P13(-14.0)	P14(-31.5)	P15(-17.5)	P16(-13.5)
P17(-10.0)	P18(-4.0)	46住	P 3(- 9.0)
P1~P2	2.62m	P2~P3	2.45m
P3~P4	2.50m	P4~P1	2.20m

遺物 (Fig. 129、Tab. 47)

須恵器・土師器が出土した。

須恵器 (Fig. 129—1) 赤褐色を呈するが、胎土・焼成・調整より須恵器高杯とした。

土師器 (Fig. 129—2・3) 2・3はいずれも小形の甕で下半を欠く。2の内面頸部以下は横方向のヘラ調整である。3は下から上へ向うヘラ削りである。

以上のほかに、土師器片52 (そのうち甕口縁片1)、須恵器片1が出土した。

Tab. 47 B区第59号住居跡出土土器一覧 ()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	S高杯	杯部	(15.5)		口縁部	胎土精良、酸化炎焼成	赤褐色	
2	H小形甕	口縁部	(14.7)			砂粒を含み、焼成良	黄褐色	二次加熱
3	H小形甕	口縁部～肩部	(14.4)			大きめの砂粒を含み、焼成良	黄褐色	

B区第60号住居跡 (Fig. 130、PL. 40)

N183・W12に位置する。東隅は道路下にあるため調査できなかったが、ほぼその全体を窺うことができる。北東～南西4.6m、北西～南東4.2mのほぼ方形のプランで、床面積19.3m²である。北西壁に接して焼土が検出され、これをカマドの痕跡とすれば、主軸方位はN57°Wをとる。支柱穴はP1～P4の4本柱と思われる。残存壁高7～16.5m。

遺物 (Fig. 131、Tab. 48)

須恵器・土師器が出土した。土師器は小片のみであった。

須恵器 (Fig. 131—1・2) 1・2は床面出土の高杯杯部と脚部である。1は外面に斜め上から切り込んだような凹線がある。2の内面は上半がシボリ目、下半は稜線を明瞭に残すヨコナデである。いずれも赤褐色～茶黄色を呈しているが、胎土・焼成・調整より須恵器とした。両者は接合しないが、同一個体の可能性がある。

以上のほかに須恵器小片6、土師器小片182 (そのうち甕口縁片1)が出土した。

Tab. 48 B区第60号住居跡出土土器一覧 ()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	S高杯	杯部	(17.6)		口縁部	砂粒を含み、やや軟	外面 赤褐色 内面 茶黄色	
2	S高杯	脚部				砂粒を含み、やや軟	茶黄色	

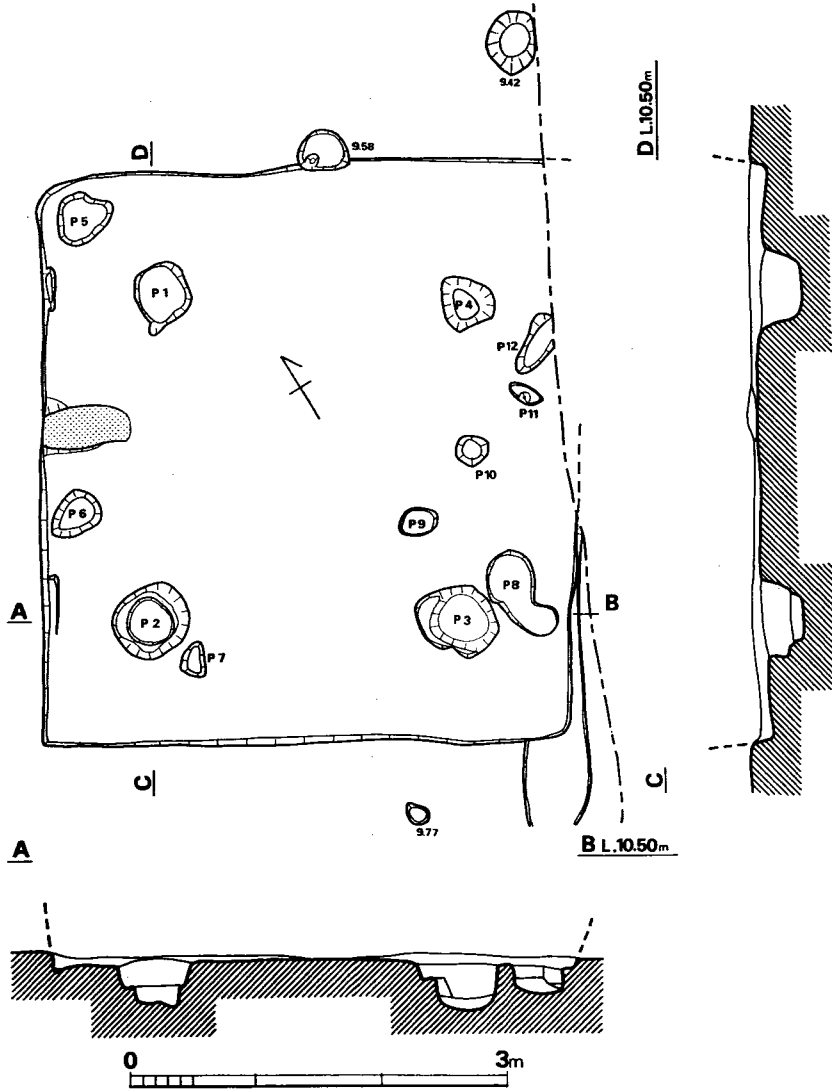
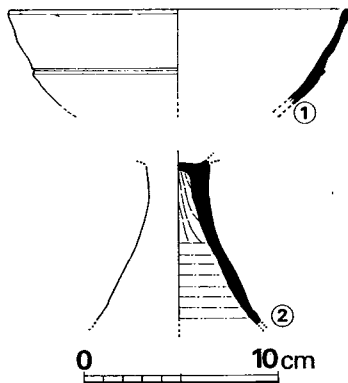


Fig. 130 B区第60号住居跡実測図 (縮尺1/60)



床面からの深さ (cm)

P 1(-32.0)・P 2(-33.0)・P 3(-36.0)・P 4(-34.0)・
 P 5(-22.0)・P 6(-14.5)・P 7(-15.0)・P 8(-19.0)・
 P 9(- 7.0)・P10(- 9.0)・P11(- 9.0)・P12(-16.0)
 P1~P2 2.65m P2~P3 2.52m
 P3~P4 2.52m P4~P1 2.46m

Fig. 131 B区第60号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

B区第61号住居跡 (Fig. 132, PL. 25)

N168・W30に位置する。東西4.7m、南北4.5mの方形プランで、東西方向にやや長く、軸方位はN70°Wをとる。支柱穴はP1～P4の4本柱と思われる。壁の残存高は3～13mとよくない。西壁のやや南寄りに焼土がわずかに検出されたが、カマドの痕跡であろうか。

遺物 (Fig. 133, PL. 26)

土師器が出土したのみで、須恵器はないが、遺構の遺存状態が悪いためであろうか。

土師器 (Fig. 133—1・2) 1は内面に黄色の薄い膜のある杯で、口縁部がわずかに屈曲し、外面はヘラ削りである。胎土には砂粒を含み、焼成は良い。復原口径15.0～15.2cm、器高5.1cmを測る。2は内外面とも黒色研磨された碗または杯である。

以上のほか、甑底部片と小片35が出土した。

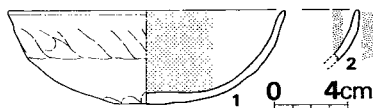


Fig. 133 B区第61号住居跡出土土器
実測図 (縮尺1/4)

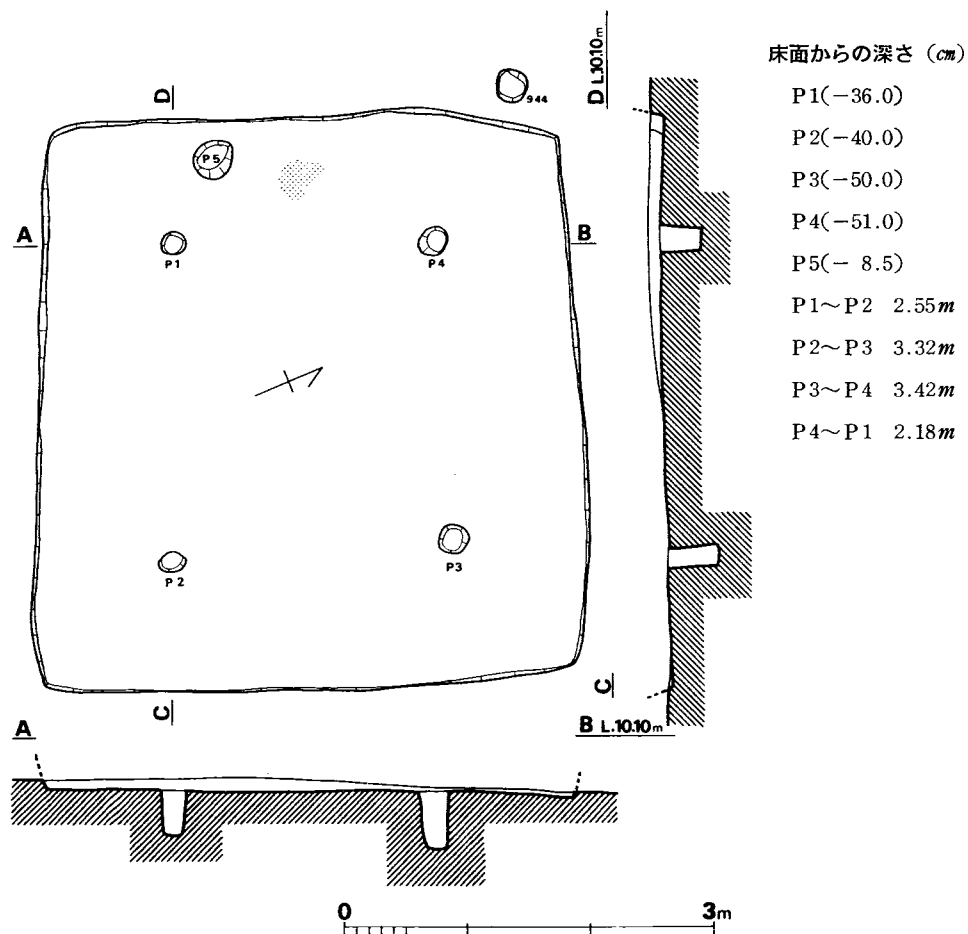


Fig. 132 B区第61号住居跡実測図 (縮尺1/60)

B区第62号住居跡 (Fig. 134)

N150・W30付近に位置する。東半は水路により切られており不明である。南北3.9mで、方形または台形のプランと思われる。北壁に接して焼土が検出されており、これをカマドの痕跡とすれば、主軸の方位はN20°E前後となる。この軸線はP4を通る。ピットは5個検出されたが、主柱穴は不明である。壁は7~10cmで残りは悪い。

遺物 (Fig. 135)

土師器片49、須恵器片3(蓋・杯)、陶器片と鉄鏃が出土したが、図示できるのは Fig. 135 の須恵器蓋のツマミのみである。このツマミは径約3.5cmで、頂部を欠く。青灰色を呈し、胎土、焼成とも良好である。

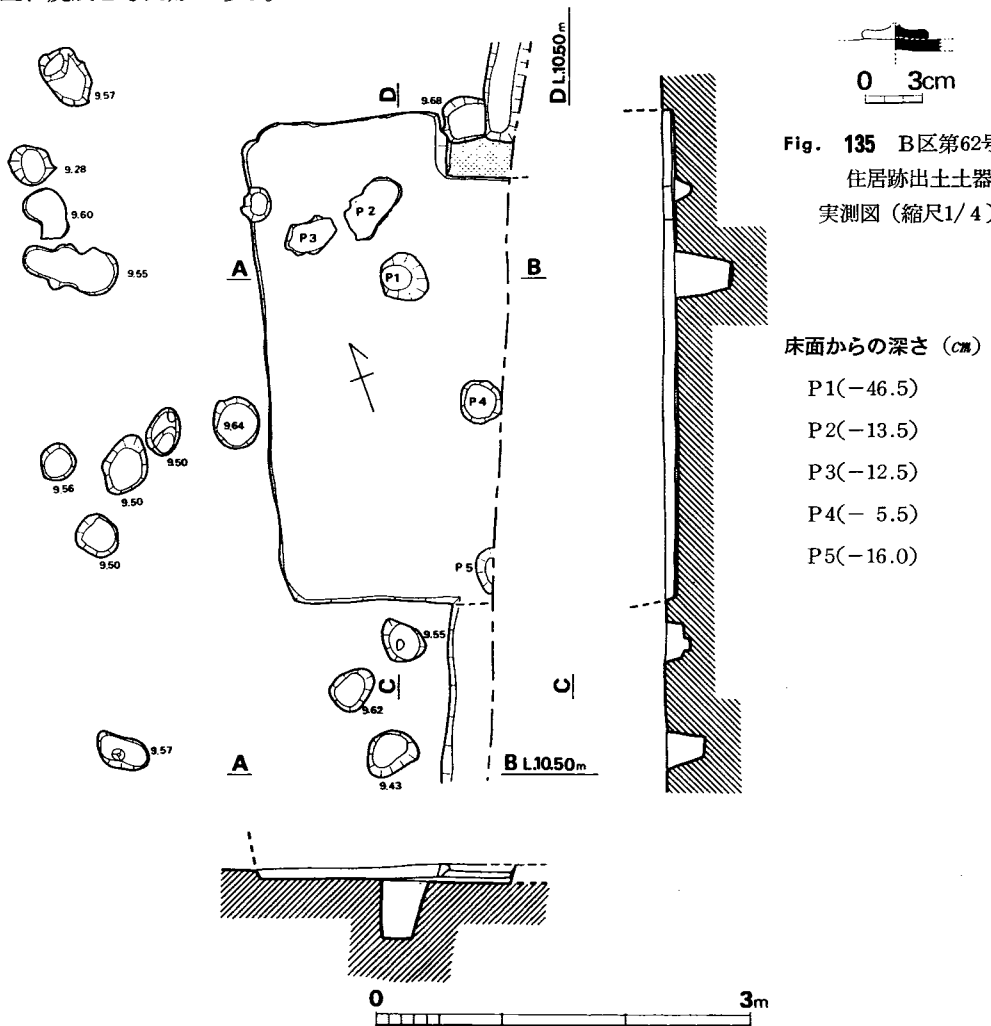


Fig. 134 B区第62号住居跡実測図 (縮尺1/60)

Fig. 135 B区第62号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

B区第64号住居跡 (Fig. 136)

N140・W37に位置する。第63号住居跡の南側に位置し、同住居跡を切っている。住居跡のほとんどが調査地区外であるため全体の状況は不明で、わずかに東側コーナーのみが検出された。調査地区との境、第63号住居跡と切りあっている部分の断面にわずかにカマドが付設されている。住居跡よりやや突出した形のカマドである。住居跡内ではピットが2個検出され、P2は位置的に柱穴の可能性はあるが、床面からの深さは8cmとやや浅い感じである。壁の残りは9~13cmとよくない。

遺物 (Fig. 137, Tab. 49, PL. 26)

弥生土器・土師器・須恵器が出土した。弥生土器、土師器は小片ばかりであった。

須恵器 (Fig. 137—1・2) 1は凹凸のある平底の杯で、底部内面はナデ、口縁部~体部はヨコナデである。2は底部を欠く。外面底部近くはヘラ削りを施す。

以上のほかに、弥生土器片6、土師器片34、須恵器片1が出土した。

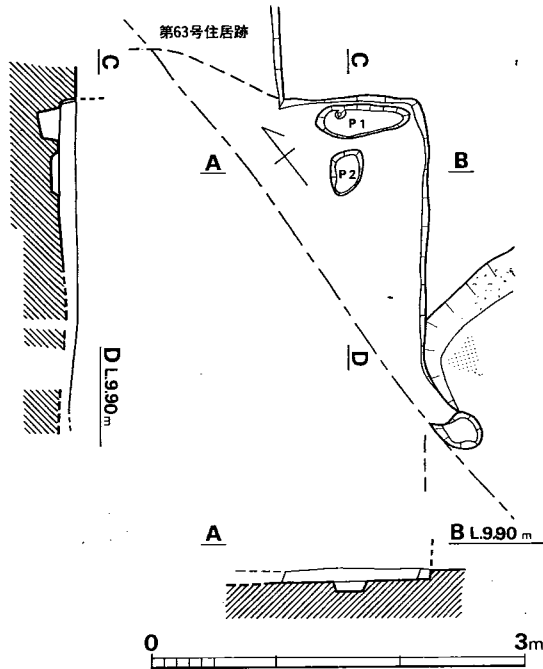


Fig. 136 B区第64号住居跡実測図 (縮尺1/60)

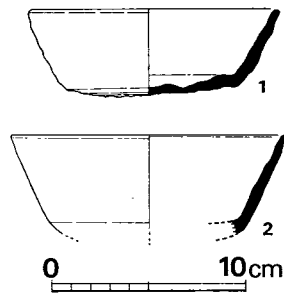


Fig. 137 B区第64号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

床面からの深さ (cm)
P1(-8.0)・P2(-8.0)

Tab. 49 B区第64号住居跡出土土器一覧 ()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	S杯	1/2	(17.8)	4.1 ~4.5	口縁部	胎土良、焼成やや不良	灰褐色	
2	S杯	底部欠	(14.1)		口縁部	胎土精良、焼成良	青灰色	

B区第66号住居跡 (Fig. 138)

N155・W37付近に位置する。北東隅を認めたのみで、その大半は西側の用地外にある。方形または長方形プランと思われる。住居跡内にピットは5個検出されたが、P1が支柱穴の可能性をもつのみである。残存壁高は3~10cmで、カマド・炉・焼土等は不明である。

遺物

弥生土器片3、土師器片37、須恵器片1が出土した。すべて小片である。

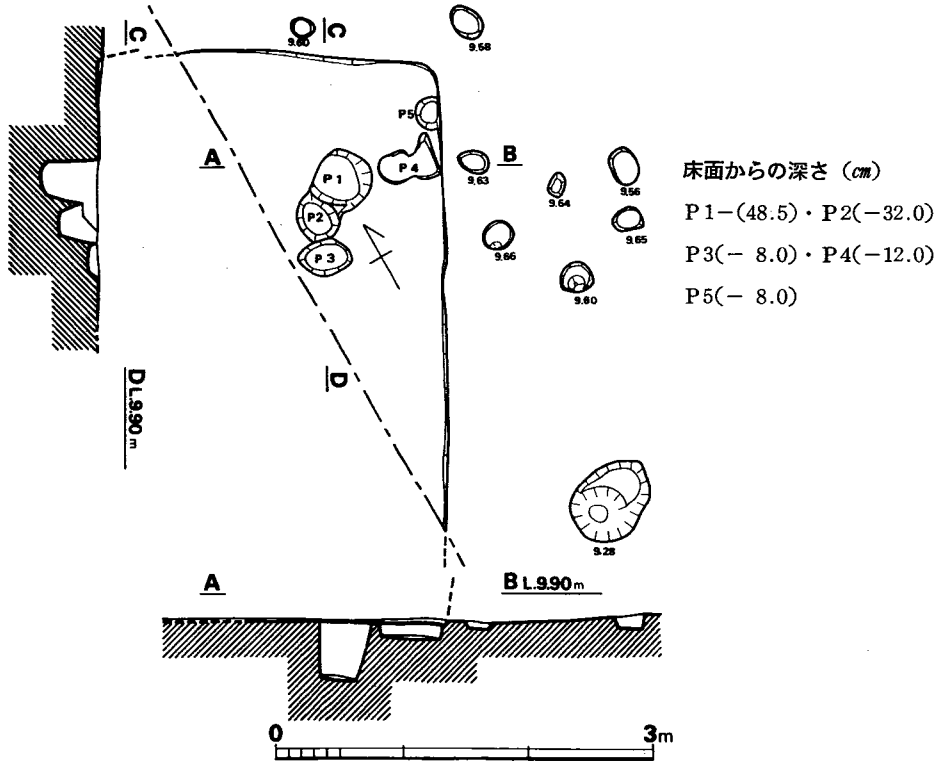


Fig. 138 B区第66号住居跡実測図 (縮尺1/60)

B区第67号住居跡 (Fig. 139, PL. 46)

N157・E10に位置する。隅丸方形のプランで、西北辺3.7m、南西辺4.0mを測る。東南隅は用地外のため調査することができなかった。焼土・炉・カマド等は検出されていない。用地外の存在の可能性は否定できないが、本遺跡でのあり方からみてその可能性は薄い。壁高は本遺跡では比較的遺存良好で、北西辺30cm、南西辺で25cmある。支柱穴はP1・P2・P3であろう。4本目は用地外にあると思われる。床面は中央部がやや盛り上っている。

遺物 (Fig. 140, Tab. 50)

土師器・須恵器・鉄滓・鞆羽口が出土した。

須恵器 (Fig. 140—3) 茶黄色を呈するが、胎土・調整等により須恵器高杯とした。杯部の底部に脚部との接合面を残している。

土師器 (Fig. 140—1・2) 1は内面黒色の碗で、内面は磨かれている。2は杯小片で、磨滅しているため調整は不明である。

以上のほかに、須恵器では脚部片1・甕口縁片1・杯片1・甕体部片1があり、土師器では二次火熱を受けた甕体部片、把手を欠失した甕体部片および小片136が出土した。

鉄滓 1個出土した。重さ2.5g。

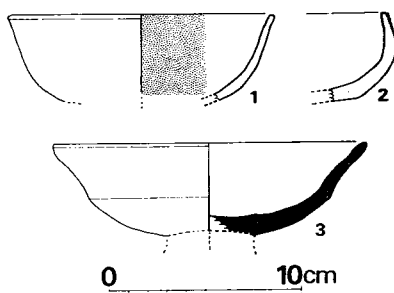


Fig. 140 B区第67号住居跡出土土器
実測図 (縮尺1/4)

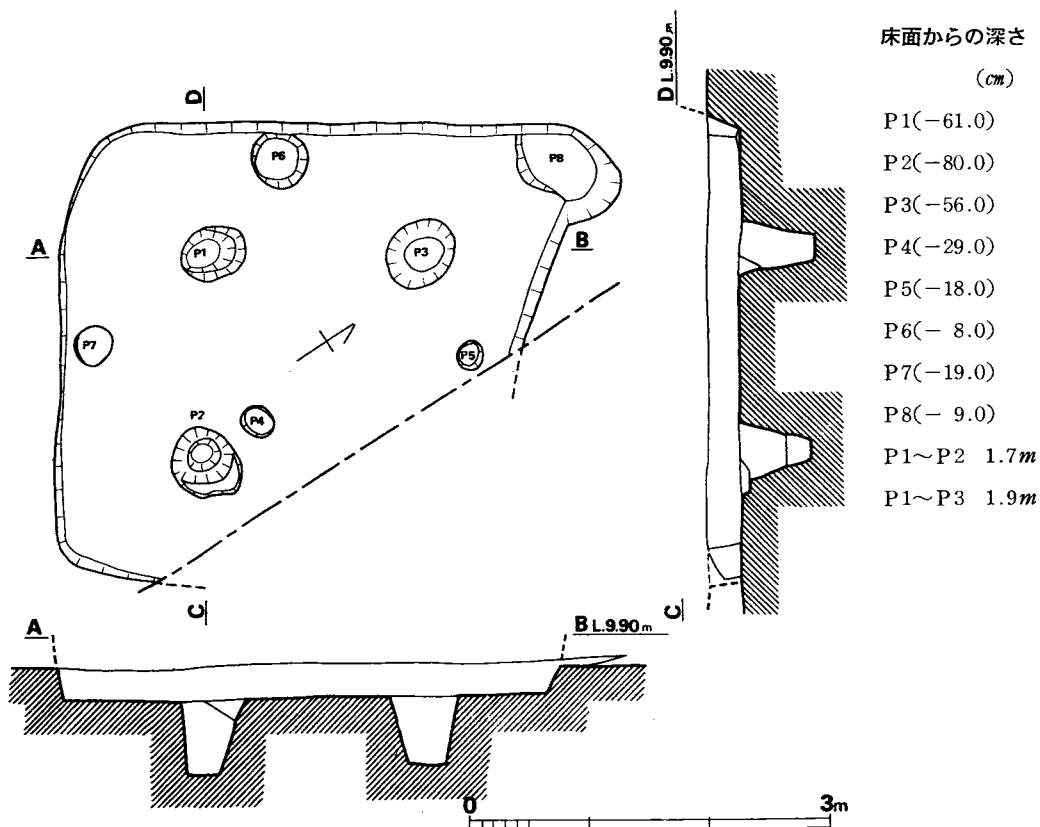


Fig. 139 B区第67号住居跡実測図 (縮尺1/60)

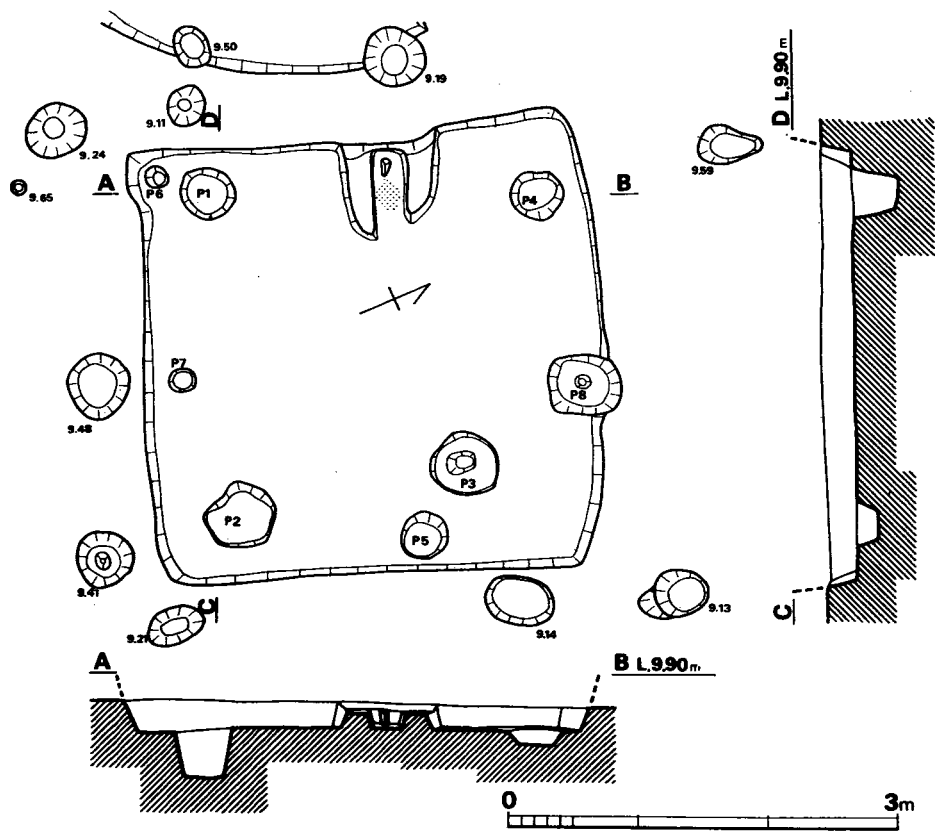


Fig. 141 B区第68号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)

P1(-13.0)・P2(-17.0)・P3(-34.0)・P4(-13.0)

P5(-38.5)・P6(-18.5)・P7(- 6.0)・P8(-29.0)

P1~P2 2.59m

P2~P3 1.89m

P3~P4 2.20m

P4~P1 2.68m

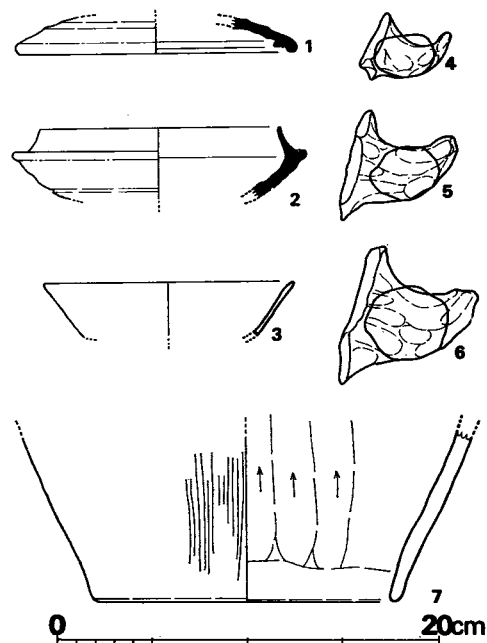


Fig. 143 B区第68号住居跡出土土器
実測図 (縮尺1/4)

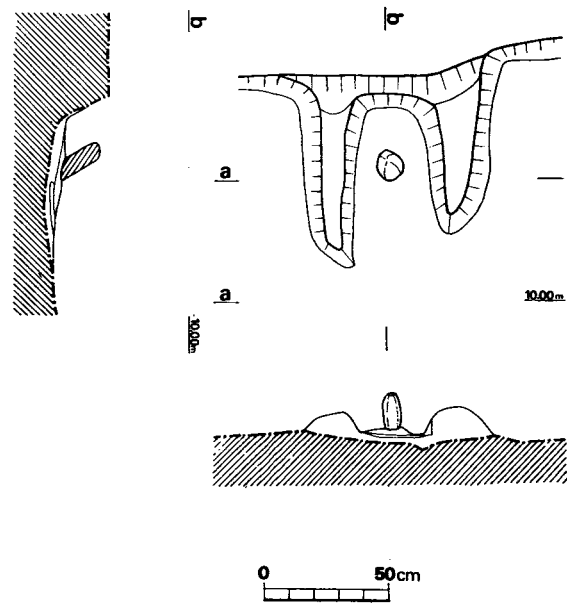


Fig. 142 B区第68号住居跡カマド土層断面図 (縮尺1/30)

Tab. 50 B区第67号住居跡出土土器一覧()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	H 碗	底部欠	(13.9)		口縁部	胎土精良、焼成良	外面淡茶黄色 内面黒色	内面黒色化
2	H 杯	口縁部～体部				砂粒を含み、焼成不良	黄褐色	
3	S 高杯	杯部	(16.2)		口縁部	砂粒を含み、焼成良	茶黄色	

B 区第68号住居跡 (Fig. 141・142, PL. 44)

N 145・E 10 に位置する。主軸を N71°W にふり、方形プランをもつ。長軸 3.7×短軸 3.4m で、床面積は 12.58 m²、やや小形の住居跡である。西壁中央わずかに北寄りにカマドをもち、支脚として方柱状の石を用いている。カマドは幅 18cm、奥行 70cm で、18cm の範囲に焼土が認められた。壁の状態は良い方で、15～23.5cm 残っていた。住居跡内で 8 個のピットが検出されたが、そのうち支柱穴は P1・P2・P4 であり、北西部に対応する位置に柱穴はなく、やや南側に離れて P3 があり、直径 55cm、深さは 34cm と十分である。

遺物 (Fig. 143, Tab. 51)

土師器・須恵器が出土した。

須恵器 (Fig. 143—1・2) 1 は天井部を欠く蓋で、かえりは受け部より内側にある。2 は黄灰色を呈する焼成不良品で、砂粒の移動によって凹線ができています。

土師器 (Fig. 143—3～7) 3 は薄手の杯で、平底になると思われる。胎土は良好。7 は甑の底部で復原口径は、15.3cm をはかる。4～6 は把手で、4 は小形である。

以上のほかに須恵器小片 36、土師器小片 218 が出土した。土師器片の多くは甕または甑の体部片で、二次火熱を受けており、器表は磨滅しているものが多い。

Tab. 51 B区第68号住居跡出土土器一覧()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	S 蓋	天井部欠	(12.5)		受け部(14.4)	細砂を含み、堅緻	青灰色	
2	S 杯	底部欠	(12.7)		受け部(15.6)	細砂を含み、焼成不良	黄灰色	
3	H 杯	底部欠	(13.3)		口縁部	胎土精良、焼成良	黄褐色	
4		把手				胎土精良、焼成良	赤褐色	
5		把手				胎土精良、焼成良	赤褐色	
6		把手				胎土精良、焼成良	黄褐色	
7	H 甑	底部				砂粒を含み、焼成良	茶褐色	

B区第69号住居跡 (Fig. 144, PL. 45)

N 165・O に位置する。主軸を南北方向よりやや東へふっている方形プランの住居跡で、北東コーナーで第70号住居跡を切っている。長軸4.8×短軸4.15mで北東コーナー付近を中心にややふくらんでいる。床面積は19.92㎡をはかり、中形の住居跡である。住居跡内にピットは9個検出されたが、そのうち主柱穴はP1～P4である。柱穴の直径は45～55cmと整っており、床面からの深さは43～79.5cmと十分な深さをもっている。P3～P4間の真中やや北側に40×35cmの範囲で焼土が認められる。壁の高さは14～29cm残っている。北壁中央部に高坏 (Fig. 69-3) が出土している。

遺物 (Fig. 145, Tab. 52, PL. 45)

弥生土器、土師器、須恵器が出土した。弥生土器は小片10のみである。

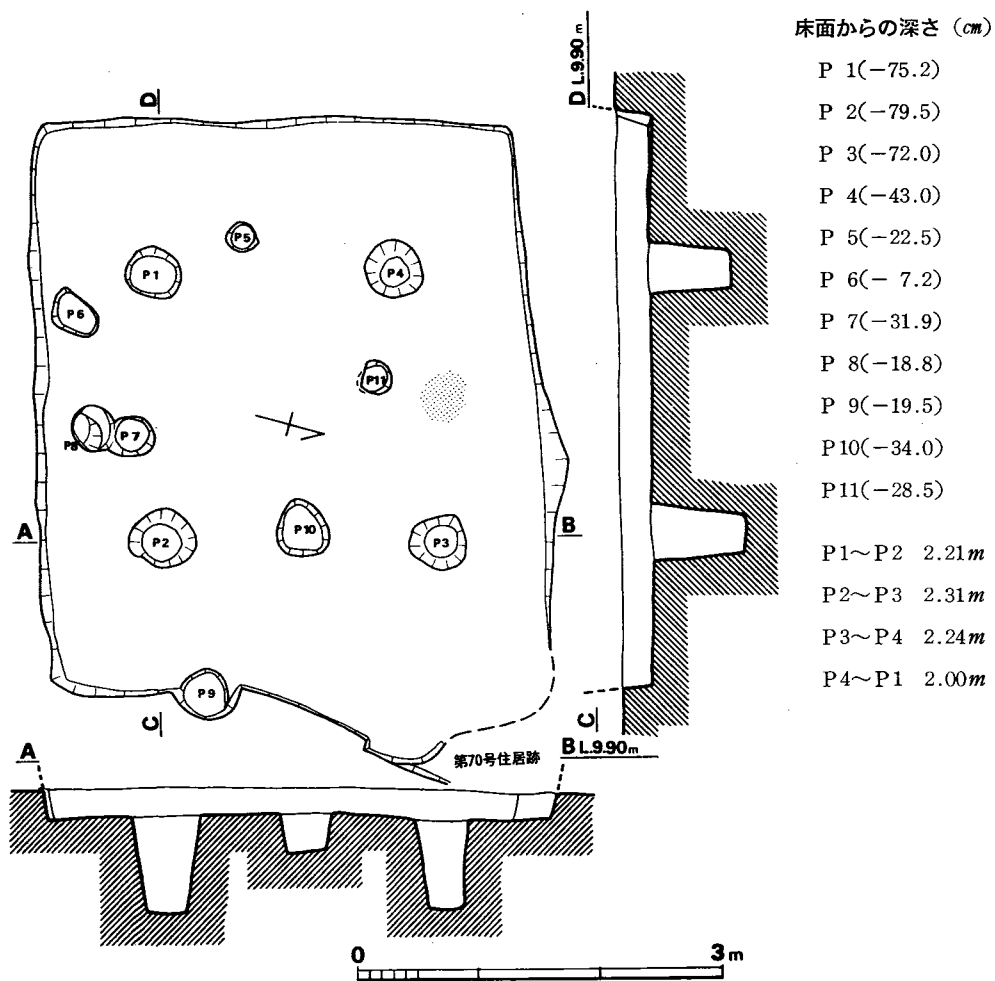


Fig. 144 B区第69号住居跡実測図 (縮尺1/60)

須恵器 (Fig. 145—1) 口縁部内面に段のある蓋で、肩部に凹線が一部残っている。

土師器 (Fig. 145—2・3) 2は内面黒色の杯片で、立ち上りをもつ。3は外面丹塗りの高杯脚部で、内面は横方向のヘラ調整のち、さらに縦方向にナデる。外面はヘラ削りである。

以上のほか、須恵器片6 (高杯1・蓋1を含む)、土師器片103が出土した。

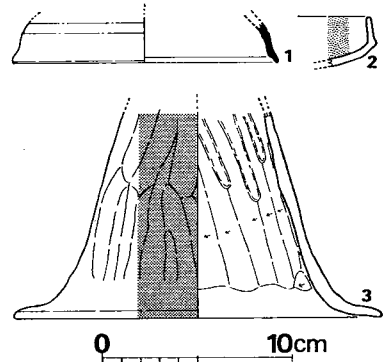


Fig. 145 B区第69号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

Tab. 52 B区第69号住居跡出土土器一覧 ()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	S 蓋	口縁部	(14.2)			胎土精良、焼成良	青灰色	
2	H 杯	口縁部~体部				胎土精良、焼成良	外面 茶褐色 内面 黒色	内面黒色化
3	H高杯	脚部				胎土精良、焼成良	茶黄色	外面丹塗り 脚端部径19.4

B 区第70号住居跡 (Fig. 146, PL. 45)

N168・E 5 に位置する。第 68 号住居跡の北側に重複し、その南端を切られている。主軸は南北方向よりやや東側にとる長方形プランの住居跡で、長軸 3.2×短軸 2.85m、床面積 9.12m²をはかり、北西コーナーにむかいふくらんでいる。住居跡の全面に焼土が散り、とくに南東部に台形状に 1.8×1.3m の範囲で集中していた。焼土中および覆土の中から鉄滓が出土している。焼土は住居跡の上に検出され、南東部焼土下のピット同様住居跡とは直接の関係はないものと考えられる。また第68号住居跡の北東コーナー付近が不鮮明なのとあわせて考えると、何んらかの遺構があったとも推定されるが、残りの状態がよくないため不明である。竪穴内では 8 個のピットが検出されたが規則的なものはなく、支柱穴と考えられるものはみあたらない。壁の残りは非常に悪く、3~9 cm しか残っていなかった。

遺物 (Fig. 147, Tab. 53, PL. 45)

弥生土師・土師器・須恵器・鉄滓が出土した。弥生土師は小片 1 のみである。

須恵器 (Fig. 147—1) 断面方形の高台をもつ杯で体部は直線的である。底部内面はナデ、外面はヘラ削りで、そのほかはヨコナデである。高台近くはヨコナデである。

土師器 (Fig. 147—2) 鉢と思われる。外面に赤褐色の薄い膜がある。

以上のほか、土師器片 49 (そのうち杯 2・甕 1) が出土した。

鉄滓 埋土内より出土した。重さは3.5g。

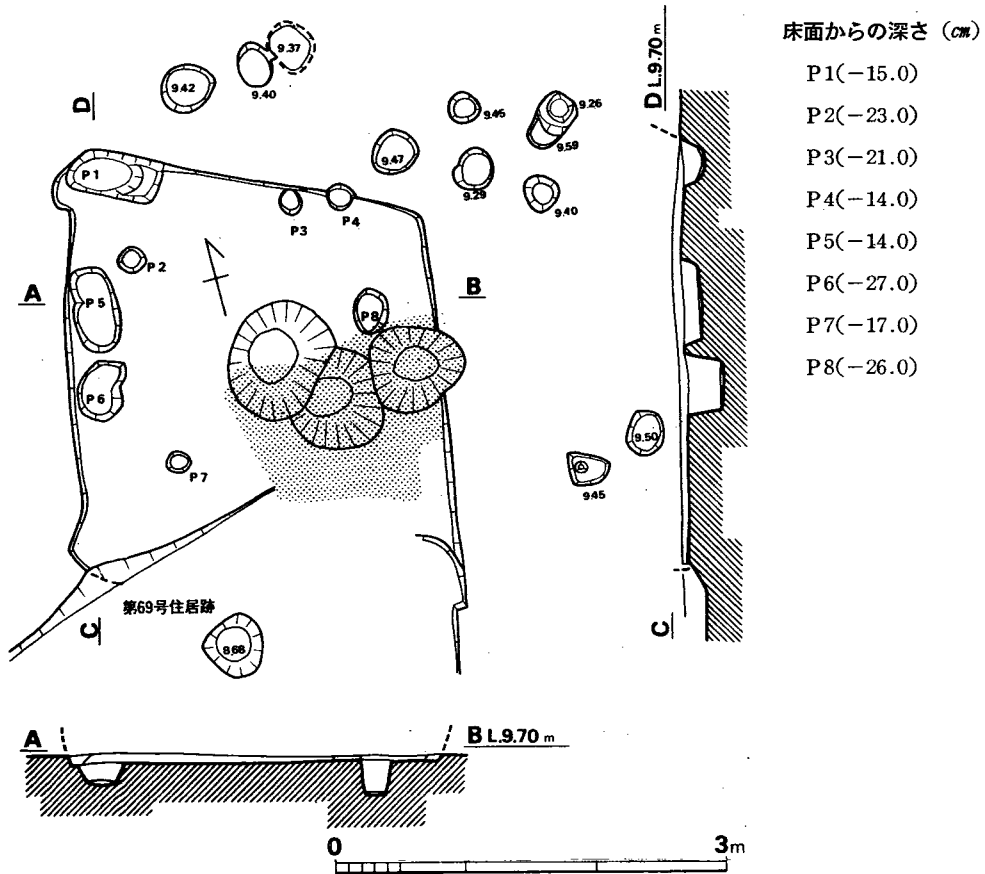


Fig. 146 B区第70号住居跡実測図 (縮尺1/60)

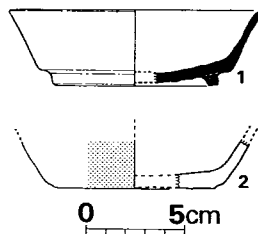


Fig. 147 B区第70号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

Tab. 53 B区第70号住居跡出土土器一覧 () は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	S高台杯	底部欠	(12.7)	3.8	口縁部	胎土精良、焼成良	黄灰色	
2	H鉢	底部				胎土精良、焼成良	外面 灰褐色 内面 茶黄色	外面化粧土

B区第71号住居跡 (Fig. 148, PL. 46)

N 145・W20に位置する。
隅丸方形を呈し、東辺約2.8
m、西辺約2.8m、南辺約3.0
m、北辺約2.8mを測り、床
面積は7.8m²である。各壁と
も8cm前後を残している。西
壁中央外方に焼土が検出され、
カマドかと考えられる。柱穴
はP2・P10の2本、P6・P
14の2本が壁穴中央部を結ぶ
が、他のピットとともに果し
てこの住居跡のものかどうか
疑問である。床面は南北方向
に若干の傾斜がある。

遺物

須恵器片2、土師器片95、
(その内甗1)が出土した。いづ
れも小片で、図示しなかった。

床面からの深さ (cm)

P1(-14.0)・P2(-5.0)
P3(-13.0)・P4(-12.5)・P5(-22.0)・P6(-7.0)・P7(-18.0)・P8(-11.5)・P9(-45.0)
P10(-21.0)・P11(-14.0)・P12(-25.5)・P13(-5.5)・P14(-18.0)・P15(-6.0)

B区第72・第74号竪穴 (Fig. 149, PL. 47)

N 145・Oに位置する。地層が複雑なため上から確認できなかったが、一軒の住居跡かもし
れない。主軸は北東・南西をさし、長軸3.6×短軸3.4mほどであろうか。支柱穴はP1~P4
で、直径40cm前後、深さ41~55cmをはかる。住居跡の北東壁中央部付近に約60cmの突出部があ
り、その中に30cmの範囲で焼土が認められる。カマドであろうか。壁の高さ1~10cmで残りは
よくない。

遺物 (Fig. 150, Tab. 54, PL. 47)

第72・74号竪穴は遺物が混じってしまい、遺構ごとに分離できない状態なので、ここでま
とめて記すこととした。

須恵器 (Fig. 150-4) 蓋の天井部でツマミが残っている。外面はツマミを除きヘラ削り

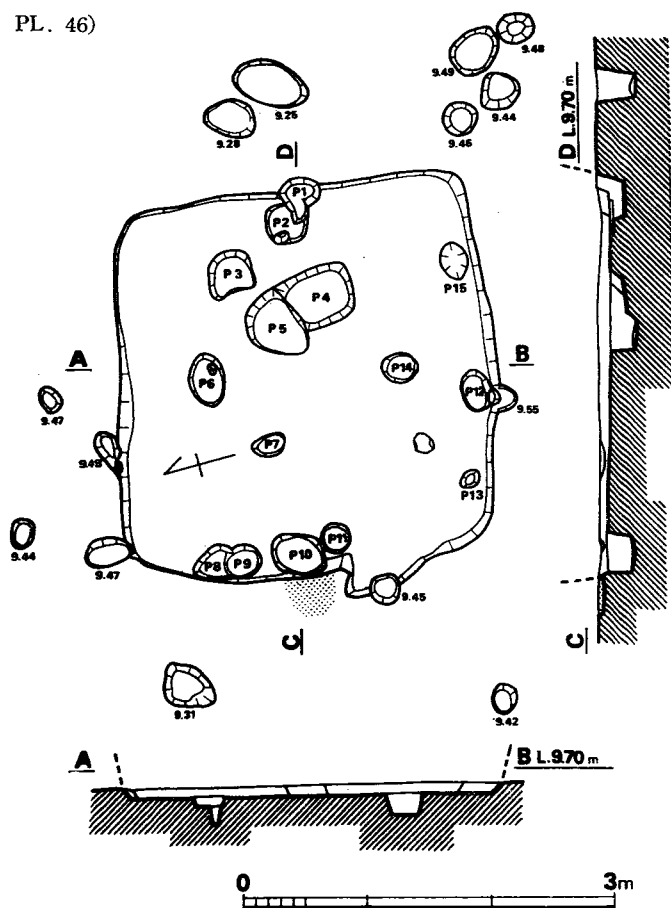


Fig. 148 B区第71号住居跡実測図 (縮尺1/60)

で、内面はナデである。

土師器 (Fig. 150—1~3・5) 3は小形の甕破片で、内面は横方向のヘラ削り、外面はハケ目である。1・2・5は大形品で、1は内面に粘土の接合痕をよく残している。2は口縁部を欠くが、そのほかの部分は残りがよい。二次火熱を受けており、器表は剥落部分が多い。5は把手のつく大形の甕である。

以上のほかに、須恵器片11 (そのうち蓋1・甕2)、土師器では甕口縁片3・甕口縁片5・杯口縁片1、および小片349がある。

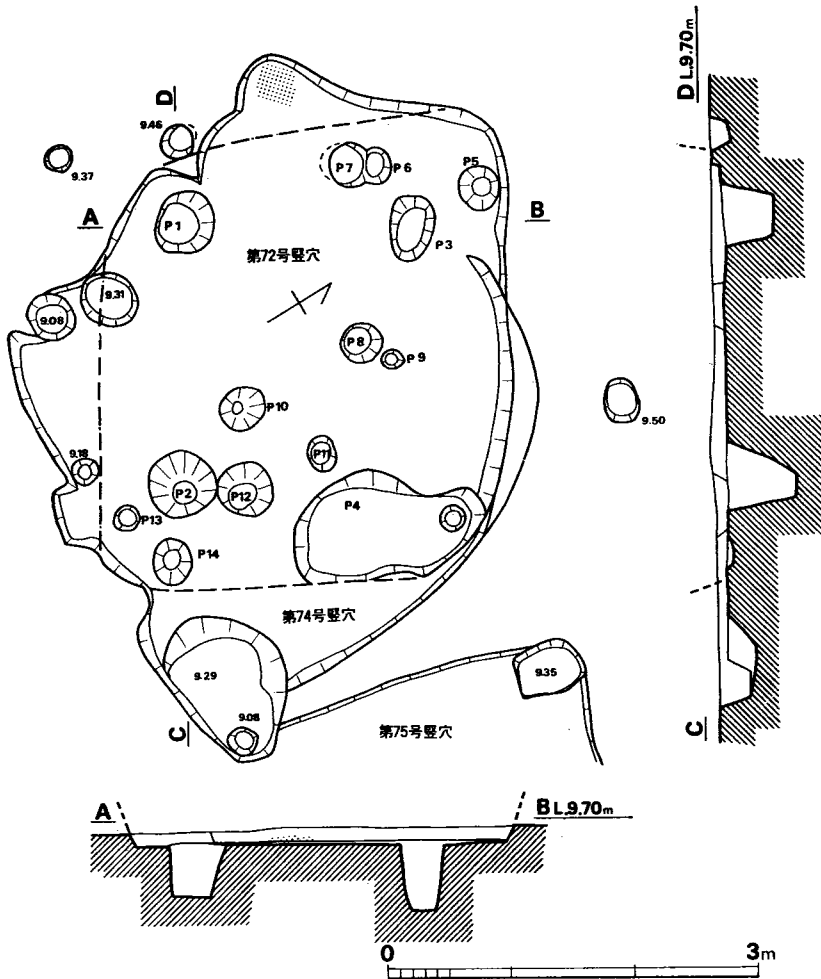


Fig. 149 B区第72・74号竪穴実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)

P 1(-41.0)・P 2(-55.0)・P 3(-54.0)・P 4(-20.0)・P 5(-14.0)・
 P 6(-20.0)・P 7(-41.0)・P 8(-26.0)・P 9(-12.0)・P 10(-55.0)・
 P 11(-20.0)・P 12(-60.0)・P 13(-19.0)・P 14(-44.0)

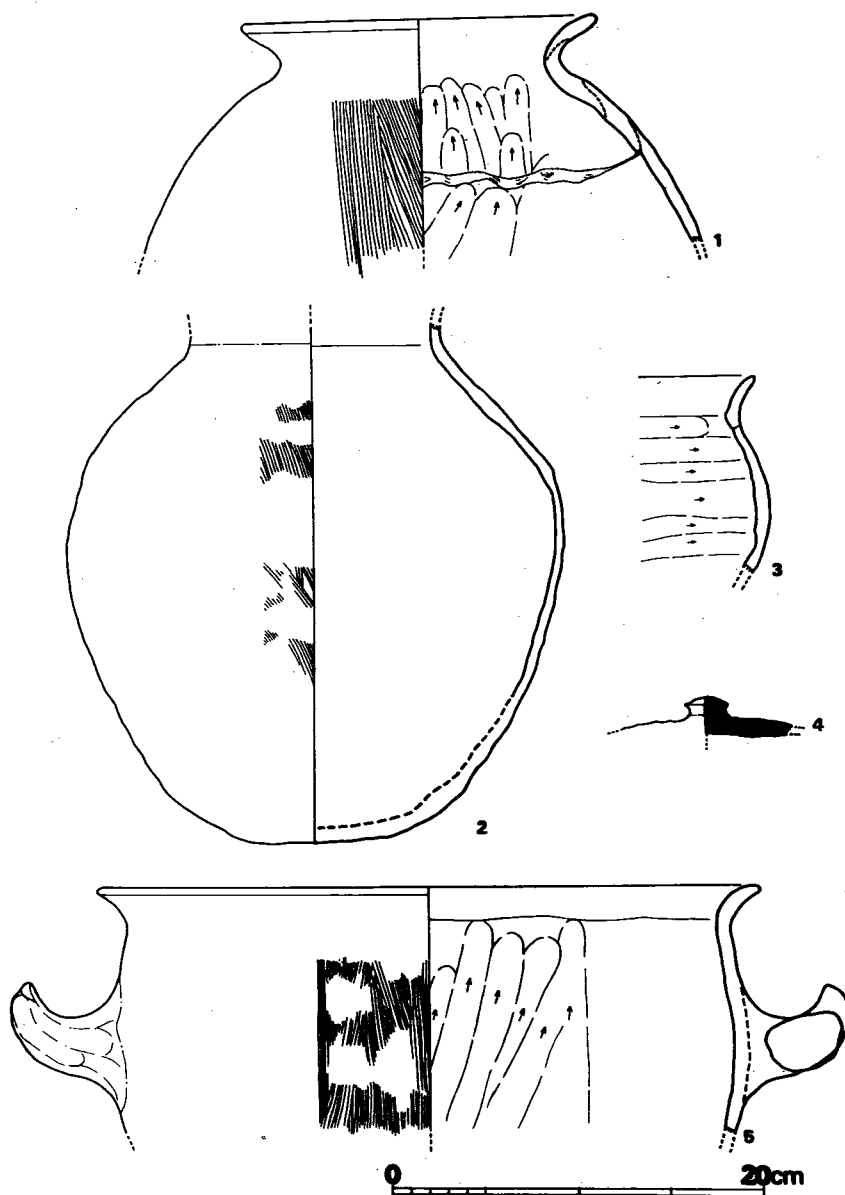


Fig. 150 B区第72・74号竪穴出土土器実測図（縮尺1/4）

Tab. 54 B区第72・74号竪穴出土土器一覧（ ）は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	H 甕	下半欠	(14.0)		胴部	少量の砂粒を含み、焼成良	褐色	
2	H 甕	口縁部欠			胴部上位26.9	砂粒を含み、焼成良	赤褐色～黄褐色	二次加熱

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
3	H小形甕	口縁部～体部				砂粒を含み、やや軟	赤褐色	
4	S蓋	天井部				少量の砂粒を含み、堅微	青灰色	
5	H甕	下半部	(36.0)			砂粒を含み、焼成良	外面 茶褐色 内面 赤褐色	

B区第75号竪穴 (Fig. 151)

N145・E 5に位置する。南東部が大きく彎曲した変形の竪穴で、住居跡とは考えられない。北壁の一边は2.2m、西壁の一边2.9mをはかるが、北東コーナーから南西コーナーにカーブしている。支柱穴はP3と考えられ、直径40cm・深さ30cmをはかる。テント状の屋根をなすのであろうか。壁の高さは4～10cmである。

遺物

わずかに須恵器片2、土師器片10、鉄滓1が出土したのみであった。土器はすべて小片で実測できなかった。鉄滓は重さ25gである。

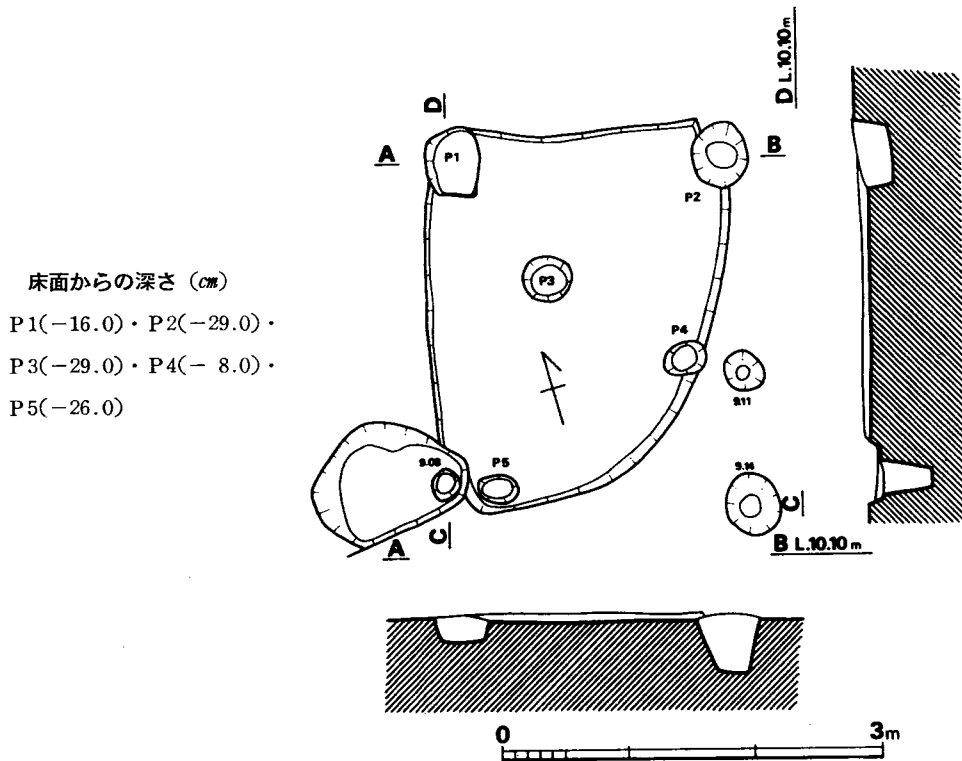


Fig. 151 B区第75号竪穴実測図 (縮尺1/60)

B区第78号住居跡 (Fig. 152, PL. 52)

N282・E5に位置する。第79・80号住居跡と重複し、両者よりも古いことが確認された。すなわち、78→79→80の順に新しいが、第79号と第80号との新旧関係は不明である。東南辺は用地外のため未発掘、北西辺の南半と南西辺すべては第79号住居跡に切られており、北西辺も北西隅付近を残すのみである。壁高は北西壁で現存高6～10cmである。北西壁付近で焼土が検出されており、カマドの痕と思われる。柱穴はP1～P4の組合せが考えられる。焼土付近の床面は他の部分よりも若干盛り上っている。

遺物

弥生土器片2、土師器片161、須恵器片2が出土した。土師器には内外面丹塗りの土器片1がある。

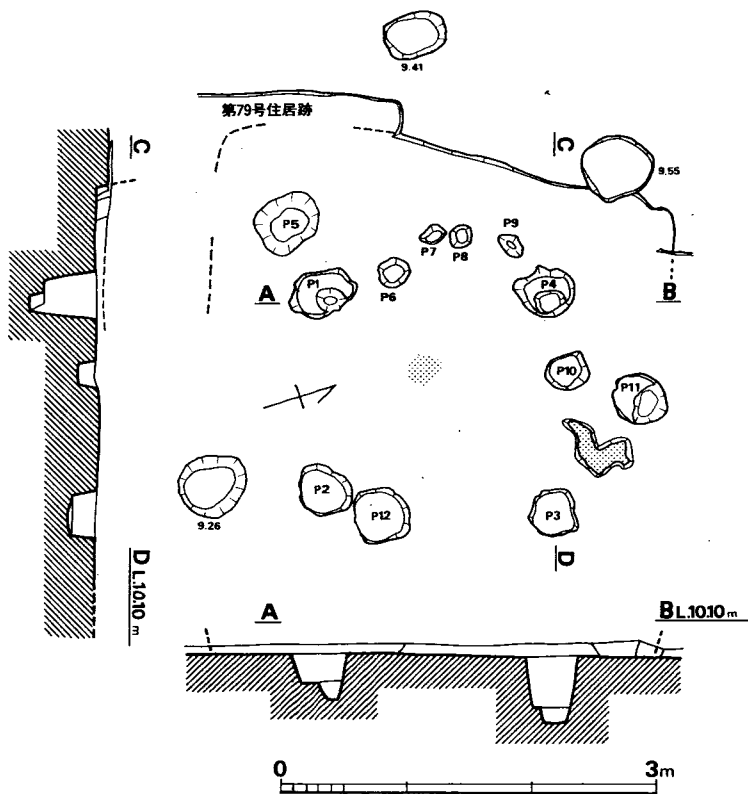


Fig. 152 B区第78号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)

P 1(-38.0)・P 2(-28.0)・P 3(-23.0)・P 4(-54.0)

P 5(-44.0)・P 6(-24.0)・P 7(-18.0)・P 8(-10.0)

P 9(-7.0)・P10(-16.0)・P11(-44.0)・P12(-32.0)

B区第79号住居跡 (Fig. 153, PL. 52)

N284・E 7に位置する。第78号住居跡と重複しており、本住居跡が新しい。方形に近いプランで、主軸をN12°Eにとり、北東隅は用地外のため検出できなかった。西辺の長さ約4.0m、南辺約4.5m、北辺約4.5mを測り、床面積は約18m²である。壁高は6cm前後である。北辺中央付近に焼土が検出されており、おそらくこの付近にカマドがあったと思われるが、削平されている。柱穴はP1～P4本の支柱であろう。床面は東側がやや低く、焼土付近は若干高い。

遺物 (Fig. 154)

弥生土器・土師器・須恵器・不明鉄製品が出土した。弥生土器は壺底部片で、土師器は小片67がある。いずれも実測できない。須恵器は蓋小片1とFig. 154の高杯脚部の2片である。この高杯は赤黄色を呈するもので、内外面に強いヨコナデを加えている。器形・調整等から須恵器とした。

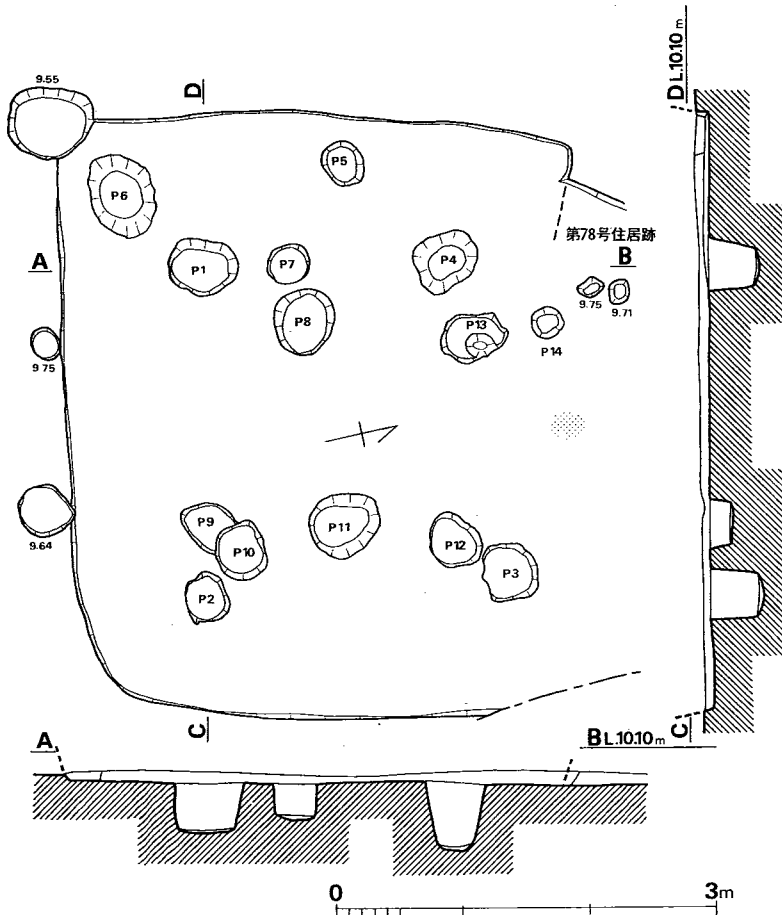


Fig. 153 B区第79号住居跡実測図 (縮尺1/60)

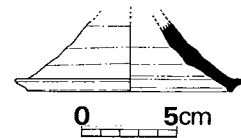


Fig. 154 B区第79号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

床面からの深さ (cm)

- P 1(-40.0)・P 2(-41.0)
 P 3(-32.0)・P 4(-58.0)
 P 5(-37.0)・P 6(-37.0)
 P 7(-28.0)・P 8(-24.0)
 P 9(-17.0)・P 10(-35.0)
 P 11(-58.0)・P 12(-28.0)
 P 13(-38.0)・P 14(-15.0)

P1～P2 2.6 m

P2～P3 2.4 m

P3～P4 2.5 m

P4～P1 2.15 m

B 区第80号住居跡 (Fig. 155, PL. 52)

N287・E 7に位置する。第78号住居跡と重複しており、本住居跡の方が新しい。西辺約4.3 mを検出したが、遺構の大半は用地外にある。現存壁高は約10 mで、柱穴は不明である。床面は北側に向かって低くなっている。

遺物は皆無である。

床面からの深さ (cm)

P1(-17.5)・P2(-44.0)

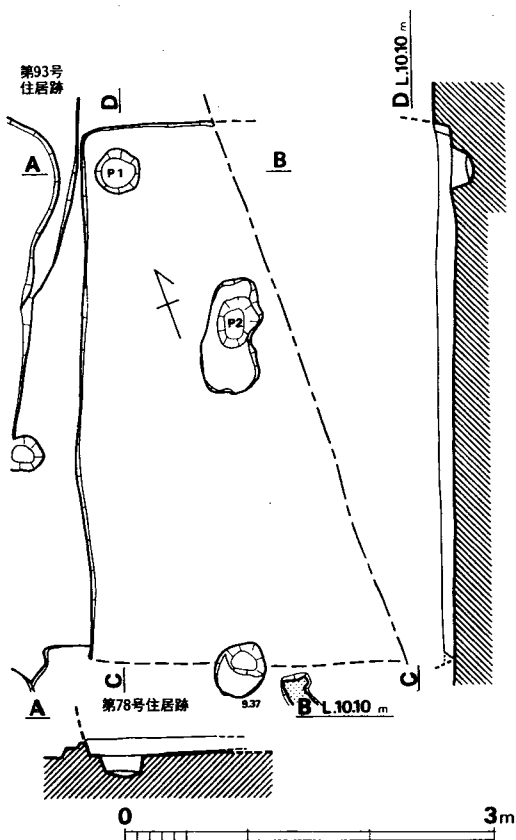


Fig. 155 B区第80号住居跡実測図 (縮尺1/60)

B 区第81号住居跡 (Fig. 156, PL. 54)

N 304・W 5に位置する。北隅の北辺・東辺の一部を残すのみであるが、P1~P4のピットの位置から復原すると、各辺4.3~4.4 mの方形プランと思われる。現存の壁高は4 cm弱である。焼土は検出されなかった。床面は中央部が、やや凹む傾向がみられる。

遺物

土師器片37が出土したが、いずれも小片で実測できない。

B 区第82号住居跡 (Fig. 157・158, PL. 52)

N189・E 4に位置する。第93号住居跡と重複しており、本住居跡の方が古い。東辺4.2 m、西辺4.0 m、南辺4.0 m、北辺4.4 mの隅丸方形のプランで、面積は約17 m²である。北西辺中央やや北寄りに20×10 cmの範囲で焼土が検出されたが、床面から浮いており、本住居跡に伴うものではないと思われる。主軸の方向はN 68°Wをとる。主柱穴はP1・P3・P6・P7の4本主柱が考えられる。残存壁高は10 cm前後である。床面中央付近に地山の乱れが確認され、不整形

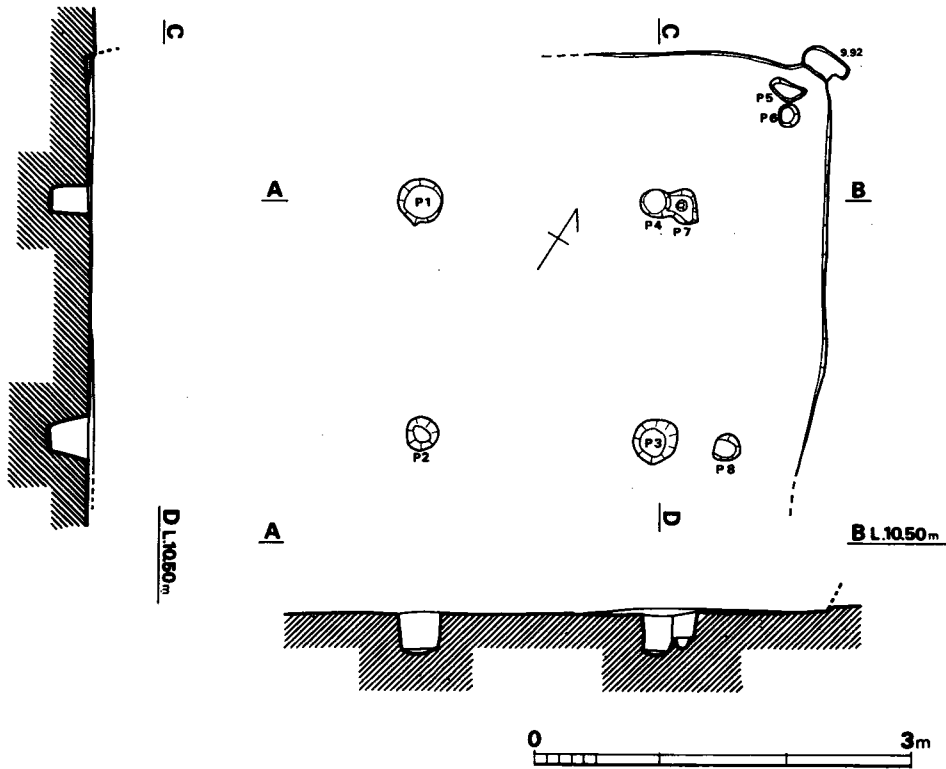


Fig. 156 B区第81号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)

P1(-32.0)・P2(-33.5)・P3(-33.5)・P4(-31.5)・P5(-4.5)・P6(-9.0)・P7(-27.0)

P8(-15.5)

P1~P2 1.90m P2~P3 1.86m P3~P4 1.96m P4~P1 1.87m

のピット (P9) が検出された。なかから、弥生土器が出土しているが、本住居跡に伴うものではない。

遺物 (Fig. 159, Tab. 55)

土師器・須恵器の小片と、P9から出土した弥生土器がある。

弥生土器 (Fig. 159—1~7) 1~7は甕である。1・2は同様の口縁形をなし、内面に突出した上面が大きく凹む。ヨコナデによる整形と思われるが磨滅が著しい。4は逆L字状口縁をなすが、口縁下面は若干垂れ気味で、ヨコナデ整形を施す。胴部は内外ともにハケ目状整形を施し、屈折部のみ丁寧なヨコナデを一周させ、若干凹みを呈している。5は1・2と同様の口縁形をなすが、器形的に大きく、一条の三角突帯を付す。6・7は底部であるが、6はとくに器壁が薄い。

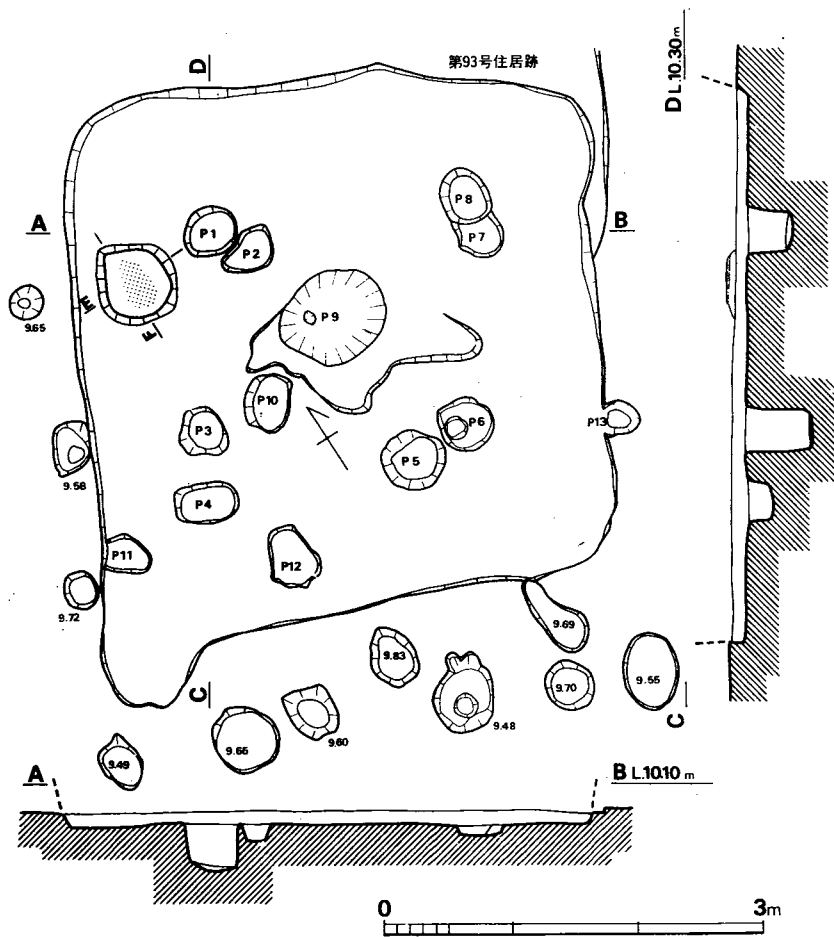


Fig. 157 B区第82号住居跡実測図 (縮尺1/60)

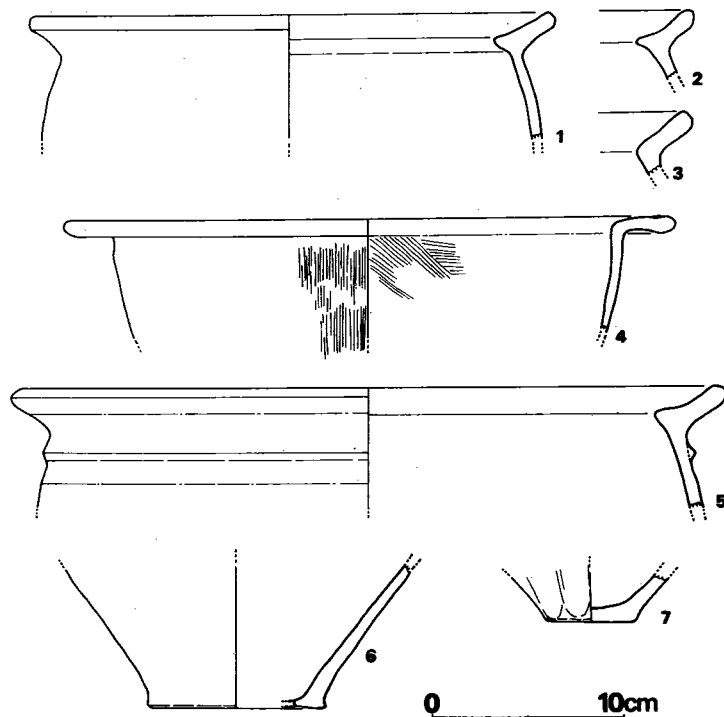


Fig. 159 B区第82号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

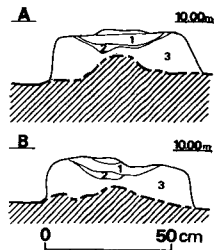


Fig. 158 B区第82号住居跡焼土土層断面図 (縮尺1/30)

床面からの深さ (cm)

- P 1(-36.0)
- P 2(-20.0)
- P 3(-53.0)
- P 4(-20.0)
- P 5(-26.5)
- P 6(-52.0)
- P 7(- 8.0)
- P 8(-34.0)
- P 9(-56.0)
- P10(-19.0)
- P11(-16.0)
- P12(-17.0)
- P13(-12.5)

土層

- 1 レンガ質赤褐色土
- 2 3とほぼ同質であるが、色が黒みを帯びている
- 3 茶褐色粘質土

Tab. 55 B区第82号住居跡出土土器一覧()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	甕	口縁部片	(28.0)			砂粒を多く含み、 焼成は良	黄褐色	器周残1/4
2	〃	口縁片				砂粒を含み、焼 成は普通	黄灰白色	
3	〃	〃				やや砂粒を含み、 焼成良	内面 黒褐色 外面 褐色	
4	〃	胴上半片	(32.5)			砂粒を含み、焼 成は良	褐色	器周残1/3
5	〃	口縁部片				石英砂粒を多く含 み、焼成は普通	黄灰色	器周残1/6
6	〃	底部片				砂粒を多く含み、 焼成は良	黄褐色	
7	〃	〃				砂粒を含み、焼 成は良	暗褐色	

B区第83号住居跡 (Fig. 160, PL. 54)

N310・Oに位置する。第77号住居跡と重複するが、前後関係は確認できなかった。北半を水路によって切られている。発掘した範囲では、南西辺3.3m、南東辺4.1mを検出した。住居内には4つのピットが検出されたが、柱穴と思われるのはP2のみである。

遺物 (Fig. 161, Tab. 56)

弥生土器・土師器・須恵器が出土した。土師器・須恵器は小片のため図示しなかった。

弥生土器 (Fig. 161—1~3) すべて甕である。1・3は同様の口縁形をなすが、3はヨコナデ整形後に整形具によると思われる斜方向短線文が認められる。しかし破片の出土で、一周するか否かは不明であるが、この三短線を一組のみ付しただけのものと思われる。細砂粒を含むが精製された胎土で、焼成も良いが、これらの仕上げは先述の短線文と関係するものか。2は外面にハケ目状整形痕をそのまま残し、内面は指先で押えてナデたままを示している。底部外面は未整形のまま水平とならない。

以上の土器は、弥生中期後半のものであるが、遺構が半掘のままその詳細が明確でなく、土器も破片の3個のみであるから、遺構の時期決定とともに伴出遺物であるかは不明である。

Tab. 56 B区第83号住居跡出土土器一覧()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	甕	口縁片				細砂粒を含み、精 良で、焼成は良	灰黄褐色	
2		底部				〃	器外 暗灰色 器内 淡茶色	
3		口縁部片	(30.4)			〃	淡茶灰色	口縁上面に刻 文有り

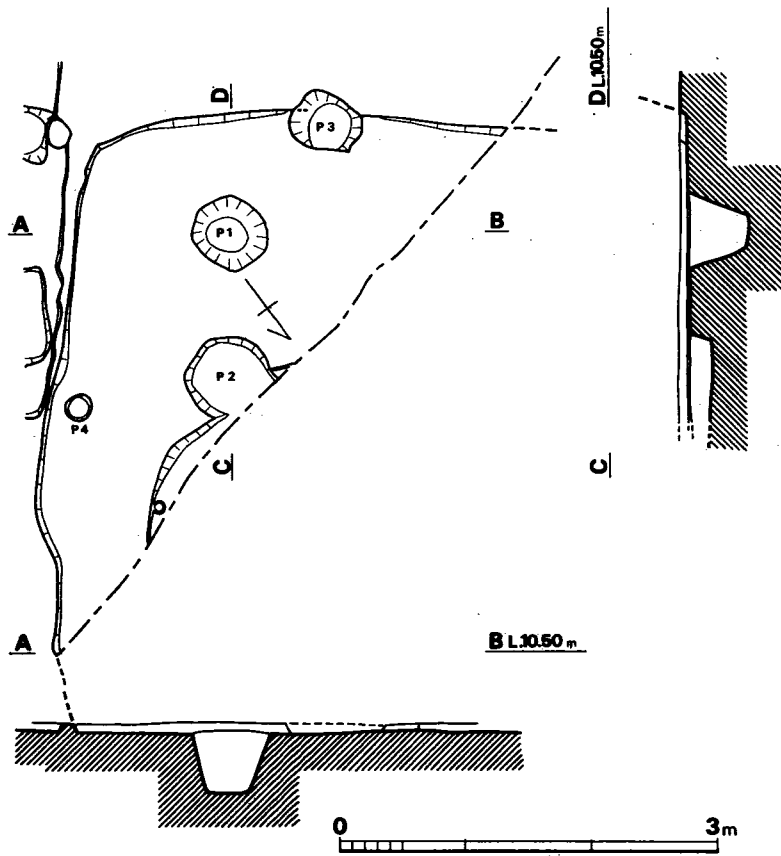


Fig. 160 B区第83号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)

P1(-47.5)・P2(-18.0)・P3(-43.0)・P4(-20.5)

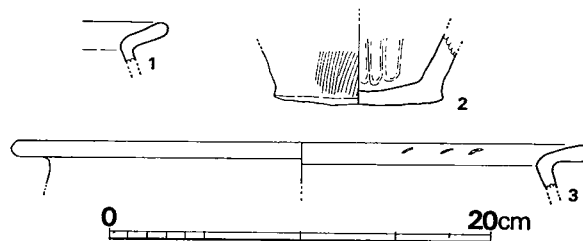


Fig. 161 B区第83号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

B区第84号住居跡 (Fig. 162, PL. 54)

N 307・E 2に位置する。本住居跡は溝1 aに切られており全体の形状・規模等は不明であるが、P1～P4を支柱穴とみて現存状態から復原すると、 $4.4 \times 4.0m$ 前後の長方形プランと思われる。炉・カマド等は検出されなかったが、本遺跡のあり方からみると付設されていたかもしれない。残存壁高は5 cm前後で、床面は中央部が若干高く、凸面状を呈している。

遺物

弥生土器片2、土師器片15、須恵器片3が出土したが、いずれも小片で実測できない。

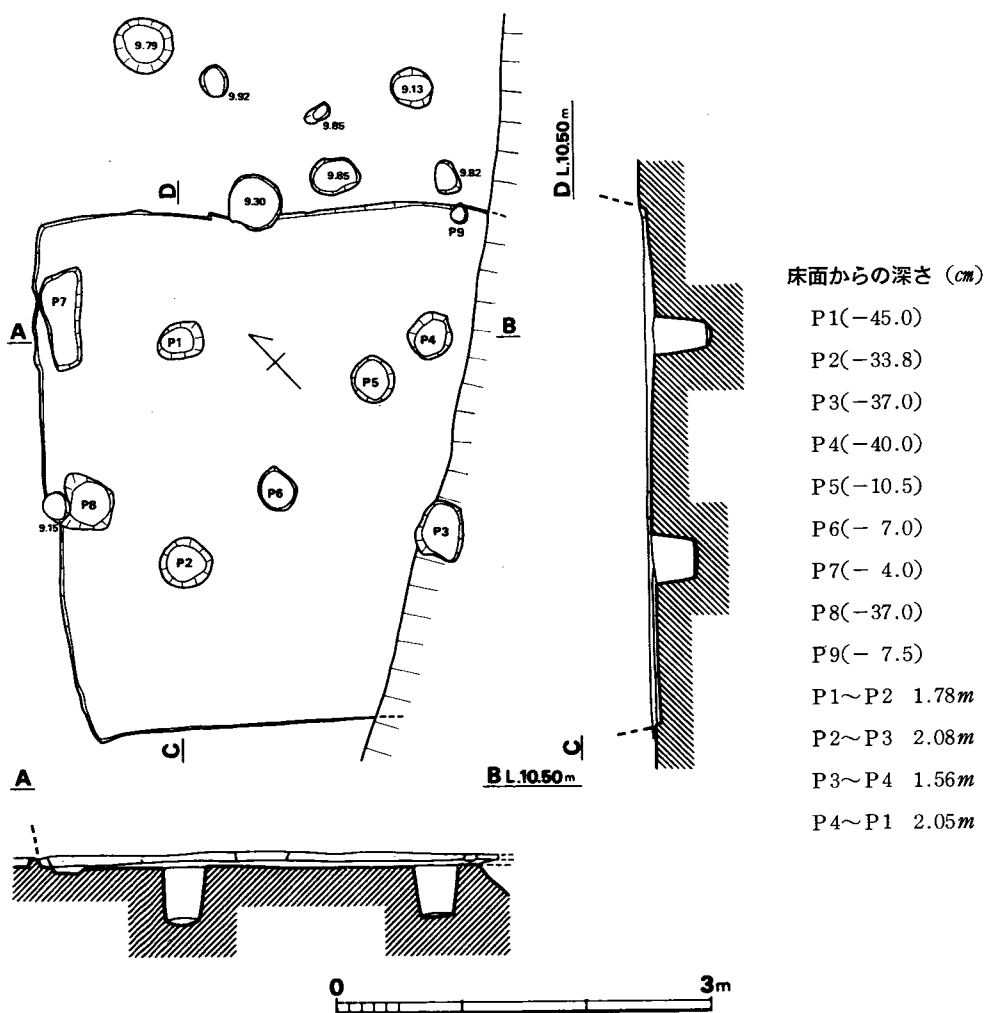


Fig. 162 B区第84号住居跡実測図 (縮尺1/60)

B区第85号住居跡 (Fig. 163, PL. 52)

N 279・E 7に位置する。住居跡の大部分が調査地区外で、わずかに西側コーナーを検出できたに過ぎず、全体の状況は不明である。壁の高さは9～10cmと残りは良くない。遺物は皆無である。

床面からの深さ (cm)

P1(-16.0)・P2(-20.0)

P3(-19.0)

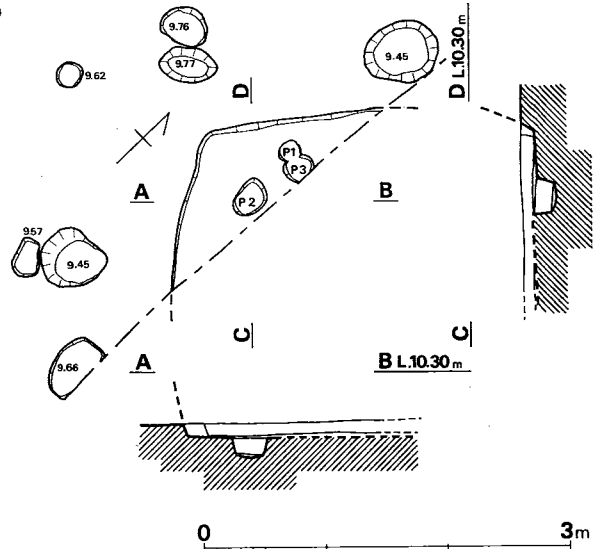


Fig. 163 B区第85号住居跡実測図 (縮尺1/60)

B区第86号住居跡 (Fig. 164, PL. 53)

N 275・E 5に位置する。北東コーナーが調査地区外であるが、全体の状況は理解できる。主軸をN 61°Eにとり、長軸4.05×短軸4.0mをはかる方形プランの住居跡である。床面積は16.2㎡で、支柱穴は4本 (P1～P4) 検出できた。直径は30～50cm深さは51～55cmと平均している。P2・P3間中央よりやや南東寄りに焼土が認められるが、調査地区との境であるため詳しいことはわからない。壁の高さは1～8cmと残りは非常に良くない。なお焼土の付近に他の遺構の存在が考えられるが、調査地区との境であるため確認はできなかった。

遺物

弥生土器甕底部片2、土師器片45 (そのうち甕口縁片1・甕口縁片1) が出土した。いずれも小片である。

B区第87・88・89号住居跡 (Fig. 165, PL. 53)

N275・Oに位置する。3軒の住居跡が重複している。そのうち、第87・89号住居跡が第88号住居跡に切られている。第87号住居跡はその大部分が切れ、わずかに北西コーナーが残っているだけである。支柱穴はP28・P33が考えられるが不明である。北西コーナー北側にやや変形のP37が壁にそってあり、深さ16cmをはかるが貯蔵穴とも考えられる。またP33・P36の北側に20cmの範囲で焼土が散っている。壁の高さは5～13cmである。第88号住居跡は主軸を南北方向よりやや東側へふり、長軸5.5×短軸3.6mの長方形プランの住居跡で、床面積29.8㎡をはかる。支柱穴は規則性をもつピットがなくみあたらない。住居跡の中心よりやや北西より、24cmの範囲に焼土が検出され、また東壁中央やや北寄りにも焼土が認められるが、やや

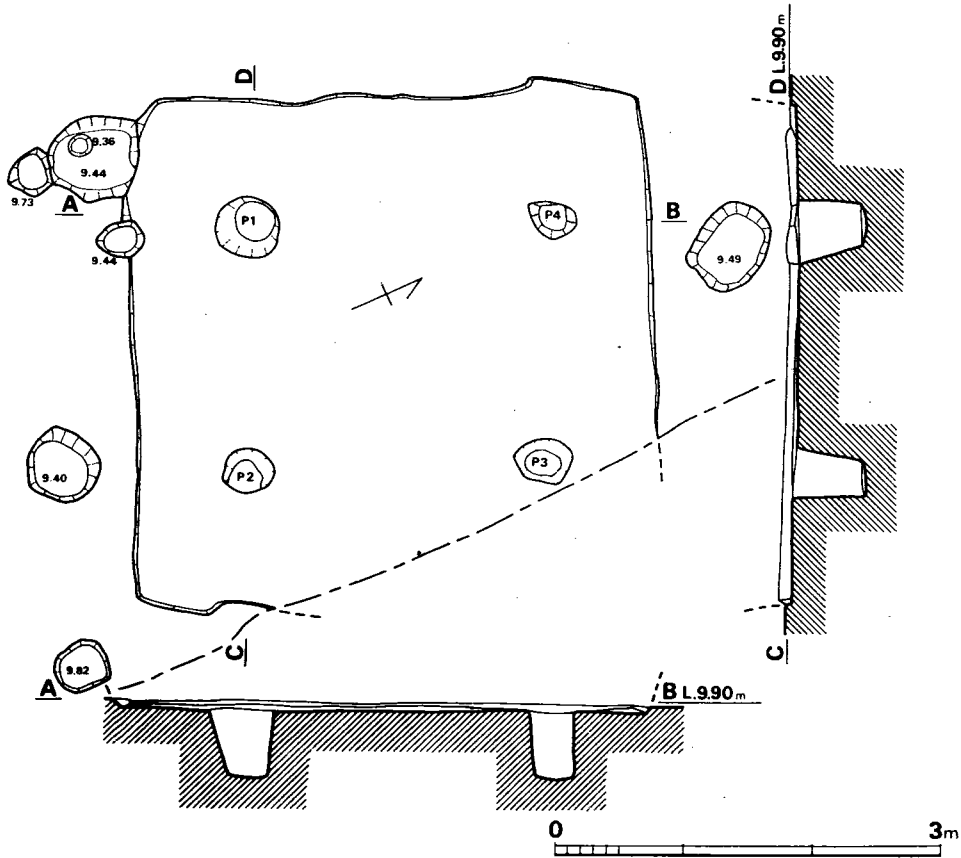


Fig. 164 B区第86号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)

P1(-51.0)・P2(-55.0)・P3(-55.0)・P4(-52.0)

P1~P2 2.04m P2~P3 2.33m P3~P4 1.94m P4~P1 2.33m

浮いた状態である。壁の高さは4~8cmと残りはよくない。第89号住居跡は第88号住居跡と同様に、主軸を南北方向よりやや東へふる長方形プランの住居跡で、長軸5.4×短軸3.75m、床面積20.25㎡をはかる。支柱穴はP6・P8・P17・P25が考えられ、径40~76cm、深さ34~62cmである。住居跡内にはカマド・焼土ともみあたらない。壁の高さは8~18cmである。

遺物 (Fig. 166・167)

上記の3軒は複雑に重複しているため、ここではそれぞれに分離できるもののみ記す。

第87号住居跡からは弥生土器小片3、土師器片72(そのうち甕口縁片1)が出土した。土師器は二次的な火熱を受けているものが多い。いずれも小片で図示していない。

第88号住居跡からは縄文土器小片1、弥生土器片1、土師器片152(そのうち丹塗り片1)、

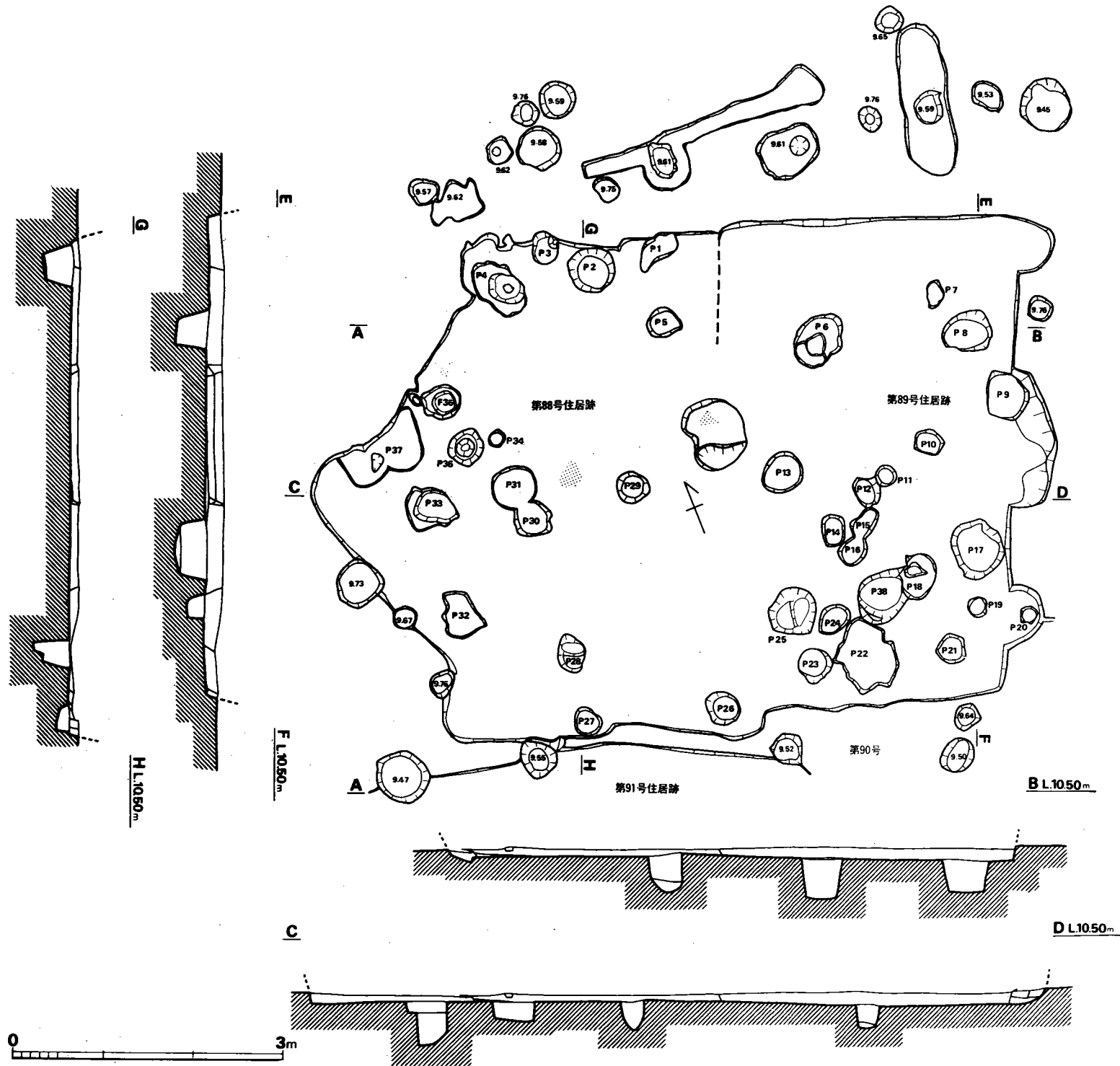


Fig. 165 B区第87・88・89号住居跡実測図 (縮尺1/60)

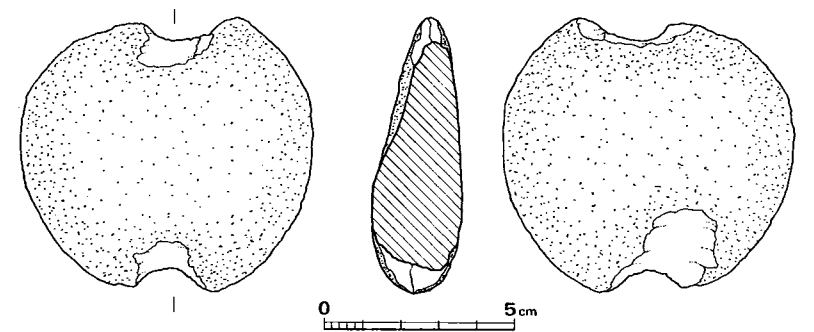


Fig. 166 B区第88号住居跡出土石錘実測図 (縮尺1/2)



Fig. 167 B区第89号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

床面からの深さ (cm)

P 1(-20.0)・P 2(-32.0)・P 3(-28.0)・P 4(-52.0)・P 5(-41.0)
 P 6(-62.0)・P 7(-15.5)・P 8(-34.0)・P 9(-23.0)・P10(-16.0)
 P11(-14.5)・P12(-21.5)・P13(-16.5)・P14(-22.0)・P15(- 8.0)
 P16(-15.0)・P17(-35.0)・P18(-46.0)・P19(-19.0)・P20(-12.5)
 P21(-19.5)・P22(-12.0)・P23(-27.0)・P24(-16.5)・P25(-49.0)
 P26(-23.5)・P27(-12.0)・P28(-41.0)・P29(-31.5)・P30(-20.0)
 P31(-20.0)・P32(-29.5)・P33(-46.5)・P34(-12.0)・P35(-49.0)
 P36(-26.0)・P37(-16.0)

P6~P8 1.66m P8~P17 2.35m P17~P25 2.11m

P25~P6 2.94m

須恵器片7（そのうち蓋2・杯1）が出土した。いずれも小片である。ほかに石錘（Fig.166）が出土した。径8cm大の扁平な石の両端に、両面から加撃して紐かけの凹部をつくりだしている。重さ142.5gで、床面から出土した。

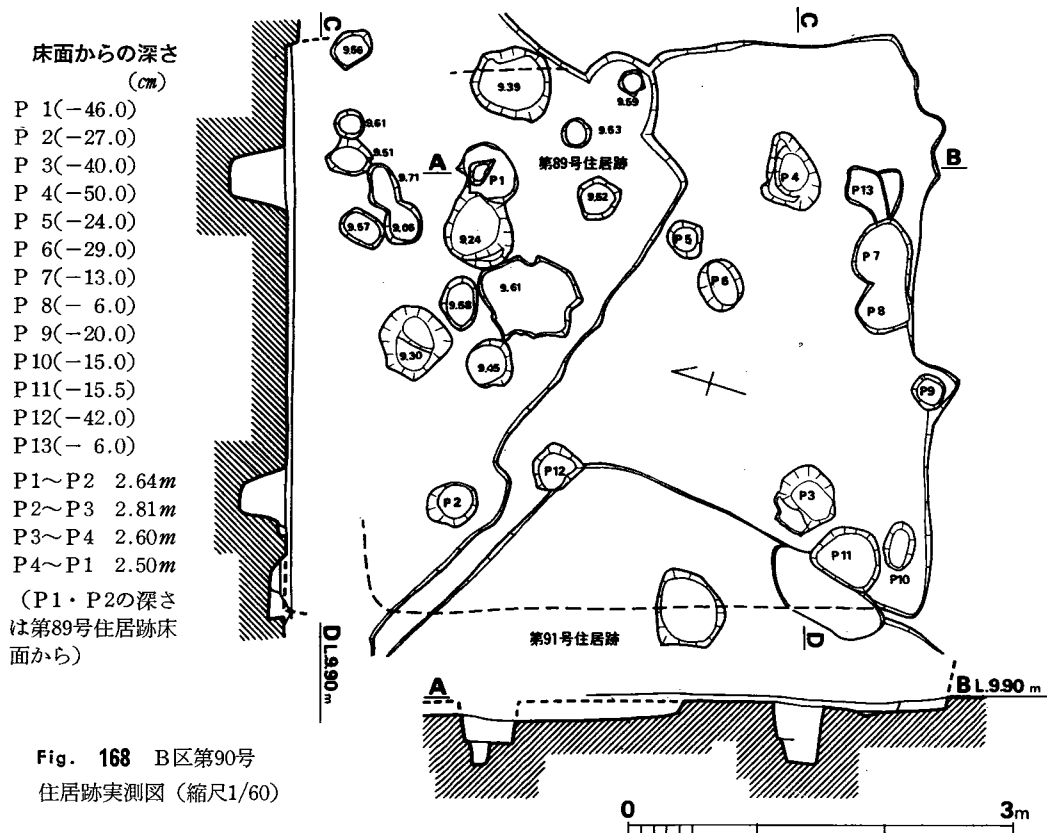
第89号住居跡からは、弥生土器小片1、土師器片119（甕口縁片1・甕口縁片1を含む）、須恵器片8（そのうち蓋1・碗1・高杯1）が出土した。図示できるのは Fig. 167 の須恵器高杯脚部のみである。この高杯は茶黄色を呈し、螺旋状に凹線がめぐっている。裾部最大の径6.6cmを測る。

B区第90号住居跡 (Fig. 168, PL. 53)

N 270・Oに位置する。住居跡の北側および西側をそれぞれ第91・88号住居跡に切られているため全体のプランはつかめないが、支柱穴の位置から考えてほぼ方形プランをなすものと思われる。現存する北壁は4.0mをはかり、他辺は4.2m前後と考えられ、南北に主軸をなすものと推測される。ピットは重複分もあわせて多数検出されたが、支柱穴はP1～P4と考えられる。なおP2の深さが他の柱穴より浅いため、ややかたよっているのでP12とも思える。直径は40～60cm、深さは40～50cmである。壁の高さは4～11cmと残りはよくない。

遺物

弥生土器片1、土師器片14、須恵器片1が出土したが、いずれも小片で実測できない。



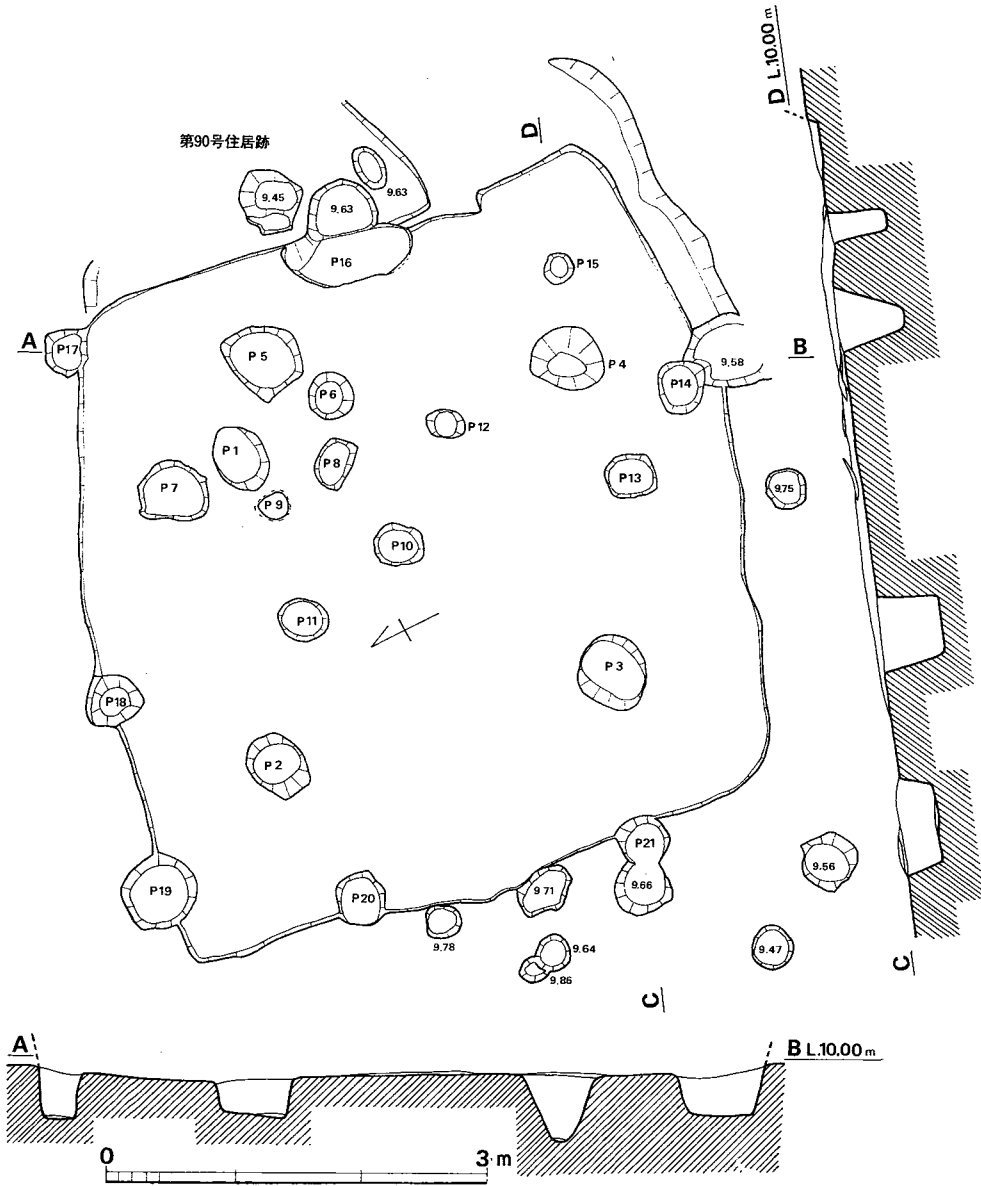


Fig. 169 B区第91号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)

- P 1(-43.0)・P 2(-56.0)・P 3(-50.5)・P 4 (-52.0)・P 5(-28.0)・P 6(-27.0)・P 7(-40.0)
 P 8(-20.0)・P 9(-16.5)・P10(-26.5)・P11(-19.5)・P12(-18.0)・P13(-30.5)・P14(-32.5)
 P15(-46.0)・P16(-14.0)・P17(-30.0)・P18(-30.0)・P19(-40.5)・P20(-33.0)・P21(-28.0)
 P1~P2 2.43m・P2~P3 2.78m・P3~P4 2.45m・P4~P1 2.69m

B 区第91号住居跡 (Fig. 169, PL. 53)

N 270・Oに位置する。主軸を東西方向にふる方形プランの住居跡で、北東部において第90号住居跡を切っている。長軸5.4×短軸5.2mをはかり、床面積28.1㎡、北東部がややふくらんでいる。ピットは21個検出されたが、そのうち支柱穴はP1～P4で、直径40～60cm、深さ43～52cmをはかる。東壁ほぼ中央部、壁にそって104×37cmの楕円形をした深さ14cmのピットがある。貯蔵穴であろうか。住居跡内にカマド・焼土とも検出されなかった。壁の高さは1～8.5cmと残りはよくない。

遺物 (Fig. 170, Tab. 57)

土師器・須恵器を出土した。

須恵器 (Fig. 170—1) 平底の杯で、体部は直線的である。底部はナデ、そのほかはヨコナデである。

土師器 (Fig. 170—2) 甕の大形品で、内面は上へ向うへら削りである。

以上のほかに、須恵器片10 (高杯1・蓋1・脚部1)、土師器片129 (甕2) が出土した。

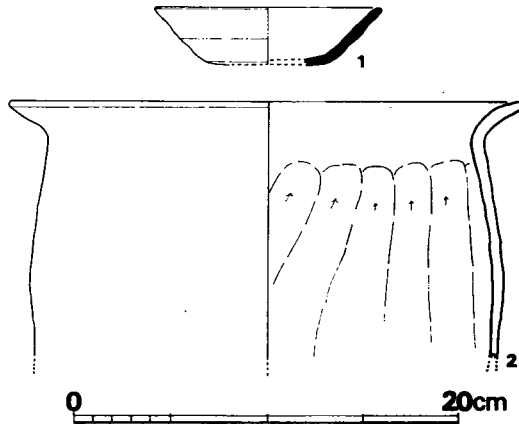


Fig. 170 B区第91号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

Tab. 57 B区第91号住居跡出土土器一覧 () は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	S 杯	底部欠	(11.5)	(3.1)	口縁部	胎土精良、焼成良	淡灰色	
2	H 甕	下半欠	(26.5)		口縁部	砂粒を多く含み、焼成良	淡茶灰色	

B区第92号住居跡 (Fig. 171・172, PL. 52)

N292・E 8に位置する。第93号住居跡と重複しており本住居跡が新しい。しかし遺構の大部分は東側の用地外にあり、検出できなかった。カマドは西壁に接して検出され、幅95cm、奥行は80cmである。発掘した範囲での壁高は6cm前後である。主軸の方位はN60°~70°Wにおさまると思われる。

遺物

弥生土器片1、土師器片9（丹塗り片1）、須恵器片3が出土した。すべて小片である。

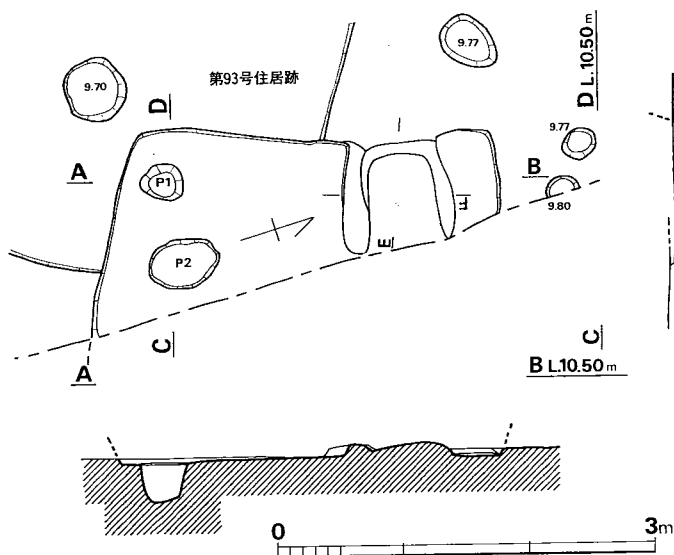


Fig. 171 B区第92号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの高さ (cm) P1(-30.0)・P2(-15.0)

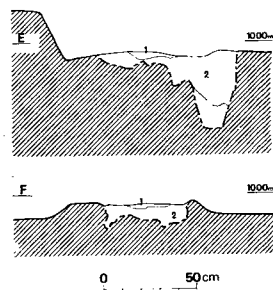


Fig. 172

B区第92号住居跡
カマド土層断面図
(縮尺1/30)

土層

- 1 赤褐色粘質土 (焼土)
- 2 茶褐色土

B区第93号住居跡 (Fig. 173, PL. 52)

N 292・E 6に位置する。第92号住居跡に東隅を、第82号住居跡に南西部を、溝1aに北西部を切られているため詳細は不明である。残存壁高は北東辺で4cm、南東辺で5cm前後である。ピットはP1・P2・P3があるが、柱穴であるかどうか不明である。

遺物は皆無である。

B区第94号住居跡 (Fig. 174・175, PL. 55)

N270・W10に位置する。主軸をN67°Wにとる方形プランの住居跡である。長軸4.6×短軸4.16m、床面積18.04㎡をはかる。北西壁中央よりやや南寄りにカマドをもち、幅60cm、奥行60cmをはかる。その前面に20cmの範囲で焼土が認められる。住居跡内にピットは8個検出されたが、そのうち主柱穴はP1~P4と考えられ、直径40cm前後、深さ50.5~65cmと十分な深さをもっている。壁の高さは2~11cmと残りはよくない。

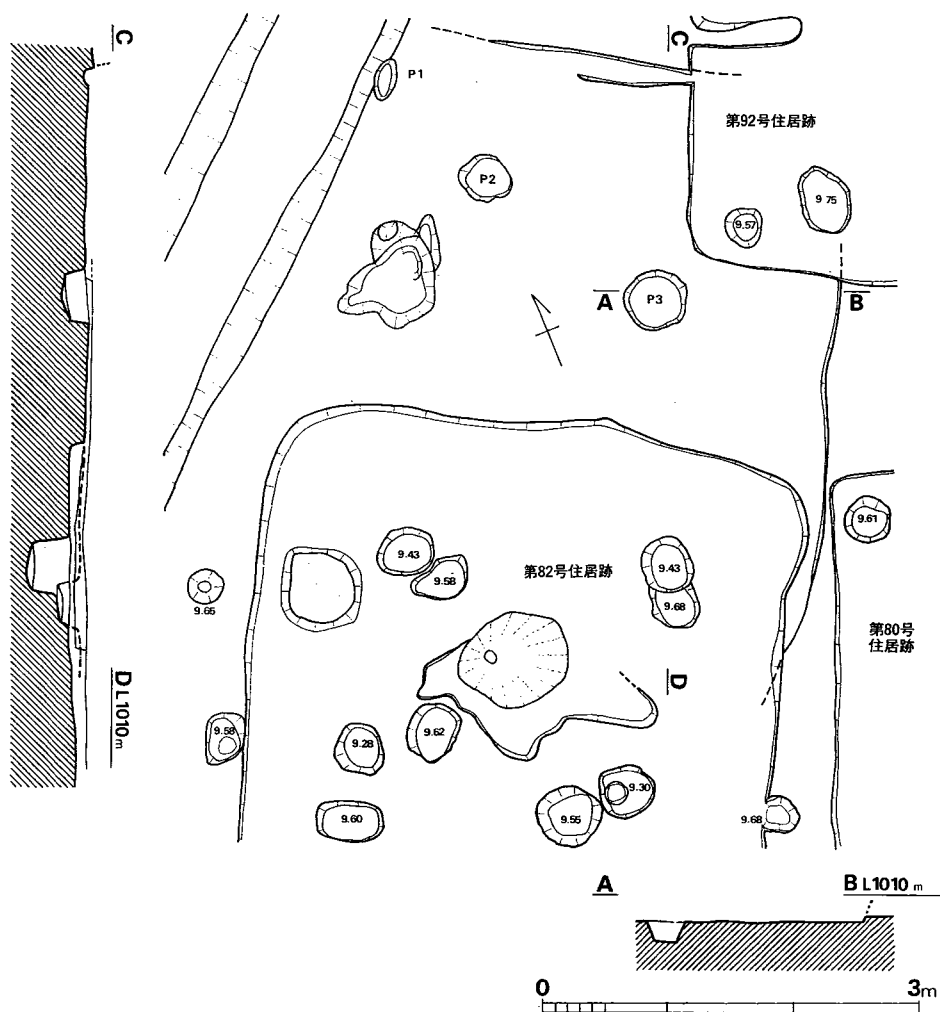


Fig. 173 B区第93号住居跡実測図(縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)

P1(-24.0)・P2(-22.0)・P3(-20.0)

遺物 (Fig. 176・177, Tab. 58, PL. 55)

土師器・須恵器・砥石が出土した。

須恵器 (Fig. 176—2・3) 2の杯は、立ち上り1.2cmをはかり、底部内面はナデ、外面はヘラ削り、そのほかはヨコナデを施す。2は提瓶で、口縁部を欠く。把手はつかず、厚手で仕上げは粗雑である。「キ」のヘラ記号をもつ。

土師器 (Fig. 176—1) 丹塗りの高杯で、裾部は別質の粘土を用いている。これら3点はカ

マド周辺より出土した。

以上のほか、須恵器片5、土師器片46（甕口縁片1）が出土した。

砥石（Fig. 177）凝灰岩製で4面を使用している。

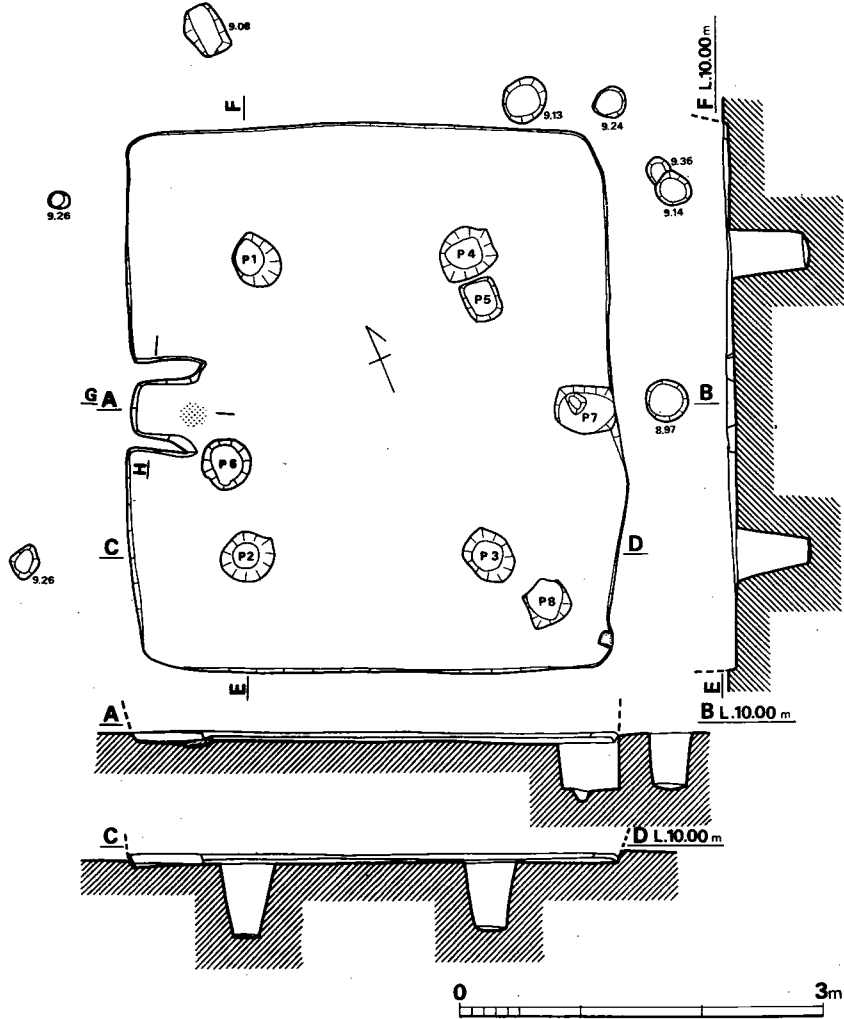


Fig. 174 B区第94号住居跡実測図（縮尺1/60）

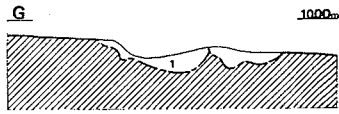
床面からの深さ (cm)

P1(-65.0)・P2(-60.0)・P3(-55.0)・P4(-50.5)

P5(-25.0)・P6(-54.5)・P7(-46.0)・P8(-54.0)

P1~P2 2.46m・P2~P3 2.03m

P3~P4 2.49m・P4~P1 1.79m



土層

1 茶褐色粘質土

2 1の変色した部分

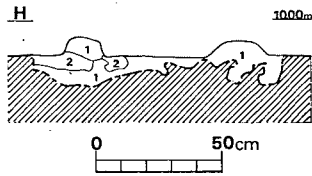


Fig. 175 B区第94号住居跡カマド
土層断面図 (縮尺1/30)

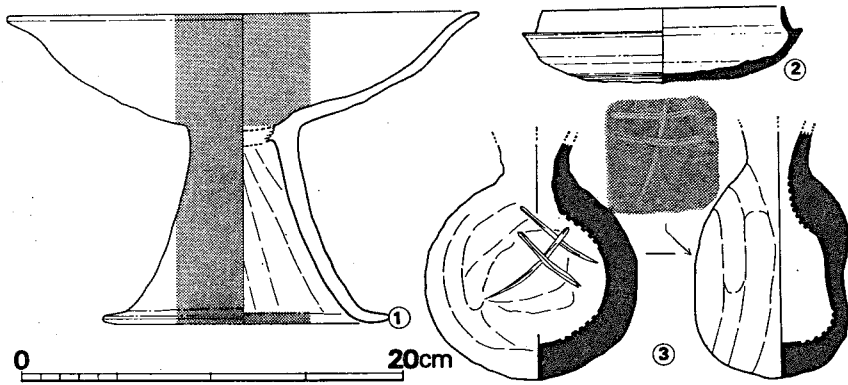


Fig. 176 B区第94号住居跡出土遺物実測図 (I) (縮尺1/4)

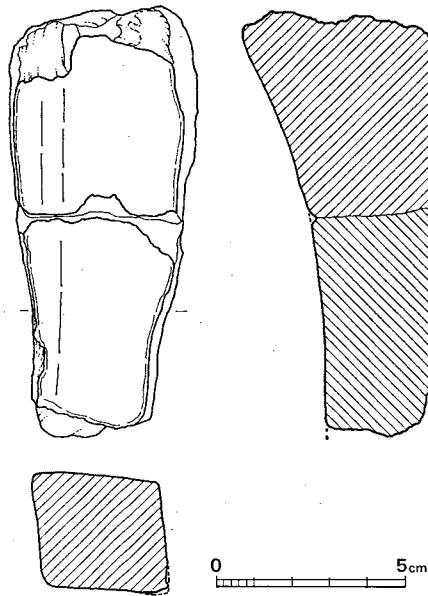


Fig. 177 B区第94号住居跡出土遺物実測図 (II) (縮尺1/2)

Tab. 58 B区第94号住居跡出土土器一覽 () は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	H高杯	接合部欠	25.0	16.6	口縁部	胎土精良、焼成良	黄灰色	脚端部径15.2 丹塗り
2	S杯	2/3	12.6	4.0	受け部14.7	少量の砂粒を含み、堅緻	淡灰色	
3	S提瓶	口縁部欠				砂粒を含み、焼成良	灰褐色～黒色	

B区第95号住居跡 (Fig. 178)

N 275・W14 に位置する。削平のため詳細は不明である。東壁を確認したのみで、壁高は2～3cmである。
遺物はない。

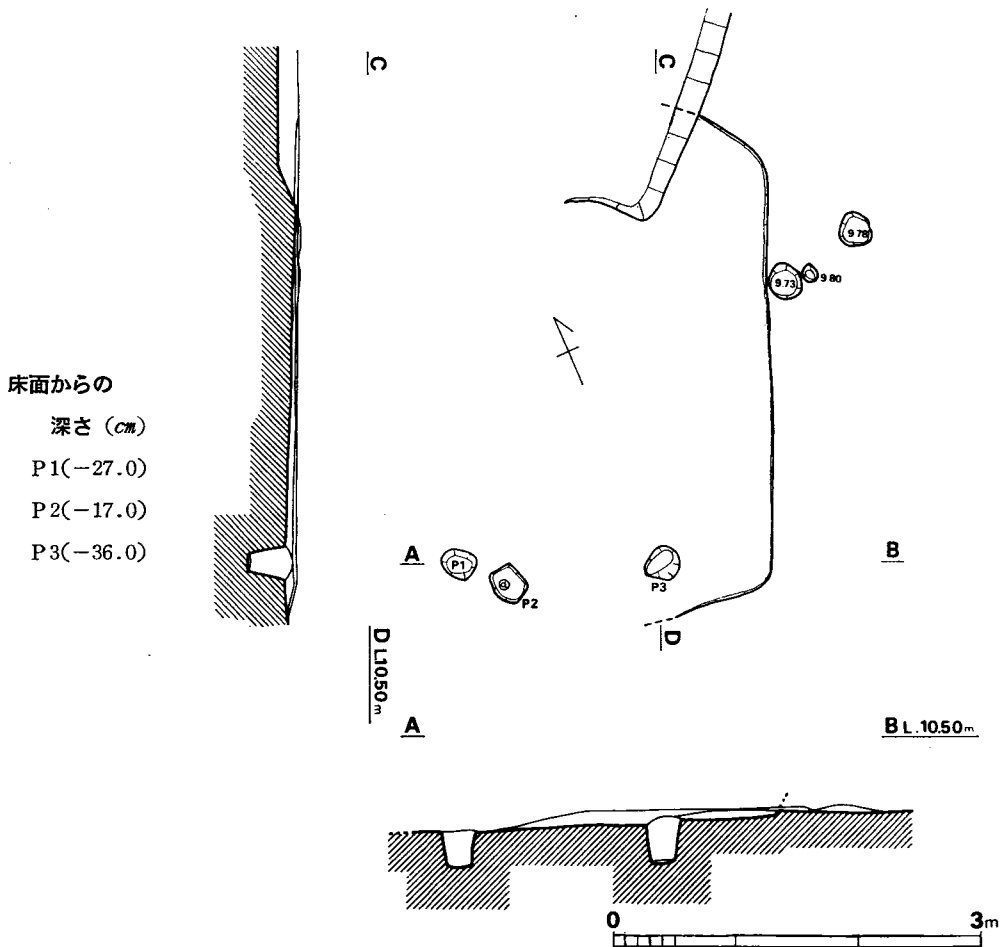


Fig. 178 B区第95号住居跡実測図 (縮尺1/60)

B 区第96号住居跡 (Fig. 179, PL. 49)

N 207・E 8に位置するが、その大半が道路下にあり、規模等は不明である。現存では、東辺長3.6mを測り、壁高8cm前後である。柱穴はP1・P2の2つのピットがあるが、本住居跡のものか疑問である。床面は検出部分では北側が低い。

遺物

土師器片16 (杯1)、須恵器片1が出土した。いずれも小片である。

床面からの深さ (cm)
P1(-30.0)・P2(-17.5)

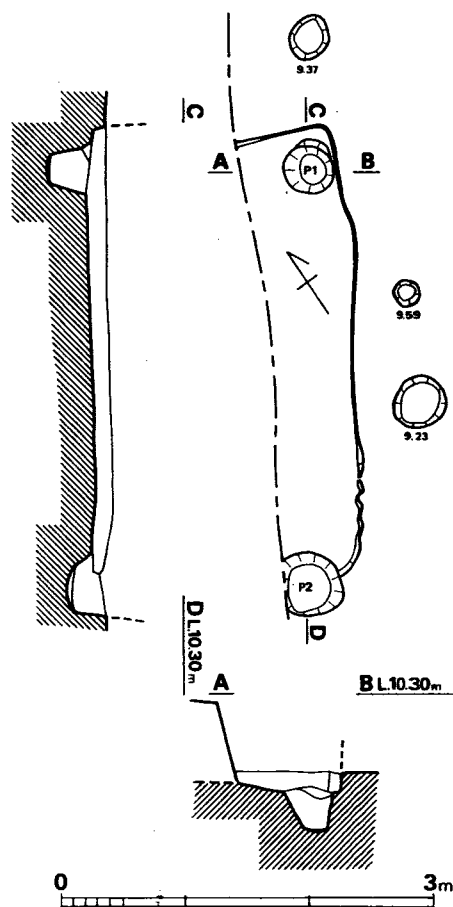


Fig. 179 B区第96号住居跡実測図 (縮尺1/60)

B 区第97号住居跡 (Fig. 180, PL. 49)

N 203・E 9に位置する。第98・101号住居跡と重複しており、97号→98号の順に新しいが、101号との新旧関係は確認することができなかった。方形プランと思われるが、西半は道路下にあり、規模等は不明である。北辺の中央部と思われるところに小豆大の焼土ブロックが検出され、おそらくカマドがあったと思われる。柱穴はP1～P4が考えられるが、支柱穴かどうかは疑問である。床面は北側がやや高い。東壁の残存高は5cm前後、北壁は10cmで、南壁は第98号住居跡を検出する際に床面を掘り下げている。

遺物 (Fig. 181)

弥生土器片8 (甕口縁1)、土師器片49 (小形甕2・内黒土器片1・丹塗り片1・補修孔のある土器片1)、須恵器蓋小片1が出土した。これらのうち、図示できるのは、Fig. 181の小形の甕のみである。茶褐色を呈し、砂粒を含んでいる。復原口径12.7cmをはかる。

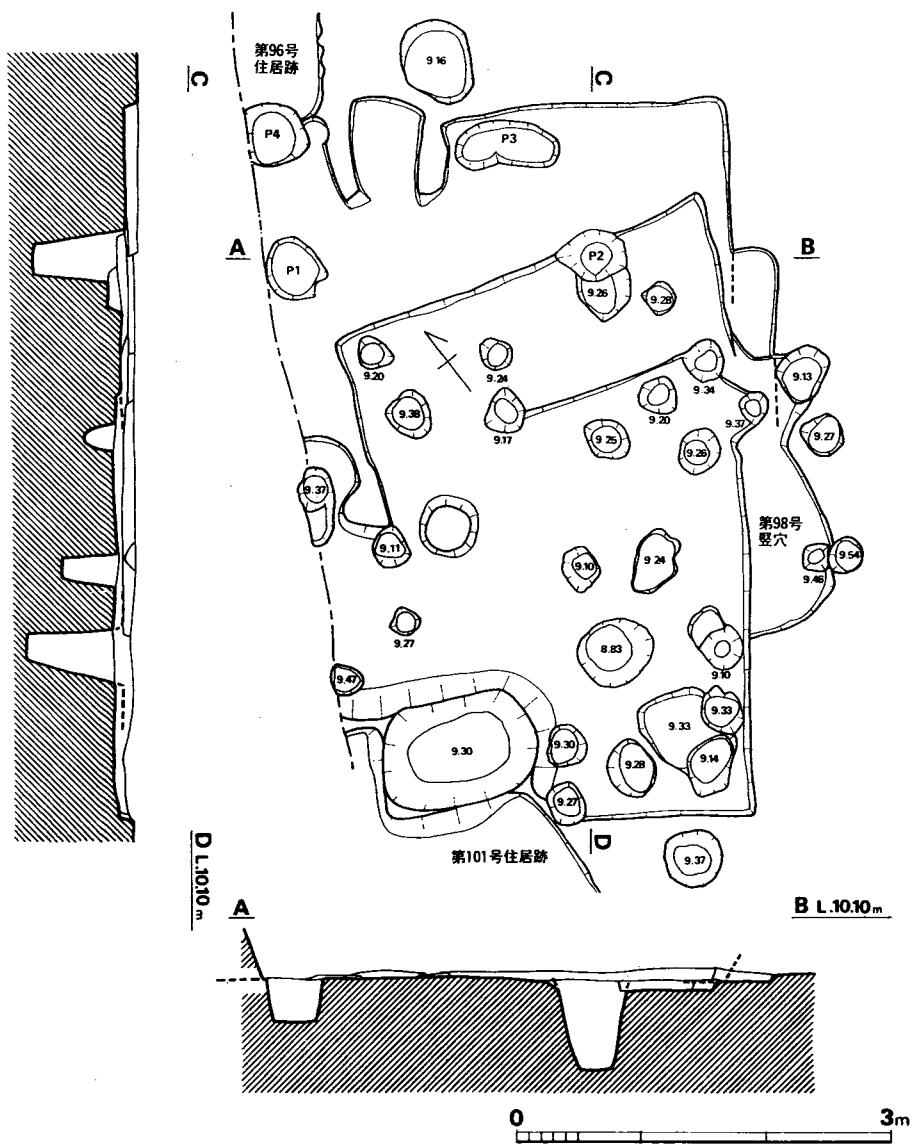


Fig. 180 B区第97号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)
 P1(-34.0)・P2(-75.0)
 P3(-20.0)・P4(-19.5)

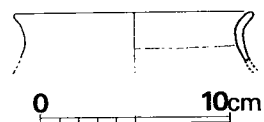


Fig. 181 B区第97号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

B区第98号竪穴 (Fig. 182, PL. 49)

N200・E 8に位置する。第97・101号住居跡と重複しているが、第97号住居跡が古く、第101号との関係は不明である。第98号住居跡によって破壊された部分が多く、北辺と東・西隅を検出したのみである。残存壁高は6cm前後で、床面は中央部が凹む。柱穴の組合せは不明で、住居跡としては疑問の遺構である。

遺物

土師器片46(丹塗り片1)、須恵器片5(蓋1・甕1)が出土した。いずれも小片である。須恵器甕小片は器表が赤褐色、内部が灰色を呈する。

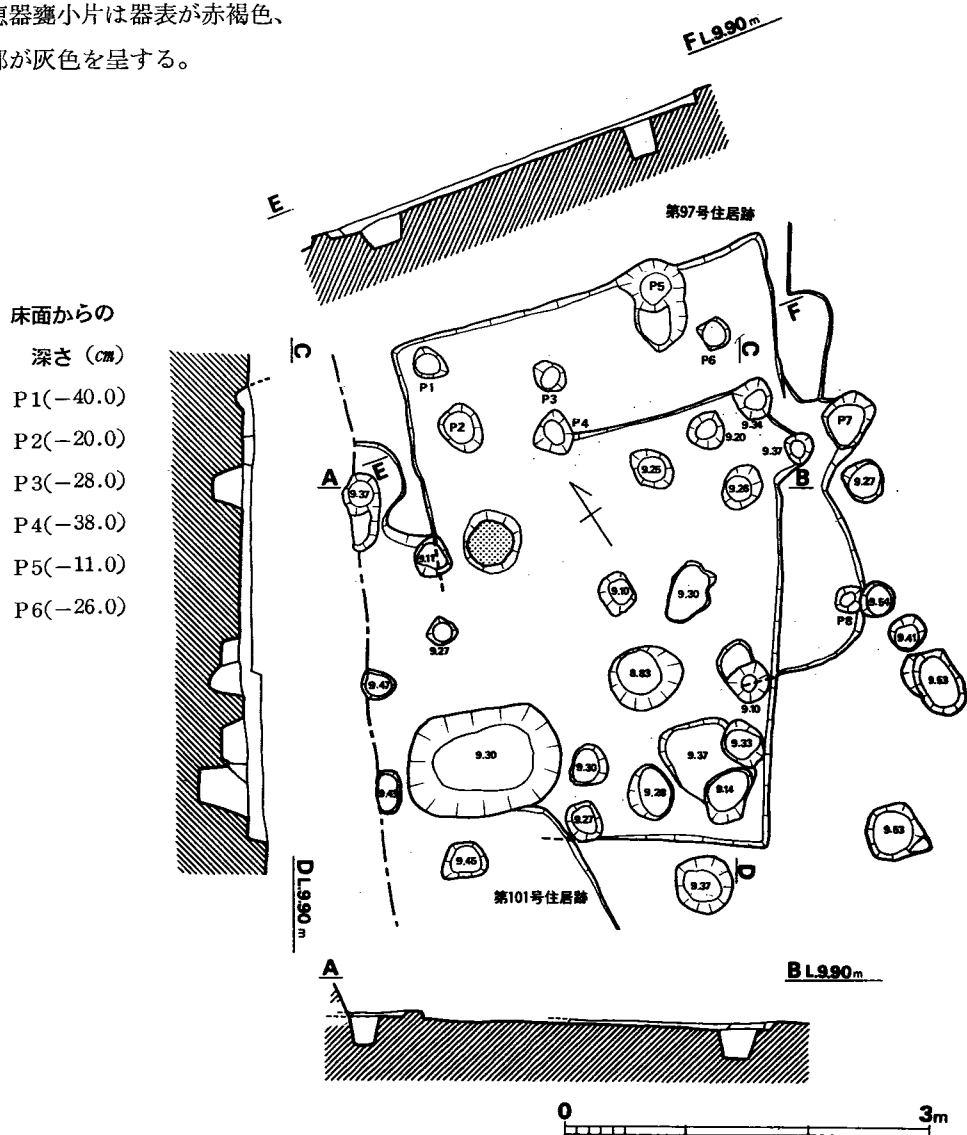


Fig. 182 B区第98号住居跡実測図 (縮尺1/60)

B区第101号住居跡 (Fig. 183, PL. 49)

N 198・E 4に位置する。第97・98号住居跡と重複するが、それらとの新旧関係は確認できなかった。遺構の大半は道路下にあり、また東辺は後世の掘り込みP5に切られており、詳細は不明である。残存壁高は8cm前後である。P11の北15cmで、長さ24cm・幅16cm・厚さ8cm円形状の石を検出した。おそらく作業台として使用されたものであろう。

遺物 (Fig. 184・185, Tab. 59, PL. 49・60)

土師器・叩石?が出土した。

土師器 (Fig. 184-1~4) 1は外面黒色化された杯で、立ち上りは垂直に近い。2・3は高杯と思われる。ともに丹塗りである。4は丹塗りの把手で、鉢の把手かもしれない。

以上のほかに、土師器小片30 (甕口縁片2を含む)が出土した。

叩石 (Fig. 185) 床面から出土した。安山岩製で、中央に敲打痕がある。

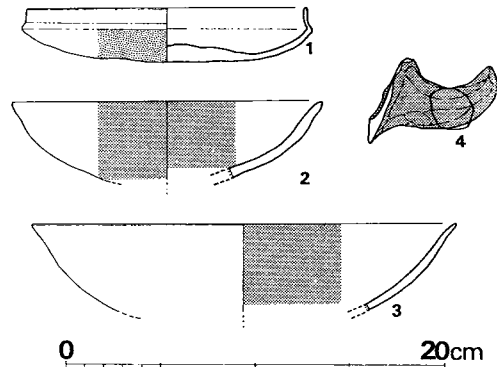


Fig. 184 B区第101号住居跡出土遺物
実測図(1) (縮尺1/4)

床面からの深さ (cm)

P 1(-22.0)・P 2(-45.0)・P 3(-23.0)
P 4(- 7.0)・P 5(-12.0)・P 6(-19.0)
P 7(-10.0)・P 8(-10.0)・P 9(- 9.0)
P 10(-16.0)・P 11(-20.0)

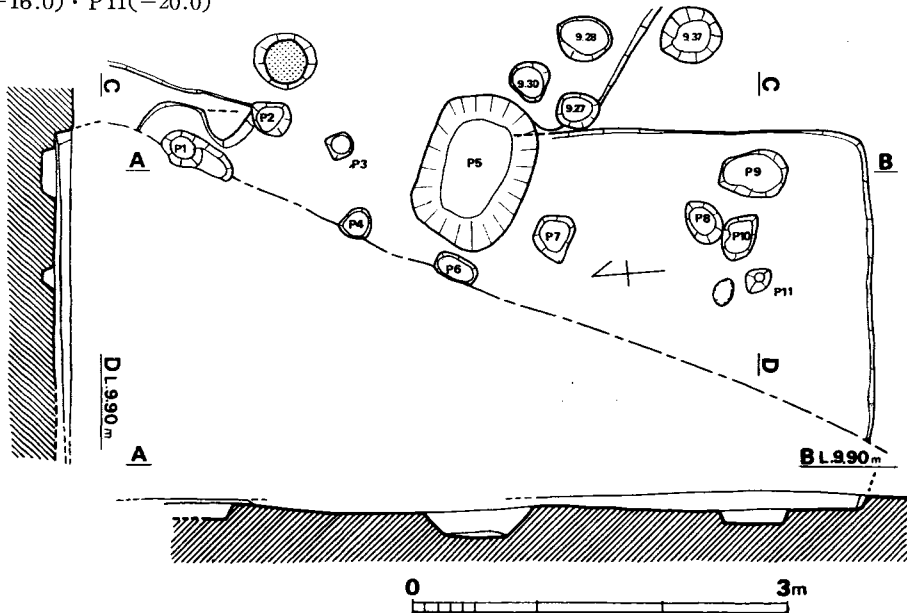


Fig. 183 B区第101号住居跡実測図 (縮尺1/60)

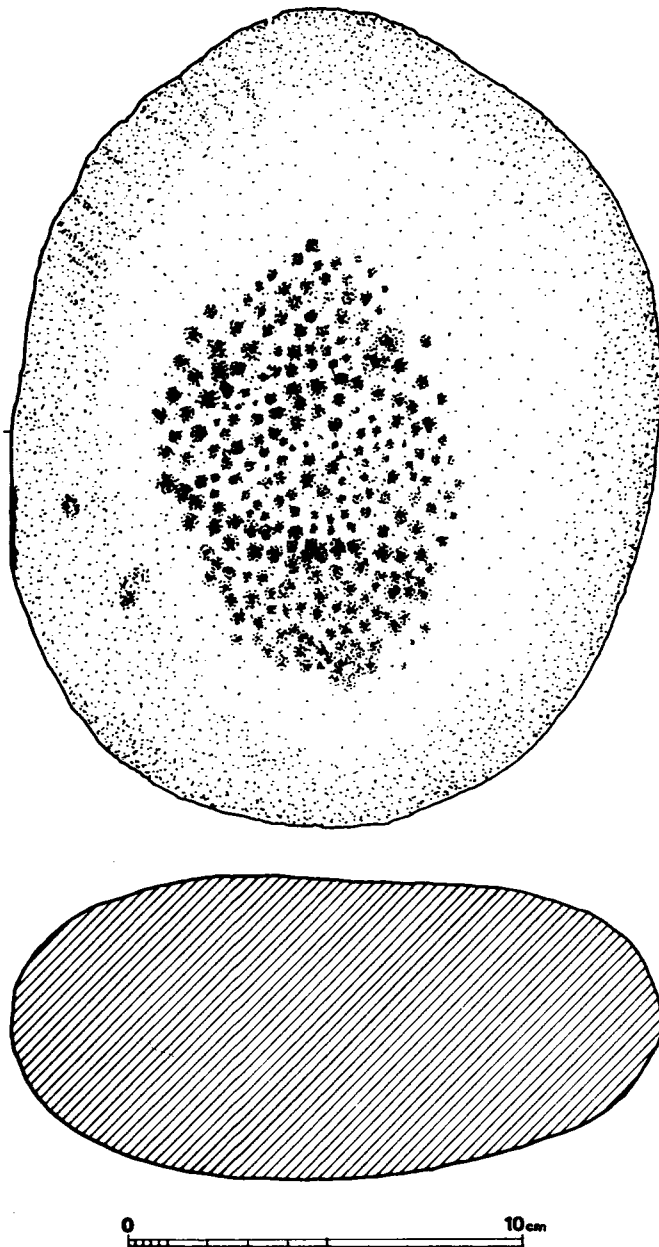


Fig. 185 B区第101号住居跡出土遺物実測図(Ⅱ) (縮尺1/2)

Tab. 59 B区第101号住居跡出土土器一覧()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	H杯	1/2	(14.7)	2.9	外稜(15.3)	胎土精良、焼成良	灰褐色	外面黒色
2	H高杯	杯部	(16.3)		口縁部	胎土精良、焼成良	明茶黄色	内外面丹塗り
3	H高杯	杯部	(22.4)		口縁部	胎土精良、焼成良	黄褐色	内面丹塗り
4		把手				胎土精良、焼成良	黄褐色	丹塗り

B区第102号住居跡 (Fig. 186, PL. 49)

N204・E10に位置するが、遺構の大部分は用地外の水田下であり、詳細は不明である。P1は支柱穴の可能性が考えられる。

遺物

土師器片26、須恵器片2が出土した。すべて小片である。そのほか、カマドの南側床面から鉄滓1個(重さ2.5g)が出土した。

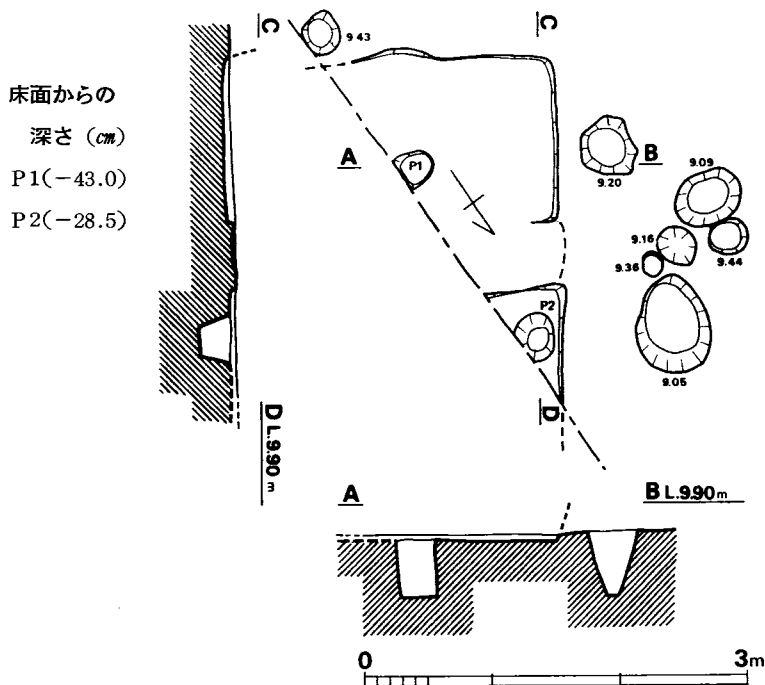


Fig. 186 B区第102号住居跡実測図(縮尺1/60)

B区第104号住居跡 (Fig. 187)

N264・E6に位置する。第105号住居跡と重複しており、本住居跡が第105号住居跡を切っている。各隅がやや丸味をもつ方形プランで、主軸はN9°Wをとる。東西約3.6m、南北約3.2mを測り、床面積は約8.5m²である。残存壁高は10cm前後で、北辺のほぼ中央にカマドが検出された。焼土の範囲は径約35cmの円形を呈し、厚さ3cm前後で、北壁寄りに低くなる。柱穴はP1・P2・P4およびP3・P12のいずれかの4本主柱が考えられる。床面はカマド付近がもっとも高く、全体としては北西隅から南東隅に向かって低くなる。

遺物 (Fig. 188)

須恵器片8(そのうち蓋口縁片2)、土師器片121(そのうち杯片1・甕口縁片1)が出土した。これらのうち図示できるのは Fig. 188 の杯のみである。底部外面はナデ、そのほかはヨコナデ調整で、底部径は7.0cm前後である。胎土・焼成とも良好。

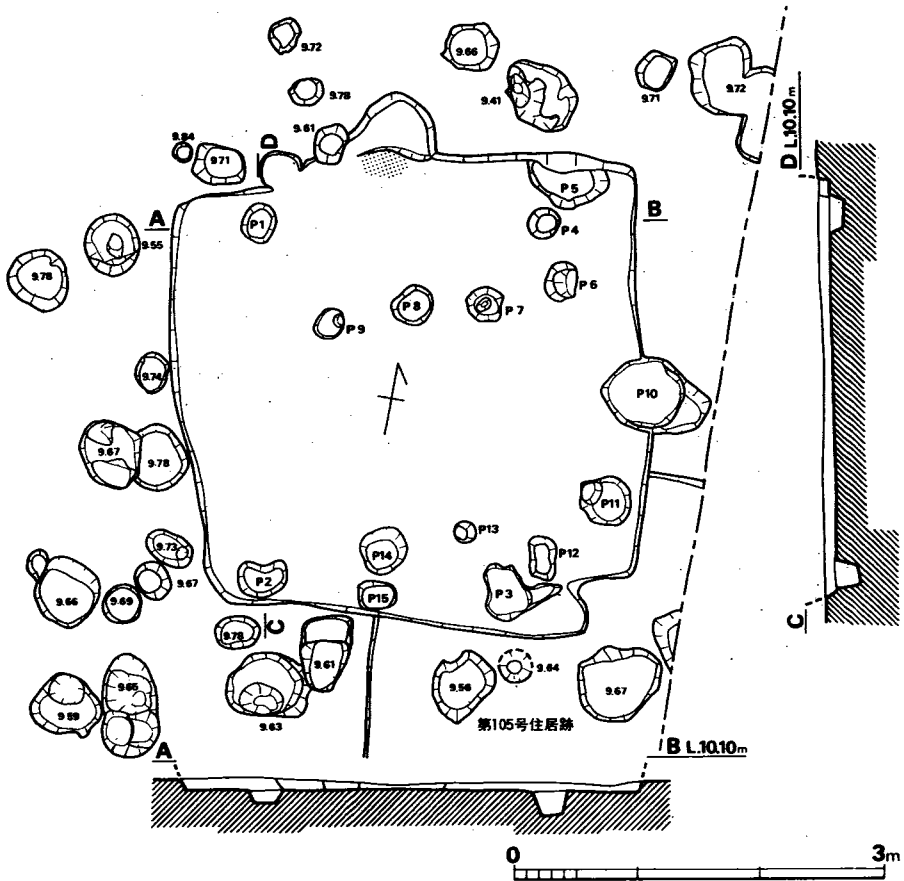


Fig. 187 B区第104号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)

P 1(-10.5)・P 2(-18.0)・P 3(-25.0)・P 4(-19.5)・P 5(-14.5)

P 6(-25.0)・P 7(-37.0)・P 8(-22.5)・P 9(-30.5)・P 10(-30.0)

P 11(-21.0)・P 12(-14.0)・P 13(-18.0)・P 14(-25.0)・P 15(-20.0)

P1~P2 2.95m・P2~P3 2.00m・P3~P4 3.05m・P4~P1 2.31m

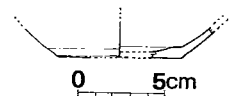


Fig. 188

B区第104号住居跡
出土土器実測図
(縮尺1/4)

B 区第 105 号住居跡 (Fig. 189)

N262・E 7 に位置する。第104号住居跡と重複しており、本住居跡の方が古い。南端のピットは後世の掘り込みで、南辺を切っている。東半は用地外に広がり、北西隅を第104号住居跡に切られているため全体を知ることはできないが、南北の長さ4.8mで、壁高は7cm強である。第104号住居跡の南東隅壁上に焼土が検出されたが、その位置からして、他の遺構のものであろう。また、住居跡内に5個のピットが検出されたが、本住居跡に伴うかどうかかわからない。

遺物 (PL. 60)

弥生土器片2、土師器片149、須恵器片2が、出土したがすべて小片である。このほか滑石製の紡錘車が、一点出土した。径4.1cm、孔径0.5~0.6cm、厚さ1.4cmをはかる。周縁は磨滅のため丸味をもっているが、本来は断面台形であったと思われる。重さは37.5g以上である。

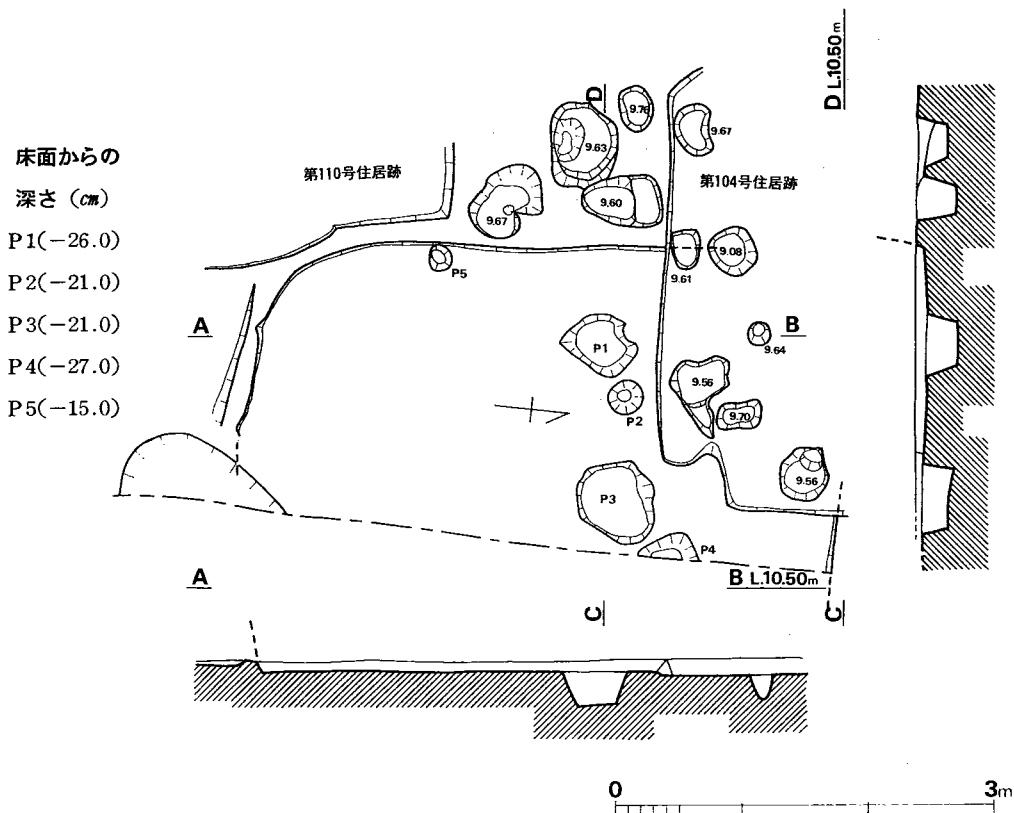


Fig. 189 B区第105号住居跡実測図 (縮尺1/60)

B区第106号住居跡 (Fig. 190, PL. 57)

N263・W5に位置する。主軸を東西方向よりやや北へとる方形プランの住居跡で、長軸5.0×短軸4.7m、床面積23.5m²をはかる。西壁中央よりやや北寄りにカマドをもち、幅40cm、奥行約80cmをはかる。そのなかに32cmの範囲で焼土が認められた。住居跡内にピットは15個検出されたが、そのうち支柱穴と考えられるのはP1~P4で、柱穴の直径44~60cm、床面からの深さ41.1~46.0cmである。カマドの両側にP6・P9があり、カマドと何らかの関係をもつものであろうか。壁の高さは1~7.2cmと残りはよくない。

遺物 (Fig. 191・192, Tab. 60, PL. 57)

土師器・須恵器・叩石?が出土した。

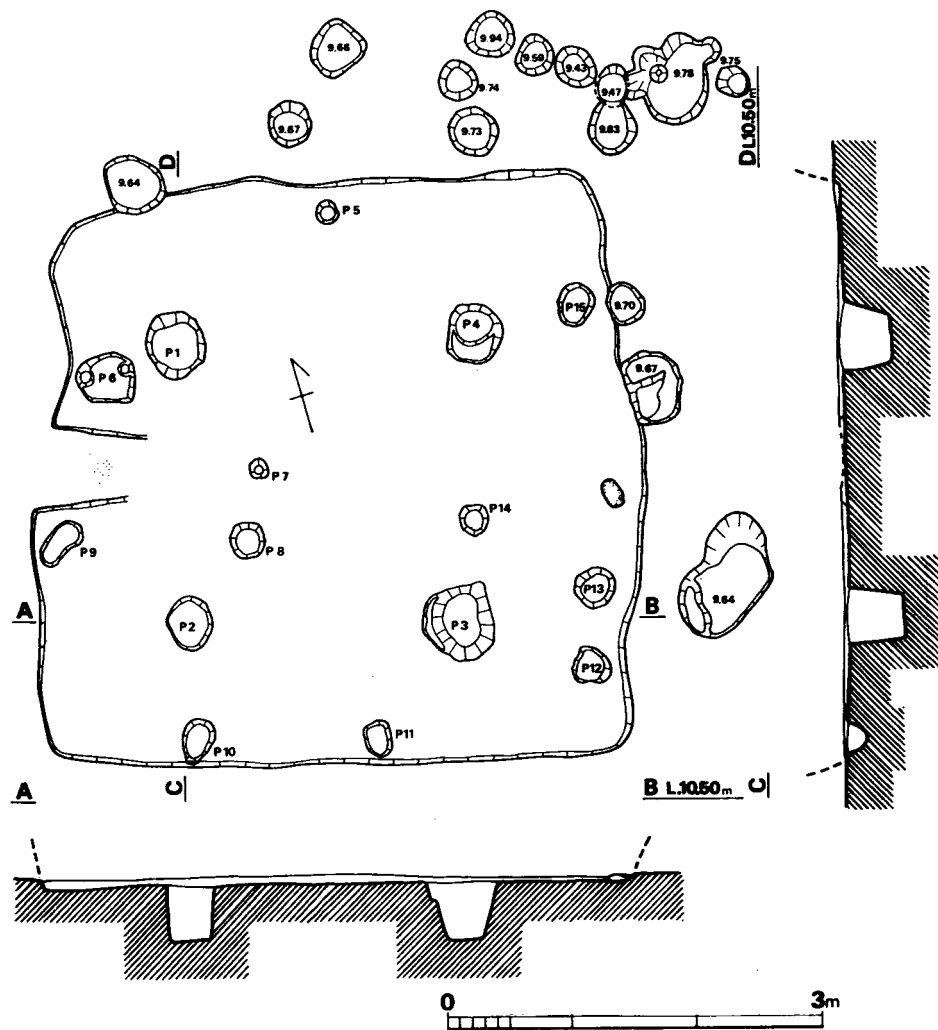


Fig. 190 B区第106号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)

P 1(-41.1)・P 2(-46.0)・P 3(-45.1)・P 4(-45.7)

P 5(-13.7)・P 6(-36.8)・P 7(-14.0)・P 8(-17.3)

P 9(-18.4)・P 10(-21.3)・P 11(-13.0)・P 12(-37.0)

P 13(-39.5)・P 14(-28.0)・P 15(-29.3)

P1~P2 2.23m・P2~P3 2.20m・P3~P4 2.34m

P4~P1 2.38m

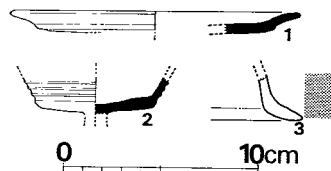


Fig. 191 B区第106号住居跡出土
遺物実測図(I) (縮尺1/4)

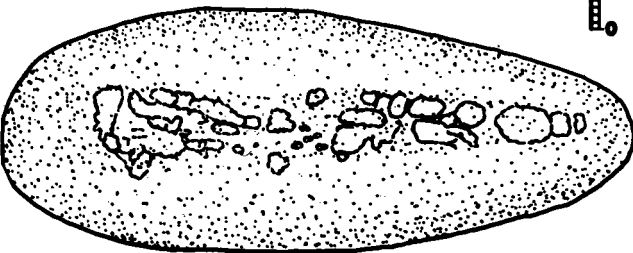
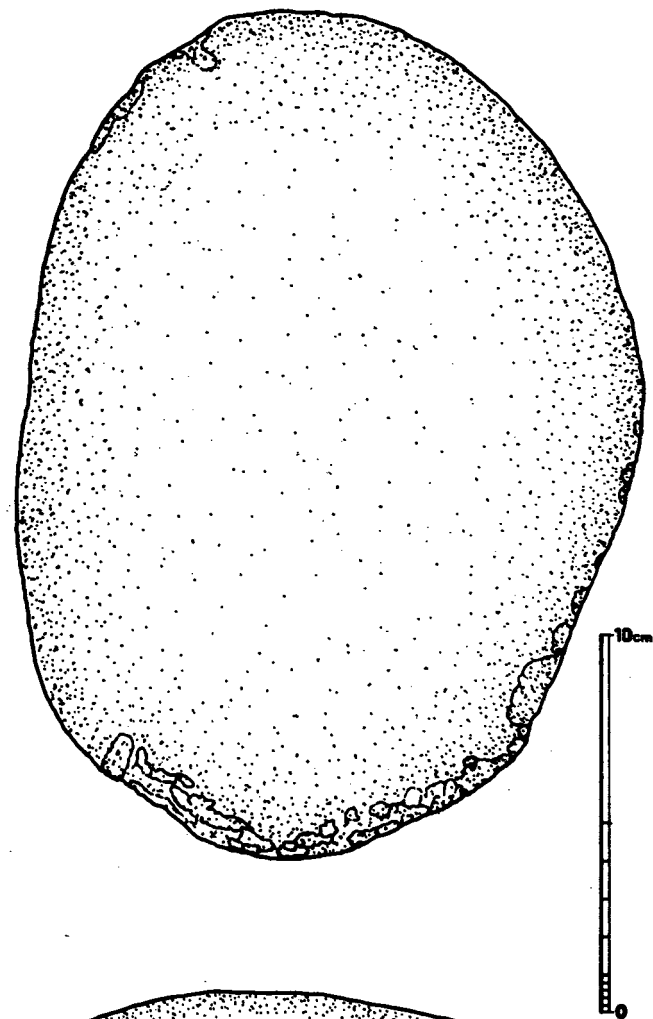


Fig. 192 B区第106号住居跡出土遺物実測図 (II) (縮尺1/2)

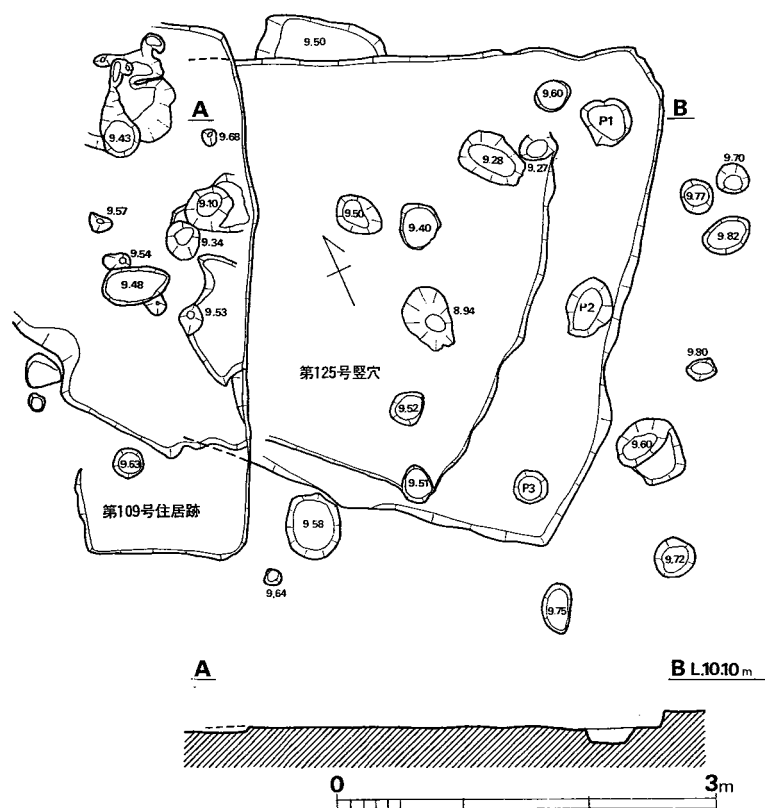


Fig. 193 B区第108号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)
 P1(-11.0)・P2(-15.0)

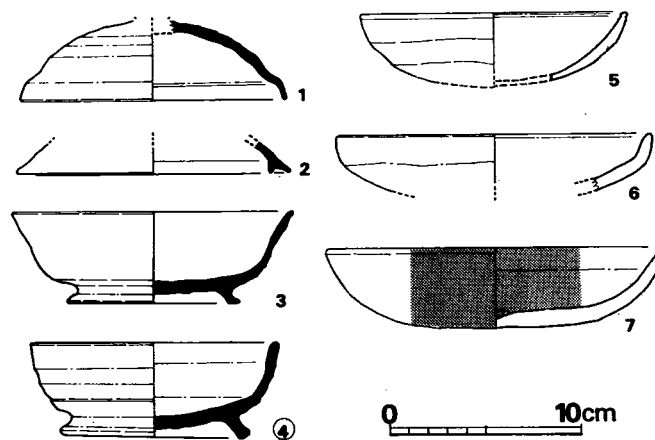


Fig. 194 B区第108号住居跡出土遺物実測図 (I) (縮尺1/4)

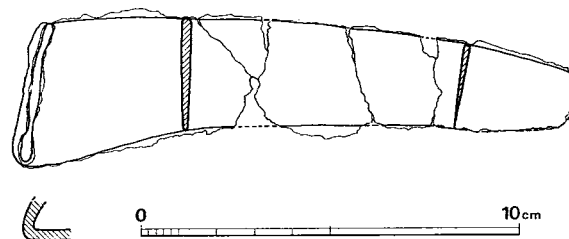


Fig. 195 B区第108号住居跡出土遺物実測図 (II) (縮尺1/2)

Tab. 61 B区第108号住居跡出土土器一覧 ()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	S 蓋	ツマミ欠	(14.0)		口縁部	細砂を含み、堅緻	明灰色	
2	S 蓋	口縁部	(12.5)		受け部(14.5)	細砂を含み、堅緻	青灰色	
3	S高台杯	4/5	14.5	4.9	口縁部	大きめの砂粒を含み、焼成不良	外面 黄褐色 内面 灰色	
4	S高台杯	4/5	12.9	5.1	口縁部	細砂を含み、堅緻	明紫色	
5	H 杯	底部欠	(14.0)	(3.9)	口縁部	胎土精良、焼成良	黄褐色	
6	H 杯	底部欠	(16.5)		口縁部	胎土精良、焼成良	黄褐色	
7	H 杯	完	17.5 ~17.8	4.3	口縁部	胎土精良、焼成良	黄褐色	内外面丹塗り

須恵器 (Fig. 191—1・2) 1 は皿と思われる。底部外面はナデ、そのほかはヨコナデである。2 は杯の可能性もあるが、底部外面にカキ目のあることから高杯とした。体部に3本の凹線がある。

土師器 (Fig. 191—3) 外面丹塗りで、胎土が良質であることから高杯裾部片とした。

以上のほかに須恵器小片9、土師器小片152 (カメ口縁片1) が出土した。

叩石 (Fig. 192) 床面から出土したもので、周縁の一部に凹凸がみられる。玄武岩製。

Tab. 60 B区第106号住居跡出土土器一覧 () は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	S皿?	底部欠	(15.0)			細砂を含み、焼成良	灰色	
2	S高杯	杯部				胎土精良、焼成不良	灰褐色	
3	H高杯	裾部				胎土精良、軟質	黄褐色	外面丹塗り

B区第108号住居跡 (Fig. 193, PL. 58)

N256・E7に位置する。第125号竪穴を切り、第109・110号住居跡に切られている。4者の関係は、125→108→110→109の順に新しい。

重複により西辺は不整形であるが、略方形のプランをもつもので、東辺3.8m、北辺4.2m、西辺・南辺は推定でともに4.1mを測り、床面積は約16.2m²である。壁高は東壁で12cm前後である。

焼土は北辺では検出できず、西辺にあったものと思われる。東辺付近に並ぶピットは本住居跡のものと思われるが、他との組合せが成らず確定できない。床面は南へ向って低くなる。

遺物 (Fig. 194・195, Tab. 61, PL. 60)

土師器・須恵器・鉄鎌が出土した。

須恵器 (Fig. 194—1~4) 1・2は蓋で、1にはツمامミがつく。3・4は高台のつく杯で、3は体部が外反する。4は床面出土で体部は内彎し、端部がわずかに外反する。

土師器 (Fig. 194—5~7) 5~7は杯で、7は内外面丹塗りである。6は皿に近い。

以上のほかに、須恵器片2 (蓋1)、土師器382片 (杯1) が出土した。

鉄鎌 (Fig. 195) 本遺跡では、全体の形がほぼ判明するのはこの一例のみである。南壁付近床面で発見されたもので、先端が細く刃部は内彎する。刃部と柄のつく方向との角度は鈍角 (100~116°) をなしている。

B区第109号住居跡 (Fig. 196, PL. 58)

N 256・E 2に位置する。第125・108・110号住居跡を切っており、125→108→110→109の順に新しい。プランは台形で主軸N26°Eをとり、東辺の長さ4.1m、西辺3.9m、南辺3.3m、北辺2mを測り床面積約11.8㎡である。壁高は東壁で7cm、西壁で6cm、南壁で9cm前後がそれぞれ遺存している。柱穴の組合せは不明である。床面は焼土付近がもっとも高く、全体としては北西隅に向って低くなる。

遺物

土師器片234（そのうち甕口縁片2・甕片1）、須恵器片19（そのうち焼成不良品13）が出土した。いずれも小片である。ほかに鉄製品1があるが、何であるか不明。

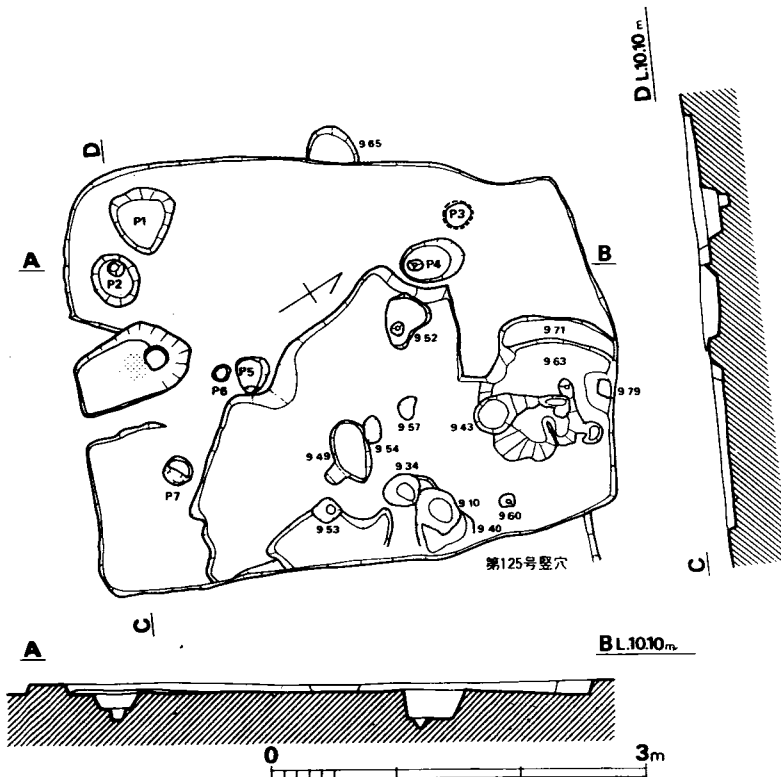


Fig. 196 B区第109号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)

P1(-23.0)・P2(-12.0)・P3(-18.0)・P4(-23.0)・

P5(-19.0)・P6(-8.0)・P7(-14.0)

B区第110号住居跡 (Fig. 197, PL. 58)

N259・E 3に位置する。第108号住居跡を切っており、第109号住居跡に切られている。北辺5.2mを検出したが、プランを確認することはできなかった。壁高は10cm余りである。

遺物 (Fig. 198)

須恵器片5、土師器片120が出土した。そのうち図示できるのは Fig 198 の須恵器碗のみである。体部外面の下半はヘラ削りで、そのほかはヨコナデ調整をする。復原口径にはやや疑問があるが17.4cmで、青灰色を呈し胎土・焼成とも良い。

ほかに鉄製品が出土したが、何であるか不明。

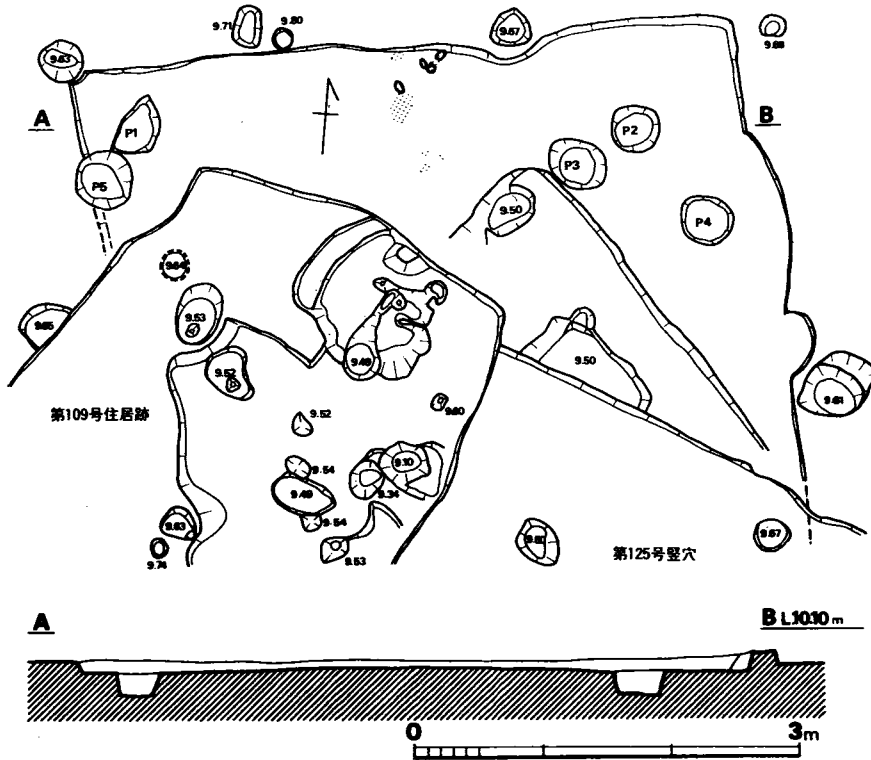


Fig. 197 B区第110号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)
 P1(-18.0)・P2(-18.0)・
 P3(-24.0)・P4(-10.0)・
 P5(-16.0)

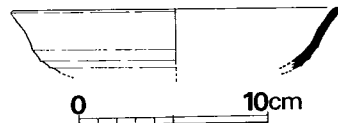


Fig. 198 B区第110号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

B 区第 111 号住居跡 (Fig. 199・200, PL. 58)

N253・Oに位置する。第112号住居跡を切っており、方形プランで、主軸をN66°Wにとる。東西両辺約3.6m、南北両辺3.9mを測り、床面積は約14m²である。残存壁高は7~10cmで、床面はカマド付近が高い。焼土は西辺のほぼ中央部付近に、径約25cmの円形状に検出された。遺存状態は比較的良好で、もっとも厚い中央部で6cmある。柱穴は床面に12個のピットが検出されたが、P1・P2・P3・P4の4本主柱が考えられる。

遺物 (Fig. 201, Tab. 62, PL. 61)

須恵器・土師器が出土した。須恵器は小片のみである。

土師器 (Fig. 201—1~3) 1は須恵器的特徴の強い土師器の高杯で、脚部内面にはシボリ目を残している。2の杯は底部を欠く。ヨコナデによる仕上げである。3は小形の甕の口縁部である。

以上のほかに須恵器片13（そのうち蓋口縁片4・杯片1・甕片2）、土師器片296（そのうち甕口縁片5）が出土した。

Tab. 62 B区第111号住居跡出土土器一覧（ ）は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	H高杯	略完	14.4	11.4	口縁部	胎土精良、焼成良	茶褐色	須恵器的
2	H杯	底部欠	(17.0)	(3.3)	口縁部	胎土精良、焼成良	黄褐色	
3	H小形甕	口縁部	(16.6)			細砂を含み、焼成良	黄褐色	

B 区第 112 号住居跡 (Fig. 202, PL. 58)

N250・E1に位置する。第111号住居跡に切られ、第113・114号竪穴および第115号住居跡を切っている。東西3.5m、南北4.8mの長方形プランで、主軸をN75°Wにとり床面積は約17m²である。南側がやや深く壁高は20cmあり、他の辺では10~15cmほどである。西辺中央やや南寄りに焼土を検出した。長径15cm、短径7cmの楕円形状で、他例に比べて範囲は小さいが他には検出できなかった。おそらく、ここがカマドの位置と思われる。主柱穴は、住居跡内より12個のピットを検出したが明瞭な組合せは得られなかった。一応、P4・P11と北西部のピット（第111号住居跡と重複する部分の標高9.55mのピット）の3個が考えられる。

遺物 (Fig. 203, Tab. 63, PL. 61)

土師器・須恵器が出土した。

須恵器 (Fig. 203—1・2・4) 1・2は蓋である。2は口縁部内面に段がある。4は赤褐色を呈する杯で、胎土・焼成等から須恵器とした。

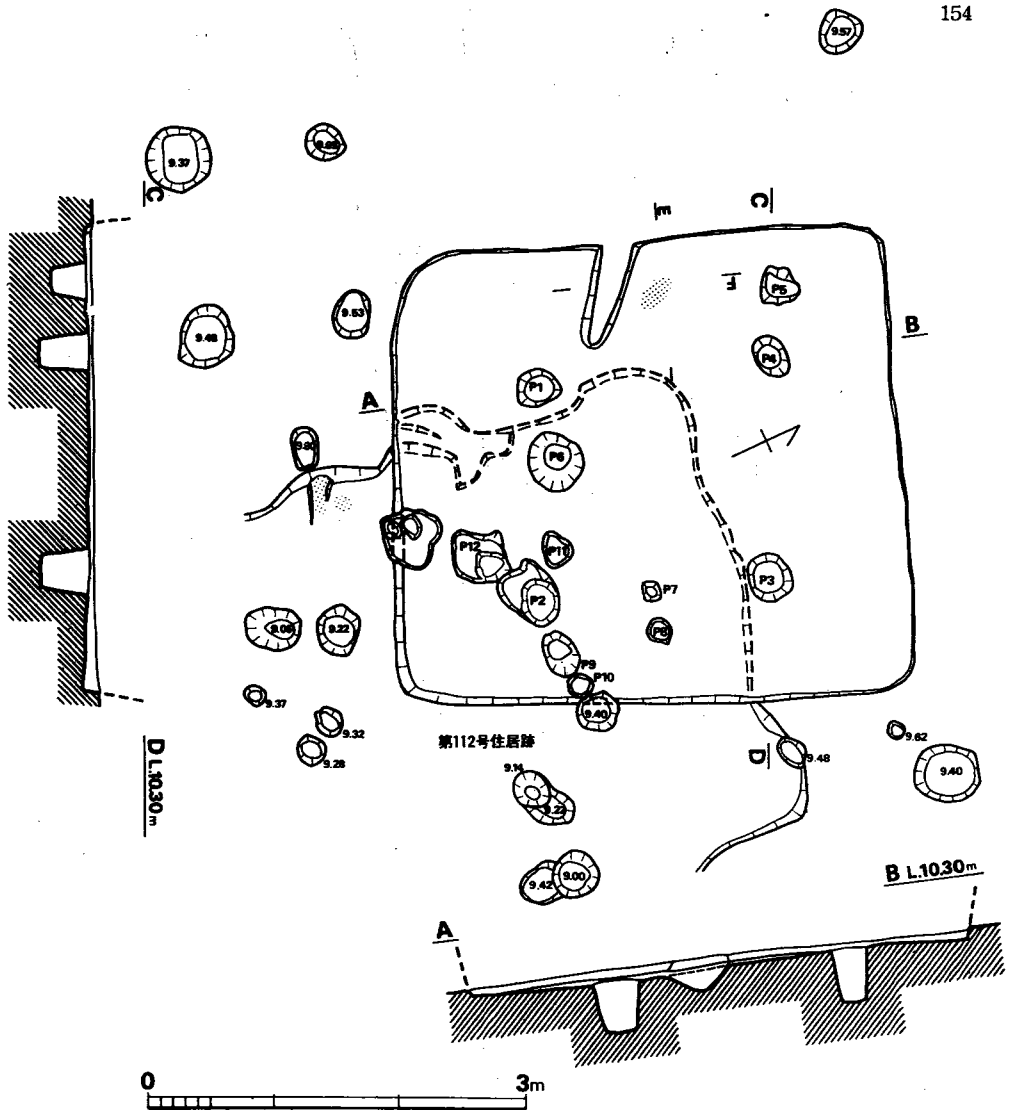


Fig. 199 B区第111号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)

P 1(-28.0)・P 2(-25.0)・P 3(-39.0)・P 4(-40.0)

P 5(-28.0)・P 6(- 7.0)・P 7(- 7.5)・P 8(-11.0)

P 9(-24.0)・P10(- 8.0) E

P11(-26.0)・P12(-53.0)

P1~P2 1.68m・P2~P3

1.83m・P3~P4 1.75m・

P4~P1 1.86m

土層

1 焼土

2 暗褐色粘質土

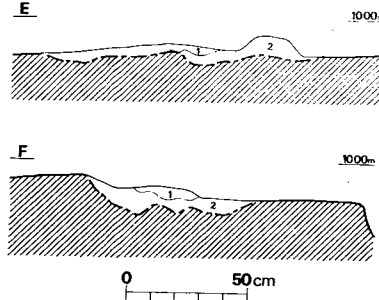


Fig. 200 B区第111号住居跡カマド土層断面図 (縮尺1/30)

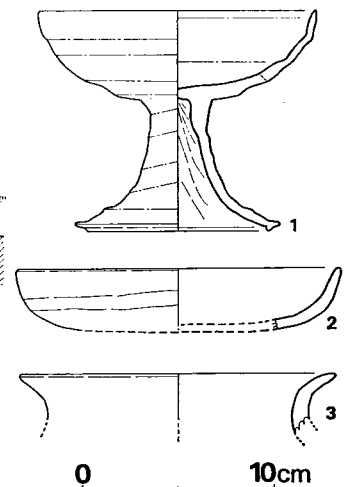


Fig. 201 B区第111号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

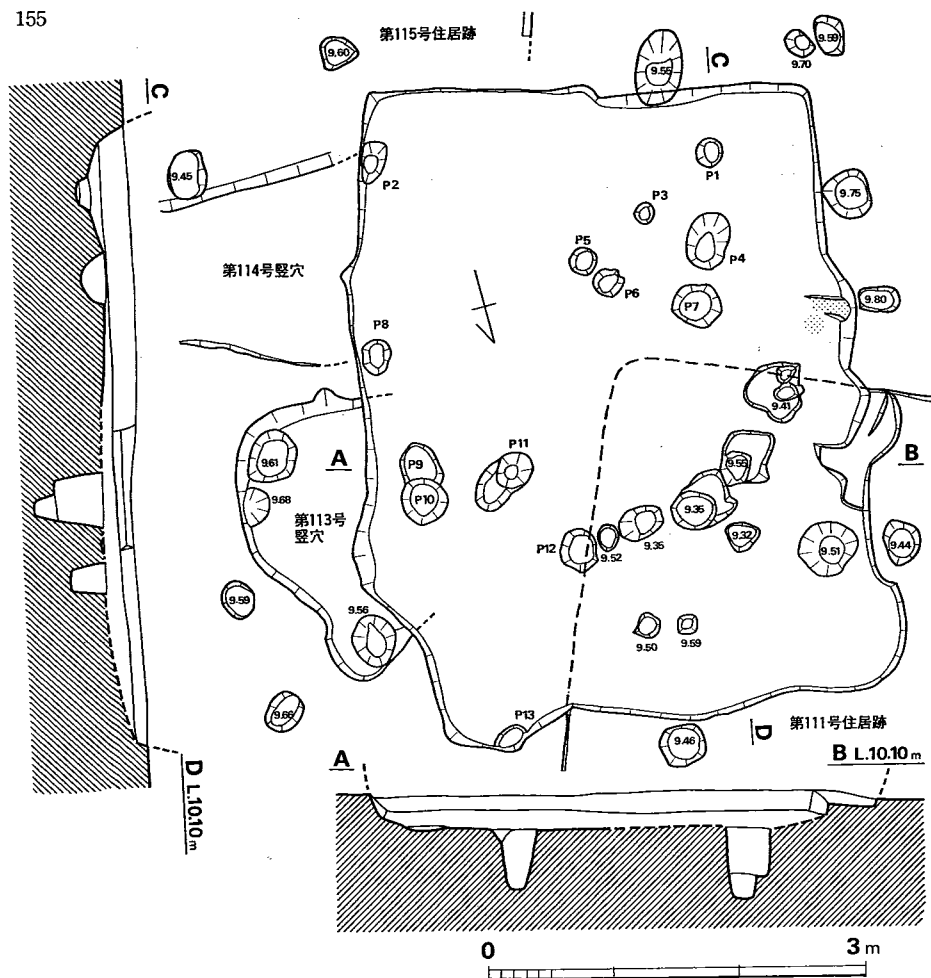


Fig. 202 B区第112号住居跡実測図(縮尺1/60)

- 床面からの深さ (cm)
- P 1(- 9.0)・P 2(-22.0)・P 3(-17.0)
 - P 4(-40.0)・P 5(-13.0)・P 6(-12.0)
 - P 7(-31.0)・P 8(-24.0)・P 9(- 1.0)
 - P10(-41.0)・P11(-25.0)・P12(- 9.0)
 - P13(- 7.0)

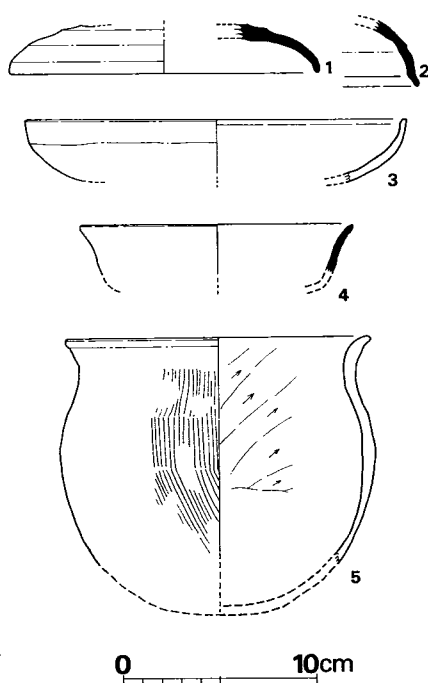


Fig. 203 B区第112号住居跡出土土器実測図(縮尺1/4)

土師器 (Fig. 203—3・5) 3は皿で、内外面ともヨコナデである。5は小形の甕で、丸味のある体部をもつ。

以上のほか須恵器片28 (蓋3・杯5・甕1)、土師器片792 (高杯1・甕口縁片4・把手1・丹塗り片3) が出土した。

Tab. 63 B区第112号住居跡出土土器一覧 () は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	S 蓋	天井部欠	(15.9)		口縁部	細砂を含み、酸化炎焼成	暗茶黄色	
2	S 蓋	口縁部				細砂を含み、焼成良	灰色	
3	H 皿	底部欠	(19.6)		口縁部	胎土精良、焼成良	黄灰色	
4	S 杯	底部欠	(14.2)		口縁部	胎土精良、酸化炎焼成	赤褐色	
5	H小形甕	底部欠	(15.6)		胴部中位 (16.4)	砂粒を含み、焼成良	淡茶灰色	

B 区第113号竪穴 (Fig. 204, PL. 58)

N 251・E 4に位置する。南北約2mの不整形の竪穴で、西半を第112号住居跡に切られている。残存壁高は14~20cmで比較的深い。床面は平坦に近いが、壁の形状と規模や胎土の存否等が他の例に比較すると大きく異なっており、住居跡とするには疑問があるため竪穴とした。

遺物

弥生土器片1、土師器片8 (丹塗り片1を含む)、須恵器片2を出土した。すべて小片である。

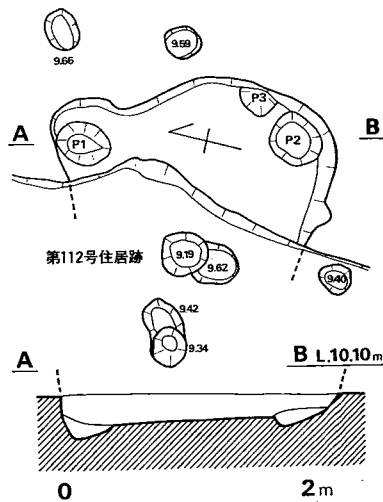


Fig. 204 B区第113号竪穴実測図

(縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)

P1(-21.0)・P2(-9.0)・P3(-7.0)

B区第114号竪穴 (Fig. 205)

N149・E 4に位置する。第112・115号住居跡、および第4号溝に切られている。本遺構は第115号住居跡の東辺中央よりやや南寄り、第112号住居跡南辺の南側に、ほぼ東西に伸びる北辺の一部のみを残存する。住居跡であるか不明であるが、発掘時には一応番号を付したものである。

遺物 (Fig. 206, PL. 61)

土師器片9、須恵器蓋が1出土した。土師器は小片のみである。Fig. 206の蓋は略完形で、ツマミはつかない。かえりは受け部より内側にあり、天井部内面はナデ、外面はヘラ削り、そのほかはヨコナデである。口径9.6cm、器高2.5cmをはかる。

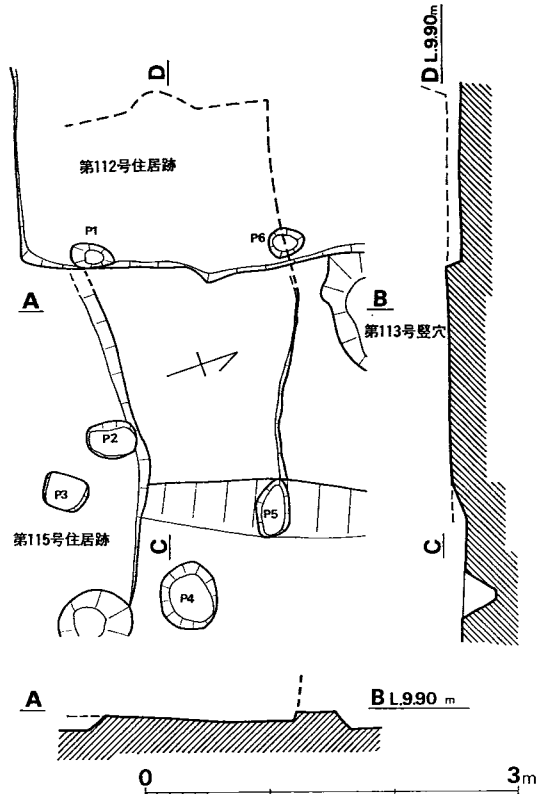


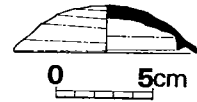
Fig. 205 B区第114号竪穴実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)

P1(-21.0)・P2(-26.0)・P3(-20.0)

P4(-23.0)・P5(-20.0)・P6(-22.0)

Fig. 206 B区第114号竪穴出土土器実測図 (縮尺1/4)



B区第115号住居跡 (Fig. 207・208)

N247・E 2に位置する。北西隅を第112号住居跡に切られている。残存する壁から復原すると東西4.1m、南北3.2m、床面積13.1㎡で、主軸はN79°Eをとる。壁高は9~14cmである。焼土は西辺の南隅近くに検出された。本遺跡では例が少なく、やや疑問を残す。住居跡内からは11個のピットを検出したが、組合せの可能なものはP3・P4・P10の3個で、4本主柱が考えられる。床面は焼土付近がもっとも高い。

遺物 (Fig. 209)

弥生土器底部片1、土師器片20 (そのうち内外面丹塗り片2)、須恵器9、鉄滓2 (1gと1.5g)、鞆羽ロ片が出土した。土器のうち図示できるのはFig. 209の須恵器のみである。

1は長頸壺と思われる。底部内面はナデ、体部はヨコナデ、外面は高台付近を除きヘラ調整

である。高台の
接合面を残して
いる。2は蓋の
小片で、かえり
は断面三角形を
呈する。

床面からの
深さ (cm)

- P 1(- 7.0)
- P 2(-20.0)
- P 3(-15.0)
- P 4(-17.0)
- P 5(- 9.0)
- P 6(- 7.0)
- P 7(-50.0)
- P 8(-26.0)
- P 9(-16.0)
- P 10(- 7.0)
- P 11(-25.0)

土層

- 1 焼土の影響で
変色した部分
(焼土ブロック
を含む)
- 2 暗茶褐色粘質
土

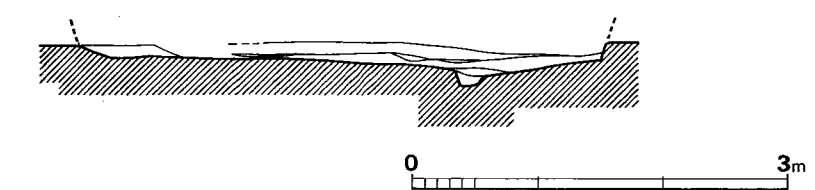
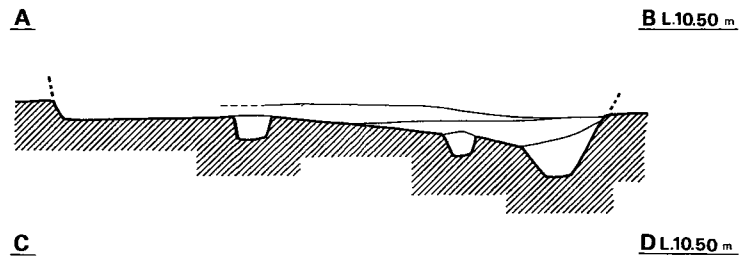
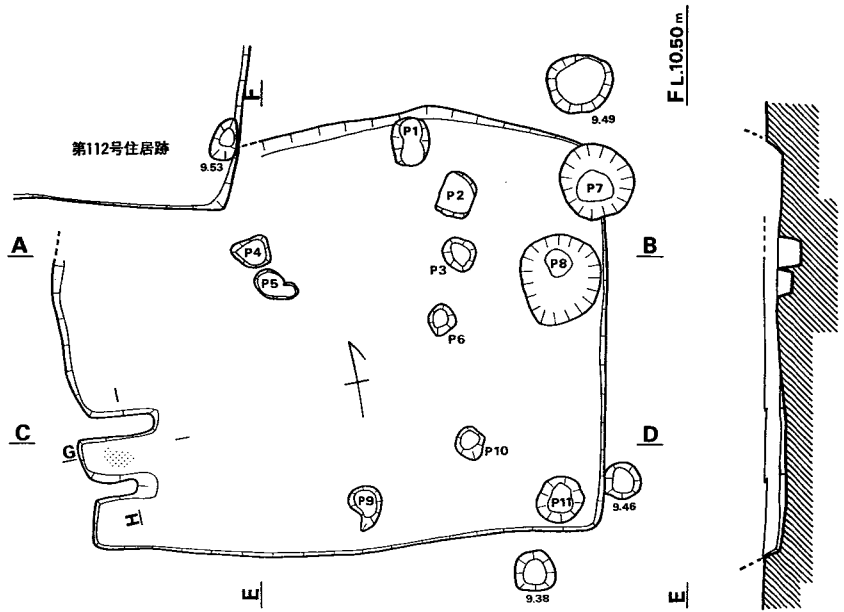


Fig. 207 B区第115号住居跡実測図 (縮尺1/60)

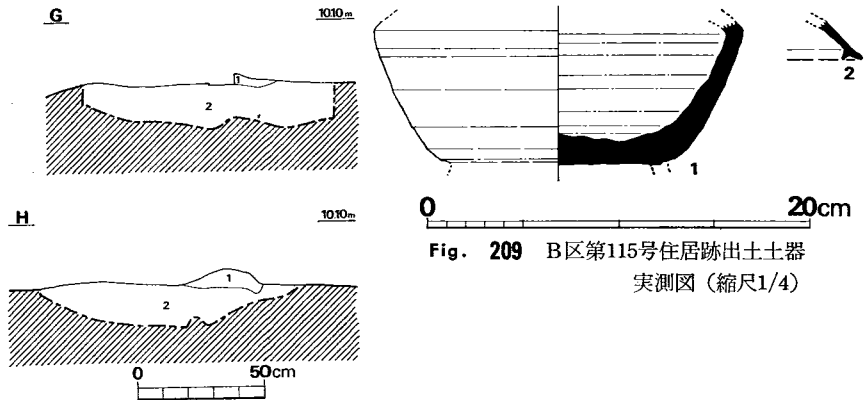
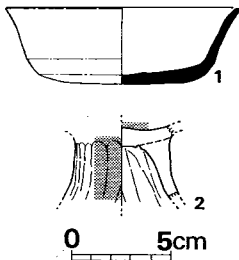


Fig. 209 B区第115号住居跡出土土器
実測図 (縮尺1/4)

Fig. 208 B区第115号住居跡カマ
ド土層断面図 (縮尺1/30)

B 区第 116 号住居跡 (Fig. 210)

N245・W1に位置する。第120号住居跡と重複しており、本住居跡の方が新しい。方形プランで、主軸をN85°Wにとり、東西4.1m、南北4.1m²で、床面積は16.8m²である。西辺のほぼ中央に、壁に接して焚口巾約40cm、奥行約66cmのカマドが付設されている。ピットは床面に12個検出されたが、柱穴としてはP1・P2をその候補にあげるのみである。



遺物 (Fig. 211)

須恵器・土師器が出土した。須恵器 (Fig. 211—1) 灰褐色を呈する杯で、焼成不良品である。底部内外面はナデ、そのほかの部分はやコナデである。復原口径12.1cm。

土師器 (Fig. 211—2) 2 は丹塗りの高杯で、杯部内面も丹塗りである。脚部は内外面ともヘラ調整を施す。

以上のほかに、須恵器片7、土師器71が出土した。

Fig. 211 B区第116号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

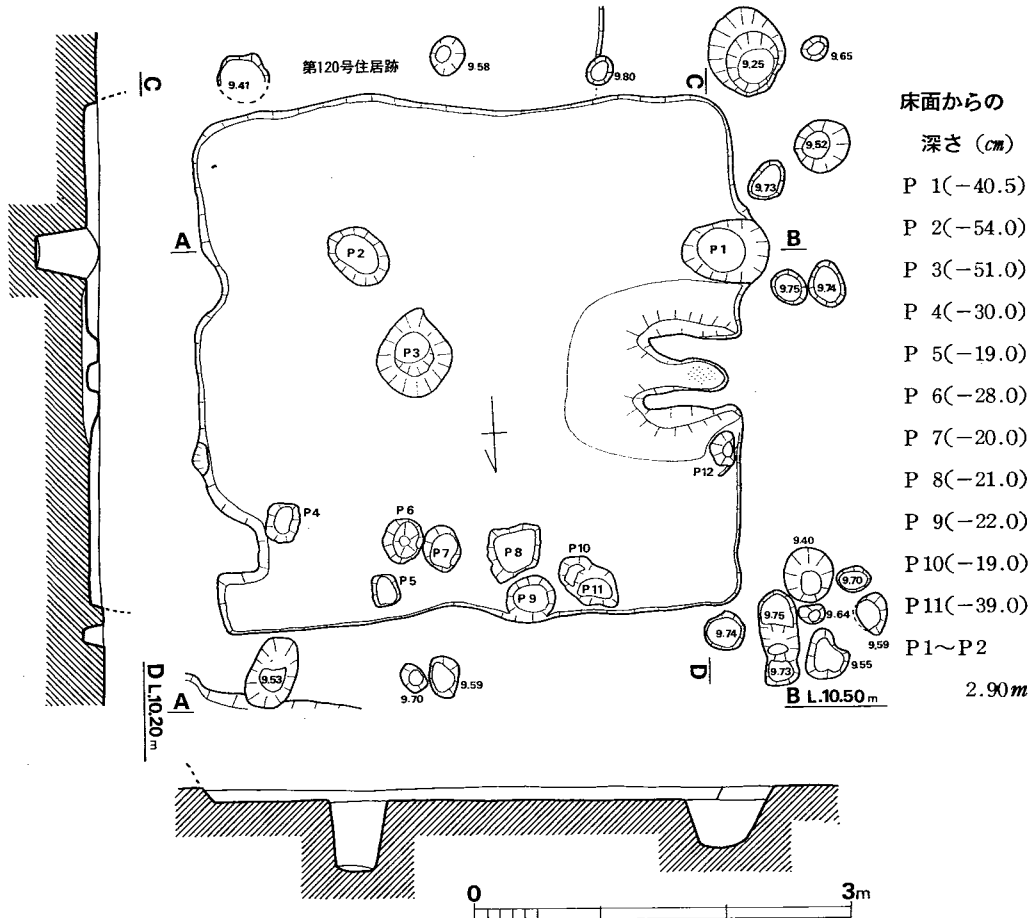


Fig. 210 B区第116号住居跡実測図 (縮尺1/60)

B区第117号住居跡 (Fig. 212)

N243・E 3に位置する。第120・124号住居跡を切り、第115号住居跡に切られている。

4者の関係を数字のみで示すと、120→124→117→115の順に新しい。削平を受けており、南辺と東辺を残すのみであるが、方形のプランと思われる。東西辺の長さ2.8m、南北3.3mで、床面積9.2m²前後と思われる。残存壁高は5～7cmである。西辺中央部には焼土が検出されており、カマドの可能性はある。住居跡内に8個のピットが検出されたが、柱穴であるかどうか疑問である。床面は焼土付近が高い。

遺物 (Fig. 213, PL. 61)

土師器片109、須恵器片4を出土した。これらのうち図示できるのは Fig. 213 の須恵器杯のみである。この杯は紫灰色を呈し、焼成は良好である。底部内面はナデ、外面の高台内側はヨコナデ、体部下半はへら削りである。口径14.9cm、器高4.0cmを測る。

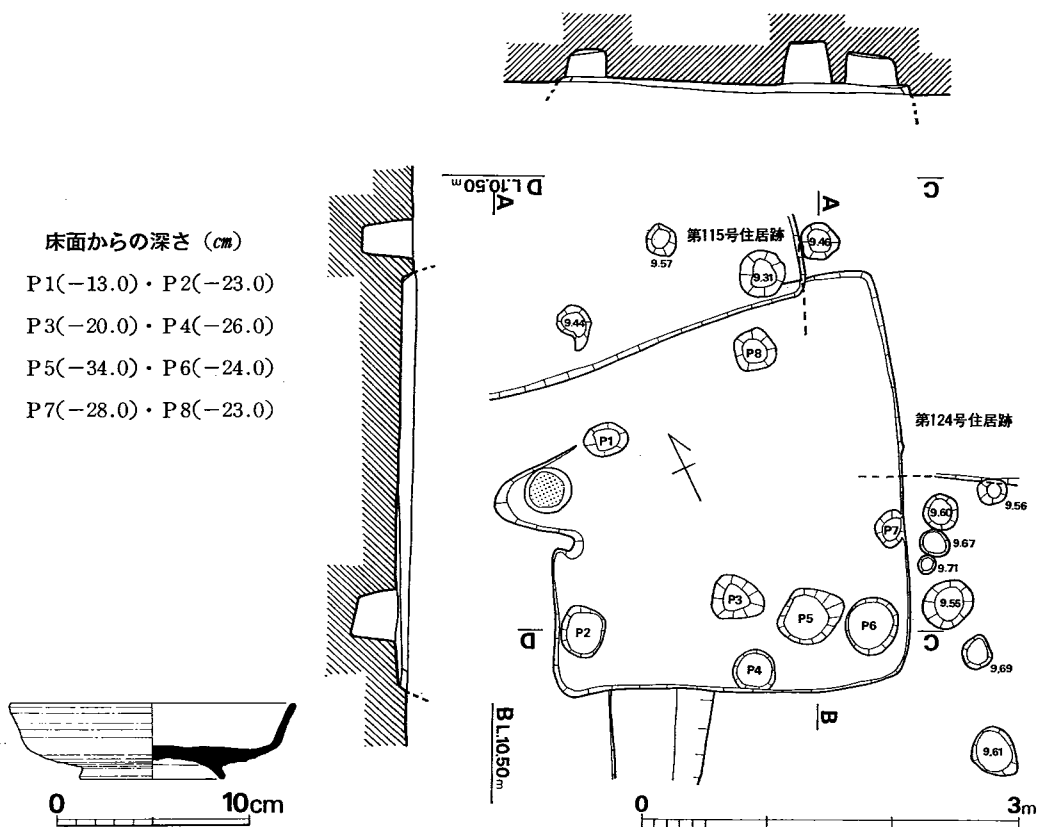


Fig. 213 B区第117号住居跡
出土土器実測図 (縮尺1/4)

Fig. 212 B区第117号住居跡実測図 (縮尺1/60)

B区第118号住居跡 (Fig. 214, PL. 57)

N237・Oに位置する。主軸をN10°Eにふる方形プランの住居跡である。長軸7.0×短軸5.7m、床面積35.9m²をはかり、本遺跡でも最大級の住居跡で、各辺は内側にややそった感じであるが形は整っている。南東コーナーが調査地区外であるが、全体の状況は理解できる。西壁の一部を第122号住居跡に、さらに第123号住居跡に上部を、また南東部を溝により切られている。ピットは19個検出されたが、そのうち支柱穴はP1～P4である。直径は80～100cmといずれも大きく、二段掘りをなしている。深さは62～74cmをはかる。南壁ほぼ中央部、壁にへばりついた状態で60×20cmの範囲で焼土が、またそれより80cm北側にも東西に流れた感じで5×45cmの範囲に焼土が認出されている。住居跡の上部は、ほとんどげぼられており、壁は3～12cmしか残っていなかった。

遺物 (Fig. 215)

土師器小片88 (甕口縁片1・甕口縁片1を含む) と甕体部片1個体分、須恵器片2 (蓋1・甕1) が出土した。すべて小片である。ほかに刀子1 (Fig. 215-2) と磨製石斧小片1 (Fig. 215-1) が出土した。刀子は現存長4.8cmで、焼土の近くの床面から出土した。石斧は玄武岩製で、敲打痕を残している。南西隈から出土した。

B区第119号住居跡 (Fig. 216)

N245・W5に位置する。主軸をN79°Wにふる方形プランの住居跡である。長軸5.3×短軸4.75m、床面積25.18m²をはかる。ピットは17個検出され、そのうちP1～P3・P5が支柱穴と考えられるが、P3は位置的にややかたよっており、またP5は他の柱穴に比べて規模がやや小さい。直径は30～60cm、床面からの深さは13～48cmである。P1・P2間中央よりやや西寄り、西壁との間に、南北へ長く30×70cmの範囲に焼土が認められる。壁の高さは2～6cmと残りはよくない。

遺物

土師器片192 (甕口縁片3を含む)、須恵器片9 (甕体部片を含む) が出土した。いずれも小片である。このほか、カマド内より小石が1個出土した。

B区第120号住居跡 (Fig. 217・218)

N242・W1に位置する。第115・116・117号住居跡と重複し、第116・117号住居跡に切られている。第115号住居跡との関係は確認できなかったが、第117号住居跡をはさんで、120→117→115の順に新しい。北半を検出することができなかったが、方形プランになると思われる。カマドは南辺のほぼ中央部に付設されており、本遺跡では南辺は本住居跡ただ一つである。柱穴は住居跡内に13個のピットが検出されているが、位置的にはP2・P9がもっとも可能性が高いであろう。

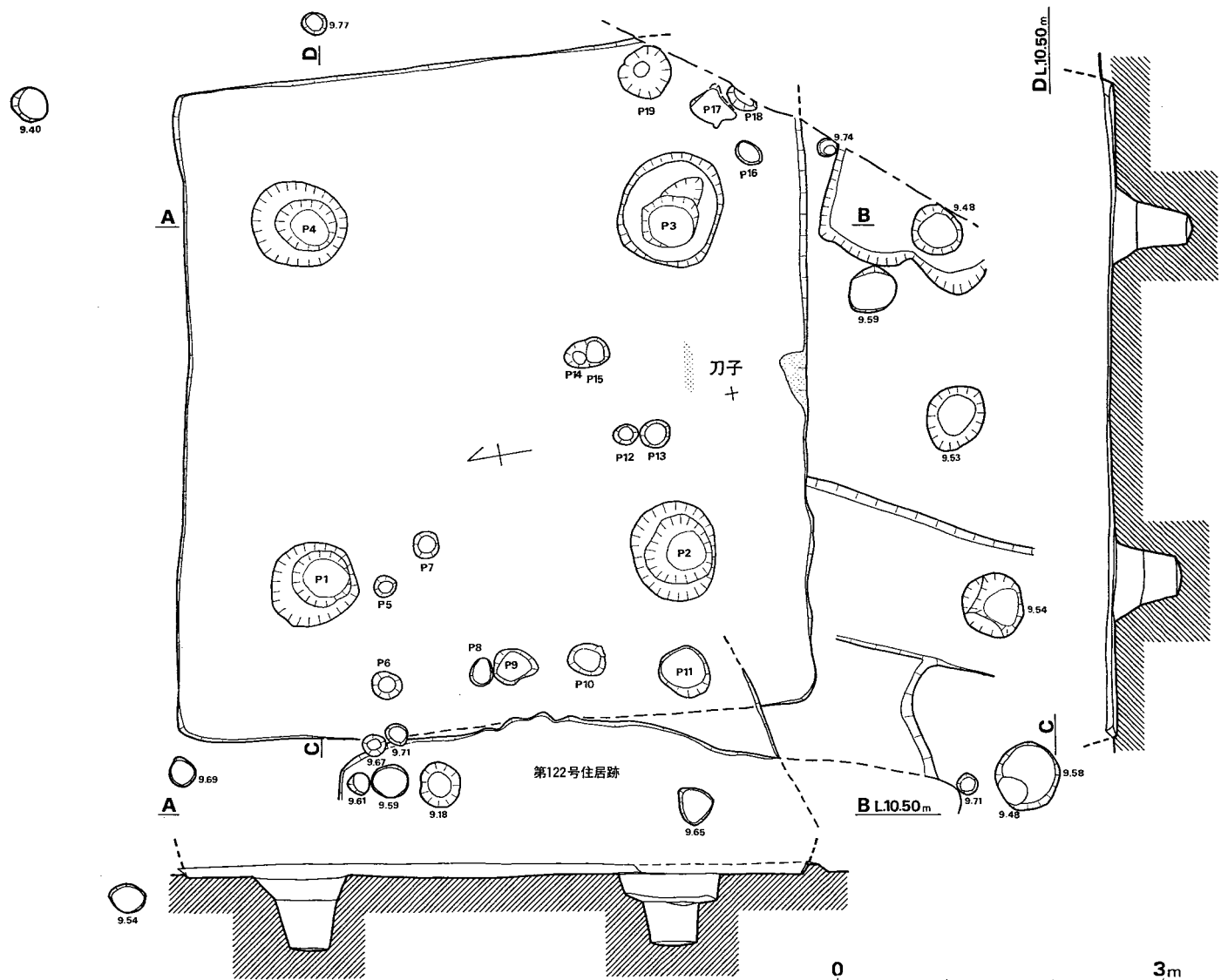


Fig. 214 B区第118号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)

P 1(-62.0)・P 2(-68.0)・P 3(-68.0)・P 4(-73.0)・P 5(-10.5)
 P 6(-17.5)・P 7(-12.5)・P 8(- 9.0)・P 9(-13.5)・P 10(- 9.5)
 P 11(-22.0)・P 12(-18.0)・P 13(-26.0)・P 14(-34.0)・P 15(-19.5)
 P 16(-15.0)・P 17(- 9.0)・P 18(-16.0)・P 19(-31.0)
 P1~P2 3.29m・P2~P3 3.0m・P3~P4 3.3m・P4~P1 3.24m

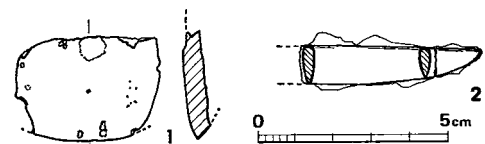


Fig. 215 B区第118号住居跡出土遺物実測図 (縮尺1/2)

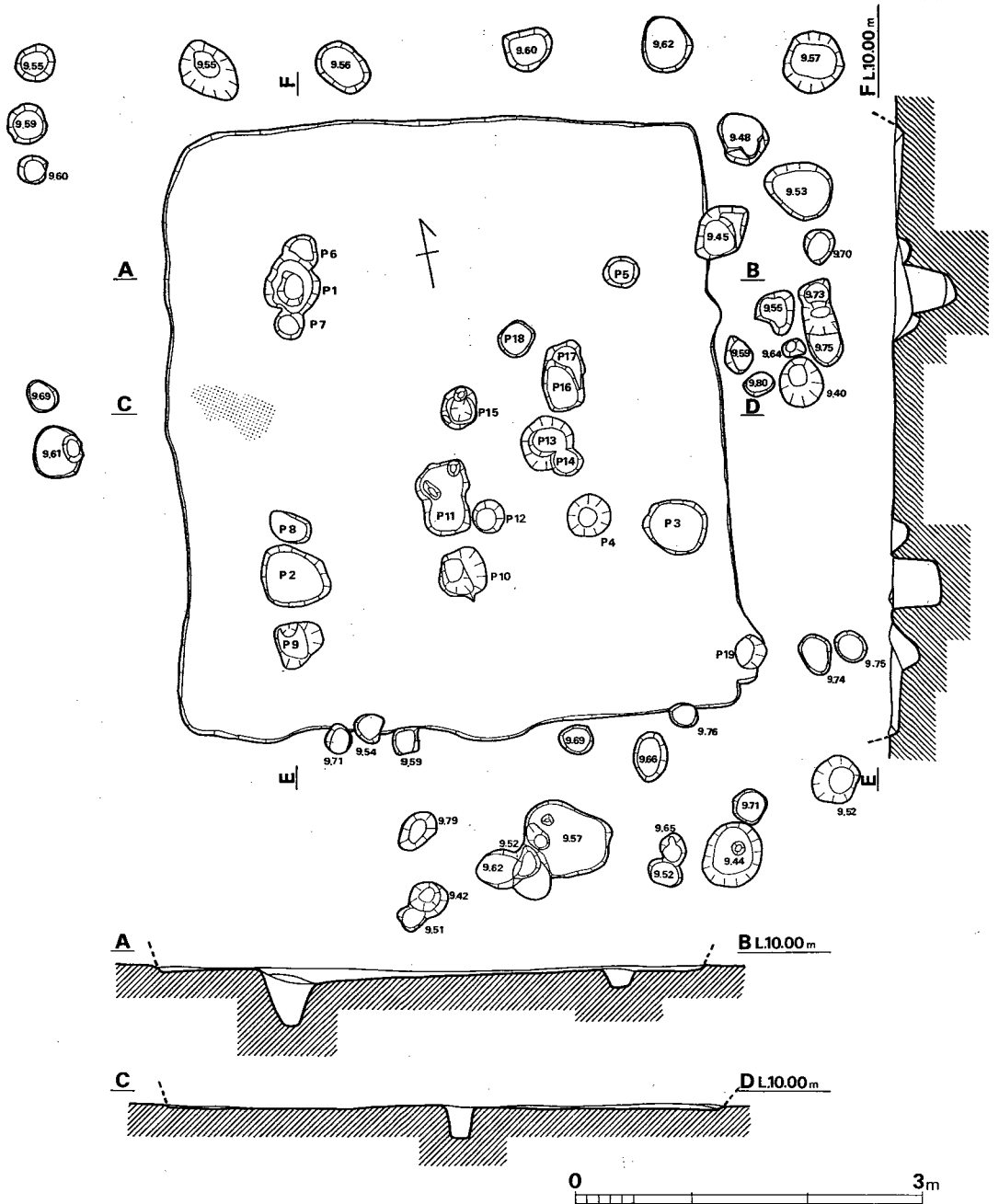


Fig. 216 B区第119号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ(cm) P 1(-48.0)・P 2(-37.0)・P 3(-32.0)・P 4(-38.5)・P 5(-13.0)
 P 6(-10.0)・P 7(-21.0)・P 8(-12.0)・P 9(-25.0)・P 10(-37.0)・P 11(-27.0)・P 12(-15.0)
 P 13(-30.0)・P 14(-35.0)・P 15(-26.0)・P 16(-26.0)・P 17(-17.0) P 1~P 2 2.55m
 P 2~P 3 3.33m・P 3~P 5 2.26m・P 5~P 1 2.81m・P 2~P 4 2.60m・P 4~P 5 2.14m

遺物

土師器片 108 (甑 1・把手 1 を含む)、須恵器片 5 (杯 2 を含む)、緑釉陶器片 1 が出土した。いずれも小片である。

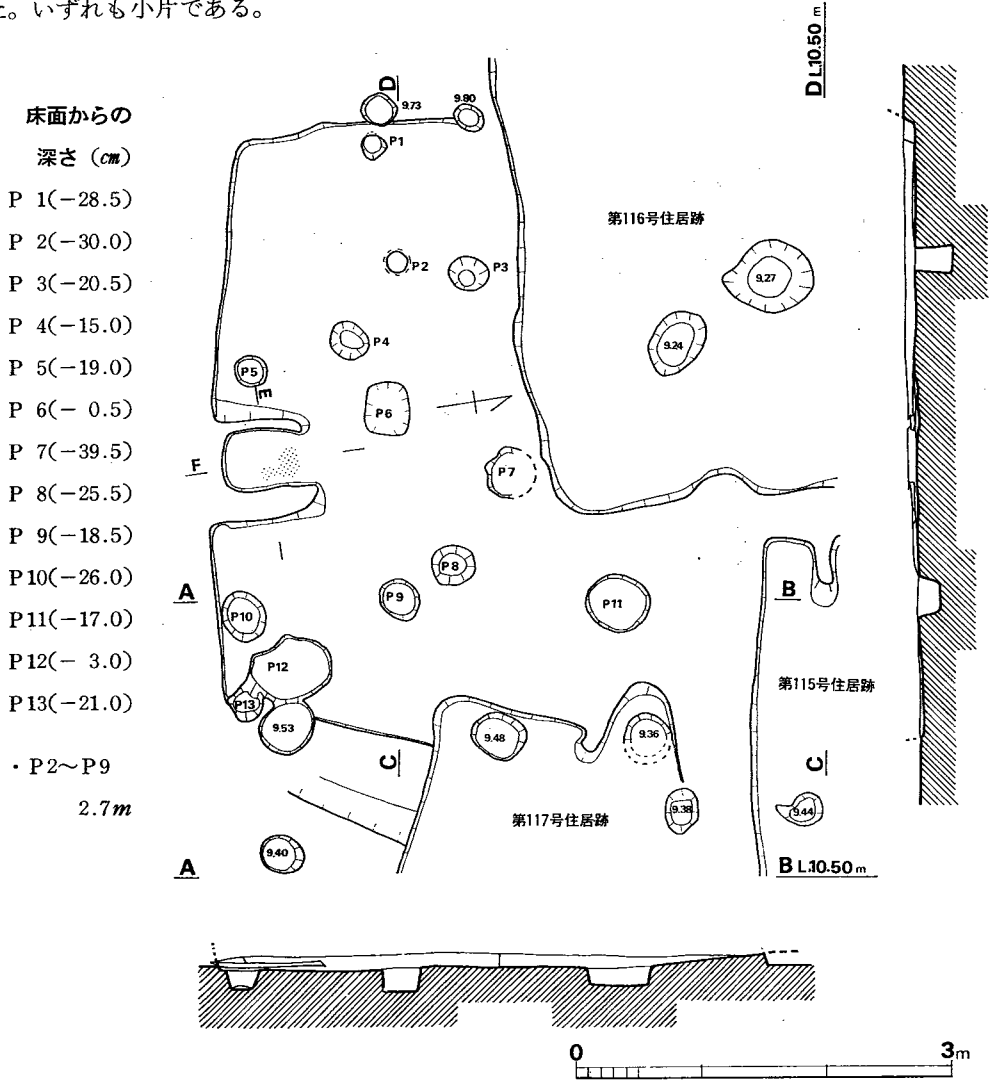


Fig. 217 B区第120号住居跡実測図 (縮尺1/60)

土層

- 1 焼土・赤褐色レンガ質土
- 2 暗茶褐色粘質土

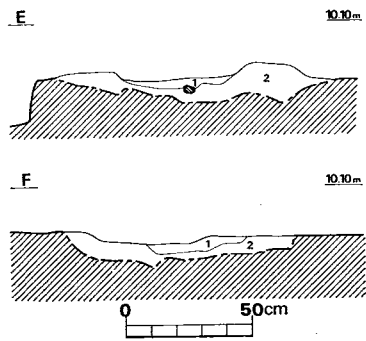


Fig. 218 B区第120号住居跡カメラ土層断面図 (縮尺1/30)

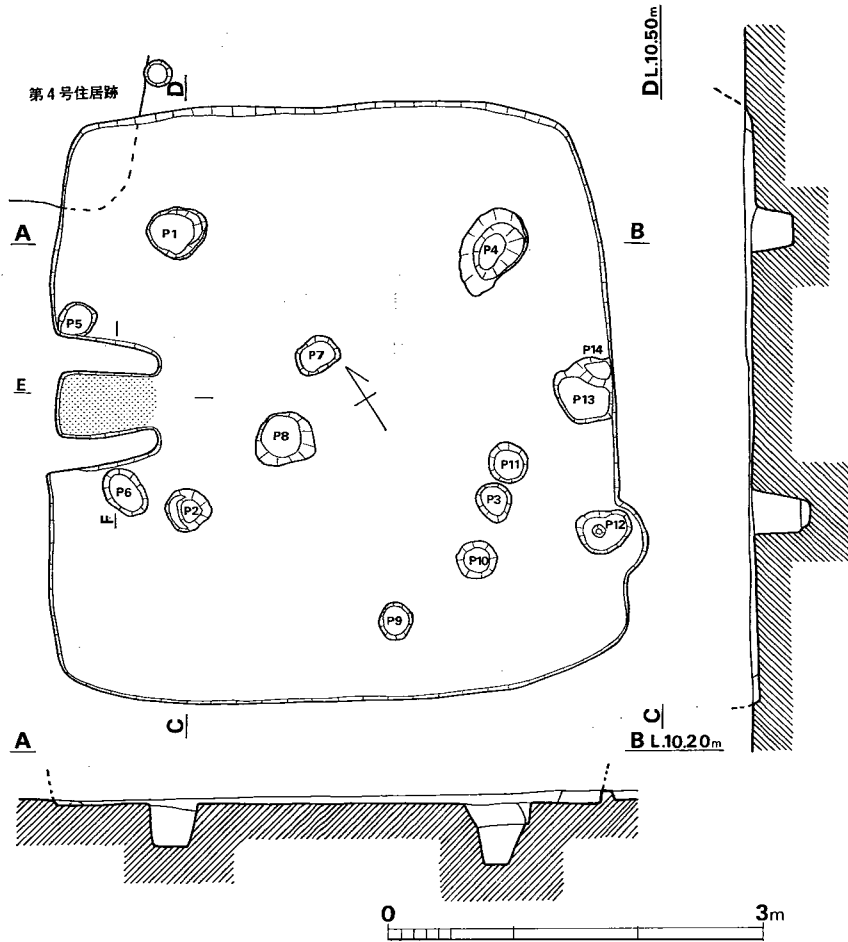


Fig. 219 B区第121号住居跡実測図(縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)

P 1(-35.0)・P 2(-46.0)	
P 3(-33.0)・P 4(-48.0)	
P 5(-10.0)・P 6(- 7.0)	
P 7(-12.0)・P 8(-29.0)	
P 9(-16.0)・P10(-80.0)	
P11(-17.0)・P12(-19.0)	
P13(-24.0)・P14(- 8.0)	
P1~P2	2.25m
P2~P3	2.40m
P3~P4	2.00m
P4~P1	2.53m

土層

- 1 焼土・赤褐色レンガ質土
- 2 暗茶褐色粘質土

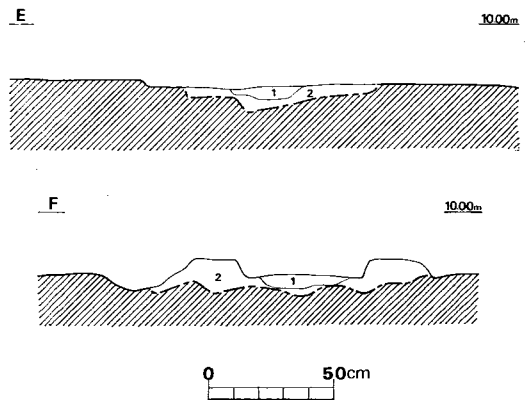


Fig. 220 B区第121号住居跡カマド土層断面図(縮尺1/30)

B区第121号住居跡

(Fig. 219・220、PL. 59)

N 239・W10に位置する。主軸を北東、南西方向にもつ方形プランの住居跡で、北側コーナー部で第4号住居跡を切っている。長軸4.76×短軸4.44m

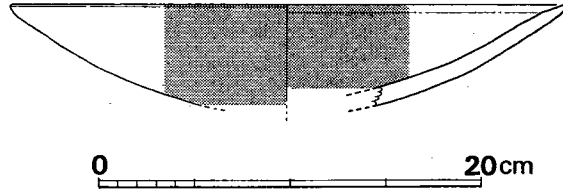


Fig. 221 B区第121号住居跡出土土器実測図(縮尺1/4)

で、床面積21.13㎡をはかり、南東部がややふくらんでいる。北西壁中央部よりやや南側寄りにカマドをもつ。カマドは幅63cm、奥行80cmをはかり、内部に80×50cmの範囲で焼土がのこっている。住居跡内では14個のピットが検出されたが、支柱穴と考えられるのはP1～P4であり、直径30～55cm、深さ30～48cmをはかる。南東壁ほぼ中央部に壁にそってP13・P14があり、50×50cmの不整形をなし、やや変形であるが、貯蔵穴とも考えられる。またカマドの両側にP5・P6があり、カマドに付属する柱穴と考えられる。壁の高さは4～10cmである。

遺物 (Fig. 221)

土師器片93、須恵器片4が出土した。このうち図示できるのは Fig. 221 の高杯のみである。この高杯は内外面丹塗りで、精製品である。

ほかにカマド内より鉄滓(10.5g)が出土した。

B区第122号住居跡 (Fig. 222、PL. 59)

N 240・W5に位置する。主軸を東西方向よりやや北側へふる方形プランの住居跡で、北東コーナーで第118号住居跡を切り、南東部付近で第123号住居跡に切られていたが、同住居跡より床面が深かったためプランは残っていた。長軸5.35×短軸5.3mで、南東部が大きくふくらんでいる。床面積は28.89㎡をはかる。ピットは24個検出されたが、支柱穴と考えられるのはP1～P4(径30～50cm・深さ12～61.5cm)で、P3を除き全体にやや浅い。焼土はP1～P4間と北西壁中央部との中間に、東西に長く65×40cmの範囲で、同じく北壁北東コーナー寄りに径5cmにわたり認められた。壁の高さは4～10cmと残りはよくない。

遺物

土師器片109(丹塗高杯を含む)、須恵器片1が出土した。すべて小片である。

B区第123号住居跡 (Fig. ①、PL. 59)

N 235・W4に位置する。住居跡が浅くつくられていたため削られており、全体の状況は不明であるが、第118・122号住居跡を切っていたと思われる。南辺のごく一部しか残っていない。壁の高さは5cmと残りはよくない。

遺物

土師器片7、鉄滓(5.0g)が出土した。

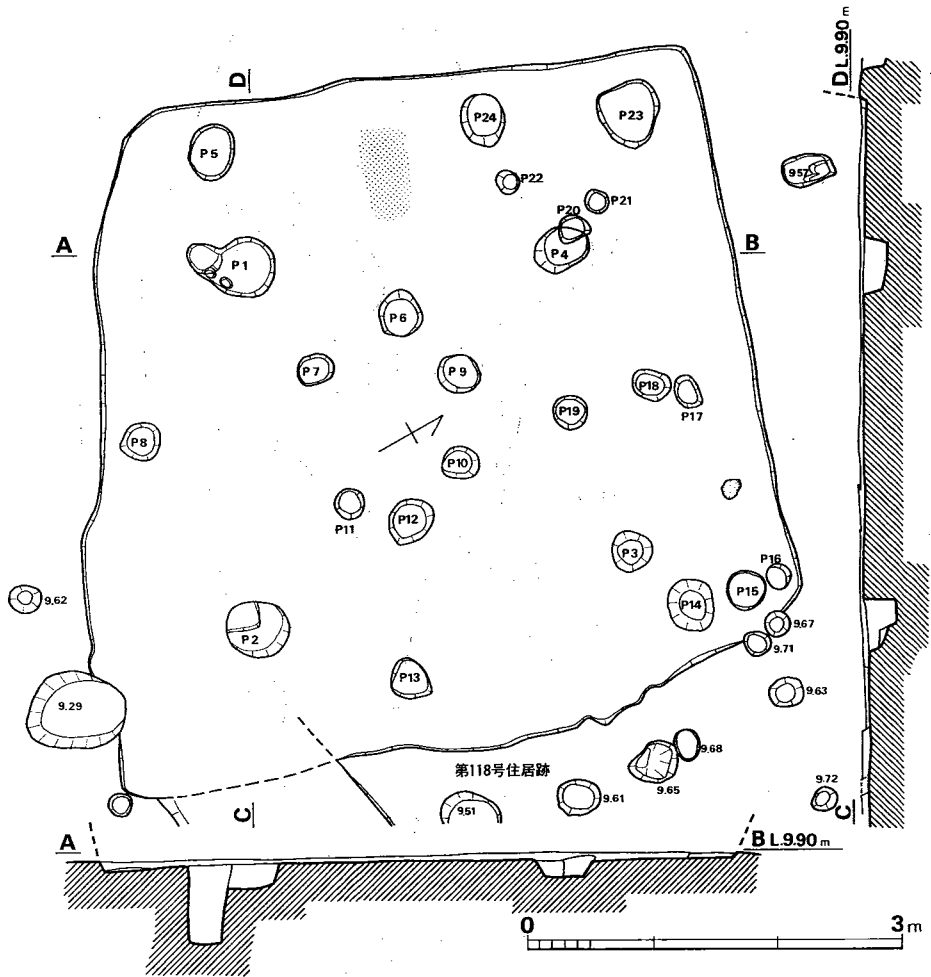


Fig. 222 B区第122号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)

P 1(-15.0)・P 2(-23.0)・P 3(-61.5)・P 4(-12.0)・P 5(-17.0)・P 6(-22.0)
 P 7(-20.0)・P 8(-17.0)・P 9(-22.0)・P 10(-14.0)・P 11(-17.0)・P 12(-40.0)
 P 13(-17.0)・P 14(-62.5)・P 15(-20.0)・P 16(-15.0)・P 17(-13.5)・P 18(-12.0)
 P 19(-37.0)・P 20(-12.0)・P 21(-13.0)・P 22(-14.0)・P 23(-15.5)・P 24(-30.0)

P 1~P 2 2.92m・P 2~P 3 3.05m・P 3~P 4 2.48m・P 4~P 1 2.55m

B区第124号住居跡

(Fig. 223, PL. 59)

N 246・E 6に位置する。

第115・117号住居跡と重複し、両住居跡に切られている。東半部は現在の溝に切られ、詳細は不明である。住居跡内からは12個のピットが検出されているが、本住居跡に伴うか否かも不明である。

遺物

弥生土器片4、土師器片42、須恵器片9（蓋1・甕体部片6を含む）が出土したが、すべて小片である。

床面からの深さ (cm)

P 1(-9.0)・P 2(-39.0)

P 3(-40.0)・P 4(-19.5)

P 5(-11.5)・P 6(-8.0)

P 7(-28.0)・P 8(-37.0)

P 9(-12.0)・P 10(-47.0)

P 11(-28.0)・P 12(-20.0)

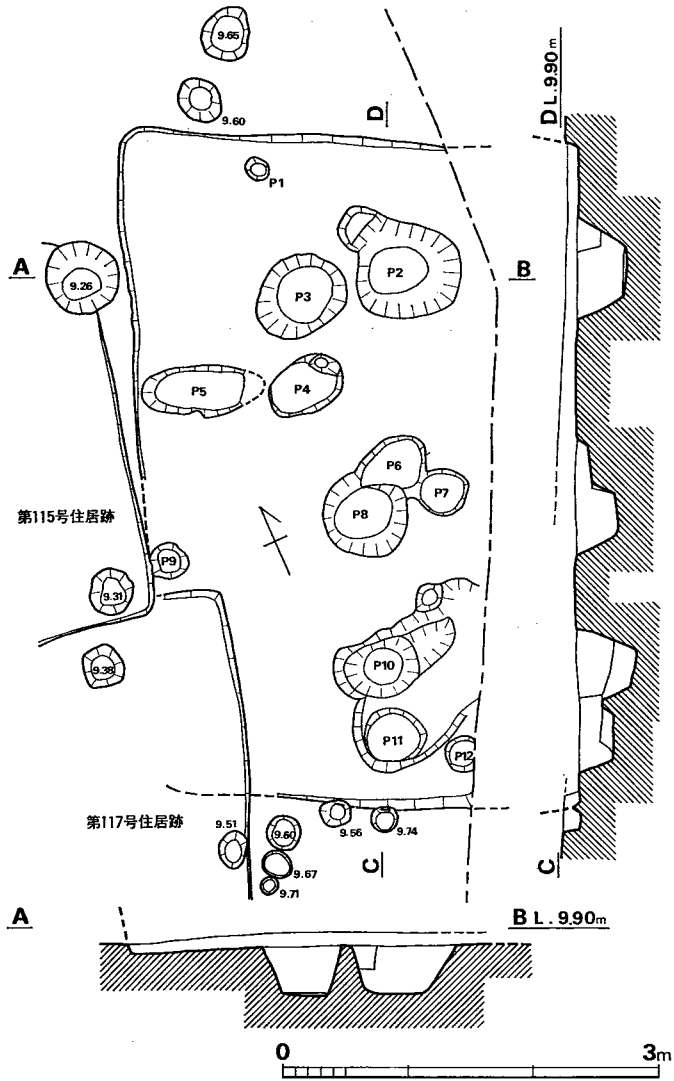


Fig. 223 B区第124号住居跡実測図 (縮尺1/60)

B区第125号竪穴 (Fig. 224, PL. 58)

N256・E5に位置する。第108・109・110号住居跡と重複しており、第108・109号住居跡に切られている。第110号住居跡との関係は直接的には不明であるが、第108号住居跡を間にはさむことにより、第110号住居跡の方が新しいことが確認できる。すなわち、これら4者の関係を整理すると、古い方から順に125→108→110→109と新しくなる。本遺構は、第108号住居跡の各辺を検出し、床面を追求したときに、その東辺・南辺の一部、北辺の一部を確認したものである。形状は台形に近く、住居跡か否かについては不明である。

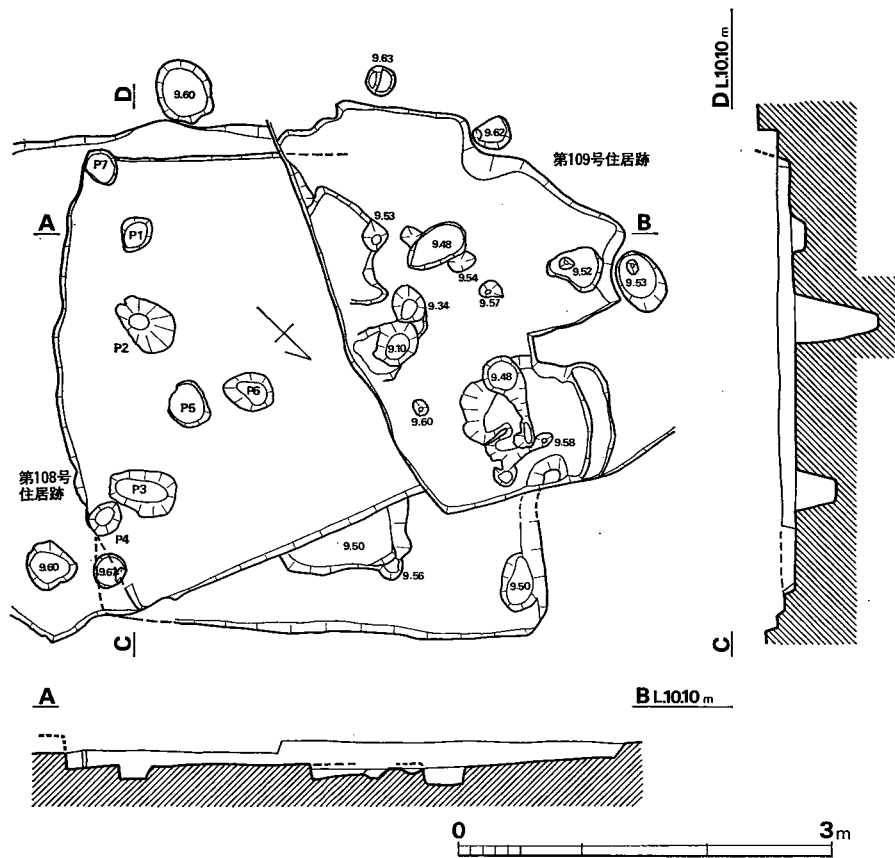


Fig. 224 B区第125号竖穴実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)

P 1(-10.0)・P 2(-68.0)・P 3(-32.0)・P 4(-31.0)

P 5(-20.0)・P 6(-94.0)・P 7(-14.0)

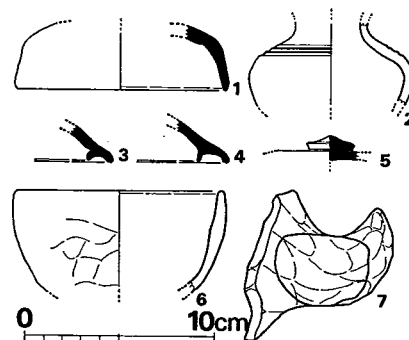


Fig. 225 B区第125号竖穴出土遺物実測図 (I) (縮尺1/4)

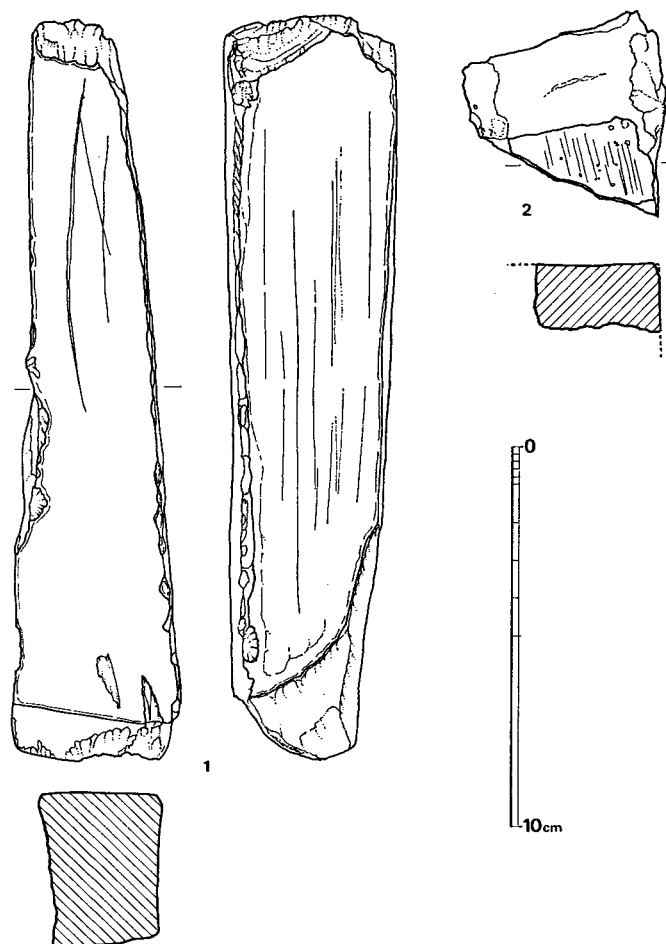


Fig. 226 B区第125号竖穴出土遺物実測図 (II) (縮尺1/2)

遺物 (Fig. 225・226, PL. 61)

縄文土器・土師器・須恵器・鉄滓・轆羽口・砥石が出土した。縄文土器は小片2である。

須恵器 (Fig. 225—1・3~5) 1、3~5はいずれも蓋である。1の天井部外面はヘラ削りで、そのほかはヨコナデである。

土師器 (Fig 225—2・6・7) 2は小形の壺と思われる。肩部に凹線3本をもつ。6の腕は底部を欠く。復原口径11.0cm。7は甌の把手であろう。

以上のほかに、須恵器片16(そのうち蓋6)、土師器片591(甕2・杯1)が出土した。

鉄滓 2個出土した。重さ8.5g、2.5gである。

砥石 (Fig. 226, PL. 61) 1は砂岩製で、2面を使用している。長さ約19.5cm、2は片岩質の砥石破片で、2面が残っている。

Tab. 64 B区第125号竪穴出土土器一覧()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	S 蓋	天井部欠	(11.0)	(3.7)		細砂を含み、焼成良	青灰色	
2	H 壺	体部片				〃	黄褐色	
3	S 蓋	口縁部				〃	灰色	
4	S 蓋	〃				〃	黄褐色	
5	S 蓋	ツマミ				細砂を含み、焼成不良	白灰色	
6	H 腕	底部欠	(10.9)			砂粒を含み、焼成良	黄褐色	
7		把手				〃	赤褐色	

B区第126号竪穴 (Fig. ①)

調査期限の最終日の前日に、第115号住居跡——N247・E3付近——の床面下に確認し、翌日の最終日に床面まで掘り下げた。しかし、時間的制約があったため、竪穴のプランを確認するには至らず、したがって実測図を作成することもできなかった。

また、出土遺物も、確実に本遺構に伴うものは見あたらないため、ここでは実測図はすべて省略することとした。

C区第2号住居跡 (Fig. ①)

予備調査の際に N105・W8 付近(第1号住居跡の南西約1m)で竪穴の北東隅を検出したが、全面調査では確認できなかった。もともと残存が悪く、削平されたことも考えられる。

遺物は、予備調査の際には床面まで掘り下げておらず、確実に竪穴に伴うものは検出していないが、竪穴内の上層から土師器片(甕)が出土した。

遺物 (Fig. 227)

弥生土器片4、土師器片39、須恵器片2がそれぞれ出土した。

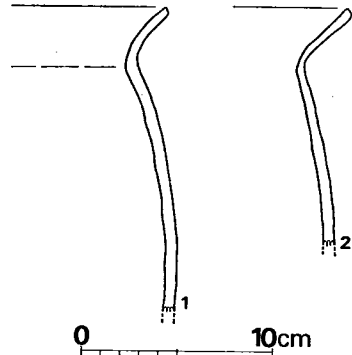


Fig. 227 C区第2号住居跡出土土器実測図(縮尺1/4)

Fig. 227—1は体部内面が縦方向のハケ目、口縁部内面は横方向のハケ目、口縁部外面は斜方向のハケ目ののちヨコナデ、体部外面は斜方向のハケ目をそれぞれ施す。2の甕は1に比べて頸部の屈曲が強く、口縁部の横ナデ以外はハケ目調整である。

C区第3号住居跡 (Fig. 228、PL. 68)

N247・W14付近に位置する。床面までは浅く、残存状態は悪い。竪穴の南東隅と東壁3.3m

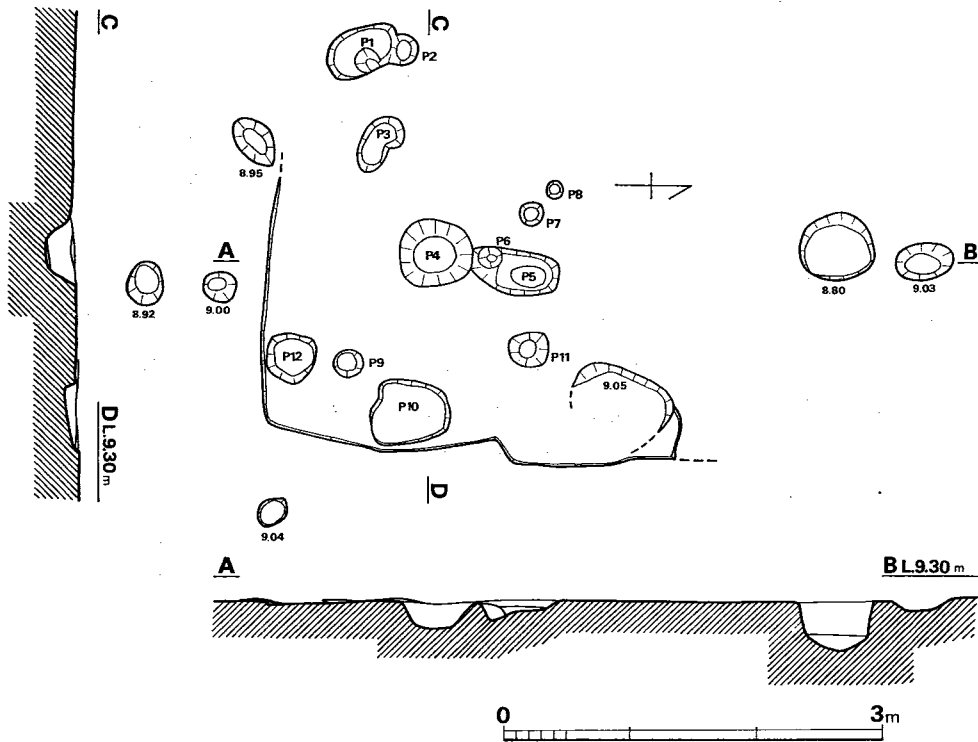


Fig. 228 C区第3号住居跡実測図(縮尺1/60)

分、南壁の一部を検出したが各辺の長さ・規模・支柱穴などは不明である。焼土・灰等は検出されなかった。

遺物 (Fig. 229, Tab. 65)

須恵器 (Fig. 229—2) 2 の甕は口縁端外面に凹みをもち、口縁部内面はヨコナデ、以下は同心円のタタキを施し、外面はヨコナデである。

土師器 (Fig. 229—1) 1 の杯は底部を欠失している。外面には、赤黄色の薄い膜がある。

以上を含めて須恵器片5、土師器片27が出土した。須恵器体部片の一つは、内面同心円、外面格子目のタタキを施し、赤褐色～暗紫色を呈する。

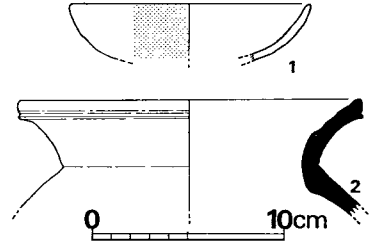


Fig. 229 C区第3号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

Tab. 65 C区第3号住居跡出土土器一覧 () は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	H 杯	底部欠	(12.5)		口縁部	胎土精良、焼成良	黄褐色	化粧土
2	S 甕	口縁部	(17.7)			細砂を含み、焼成不良	灰色	

C区第4号住居跡 (Fig. ①)

予備調査の際に、第3号住居跡の南方2mほどのところで輪郭を認めたが、全面調査では検出されなかった。削平されたことも考えられる。遺物は土師器 (杯・甕) 須恵器 (杯身・蓋・高杯・甕) などが竪穴内の上層で出土した。

遺物 (Fig. 230)

須恵器 (Fig. 230—1~5) 1の杯は底部近くに凹線をもち、凹線以下はヘラ削り、その他はヨコナデである。2は体部の丸味が強い杯で底部を欠く。3・4は蓋口縁部と思われ、いずれもかえりが突出する。5は有高台杯の底部片で内面はナデ、外面はヨコナデを施している。

以上を含めて、土師器62片 (そのうち甕口縁1・杯口縁1)、須恵器10片 (そのうち甕体部片3・杯口縁1・高台杯底部片1・蓋口縁片4) が出土した。

C区第3号住居跡

床面からの深さ (cm)

- P1(-12.0)・P2(-17.0)・P3(-18.0)・
- P4(-23.5)・P5(-11.5)・P6(-16.0)・
- P7(-4.5)・P8(-12.0)・P9(-12.5)・
- P10(-6.5)・P11(-15.5)・P12(-8.5)

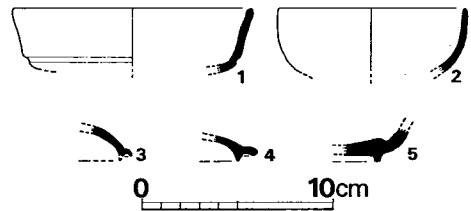


Fig. 230 C区第4号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

Tab. 66 C区第4号住居跡出土土器一覧()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	S杯	底部次	12.4		口縁部	細砂を含み、焼成良	青灰色	高台杯か?
2	S杯	底部欠	9.7		口縁部	細砂を含み、焼成良	青灰色	
3	S蓋	口縁部				細砂を含み、焼成良	暗紫色	
4	S蓋	口縁部				細砂を含み、焼成良	灰色	
5	S高台杯	底部				細砂を含み、焼成良	灰色	

C区第5号住居跡 (Fig. ①)

予備調査の際に、第4号住居跡の、さらに南方4mほどのところで輪郭を認めた。しかし、全面調査では検出できず、削平されたことも考えられる。遺物は堅穴内上層で土師器片(甕・把手片)が出土した。

遺物 (Fig. 231)

Fig. 231—1は甕の破片で、内面は縦方向のヘラ削り、口縁部は内外面ともヨコナデ、外面はハケ目調整である。ハケ目は1単位6~7本で、幅1.5cm前後である。復原口径20.9cm。2の把手は一部にハケ目を残す。甕の把手と思われる。

以上を含めて、土師器62片(そのうち、甕1・把手1・丹塗り破片1がある)と須恵器片1が出土した。

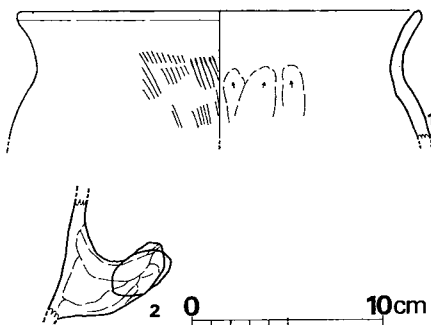


Fig. 231 C区第5号住居跡出土土器実測図(縮尺1/4)

Tab. 67 C区第5号住居跡出土土器一覧()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	H甕	口縁部	(20.9)			砂粒を含み、焼成良	黄褐色	
2		把手				砂粒を含み、焼成良	黄褐色	1と同一個体か?

C区第6号住居跡 (Fig. 232、PL. 92)

堅穴の東半部は削平され、北西・南西隅と西壁、および北・南壁の一部を検出した。南西部分は方形ピットと重複し、これはさらに第48号住居跡と重複するが、それぞれの前後関係は第48号住居跡→方形ピット→第6号住居跡の順に新しくなる。西壁の長さは3.5mあり、長方形ないし方形プランと考えられる。カマドは西壁中央のやや北寄りにあり、堅穴外に60cmほど張

り出す。その内面はよく焼けて赤変しているが、構造は不明である。主柱穴はP1・P2・P3・P4（またはP7）の4本主柱と考えられる。

遺物は皆無である。

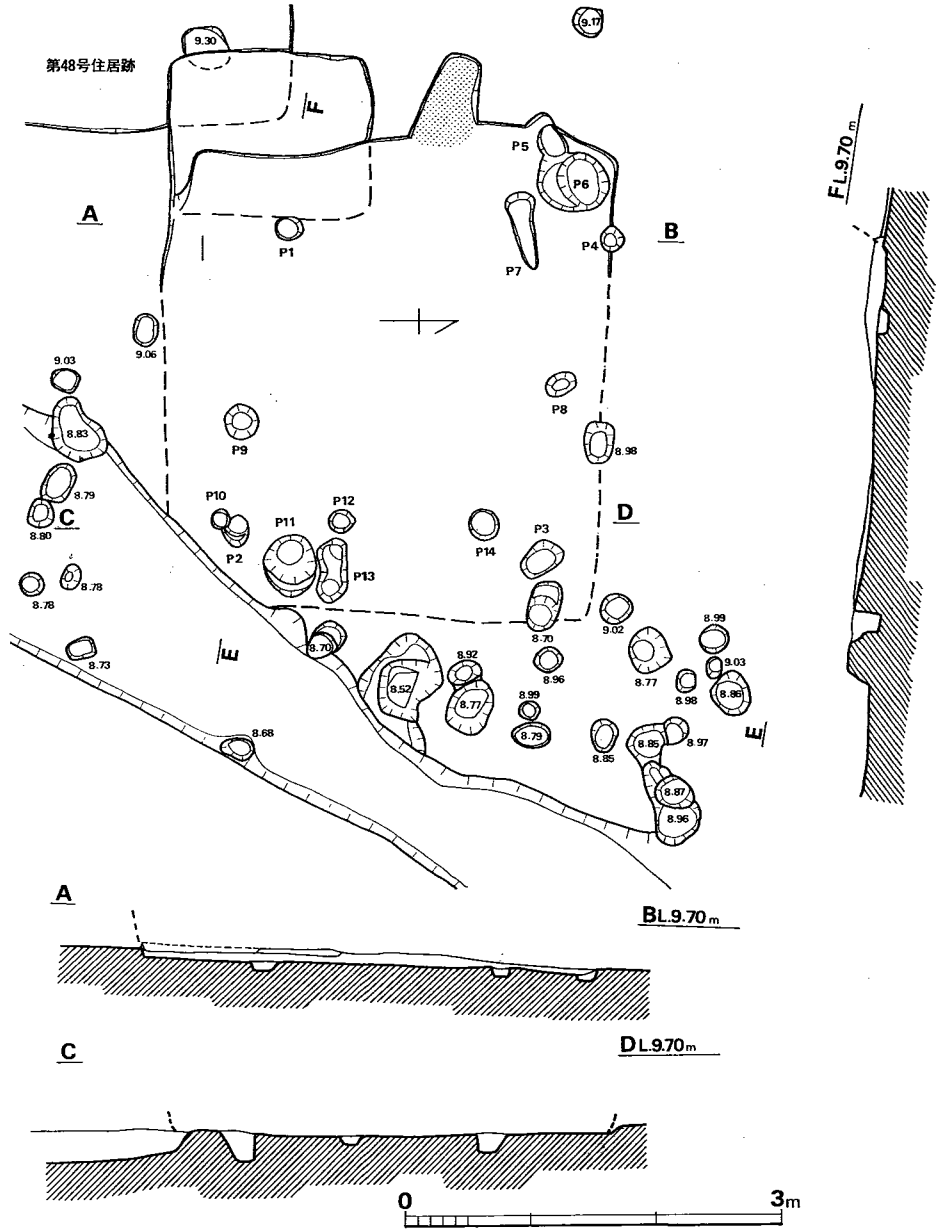


Fig. 232 C区第6号住居跡実測図（縮尺1/60）

床面からの深さ (cm)

P1(-7.0)・P2(-20.4)・P3(-25.5)・P4(-28.0)・P5(-5.0)・P6(-21.0)・P7(-5.0)・P8(-8.5)・P9(-29.0)・P10(-12.0)・P11(-46.0)・P12(-6.5)・P13(-19.0)・P14(-13.5)

C区第7号住居跡 (Fig. ①)

予備調査では、N97・W19の位置に竪穴の北隅を認めたが、全面調査では検出されなかった。遺物は出土しておらず、詳細は不明である。

C区第9号住居跡 (Fig. ①)

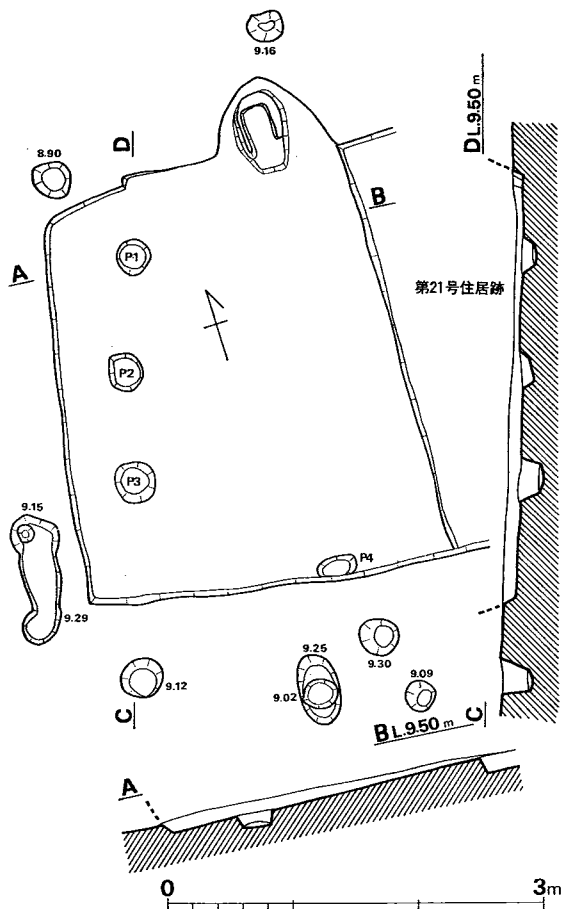
予備調査ではS1・W25の位置で南東隅を認めたが、全面調査では検出されなかった。遺物は出土しておらず、詳細は不明である。

C区第13号住居跡 (Fig. ①)

予備調査では、第25号住居跡の南東方向2mほどで、竪穴の北隅を認めたが、全面調査では検出できなかった。詳細は不明である。

C区第14号住居跡 (Fig. 233, PL. 72)

竪穴の東半部は第21号住居跡と重複するが、調査時に同一の竪穴と誤認したために前後関係は不明である。西壁の長さは3.5mで、他の各辺の長さは明らかでないが、北壁にカマドがあり、これを中心として復原すると、北壁は長さ3.6mほどとなり、方形プランをなすものと推定される。カマドは60cmほど竪穴から張り出し、粘土で築いたと思われる壁の基部が床面から高さ5~9cm残り、中央は凹む。支柱穴はP1・P2・P3を含めた6本柱か、そのうちP2を除く4本柱と推定され、主軸上にはカマドと対称の位置にP4がある。



床面からの深さ (cm)

P1(-10.0)・P2(-10.0)・P3(-20.0)・

P4(-13.5)

P1~P2 0.9m・P2~P3 0.85m

Fig. 233 C区第14号住居跡実測図
(縮尺1/60)

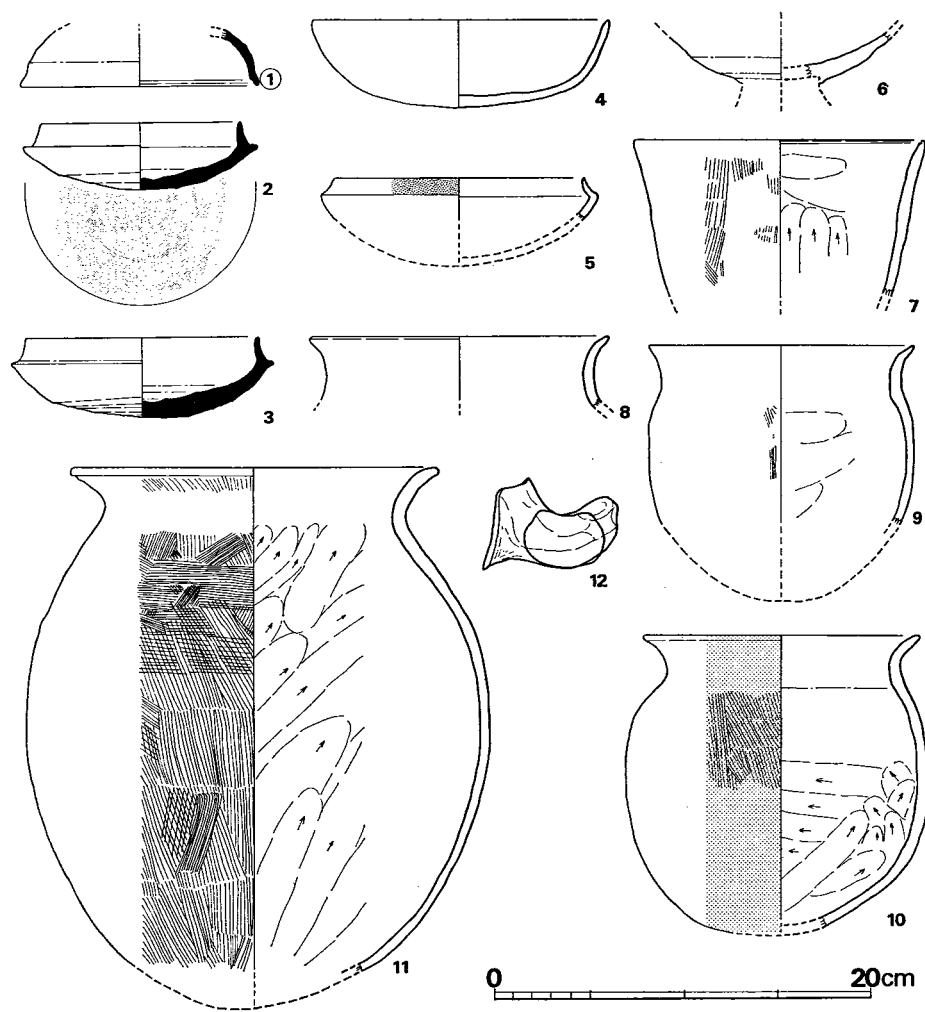


Fig. 235 C区第15号住居跡出土遺物実測図 (I) (縮尺1/4)

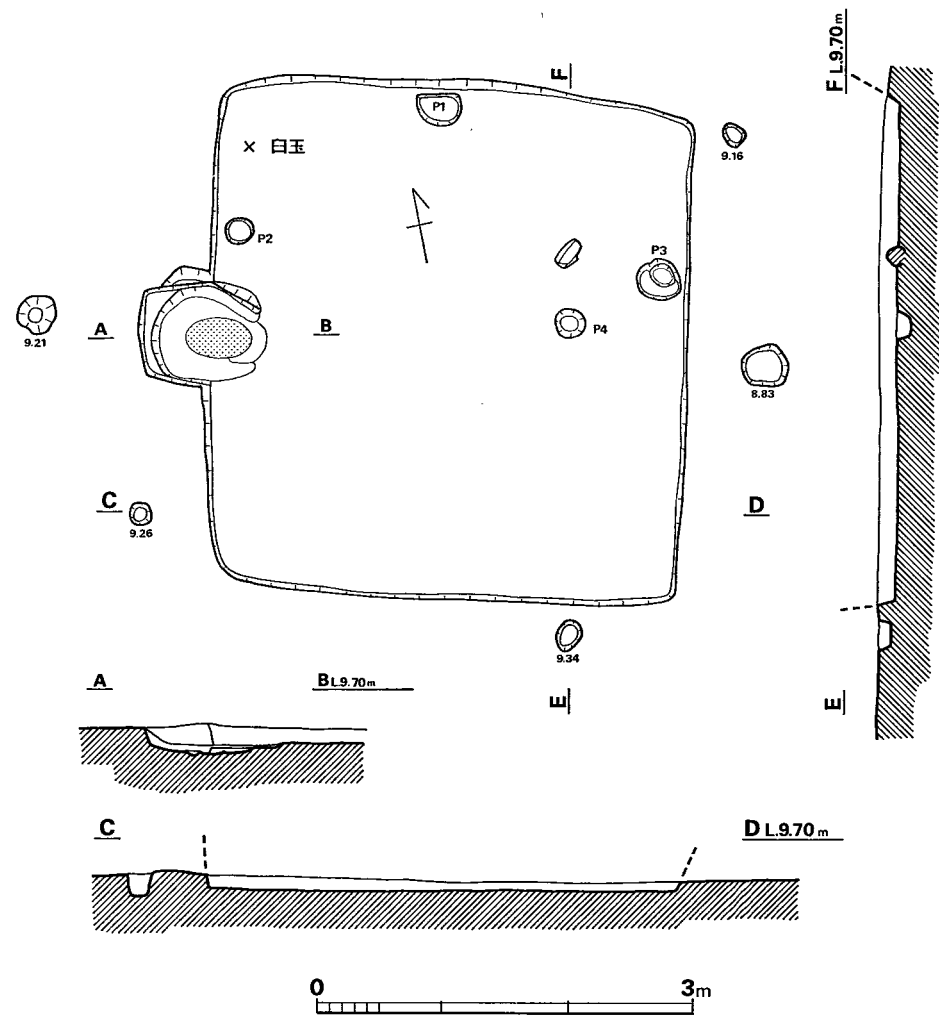
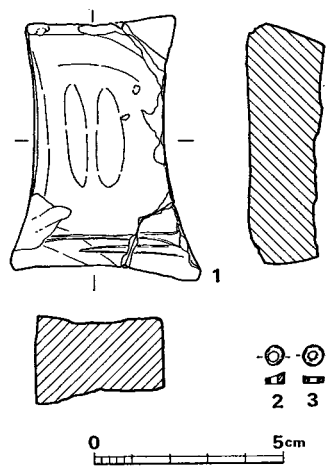


Fig. 234 C区第15号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)
 P1(-4.0)・P2(-5.0)・P3(-7.0)・P4(-10.0)
 P1~P2 1.9m・P1~P3 2.25m

Fig. 236
 C区第15号住居跡出土
 遺物実測図 (II) (縮尺
 1/2)



遺物

図示できる遺物は皆無で、縄文土器片7、弥生土器片6、土師器片12が出土した。他に鉄滓1(7.0g)がある。

C区第15号住居跡 (Fig. 234, PL.74)

弥生時代の第3号溝が埋没した後に営まれたものである。各辺の長さは北壁3.8m、南壁3.7m、東壁3.8m、西壁3.9mで、方形プランを有する。カマドは西壁中央にあり、竪穴から55cmほど張り出している。内部はよく焼けて赤変し、その北脇には、床面から高さ5~9cmほど粘土で築いたと思われる壁の一部が残存する。支柱穴は不明であるが、P4の北側床面には25×15cmの石が検出された。

遺物 (Fig. 235・236, Tab. 68, PL. 74)

須恵器・土師器・砥石・白玉を出土した。

須恵器 (Fig. 235—1~3) 1は床面出土で、天井部を欠く。口縁部がわずかに屈曲し、内面に凹みをもつ。2・3の杯身のうち、2の外底面には「|||」のヘラ記号がある。2は外底面のヘラ削り以外はヨコナデ、3は内面底部がナデ、外底面がヘラ削り、他はヨコナデである。

土師器 (Fig. 235—4~12) 4は碗と呼ぶべきか。口縁部のヨコナデ以外は磨いている。5は立ち上りをもつ杯で、外面は光沢ある黒色を呈する。6は高杯の杯部片で、脚部との接合面を一部残している。7は小形の甗で、口縁内面は横方向の削り、以下は上へ向う削り、外面は磨滅しているが横方向のハケ目である。口唇内面に一部沈線を有する。ヨコナデによってできた凹みであろうか。8~10は小形の甗で、10は底部を欠失しているが、ほぼ全形がわかる。体部は丸味をもち、最大径は中位にある。内面はヘラ削り、外面はハケ目である。12の把手は甗のものであろう。

以上を含めて土師器は、杯3・甗6・甗3・壺?1・高杯1および接合しない甗破片1個体分があった。

砥石 (Fig. 236—1) 最大長7.0cm、最大幅5.1cm厚さ1.5~2.4cm、で凝灰岩製である。4側面は使用のため、内側へくぼんでいる。5面の使用面をもち、最大の使用面は、中央にやや凹んだところを2カ所もつ。キメは細かい。

白玉 (Fig. 236—2・3) 北西隈より出土した滑石製の白玉で、2の径は5mm、孔径2.5mm、厚さ1.5~3mmを計る。3は径5.5mm、孔径2mm、厚さ2mmである。

Tab. 68 C区第15号住居跡出土土器一覧()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	S 蓋	天井部欠	(12.6)		口縁部	胎土良、堅緻	青灰色	
2	S 杯	略完	10.7	3.6	受け部12.5	細砂を含み、堅緻	青灰色	外底へラ記号
3	S 杯	完	12.5	4.3	受け部14.1	細砂を含み、堅緻	青灰色	
4	H 杯	½	(15.7)	4.7	口縁部	胎土良、焼成良	茶褐色	
5	H 杯	底部欠	(13.3)		外稜14.2	胎土良、焼成良	明黄褐色	
6	H高杯	杯部				砂粒を含み、焼成良、硬質	淡茶黄色	
7	H 甑	下半欠	(15.3)			焼成良、粒粒及び黒雲母を含む	明茶色	
8	H小形甕	口縁部	(15.8)			砂粒を含み、焼成良	茶褐色	
9	H小形甕	底部欠	(14.2)	14.0前後	口径=体部中位径	砂粒を含み、焼成良	赤褐色	二次加熱
10	H小形甕	底部欠	14.7	(16.0)	体部中位やや上16.4	砂粒を含み、焼成良	茶褐色	化粧上
11	H 甕	底部欠	19.4	(29.0)	体部中位25.0	砂粒を含み、焼成良	茶褐色	外面スス付着
12		把手				砂粒を含み、焼成良	黄褐色	

C区第16号住居跡 (Fig. 237, PL. 72・75)

各辺の長さは北壁3.1m、南壁3.2m、東壁2.8m、西壁3.5mで、西側に広がる台形のプランを有する。カマドは北壁中央の東寄りにあり、16cmほど竪穴外に張り出している。中央はよく焼けているがその周囲は、床面から高さ9~20cmの粘土で築いたと思われる壁の一部が残存する。支柱穴は不明であるが、東壁には88×110cmほどの長方形に張り出すピット(P7)があり、貯蔵穴様のものと思われる。主軸上にはカマドと対称の位置にP6がある。

遺物 (Fig. 238, PL. 72)

須恵器・土師器・鉄滓・砥石片1、カマド内より土玉2を出土した。

須恵器 (Fig. 238—1~6) 1・2は蓋でいずれもツマミがなく、かえりをもつ。1は床面出土で、天井部外面をへら削りし、他はヨコナデを施す。2は天井部内面をナデている。2のかえりは受け部より突出する。3は黄褐色を呈し、一見土師器のようであるが、胎土、焼成、調整からみて須恵器とした。4は高台を欠失した痕跡はない。5は床面出土の高台杯で、口縁部に歪みをもつ。体部中位から高台接合部までへら削りで、ほかはヨコナデである。6は高杯の脚部で杯部が少し残っている。脚端部と接合部のヨコナデ以外は、へら削りで、脚内面にはシボリの痕跡がある。

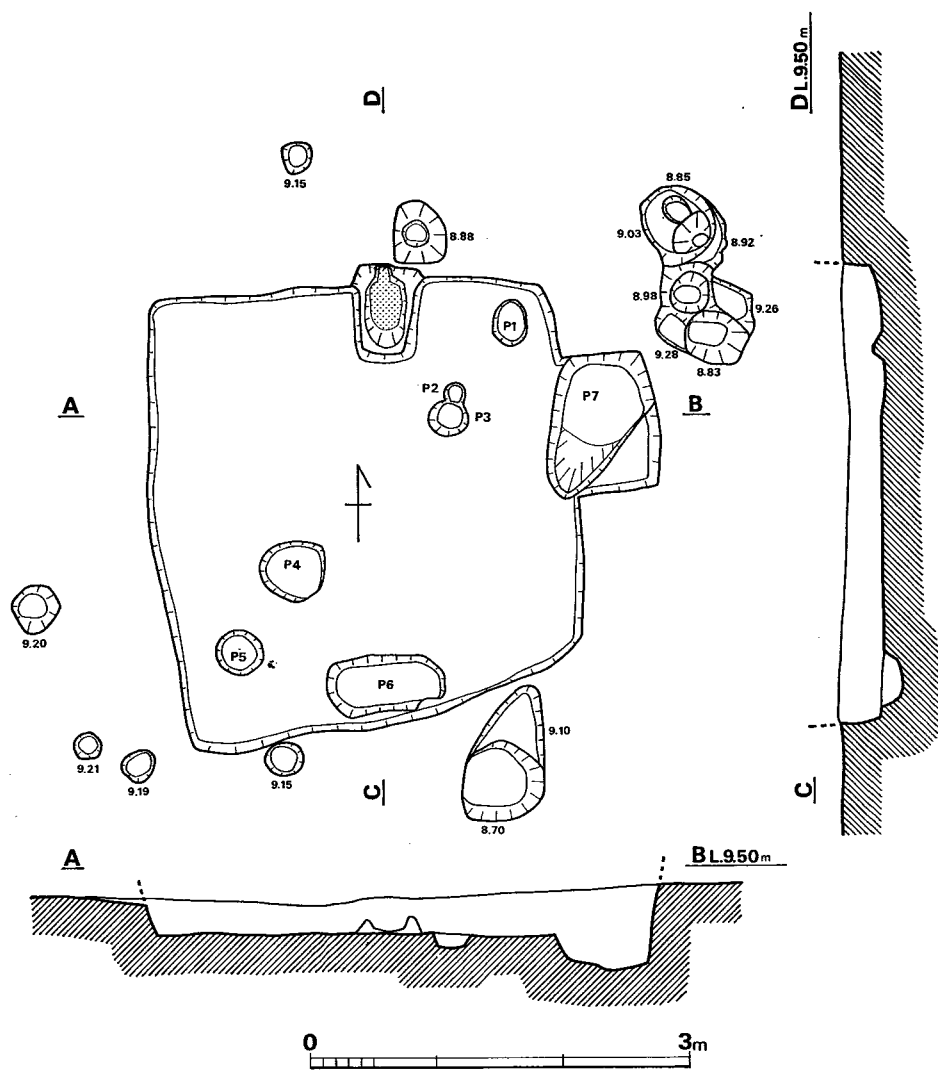


Fig. 237 C区第16号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)
 P1(- 8.0)・P2(-5.0)・P3(-14.0)・P4(-16.5)・P5(-12.0)・P6(-15.0)
 P7(-27.0)

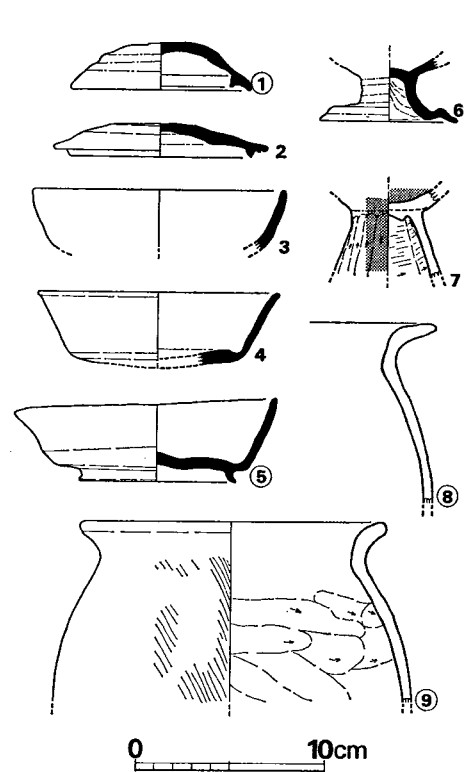


Fig. 238 C区第16号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

土師器 (Fig. 238—7～9) 7の高杯は脚部内面を除き、丹塗りである。脚部外面は縦方向にヘラ削りし、内面は横方向に篋を移動させている。8・9は甕で、いずれも床面出土である。9は内面斜方向のヘラ削り、外面はハケ目調整を施す。

以上を含めて、須恵器蓋2・杯3・高杯1、土師器甕片7・高杯1が出土した。土師器甕片は口縁片で、いずれも小破片のため図示しなかった。

鉄滓 1個出土し、重さ11.5gである。

Tab. 69 C区第16号住居跡出土土器一覧 ()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	S 蓋	略完	7.2	2.5	受け部 9.7	砂粒を含み、焼成良	外面 青灰色 内面 青黒色	
2	S 蓋	1/3	(9.7)	1.8	受け部11.4	砂粒を含み、焼成良	青灰褐色	
3	S 杯	底部欠	(13.2)			細砂を含み、酸化炎焼成	黄褐色	
4	S 杯	底部欠	(12.6)	(4.0)		細砂を含み、焼成良	青灰色	
5	S高台杯	3/4	(13.5) (13.9)	(3.5) (4.4)		細砂を含み、焼成良	外面 灰紫色 内面 アズキ色	高台径13.4 歪みあり
6	S高杯	脚部				細砂を含み、焼成良	青灰色	脚端径 7.3
7	H高杯	脚部				胎土精良、焼成良	赤黄色	丹塗り
8	H甕	口縁部				少量の砂粒を含み、焼成良	淡黄褐色	
9	H甕	下半欠	(15.7)		体部	少量の砂粒を含み、焼成良	茶褐色	

C区第17号住居跡 (Fig. 239, PL. 72)

各辺の長さは、北壁3.91m、南壁3.35m、東壁3.81m、西壁4.05mであり、南東、南西が隅丸の方形プランを有する。カマドは明確ではないが、焼土は北壁中央のやや東寄りから竪穴内に入る位置で検出された。焼土の東西両脇にはP6・P7があり、焼土をカマドの残存とみれば、主軸上にP11が並ぶ。支柱穴はP1～P4の4本柱と思われる。

遺物 (Fig. 240・241, Tab. 70, PL. 72)

須恵器・土師器・鉄滓付着の石・石斧が出土した。

須恵器 (Fig. 240—1～4) 1の蓋はかえりが受け部より突き出す形である。2は直線的な体部をもつ。3の高台杯は高台端部が外側へ踏張った形を呈する。4は高台の接合痕を残している。内面と口縁はヨコナデ、体部下半はヘラ削りののちヨコナデしている。

土師器 (Fig. 240—5～24) 5～10は杯で5以外はすべて底部を欠失しているが、丸底になると思われる。仕上げの丁寧なものがほとんどで、8は赤褐色の薄い膜がある。10は底部との境にわずかの稜線をもつ。11の皿も底部を欠く。口縁部はヨコナデで、ほかはナデている。

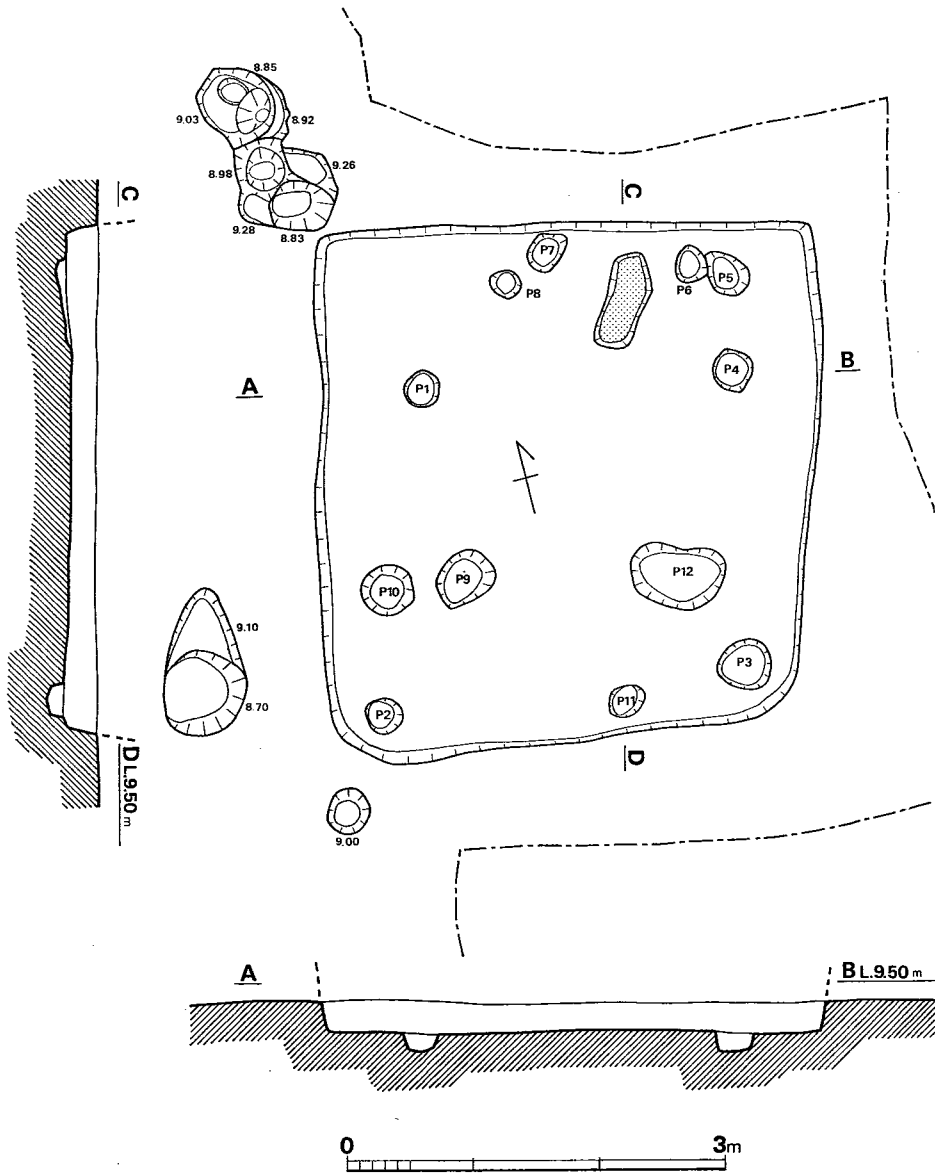


Fig. 239 C区第17号住居跡実測図（縮尺1/60）

床面からの深さ (cm)

P1(-16.5)・P2(-15.0)・P3(-14.0)・P4(-14.0)・P5(-12.5)・P6(-5.0)

P7(-9.0)・P8(-9.0)・P9(-29.0)・P10(-13.0)・P11(-12.0)・P12(-18.0)

P1~P2 2.60m・P2~P3 2.92m・P3~P4 2.33m・P4~P1 2.47m

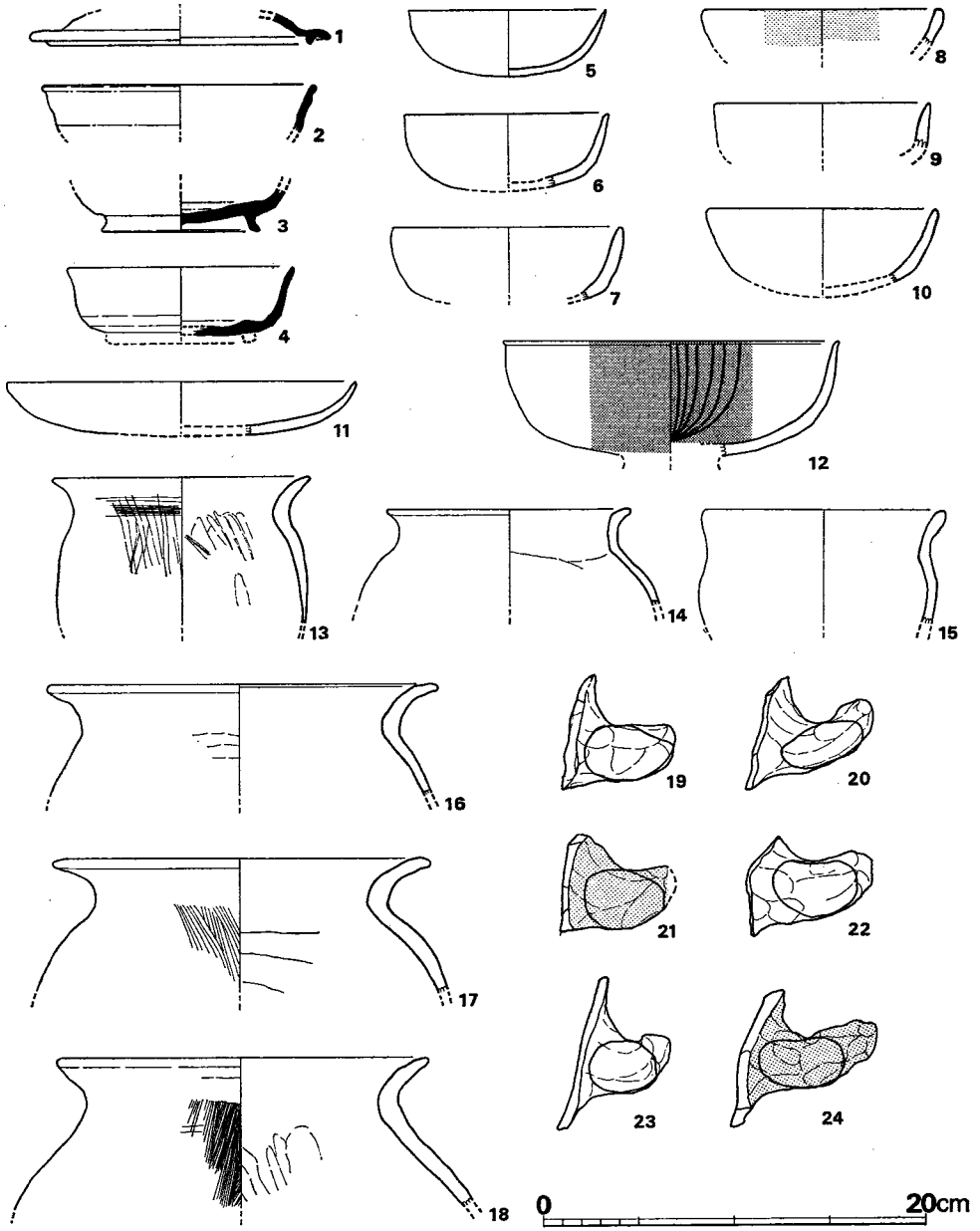
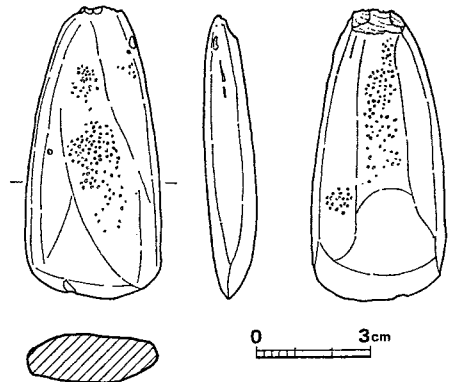


Fig. 240 C区第17号住居跡出土遺物実測図 (I) (縮尺1/4)

Fig. 241 C区第17号住居跡出土遺物実測図 (I) (縮尺1/2)



12は丹塗りの高杯杯部で、内面に暗文をもつ。13~15の小形甕は、底部を欠く。14は丸味のある体部が推定され、口縁は直立して端部で強く外反する。3個体とも二次火熱を受けている。16~18の甕は、口縁部が強く外反し、肩部の線は体部の張りを推定させる。内面頸部以下はヘラ削り、口縁部ヨコナデ、外面は不明の16を除きハケ目調整である。18は頸部に工具圧痕を残しており、幅1.5cm前後である。19~24は把手で、本体の内面を残しているもの(24)や接合面を残しているもの(22)などがある。21・24は赤黄色の薄い膜がある。甕または甔の把手であろう。

以上を含めて、須恵器蓋2・杯7・鉢1と土師器杯7・甕8・高杯1および把手6が出土した。図示したもの以外は破片である。そのほか高杯または杯と思われる丹塗土師器片1が出土した。床面出土のものはない。

鉄滓付着の石 図示しなかったが、石は全体に焼けており、一部に鉄滓が付着していた。

石斧 (Fig. 241) 蛇紋岩製の磨製石斧で、敲打痕を残している。長さ7.6cm、最大幅は刃部で3.5cm、最大の厚さ1.3cmを測る。緑青灰色を呈する。

Tab. 70 C区第17号住居跡出土土器一覧 ()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	S 蓋	天井部欠	(13.7)		受け部(15.8)	2~3mm大の砂粒を含む	外面 黒褐色 内面 アズキ色	
2	S 杯	体部以下欠	(14.2)		口縁部	細砂をわずかに含み、焼成良	青灰色	
3	S高台杯	上半欠				砂粒を含み、焼成良	外面 青灰色 内面 赤紫色	高台径 8.3
4	S高台杯	高台欠	(11.7)		口縁部	細砂を含み、焼成良	外面 淡黄褐色 内面 青灰色	
5	H 杯	復原完	(10.4)	(3.6)	口縁部	3mm大の砂粒を含み、焼成普通	明茶褐色	
6	H 杯	底部欠	(10.3)	(4.1)	口縁部	ともに良好	茶褐色	
7	H 杯	底部欠	(11.9)		口縁部	細砂を含み、焼成普通	赤黄色	
8	H 杯	底部欠	(12.1)		口縁部	胎土精良、焼成良	赤黄色	内外面とも化粧土
9	H 杯	底部欠	(11.0)		口縁部	軟質、胎土精良、焼成不良	外面 淡褐色 内面 褐色	
10	H 杯	底部欠	(11.7)	(4.5)	口縁部	胎土精良、焼成良	茶褐色	
11	H 皿	底部欠	(8.3)	(3.9)	口縁部	胎土精良、焼成良	淡褐色	
12	H高杯	脚部欠	(17.5)			胎土精良、焼成良	赤褐色	丹塗り
13	H小形甕	下半欠	(13.0)		口縁部	砂粒を含み、焼成良	外面 茶褐色 内面 灰褐色	二次加熱
14	H小形甕	下半欠	(12.5)		体部	砂粒を含み、焼成良	黄褐色	二次加熱

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
15	H小形甕	下半欠	(13.5)		口縁部	砂粒を含み、焼成良	外面 赤褐色 内面 紫褐色	二次加熱
16	H甕	体部以下欠	(20.5)		体部	胎土、焼成良	淡茶褐色	
17	H甕	体部以下欠	(19.5)		体部	焼成良、1~2mm 大の砂粒を含む	外面 茶褐色 内面 淡茶褐色	
18	H甕	体部以下欠	(19.4)		体部	胎土、焼成良	外面 灰茶褐色 内面 淡茶褐色	
19		把手				砂粒を含む、焼成良	黄褐色	一部スス付着
20		把手				砂粒を含む、焼成良	赤黄色	二次加熱
21		把手				砂粒を含む、焼成良	淡黄褐色	化粧土
22		把手				微粒を含む、砂粒及び黒雲母	淡赤黄色	
23		把手				砂粒を含み、焼成良	黄褐色	
24		把手				砂粒及び黒雲母 微粒を含む	淡黄褐色	化粧土

C区第18号住居跡 (Fig. 242, PL. 75)

各辺の長さは北壁3.3m、南壁2.6m、東壁3.1m、西壁3.0mであり、北側に広がる台形のプランを有する。床面にはカマド、柱穴などは検出されていない。

遺物 (Fig. 243, Tab. 71)

須恵器・土師器を出土した。

須恵器 (Fig. 243-1・2) 1の壺は口縁部と内面がヨコナデ、肩部はカキ目状の調整で体部はヘラ削りである。2の甕は口縁部に凹線をもつ。頸部は叩キののちナデており、ほかの部分はヨコナデである。

以上を含めて、須恵器壺1・甕1・小片11、土師器片250（そのうち甕口縁片2）が出土した。土師器はいずれも磨滅した小片のため図示しなかった。

Tab. 71 C区第18号住居跡出土土器一覧 ()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	S壺	下半欠	(13.4)			細砂を含み、焼成良	青灰色	
2	S甕	口縁部	(24.2)			砂粒を含み、焼成良	口縁内面のみ 青灰色、他は 青黒色	

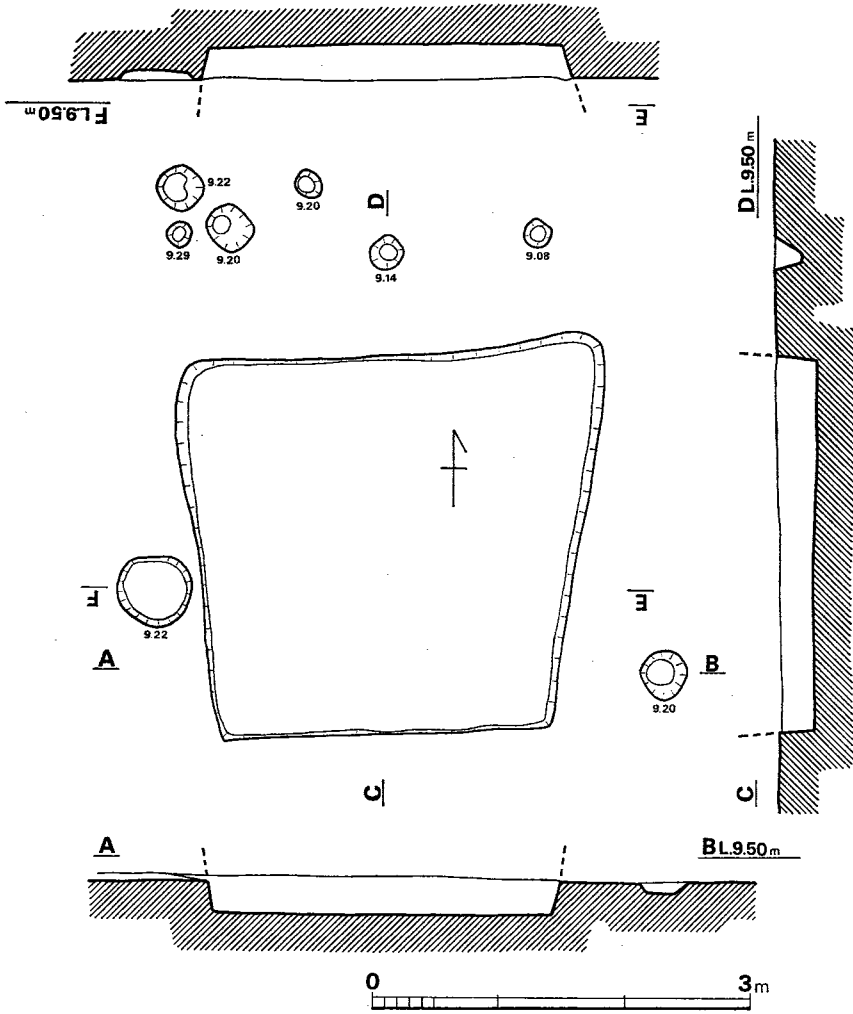


Fig. 242 C区第18号住居跡実測図 (縮尺1/60)

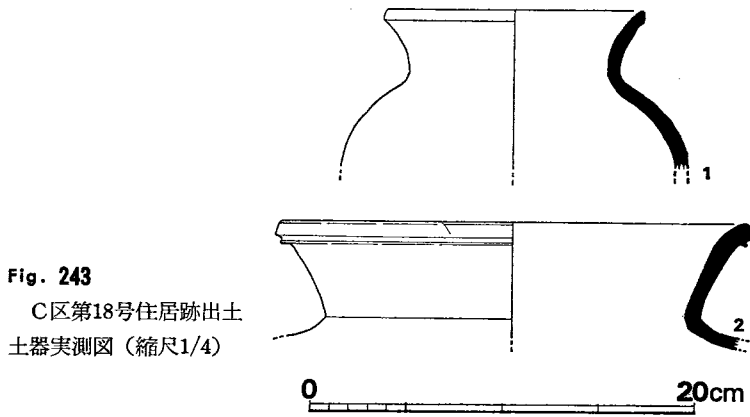


Fig. 243
C区第18号住居跡出土
土器実測図 (縮尺1/4)

C区第19号住居跡

(Fig. 244, PL. 75)

竪穴の床面は浅く、南西隅は残存していないが、残る3つの隅は検出された。北壁の長さは2.8m、東壁は2.5mのほぼ方形プランを有する。焼土は西壁中央の竪穴内で検出されたが、カマドの残存部が不明である。支柱穴は不明である。

遺物

図示できる遺物はなく、土師器片101、須恵器片37が出土した。それらのうち、土師器では甕口縁4、把手1があり、須恵器では蓋1、杯2、平瓶1がある。

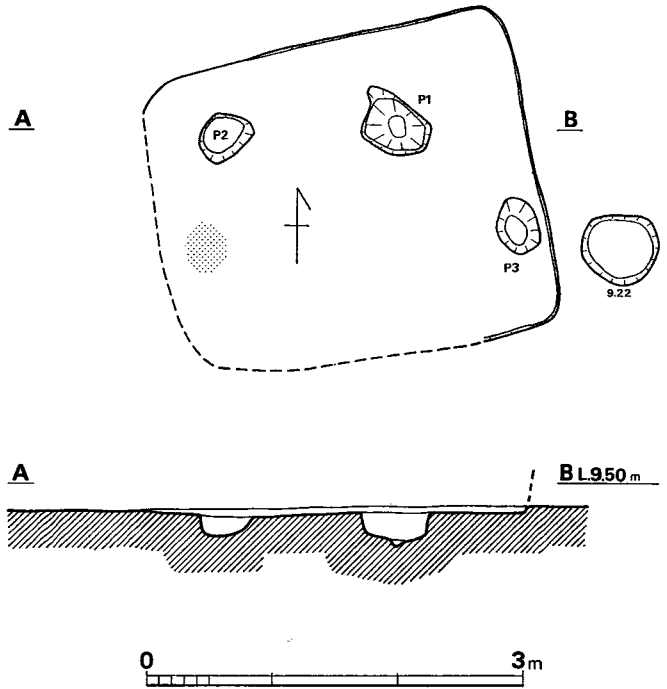


Fig. 244 C区第19号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)

P1(-26.5)・P2(-17.0)・P3(-12.0)

C区第20号住居跡 (Fig. 245, PL. 76)

各辺の長さは北壁3.01m、南壁3.16m、東壁3.76m、西壁3.54mであり、東壁はやや胴張りの隅丸方形に近いプランを有する。カマドは西壁中央よりやや南寄り、竪穴内に検出された。その中央は凹み、周囲は床面から高さ5~10cmほど、粘土で築かれたと推定される壁の一部が残存する。支柱穴は不明であるが、竪穴内には貯蔵穴様の掘り込み(P3)がある。

遺物 (Fig. 246, Tab. 72, PL. 76)

須恵器・土師器・鉄滓・炭化物を出土した。

須恵器 (Fig. 246-1~6・8) 1・2・3はいずれも天井部を欠く蓋である。1は天井部内面をナデ、外面をヘラ削りしたほかはヨコナデをする。2・3は内外面ともヨコナデを施す。杯身の可能性もあるが、一応蓋としておきたい。4・5はツマミのつく蓋である。4のかえり(かえり)は受け部よりわずかに突出する。5の口縁部は折り曲げたような形をしており、ツマミは扁平である。いずれも、天井部外面をヘラ削り、内面をナデ、そのほかはヨコナデ調整である。6のツマミは、頂部に丸味をもつ。8の杯は口縁部がわずかに肥厚する。外面底部のヘラ削り以外はすべてヨコナデ調整である。内面底部のヨコナデは、渦巻き状を呈する。

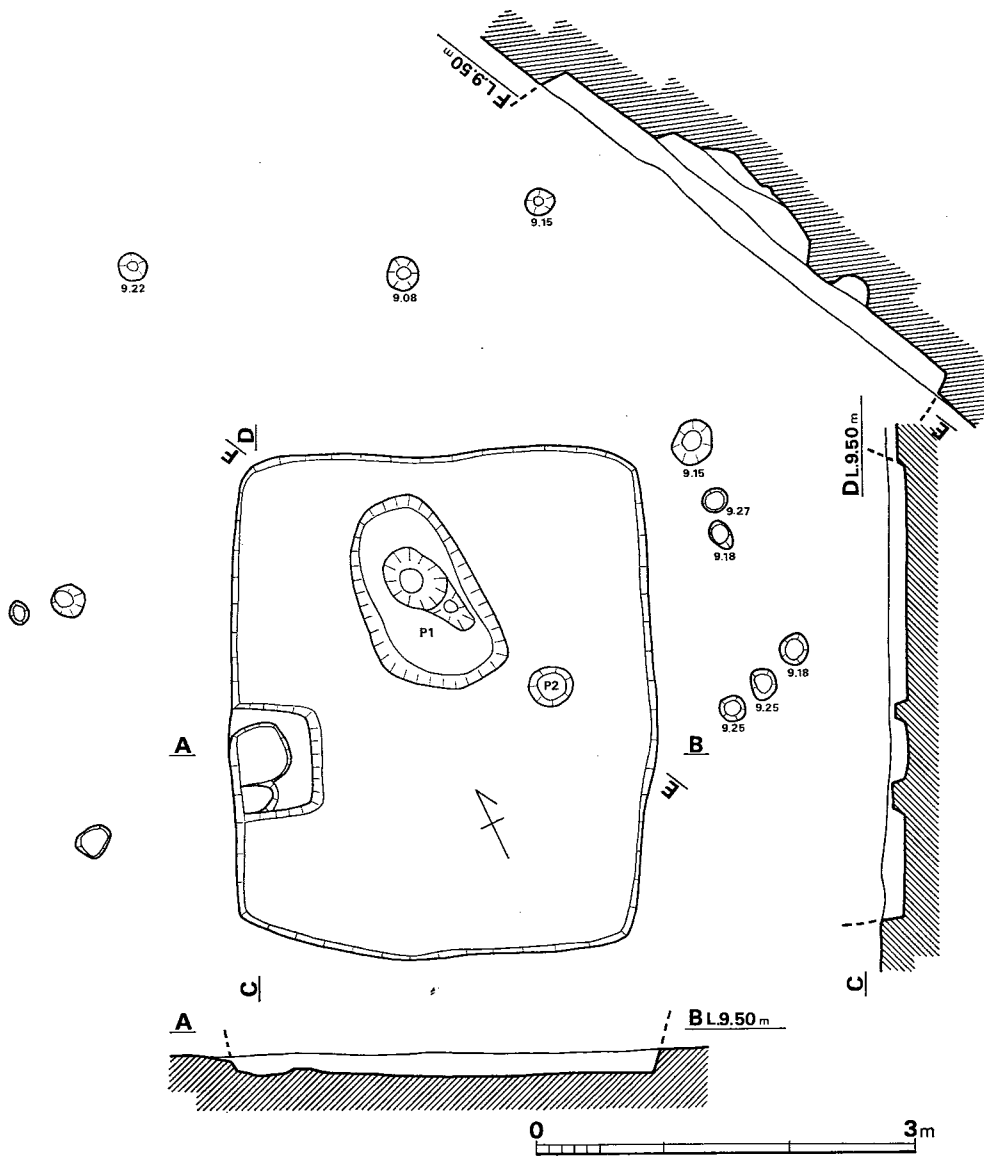


Fig. 245 C区第20号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)
 P1(-24.0)・P2(-17.5)

土師器 (Fig. 246—7・9~10)
 7の杯は内外面とも丹塗りである。
 口縁部は内彎し、内外面とも磨いで
 いる。9の甕は口縁部の外反が強い。
 内面は赤褐色の薄い膜がある。
 10の把手は、本体との接合部をよく
 残している。円筒を潰したような形
 を呈する。

以上を含めて、須恵器蓋6・杯2
 ・ツマミ1、土師器杯3・甕3が出
 土した。そのほか須恵器甕体部片・
 平瓶片、土師器甕片がある。

土器以外では、鉄滓、炭化物が出
 土したが、鉄滓は記録のみで実物不
 明。炭化物は材質不明である。

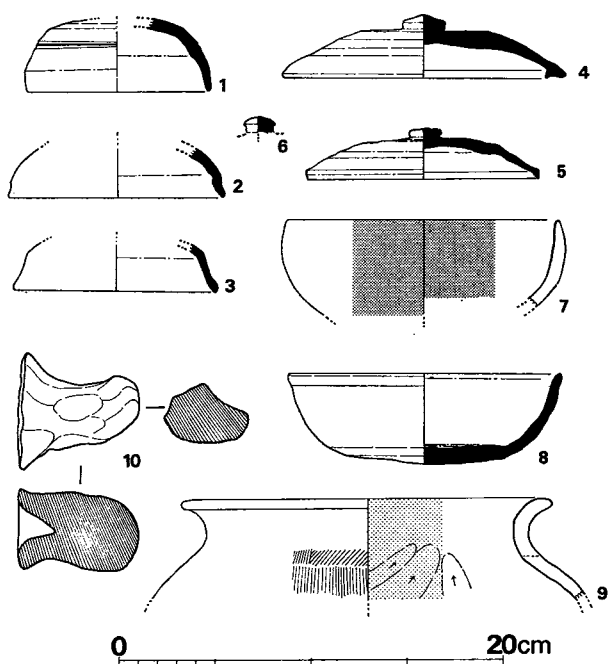


Fig. 246 C区第20号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

Tab. 72 C区第20号住居跡出土土器一覧表 ()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径と その位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	S杯	天井部欠	(10.4)		口縁部	砂粒を含み、焼成良	青灰色	
2	S杯	天井部欠	(11.1)		口縁部	砂粒を含み、焼成良	外面 黒褐色 内面 灰色	
3	S杯	天井部欠	(9.5)	(3.9)	口縁部	砂粒を含み、焼成やや不良	灰褐色	
4	S蓋	復原完	(12.8)	3.3	受け部15.0	砂粒を含み、軟質	淡黄褐色	
5	S蓋	完	12.0	2.6	口縁部	砂粒を含み、焼成良	外面 青灰褐色 内面 青灰色	
6	S蓋	ツマミ				砂粒を含み、焼成良	灰褐色	
7	H杯	1/3	(14.2)	(4.7)	口縁部	胎土精良、焼成良	灰褐色	
8	S杯	底部欠	(14.2)	(6.5)		胎土精良、焼成良	黄褐色	
9	H甕	口縁部	(19.4)		体部	砂粒を含み、焼成良	外面 黄褐色 内面 赤褐色	
10		把手				砂粒を含み、焼成良	黄褐色	

C区第21号住居跡 (Fig. 247, PL. 73)

西側は第14号住居跡と重複するが、同一の堅穴と誤認したため前後関係は不明である。各辺の長さは北壁4.2m、南壁4.0m、東壁3.15m、西壁3.5mであり、東西を長軸にとる長方形プランを呈するが、北壁の東端部には105×55cmの台形の張り出しを持つ。カマドは不明であり、焼土・灰なども検出されていない。支柱穴P1・P2・P3・P4の4本柱と思われる。

遺物 (Fig. 248, Tab. 73, PL. 73)

須恵器・土師器・弥生土器・鉄滓・炭化物を出土した。

須恵器 (Fig. 248—1～4) 1の蓋はかえりをもち、受け部とはほぼ同じ長さである。かえり先端部はやや尖る。2の高杯は杯部上半を欠失している。杯部内面はナデ、外面下部はへら削り、脚部外面はナデ、内面は丁寧なへら削りである。3の杯は黄灰色を呈し、口縁端部に平坦面をもつ。4の甕は第17号住居跡の土器と接合したもので、復原径にはやや疑問があるが、大形品であることは間違いない。特徴ある口縁をもち、口縁直下に2段の波状紋、その下部に4本の凹線を施す。波状文は1単位5本で描かれ、下段の波状文の方がカーブが緩い。凹線の下部にも波状文がある。

以上を含めて、須恵器蓋1・杯3・高杯2・甕1、土師器杯1・甕4・甗2、弥生土器片21が出土した。土師器・弥生土器は小片のため図示しなかった。

鉄滓 2点出土し、重さはそれぞれ4.5gと30.5gである。

これらの他に不明鉄製品、炭化物がある。

なお、本住居跡は第14号住居跡と接しており、第14号住居跡の遺物が皆無のため、これら2軒の遺物が混在している可能性が大きい。

Tab. 73 C区第21号住居跡出土土器一覧 ()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	S 蓋	天井部欠	(14.6)		受け部(12.2)	細砂を含み、焼成良	青灰褐色	
2	S高杯	口縁部欠				胎土精良、焼成良	青灰色	脚端径 6.1
3	S 皿	底部欠	(14.0)			砂粒を含み、焼成良	黄灰色	
4	S 甕	口縁部	(34.7)			胎土、焼成良	青黒色	

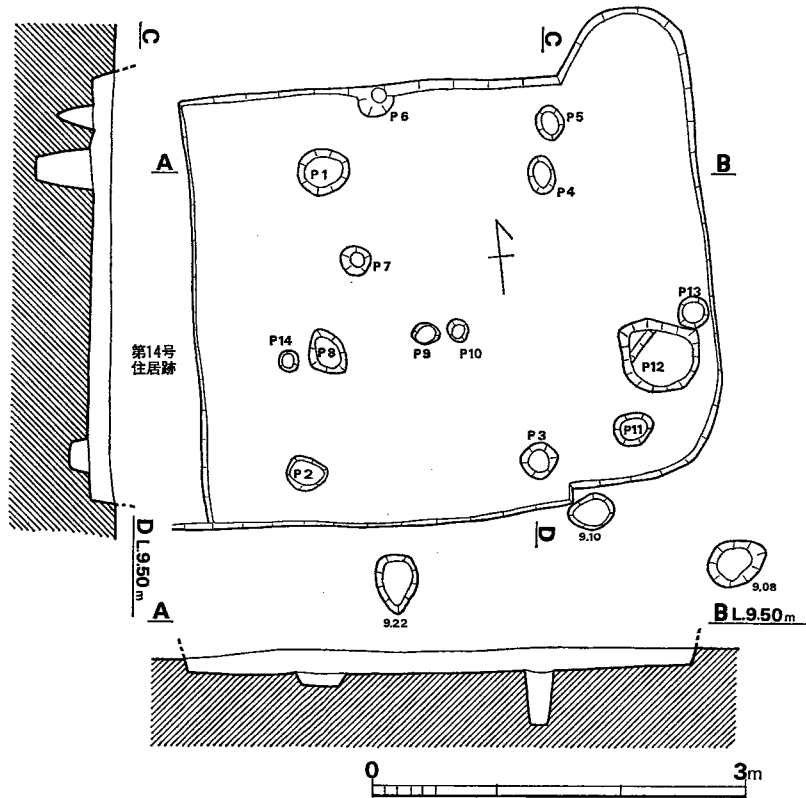


Fig. 247 C区第21号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)

P 1(-14.0)・P 2(-13.0)・P 3(-21.0)・P 4(-22.5)・P 5(-36.0)
 P 6(-21.5)・P 7(-16.5)・P 8(-17.0)・P 9(-8.5)・P 10(-26.0)
 P 11(-10.0)・P 12(-32.1)・P 13(-23.0)
 P 1~P 2 12.0m・P 2~P 3 9.3m・P 3~P 4 11.5m・P 4~P 1 8.7m

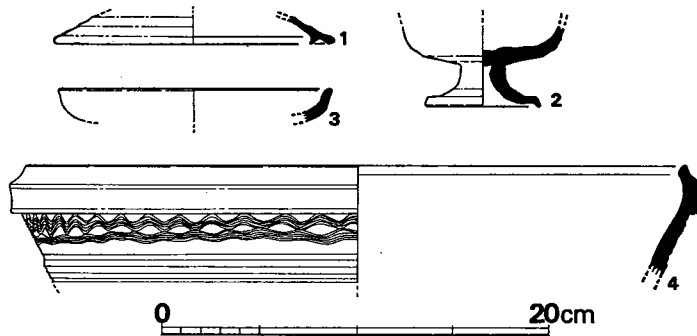


Fig. 248 C区第21号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

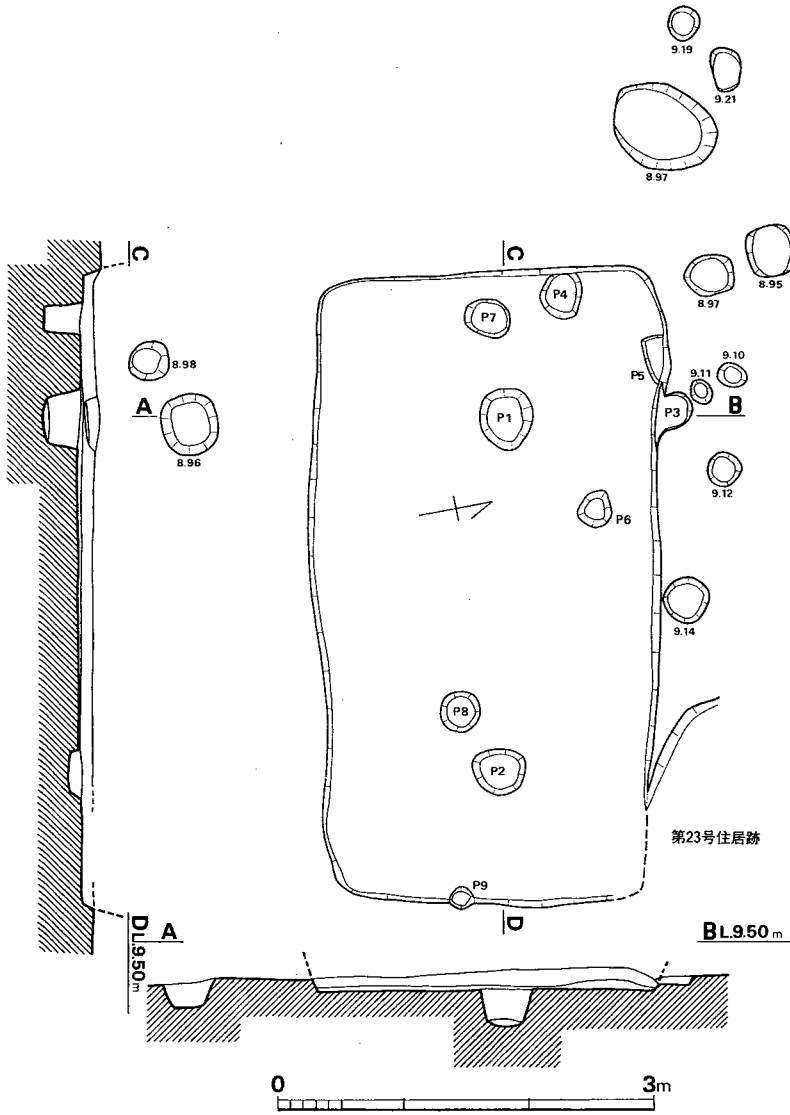


Fig. 249 C区第22号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)

P1(-29.0)・P2(-10.0)・P3(-19.0)・P4(-29.0)・P5(-15.0)

P6(- 6.8)・P7(-16.5)

P1~P2 2.83m

C区第22号住居跡

(Fig. 249, PL. 77)

北東隅は、これより新しく営まれた第23号住居跡と重複し、欠損する。南壁は長さ4.8m、西壁は2.6mの長方形プランを有する。焼土・灰などは検出されなかった。支柱は長軸上に2本ある。

遺物 (Fig. 250, Tab. 74)

須恵器・土師器・不明鉄製品を出土した。

須恵器 (Fig. 250—1・2) 1はツマミを欠失した蓋で、かえりは受け部より内側にある。天井部外面はへ

ラ削り、内面はナデ、そのほかの部分 はヨコナデである。2の提瓶は 把手を貼付した痕がある。口縁部はヨコナデ、頸部内面は強いナデを施す。

土師器 (Fig. 250—3) 3は甗で、口縁端部に1本の凹線がある。内面はへラ削り、口縁部ヨコナデ、外面体部の口縁近くは細かいハケ目、下部はそれより粗いハケ目調整である。

これらのほかに、須恵器杯、土師器高杯が出土した。

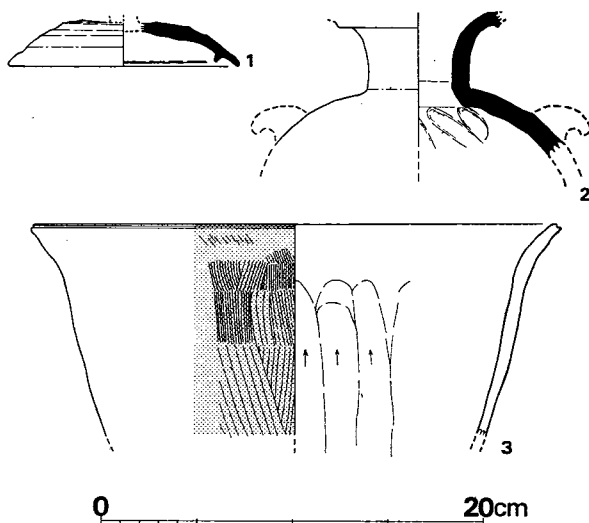


Fig. 250 C区第22号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

Tab. 74 C区第22号住居跡出土土器一覧 ()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	S 蓋	ツマミ欠	(9.8)		受け部12.0	細砂を含み、焼成良	外面 灰褐色 内面 青灰色	
2	S 提瓶	口縁部				細砂を含み、焼成良	外面 灰褐色 内面 淡黄褐色	
3	H 甗	下半欠	(27.2)		口縁部	細砂を含み、焼成良	赤褐色	外面化粧土

C区第23号住居跡 (Fig. 251, PL. 77)

南壁の一部は第22号住居に、北・西壁は第24・28号住居に重複する。これらの前後関係は第22号→第23号→第24号および第28号→第24号の順に新しくなるが、第24号住居跡の重複により、第23号住居跡と第28号住居跡の前後関係は不明である。東壁は長さ3.3m、南壁は3.6mであり、ほぼ隅丸の方形プランを有する。カマドなどは不明で、支柱穴はP1・P2・P3・P4の4本柱と思われる。

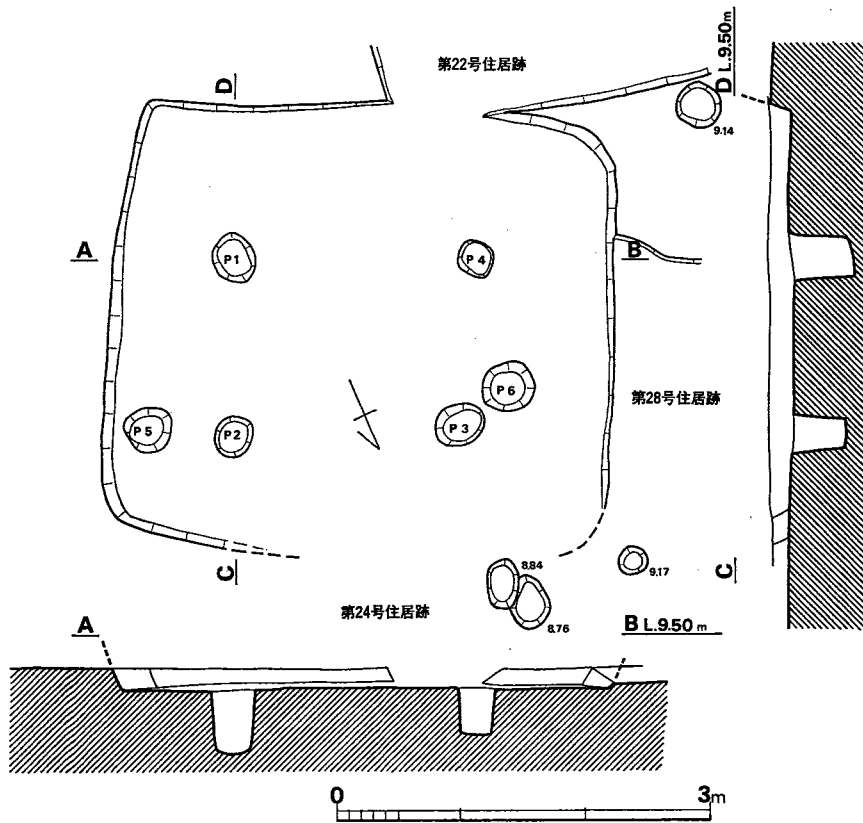


Fig. 251 C区第23号住居跡実測図 (縮尺1/60)

- 床面からの深さ (cm)
- P1(-53.0)・P2(-42.0)
 - P3(-53.3)・P4(-37.0)
 - P5(-40.0)・P6(-37.0)
 - P1~P2 7.0m
 - P2~P3 9.2m
 - P3~P4 6.7m
 - P4~P1 9.6m

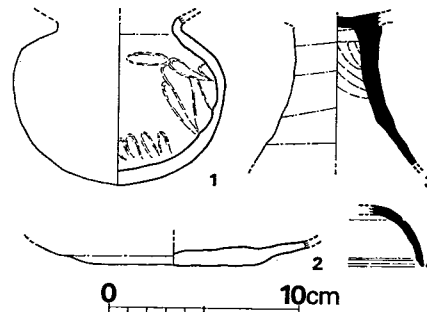


Fig. 252 C区第23号住居跡出土土器
実測図 (縮尺1/4)

遺物 (Fig. 252、Tab. 75)

須恵器・土師器を出土した。

須恵器 (Fig. 252—3) 3の高杯脚部は外面に螺旋状のナデ稜線があり、内面にはシボリ目を残している。胎土・色調等からみると土師器的であるが、成形・調整からは須恵器的要素が強い。ここでは須恵器として扱うことにする。

土師器 (Fig. 252—1・2) 1は小形丸底壺で、口縁部を欠失している。体部内面は指頭によるナデ、頸部はヨコナデ、外面は磨いている。底部は厚味を増し、現存器高9.0cmをはかる。2は甕または壺の底部で、内面はナデている。

以上のほかに、須恵器杯1・甕1、土師器約150片（そのうち甕6片・丹塗り高杯片1）がある。

Tab. 75 C区第23号住居跡出土土器一覧（ ）は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	H 埴	口縁部欠			体部中位 やや上11.2	細砂を含む、焼成良	淡黄褐色	残存高 9.0
2	H壺?	底部				細砂を含む、焼成良	赤褐色	
3	S高杯	脚部				胎土精良、焼成やや不良	外面 黄褐色 内面 赤褐色	
4	S 蓋					砂粒を含み、焼成良	青灰色	

C区第24号住居跡 (Fig. 253、PL. 77)

第23・28号住居跡より新しく営まれたものである。調査時に確認した限りでは、南北を長軸にとる長方形プランのものと考えられたが、詳細な規模などは不明である。また焼土・灰・支柱穴についても不明である。

遺物 (Fig. 254、Tab. 76、PL. 77)

須恵器・土師器・耳環・炭化物が出土した。

須恵器 (Fig. 254—2・6) 2は赤褐色を呈し、内外面ともヨコナデ調整である。6は甕の頸部片と思われる。上下各3本の凹線の間に、4本を1単位とする波状文が2段描かれている。上部の波状文はその直上の凹線に切られ、同様に下の波状文はその直下の凹線に切られている。

土師器 (Fig. 254—1・3~5) 1は外面丹塗りの杯で、内面は磨滅しているが、外面は磨かれている。3は小形の甕で、頸部内面に明瞭な稜線をもち、二次火熱を受けたため赤褐色を呈する。4は鉢ともいふべき形態で、口縁は折り曲げたような形である。内面は横方向のヘラ調整を施す。5の把手は甌のものと思われ、本体の内面を一部残している。

耳環 住居内より金環が出土した (Fig. 253×印)。発掘期間中に盗難にあい詳細は不明である。

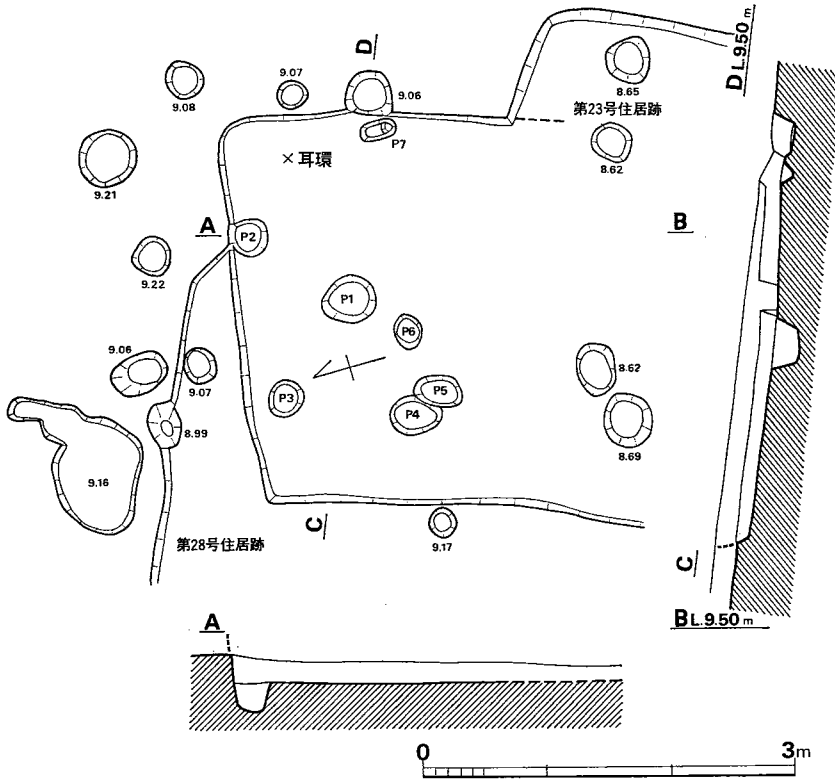


Fig. 253 C区第24号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)
 P1(-21.0)・P2(-22.0)
 P3(-21.0)・P4(-29.0)
 P5(-24.0)・P6(-21.0)
 P7(-8.0)
 P2~P3 1.35m

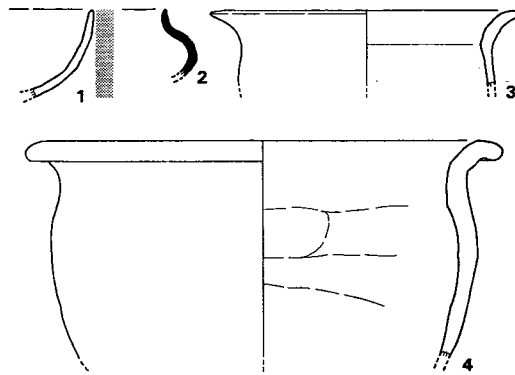
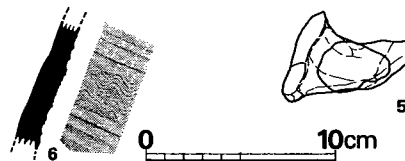


Fig. 254
 C区第24号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)



炭化物 (PL. 77) 木の実が炭化して出土した。

Tab. 76 C区第24号住居跡出土土器一覧 () は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	H杯	口縁部				細砂を含み、焼成良	黄褐色	外面丹塗り
2	S罎	口縁部～体部				細砂を含み、焼成良	赤褐色	
3	H小形甕	口縁部	(16.8)		口縁部	細砂を含み、焼成良	赤褐色	二次加熱
4	H甕	下半欠	(25.5)		口縁部	大粒の砂粒を含み、焼成良	黄褐色	スス付着
5		把手				砂粒を含み、焼成良	黄褐色	
6	S甕	頸部				砂粒を含み、焼成良	青灰色	

C区第25号住居跡 (Fig. 255, PL. 77)

各辺の長さは北壁3.6m、東壁3.6m、西壁3.9mで、方形プランを有する。カマドは残存しないが、北壁中央に若干の張り出しがあり、ここに築かれた可能性もある。支柱穴はP1・P2・P3・P4の4本柱と考えられ、また堅穴外の各辺に沿って柱穴があるが、この堅穴に伴うものかは不明である。

遺物 (Fig. 256・257, Tab. 77, PL. 77)

本住居跡には須恵器は一片も出土しなかった。土師器・砥石がある。

土師器 (Fig. 256—1～3) 1は杯で、口縁部のヨコナデ以外は磨いている。2の高杯は、現存する器表は全面丹塗りである。杯部と脚部との接合面を残しており、杯部の底部は凸形を呈していたと思われる。脚部内面は指頭によるナデ、外面はへら削りである。3は小形の甕で二次火熱を受けているため剥落が著しい。

以上を含めて、土師器杯1・甕5・甗1・高杯1・把手1が出土した。

砥石 (Fig. 257) 砂岩製の砥石で、4面を使用している。長さ約6.8cm。キメはやや粗い。

Tab. 77 C区第25号住居跡出土土器一覧 () は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	H杯	口縁部				胎土精良、焼成良	淡茶黄色	
2	H高杯	脚部				胎土精良、焼成良	淡茶黄色	
3	H小形甕	口縁～体部上半	(14.9)			砂粒及び黒雲母微粒を含み、焼成良	外面茶走色 内面淡黄褐色	二次加熱

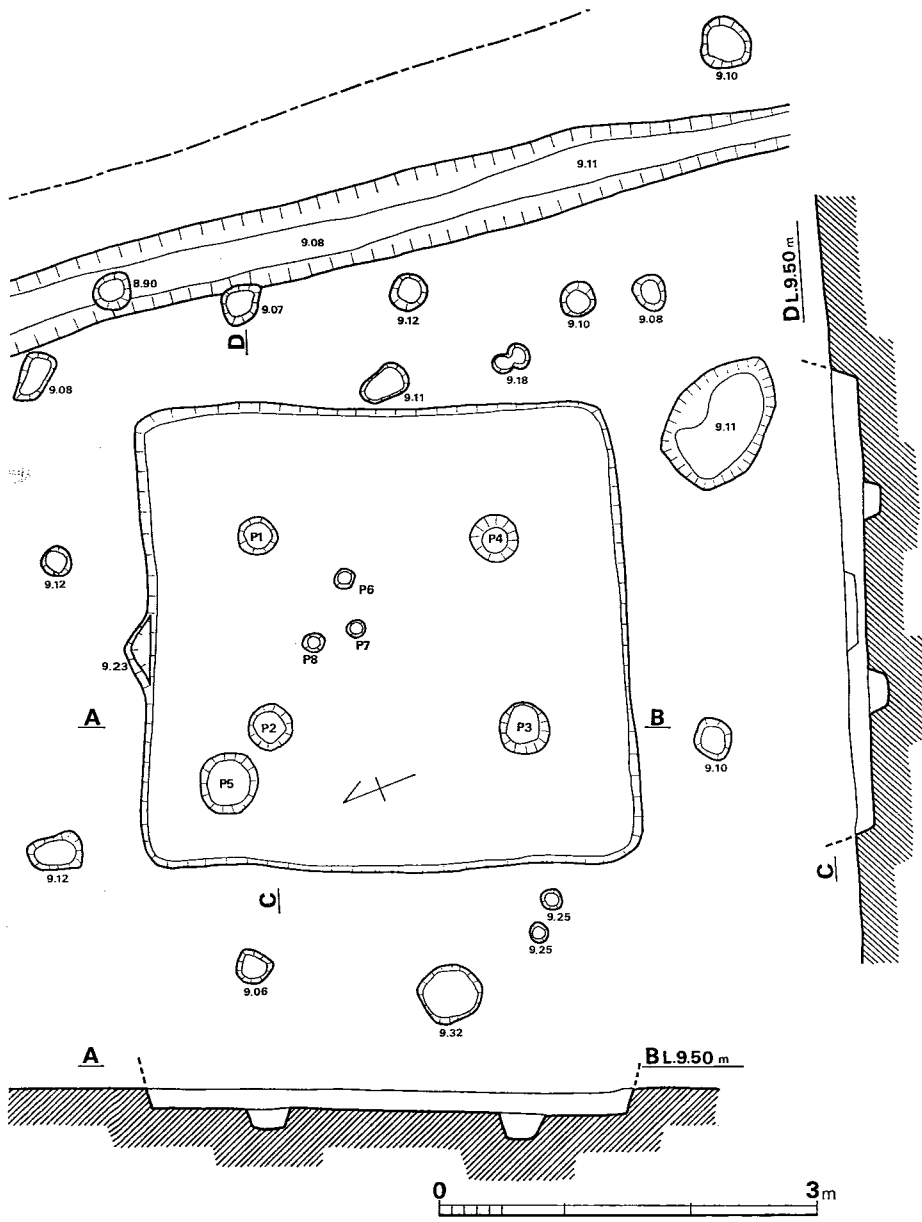


Fig. 255 C区第25号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)

P1(-14.0)・P2(-16.5)・P3(-21.0)・P4(-19.0)・P5(-4.0)

P6(- 6.0)・P7(-12.5)・P8(- 7.5)

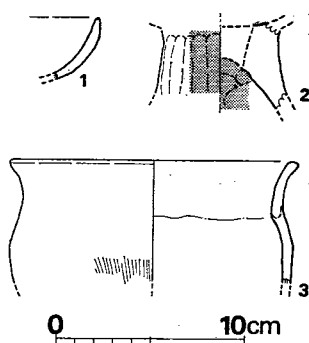


Fig. 256

C区第25号住居跡出土遺物実測図(Ⅰ) (縮尺1/4)

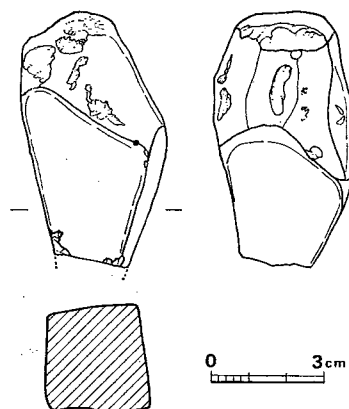


Fig. 257

C区第25号住居跡出土遺物実測図(Ⅱ) (縮尺1/2)

C区第26号住居跡 (Fig. 258、PL. 78)

各辺の長さは北壁4.0m、南壁3.8m、東壁3.9m、西壁4.3mで、ほぼ隅丸の方形プランを有する。東壁中央には40×150cmほどの長方形張り出しをもつ。この部分の床面は平坦で、堅穴内の床面より10cmほど高く、ピット3個がある。焼土・灰は検出されていない。支柱穴はP1・P2・P3・P4の4本柱と考えられ、また堅穴外には西壁をのぞく各辺に沿って柱穴があるが、この住居に伴うものかは不明である。

遺物 (Fig. 259、Tab. 78、PL. 78)

須恵器・土師器・鉄滓が出土した。

須恵器 (Fig. 259—1～3) 1は蓋で、肩部にわずかの稜をもち、口縁部内面に段をもつ。天井部外面はヘラ削りで「×」のヘラ記号をもつ。2の杯は口縁の立ち上り1.6cmを計り、底部外面に丁寧なヘラ削りを施している。他の部分はヨコナデである。3の杯は2に比べてやや浅いが、立ち上りは1.5cmを計る。底部の内面はナデ、外面はヘラ削りでほかの部分はヨコナデをする。

土師器 (Fig. 259—4～17) 4～9は杯で、4～7と8・9に分類できる。4は略完形で、口縁部は内彎気味である。二次火熱を受けているため外面器表の剝落が著しいが、内面は赤褐色の薄い膜状のものが観察できた。5・6は床面出土でほぼ同大である。6は口縁部がやや内彎する。丹塗りである。7はこれよりやや浅く、器高3.5cm前後が推定できる。8・9はともに口縁部と体部との境に段をもつが、8は内外ともに赤黄色の薄い膜がある。9は黒褐色を呈する。以上の杯類はすべて、胎土、焼成ともに良好で全体に丁寧なつくりである。

10～12の小形の甕のうち全体の形がわかるのは12のみである。10は頸部内面に稜線をもつ。

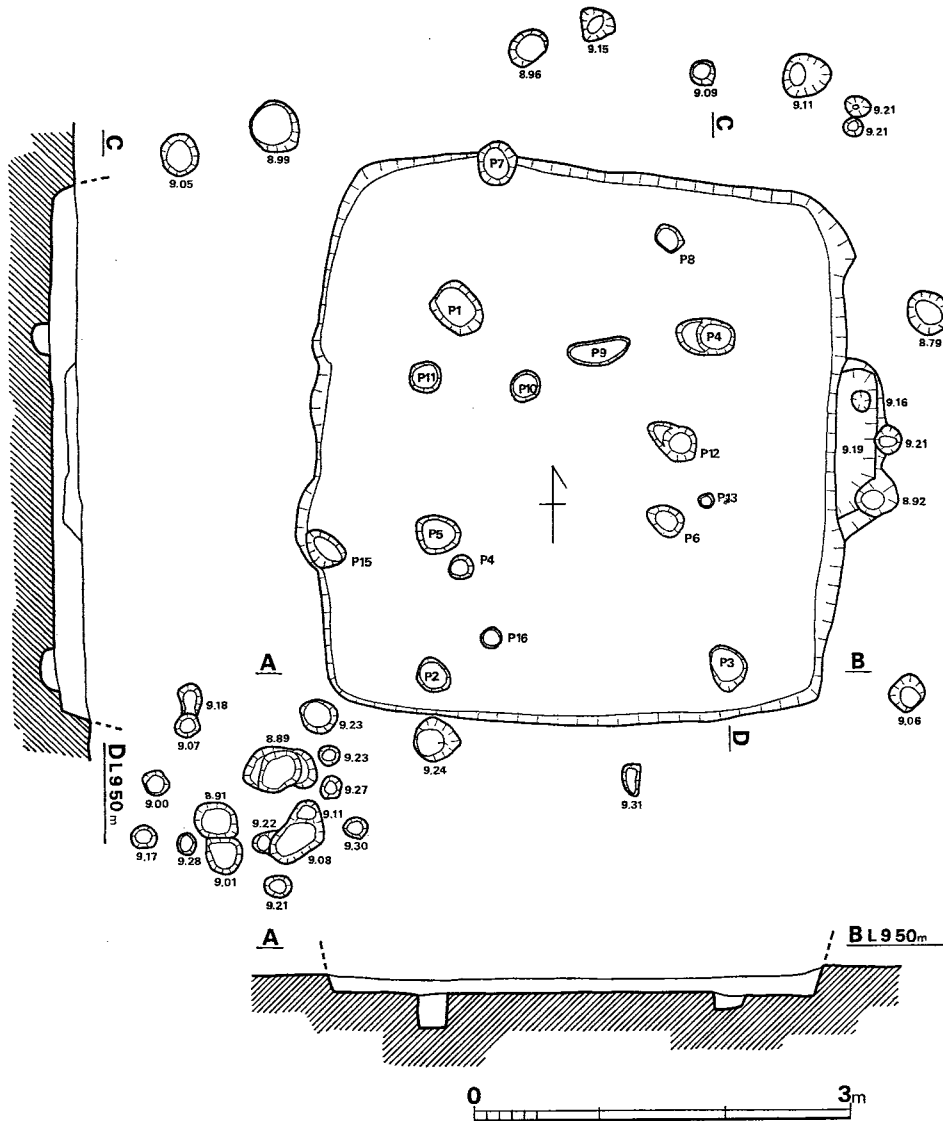


Fig. 258 C区第26号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)

- P 1(-22.0)・P 2(-13.0)・P 3(-22.0)・P 4(-13.5)・P 5(-13.0)・P 6(-17.0)
 P 7(-16.8)・P 8(-23.0)・P 9(- 4.5)・P 10(- 7.0)・P 11(-14.0)・P 12(-31.5)
 P 13(- 9.0)・P 14(-13.5)・P 15(-14.5)・P 16(-13.5)
 P1~P2 2.95m・P2~P3 2.35m・P3~P4 2.65m・P4~P1 2.1m

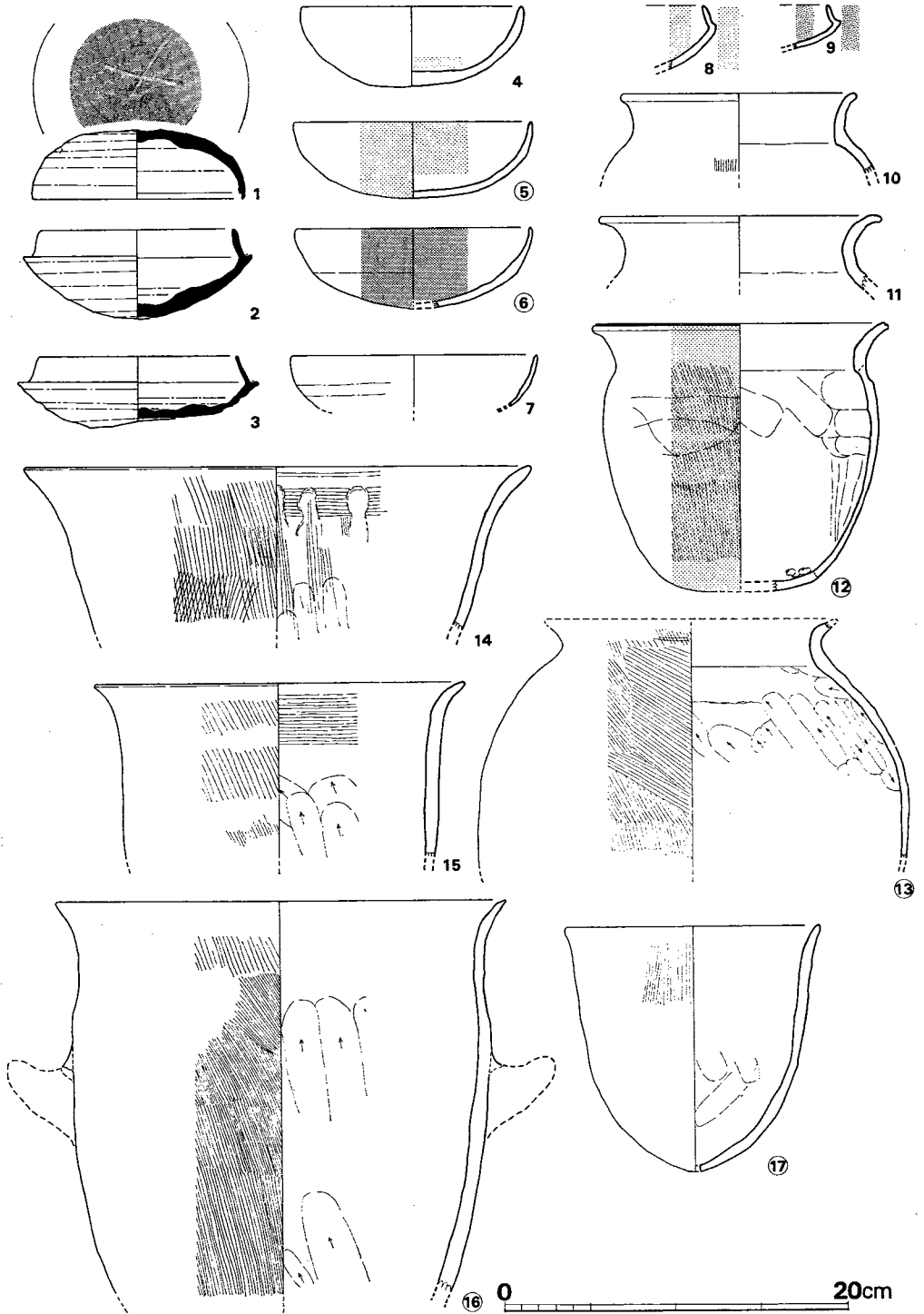


Fig. 259 C区第26号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

11は大きく外反する。12は床面出土で、底部の一部を欠く。頸部内面に稜をもち、体部上半を横方向、下半を縦方向にヘラ削りし、外面は縦方向のハケ目を施す。口縁部は内外面ともヨコナデである。13は床面出土で、口縁端部と体部下半以下を欠く。内面のヘラ削りは、縦方向が多い。頸部内面に接合痕が見られるが、その多くは削りとナデにより消される。14~17の甌のうち14は口縁部が大きく開き、口縁部内面は横方向に、体部は内外面とも縦方向のハケ目を施す。器表の剝落部分から、口縁部内面は横方向のハケ目のち薄く粘土をナデつけ、さらにその上から縦方向のハケ目を施したことが観察できた。16は口縁部が外反し、端部は尖り気味である。体部内面のヘラ削りは底部から口縁部へ向うものが多い。口縁部のヨコナデを除き外面は縦方向のハケ目である。底部は欠失しているが、大きな単孔と考えられる。17は小形の甌で、底部に径0.8cmの小孔をもつ。全体に器表が荒れているが内面ヘラ削り、外面ハケ目、口縁部ヨコナデの調整と思われる。

本住居跡は比較的遺物が多く、以上を含めて須恵器杯蓋2・杯身2、土師器杯5・甌14・甌5が出土した。甌の多くは破片のため図示しなかった。その他、内外面丹塗りの土器片1が出土しており、土器片には二次火熱を受けているものが多い。

鉄滓 床面から2個出土した。重さは28gと4.5gである。

Tab. 78 C区第26号住居跡出土土器一覧()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	S 蓋	略 完	12.4	4.1		細砂を含み、焼成良	灰色	天井部外面にヘラ記号
2	S 杯		(11.2)	5.1	受け部(13.4)	細砂を含む、焼成良	青灰色	
3	S 杯	略 完	11.5	4.2 (最大)	受け部14.1	細砂を含み、焼成良	青灰色	
4	H 杯	略 完	12.7	4.8	口縁直下13.0	砂粒を少量含み、焼成良	外面 灰褐色 内面 赤褐色	内面底部に化粧土痕跡
5	H 杯	½	(13.8)	4.5	口縁部	胎土精良、焼成良	外面 赤褐色 内面 灰褐色	
6	H 杯		(13.6)	(4.3)	口縁部	胎土精良、焼成良	赤褐色	全面丹塗り
7	H 杯	⅓	(14.2)	(3.5)	口縁部	胎土精良、焼成良	淡茶黄色	
8	H 杯					胎土精良、焼成良	赤黄色	
9	H 杯					胎土精良、焼成良	黒褐色	
10	H小形甌	体部以下欠	(13.6)		体部	砂粒を含む、やや軟質	茶褐色	
11	H小形甌	体部以下欠	(16.6)			少量の砂粒を含み、焼成良	茶褐色	
12	H小形甌		(16.2)	(15.9)	口縁部	胎土焼成とも良好	赤褐色	外面化粧土
13	H 甌	口縁部と体部下半欠			体部(25.1)	砂粒を含み、焼成良	黄褐色	

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
14	H 甑	下半欠	(29.5)		口縁部	少量の砂粒を含み、焼成良	茶褐色	
15	H 甑	下半欠	(21.4)		口縁部	砂粒を含み、焼成良	黄褐色	
16	H 甑	底部把手欠	(26.2)	現存 22.5	口縁部	砂粒を含み、焼成良	黄褐色	外面一部にスス附着
17	H 甑	復原完	(14.8)	14.4	口縁部	砂粒を含み、焼成良	黄褐色～赤褐色	

C区第27号住居跡 (Fig. 260, PL. 79)

各辺の長さは北壁3.4m、南壁3.5m、東壁4.0m、西壁3.6mで、ほぼ方形プランを有し、北壁の西半部に100×190cmほどの角形状の突出部がある。焼土・灰などは認められない。主柱穴はP1・P2・P3・P4の4本柱と考えられる。

遺物 (Fig. 261, Tab. 79)

弥生土器・土師器・須恵器を出土した。弥生土器は小片が49片出土したが実測できず、図示しなかった。

須恵器 (Fig. 261—1) 1は蓋の口縁部で、受け部より突出したかえりをもち歪んでいる。

土師器 (Fig. 261—2) 2は小形甕で、頸部内面に不明瞭な稜線がある。口縁部は強いヨコナデを施す。

これらのほかに、須恵器12片、土師器では丹塗りの高杯を出土した。

Tab. 79 C区第27号住居跡出土土器一覧 ()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	S 蓋	口縁部	最大 (17.0)			砂粒を含み、焼成良	外面 黄灰色 内面 茶灰色	歪みあり
2	H小形甕	口縁部	(16.3)		口縁部	砂粒及び黒雲母微量を含み、焼成良	茶褐色	

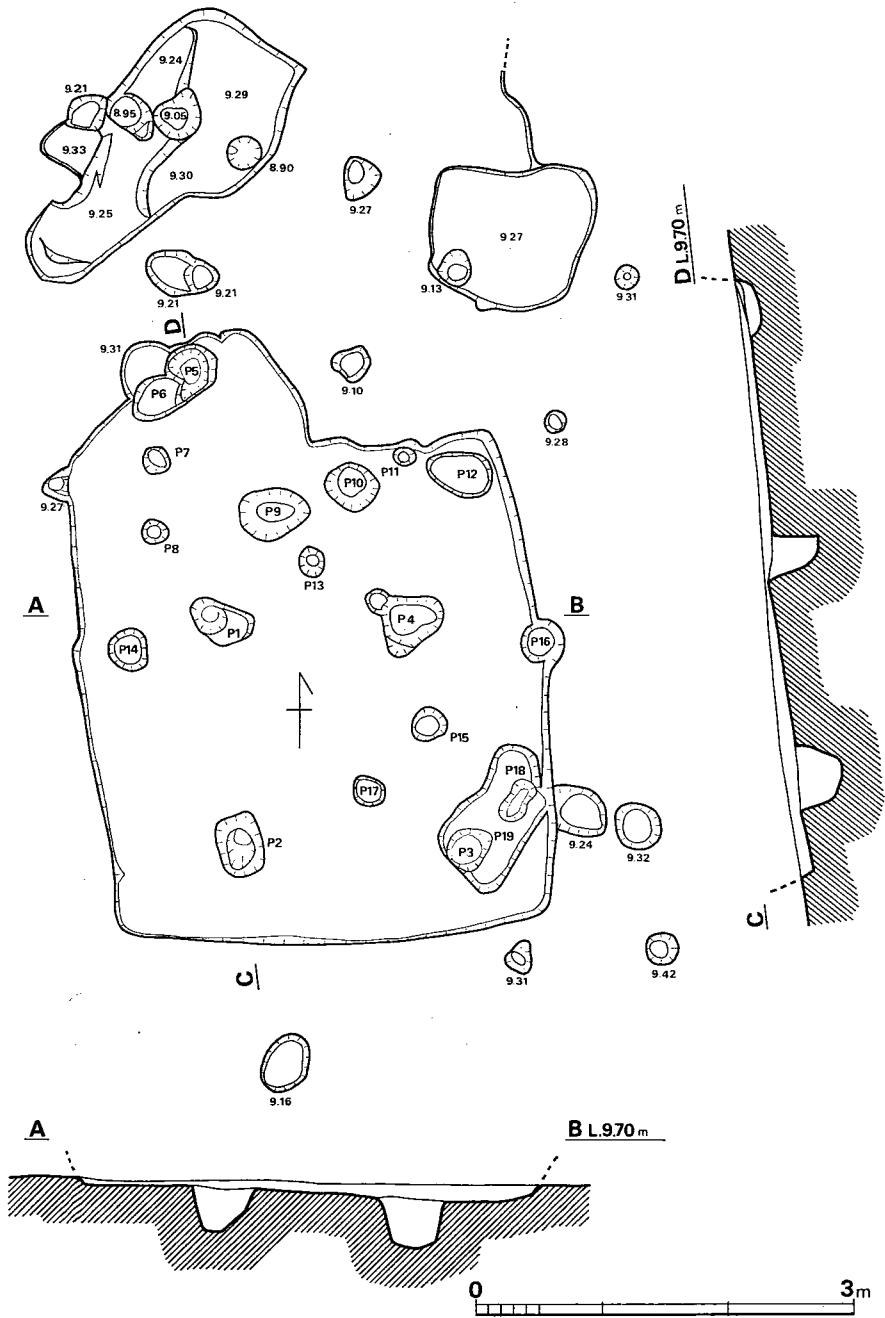


Fig. 260 C区第27号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)

- P 1(-37.5)・P 2(-28.0)・P 3(-34.5)・P 4(-40.0)・P 5(-13.0)・P 6(-10.0)
 P 7(- 8.0)・P 8(- 6.0)・P 9(-34.5)・P10(-38.0)・P11(- 2.5)・P12(- 5.0)
 P13(- 6.0)・P14(-28.5)・P15(-11.0)・P16(- 6.5)・P17(-10.0)・P18(-24.5)
 P19(-14.0)
 P1~P2 1.9m・P2~P3 1.80m・P3~P4 1.85m・P4~P1 1.55m

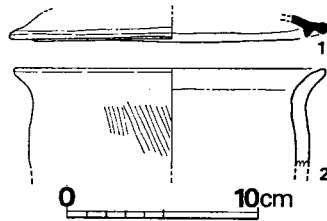


Fig. 261 C区第27号住居跡出土土器実測図(縮尺1/4)

C区第28号住居跡 (Fig. 262、PL. 77)

第23・24号住居跡と重複し、第24号住居跡より古く営まれるが、第23号住居跡との前後関係は不明である。東壁の長さは不明であるが南壁は一部を検出した。北壁は長さ3.9m、西壁は4.3mで、ほぼ方形プランを有する。カマドおよび焼土・灰などは認められず、支柱穴も不明である。

遺物 (Fig. 263、Tab. 80、PL. 77)

須恵器・土師器を出土した。

須恵器 (Fig. 263—1・2) 1・2は杯で、1は高台が付かない。底部は他の部分より厚く、凹凸がある。底部の内面と外面はナデで、ほかの部分はヨコナデである。2は淡褐色を呈する高台杯で、焼成不良である。

土師器 (Fig. 263—3～6) 3は内面と口縁部外面が黒色化された土師器碗で、高台がつくと思われる。体部にやや幅の広い凹線4本が施されている。4の杯は底部を水平におくと、傾いてしまう。口縁部内面が肥厚し、体部は薄く、底部で厚くなる。5は平底の杯である。6は小形の把手で、小形の甕または鉢につけられるものと思われる。

以上の他に、須恵器では蓋・甕の小片があり、土師器では杯2・甕1が出土した。

Tab. 80 C区第28号住居跡出土土器一覧()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	S杯	½	(12.1)	(3.7)	口縁部	細砂を含み、焼成良	灰褐色	
2	S高台杯	底部				細砂を含み、焼成良	淡褐色	高台径8.0
3	H碗	底部欠	(19.3)		口縁部	胎土精良、やや軟質	外面黄褐色 内面黒色	
4	H杯	底部欠	(10.9)	3.6 ~5.0	口縁部	細砂を含み、焼成良	赤褐色	
5	H杯	底部				細砂を含み、焼成良	淡黄褐色	
6		把手				胎土精良、焼成良	茶褐色	

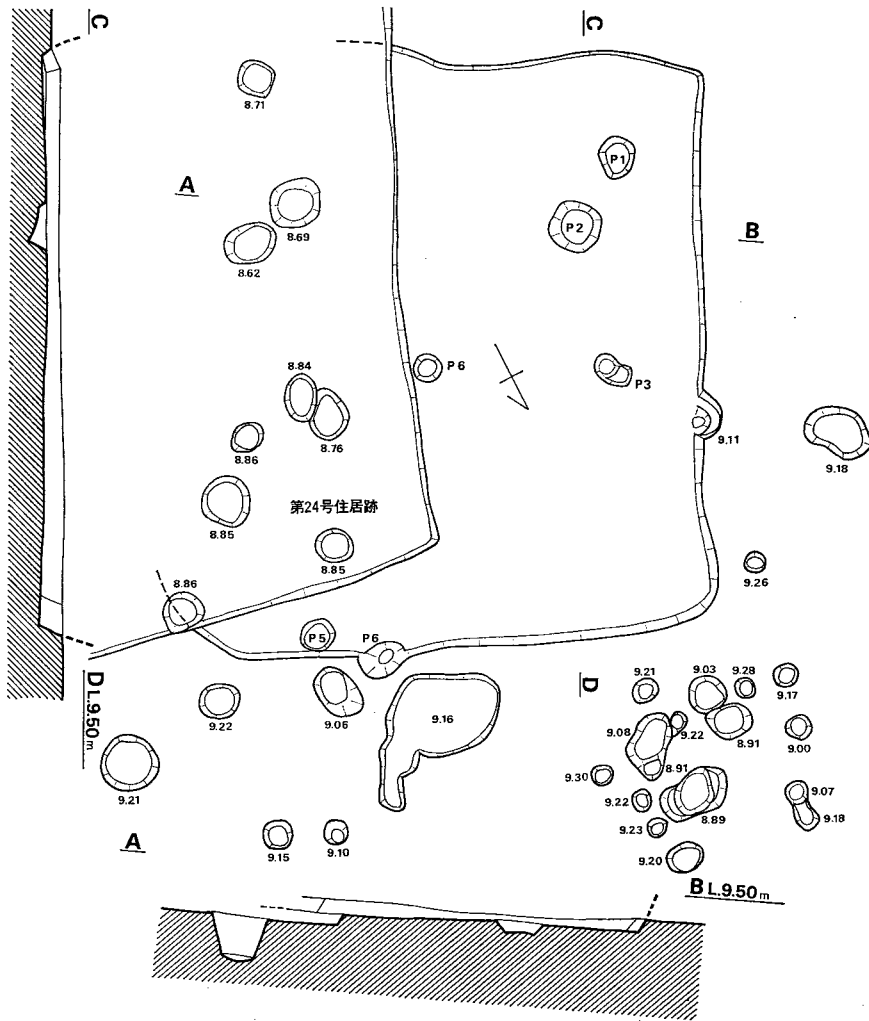


Fig. 262 C区第28号住居跡実測図
(縮尺1/6)

床面からの深さ (cm)
 P1(-10.0)・P2(-9.5)・P3(- 5.0)
 P4(-12.0)・P5(-5.0)・P6(-12.0)
 P7(-19.0)

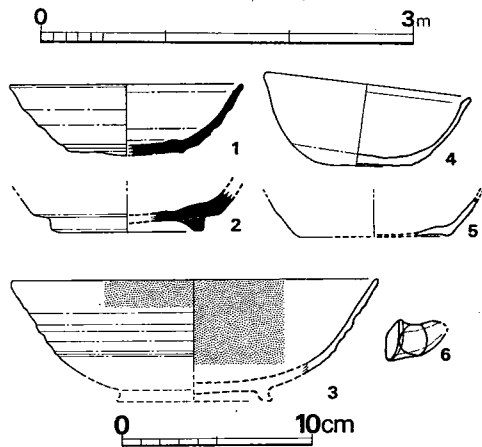


Fig. 263 C区第28号住居跡出土土器
実測図 (縮尺1/4)

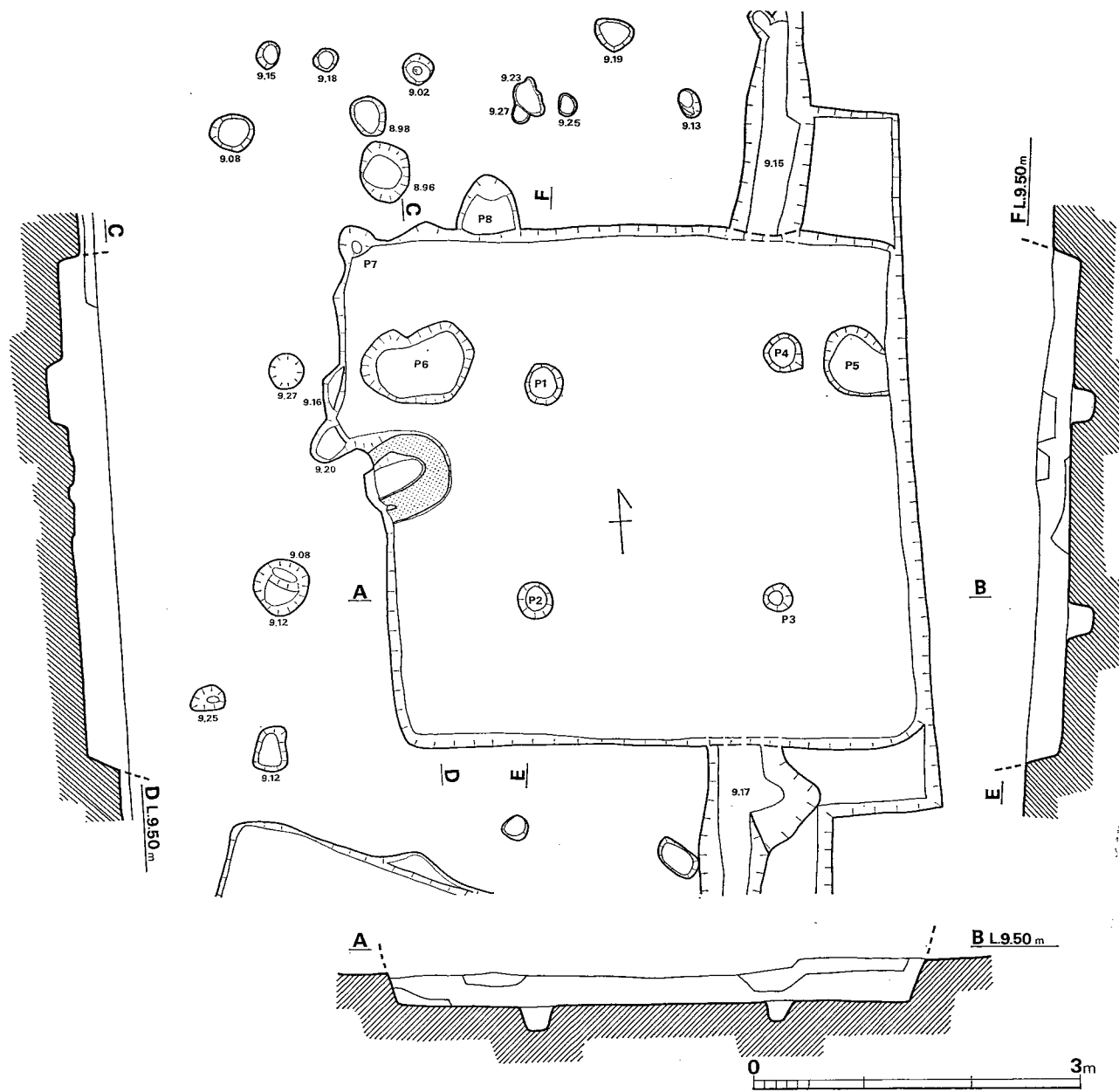


Fig. 264 C区第29号住居跡実測図 (縮尺1/60)

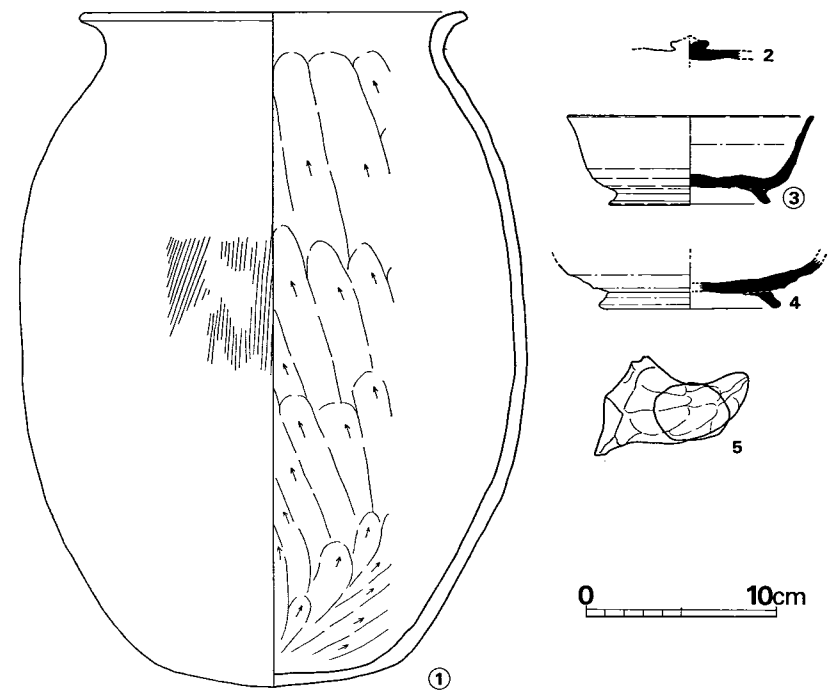


Fig. 265 C区第29号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

床面からの深さ (cm)
 P1(-20.5)・P2(-22.5)・P3(-11.0)・P4(-11.5)・P5(-9.0)
 P6(-16.0)・P7(- 5.0)・P8(-15.0)
 P1~P2 2.0m・P2~P3 2.2m・P3~P4 2.25m
 P4~P1 2.2m

C区第29号住居跡 (Fig. 264, PL. 78)

東半部は第29号住居跡より新しい溝と重複する。東側は調査区外で、東壁を未検出であるが、南東隅を調査区ぎりぎり検出した。西壁は長さ4.5m、南壁は4.8mで、ほぼ方形プランを有する。カマドは西壁中央の竪穴内に検出され、その中央は凹み、周囲は床面から高さ3～13cmの粘土で築いたと推定される壁の一部が残存する。支柱穴はP1・P2・P3・P4の4本柱と思われ、また、P1・P3・P5・P6は一列に並ぶ。

遺物 (Fig. 265, Tab. 81, PL. 78)

須恵器・土師器が出土した。

須恵器 (Fig. 265—2～4) 2の蓋は天井部以外のほとんどを欠く。3は床面出土の高台のつく杯で、底部内面はナデ、外面はヘラ削り、そのほかはヨコナデである。外反気味の体部に外側へ踏張る高台がつく。4は底部を残すのみで上半の形は不明。

土師器 (Fig. 265—1・5) 1の甕は床面出土で略完形である。内面はヘラ削り、外面はハケ目調整で、外面の剝落は著しい。底部は丸味があり、不安定であるが、正立する。6の把手は甕のものであろう。

以上のほかに、土師器甕口縁片2・把手1が出土した。

Tab. 81 C区第29号住居跡出土土器一覧 ()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	H 甕	略完	19.4 ～20.7	35.5	体部中位26.8	砂粒を含み、焼成良	黄褐色	
2	S 蓋	ツマミ				胎土精良、焼成良	灰色	
3	S高台杯	½	13.0	4.7	口縁部	砂粒を多く含み、焼成良	灰色	
4	S高台杯	底部				細砂を含み、焼成良	青灰色	高台径 9.6
5		把手				砂粒を含み、焼成良	灰褐色	スス付着

C区第30号住居跡 (Fig. 266, PL. 79)

北・西壁に重複する小溝状の遺構より古く営まれた住居である。北西隅は第1号溝aと重複するが、前後関係は明らかでない。各辺の長さは北壁4.7m、南壁4.7m、東壁4.2m、西壁4.2mで、ほぼ方形のプランを有する。カマドは北壁中央の竪穴内に設けられ、中央は凹み、その周囲は、床面から高さ2～19cmほどの粘土で築いたと推定される壁の一部が残存する。支柱穴はP1・P2・P3・P4の4本柱と考えられ、主軸上にはP8・P11が並ぶ。南・北壁の一部をのぞき、壁に沿って周溝が設けられている。また、P8の東側からは径12cmの礫が検出された。

遺物 (Fig. 267・268, Tab. 82, PL. 79)

須恵器・土師器・鉄滓・不明鉄製品が出土した。

須恵器 (Fig. 267—1~7・13・14・16・34, Fig. 268—35) 1・2は蓋で、ともに天井部を欠く。1は肩部に凹線をもち、口縁部内面に段をもつ。天部外面はへら削り、そのほかはヨコナデである。2は口縁端部をわずかに折り曲げたような形を呈するが、ヨコナデによるものかもしれない。3~7は杯身で、3は立ち上りの長さ2.2cmと長い。6は底部が尖った感じがしており、不安定である。立ち上りは直線的で他に比較して内傾感がある。7は口縁端部と底部の一部を欠く。調整は5を除き、いずれも外面底部がへら削り、そのほかの部分はヨコナデである。13は高台付の皿とも呼ぶべきもので、高台端部を欠く。底部内面はナデ、体部外面はへら削り、口縁部と底部外面はヨコナデ調整を施している。高台部分の調整は不明。14は高杯脚部で長方形1段の透しをもち、2カ所の透しが残っている位置から、透しは3カ所と推定した。中位やや下に凹線2本を施している。16は赤褐色を呈し、焼成不良品である。35 (Fig. 268) は口縁部と底部を欠く甕である。内面は同心円のタタキ、外面は平行タタキの上からカキ目を加える。34は把手付の壺であろうか。断面長方形の把手が1つ残っており、内面はタタキ目の上から指頭によっておさえつけ、外面は格子目タタキにカキ目調整を施す。

土師器 (Fig. 267—8~12・15・17~33) 8~12は杯で、小形の8と丸底の9~11、平底の12の3つに分類できる。8は口縁端部を欠くが、床面出土で、全体に磨減が著しい。9は口縁部がわずかに内彎し、底部内面は指頭によるナデ、そのほかは磨いている。内外面とも明茶褐色の薄い膜がかけられている。10・11は滑らかな口縁をもち、10はハケ目を残している。11の底部は厚くなる。12は口縁部がわずかに外反し、薄い体部をもつ。底部の大部分を欠くが、平底になると思われる。15・17~21は高杯である。そのうち、15・17・18は、浅く大きな杯部と外方へひらく裾部をもった、ほぼ同じ形態である。15・17は脚部外面に縦方向のへら削りを施し、脚部内面を除き丹塗りである。18は杯部内面に黄褐色の薄い膜がある。これら3個体はいずれも胎土・焼成良好の精製品である。21は、これらと同じような胎土・焼成であるが、杯部は丸く小形である。19・20は上記4個体よりも胎土が粗く、硬質で、須恵器的要素をもつ。20は外面に一段がある。2個体とも外面に赤黄色の薄い膜がある。22・23・26・29・30は小形の甕で、26は内面へら削り、外面ハケ目調整であるが、30は口縁部内面に横方向のハケ目を残し、体部内面はハケ目の上からナデを加える。22・23・29は器表の剝落が著しく調整は不明。24・25は大形の甕で、ともに床面出土である。内面はへら削り、外面はハケ目、口縁部ヨコナデ調整を施す。27も大形の甕の底部と思われる。28・31・32も大形品と思われるが、全形は不明である。31・32は頸部内面に明瞭な稜線をもつ。

本住居跡は、遺跡中もつとも遺物の豊富な住居跡である。須恵器では、蓋2、杯5、高杯2、高台付皿1、壺? 1、甕2があり、土師器では杯6、高杯7、甕13、甗1、把手1がある。

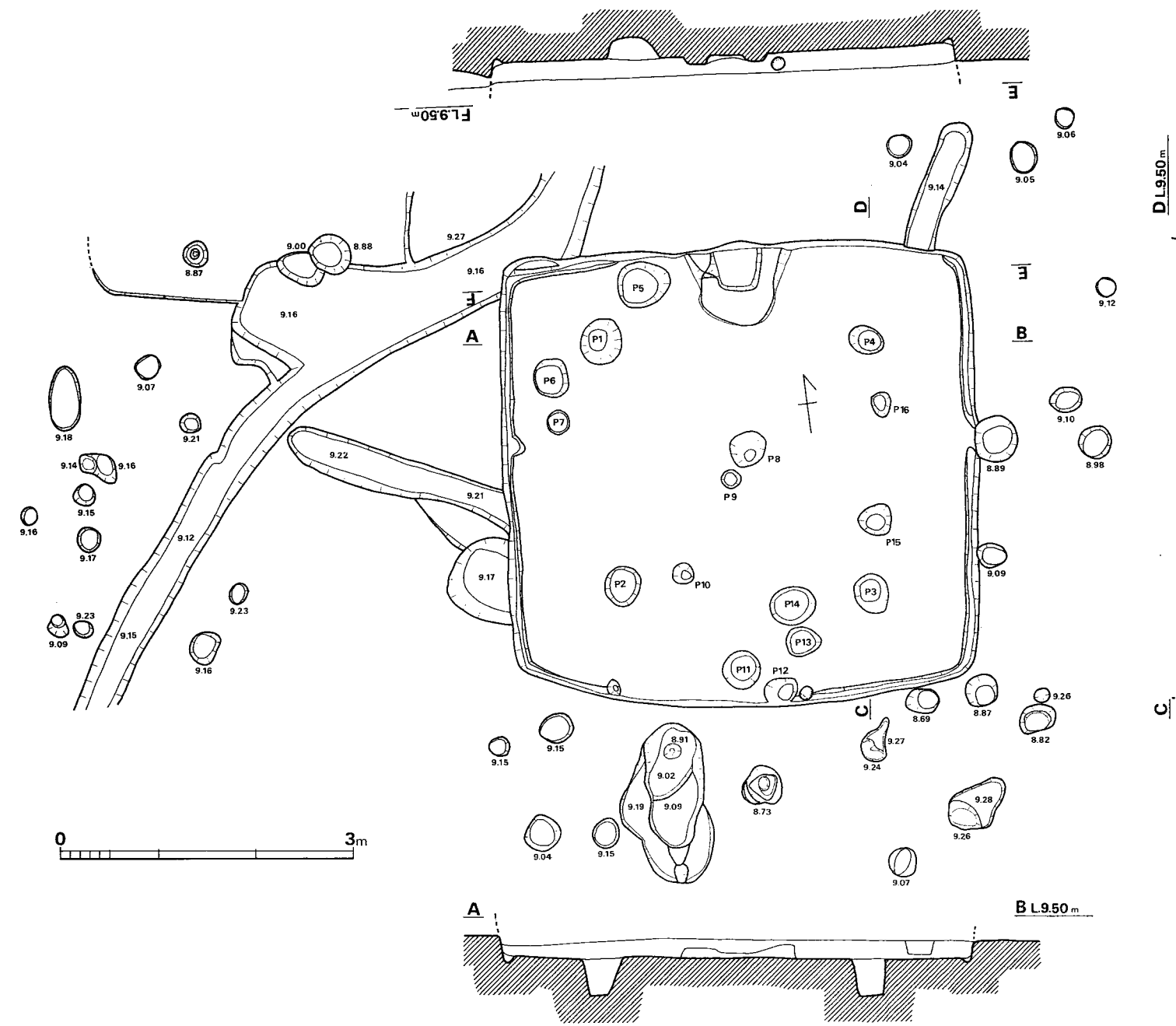


Fig. 266 C区第30号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)

P 1(-39.0)・P 2(-24.5)・P 3(-27.0)・P 4(-37.0)・P 5(-22.0)・P 6(-15.5)・P 7(-10.5)・P 8(-19.0)・P 9(-3.0)・P 10(-11.5)

P 11(-27.0)・P 12(-44.0)・P 13(-16.0)・P 14(-14.0)・P 15(-41.0)・P 16(-16.5)

P1~P2 2.55m・P2~P3 2.55m・P3~P4 2.60m・P4~P5 2.75m

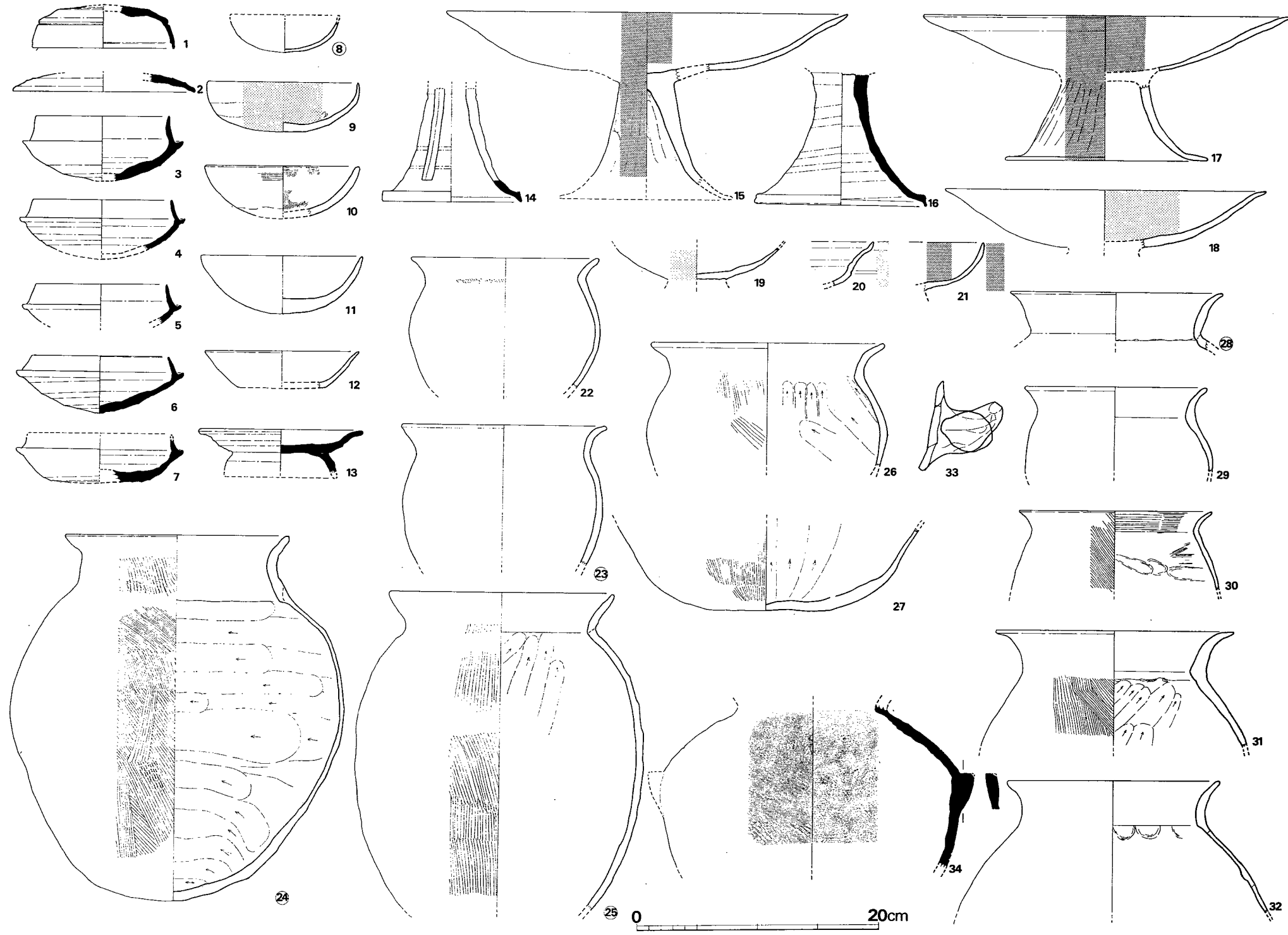


Fig. 267 C区第30号住居跡出土土器実測図 (I) (縮尺1/4)

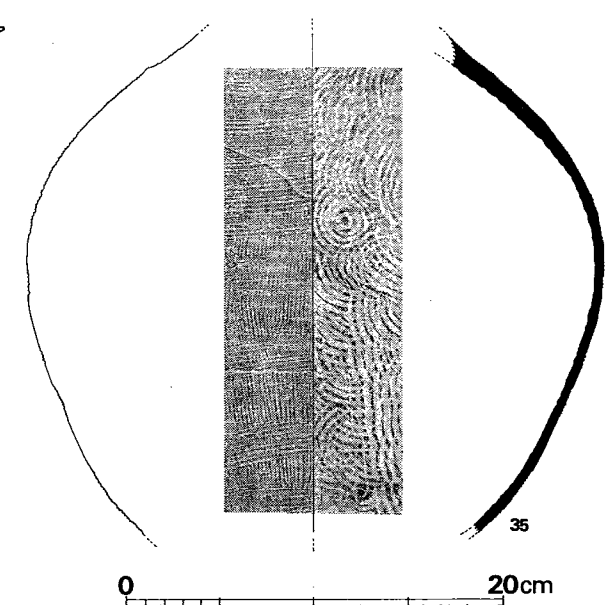


Fig. 268 C区第30号住居跡出土土器
実測図 (II) (縮尺1/4)

Tab. 82 C区第30号住居跡出土土器一覧()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	S 蓋	天井部欠	(11.7)	(3.5)	口縁部	砂粒を含み、焼成良	灰 色	
2	S 蓋	口縁部	(15.2)		口縁部	胎土精良、やや軟質	灰 黄 色	
3	S 杯	1/2	(11.1)	(5.3)	受け部(13.4)	少量の砂粒を含み、堅緻	外面 灰褐色 内面 青灰色	
4	S 杯	底部欠	(11.5)	(5.0)	受け部(13.8)	胎土精良、焼成不良	黄 褐 色	
5	S 杯	底部欠	(10.9)		受け部(13.2)	胎土精良、焼成良	外面 黄灰色 内面 灰 色	
6	S 杯	略 完	11.4	4.7	受け部 14.0	砂粒を含み、堅緻	灰 色	
7	S 杯	体 部		(4.2)	受け部 14.0	砂粒を含み、堅緻	青 灰 色	
8	H 杯	口縁部欠	(9.0)	(3.1)	口縁部	胎土精良、焼成良	赤 黄 色	
9	H 杯	1/2	(12.4)	4.2	口縁部	胎土精良、焼成良	淡 黄 褐 色	内外面化粧土
10	H 杯	底部欠	(12.7)	(4.3)	口縁部	砂粒を含み、焼成良	淡 茶 褐 色	
11	H 杯	略 完	13.6	4.8	口縁部	砂粒を多く含み、焼成良	茶 褐 色	
12	H 杯	底部欠	12.9	3.1	口縁部	胎土精良、焼成良	灰 黄 色	
13	S高台杯	高台端部欠	(13.7)	(4.0)	口縁部	砂粒を多く含み、堅緻	灰 色	
14	S高杯	脚 部				砂粒を多く含み、堅緻	外面 灰褐色 内面 暗紫色	長方形透し3 脚端部径11.5
15	H高杯	杯部の一部欠 脚端部欠	(33.5)	(15.7)	口縁部	胎土精良、焼成良	赤 黄 色	丹塗り、接合部径4.7
16	S高杯	脚 部				砂粒を含み、酸化炎焼成	黄 褐 色	化粧土、脚端部径14.3
17	H高杯	接合部欠	(30.5)	(12.0)	口縁部	胎土精良、焼成良	淡 黄 褐 色	丹塗り
18	H高杯	杯 部	(26.8)		口縁部	胎土精良、焼成良	外面 赤褐色 内面 黄褐色	内面化粧土
19	H高杯	杯 部				砂粒を少量含み、焼成良	赤 黄 色	外面化粧土
20	H高杯	杯 部				砂粒を少量含み、焼成良	茶 褐 色	外面化粧土
21	H高杯	杯 部				胎土精良、焼成良	茶 黄 色	内外面丹塗り
22	H小形甕	底部欠	(15.3)		体部中位15.8	砂粒を含み、焼成良	茶 褐 色	二次加熱
23	H小形甕	底部欠	(16.8)		口縁部	砂粒を含み、焼成良	外面 赤褐色 内面 茶褐色	二次加熱
24	H 甕	略 完	18.4	30.6	体部中位27.6	砂粒を含み、焼成良	淡 黄 褐 色	スス付着
25	H 甕	底部欠	(18.7)		体部中位(24.0)	砂粒を含み、焼成良	茶 色	
26	H小形甕	下半欠	(19.5)		体部最大径 ≒口径	砂粒及び黒雲母を含み、やや不良	黒 褐 色	
27	H 甕	底 部				砂粒を含み、焼成良	黄 灰 色	スス付着
28	H 甕	口縁部	(17.6)			砂粒を含み、やや軟	茶 褐 色	
29	H小形甕	下半欠	15.4			砂粒及び黒雲母を含み、焼成良	外面 赤褐色 内面 茶褐色	

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
30	H小形甕	下半欠	(16.0)			砂粒及び黒雲母を含み、焼成良	明茶褐色	
31	H甕	口縁部	(19.7)		体部	砂粒及び黒雲母を含み、焼成良	外面 黄褐色 内面 暗褐色	
32	H甕	下半欠	(17.7)		体部	砂粒及び黒雲母を含み、焼成良	明茶褐色	
33		把手				少量の砂粒を含み、焼成良	赤褐色	
34	S壺?	体部				細砂を含み、焼成良	青灰色	
35	S甕	体部				砂粒を含み、焼成やや甘い	青灰色	体部最大径中位やや上 (30.5)

C区第31号住居跡 (Fig. 269, PL. 80)

南東隅は第1号溝 a と重複するが前後関係は不明である。北壁は長さ3.1m、西壁は2.9mで、隅丸の方形プランを有する。カマドは北壁中央にあり、堅穴外に23cmほど張り出している。その中央は凹み、周囲には、床面から高さ5~10cmほどの粘土で築いたと推定される壁の一部が残存する。支柱穴はP1・P2・P3・P4の4本柱と考えられる。

遺物 (Fig. 270, Tab. 83)

須恵器の出土はなく、土師器のみである。

土師器 (Fig. 270—1・2) 1は甑底部で単孔の甑孔をもつ。内面は上へ向うへラ削り、外面はハケ目調整である。2は1と同一個体と思われる把手である。

以上のほかに、1とは別個体と思われる甑片が出土した。

Tab. 83 C区第31号住居跡出土土器一覧 ()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	H甑	底部				砂粒を含み、焼成良	茶黄色	スス付着
2		把手				砂粒を含み、焼成良	茶黄色	1と同一個体か?

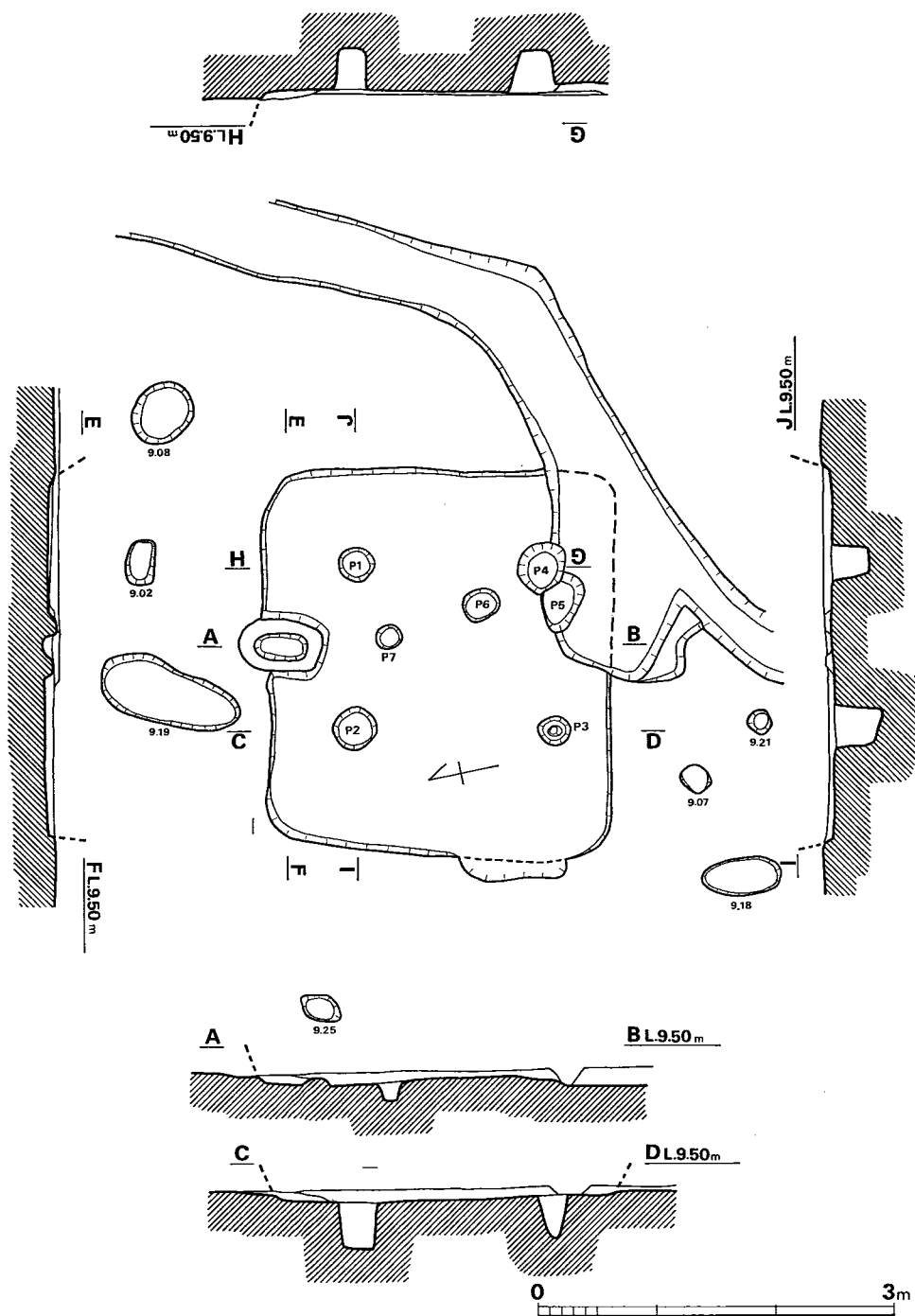


Fig. 269 C区第31号住居跡実測図 (縮尺1/60)

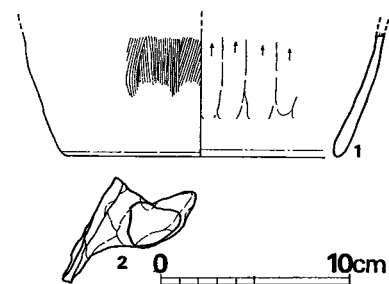
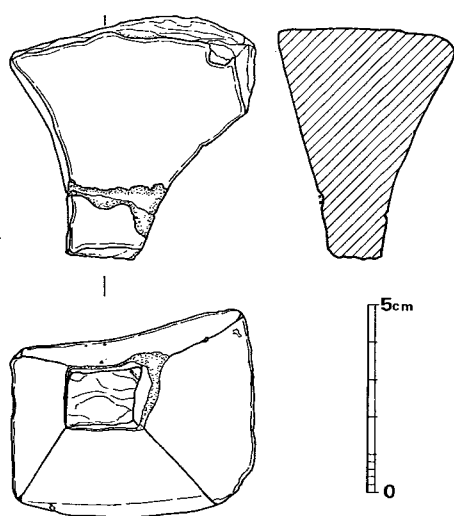


Fig. 270 C区第31号住居跡出土土器
実測図 (縮尺1/4)

床面からの深さ (cm)
 P1(-32.5)・P2(-37.0)・P3(-36.0)
 P4(-36.0)・P5(-25.0)・P6(-20.0)
 P7(-16.5)
 P1~P2 1.35m・P2~P3 1.65m
 P3~P4 1.40m・P4~P1 1.55m



C区第32号住居跡 (Fig. 271)

東半部は調査区外にあり、北西隅と西壁・南壁の一部を検出したのみで詳細は不明である。南壁はやや胴張りをなす。調査部分ではカマド・焼土・灰は検出されず、また支柱穴についても不明である。

遺物 (Fig. 272, PL. 80)

弥生土器・土師器・須恵器・砥石が出土した。土器はすべて小片である。Fig. 272の砥石は凝灰岩製で、角錐台状を呈している。キメはやや粗く、4面を使用している。床面出土。

Fig. 272 C区第32号住居跡出土遺物
実測図 (縮尺1/2)

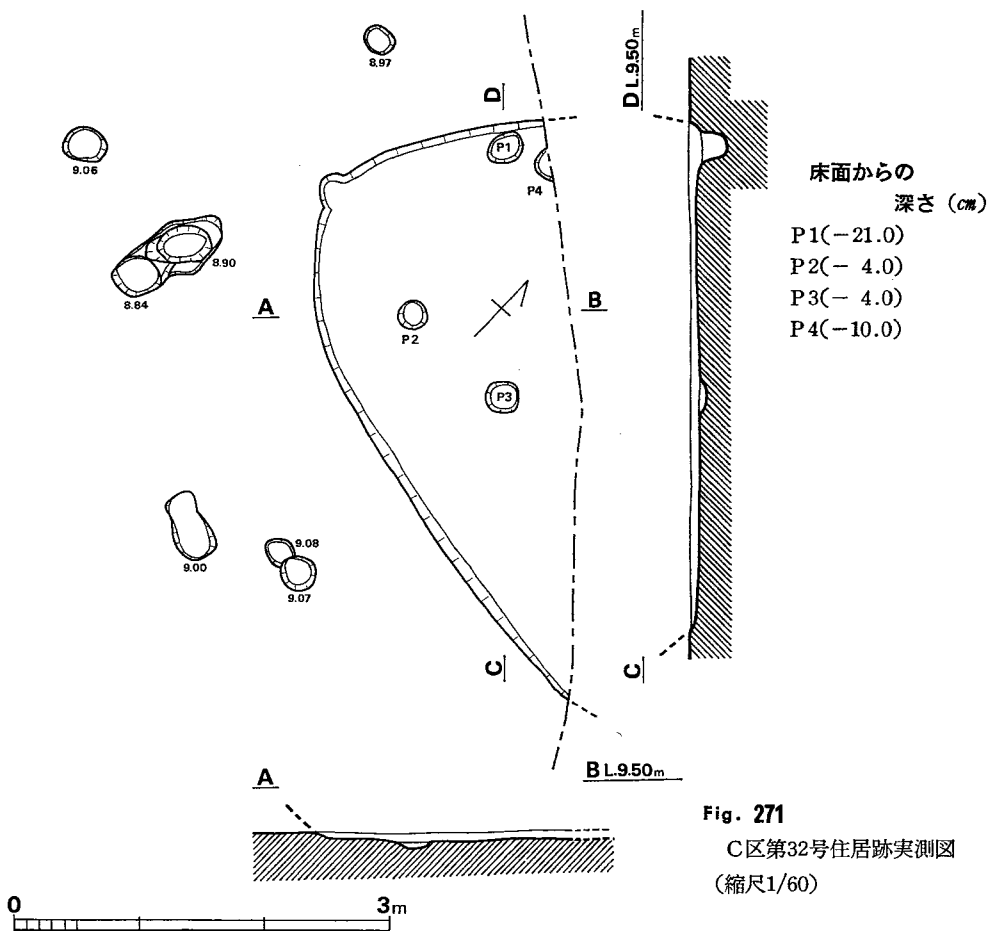


Fig. 271

C区第32号住居跡実測図
(縮尺1/60)

C区第33号住居跡 (Fig. 273, PL. 81)

東側に重複する第1号溝aの埋没後に営まれたものである。各辺の長さは北壁3.24m、南壁3.55m、東壁4.21m、西壁3.85mで長方形プランを有する。カマドは西壁中央からやや北寄りの堅穴内にあり、中央はよく焼け、その周囲は、床面から高さ5cmほど、粘土で築いたと推定される壁の一部が残存する。支柱穴はP1・P2・P3・P4の4本柱と思われ、さらにP5が補柱となるものであろうか。また南壁に沿った堅穴内にはP6・P7が並ぶ。

遺物 (Fig. 274, Tab. 84, PL. 81)

須恵器・土師器を出土した。

須恵器 (Fig. 274—1・3・5) 1は高台付の杯で底部を欠く。高台端部は丸味をもち、内側が地につく。3は黄白色を呈する焼成不良品で、底部外面をナデ、そのほかはヨコナデである。全体に歪みをもつ。5はカマド出土の高杯脚部で、二次的な火熱を受けており、茶黄色を呈する。内面にはシボリの痕を残しており、焼成不良品と思われる。

土師器 (Fig. 274—2・4・6—15) 2の杯は精製品であるが、内外面とも磨減著しく、調整は不明である。4・6は高杯で、別個体である。4の杯部は外面丹塗りで、6は黄褐色の薄い膜がある。7・8は小形の甕で、8は黄褐色の薄い膜がある。9～11は大形品と思われるが、頸部以下の形は不明である。12は底部の一部を欠くが、ほぼ全形がわかる。体部中位に最大径があり、口縁部は外反する。口縁端部はやや肥厚し、頸部内面には稜線をもつ。内面はヘラ削り、外面はハケ目調整である。13は甕底部で、単孔をもつ。14・15の把手のうち、14は黄褐色の薄い膜がある。

以上を含めて、須恵器蓋1・杯3・皿1・高杯1、土師器杯2・高杯1・甕7・甕1・把手3が出土した。

Tab. 84 C区第33号住居跡出土土器一覧 ()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	S高台杯	底部欠	(14.9)	4.1	口縁部	細砂を含み、焼成良	青灰色	
2	H杯	口縁片				胎土精良、焼成軟質	淡黄褐色	
3	S皿		(14.1)	1.4		胎土精良、焼成不良軟質		歪みあり
4	H高杯	杯部	18.2			胎土精良、やや軟質		
5	S高杯	脚部			脚端径12.5	細砂を含む、酸化炎焼成	茶黄色	二次加熱
6	H高杯	脚部				胎土精良、やや軟	黄褐色	接合部径7.6
7	H小形甕	底部欠	(15.6)		体部中位16.5	砂粒を少量含み、焼成良	外面暗褐色 内面黒褐色	
8	H小形甕	底部欠	(16.5)	16前後	体部中位17.4	砂粒を少量含み、焼成良	黄褐色	化粧土

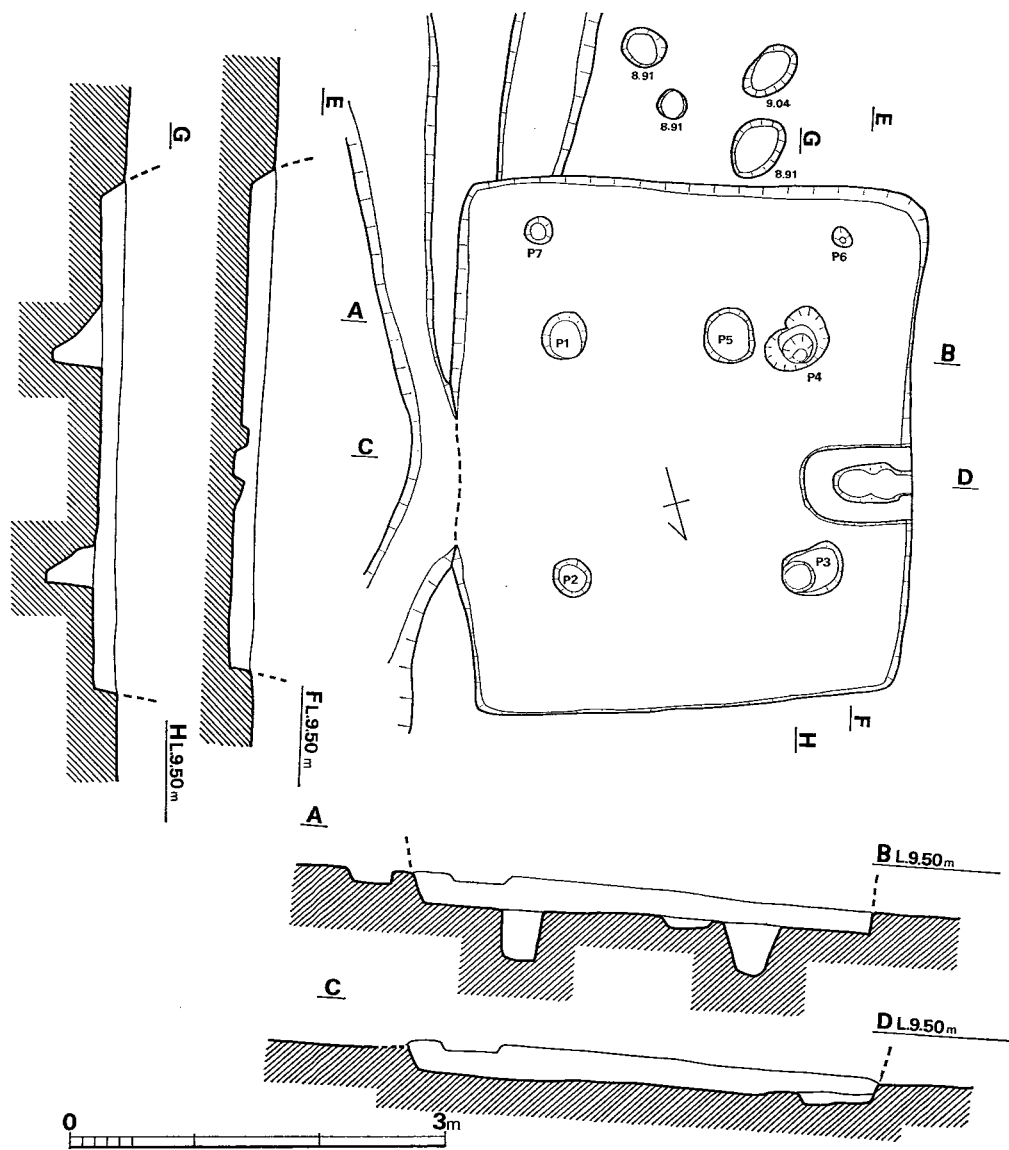


Fig. 273 C区第33号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)
 P1(-37.5)・P2(-30.0)・P3(-38.0)・P4(-38.0)・P5(-8.0)・P6(-10.0)・P7(-6.0)
 P1~P2 1.90m・P2~P3 1.80m・P3~P4 1.88m・P4~P1 1.88m

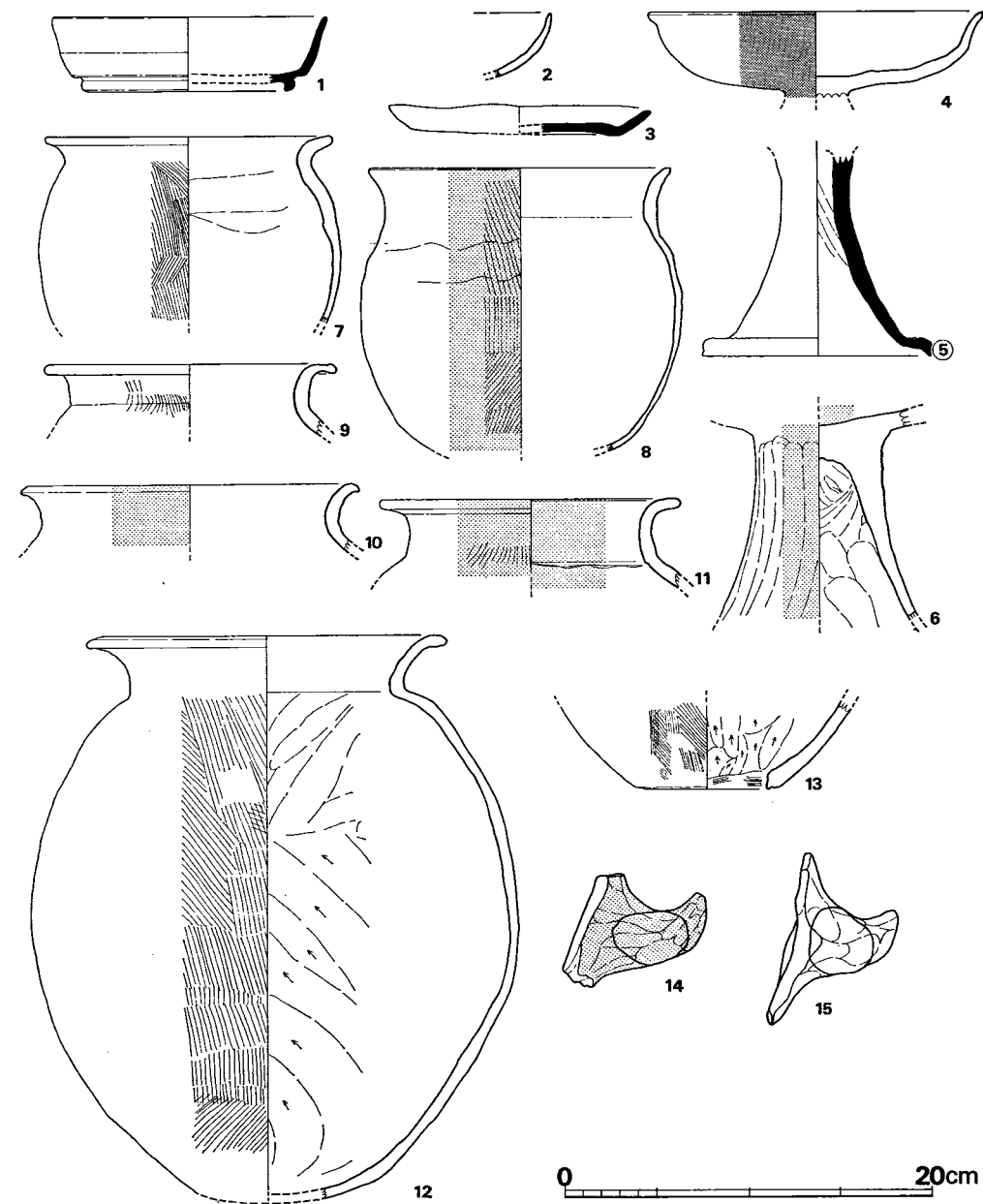


Fig. 274 C区第33号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

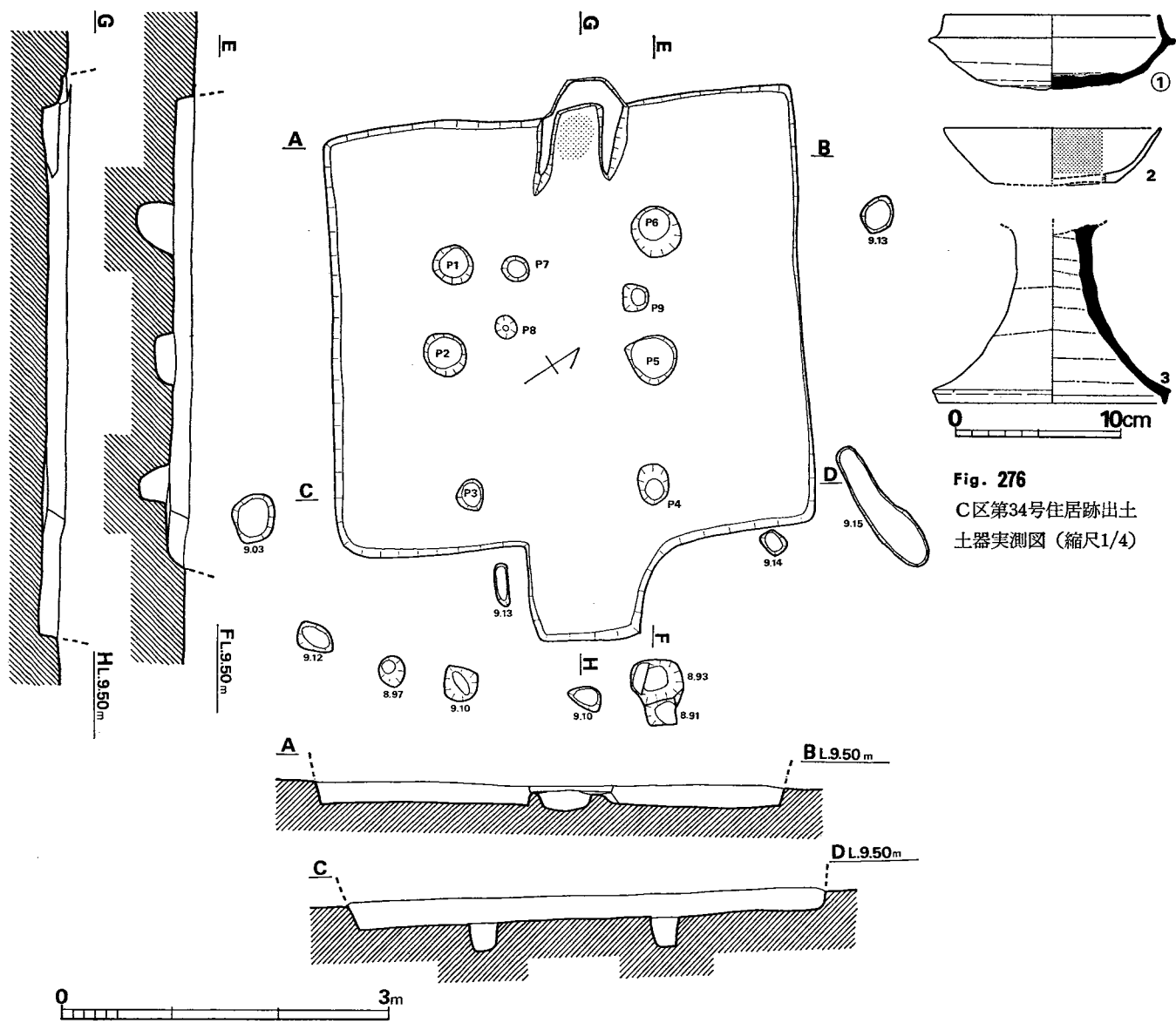


Fig. 275 C区第34号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)
 P1(-43.0)・P2(-24.0)・P3(-23.0)・P4(-28.0)・P5(-17.5)・P6(-32.0)
 P7(-10.0)・P8(- 9.0)・P9(-23.0)
 P1~P2 0.8m・P2~P3 1.30m・P3~P4 1.68m・P4~P5 1.15m
 P5~P6 1.20m・P6~P1 1.90m
 P1~P3 2.10m・P4~P6 2.35m

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
9	H小形甕	口縁部	(15.9)			砂粒を少量含み、焼成良	茶赤色	
10	H小形甕	口縁部	(18.5)			砂粒を少量含み、焼成良	茶赤色	化粧土
11	H小形甕	口縁部	(16.3)			砂粒を少量含み、焼成良	茶赤色	
12	H甕	底部欠	19.6	(31.0)	体部中位26.6	砂粒を含み、焼成良	明茶褐色	
13	H甕	底部				砂粒を含み、焼成良	淡黄色	孔径 6.5
14		把手				わずかに砂粒を含み、焼成良	黄褐色	化粧土?
15		把手				わずかに砂粒を含み、焼成良	黄褐色	

C区第34号住居跡 (Fig. 275, PL. 82)

各辺の長さは北壁4.2mで、南壁3.70m、東壁4.23m、西壁4.23mで、ほぼ方形プランを有する。東壁中央には、140×90cmの台形張り出しがあり、入口様のものと思われる。カマドは西壁中央のやや北寄りに設けられ、堅穴外に29cmほど張り出している。その中央はよく焼け、両脇には粘土で築いたと推定される壁の一部が床面から高さ6～13cmほど残存する。支柱穴はP1・P2・P3・P4・P5・P6の6本柱と思われ、堅穴外には北壁に沿って柱穴が検出されたが、この住居に伴うものかは不明である。

遺物 (Fig. 276, Tab. 85, PL. 82)

須恵器・土師器が出土した。

須恵器 (Fig. 276—1・3) 1は床面出土の杯で、略完形である。黄白色を呈する焼成不良品で底部外面のヘラ削り以外はヨコナデである。3は赤褐色を呈する高杯脚部で、内面は螺旋状のヨコナデ稜線を残している。

土師器 (Fig. 276—2) 2は平底の杯で内面には黄褐色の薄い膜がる。器面は平滑である。

以上のほかに、弥生土器片2、土師器甕片・甕片・丹塗りの高杯片、須恵器蓋が出土した。

Tab. 85 C区第34号住居跡出土土器一覧 ()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	S杯	略完	13.0	4.5	受け部15.0	細砂を含み、焼成不良	黄白色	
2	H杯	底部欠	(13.1)	3.5	口縁部	細砂を含み、軟質	外面 赤褐色 内面 黄褐色	
3	S高杯	脚部			脚端部径13.7	細砂を含み、酸化炎焼成	赤褐色	

C区第35号住居跡 (Fig. 277, PL. 83)

各辺の長さは北壁3.86m、南壁3.94m、東壁3.95m、西壁3.65mで、ほぼ方形プランを有する。北壁には50×170cmの長方形を呈する張り出しがあり、その床面は平坦で堅穴内の床面より20cmほど高く、ピット2個(P6・P7)がある。カマドは西壁中央のやや北寄り、堅穴内に設けられる。この中央は凹んでよく焼け、両脇には床面から高さ10~20cmほどの粘土で築いたと推定される壁の一部が残存する。カマドの北・南両脇にはP1・P8があり、支柱穴はP1・P2・P3・P4か、またはP2・P3・P7・P8の4本柱とも思われる。

遺物 (Fig. 278・279, Tab. 86PL. 83)

須恵器・土師器・鞆羽口・砥石が出土した。

須恵器 (Fig. 278—1~3, 5~8) 1・2は床面出土の蓋で、1は略完形である。1は肩部に段をもち、口縁部内面には不明瞭な段がある。天井部外面にヘラ記号をもつ。3は灰褐色を呈する焼成不良の杯で、底部内面はナデ、外面はヘラ削りし、そのほかはヨコナデである。5~8は黄褐色~赤褐色を呈する高杯で、6はカマド内出土、7は床面出土である。5と6は接合しないが、胎土・焼成・調整等から、同一個体と思われる。6は支脚に転用されたのか、二次火熱を受けている。

Tab. 86 C区第35号住居跡出土土器一覧()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	S 蓋	略完	12.3	4.2	口縁部	細砂を含み、堅緻	灰褐色	天井外面にヘラ記号
2	S 蓋	口縁部				砂粒を含み、堅緻	青灰色	
3	S 杯	½	(11.8)	4.4	受け部(14.5)	細砂を含み、やや軟	外面 灰褐色 内面 灰色	
4	H 碗	½	(14.4)	7.3	口縁部	砂粒を含み、やや軟	茶褐色	
5	S 高杯	杯部	16.7		口縁部	胎土精良、焼成良、硬質	赤褐色	6と同一個体か?
6	S 高杯	脚部				胎土精良、焼成良、硬質	赤褐色	脚端部径15.5 二次加熱
7	S 高杯	杯部	(18.5)		口縁部	砂粒を含み、やや軟	明黄褐色	
8	S 高杯	脚部				砂粒を少量含み、焼成良	黄褐色	脚端部径13.6
9	H 高杯	脚部				砂粒を少量含み、焼成良	黄褐色	
10	H 小形甕	下半欠	(17.0)		体部中位17.5	砂粒及び黒雲母を多く含み、焼成不良	外面 赤褐色 内面 黄褐色	
11	H 甕	口縁部	(20.7)			砂粒を含み、焼成良	茶褐色	
12	H 甕	口縁部欠			体部中位18.2	大粒の砂を含み、焼成良	赤褐色~黄褐色	6 孔
13	H 甕	底部				砂粒を含み、焼成良	赤褐色	

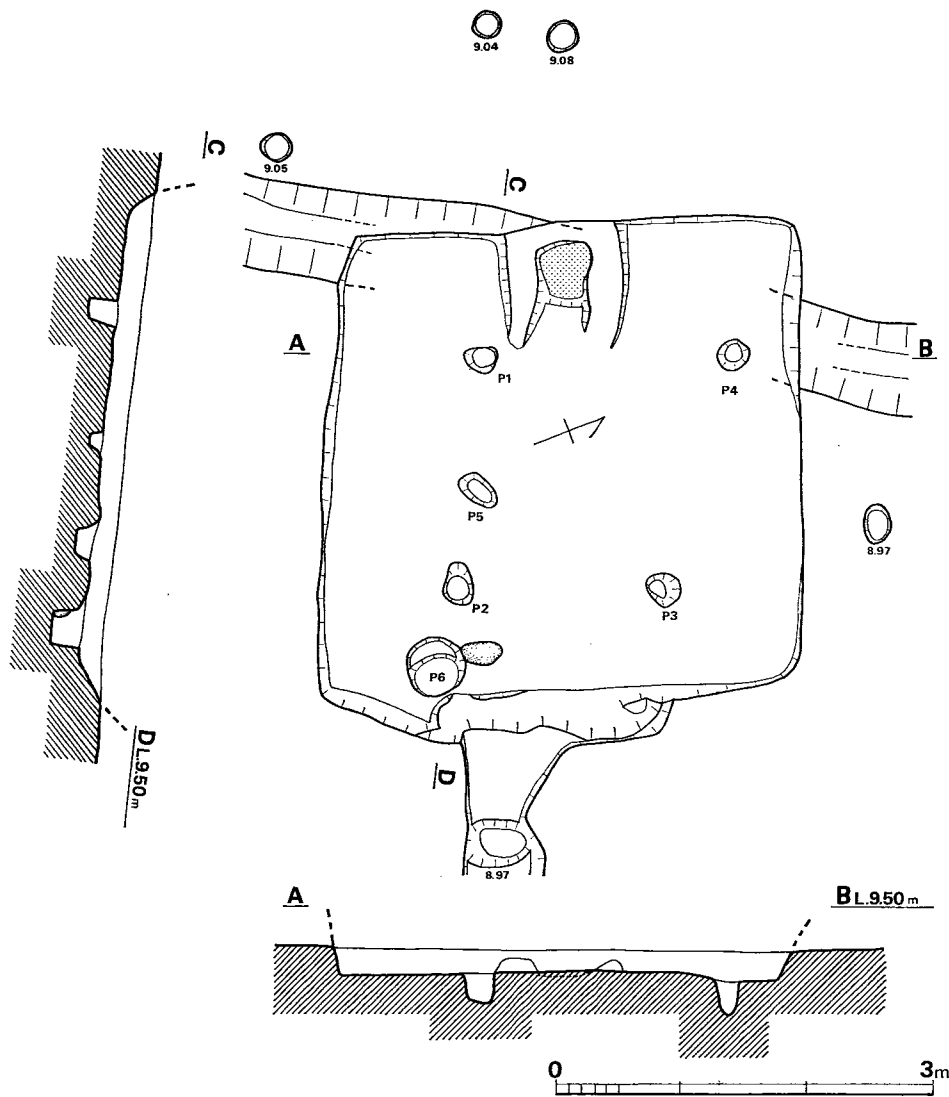


Fig. 280 C区第36号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)

P1(-22.0)・P2(-11.5)・P3(-18.5)・P4(-26.0)・P5(-10.0)・P6(-24.5)

P1~P2 1.85m・P2~P3 1.63m・P3~P4 1.95m・P4~P1 2.00m

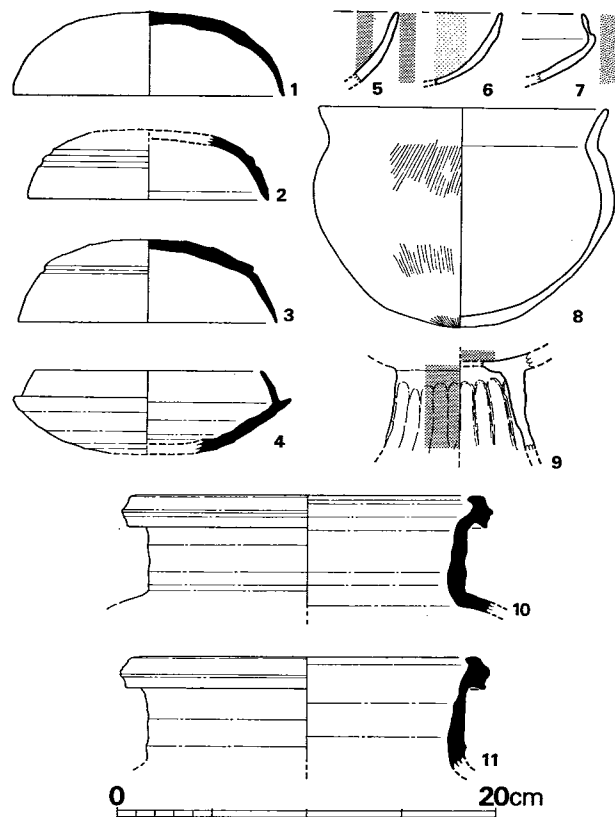


Fig. 281 C区第36号住居跡出土遺物実測図 (I) (縮尺1/4)

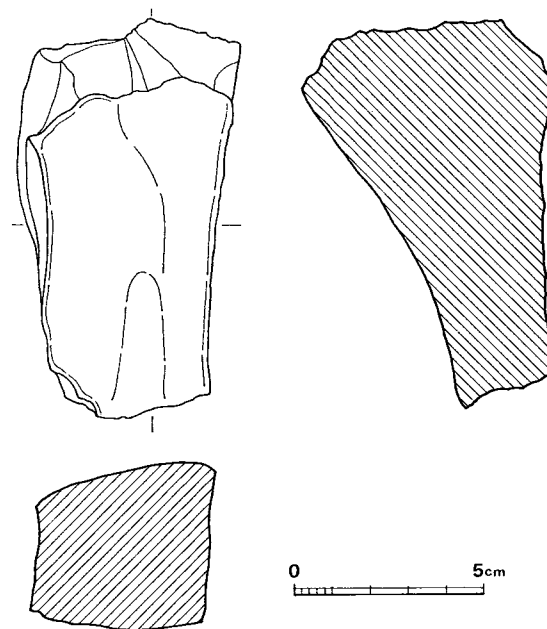


Fig. 282 C区第36号住居跡出土遺物実測図 (II) (縮尺1/2)

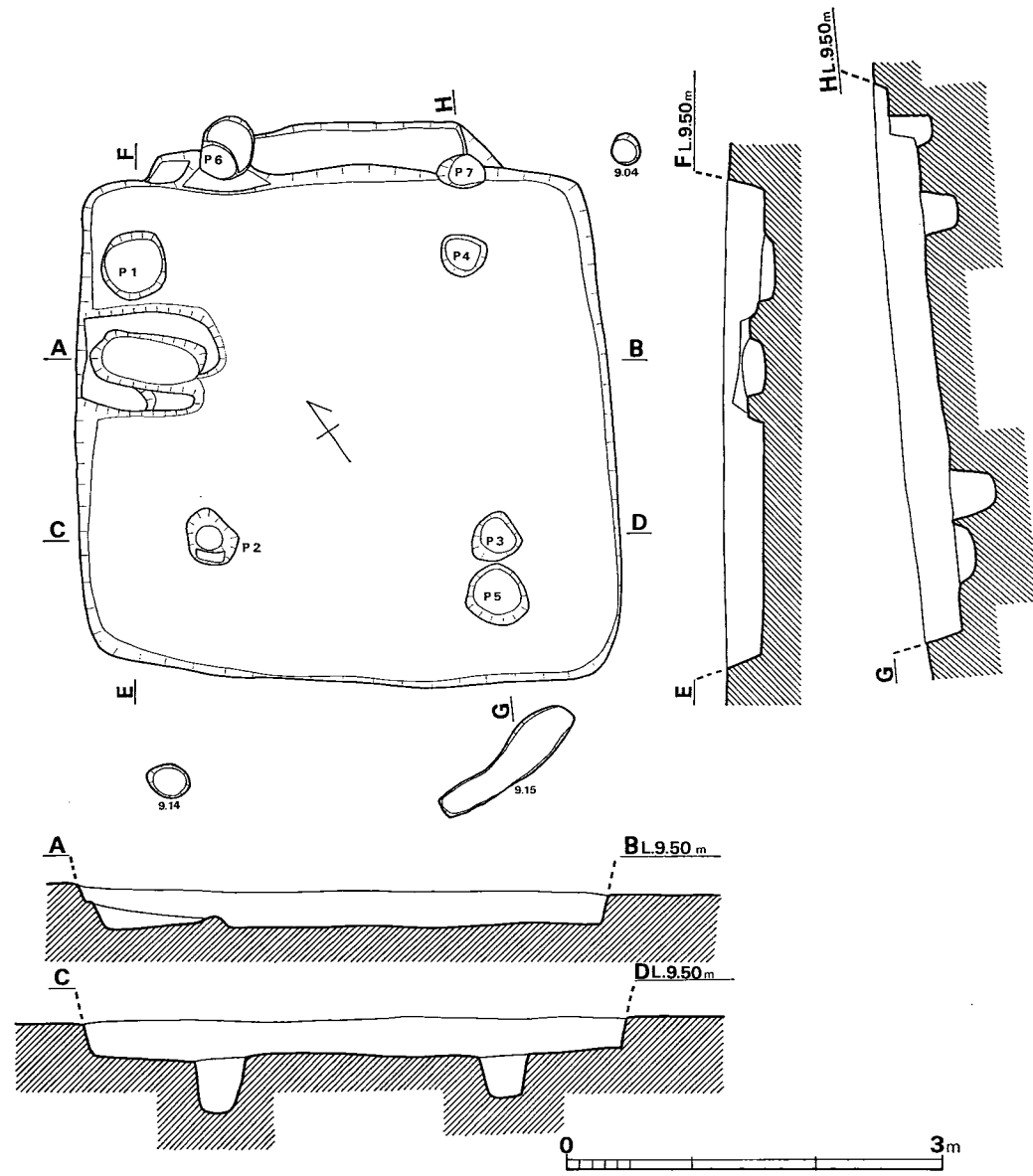


Fig. 277 C区第35号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)
 P1(-9.0)・P2(-44.5)・P3(-35.0)・P4(-28.0)・P5(-11.5)・P6(-18.0)・P7(-12.5)
 P1~P2 2.30m・P2~P3 2.30m・P3~P4 2.30m・P4~P1 2.65m

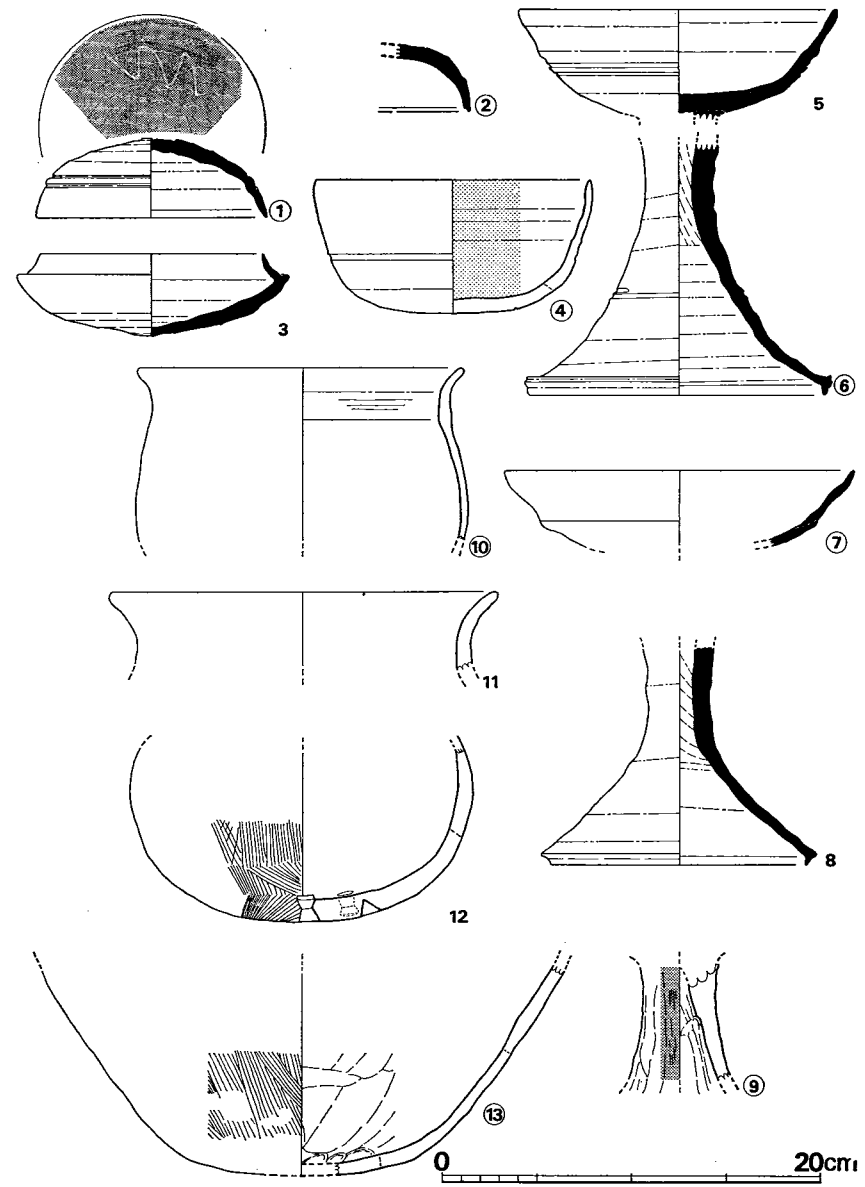


Fig. 278 C区第35号住居跡出土遺物実測図 (I) (縮尺1/4)

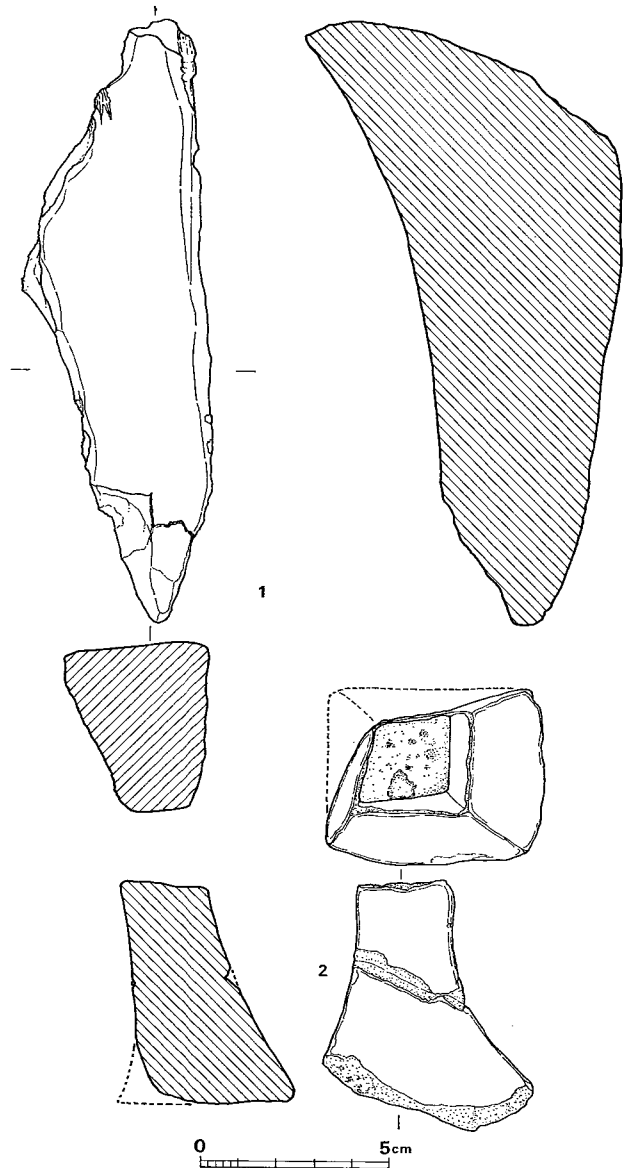


Fig. 279 C区第35号住居跡出土遺物実測図 (II) (縮尺1/2)

土師器 (Fig. 278—4・9・13) 4は床面出土の椀で、体部に浅い凹線をもつ。内面には赤褐色の薄い膜がある。9は外面丹塗りの高杯脚部で床面から出土した。10・11は小形甕で、10は床面出土である。いずれも器表の剝落著しく、調整は不明。12の甑は、焼成後に穿孔されている。内外に貫通しているものが5孔、外面からの1孔は内面へ貫通していない。外面は二次火熱を受け赤褐色を呈しており、内面はヘラ削りと思われる。13は床面出土の甕底部で、内面へラ削り、外面ハケ目調整である。

これらを含めて、須恵器蓋2・杯3・高杯3・甕1、土師器椀1・甕4が出土した。

砥石 (Fig. 279—1・2, PL. 83) 1は床面から出土した凝灰岩製の砥石で2面を使用している。2も床面出土で、4面を使用し凝灰岩製。ともにキメはやや粗い。

C区第36号住居跡 (Fig. 280, PL. 84)

第3号溝および東壁に重複する小溝が埋没した後に営まれたものである。各辺の長さは北壁3.60m、南壁4.0m、東壁3.75m、西壁3.50mで、方形プランを有する。東壁は170×40cmほど張り出すが、壁が崩壊したものと考えられる。カマドは西壁中央の竪穴内にあり、その中央は凹んでよく焼け、両脇には床面から高さ10cmほどの、粘土で築いたと推定される壁の一部が残存する。支柱穴はP1・P2・P3・P4の4本柱と思われ、P6の北側に接して30×20cmほどの礫が検出された。

遺物 (Fig. 281・282, Tab. 87, PL. 84)

須恵器・土師器・砥石が出土した。

須恵器 (Fig. 281—1~4・10・11) 1~3は蓋で2が硬質のほかは1・3ともに焼成不良である。1は黄灰色を呈し、全面磨滅しており、調整は全く不明である。2は肩部を浅い凹線2

Tab. 87 C区第36号住居跡出土土器一覧 ()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	S 蓋	½	(14.3)	4.4	口縁部	大粒の砂粒を含む、酸化炎焼成、軟質	黄灰色	
2	S 蓋	天井部欠	(12.7)	(3.7)	口縁部	胎土、焼成良	外面 灰紫色 内面 灰褐色	
3	S 蓋	½	(13.6)	4.4	口縁部	細砂を含む、酸化炎焼成	黄褐色	
4	S 杯	底部欠	(11.8)	4.5	受け部14.5	砂粒を含み、堅緻	外面 灰紫色 内面 灰褐色	
5	H 杯	口縁部				胎土精良、焼成良	淡茶黄色	丹塗
6	H 杯	口縁部				胎土精良、焼成良	茶褐色	化粧土
7	H 杯	口縁部~体部				胎土精良、焼成良	淡黄褐色	外面黒色
8	H 鉢	復原完	(15.2)	11.6	体部上位 (16.0)	細砂を含み、焼成良	淡茶褐色	

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
9	H高杯	脚部				胎土精良、焼成良	赤黄色	丹塗り
10	S甕	口縁部	(18.5)			砂粒を含み、焼成良	青灰色	
11	S甕	口縁部	(18.3)			砂粒を含み、焼成良	黄灰色	

本で段状につくりだし、天井部外面はヘラ削り、ほかの部分はヨコナデである。3は肩部に段をもち、口縁端部は薄くなる。4の杯は立ち上りが途中で内傾する。外面底部はヘラ削り、ほかの部分はヨコナデである。10・11はほとんど同じ形態であるが、別個体である。ともに現存器面はヨコナデ調整で、口縁部付近は強いヨコナデを施す。11は焼成不良で黄灰色を呈する。

土師器 (Fig. 281—5~9) 5・6・7は杯で5は内外面とも丹塗り、6は内面に赤褐色の薄い膜がある。7は外面黒色の薄い膜がある。いずれも精製品である。8は体部上位に最大径をもつ鉢である。外面にハケ目を残す。9は丹塗りの高杯で、脚部外面はヘラ削りを施す。

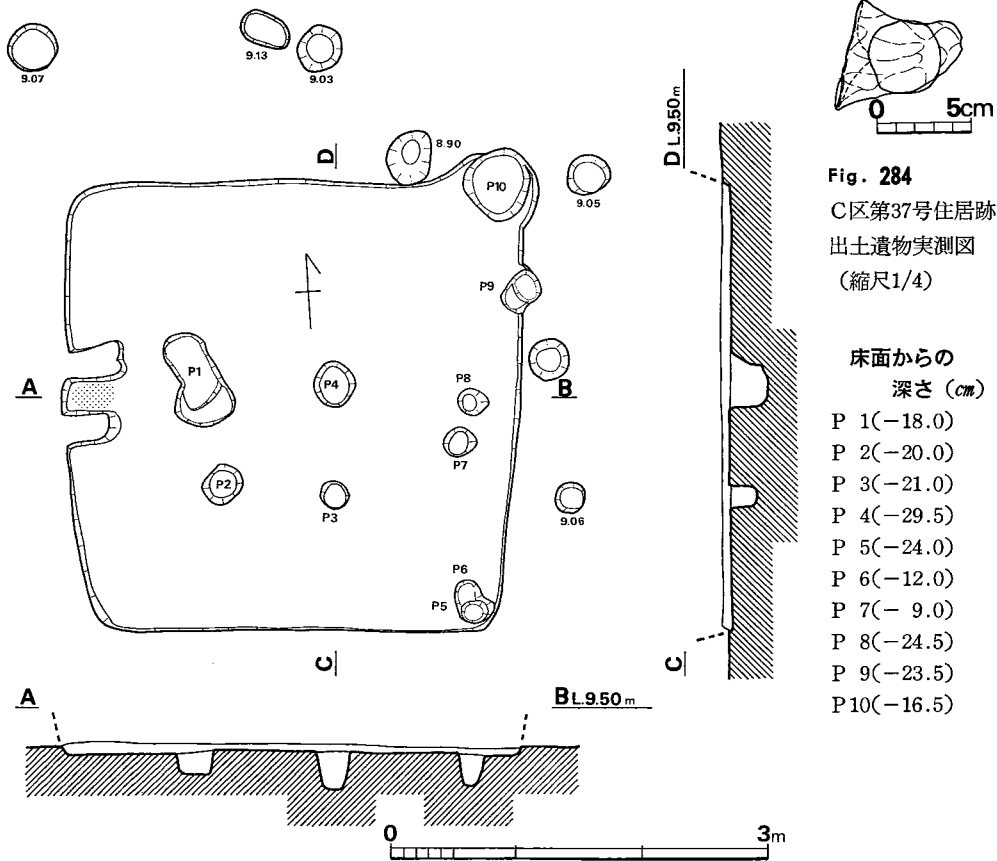


Fig. 283 C区第37号住居跡実測図 (縮尺1/60)

Fig. 284

C区第37号住居跡
出土遺物実測図
(縮尺1/4)

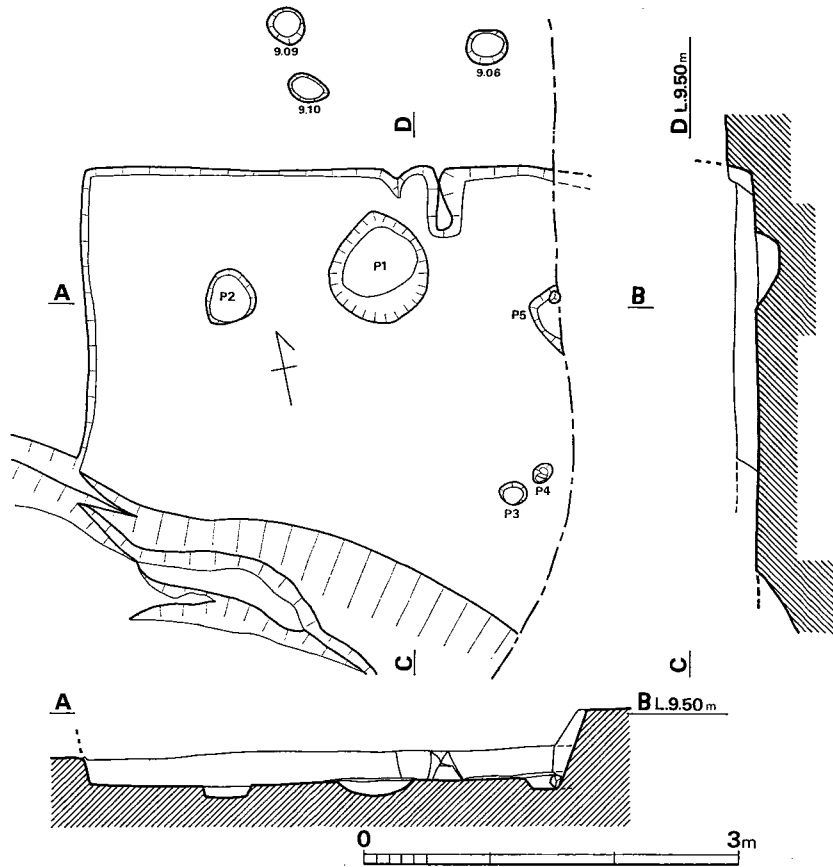


Fig. 285 C区第38号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)
 P1(-25.5)・P2(-9.0)・P3(-11.0)・P4(-16.0)・P5(-10.0)
 P2~P5 2.55m

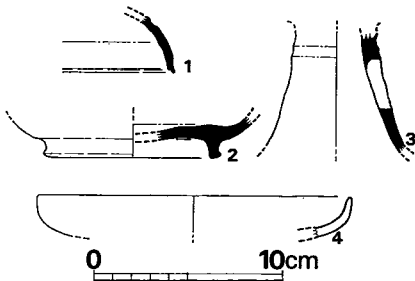


Fig. 286 C区第38号住居跡出土遺物実測図
 (I) (縮尺1/4)

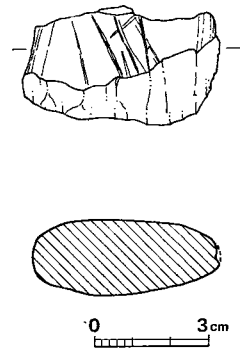


Fig. 287 C区第38号住居跡出土遺物
 実測図 (II) (縮尺1/2)

以上を含めて、須恵器では蓋5・杯1・甕2があり、土師器では杯3・高杯4・鉢1・甕4が出土した。なお、カマド内より二次火熱を受けた甕底部が出土している。

砥石 (Fig. 282) 砂岩質で、3面を使用している。

C区第37号住居跡 (Fig. 283, PL. 68)

各辺の長さは北壁3.6m、南壁3.1m、東壁3.6m、西壁3.5mで、ほぼ方形プランを呈する。カマドは西壁中央の竪穴内に設けられ、床面から高さ1.0cmほどの粘土で築いたと推定される壁の一部が残存する。支柱穴は明確ではないが、主軸上にP1・P4・P8は並び、これと直交してP5・P8・P10は並ぶ。

遺物 (Fig. 284)

図示できる遺物は、把手のみである。本体との接合面は凹んでいる。黄褐色を呈し、焼成は良い。

これらのほかに、須恵器片・土師器片が少量出土した。

C区第38号住居跡 (Fig. 285, PL. 85)

東半部は調査区外にあって未調査である。南半部はこれより新しい第7号溝により破壊され、北西隅と北壁・西壁の一部を検出したのみである。規模などについては不明であるが、北壁の竪穴内にカマドが設けられ、これを中心に推定すると、北壁は長さ5.2mほどに復原される。支柱穴はP2・P5を含む4本柱が推定される。

遺物 (Fig. 286・287, Tab. 88, PL. 85)

須恵器・土師器・砥石を出土した。

須恵器 (Fig. 286—1~3) 1は蓋破片で、口縁部内面に一段をもつ。2は高台をもつ杯で、底部内面はナデ、体部に近い外面はヘラ削り、底部外面はヨコナデである。3の高杯脚部は透しをもつが、その形は不明である。外面はカキ目状の調整を施しており、上位に浅い凹線がある。

土師器 (Fig. 286—4) 4の皿は底部を欠く。底部近くはナデており、そのほかはヨコナデである。

Tab. 88 C区第38号住居跡出土土器一覧()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	S 蓋	口縁部				胎土精良、焼成良	青灰色	
2	S高台杯	底部				砂粒を含み、焼成良	青灰色	高台径(9.5)
3	S高杯	脚部				胎土精良、焼成良	紫褐色	
4	H皿	底部欠	(16.5)	(2.5)		砂粒及び黒雲母を含み、焼成良	明茶褐色	

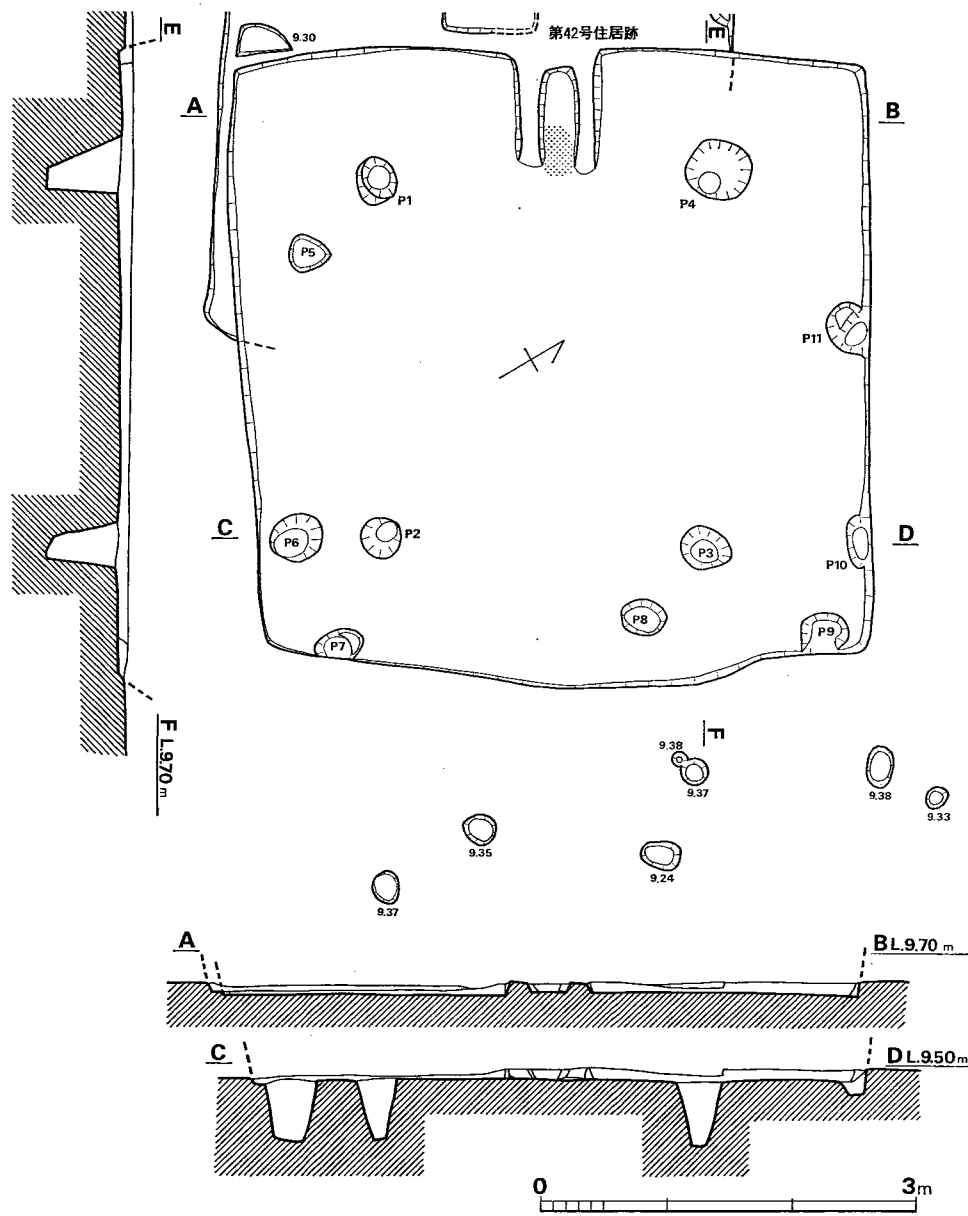


Fig. 288 C区第39号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)

P1(-59.0)・P2(-60.0)・P3(-48.0)・P4(-58.5)・P5(-3.0)・P6(-51.0)・P7(-21.5)
 P8(-20.0)・P9(-20.0)・P10(-11.0)・P11(-21.0)
 P1~P2 2.66m・P2~P3 2.89m・P3~P4 2.57m・P4~P1 3.1m

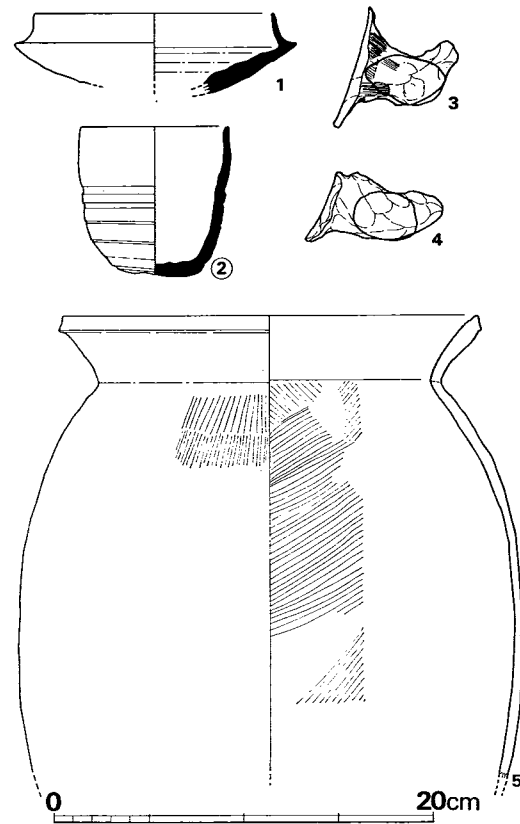


Fig. 289
 C区第39号住居跡出土遺物実測図 (I) (縮尺1/4)

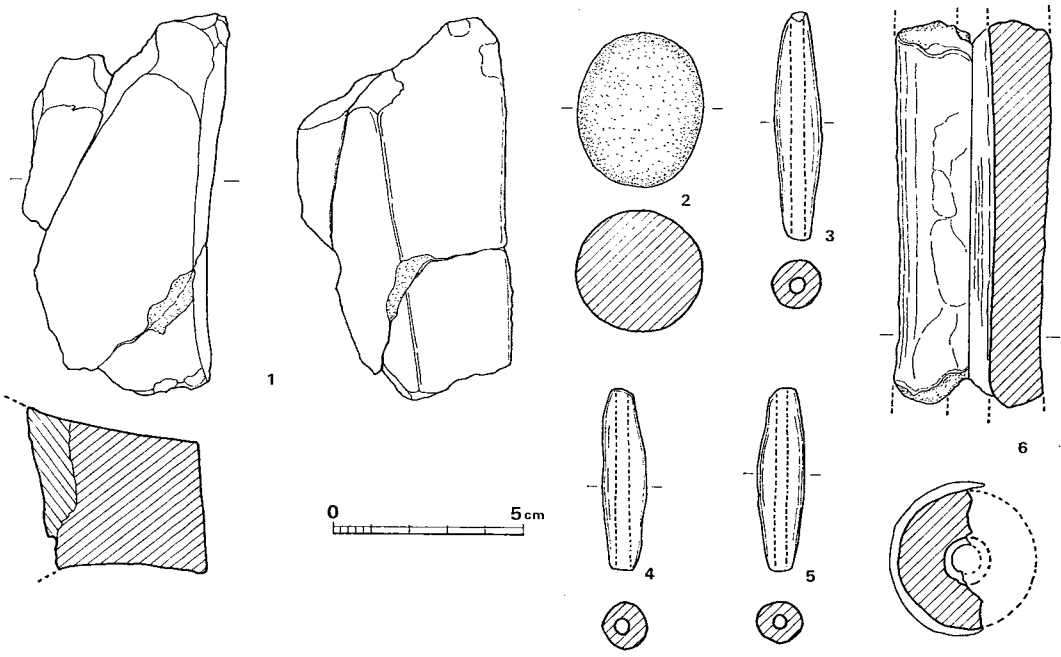


Fig. 290 C区第39号住居跡出土遺物実測図 (II) (縮尺1/2)

以上のほかに、須恵器では杯1があり、土師器では甕小片5が出土した。
砥石 (Fig. 287) 断面楕円形の砂岩質の砥石で、使用面に傷がある。キメは粗い。

C区第39号住居跡 (Fig. 288, PL. 86)

西側は第42号住居と重複するが、これより後に営まれたものである。各辺の長さは北壁4.70m、南壁4.8m、東壁4.77m、西壁5.06mで、ほぼ方形プランを有する。東壁は若干胴張りをなす。カマドは西壁中央の竪穴内に設けられるが、その中央はよく焼け、両脇には床面から高さ5~10cmほどの粘土で築かれたと推定される壁の一部が残存する。支柱穴はP1・P2・P3・P4の4本柱と思われ、各柱間の寸法は、P1~P2は2.89m、P2~P3は2.57m、P3~P4は3.1m、P4~P1は2.66mである。

遺物 (Fig. 289・290, Tab. 89・90, PL. 86)

弥生土器・土師器・須恵器・鉄滓・土錘・砥石・小石、周辺から鞆羽口が出土した。

弥生土器 (Fig. 289—5) 5は甕で、体部下半を欠失している。「く」の字形の口縁は頸部で薄くなり、端部近くが肥厚する。端部は凹面を呈する。内外面ともハケ目調整である。

須恵器 (Fig. 289—1・2) 1は黄灰色を呈する焼成不良の杯で底部を欠く。底部のヘラ削り以外はヨコナデである。2は床面より出土したコップ形土器で、体部に4本の凹線がある。外面下半以下はヘラ削り、そのほかはヨコナデである。平底であるが不安定である。

土師器 (Fig. 289—3・4) 小片ばかりで、図示できるものはない。3・4の把手が出土している。

鉄滓 小塊になってしまったがもとは2~3個であったと思われる。現存12小塊あり、総計33gある。

土錘 (Fig. 290—3~5, PL. 86) 住居跡の中央東寄りに散乱して出土した (PL. 86)。発掘時の確認では149個であったが、運搬中に破損し、現在はTab. 90のように、164個となっている。これらのうち、ほぼ全形の残っているもの96個体の計測値の平均値は、長さ47.9mm、重さ6.2gであった (テンビン感量500mg)。全体的に胎土・焼成とも良好で平均的である。また、一端が丸味をもち、他の一端は切り取ったような平坦面を呈するものが多く見られた。孔径はほぼ3mmで一定しており、表面に赤褐色の薄い膜をもつものも多い。

砥石 (Fig. 290—1) 3面の使用面が残っている。カマド内より出土した。長さ約10cm。

小石 (Fig. 290—2) 床面より出土した。丸い石で、何に使用したのか不明。

鞆羽口 (Fig. 290—6, PL. 86) 本住居跡周辺より出土したという記録がある。関係者の記憶も薄れてしまい、出土地点は不明確である。外面は二次火熱を受け赤味を帯びている。ほとんど砂粒を含まず精良な胎土である。Fig. 290の下部が、いくらか細く、径3.7cm、上部は4.1cmで孔径は下部1.1cm、上部0.8cmである。

Tab. 89 C区第39号住居跡出土土器一覧() 推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	S杯	底部欠	12.7	4.7	受け部15.0	焼成不良	黄灰色	
2	Sコップ形土器	復原完	(7.8)	7.9	体部上位8.1	砂粒を含み、堅緻	暗紫色	
3		把手				少量の砂粒を含み、焼成良	茶赤色	
4		把手				少量の砂粒を含み、焼成良	黄褐色	
5	Y甕	下半欠	(21.9)		体部	少量の砂粒を含み、やや軟質	淡褐色	

Tab. 90 C区第39号住居跡出土土錘計測表

(テンピン感量 500mg)

No.	長さ(mm)	最大巾(mm)	重さ(g)	化粧土	備考
1	55.0	12.0	7.0	○一部	
2	57.0	12.5	7.5	○一部	断面隈丸三角形 淡褐色
3	58.5	12.0	6.5		淡褐色
4	59.0	13.0	7.5	○	淡褐色
5	55.0	13.0	7.0	○	黄褐色
6	52.0	12.0	6.5	○	黄褐色
7	55.0	13.0	7.5	○	淡褐色
8	55.0	14.0	8.0		断面ダ円形 淡褐色
9	57.0	13.0	8.0	○	黄褐色
10	54.0	13.0	7.5	○	黄褐色
11	55.0	12.5	7.5		淡褐色
12	52.0	13.0	7.0		黄褐色
13	52.0	13.0	6.5	○	黄褐色
14	52.0	13.0	6.5		黄褐色
15	52.0	13.0	7.0	○	黄褐色
16	51.0	12.5	6.5	○	黄褐色
17	50.0	13.5	7.5	○	黄褐色
18	53.5	13.0	8.0	○	一部表面 黒褐色
19	47.0	14.0	6.5		黄褐色
20	45.0	13.0	6.0		一端は直 黒褐色
21	48.0	13.0	6.5	○	黄褐色
22	47.5	12.0	6.0	○	黄褐色
23	48.0	13.0	6.0	○	黄褐色
24	51.0	13.0	6.5	○	黄褐色
25	50.0	12.0	5.5	○	黄褐色
26	44.0	13.0	5.5	○	黄褐色
27	47.0	12.0	5.5	○	黄褐色
28	46.5	12.5	5.5	○	黄褐色
29	46.0	13.0	6.0	○	黄褐色
30	47.5	12.5	6.5		淡黄褐色
31	47.0	12.0	6.0	○	化粧土保存良 赤褐色
32	45.0	12.5	6.0	○	淡黄褐色

No.	長さ (mm)	最大巾 (mm)	重さ (g)	化粧土	備 考
33	46.0	12.0	5.5		完 黄褐色
34	50.0	12.5	6.5		淡黄褐色
35	44.0	12.0	5.5	○	淡黄褐色
36	47.5	13.0	6.5	○	完 淡黄褐色
37	45.0	12.5	6.0	○	完 淡褐色
38	51.0	13.0	6.5	○	完 淡褐色
39	45.0	13.0	6.0	○	完 淡褐色
40	50.0	13.0	6.0		完 淡褐色
41	45.0	13.0	6.5	○	淡黄褐色
42	49.0	12.5	6.0	○	一部欠損 黄褐色
43	45.0	12.0	5.5	○	黄褐色
44	47.0	12.0	5.5	○	淡黄褐色
45	48.0	12.0	6.0	○	淡黄褐色
46	47.0	12.0	5.5		淡褐色
47	49.0	13.0	6.5		淡褐色
48	46.0	13.0	6.0		淡褐色
49	44.0	13.0	5.5	○	淡褐色
50	48.0	13.0	6.5	○	淡黄褐色
51	46.0	13.0	6.5	○	淡黄褐色
52	49.0	13.0	6.5		淡黄褐色
53	48.0	13.0	6.5	○	淡黄褐色
54	49.0	13.0	7.0	○	淡黄褐色
55	47.0	12.5	6.0		淡褐色

No.	長さ (mm)	最大巾 (mm)	重さ (g)	化粧土	備 考
56	46.0	12.0	5.5	○	淡褐色
57	46.5	13.0	6.5	○	淡黄褐色
58	45.0	12.0	5.5	○	淡黄褐色
59	50.0	12.5	6.0		淡褐色
60	47.0	11.0	5.0	○	淡黄褐色
61	47.0	12.5	6.0	○	淡灰褐色
62	54.0	12.5	7.0	○	淡黄褐色
63	47.0	12.5	6.5	○	淡灰褐色
64	46.0	12.0	6.0	○	淡黄褐色 (一部黒変)
65	49.0	13.0	6.5	○	淡黄褐色 (一部黒色)
66	47.0	13.0	6.5	○	発掘時欠損 淡黄褐色
67	47.0	12.5	6.0	○	淡灰褐色
68	46.5	13.0	6.0	○	淡黄褐色
69	45.0	13.0	6.5	○	淡黄褐色
70	46.5	12.5	6.0	○	淡黄褐色
71	46.0	12.0	6.0		淡灰褐色
72	46.0	13.0	6.5	○	淡黄褐色 (一部黒色)
73	47.0	12.5	5.5		ネジレ痕 淡黄褐色
74	48.0	13.5	7.0	○	ヒモ圧痕? 淡灰褐色
75	48.5	12.0	6.5	○	淡黄褐色
76	49.5	13.0	6.5	○	淡灰褐色
77	44.0	12.5	5.5	○	淡灰褐色
78	44.0	11.5	5.0		淡灰褐色

No.	長さ (mm)	最大巾 (mm)	重さ (g)	化粧土	備 考
79	48.0	13.0	6.5	○	淡灰褐色
80	49.0	12.5	6.0	○	淡黄褐色
81	45.5	13.0	6.0	○	淡黄褐色
82	46.0	13.0	6.0	○	淡黄褐色
83	50.0	12.5	6.5	○	淡灰褐色
84	45.0	12.5	6.0		黒褐色
85	44.5	12.5	5.5	○	淡灰褐色
86	47.0	13.0	6.0	○	淡灰褐色
87	47.0	12.5	5.5	○	淡黄褐色
88	47.0	13.0	6.0	○	淡黄褐色
89	47.5	13.5	6.5		淡灰褐色
90	44.0	12.5	6.0	○	淡黒褐色
91	46.0	12.0	6.0	○	淡灰褐色
92	46.0	12.5	6.5		淡灰褐色
93	47.5	12.5	6.0		淡灰褐色
94	45.0	12.5	6.5	○	淡黄褐色
95	50.0	12.0	6.5		淡黒褐色
96	51.0	11.0	5.5	○	淡灰褐色
97	46.0	13.0	7.5	○	一端破損 淡灰褐色
98	47.5	13.0	6.5		一端破損 淡灰褐色
99	44.0	13.0	6.0	○	一端破損 淡黄褐色
100	49.0	13.0	6.0		一端破損 淡灰褐色
101	47.0	13.0	7.0	○	一端若干破損 淡黄褐色

No.	長さ (mm)	最大巾 (mm)	重さ (g)	化粧土	備 考
102	46.5	12.5	5.5	○	一端若干破損 淡黄褐色
103	43.5	13.5	6.5	○	一端若干破損 淡黄褐色
104	53.5	13.0	6.5		一端若干破損 灰褐色
105	45.5	12.5	6.5	○	一端若干破損 淡灰褐色
106	45.5	13.0	6.0		一端若干破損 灰褐色
107	41.0	13.0	6.0		完 灰褐色
108	50.5	13.0	7.0	○	一端破損 淡黄褐色
109	48.0	13.0	6.5		一端破損 淡黄褐色
110	43.0	12.0	5.5	○	一端破損 淡黄褐色
111	41.0	12.5	5.5	○	一端破損 淡灰褐色
112	42.5	13.0	6.0	○	一端破損 淡黄褐色
113	46.0	13.5	7.5		一端破損 黒褐色
114	47.0	12.5	6.5		両端ウス皮ノ 如クハゲテイル 淡灰褐色
115	49.0	13.0	6.0	○	一端破損 淡黄褐色
116	44.5	13.0	6.0	○	一端破損 淡灰褐色
117	47.0	12.5	6.0		両端破損 淡灰褐色
118	42.5	12.5	5.5	○	一端破損 淡黄褐色
119	40.5	12.5	5.0	○	一端破損 淡灰褐色
120	43.0	12.0	5.5		一端破損 淡黄褐色
121	40.0	12.0	5.5	○	一端破損 淡黄褐色
122	41.5	12.5	5.5	○	一端破損 灰褐色
123	40.5	11.5	4.5	○	一端破損 灰褐色
124	38.5	13.0	5.0		一端破損 淡灰褐色

No.	長さ (mm)	最大巾 (mm)	重さ (g)	化粧土	備 考
125	38.5	13.0	5.5	○	一端破損 淡灰褐色
126	40.5	12.0		○	両端破損 淡黄褐色
127	47.0	12.5		○	両端破損 (全長復原可) 淡黄褐色
128	40.5	12.0		○	一端破損 淡黄褐色
129	36.5	12.0			両端破損 灰褐色
130	38.0	13.0		○	両端破損 灰褐色
131	39.0	13.5		○	一端破損 淡黄褐色
132	39.0	12.0		○	一端破損 淡黄褐色
133	42.5	13.0		○	一端破損 淡黄褐色
134	40.0	12.5		○	一端破損 淡黄褐色
135	33.0	12.5		○	一端破損 淡黄褐色
136	33.0	11.5		○	一端破損 淡灰褐色
137	41.5	13.0			一端破損 淡灰褐色
138	/	/	/	/	欠
139	38.5	12.5		○	一端破損 淡灰褐色
140	38.0	12.5		○	一端破損 淡灰褐色
141	41.0	12.0		○	一端破損 淡灰褐色
142	35.0	12.0		○	一端破損 淡黄褐色
143	35.0	12.0			一端破損 淡黄褐色
144	34.0	12.5		○	一端破損 淡灰褐色
145	40.0	13.0		○	一端破損 淡灰褐色
146	37.0	12.5		○	一端破損 淡黄褐色
147	40.0	12.5		○	両端破損 淡黄褐色

No.	長さ (mm)	最大巾 (mm)	重さ (g)	化粧土	備 考
148	37.0	12.5		○	一端破損 淡黄褐色
149	31.5	12.0		○	一端破損 淡黄褐色
150	29.0	12.0			一端破損 淡灰褐色
151	32.0	11.5		○	一端破損 淡黄褐色
152	30.0	13.5		○	一端破損 淡黄褐色
153	31.0	13.5			一端破損 淡灰褐色
154	28.0	13.5			一端破損 淡灰褐色
155	34.5	12.0			一端破損 淡灰褐色
156	25.0	11.0		○	一端破損 淡黄褐色
157	24.0	12.5		○	一端破損 淡黄褐色 (一部黒色)
158	31.0	13.0		○	両端破損 淡黄褐色
159	18.5	12.5		○	両端破損 淡黄褐色
160	26.0	11.0		○	一端破損 淡黄褐色
161	24.0	12.0		○	一端破損 淡灰褐色
162	24.0	11.5			一端破損 淡黄褐色
163	16.0	10.0		○	両端破損 淡黄褐色
164	16.0	10.0		○	両端破損 淡黄褐色

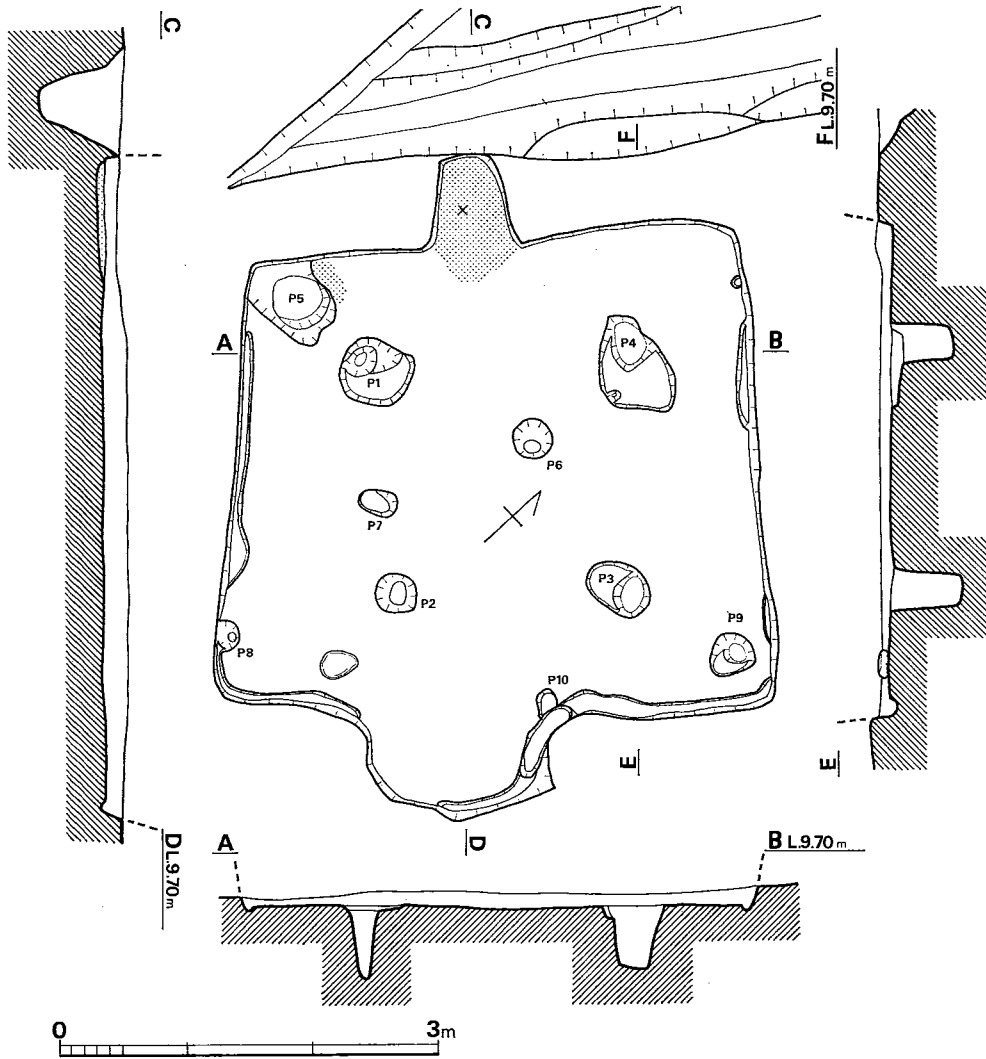


Fig. 291 C区第40号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)

P1(-58.0)・P2(-51.0)・P3(-54.5)・P4(-49.0)・P5(-12.0)・P6(-14.5)・P7(-16.5)

P8(-10.5)・P9(-40.0)

P1~P2 1.91m・P2~P3 1.85m・P3~P4 2.07m・P4~P1 2.13m

C区第40号住居跡 (Fig. 291, PL. 87)

各辺の長さは北壁3.80m、南壁3.46m、東壁4.37m、西壁3.83mで、ほぼ方形プランを呈する。カマドは西壁中央にあり、竪穴外に75cmほど張り出している。その内面はよく焼けて赤変しているが構造は不明である。支柱穴はP1・P2・P3・P4の4本柱と思われ、西壁をのぞく各辺には壁に沿って周溝が一部認められ、またP3の南側床面から30×22cmほどの礫が検出された。

遺物 (Fig. 292・293, Tab. 91, PL. 87)

須恵器・土師器・鉄滓・土玉が出土した。

須恵器 (Fig. 292—1・2) 1・2の杯は、ともに黄褐色～赤褐色を呈し硬質であるが、器表に気孔が多く見られる。1は底部内面をナデ、外面をヘラ削り、そのほかはヨコナデである。2は底部内面もヨコナデを施す。

土師器 (Fig. 292—3~9) 3の杯は外面体部に赤褐色の薄い膜が見られる。外面には一部指頭によるナデを施す。4の杯は外面にハケ目を残している。5は内面に粘土の接合痕を残している。外面下部はヘラ磨きを施

Fig. 293
C区第40号住居跡出土遺物実測図 (II)
(縮尺1/2)

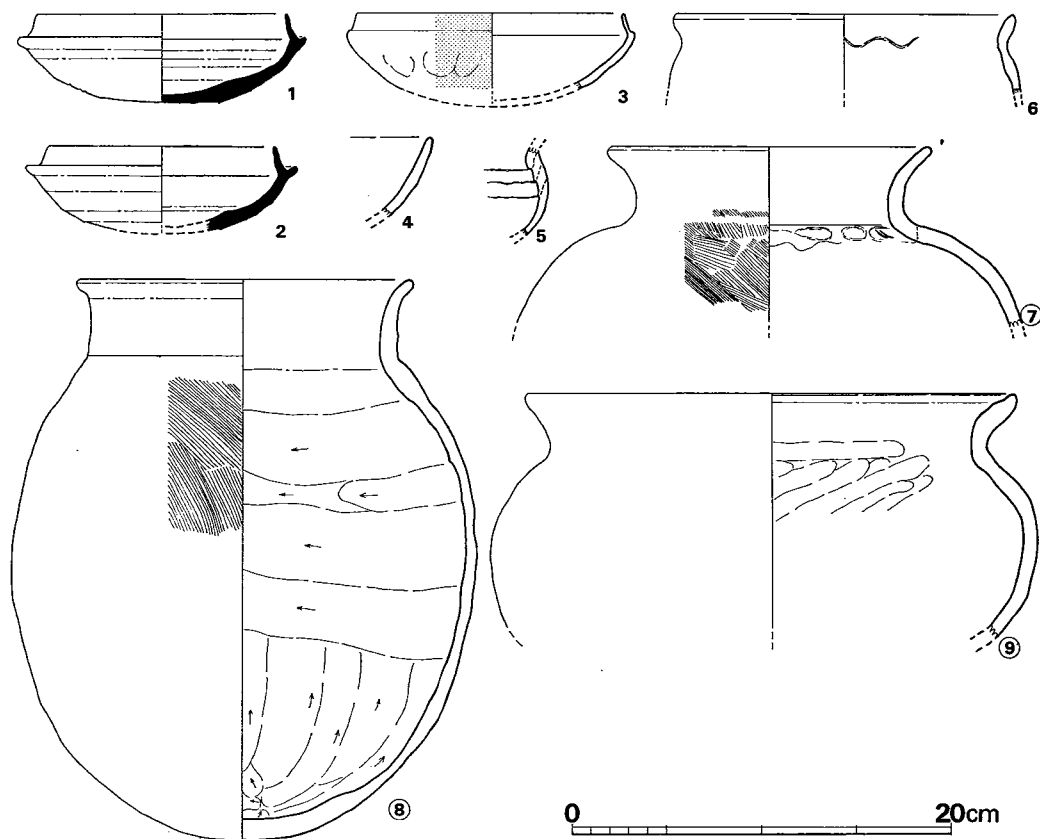


Fig. 292 C区第40号住居跡出土遺物実測図 (I) (縮尺1/4)

し、上部はハケ目調整である。小形丸底堆の体部片と思われる。6～8は甕で、7・8は床面出土である。8の口縁部はほぼ垂直に立ち上り、端部でかるく外反する。体部内面の下半は縦方向のヘラ削り上半は横方向のヘラ削りである。9は床面出土の鉢で底部を欠く。内面は斜方向のヘラ削りで、口縁端部内面は凹面を呈する。

以上のほかに、須恵器杯、土師器甕・甌、丹塗り土師器片が出土した。

鉄滓(PL.139)床面から1個出土した。重さは39gである。この鉄滓は北九州郷土史研究会の大澤正巳氏に分析を御願した(Ⅶ参照)。

土玉(Fig. 293)カマド内(×印)より出土した。径9.5mm、孔径1.5mmで、暗茶褐色を呈する。

Tab. 91 C区第40号住居跡出土土器一覧()推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	S杯	略完	13.2	4.7	受け部15.4	細砂を含み、酸化炎焼成	茶褐色	
2	S杯	底部欠	(12.0)	(4.6)	受け部14.4	細砂を含み、酸化炎焼成	外面 茶褐色 内面 黄褐色	
3	H杯	底部欠	(14.0)	(5.0)	外稜 15.2	胎土精良、やや軟	外面 赤褐色 内面 灰褐色	口縁外面の一部黒色
4	H碗					砂粒わずかに含み、焼成良	茶褐色	
5	H埴					胎土精良、焼成良	灰褐色	内面接合痕
6	H小形甕	口縁部	(17.8)			砂粒を含み、焼成良	明茶褐色	
7	H甕	口縁部～肩部	(16.9)		体部	砂粒を含み、焼成良	黄褐色	
8	H甕	復原完	(17.9)	29.4	体部中位 24.4	砂粒を含み、焼成良	淡茶黄色	二次加熱
9	H甕	底部欠	(26.0)	(17.0)	体部中位 29.3	砂粒を含み、焼成良	灰黄色	歪みあり

C区第41号住居跡 (Fig. 294, PL. 88)

各辺の長さは北壁2.8m、南壁2.7m、東壁2.8m、西壁2.6mで、方形プランを有する。カマドは北壁の東寄りに竪穴から70cmほど張り出してあり、その内面はよく焼けているが構造は不明である。支柱穴はP1・P2・P3・P4の4本柱と思われ、東壁・南壁では柱穴が接しているが、西壁では空間がある。

遺物 (Fig. 295, PL. 88)

弥生土器・土師器・須恵器が出土した。図示できるのはFig. 295の杯のみで、床面から出土したものである。底部外面に渦巻状の擦痕があり、ほかの部分はヨコナデで、復原口径12.5cm、器高3.4cmを測る。土師器にはこのほかに、甌口縁部片・甕体部片がある。弥生土器、須恵器は小片のみであった。

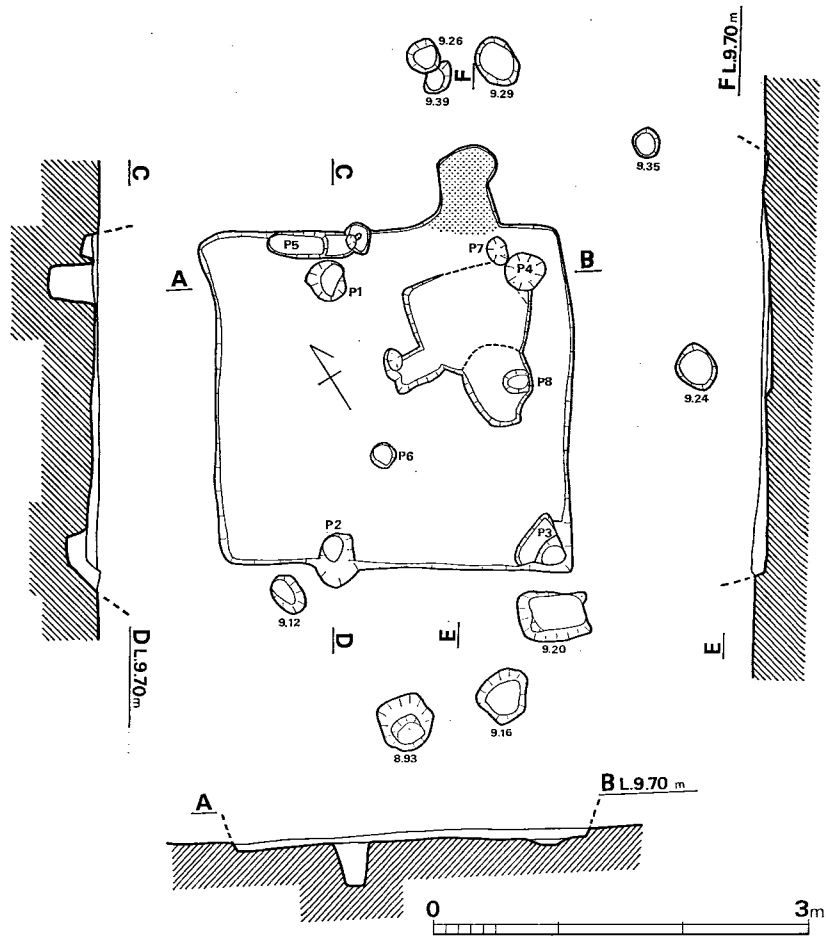


Fig. 294 C区第41号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)
 P1(-35.0)・P2(-16.5)・P3(-22.0)・P4(- 6.5)
 P5(-12.5)・P6(-11.5)・P7(- 2.0)・P8(-12.0)
 P1~P2 2.14m・P2~P3 1.77m・P3~P4 2.27m
 P4~P1 1.54m

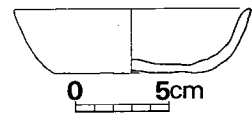


Fig. 295
 C区第41号住居跡出土土器
 実測図 (縮尺1/4)

C区第42号住居跡 (Fig. 296)

東半部はこれより新しく営まれた第39号住居によって破壊され、北壁・東壁の長さは不明である。西壁は長さ4.0m、南壁は3.5mで、ほぼ方形プランを呈する。カマドや焼土・灰などは検出されず、支柱穴も不明である。

遺物 (Fig. 297)

出土遺物はほとんどなく、Fig. 297の丹塗りの土師器杯と、壺と思われる小片が出土したのみである。杯は、内外面ともヘラ磨きを施しており精製品である。

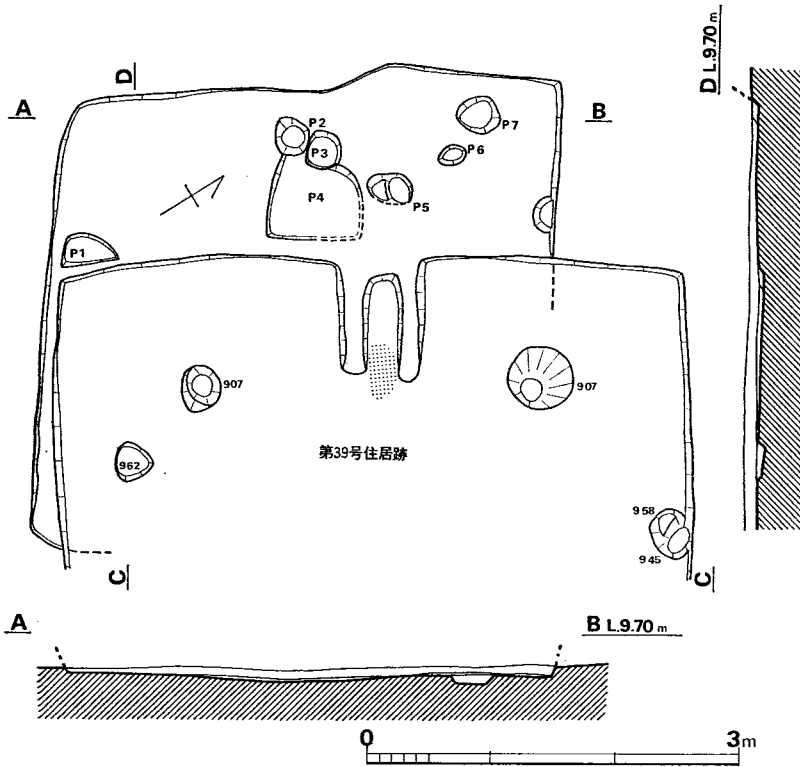


Fig. 296 C区第42号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)
 P1(- 8.0)・P2(-12.0)・P3(-7.0)・P4(-6.5)
 P5(-19.5)・P6(-11.5)・P7(-8.0)



Fig. 297

C区第42号住居跡出土
 土器実測図 (縮尺1/4)

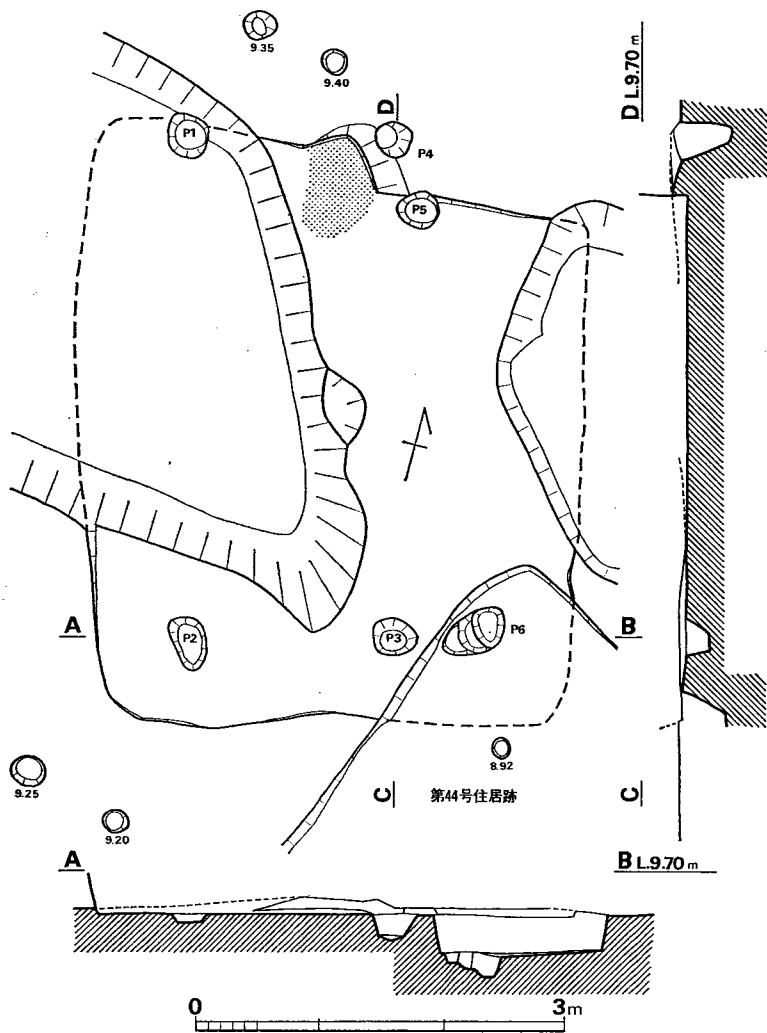


Fig. 298 C区第43号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)

P1(-36.5)・P2(-7.0)・P3(-21.0)・P4(-37.0)・P5(-49.0)

P6(-26.0)

P1~P2 4.10m・P2~P3 1.65m・P3~P4 4.05m・P4~P5 1.62m

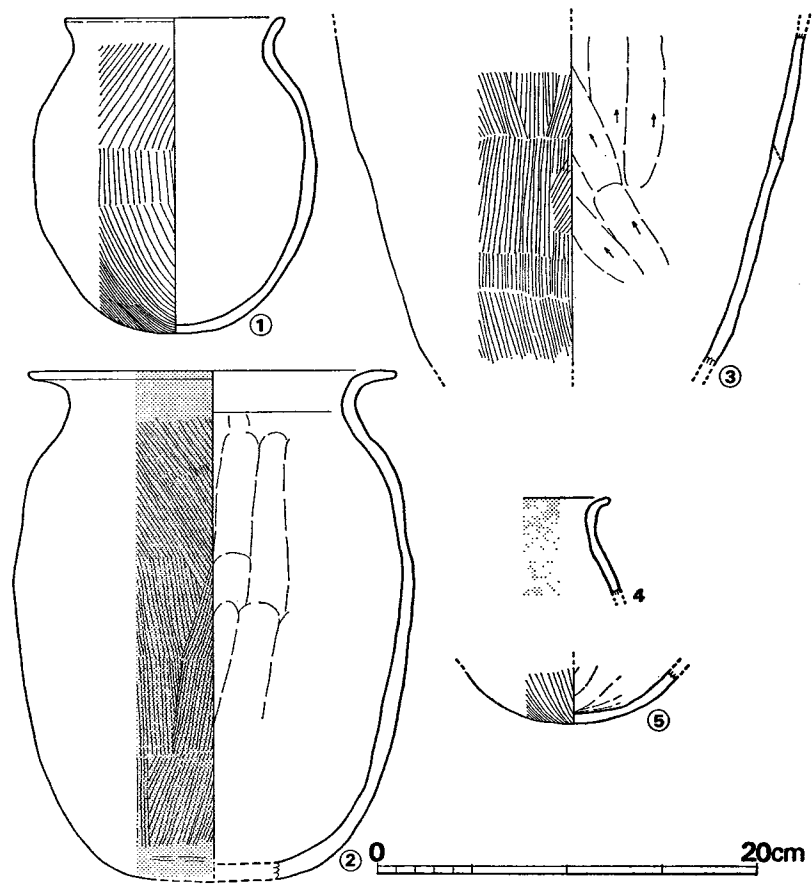


Fig. 299 C区第43号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

C区第43号住居跡 (Fig. 298)

東西から後世の攪乱をうけ、各辺の長さは明確ではないが、残存する壁から復原すると、北壁3.8m、南壁3.5m、東壁4.0m、西壁4.7mほどであり、隅丸の長方形プランを有すると考えられる。南東隅は第43号住居跡と重複するが、この部分の床面は浅く前後関係は不明である。カマドは北壁中央に竪穴から30cmほど張り出して設けられるが、その残りは悪く底面によく焼けた焼土のみを検出した。カマド内の西寄りには、径10cmほどの礫3個が認められたが、カマドの構造と関連するものかは明らかでない。支柱穴は不明であるが、P1・P2・P3・P4は長方形に配列する。

遺物 (Fig. 299, Tab. 92)

須恵器・土師器が出土した。須恵器は甕体部片で、内面は同心円タタキ、外面は格子目タタキの上からカキ目調整を加えている。

土師器 (Fig. 299-1~5) 1は床面出土の小形の甕で、口縁部はヨコナデ、外面はハケ目調整である。二次火熱を受けている。2は底部の一部を欠くが、ほぼ全形がわかる。体部はあまり張らず、口縁部は水平近くまで外反し、頸部内面に不明瞭な稜線をもつ。内面はヘラ削り、外面はハケ目である。外面には赤褐色の薄い膜がある。床面出土。3は甕の体部で、床面出土である。内面は上へ向うヘラ削り、外面はハケ目調整である。4・5は小形甕の口縁部、底部と思われる。

本住居跡の出土遺物は、以上でほとんどであり、残りはこれらの同一個体の接合しない小片である。

Tab. 92 C区第43号住居跡出土土器一覧 () 推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	H小形甕	復原完	(11.5)	16.6	体部中位 15.0	細砂を含み、焼成良	赤褐色	
2	H甕	底部欠	(19.2)	(27.3)	体部中位 21.0	砂粒を含み、焼成良	外面 赤褐色 内面 茶褐色	
3	H甕	体部				砂粒を含み、焼成良	赤褐色	
4	H小形甕	口縁部				砂粒を含み、焼成良	淡黄褐色	内面化粧土
5	H小形甕	底部				砂粒及び黒雲母を多く含み、焼成良	外面 茶褐色 内面 淡褐色	

C区第44号住居跡 (Fig. 300、PL.89)

北西隅は第43号住居跡と重複するが、第43号住居跡の床面が浅いために前後関係は不明である。東半部は第4号溝と重複するが、第44号住居跡が後に営まれている。各辺の長さは北壁3.15m、南壁3.42m、東壁3.82m、西壁3.83mで、ほぼ方形プランを呈する。カマドは西壁中央の竪穴内に設けられ、その中央はよく焼け、両脇には床面から高さ4~7cmほどの粘土で築いたと推定される壁の一部が残存する。カマドの内部から高杯が倒立して出土し、支脚として使用したと考えられる。支柱穴はP1・P2・P3・P4の4本柱と思われ、主軸上にはカマドと対称にP5が並ぶ。壁高は43cmほどあり、検出した住居のうちでは残存が良い方である。

遺物 (Fig. 301、Tab. 93、PL.89)

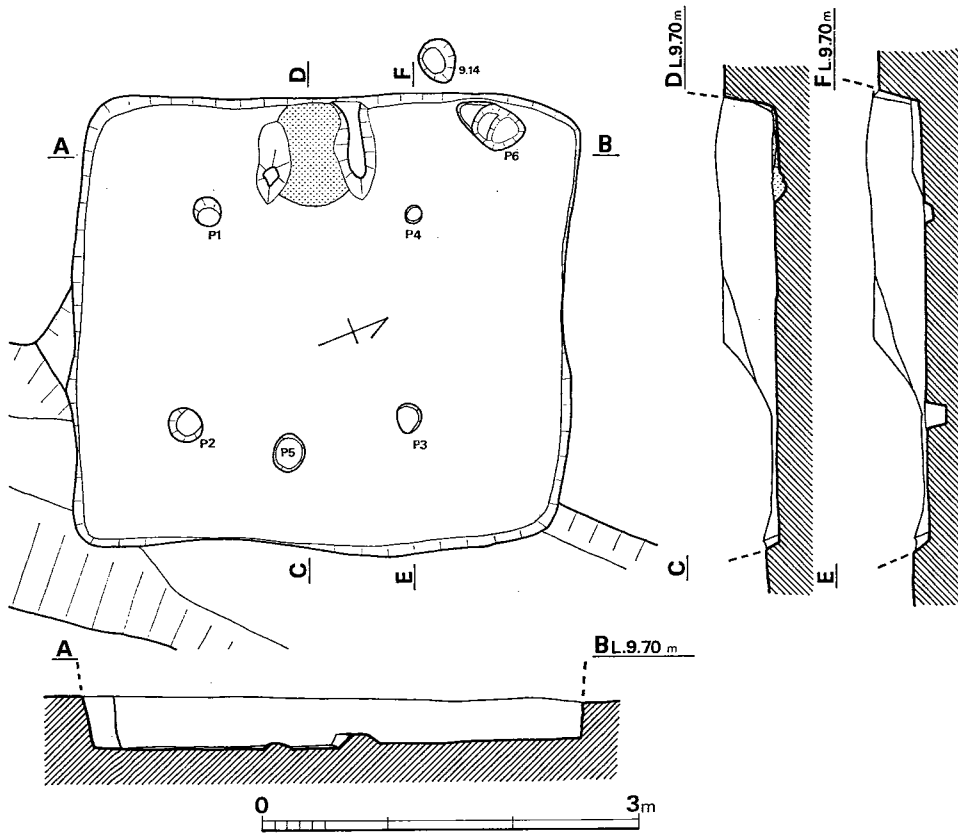


Fig. 300 C区第44号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)

P1(-39.0)・P2(-41.0)・P3(-16.0)・P4(-8.0)・P5(-23.0)・P6(-16.0)

P1~P2 1.68m・P2~P3 1.76m・P3~P4 1.62m・P4~P1 1.67m

須恵器・土師器を出土した。

須恵器 (Fig. 301-1) 1の蓋は床面出土で天井部の一部を欠くが大略の形はわかる。肩部に明瞭な一段を有し、口縁端部内面に凹線を施し先端部は鋭い。天井部の内面はナデ、外面はヘラ削りでほかの部分にはヨコナデである。体部から口縁部にかけて、淡黄色の気孔の多い附着物があるが何であるか不明。

土師器 (Fig. 301-2~8) 2・3の杯のうち2の方は床面出土で、口縁部が内彎し薄手である。内外面とも赤褐色の薄い膜があり、ヘラ磨きを施す。3は口縁端部が薄くなり、内外面とも丹塗り・研磨している。4の小形甕は二次火熱を受けており、外面の器表は剝落部分が多い。口径よりも体部径の方がやや大きく、体部は丸味をもつ。内面は底部から頸部に向うヘラ調整である。5・6の甕はともに床面出土である。5は粘土の接合痕を残しており、指頭による

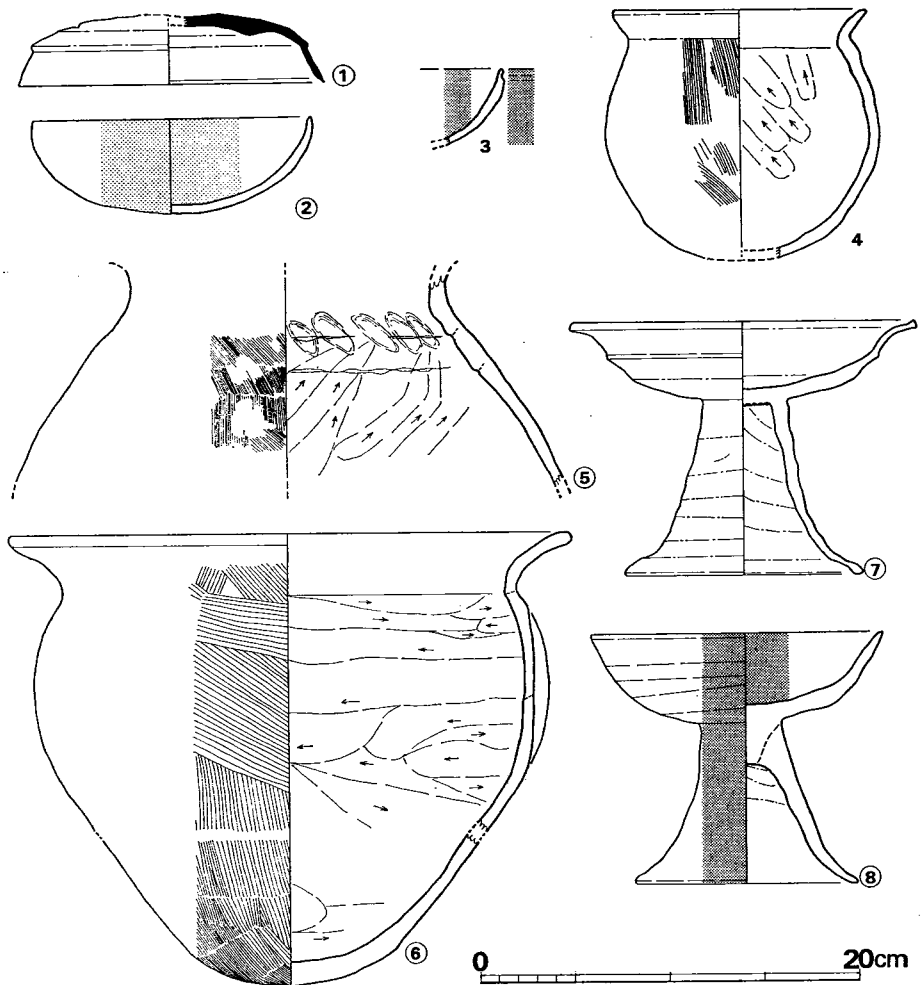


Fig. 301 C区第44号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

るナデを加えている。6は体部上位に最大径があり、口縁部は強く外反する。内面は横方向のヘラ削り、外面はハケ目調整である。7・8はともにカマド内出土の高杯である。7は杯部外面に明瞭な稜線をもち、脚部は内外面とも螺旋状のヨコナデ稜線がある。8は脚部内面を除き丹塗りである。杯部内面はナデ、外面は横方向のヘラ調整で、脚部は縦方向に削っている。脚部内面は磨滅しているが、ナデと思われる。

以上のほかに、須恵器片2があり、土師器では甕6・壺1・高杯1が出土した。

Tab. 93 C区第44号住居跡出土土器一覧()推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	S 蓋	天井部欠	(16.3)	(3.7)	口縁部	細砂を含み、焼成良	青灰色	淡黄色付着物
2	H 杯	復原完	(14.2)	5.0	口縁部	胎土精良、焼成良	黄褐色	内外面赤褐色化粧土
3	H 杯	口縁～体部				胎土精良、焼成良	黄褐色	
4	H小形甕	底部欠	(13.4)	(11.8)	体部中位(14.5)	砂粒を含み、焼成良	外面 茶褐色 内面 黄褐色	二次加熱
5	H 甕	肩部				砂粒を含み、焼成良	黄褐色	頸部内面に接合痕
6	H 甕	略完	(29.5)	(23.9)	口縁部	砂粒を含み、焼成良	外面 赤褐色 内面 黄褐色	外面にスス付着、歪みあり
7	H高杯	略完	18.5	13.4		砂粒を含む、堅微	赤褐色	
8	H高杯	略完	15.5	13.3		胎土精良、焼成良	淡黄褐色	丹塗り

C区第45号住居跡 (Fig. 302, PL.89)

各辺の長さは北壁3.6m、南壁3.9m、東壁4.35m、西壁4.6mで、長方形プランを呈する。カマドは西壁中央の堅穴内に残存するが、構造は不明である。主軸上では、カマドとは対称の東壁に、0.6×2.85mの梯形の張り出しがある。支柱穴は明確でないが、P4・P6・P11・P17の4本柱とも思われ、また堅穴外にはこの住居に伴うものか不明であるが、東壁・北壁に沿って2本ずつ並ぶ柱穴がある。

遺物 (Fig. 303, Tab. 94, PL.89)

土師器・軽石が出土した。須恵器は小片のみである。

土師器 (Fig. 303—1～3) 1は小形の甕で、体部内面は横方向のヘラ調整、外面はハケ目である。2の高杯は内外面とも丹塗りである。脚部外面のヘラ削りは丁寧に施されている。3の甕は把手を欠くが単孔の大形品である。内面は縦方向のヘラ削り、外面は剥落が多いがハケ目調整である。

以上の3個体とも、カマド周辺から出土した。

鉄滓 1個出土した。重さは18g。このほか、同じくカマド周辺から軽石1個が出土した。

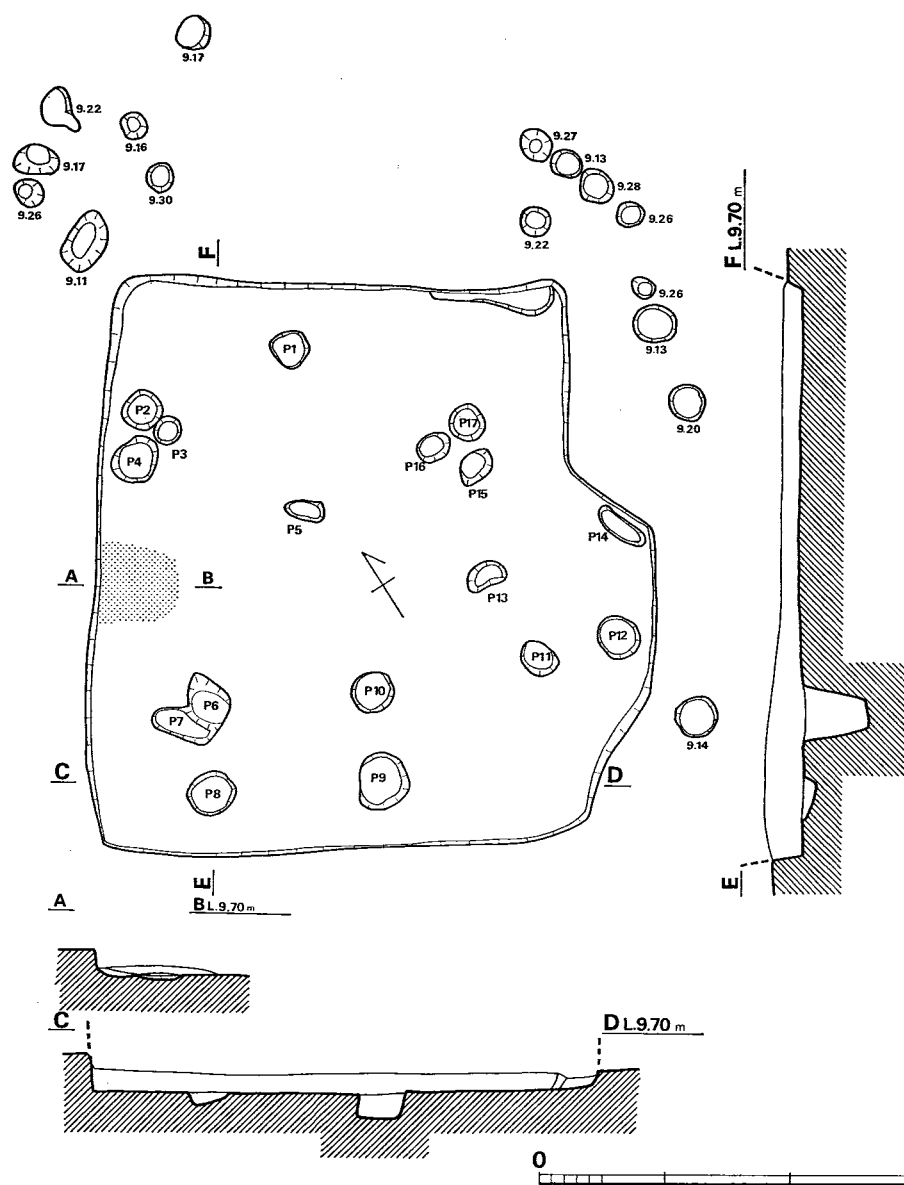


Fig. 302 C区第45号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)

P 1(-28.0)・P 2(-18.0)・P 3(-15.0)・P 4(-25.0)・P 5(-12.0)・P 6(-52.0)

P 7(-12.0)・P 8(-10.0)・P 9(-21.0)・P10(-24.0)・P11(-18.0)・P12(- 9.0)

P13(-13.0)・P14(-23.0)・P15(-21.0)・P16(-20.0)・P17(-25.0)

ピットの組合せ(案) (P4、P6、P11、P17)

(P2、P8、P17、南東隅(欠))

P4~P6 2.07m・P6~P11 2.66m・P11~P17 1.97m・P17~P4 2.67m

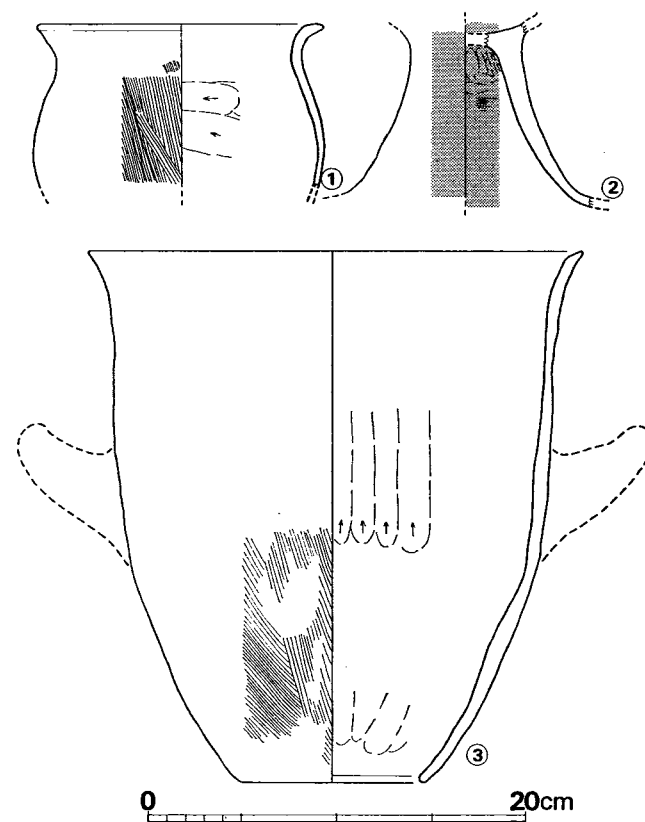


Fig. 303 C区第45号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)

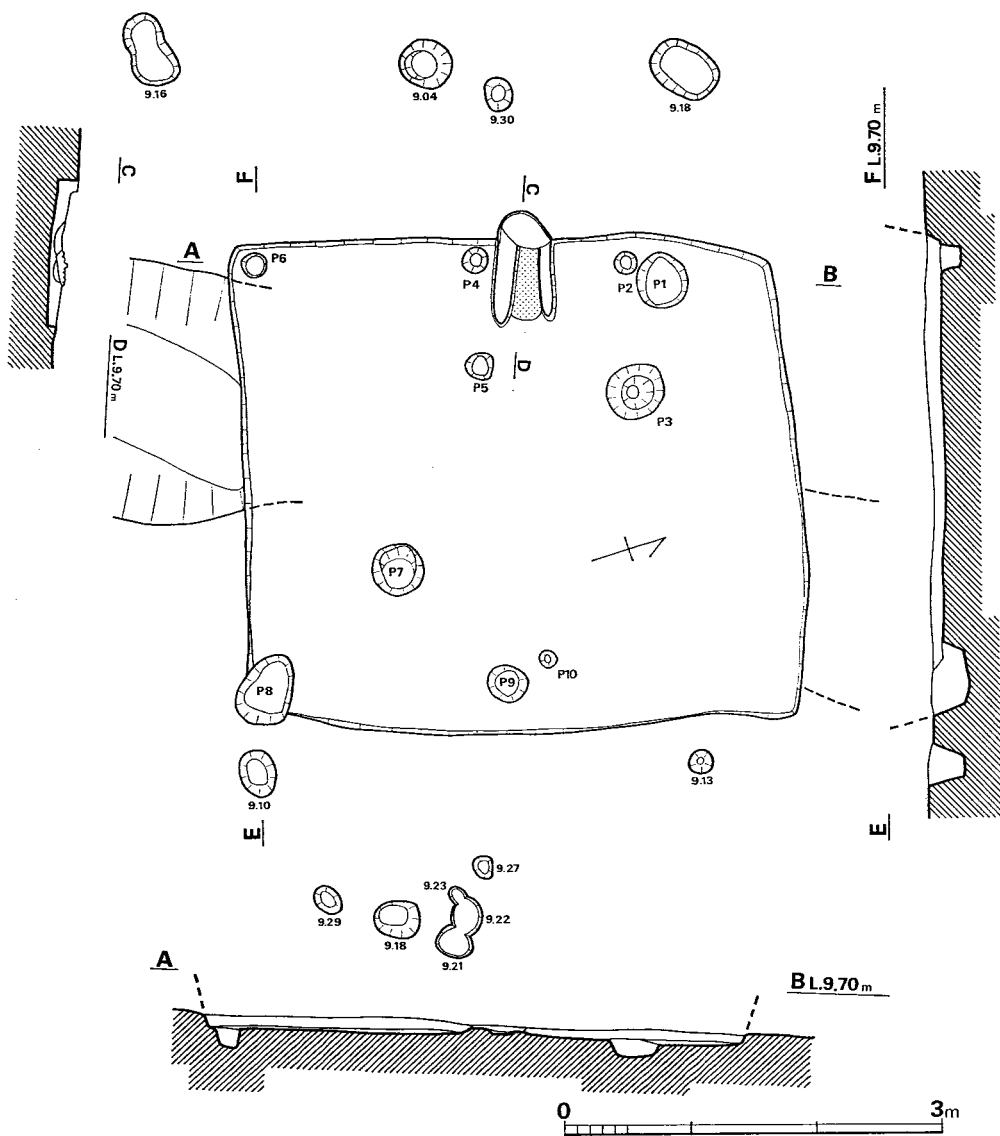


Fig. 304 C区第46号住居跡実測図 (縮尺1/60)

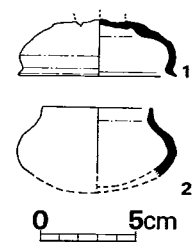


Fig. 305 C区第46号住居跡出土遺物
実測図 (I) (縮尺1/4)

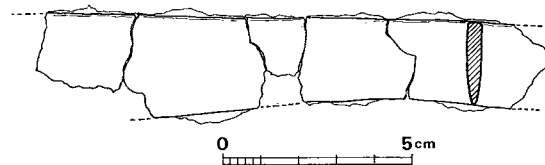


Fig. 306 C区第46号住居跡出土遺物実測図 (II)
(縮尺1/2)

床面からの深さ (cm)

P1 (-13.0) · P 2(-14.5) · P 3(-46.5) · P 4(-13.0)
 P 5(- 5.5) · P 6 (-18.0) · P 7(-51.5) · P 8(-21.0)
 P 9(-10.0) · P10(- 5.8)
 P2~P4 1.2m · P4~P5 0.85m P5~P3 1.25m
 P3~P2 1.05m · P1~P6 3.30m · P6~P8 3.40m

Tab. 94 C区第45号住居跡出土土器一覧() 推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調		備考
			口径	器高					
1	H小形甕	下半欠	(15.4)		体部径≒口径	砂粒を含み、焼成良	茶	褐色	
2	H高杯	脚部				胎土、焼成良	黄	褐色	丹塗り
3	H甕	把手欠	(26.2)	28.0	口縁部	砂粒を含み、焼成良	黄	褐色	単口径(9.4)

C区第46号住居跡 (Fig. 304, PL.90)

第4号溝の埋没後に営まれたものである。各辺の長さは北壁3.57m、南壁3.6m、東壁4.5m、西壁4.31mで、長方形プランを有する。カマドは西壁中央に竪穴から20cmほど張り出し、その中央はよく焼け、南北両脇には床面から高さ3cmほどの粘土で築いたと推定される壁が一部残存する。支柱穴はP3・P10を含む4本柱と推定されたが、他の2本の柱穴は第4号溝の埋土中に位置するため検出できなかった。主軸上には、カマドと対称の位置にP9があり、P5・P6・P7・P8はカマドを長方形に囲む。また、竪穴外には東壁に沿って2本のピットを検出したが、この住居に伴うものかは不明である。

遺物 (Fig. 305・306, Tab. 95, PL.90)

弥生土器・土師器・須恵器・鉄製品・土玉が出土した。弥生土器は甕の体部片と思われ、突帯3本をもつ。小片のため図示しなかった。

須恵器 (Fig. 305—1・2) 1は蓋でツマミを欠く。天井部外面は同心円状のカキ目が施され、他の部分はヨコナデである。2は底部を欠く埴で、内外面ともヨコナデ調整である。

以上のほか土師器甕片(カマド内出土)、丹塗り高杯片がある。

鉄製品 (Fig. 306) カマド前のピットから出土した。背部の残存長12.4cmで、厚さ4.5mmを測る。木質の残った破片があるが、接合しない。刃部は内彎しており、両端を欠く。刀の一部であろうか。

土玉 床面から出土したが、運搬中に壊れてしまったと思われ、現物不明である。

Tab. 95 C区第46号住居跡出土土器一覧() 推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調		備考
			口径	器高					
1	S埴蓋	ツマミ欠	(8.4)		口縁部	胎土精良、堅緻	外面	灰褐色	
2	S埴	底部欠	(5.7)	(4.5)	体部	砂粒を含む、堅緻	内面	灰褐色	1とセットか?

C区第47号住居跡 (Fig. 307, PL.91)

東壁はこれより新しく営まれた第4号溝、および北東隅のピットにより消滅する。西壁は長さ3.5mで、他辺の長さは不明であるが、柱間寸法からみてほぼ方形のプランと考えられる。カマドは西壁中央に、竪穴から55cmほど張り出して設けられ、その中央はよく焼け、南側の脇には床面から高さ4cmほどの粘土で築いたと推定される壁の一部が残存する。支柱穴はP1・P2・P3・P4の4本柱と思われる。

遺物 (Fig. 308)

弥生土器・土師器・須恵器が出土した。弥生土器はわずか小片2で、土師器には丹塗り土器片1がある。ほかに、カマド内より小片が出土した。

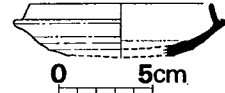


Fig. 308
C区第47号住居跡出土
土器実測図(縮尺1/4)

- 床面から
の深さ (cm)
- P1(-30.0)
 - P2(-40.0)
 - P3(-50.5)
 - P4(-32.5)
 - P5(-20.0)
 - P6(- 9.0)
 - P7(-11.0)
 - P1~P2 1.46m
 - P2~P3 1.56m
 - P3~P4 1.68m
 - P4~P1 1.86m

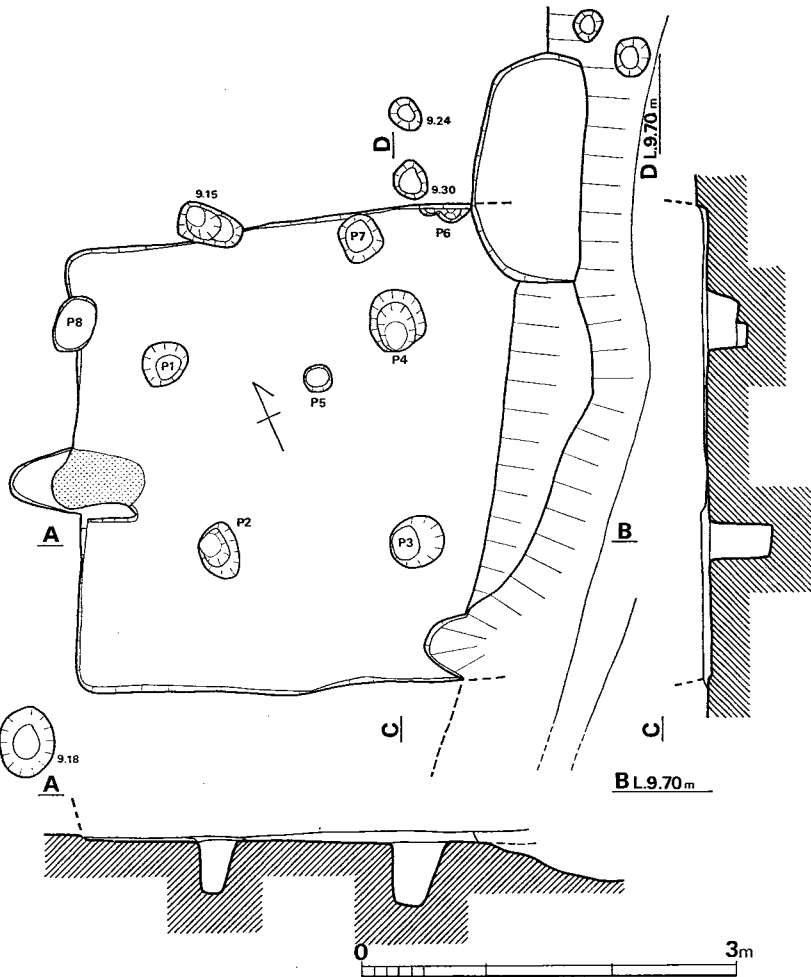


Fig. 307
C区第47号住居跡
実測図(縮尺1/60)

Fig. 308の須恵器杯は底部内面をナデ、外面をヘラ削り、ほかの部分にはヨコナデで、復原口径9.7cmを計る。須恵器では、ほかに蓋小片1が出土した。

C区第48号住居跡 (Fig. 309, PL.92)

北東隅は方形ピットと、それはさらに第6号住居跡と重複するが、前後の関係は第48号住居方形ピット第6号住居跡の順に新しくなる。南壁は長さ2.9m、西壁は3.1mで、方形プランを呈する。カマドは不明であるが、その残存と推定される焼土は、北壁中央の竪穴内で検出された。P6は焼土の上から新しく掘られている。支柱穴はP2・P3・P4・P5の4本柱と思われる。

遺物 (Fig. 310・311, PL.92)

須恵器・土師器・不明鉄製品・砥石が出土した。Fig. 310の高杯脚部は赤褐色を呈する須恵

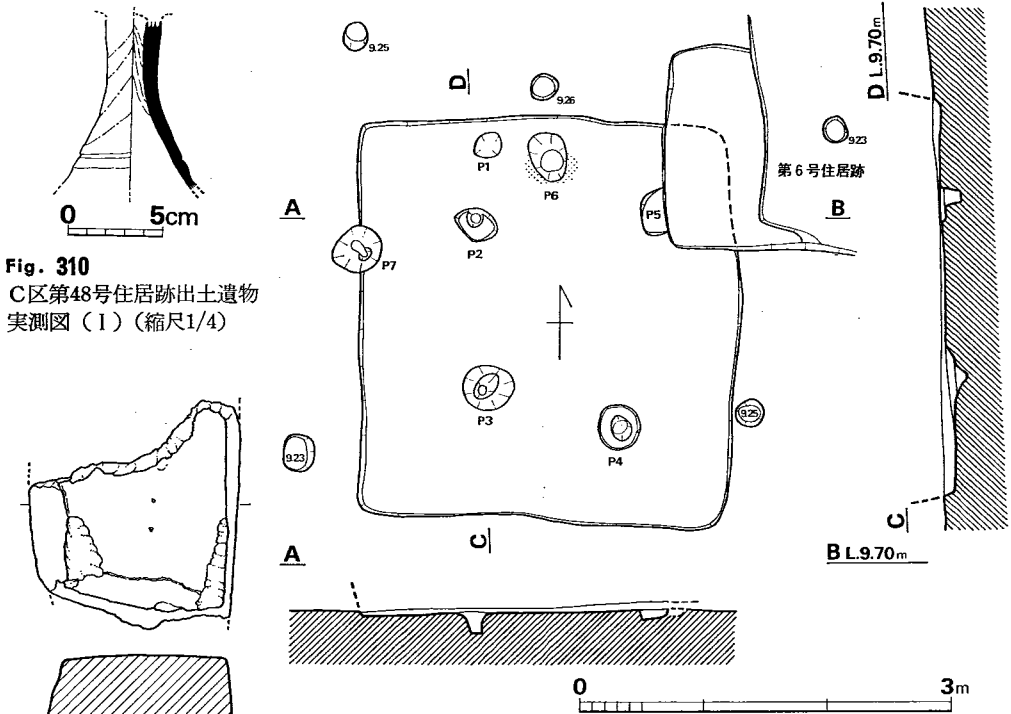


Fig. 310
C区第48号住居跡出土遺物
実測図 (I) (縮尺1/4)

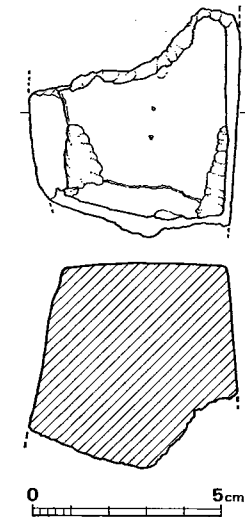


Fig. 311
C区第48号住居跡出土遺物
実測図 (II) (縮尺1/2)

Fig. 309 C区第48号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)

P1(-16.0)・P2(-15.0)・P3(-13.0)・P4(-8.0)・P5(-13.0)

P6(-13.0)

P2~P3 1.4m・P3~P4 1.15m・P4~P5 1.75m・P5~P2 1.40m

器で、裾部近くに凹線を1本もつ。内面にはシボリ目を残す。土師器では、高杯片1と甕1個体分があるが、甕の破片の多くは接合しないため図示しなかった。

砥石 (Fig. 311) 床面から出土した。3面を使用しており、キメは細かい。

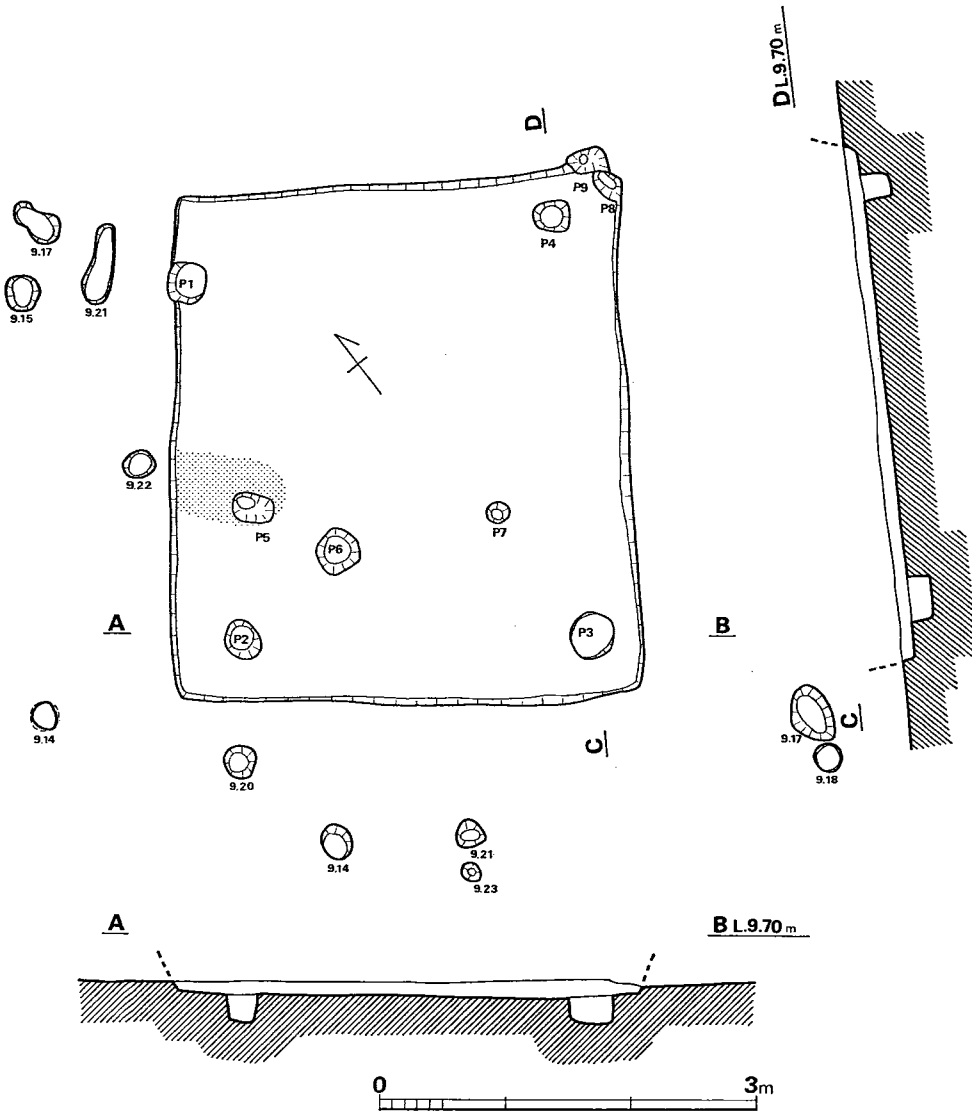


Fig. 312 C区第49号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)

P1(-16.0)・P2(-22.5)・P3(-23.0)・P4(-24.0)・P5(-9.0)・P6(-18.0)・P7(-9.5)

P8(-5.0)

P1~P2 2.86m・P2~P3 2.80m・P3~P4 3.35m・P4~P1 2.94m

C区第49号住居跡 (Fig. 312, PL.93)

各辺の長さは北壁3.5m、南壁3.7m、東壁4.1m、西壁3.5mで、ほぼ方形プランを呈する。カマドは西壁中央のやや南寄り、堅穴内に設けられている。支柱穴はP1・P2・P3・P4の4本柱と思われ、また、床面は各壁の内側幅1mほどでは柔らかいが、堅穴中央ではよくしまり堅い。

遺物 (Fig. 313・314, PL.93)

須恵器・土師器・不明鉄製品が出土した。土師器は住居跡内ピットより数片出土したのみである。Fig. 313の須恵器蓋は外面肩部に凹線をもち、口縁部内面に段をもつ。天井部外面はへら削りで「×」のへら記号がある。肩部には青灰色の粘土が付着しており、重ね焼の痕であろう。粘土の付着状態からみると、平行タタキ目の凸部と思われる (PL.93)。復原口径15.4cm、器高4.3cmを測る。

不明鉄製品 (Fig. 314) 残存長約4cmで、刀子の茎かもしれない。ほかに住居内のピットより、3cm程の白い小石2が出土した。

C区第50号住居跡 (Fig. 315, PL.93)

北側は、新しい時期の第6号溝に破壊され、西側の一部は調査区外にあるため未発掘である。南東壁は長さ4.4mで、他の壁の長さは不明であるが、P3の北側には焼土が認められ、これを北西壁中央に設けられたカマドの残存部とみれば、ほぼ方形プランを呈すると考えられる。支柱穴はP1・P2・P3・P4の4本柱と思われ、南東壁に接してP5が並ぶ。その他に堅穴内外には多数の柱穴が掘り込まれているが、この住居に伴うものは明確ではない。

遺物 (Fig. 316・317, Tab. 96, PL.93)

須恵器・土師器・石錘が出土した。須恵器は杯底部の小片で、図示しなかった。

土師器 (Fig. 316-1~3) 1の杯は略完形で、薄手の精製品である。2は立ち上りのある杯で、内外面とも赤茶色の薄い膜がある。3は断面三角形の貼付突帯をもつ。高杯であろうか。

以上のほかに土師器では立ち上りのある杯で内外面黒色のものと、甕口縁片2・甕口縁片4が出土した。

石錘 (Fig. 317, PL.93) 偏平な丸石を、両端とも両面から打撃を加えて紐かけの凹部をつくっている。重さ145g。

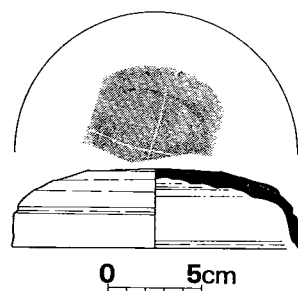


Fig. 313 C区第49号住居跡出土遺物実測図 (I) (縮尺 1/4)

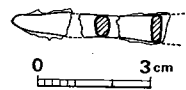


Fig. 314 C区第49号住居跡出土遺物実測図 (II) (縮尺 1/2)

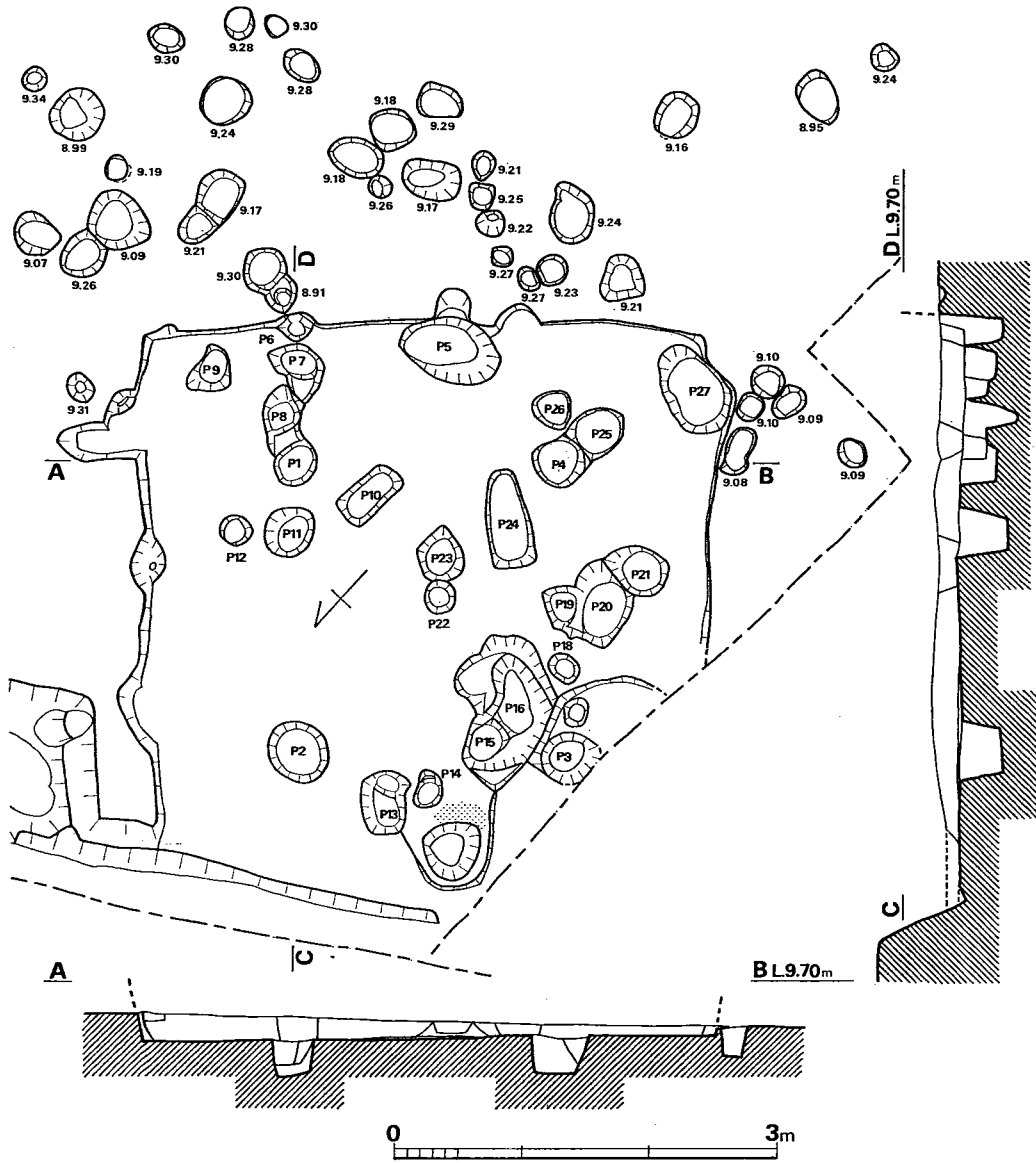


Fig. 315 C区第50号住居跡実測図 (縮尺1/60)

床面からの深さ (cm)

P 1(-39.0)・P 2(-22.0)・P 3(-43.0)・P 4(-30.0)・P 5(-48.0)・P 6(-30.0)
 P 7(-25.0)・P 8(-40.0)・P 9(-20.0)・P 10(-29.5)・P 11(-49.0)・P 12(-25.0)
 P 13(-51.0)・P 14(-13.0)・P 15(-57.0)・P 16(-46.0)・P 17(-25.0)・P 18(-15.0)
 P 19(-33.0)・P 20(-43.0)・P 21(-30.0)・P 22(-24.5)・P 23(-39.0)・P 24(-49.0)
 P 25(-25.0)・P 26(-23.0)・P 27(-31.5)
 P1~P2 2.28m・P2~P3 2.10m・P3~P4 2.34m・P4~P1 2.07m

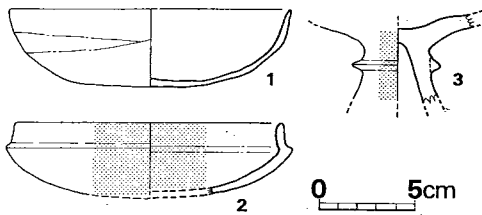


Fig. 316 C区第50号住居跡出土遺物実測図
(I) (縮尺1/4)

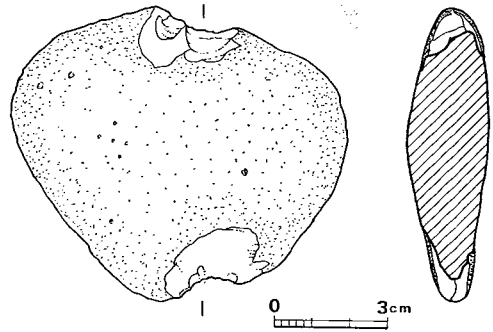


Fig. 317 C区第50号住居跡出土遺物実測図
(I) (縮尺1/2)

Tab. 96 C区第50号住居跡出土土器一覧 () 推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	H杯	1/8	(14.7)	4.2	口縁部	胎土精良、焼成良	淡黄褐色	
2	H杯	底部欠	(14.0)	(4.0)	外稜(15.3)	砂粒を含み、焼成良	茶赤色	外面化粧土
3	H杯	脚部				胎土精良、焼成良	黄褐色	外面化粧土

C区第51号住居跡 (Fig. 318)

北側は、新しい時期の第6号溝と、現在流れる小川によって破壊され、わずかに南隅を検出したのみで、焼土・支柱穴などの詳細は不明である。P3に接して、南東～北西方向に段があり、これを境に南西側の床面は北東側の床面より7cmほど高く、ベット状遺構の可能性もある。遺物 (Fig. 319、Tab. 97)

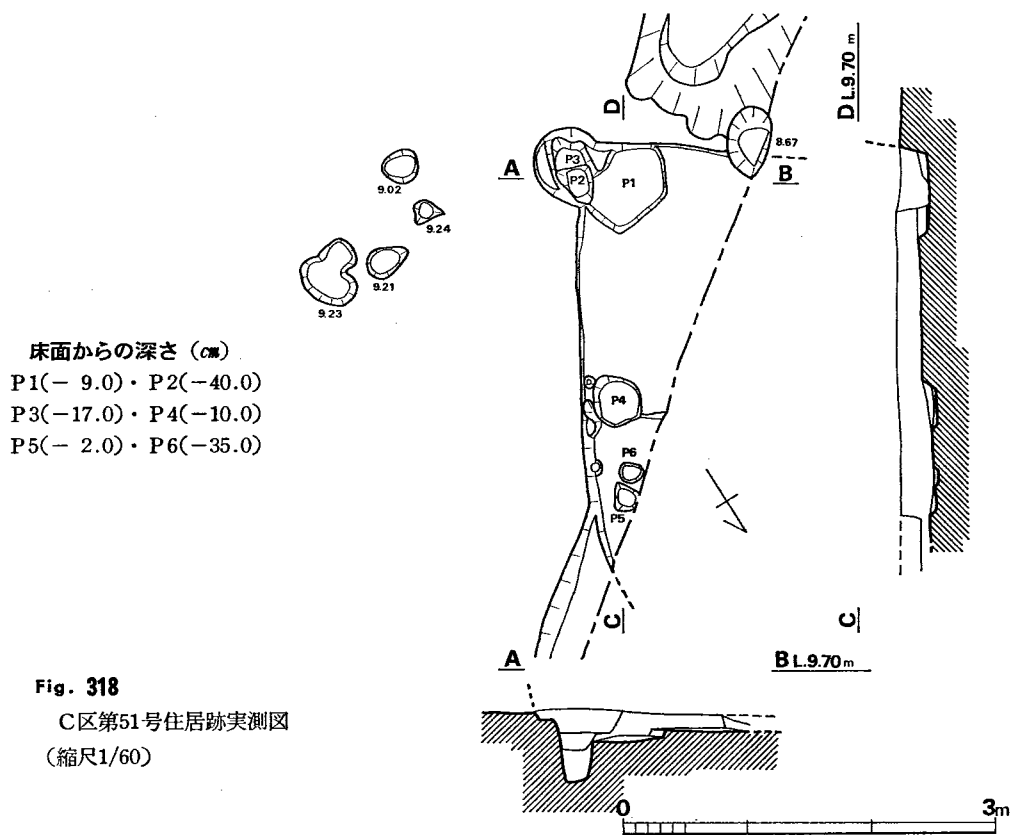
弥生土器・土師器・須恵器・鉄滓が出土した。須恵器は蓋破片1のみである。弥生土器は小片20が出土した。

土師器 (Fig. 319-1・2) 1・2ともに床面出土で、1は外稜をもつ。内外面とも丁寧な仕上げで精製品である。2は杯口縁片で外面は細かいヘラ調整を施している。

鉄滓が2個が出土した。

Tab. 97 C区第51号住居跡出土土器一覧 () 推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	H杯	底部欠	(13.8)		外稜 15.3	胎土精良、焼成良	黄灰褐色	
2	H杯	口縁部				細砂を含み焼成良	黄褐色	



床面からの深さ (cm)

P1(- 9.0)・P2(-40.0)

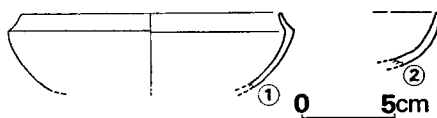
P3(-17.0)・P4(-10.0)

P5(- 2.0)・P6(-35.0)

Fig. 318

C区第51号住居跡実測図
(縮尺1/60)

Fig. 319 C区第51号住居跡出土土器実測図 (縮尺1/4)



D区第1号竪穴 (Fig. 320, PL.103)

本遺構はB区の北側、N322・W9に位置し、今次の発掘調査によって遺構の確認された範囲では北隅にあるものである。第1号・第2号・第3号溝はいずれも本遺構より新しい。平面は不整形を呈し、東西の床面での長さ4.2m、南北5.5mで、中央部が若干凹む。壁は西～北側の部分の遺存が良好で約30cm、南側がもっとも低く約15cmである。遺物は多量に出土したが、明確な層序はみられなかった。

遺物 (Fig. 321~325, Tab. 98~102, PL.104・105)

土師器・須恵器・不明鉄製品・鉄滓が出土した。

須恵器 (Fig. 321~323) Fig. 321—1~24はすべて蓋である。1はやや口径が大きく、肩部に鋭い凹線をもち、口縁部内面は浅く凹む。2・3はツマミをもち、かえりは受け部より突出する。ともに天井部外面にカキ目を施すが2は鈍い。4はツマミで、本体との接合面をよく残し

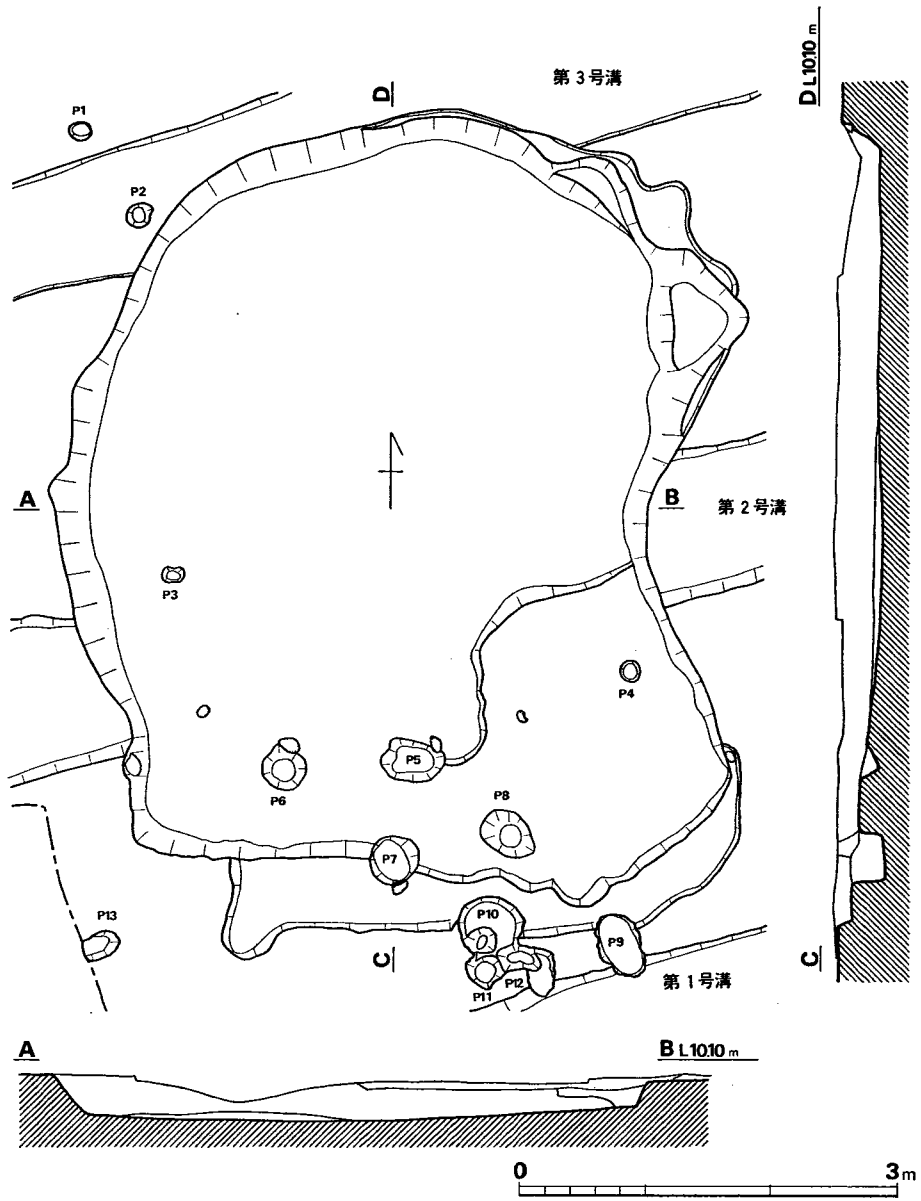


Fig. 320 D区第1号竪穴実測図 (縮尺1/60)

深さ (cm)
 P 1(-45.0)・P 2(- 9.0)・P 3(-13.0)・P 4(- 8.0)・P 5(-22.5)・P 6(- 8.0)
 P 7(-19.0)・P 8(-44.0)・P 9(-18.0)・P 10(-30.5)・P 11(-32.5)・P 12(-26.0)
 P 13(-17.5)

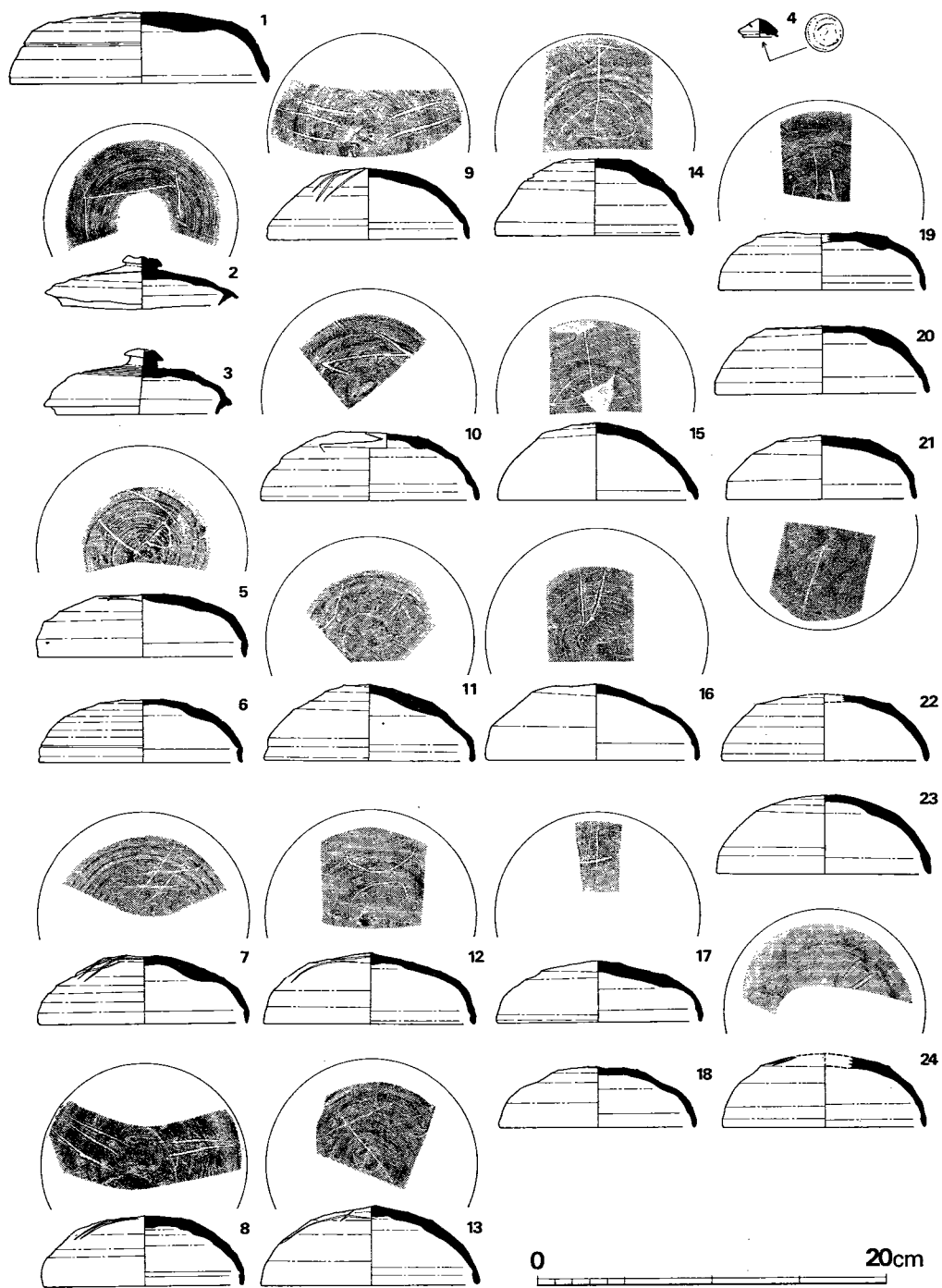


Fig. 321 D区第1号竖穴出土土器実測図(1) (縮尺1/4)

ている。5～8は口縁部内面に鋭い凹線または切り込み状を呈する断面をもつ一群である。9～13は口縁部内面が浅い凹線状を呈する。14～18は口縁部内面が浅い凹線状を呈し、その天井部寄りが隆起している一群である。19は14～18に近いが若干の差がある。20は胎土がやや粗い。20・21は胎土に大きめの砂粒を含み、ザラザラした感じで5～19に比べ胎土が粗い。23は黄褐色を呈する焼成不良品である。24は口縁端部よりやや天井部寄りに平坦面をもつ。

調整上では、17の天井部外面が静止ヘラ削り、11・12の天井部外面はナデで、そのほかの個

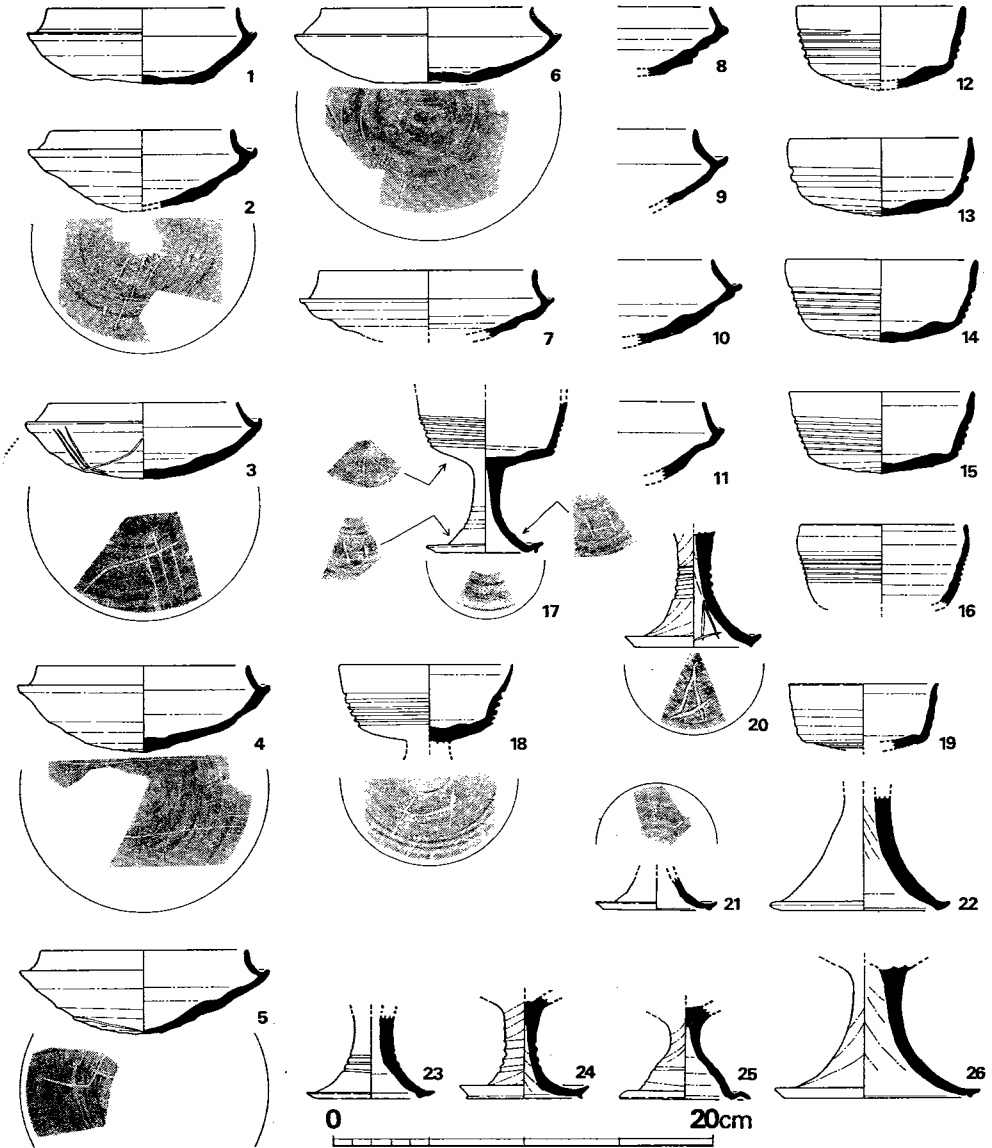


Fig. 322 D区第1号竪穴出土土器実測図(Ⅱ) (縮尺1/4)

体は回転ヘラ削りである。天井部内面はナデ、そのほかの部分すべてヨコナデを施す。

ヘラ記号では、8と9、11と12、14と15がほぼ一致し、そのうち11と12、14と15の2組は器形・胎土・焼成・色調・調整・ヘラ記号がほとんど同じで、同一人の作品と思われる。21は内面天井部にヘラ記号があり、数少ない例である。14のヘラ記号は特徴ある形態で、遺跡周辺での表採土器にも見られる。

Fig. 322—1~16は杯である。1~11の口縁に立ち上りをもつものと12~16の体部に凹線をもつものがある。2・3・5の受け部は内彎するような形である。5のヘラ記号はFig. 321—5の蓋のヘラ記号と同じものである。12~16のうち、16は高杯杯部の可能性がある。12~15は18の高杯杯部とほとんど同じ形である。18の底部がカキ目調整であるのに対し、12~15はヘラ削り

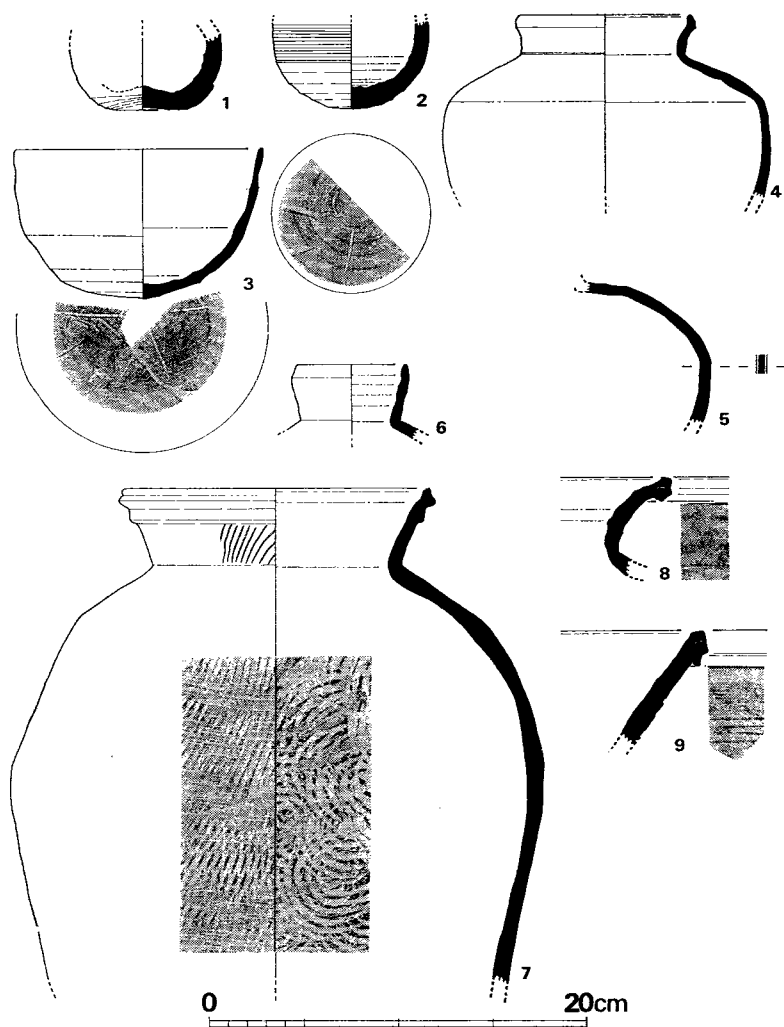


Fig. 323 D区第1号竖穴出土土器実測図(Ⅲ) (縮尺1/4)

している。杯は高杯杯部に比べて口径がやや大きくなる傾向がある。

Fig. 322—17~26は高杯である。そのうち19は杯の可能性もあるが、底部のカキ目より高杯とした。17は杯部の底部外面、裾部外面の対称位置にそれぞれ1、脚端部内面に1と、計4カ所にヘラ記号がある。裾部外面の2つはほぼ同じ記号である。25は脚部下半がふくらみ、内面は黒色を呈する。24は赤黄色を呈するが、焼成・胎土とも良好である。22・23・26は砂粒を含み焼成不良で土師質の胎土である。

Fig. 323—1・2は腺で、ともに上半を欠く。2の底部外面にはヘラ記号がある。3は腕やや歪んでいる。体部はヨコナデ、底部はヘラ削りで、内面は磨滅のため不明である。4は体部

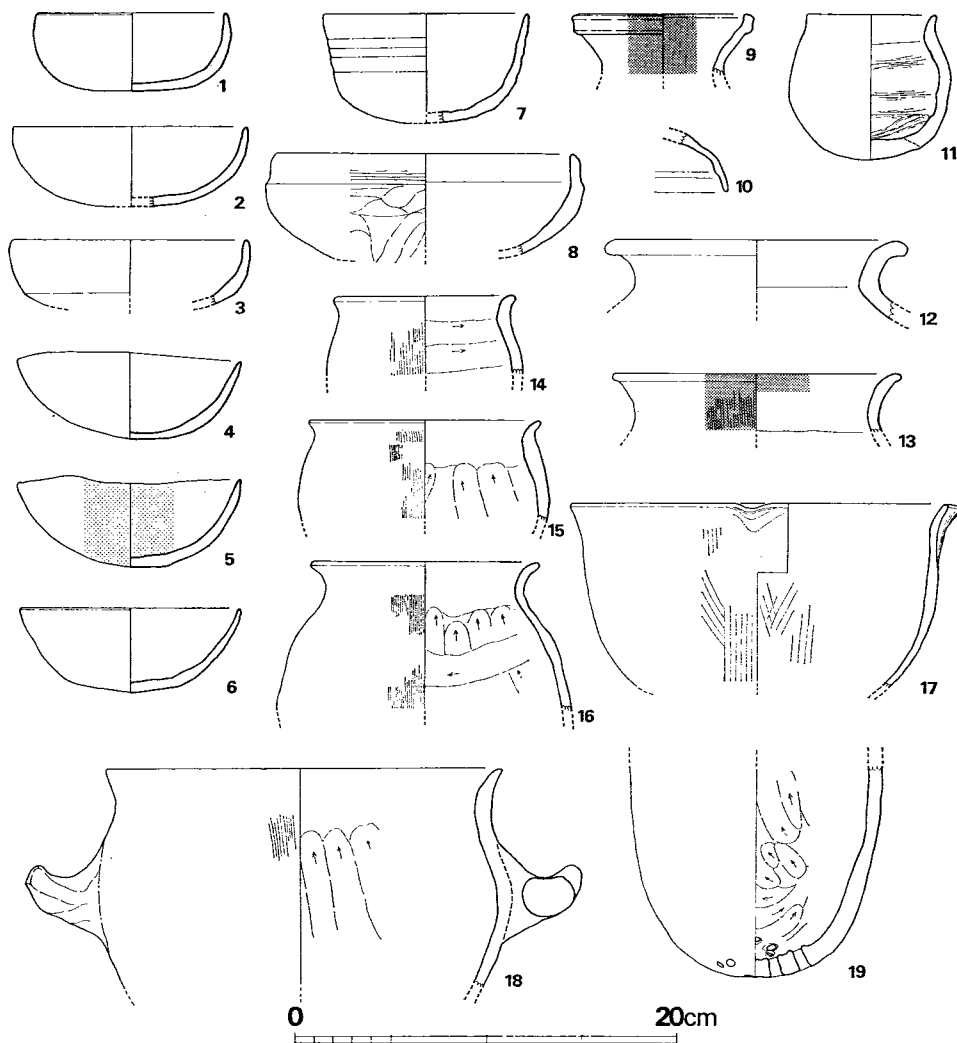


Fig. 324 D区第1号竖穴出土土器実測図(Ⅳ) (縮尺1/4)

外面をカキ目調整する。5は断面図のように、外面が赤褐色の薄い膜状（1mm前後）で中心部は灰色を呈する。数量的には少ないが、本遺跡出土須恵器片のなかにかくつか見られた。6は提瓶または平瓶の口縁部と思われる。7は頸部外面に縦方向の櫛目状調整を施し、その上からヨコナデする。体部外面は平行タタキ→カキ目、内面は同心円タタキである。8・9は甕口縁部で9は大形品である。

土師器 (Fig. 324・325) Fig. 324—1~6は杯で、1の口径はやや小さい。5は内外面とも赤黄色の薄い膜がある。6は二次的な火熱を受け赤褐色を呈する。磨滅のため調整不明のものが多し。7は外面に浅い凹線をもつ。8は外稜をもち、体部はヘラ削りである。9は壺?の口縁部で内外面とも丹塗りである。器形は須恵器によく似ている。10は蓋の小片で、須恵器的な形であるが、胎土・焼成・色調等から土師器とした。11は小形の壺で、内面は指頭による強いナデである。12・13は甕で、13は口縁部内面と外面全体が丹塗りである。14~16は小形の甕で、内面はヘラ削り、外面はハケ目調整、口縁部ヨコナデである。18は把手付の甕である。17は片口の鉢で、内外面とも粗いハケ目を施す。19は甕で、現存孔は17個ある。穿孔は外面からされており、内面の状態からみると、ヘラ削り→穿孔→焼成の順となる。

Fig. 325—1~12は高杯である。1は他のものより硬質で、須恵器的である。2は砂粒を多く含む須恵器的要素が多くみられる。外面に赤黄色の薄い膜のあることから土師器とした。3

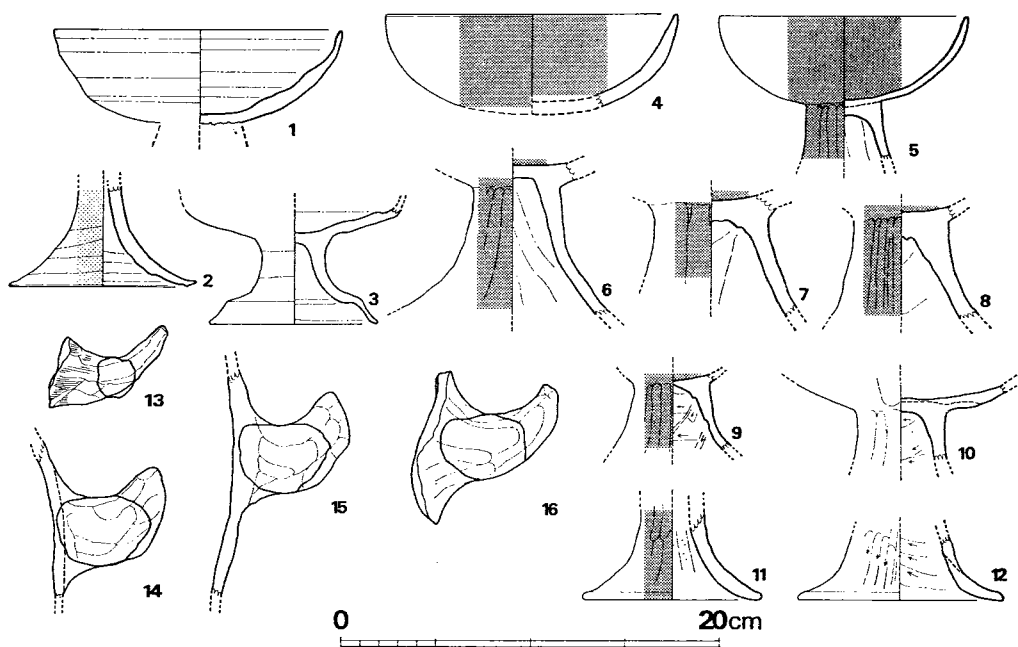


Fig. 325 D区第1号竪穴出土土器実測図 (V) (縮尺1/4)

は高杯としたが、脚台付の鉢や壺の脚台部の可能性もある。4は底部を欠き杯の可能性もあるが、他の杯に比べて厚手で、丹塗りであることから高杯杯部とした。5~9は脚部内面を除き丹塗りである。いずれも脚部外面は縦方向のヘラ削りを施す。13~16は把手で、13はやや小形で

Tab. 98 D区第1号竪穴出土土器一覧(1) ()推定値、単位 cm

番号	器種	法量		胎土・焼成	色調		備考
		口径	器高				
1	S 蓋	(14.7)	4.1	砂粒を含み、焼成やや不良	黄	灰 色	
2	S 蓋	11.0	3.0	胎土精良、焼成良	灰	褐 色	天井部外面ヘラ記号
3	S 蓋	9.0	3.8	細砂を含み、焼成良	外面 内面	暗紫 灰 褐色 色 色	天井部外面重ね焼痕跡
4	S 蓋			細砂を含み、焼成良	青	灰 色	ツマミのみ
5	S 蓋	12.0	3.6	細砂を含み、焼成良	紫	灰 色	天井部外面ヘラ記号
6	S 蓋	(11.8)	3.6	細砂を含み色焼成良	外面 内面	灰 褐色 青 色 色	
7	S 蓋	12.0	3.9	細砂を含み、焼成良	外面 内面	灰 褐色 青 色 色	天井部外面ヘラ記号
8	S 蓋	11.4	4.0	細砂を含み、焼成良	外面 内面	黒紫 灰 褐色 紫 色 色	天井部外面ヘラ記号
9	S 蓋	11.8	4.1	細砂を含み、焼成良	外面 内面	黒紫 灰 褐色 灰 色 色	天井部外面ヘラ記号
10	S 蓋	12.7	3.9	細砂を含み、焼成良	外面 内面	黒紫 灰 褐色 青 色 色	天井部外面ヘラ記号
11	S 蓋	12.3	4.4	細砂を含み、焼成良	内面 内面	灰 褐色 灰 色 色	天井部外面ヘラ記号
12	S 蓋	12.3	4.1	細砂を含み、焼成良	外面 内面	灰 褐色 灰 褐色 色 色	天井部外面ヘラ記号
13	S 蓋	(12.8)	5.5	細砂を含み、焼成良	外面 内面	灰 褐色 灰 褐色 色 色	天井部外面ヘラ記号
14	S 蓋	11.5	4.4	細砂を含み、焼成良	灰	色	天井部外面ヘラ記号
15	S 蓋	11.5	4.4	細砂を含み、焼成良	青	灰 色	天井部外面ヘラ記号
16	S 蓋	12.3	4.4	細砂を含み、焼成良	灰	色	天井部外面ヘラ記号
17	S 蓋	12.0	3.5	細砂を含み、焼成良	外面 内面	黒紫 青 褐色 灰 褐色 色 色	天井部外面ヘラ記号
18	S 蓋	(11.3)	3.5	細砂を含み、焼成良	紫	灰 色	
19	S 蓋	(12.0)	3.2	細砂を含み、焼成良	青	灰 色	天井部外面ヘラ記号
20	S 蓋	(12.5)	3.9	細砂を含み、焼成良	灰	褐色	
21	S 蓋	(11.0)	3.6	砂粒を含み、焼成良	青	灰 色	天井部外面ヘラ記号
22	S 蓋	(11.8)	3.9	砂粒を含み、焼成良	青	灰 褐色	
23	S 蓋	12.8	4.5	砂粒を含み、焼成良	茶	黄 色	
24	S 蓋	(11.7)	4.2	細砂を含み、焼成良	青	灰 色	天井部外面ヘラ記号

ある。

鉄滓が3個出土した。それぞれ、2.5g、8.5g、5.3gである。

Tab. 99 D区第1号竪穴出土土器一覧(Ⅱ) () 推定値、単位 cm

番号	器種	法量		胎土・焼成	色調	備考
		口径	器高			
1	S 杯	10.2	4.0	胎土精良、焼成良	灰 色	
2	S 杯	9.6	4.0	細砂を含み、焼成良	青 灰 色	底部外面へラ記号
3	S 杯	10.4	4.0	細砂を含み、焼成良	黒 灰 色	底部外面へラ記号
4	S 杯	(11.3)	4.5	細砂を含み、焼成良	内面 紫 灰 色 外面 青 灰 色	底部外面へラ記号
5	S 杯	(11.1)	4.5	細砂を含み、焼成良	紫 灰 色	底部外面へラ記号
6	S 杯	(11.0)	3.9	細砂を含み、焼成良	青 灰 色	底部外面圧痕
7	S 杯	(11.4)		細砂を含み、焼成良	灰 褐 色	
8	S 杯			細砂を含み、焼成良	黒 灰 色	
9	S 杯			細砂を含み、焼成良	青 灰 色	
10	S 杯			細砂を含み、焼成良	青 灰 色	
11	S 杯			胎土精良、焼成良	青 灰 色	
12	S 杯	(9.1)	(4.4)	細砂を含み、焼成良	紫 褐 色	
13	S 杯	9.6	4.1	細砂を含み、焼成良	内面 青 灰 色 外面 黒 灰 色	
14	S 杯	10.2	4.3	細砂を含み、焼成良	灰 褐 色	
15	S 杯	9.8	4.4	細砂を含み、焼成良	紫 灰 色	
16	S 杯	(8.7)		細砂を含み、焼成良	内面 茶 褐 色 外面 赤 褐 色	
17	S 高杯			細砂を含み、焼成良	青 灰 色	4カ所にへラ記号
18	S 高杯	9.2		細砂を含み、焼成良	黒 褐 色	杯底部にへラ記号
19	S 高杯	(7.8)		細砂を含み、焼成良	暗 紫 色	
20	S 高杯			細砂を含み、焼成良	灰 色	脚部内面へラ記号
21	S 高杯			細砂を含み、焼成良	暗 紫 灰 色	裾部外面へラ記号
22	S 高杯			砂粒を含み、焼成良	明 茶 黄 色	
23	S 高杯			砂粒を含み、焼成良	明 茶 黄 色	
24	S 高杯			胎土精良、焼成良	赤 黄 色	
25	S 高杯			細砂を含み、焼成良	黒 灰 色	
26	S 高杯			砂粒を含み、焼成良	明 茶 黄 色	

Tab. 100 D区第1号竪穴出土土器一(Ⅲ)覧()推定値、単位 cm

番号	器種	法量		胎土・焼成	色調	備考
		口径	器高			
1	S 碗			胎土精良、焼成良	内面 暗紫褐色 外面 灰褐色	
2	S 碗			胎土精良、焼成良	紫灰褐色	底部外面ヘラ記号
3	S 碗	13.3	7.8	砂粒を含み、焼成不良	明灰褐色	底部外面ヘラ記号
4	S 壺	(9.2)		砂粒を含み、焼成良	青灰褐色	
5	S 平瓶?			胎土成良、焼成良	赤褐色	
6	S 壺	5.6		砂粒を含み、焼成良	灰褐色	
7	S 甕	(16.6)		砂粒を含み、焼成良	内面 紫褐色 内面 黒灰褐色	
8	S 甕			砂粒を含み、焼成良	青灰褐色	
9	S 甕			細砂を含み、焼成良	青灰褐色	

Tab. 101 D区第1号竪穴出土土器一(Ⅳ)覧()推定値、単位 cm

番号	器種	法量		胎土・焼成	色調	備考
		口径	器高			
1	H 杯	(10.8)	4.2	胎土精良、焼成良	黄褐色	
2	H 杯	14.4	4.2	胎土精良、焼成良	赤褐色	
3	H 杯	(12.4)		少量の砂粒を含み、やや軟	黄褐色	
4	H 杯	(12.2)	(4.5)	少量の砂粒を含み、焼成良	黄褐色	
5	H 杯	(12.2)	(4.8)	大きめの砂粒を含み、焼成良	明茶褐色	内外面化粧土
6	H 杯	(11.7)	(4.5)	胎土精良、焼成良	赤褐色	二次加熱
7	H 碗	(10.8)	(5.8)	少量の砂粒を含み、焼成不良	赤褐色	
8	H 碗	(15.7)		少量の砂粒を含み、焼成良	黄灰褐色	
9	H 壺	(9.8)		胎土精良、焼成良	淡灰黄色	内外面丹塗り
10	H 蓋			細砂を含み焼成不良	黄灰褐色	
11	H 壺	6.8	7.7	砂粒を含み、焼成良	黄褐色	
12	H 甕	(16.4)		砂粒を含み、焼成良	黄褐色	
13	H 甕	(15.6)		砂粒を含み、焼成良	黄褐色	丹塗り
14	H 小形甕	(9.7)		砂粒を含み、焼成良	赤褐色	
15	H 小形甕	(12.4)		砂粒を含み、焼成良	茶褐色	
16	H 小形甕	(12.0)		砂粒を含み、焼成良	黄褐色	

番号	器種	法量		胎土・焼成	色調	備考
		口径	器高			
17	H片口鉢	(20.2)		砂粒を含み、焼成良	黄色	
18	H甕	(20.9)		砂粒を含み、焼成良	淡黄褐色	
19	H甕			砂粒を含み、焼成良	茶褐色	

Tab. 102 D区第1号竖穴出土土器一覧(V) ()推定値、単位cm

番号	器種	法量		胎土・焼成	色調	備考
		口径	器高			
1	H高杯	15.5		砂粒を含み、焼成良	黄褐色	接合部径 4.3
2	H高杯			砂粒を含み、焼成良	黄褐色	
3	H高杯			砂粒を含み、焼成良	黄褐色	脚端部径 9.2
4	H高杯	15.8		胎土精良、焼成良	黄褐色	内外面丹塗り
5	H高杯	13.5		胎土精良、焼成良	黄褐色	現存高 7.5 内外面丹塗り
6	H高杯			胎土精良、焼成良	黄褐色	接合部径 4.6 丹塗り
7	H高杯			胎土精良、焼成良	黄褐色	接合部径 6.1 丹塗り
8	H高杯			胎土精良、焼成良	黄褐色	接合部径 5.1 丹塗り
9	H高杯			胎土精良、焼成良	黄褐色	接合部径 4.0
10	H高杯			胎土精良、焼成良	黄褐色	接合部径 4.8
11	H高杯			胎土精良、焼成良	黄褐色	外面丹塗り、端部径 9.5
12	H高杯			胎土精良、焼成良	黄褐色	端部径 10.9
13	把手			少量の砂粒を含み、焼成良	赤褐色	
14	把手			砂粒を含み、焼成良	茶黄色	
15	把手			砂粒を含み、焼成良	茶黄色	
16	把手			砂粒を含み、焼成良	茶黄色	

C 歴史時代の遺構と遺物

ここでは住居跡以外の歴史時代の遺構と遺物について記す。確実に歴史時代に属すると思われる遺構は、

C区 井戸

Pit 167

Pit 933

Pit 934

B区 第1号溝

の4カ所である。

1. 井戸 (Fig. 326, PL. 97・100)

発掘区から検出した井戸は1基で、C区中央部西端で発見した。

掘り方は上面径 $2.5m$ 、下面径 $1.95m$ を測る不整形円のプランを呈する。遺構面から $1.85m$ の深さで砂層の湧水層に到達するが、さらにその砂層を $0.85m$ 掘り下げている。

井戸枠と考えられる遺材は、掘り方の底近くから発見された。それは、厚さ $3cm\sim 3.5cm$ 、幅 $16cm$ 以上の板材、厚さ $6.3cm$ 、幅 $3.8cm$ の角材、それに径 $3\sim 5cm$ を測り、端部を削った自然木の3種類である。いずれも破損し、完材はなかった (PL. 100)。

板材の小口面に仕口、端部付近に釘穴等がないことから板を横に組むことは考え難い。そこで、この井戸は板材を縦に立て、角材を横に組み、自然木を隅木とした方形縦板組の構造が考えられる。

井戸枠の規模は完材がないことから詳かでないが、裏込め石等から $90\sim 100cm$ ほどの平面形

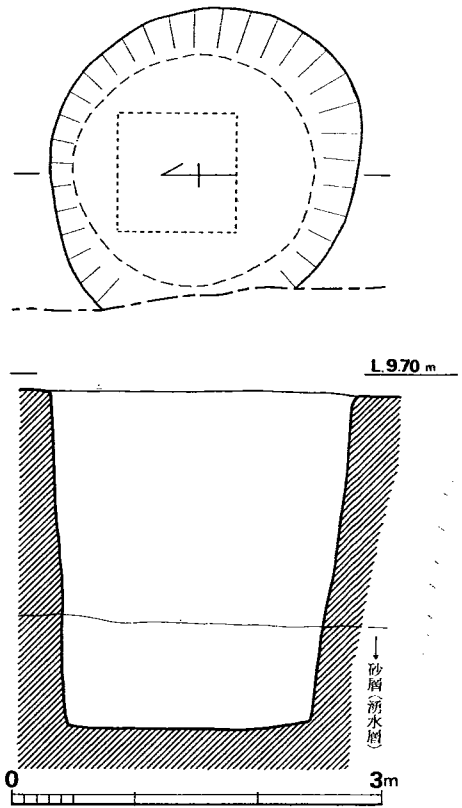


Fig. 326 C区井戸実測図 (縮尺1/60)

が想定できる。

遺物 (Fig. 327・328, Tab. 103, PL. 98)

井戸から出土した遺物は、須恵器、土師器、黒色土器、瓦器、輸入陶磁器、施釉陶器、木器、用途不明青銅器である。

須恵器

杯蓋 (1) 大形のもので、口縁部は断面三角形を呈し、端部が内面に入ることにより、最大径は口縁部稜線にある。

杯身 (2) 無高台の杯で、口縁を細く引き出し、若干外反させている。外底部は丁寧にヘラナデを行い、回転ヘラ切り跡を大方消している。内面は灰を被り若干自然釉がふき出している。

高杯 (3) 脚部下半を欠損しているもので、杯部外底は回転ヘラ削りの再調整を行い、脚部貼付時にさらにこの削りの上を丁寧にナデている。脚部はヨコナデ成形で、しぼり目は観察できない。内面は一面に灰を受け黄緑色の釉がふき出し、外面は酸化炎を受け、あざき色を呈する。胎土は前二者よりも精良である。

甕 小片のため図示できない。体部外面のタタキは、平行条線のもの細かい正格子の2種ある。

土師器

土師器は検出遺物中もっとも多い。無高台皿、高台付皿、無高台杯、高台付杯、高台付碗、甕がある。

無高台皿 (4) 極めて少量検出したのみで、図示できるのは1点だけである。出土土師器中もっとも新しいものと考えられる。

高台付皿 (5~7) 高台の形状および法量により、5・6と7の2種に分けられる。5・6は、皿部は浅いが、高台は高く細い。7は、皿部が比較的深く、高台はずんぐりしている。

無高台杯 (8~13) 底部切り離しは雑で、荒い凹凸が残り、再調整は行っていない。口径により8~10と11~13の2種に分けることができる。

高台付杯 (14) 無高台杯に比して杯部の器高は深く、成形も丁寧である。高台は細く高い。

高台付碗 (15~19) 器形・口径・調整・焼成により15・16、17、18・19の3種に分類できる。15・16は、体部が丸味を持ち、口縁を上方に直線的に引き出している。赤茶色を呈する。17は前者に比して口径は大きく、口縁を若干外反させている。色調は茶灰色を呈し、焼成は堅い。15~17は三者ともにヨコナデおよびナデ成形である。18・19は復原口径13cm代を測る中形の碗で、体部下半にヘラ削りを施し、体部中位は不明瞭ながら稜を有している。

黒色土器 (20~22) 内面のみを燻すA類 (20・21) と内外面を燻しているB類 (22) があり、量的にはB類の方が多い。20の内面は磨滅のためヘラミガキは不明、外面残存部はヨコナ

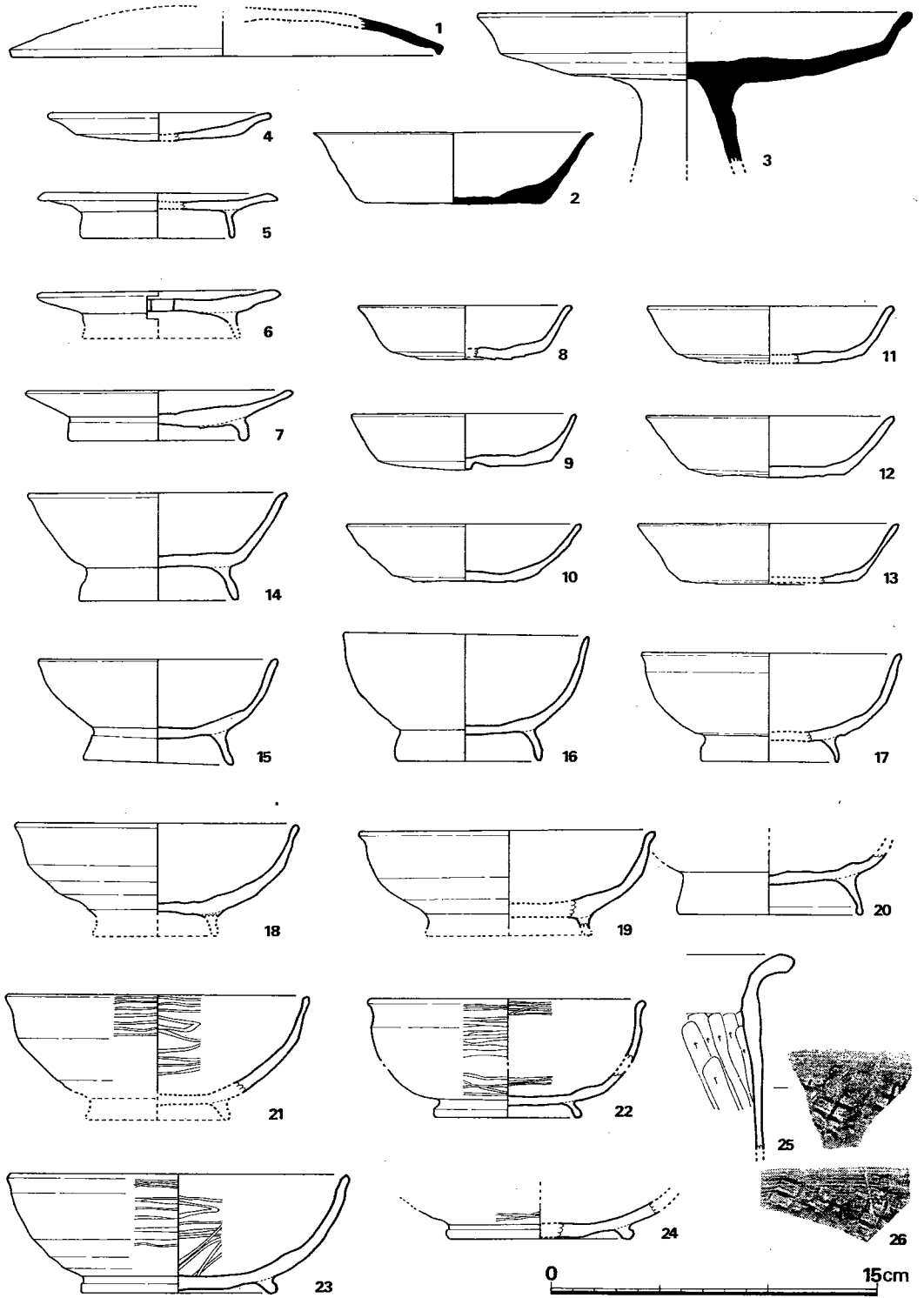


Fig. 327 C区井戸出土遺物実測図 (I) (縮尺1/3)

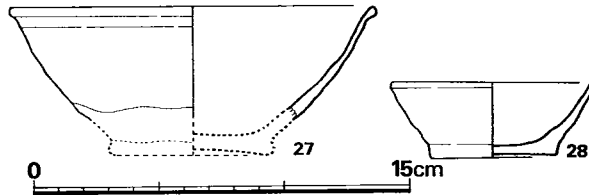


Fig. 328 C区井戸出土遺物実測図(Ⅱ) (縮尺1/3)

デ、ヘラ削りを行っていないようである。21は体部が1/3ほど残っており、内面のミガキは口縁部がヨコ方向に、それ以下は6弦をなすようにジグザグ状に磨いている。外面は屈曲部より上はヨコ方向に丁寧にヘラミガキを施し、それ以下は回転ヘラ削りを行っている。22は推定復原である。ヘラミガキは非常に丁寧に、内外ともに光沢を放っている。

瓦器碗(23・24) 23・24ともに低く外反する高台を持ち、高台部周辺は暗灰色を呈す。

甕(25・26) 25・26とも同一個体の甕の破片である。口縁部は内外面ともにヨコナデを行う。

外面はヨコ方向にハケ目調整を行い、その上に1辺約8mmを測る正格子のタタキ目跡が観察できる。このような正格子のタタキは瓦によくみられる手法であるが、土師器の甕にまで使われていることは極めてまれな例であり、貴重な資料である。

輸入陶磁器(27) 小破片であるため正確な器形は詳かにしえないが、残存部の形状から平底の碗になると考えられる。淡灰緑色の釉に細かい無数の貫入が入っている。露胎部分は淡いあずき色を呈し、胎土は淡灰色を呈する。いわゆる越州窯系のものである。

施釉陶器(28) 緑釉の小皿で、胎土は茶色を呈するが、焼成は非常に堅く、土師質の胎と須恵質の胎との中間にあたる。底部切り離しは回転糸切りである。

木器 井戸枠以外に木器の破片を検出したが、小片であるためその形状は不明である。

青銅器 これも小片であるため用途は不詳である。(PL. 99)

Tab. 103 C区第1号井戸跡出土土器一覧()は推定値、単位 cm

番号	器種	法量		底部 切り離し	胎土・焼成	色調	備考
		口径	器高				
1	S 杯蓋	19.9		不明	胎土精良、焼成堅緻	灰色	
2	S 杯身	12.9	3.3	ヘラ切り	胎土精良、焼成堅緻	灰色	
3	S 高杯	20.0		ヘラ切り	胎土精良、焼成堅緻		

番号	器種	法 量		底 部 切 離 し	胎土・焼成	色 調	備 考
		口 径	器 高				
4	H 小 皿	10.3	1.2	ヘラ切り	胎土精良、焼成軟質	淡 赤 茶 色	
5	H高台付皿	11.1	2.1	ヘラ切り	胎土精良、焼成軟質	淡 赤 茶 色	
6	H高台付皿	11.3		ヘラ切り	胎土精良、焼成軟質	淡 赤 茶 色	中心部に挿孔あり
7	H高台付皿	12.4	2.3	ヘラ切り	胎土精良、焼成軟質	淡 赤 茶 色	
8	H 杯	9.8	2.8	ヘラ切り	胎土精良、焼成軟質	淡 赤 茶 色	
9	H 杯	10.2	2.6	ヘラ切り	胎土精良、焼成軟質	淡 赤 茶 色	
10	H 杯	10.6	2.7	ヘラ切り	胎土精良、焼成軟質	淡 赤 茶 色	
11	H 杯	11.2	2.6	ヘラ切り	胎土精良、焼成軟質	淡 赤 茶 色	
12	H 杯	11.6	2.9	ヘラ切り	胎土精良、焼成軟質	淡 赤 茶 色	
13	H 杯	12.1	2.8	ヘラ切り	胎土精良、焼成軟質	淡 赤 茶 色	
14	H高台付杯	12.0	5.0	ヘラ切り	胎土精良、焼成軟質	淡 赤 茶 色	
15	H高台付碗	11.0	4.7	ヘラ切り	胎土精良、焼成良好	赤 茶 色	
61	H高台付碗	11.1	5.9	ヘラ切り	胎土精良、焼成良好	赤 茶 色	
17	H高台付碗	12.0	5.0	ヘラ切り	胎土精良、焼成堅い	茶 灰 色	
18	H高台付碗	(13.1)		ヘラ切り	胎土精良、焼成堅い	灰 茶 色	
19	H高台付碗	(13.6)		不 明	胎土精良、焼成堅い	灰 茶 色	
20	K高台付碗			ヘラ切り	胎土精良、焼成軟質	内面 真黒色 外面 淡赤茶色	黒色土器A類
21	K高台付碗	14.0		不 明	胎土精良、焼成堅い	内面 真黒色 外面 真茶灰色	黒色土器A類
22	K高台付碗			ヘラ切り	胎土精良、焼成堅い	真 黒 色	黒色土器B類
23	G高台付碗	15.7	5.4	ヘラ切り	胎土精良、焼成堅固		
24	G高台付碗			ヘラ切り	胎土精良、焼成堅固		
25	H 甕				砂粒多く荒い、焼成堅い	茶 色	26と同一個体
26	H 甕				砂粒多く荒い、焼成堅い	茶 色	25と同一個体
27	C 碗	(14.7)			胎土精良、焼成堅緻	淡灰緑色の釉	
28	P 皿	8.2	3.0	糸 切 り	胎土精良、焼成堅緻	暗 緑 色 の 釉	

※ S：須恵器 H：土師器 K：黒色土器 G：瓦器 C：輸入陶磁器 P：陶器

2. C区 Pit 167 (Fig. 329)

C区東南辺部で検出した1.5m×1.65m×0.4mを測る奈良時代後半期の土壇である。

遺物 (Fig. 330, PL. 67)

埋土中から発見した顕著な遺物は、須恵器杯と瓦片のみである。

須恵器 (1・2) 1は細くて低い高台を有する杯で、口径13.1cm、器高4.9cmを測る。2は高台部の大部分を欠損している杯で、口径13.1cmを測る。

瓦 (3) 平瓦の破片で、1辺約1.5cmの正格子のタタキ目がある。胎土中の砂粒は少なく、青灰色を呈し、焼成は堅い。

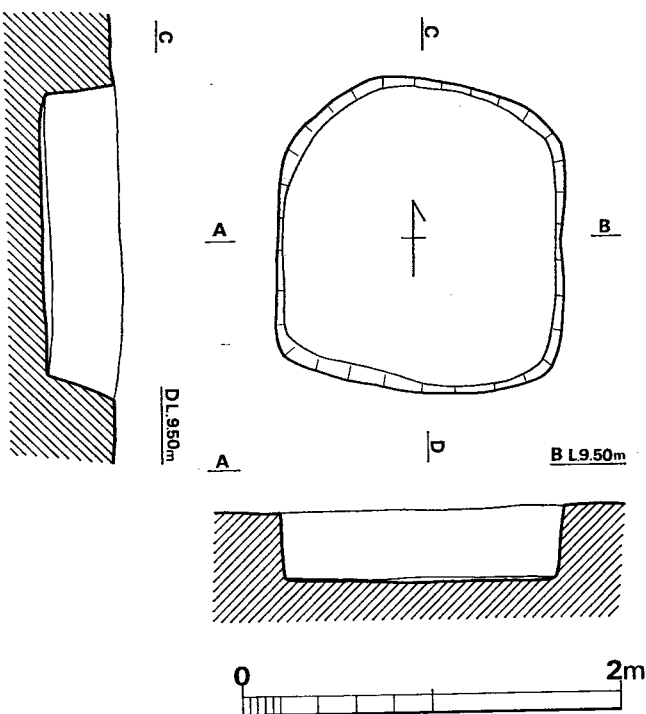


Fig. 329 C区ピット167実測図 (縮尺1/40)

3. C区 Pit 933 (Fig. 331)

C区第4号溝を切っている径約2.7mを測る不整形形の土壇である。

遺物 (Fig. 332, PL. 67)

古墳時代および奈良時代の土器を検出した。

土師器 (1) 口径12.4cm、器高4.2cmを測る杯身で、全体に著しく磨滅しているため調整は不明である。体部外面に一部赤色顔料を塗布した跡がある。

須恵器 (2~5) 3・4は平底の杯で、3は口径13.1cm、器高3.7cmを測り、内面はアズキ色を呈し、外面は灰緑色の自然釉が全面にふき出している。4は口径13.5cm、器高4.2cmを測り体部下部から底部全面に回転ヘラ削り再調整を施している。2・5は高台付の杯で、2は口径13.7cm、器高4.7cmを測り、細くて比較的高い高台を有し、体部中位で屈曲する特徴を有す。体部はヨコナデ、外底面は回転ヘラ削り再調整を行っている。色調は赤褐色を呈する。5は口

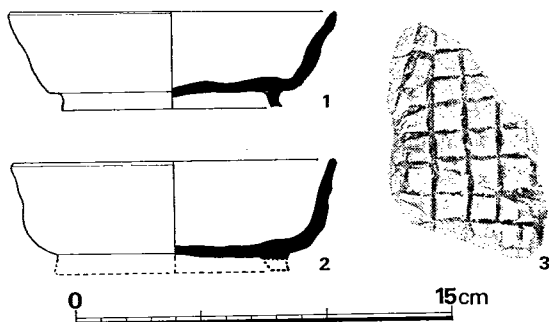


Fig. 330 C区ピット167出土遺物実測図 (縮尺1/3)

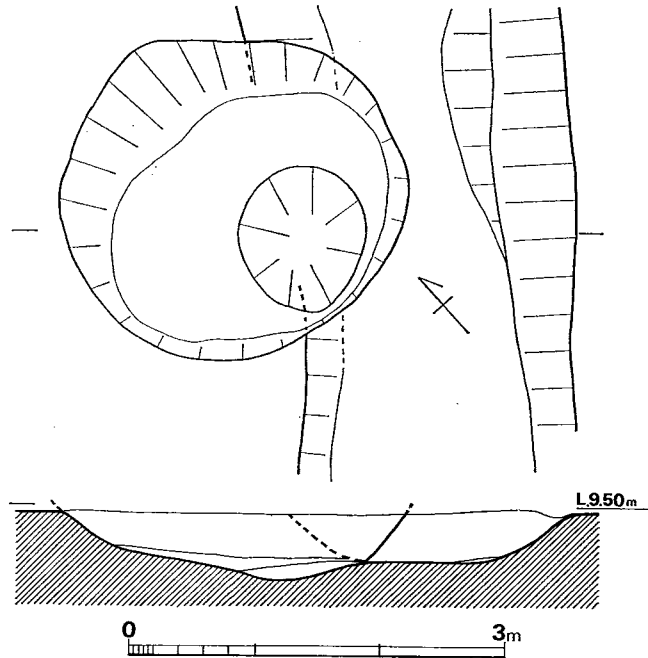


Fig. 331 C区ピット933実測図 (縮尺1/60)

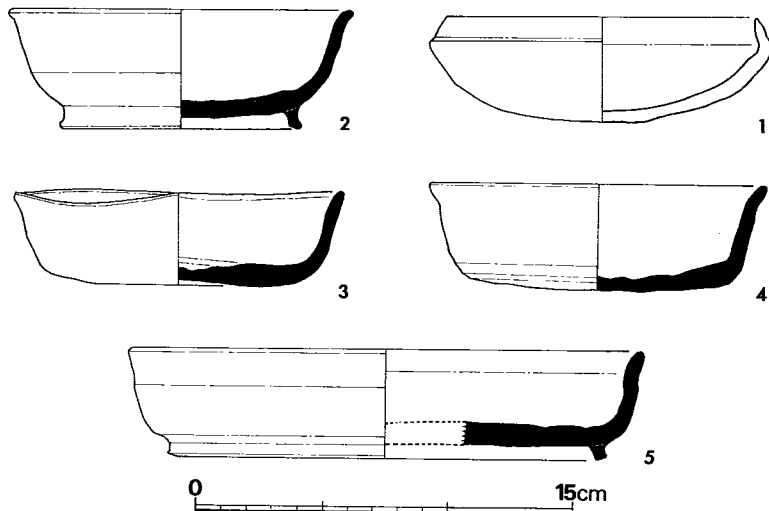


Fig. 332 C区ピット933出土遺物実測図 (縮尺1/3)

径20.6cm、器高4.8cmを測る大型のもので、外底部の調整は磨滅のため不明。灰色を呈する。

4. C区 Pit 934 (Fig. 333)

Pit 933 のすぐ北に隣接して検出した長方形の土窟で、 $3.02m \times 1.35m \times 0.38m$ を測る。

遺物 (Fig. 334, PL. 67)

平底の杯、高台付の杯を検出した。いずれも須恵器である。

1は口径 $14.9cm$ 、器高 $3.9cm$ を測る。体部はヨコナデ、内外底面はナデを行っている。若干砂粒を含み、色調は茶灰色を呈する。2は口径 $14.4cm$ 、器高 $4.4cm$ を測る。体部下半からヘラ削り再調整を行っている。暗灰色を呈する。

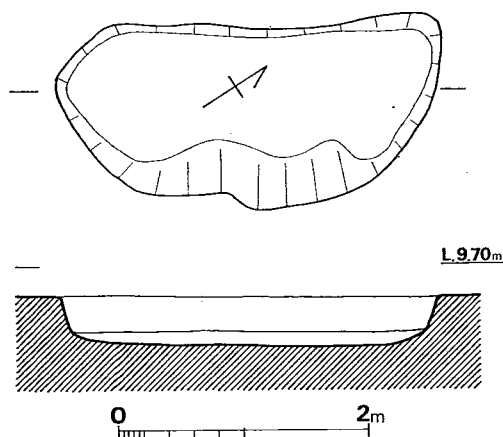


Fig. 333 C区ピット934実測図 (縮尺1/60)

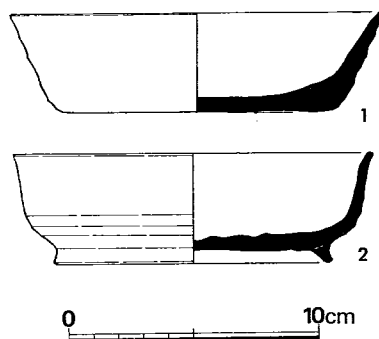


Fig. 334 C区ピット934出土遺物実測図 (縮尺1/3)

5. B区第1号溝 (Fig. 335, PL. 62~64)

B区の第1号溝は、つぎの3つの部分に分けられる。

第1号溝aはもっとも大きな部分で、北東から南西へ向って流れる。幅の平均は7m前後で、深さ0.8m、長さ約48mにわたって検出した。

第1号溝bは、N280・W15付近から南西方向のN250・W35付近へ向う溝で、幅1m前後、深さ約0.3m、長さ約40mにわたって検出した。この第1号溝bは、同じ溝のaと一部併行している。

第1号溝cは、N260・W35付近で第1号溝bとほぼ直角に交わる溝で、長さ約4mを検出した。幅1.6m、深さ0.2m前後である。aは北東～南西の両端がさらに延長すると思われる。

b・cは、aの上面で確認された溝である。

これらから出土した遺物は、互いに分離することができないため、ここでは一括して扱うこ

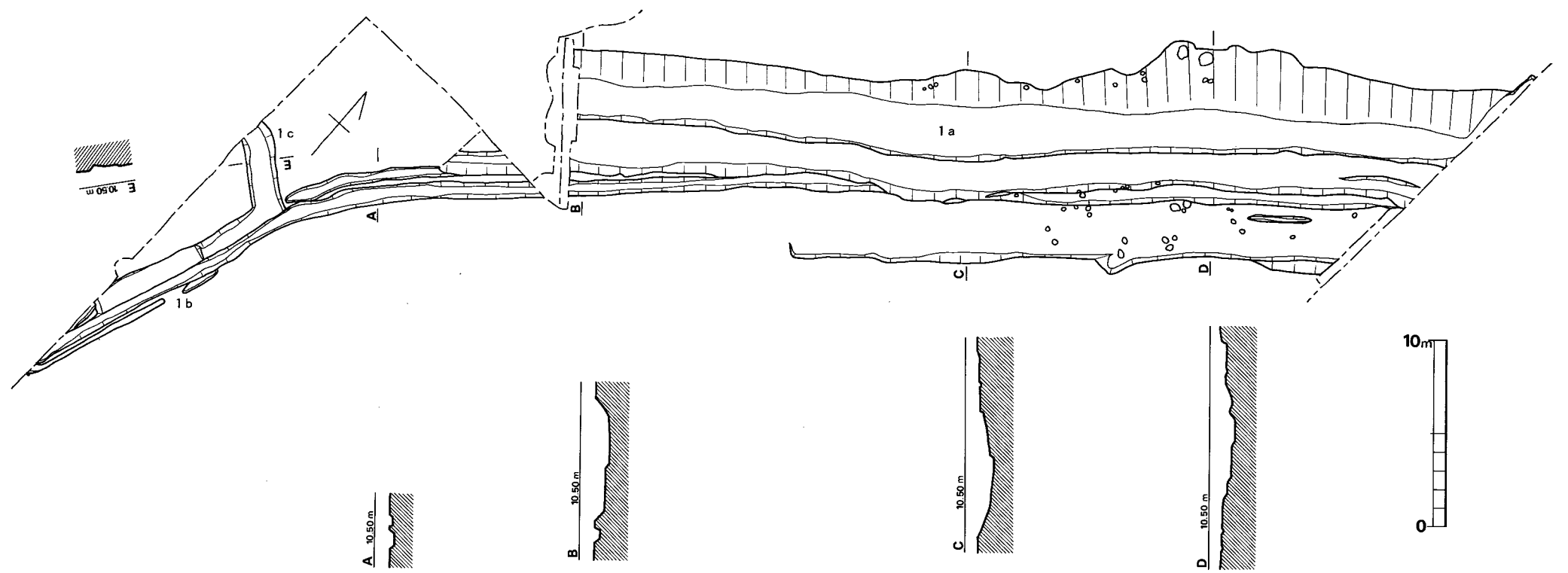


Fig. 335 B区第1号溝 a・b・c 実測図(縮尺1/300)

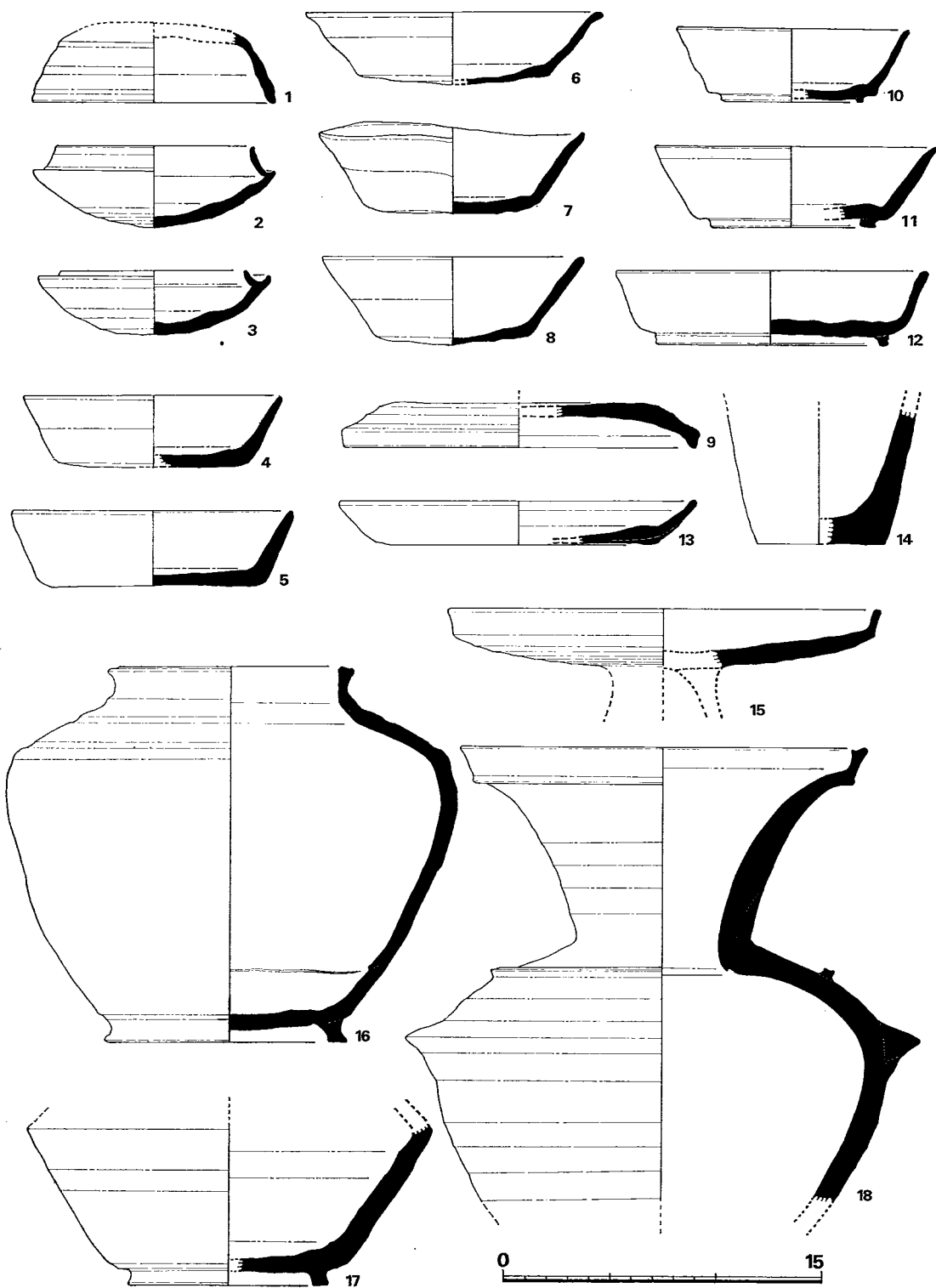


Fig. 336 B区第1号溝出土遺物実測図(1) (縮尺1/3)

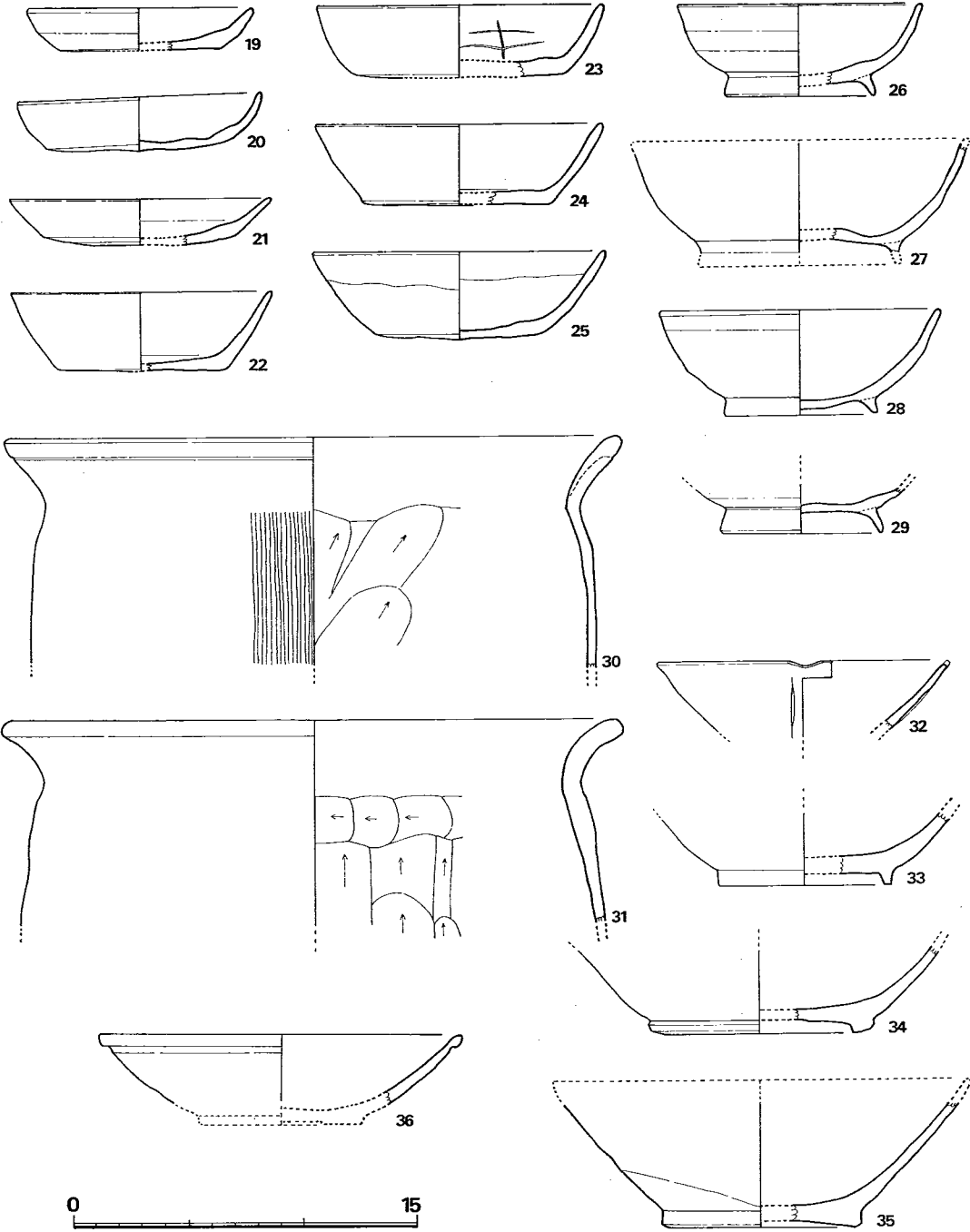


Fig. 337 B区第1号溝出土遺物実測図(Ⅱ) (縮尺1/3)

とにした。

遺物 (Fig. 336~338, PL. 64・65)

発見した遺物のうちもっとも多いのは土器で、それに石鍋、石帯、鑄型、砥石、耳環および鉄器である。土器はほとんどが小片であるので、ここではその中で、復元し得るもの、かつまた溝の埋没年代の想定し得るものに関り報告する。また、糸切のあるものは1片もない。

須恵器 (1~18) 出土した須恵器は杯・皿・瓶・壺・甕・横瓶等がある。1~3は6世紀後半、16は8世紀前半、10・11は8世紀後半、17・18は9世紀前半のものと考えられる。

土師器 (19~24・26・27・30・31) 小皿・皿・杯・碗・甕がある。このうちもっとも新しいものは27で、10世紀中頃と考えられる。

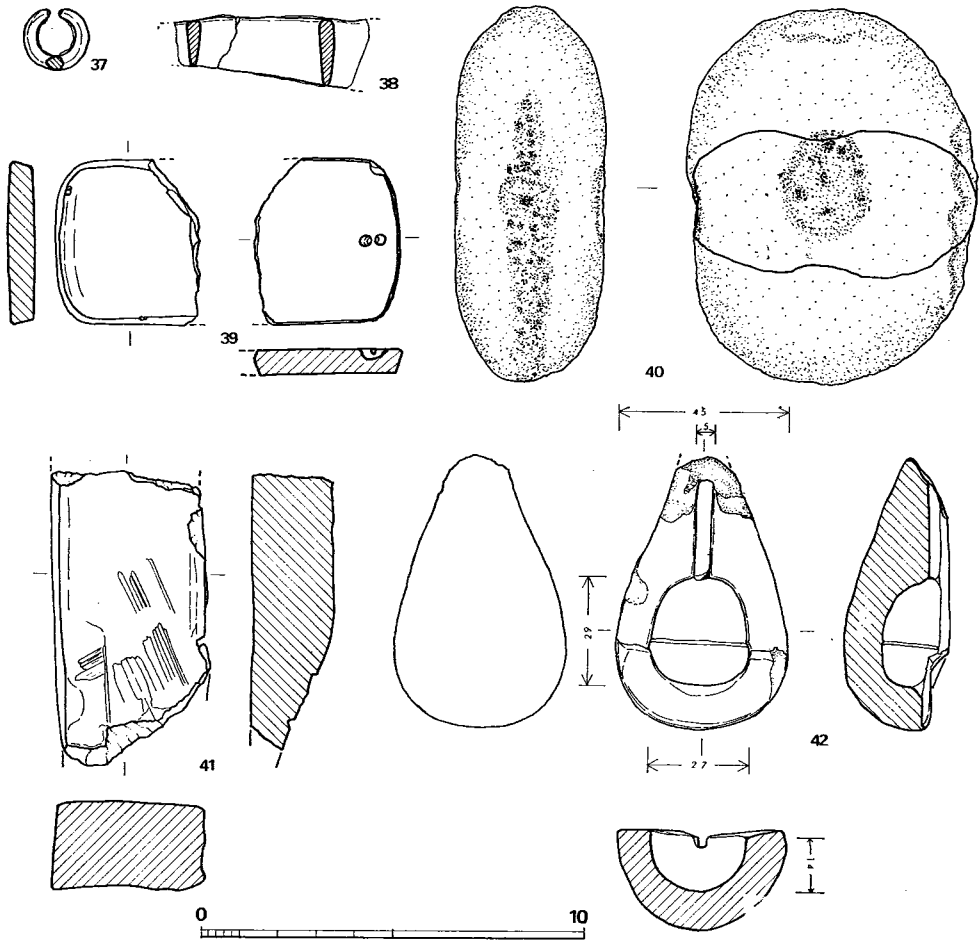


Fig. 338 B区第1号溝出土遺物実測図(Ⅲ) (縮尺1/2)

黒色土器（25・28・29）内面のみを燻すA類と内外面を燻すB類とが出土している。A類は細片のため図示できない。25は口縁部内外を燻してない特異なB類の杯で類例を知らない。3点ともに10世紀代と考えられる。

輸入陶磁器（32～36）32～35は越州窯系の青磁である。32は口縁部に輪花を持つが小片のため輪花の数は不明で、光沢のあるウグイス色の釉が薄くかかっている。胎土は淡灰褐色を呈する。33は全面に淡緑黄色の釉を施釉している。全体に細かい貫入が認められ、見込み部分および高台端部に積ね焼きの目跡がある。34は、33と同様に全面に施釉しているが風化のため器面は荒れている。33と同様の位置に目がある。35は平底の碗で、体部下半には釉がかかっていない。胎土は前三者に比して比較的荒い。細かい貫入のある暗黄緑色の釉がかかる。36は口縁を小さく折り曲げた定窯系の白磁で、白色の胎に純白の釉がかかっている。32～39は9世紀から10世紀代のものと考えられる。

耳環（37）銅胎の耳環であるが、メッキは剝離し、金環か銀環かさだかでない。1.65cm×1.70cm×0.4cmを測る。

鉄器（38）鉄器茎の部位であろうか。

石帯（39）黒雲母の凝集した滑石質のもので、幅4.3cm、厚さ0.7cmを測る。表面は磨かれ光沢を放つが、裏面は砥いだままで、光沢はない。

磨石（40）使用のため両面中央部に凹みがある。石質不明。

砥石（41）4面ともによく使用されている。石質不明。

鋳型（42）土製の鈴の鋳型で、内面は焼けて赤化しているが、磨滅のため付着物は検出できない。

以上述べてきたように、溝から発見した遺物のうち、もっとも新しいものは10世紀代の土師器、黒色土器、輸入陶磁器であることから、この溝の埋没年代をその頃に求めることができる。

Tab. 104 B区第1号溝出土土器一覧（ ）は推定値、単位 cm

番号	器種	法量		胎土・焼成	色調	備考
		口径	器高			
1	S 杯蓋	11.4		砂粒少く、焼成堅緻	黒 灰 色	
2	S 杯身	9.4	3.9	砂粒少く、焼成堅緻	暗 灰 色	天井部は回転ヘラ削り
3	S 杯身	8.8	3.0	砂粒少く、焼成堅緻	青 灰 色	天井部は回転ヘラ削り
4	S 杯	12.2	3.4	砂粒少く、焼成堅緻	暗 灰 色	外底部はヘラナデ
5	S 杯	13.4	3.6	砂粒少く、焼成堅緻	茶 灰 色	外底部はヘラナデ

番号	器種	法量		胎土・焼成	色調	備考
		口径	器高			
6	S 杯	14.0	3.4	砂粒少く、焼成堅緻	黒 灰 色	外底部はヘラナデ
7	S 杯	12.6	4.1	砂粒少く、焼成堅緻	暗 灰 色	外底部はヘラナデ
8	S 杯	12.2	4.2	砂粒少く、焼成やや軟	白 灰 色	外底部はヘラナデ
9	S 杯蓋	16.6		砂粒少く、焼成堅緻	暗 灰 色	天井部は回転ヘラ削り
10	S高台付杯	10.9	3.4	砂粒少く、焼成堅緻	青 灰 色	外底部はヘラナデ
11	S高台付杯	13.2	3.8	砂粒少く、焼成堅緻	暗 灰 色	
12	S高台付杯	14.6	3.5	砂粒少く、焼成堅緻	暗 灰 色	
13	S 皿	16.8	2.1	砂粒少く、焼成やや軟	白 灰 色	
14	S 瓶			砂粒少く、焼成堅緻	黒 灰 色	外底部はヘラナデ
15	S 高杯	20.5		砂粒少く、焼成堅緻	暗 灰 色	杯部外底部は回転ヘラ削り
16	S 壺	11.6	17.7	若干砂粒を含み、焼成やや軟	白 灰 色	胴部はヨコ方向のカキ目あり
17	S 壺			若干砂粒を含み、焼成堅緻	暗 灰 色	残存部はヨコナデのみ
18	S 壺	19.3		砂粒少く、焼成やや軟	内面 黒茶色 外面 茶褐色	肩部と胴部との界いの突帯以下は回転ヘラ削り
19	H 皿	(9.9)	(1.9)	砂粒少く、焼成軟	淡 茶 色	
20	H 皿	10.8	2.4	砂粒少く、軟	淡 茶 色	
21	H 皿	11.4	2.1	砂粒少く、焼成軟	淡 茶 色	
22	H 杯	11.4	3.5	砂粒少く、焼成軟	淡 孔 茶 色	
23	H 杯	12.6	(3.2)	砂粒少く、焼成軟	淡 孔 茶 色	
24	H 杯	12.6	(3.6)	砂粒少く、焼成軟	灰 茶 色	
25	K 杯	12.9	3.9	砂粒少く、焼成軟	内 外 黒 色	口縁部のみ燻しはなし
26	H 碗	10.8	4.1	砂粒少く、焼成軟	黄 褐 色	
27	H 碗			砂粒少く、焼成軟	赤 褐 色	
28	K 碗	12.2	4.6	砂粒少く、焼成良好	黒 色	黒色土器B類
29	K 碗			砂粒少く、焼成良好	黒 色	黒色土器B類
30	H 甕	(27.2)		砂礫多し、焼成堅い	灰 茶 色	
31	H 甕	(27.3)		砂礫多し、焼成堅い	黒 茶 色	

K：黒色土器

D その他の遺構と遺物

1 溝

B・C・D各区の溝は、C区第3号溝およびB区第1号溝を除いて遺物の量が少なく、確実な所属時期の比定が困難であることから、本項でまとめて扱うこととした。なお、C区第3号溝は「弥生時代の遺構と遺物」、B区第1号溝は、「歴史時代の遺構と遺物」の項でそれぞれ記した。

B区第2号溝 (Fig. 339, Tab. 108, PL. 41)

N170～N180の間をほぼ東西に横切るように延びる溝である。発掘範囲内では長さ約51.3mほどが確認された。幅50～90cm、深さ15～35cmを測る。土層断面の観察では、上層2/3ほどが黒色の粘質土、下層は暗灰色の砂質土で埋っていた。N171・W5付近を境として西側はN74°W、東半はN76°Eの方位をとる。N173・O付近で第3号溝と重複しているが、前後関係は確認できなかった。

遺物 (Fig. 340-1・2)

1は略完形の土師器杯で、口径13.5cm、器高3.3cmを測る。底部外面に回転糸切り痕があり、他の部分はヨコナデを施す。砂粒を多く含み黄褐色を呈する。2は土師器の小皿で、復原口径10cm、器高0.8cmを測る。器表の磨滅が著しく、調整は不明である。

以上のほかに緑釉土器片1、須恵器・土師器が多数出土したが、小片のみで、実測できなかった。

B区第3号溝 (Fig. 339, Tab. 108, PL. 41)

N170～N180・W5～E12の間に延びる溝で、W5より西側は現在の道路下であり、この道路と水路とが溝の方向とほぼ一致するため、検出できなかった。おそらく破壊されていると思われる。前述のように、第2号溝と重複しているが、前後関係は不明である。発掘範囲内では17.7mを検出し、幅2m前後、深さ35cmを測る。方位はN73°Wをとる。

遺物 (Fig. 340-3・4)

弥生土器・土師器・須恵器が出土したが、図示できるのは Fig. 340 の3・4のみである。いずれも土師器で、3は平底の杯、4は杯または高台のつく椀であろう。ともに黄灰色を呈し、胎土・焼成とも良好である。調整は、現存器表すべてヨコナデを施している。

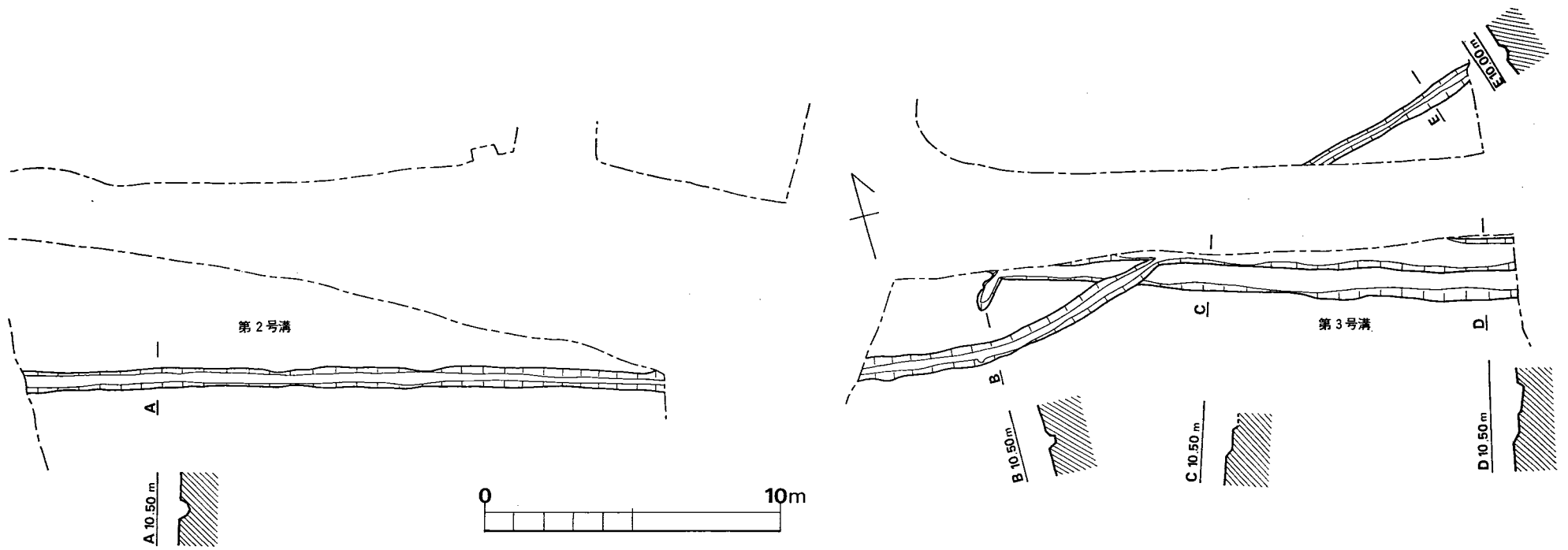


Fig. 339 B区第2・3号溝実測図 (縮尺1/200)

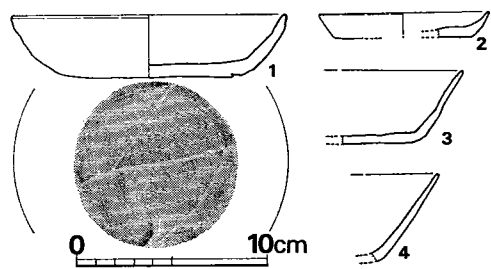


Fig. 340 B区第2・3号溝出土遺物実測図 (縮尺1/4)

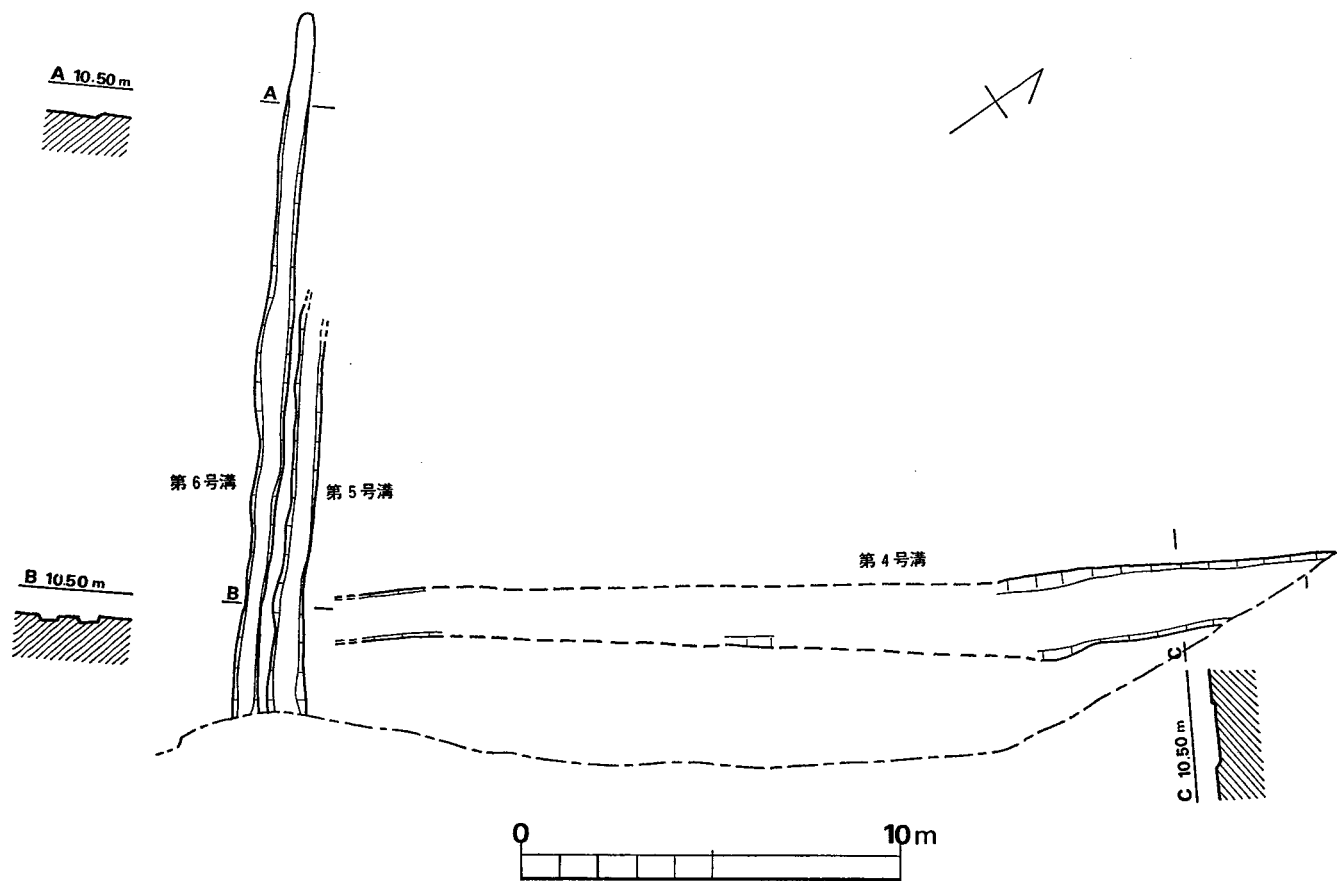


Fig. 341 B区第4・5・6号溝実測図(縮尺1/200)

B区第4号溝 (Fig. 341, Tab. 108)

N255・E9付近からN233・W5付近に延びる溝で、第115・117・120・124・118号住居跡と重複しているため、中央部は検出が困難であった。わずかに第117号住居跡の南側に痕跡を認めた。北半の計測では、幅1.2~2.1m、深さ10~11cmである。方位はN31°Eをとる。

遺物は土師器・須恵器があるが、実測できるものはない。

B区第5号溝 (Fig. 341, Tab. 108)

N230・W2付近から第121号住居跡の南東隅に向う溝で、北西部は重複と削平により不明である。検出範囲では長さ10.7m、幅60~110cm、深さ15cmを測り、方位はN51°Wをとる。

遺物は陶磁器類が出土したが、細片のため実測できない。

B区第6号溝 (Fig. 341, Tab. 108)

第5号溝の南側をほぼ平行して延びる溝で、長さ18.8mにわたって検出した。北西部は削平されているため、N240付近で終わっているが、さらに北西方向に延びていたと思われる。第5号溝とともに、南東の畦畔とほぼ同じ方位をとり、また北西へ延長すると1号溝c（方位N49°W）にほぼ平行する。

遺物は皆無である。

C区第1号溝 (Fig. 345, Tab. 108)

C区の第33号住居跡付近から南西方向にほぼ平行して延びる2本の溝で、東側を1号溝a、西側を1号溝bとした。

1号溝aは延長42.1mを検出した。第33号住居跡の東辺付近から、方位N27°Eをとって南西に走り、第30号住居跡の北西隅付近で屈曲して第27号住居跡の北側2.4mで終る。幅45cm~120cm、深さ15~20cmを測る。

1号溝bは、これとほぼ平行して走る溝で、長さ約32.4mを検出した。幅0.4~2.9m、深さ11~25cmを測る。

遺物 (Fig. 348, Tab. 105)
須恵器 (Fig. 342-1・2

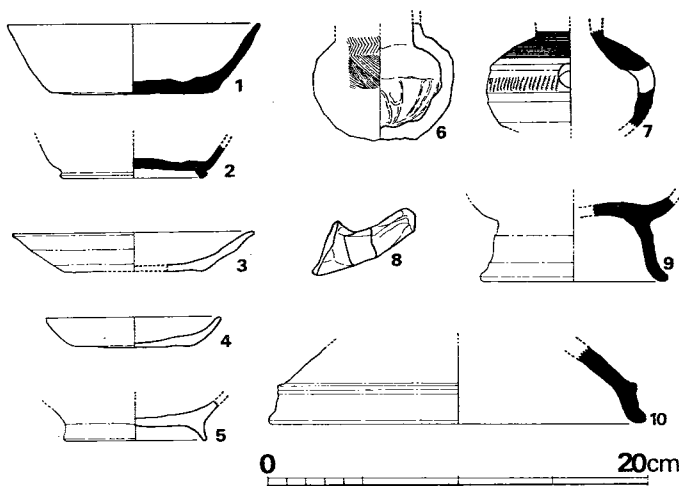


Fig. 342 C区第1号溝出土遺物実測図 (縮尺1/4)

・7・9・10) 1・2は杯で、2は高台がつく。1の底部は磨滅しているため、高台の有無は不明。1の内面は、体部がヨコナデ、底部はナデを施す。2は高台付近がヘラ削りである。7は駱の体部片で、外面上半はカキ目、下半はヘラ削りを施す。中位はクシ目状の圧痕が連なる。9・10は壺または鉢につく脚台部と思われる。9は本体の底部を一部残しており、内面はナデている。10の調整はすべてヨコナデである。

土師器 (Fig.342—3・4・5・6・8) 3の杯は平底で、体部は直線的に外方へ開く。端部はわずかに外反する。底部外面を除き、ナデ調整である。4は小皿で、磨滅しているため調整は不明。5は高台のつく碗と思われる。内面は黒色を呈する。6は埴で、口縁部を欠く。外面は

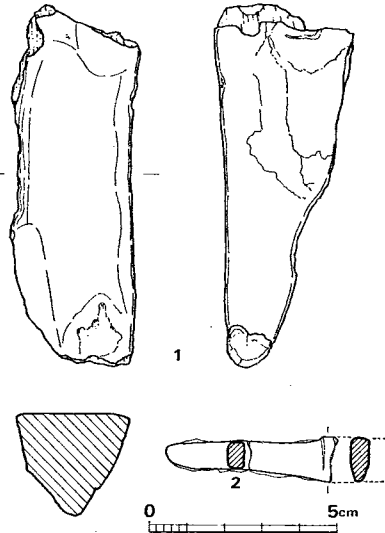


Fig. 343 C区第2号溝出土遺物実測図 (I) (縮尺1/2)

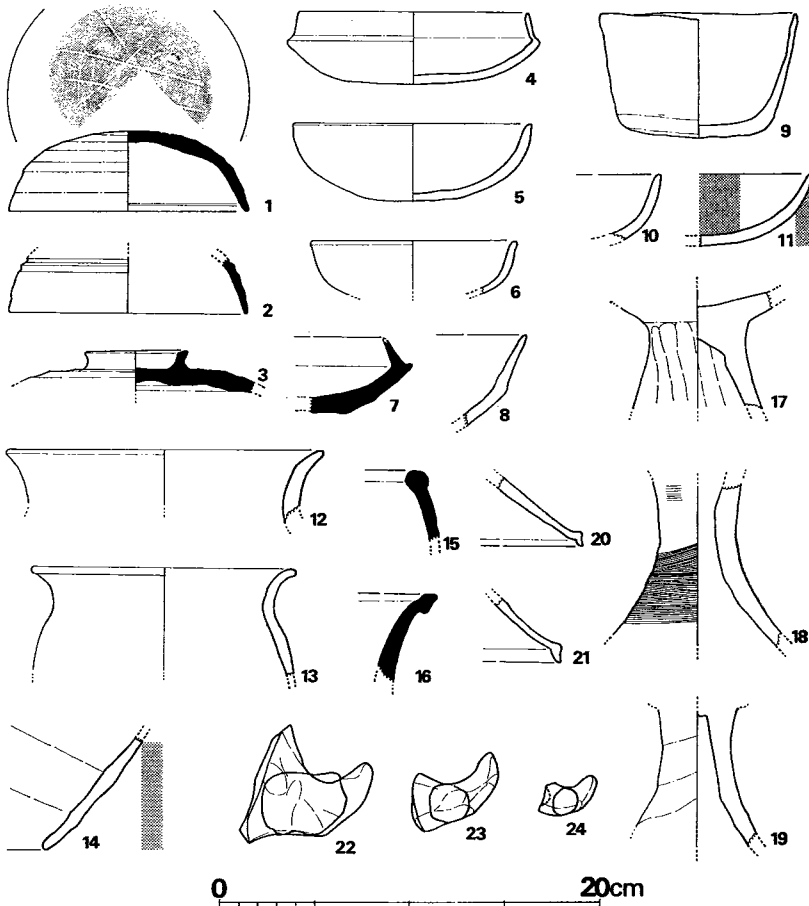


Fig. 344 C区第2号溝出土遺物実測図 (II) (縮尺1/4)

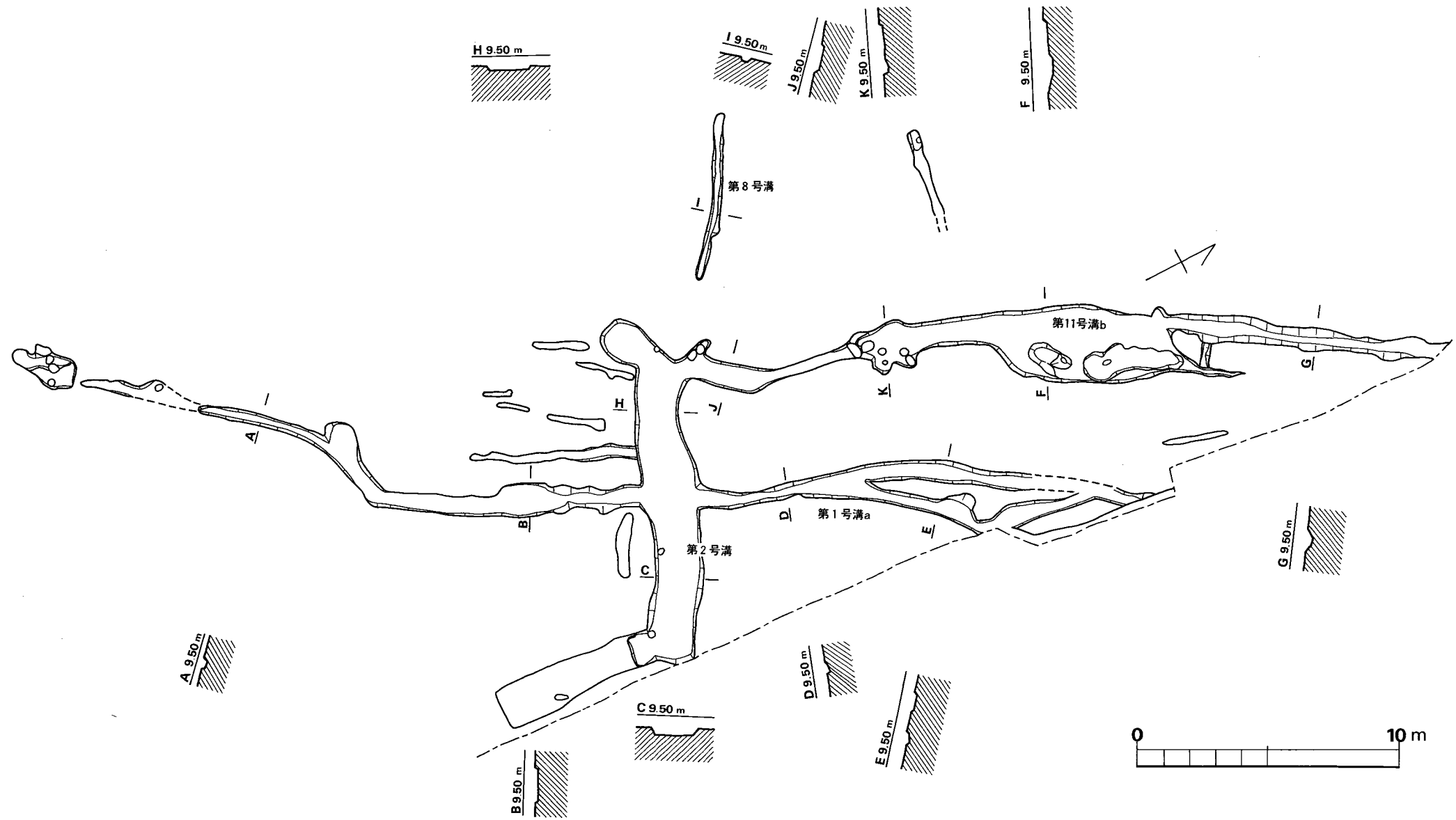


Fig. 345 C区第1・2・8号沟实测图(縮尺1/200)

細かいハケ目、内面は指頭によるナデ調整である。8は断面方形を呈する把手である。やや細形で、鉢につくものか。

C区第2号溝 (Fig. 345, Tab. 108)

第1号溝 a・b とほぼ直角に交わる溝で、長さ12.1mを検出した。幅1.6m前後、深さ15～30cmを測る。東端は南側に折れ曲るが、浅いため別のものと思われる。なお、この南端にほぼ接した位置で方形のピット (Pit 348, Fig. ①) がある。3方の隅に小ピットがあり、床面は平坦であるが、遺物は皆無で、何であるか不明である。

遺物 (Fig. 343・344, Tab. 106, PL. 95,)

土師器・須恵器・刀子・砥石を出土した。

須恵器 (Fig. 344—1～3・7・15・16) 1～3は蓋で、1の天井部外面には「キ」のヘラ記号がある。3は輪状のツマミがつく。7は杯の破片で、外面が赤色、内面は青灰色を呈し、胎土は明瞭に異なる。15は壺?の口縁部、16は甕の口縁部片である。

土師器 (Fig. 344—4～6・8～14・17～24) 4～6・10・11は杯で、4は立ち上りをもつ。5・6は口縁端部がわずかに外反する。11は内外面とも丹塗りで、10も丹塗りの可能性がある。いずれも胎土・焼成とも良好で、仕上げの丁寧な精製品である。9は碗で、口縁部に歪みがある。磨滅しているが、ナデ調整と思われる。8・17～21は高杯で、8は杯部片である。18は外面にハケ目調整を施す。12・13は小形の甕で、13は二次火熱を受けている。14は外面丹塗りの甕底部片である。丹塗りされた甕片は他に一片あるのみで、例品は極く少ない。22～24は把手で、24は小形である。22の本体は甕であろう。

刀子 (Fig. 343—2) 刀子の茎部と思われる。現存長約4.5cmを測る。

砥石 (Fig. 343—1) 断面三角形の凝灰岩製の砥石で、2面を使用している。キメは細かい。

C区第4号溝 (Fig. 347, Tab. 108)

第3号溝とほぼ平行して、遺跡内を斜めに横切る溝で、約58.5mを検出した。第44・46・47号住居跡に切られており、また、ピット933にも切られている。幅0.8～2.9m、深さ30～45cmで方位はN41°Eをとる。北東部で第5号溝が突き出す形で延びるが、前後関係は不明である。

遺物 (Fig. 346・348, PL. 96)

弥生土器・土師器・鉄製品・砥石・紡錘車を出土した。

弥生土器 (Fig. 346—1～3・5) 1は鉢で、内外面ともに粗いハケ目状調整を施し、端部近くはヨコナデを施す。端部は平坦である。内面はナデ調整である。復原口径14.8cm、器高は10cm前後であろう。2・3・5は甕で、2は細片である。3は口縁端部に斜方向のキザミ目がある。

り、内外面ともヨコナデである。一部にタタキ目を残し、内面はナデ調整である。5は口縁部が直線的に開き、端部は厚くなる。口唇部は稜を有し、わずかの凹みがある。内外面ともハケ目調整で、内面は磨滅している。復原口径24.4cm、胴部最大径24.2cmを測る。

土師器 (Fig. 346-4) ほぼ完形の高杯で、杯部外面に稜があり、脚部はふくらみ気味で、裾部は水平近くまで折れ曲る。脚端部にはハケ目を残し、若干肥厚する。脚部内面はへら削り、そのほかの部分にはハケ目の上からさらにナデを施している。

鉄製品 (Fig. 348-1~3) 1・2は刀子と思われる。1の現存長は4.1cm、2の現存長は6.7cmである。3は鉄鏃かと思われるがはっきりしない。現存長3.3cm、厚さ0.3cm(最大)。

石製品 (Fig. 348-4~6) 4・6は砥石で、4は3面、6は1面を使用している。5は滑石製の紡錘車で、約1/3ほど残っており、これから復原すると径4cm前後、孔径0.5cm前後である。

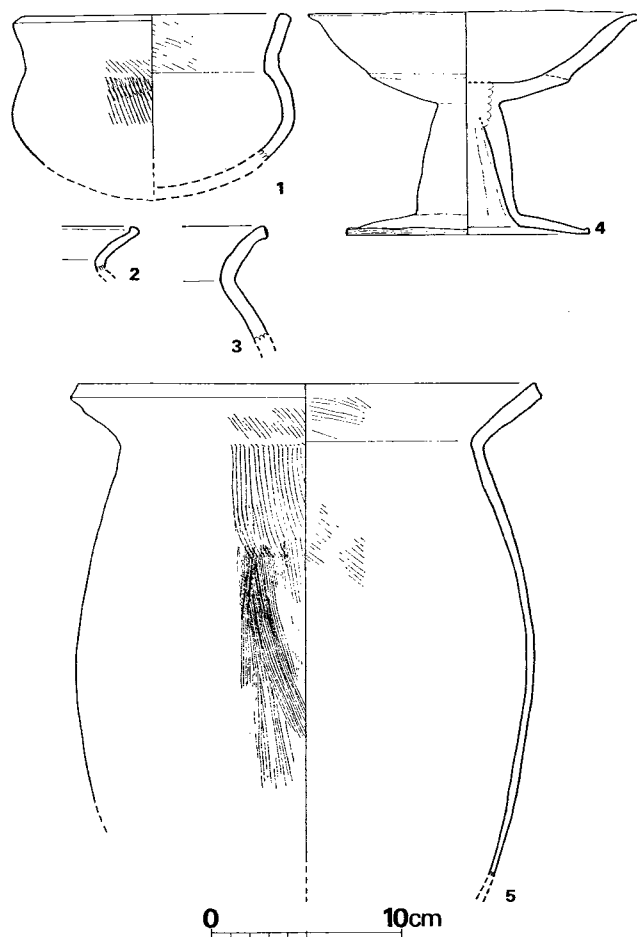


Fig. 346 C区第4号溝出土遺物実測図 (I) (縮尺1/4)

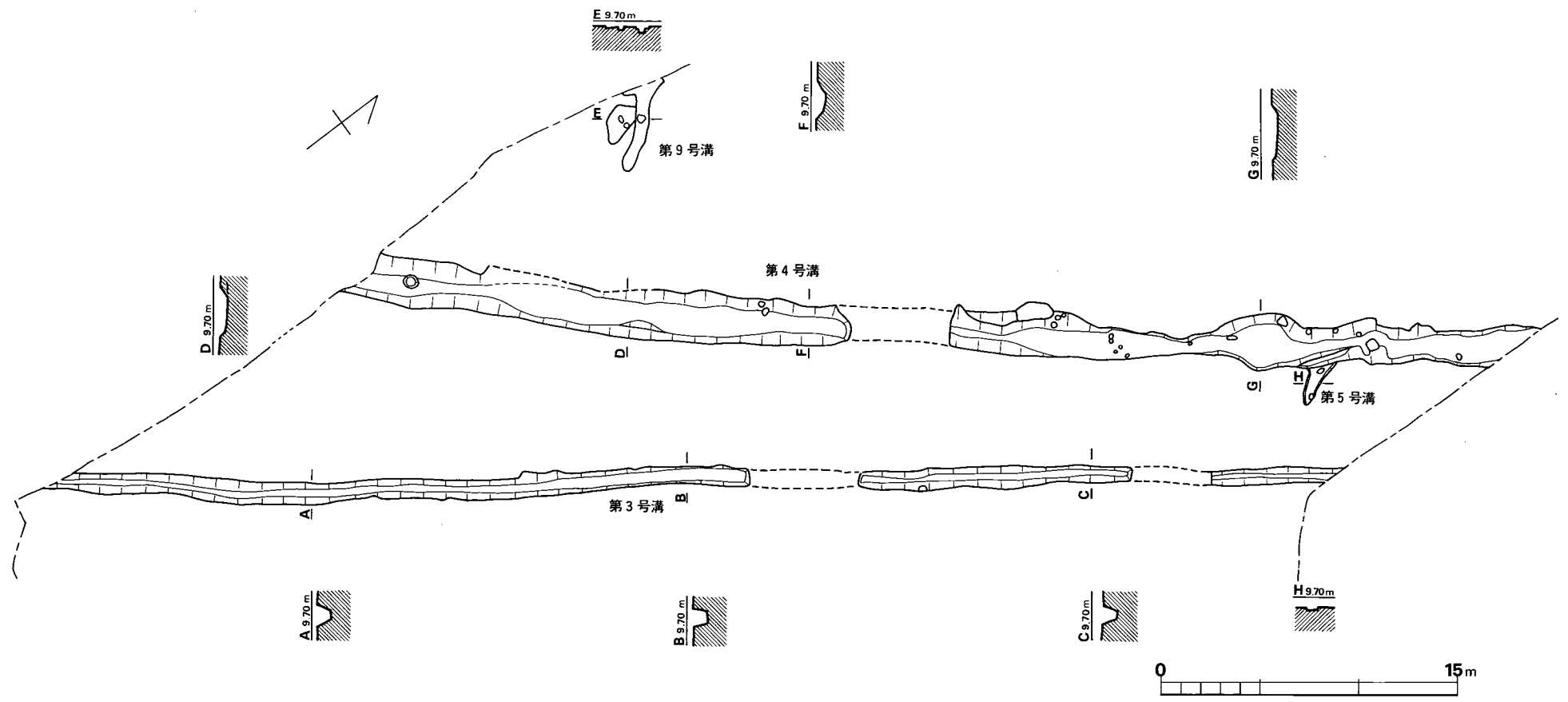


Fig. 347 C区第3·4·5号沟实测图(縮尺1/300)

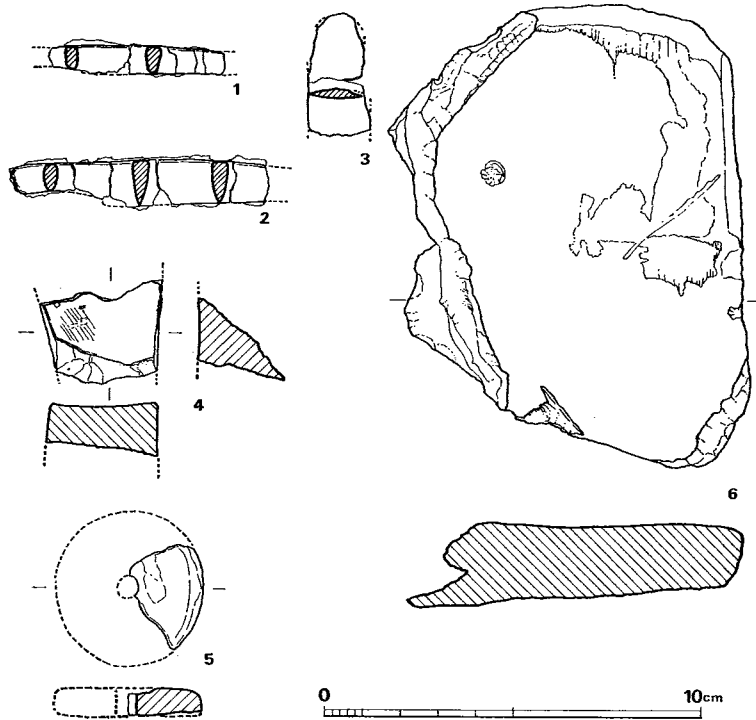


Fig. 348 C区第4号溝出土遺物実測図 (I) (縮尺1/2)

C区第5号溝 (Fig. 347, Tab. 108)

第4号溝の北東部——N87・O——付近で、第4号溝から南東に突き出すような形の溝である。2.6mほどの長さで、深さは15cm前後を測る。第4号溝の一部かもしれない。

遺物 (Fig. 349, PL. 94)

土師器・須恵器を出土したが、図示できるのはFig. 349の土師器のみである。1は略完形の埴で、口径8.1cm、器高12.0cm、胴部最大径11.1cmを測る。頸部内面には明瞭な稜線があり、やや突き出た状態である。口縁部はヨコナデ、内面はナデ、外面はヘラ磨キを施し、ほぼ均一の器壁に仕上げた精製品である。2は甕の口縁部と思われる。内面に粘土の接合痕をよく残している。

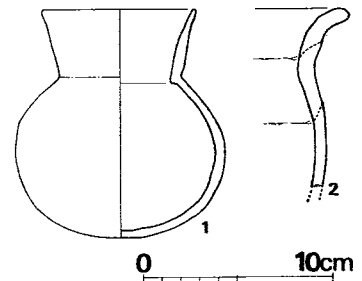


Fig. 349 C区第5号溝出土遺物実測図 (縮尺1/4)

C区第6号溝 (Fig. 350, Tab. 108)

C区の北端、B区との境とした現在の水路にほぼ沿って検出された溝で、東部で第7号溝と接している。第51号住居跡の東端から、用地内東端までの45.1mを検出したが、北半は水路に削られており、幅は不明である。深さは70~110cmで、方位はN55°Eをさす。

遺物 (Fig. 351)

土師器・須恵器を出土したが、いずれも少片で、図示できるのは3点である。1・2は高台のつく須恵器杯、3は平底の土師器杯である。3点とも磨滅部分が多く、調整は不明である。

C区第7号溝 (Fig. 350, Tab. 108)

第6号溝の東端付近から南東に延びる溝で、第38号住居跡を切っている。第6号溝と合流する溝と思われる。

遺物 (Fig. 352)

土師器・須恵器を出土したが、すべて小片である。6は軟質で土師器甕の口縁部片と思われる。3・4・7・8は壺または鉢の底部片であろう。

C区第8号溝 (Fig. 345, Tab. 108)

N52・W5付近の北西~南東方向に走る溝で、長さ約6.4mほどである。方位はN56°Wをとる。

遺物 (Fig. 353)

土師器・須恵器を出土したが、図示できるのはFig.353の土師器のみで、須恵器はすべて小片である。1・2は杯で、2は平底である。1の内面は磨かれており、2は磨滅しているため調整不明である。いずれも胎土は精良で、2はやや軟質である。2は復原口径13.1cm、器高3.2cmを測る。3は内面黒色の椀で、底部を欠く。黒色は口縁部外面に及んでおり、内面はよく磨かれている。薄手の精製品である。復原口径16.6cm。

C区第9号溝 (Fig. 347, Tab. 108)

第43号住居跡の北側の南東~北西方向に走る溝で、長さ4.5mを検出した。遺物は皆無である。

C区第11号溝 (Fig. 354, Tab. 108)

O・E5付近の溝で、長さ3.1mを検出した。幅50cm、深さ10cm前後である。遺物は出土しなかった。

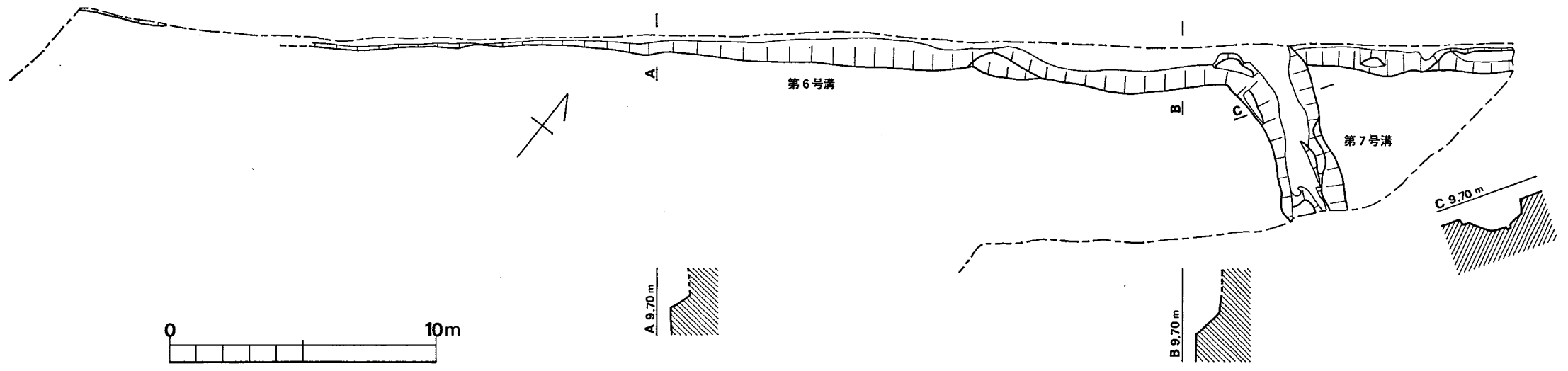


Fig. 350 C区第6・7号溝実測図 (縮尺1/200)

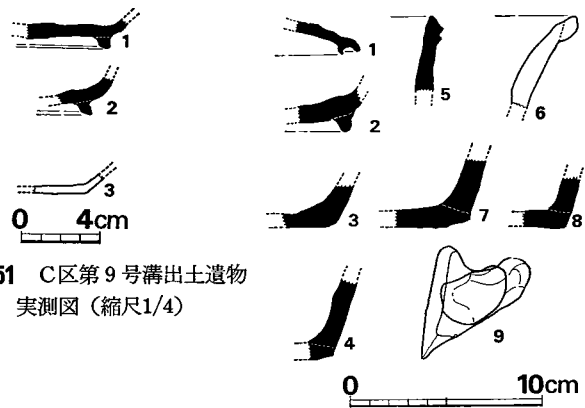


Fig. 351 C区第9号溝出土遺物実測図 (縮尺1/4)

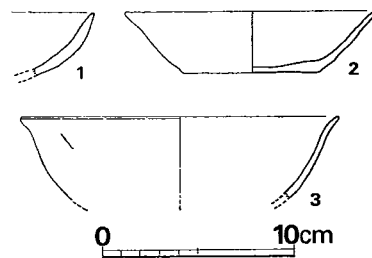


Fig. 353 C区第8号溝出土遺物実測図 (縮尺1/4)

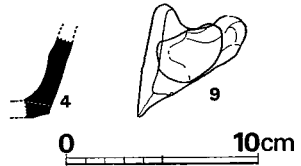


Fig. 352 C区第7号溝出土遺物実測図 (縮尺1/4)

C区第12号溝 (Fig. 354, Tab. 108)

第11号溝の東南方向で検出された溝で、本来第11号溝とつながるものかもしれない。長さ3.6m、幅40cm、深さ10cm前後で、遺物は皆無である。

C区第13号溝 (Fig. 354, Tab. 108)

第14号溝から枝状に南西方向に延びる溝で、方位はN49°Eをさす。長さ3.6m、幅3.5m、深さ9cmを測り、遺物は出土していない。

C区第14号溝 (Fig. 354, Tab. 108)

N9の発掘範囲東端からほぼ西に向って延びる溝で、東側の幅が大きい。西端近くから第13号溝が分れる。

遺物 (Fig. 355, Tab. 107, PL. 94)

須恵器・土師器が出土したが、図示できるのはFig. 355の須恵器のみである。すべて杯類で、1～3は平底、4・5は高台がつく。1～3はいずれも底部内面はナデ、外面はヘラ削りし、そのほかの部分はヨコナデを施す。3は体部に鈍い凹線が3本ある。4は高台近くの外面をヘラ削りするほかはナデ調整である。5は底部内面をナデ、外面体部下半以下をヘラ削りし、そのほかの部分はヨコナデを施す。

C区第15号溝 (Fig. 354, Tab. 108)

O・E12付近からほぼ北へ向って延びる溝で、長さ6.8mを検出した。幅50～100cm、深さ10cmほどで、方位はN7°Wをとる。遺物は皆無である。

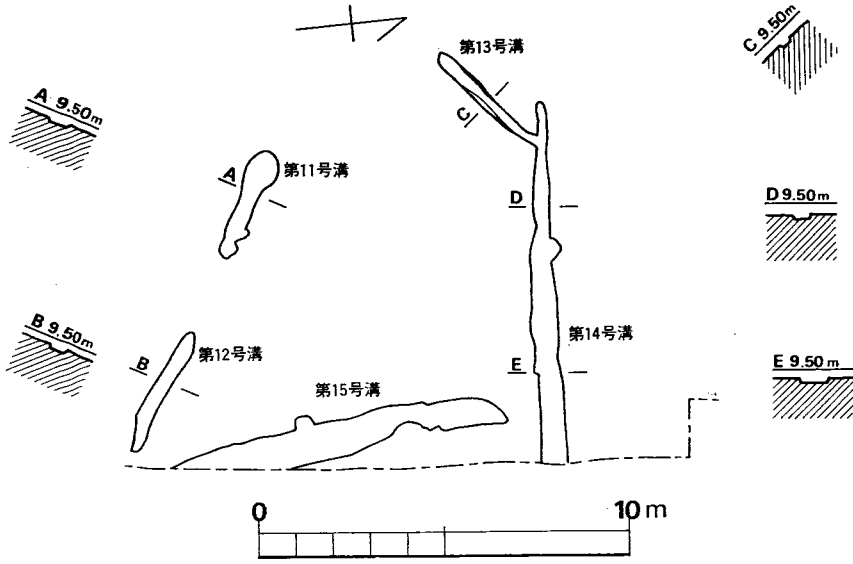


Fig. 354 C区第11・12・13・14・15号溝実測図 (縮尺1/200)

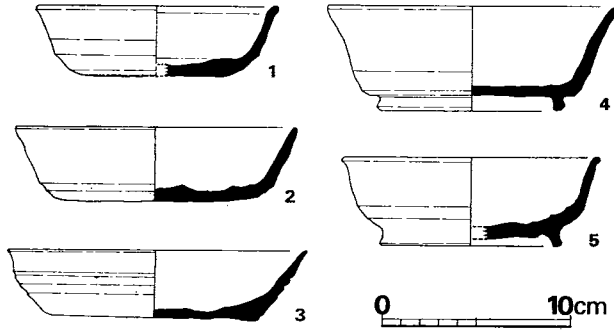


Fig. 355 C区第14号溝出土遺物実測図 (縮尺1/4)

Tab. 105 C区第1号溝出土土器一覧()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高			
1	S杯	復原完	(13.2)	3.7	不良胎土精良、焼成	黄灰色	
2	S杯	底部片			細砂を含み、焼成良	暗灰色	高台径 7.8
3	H杯	底部欠	(12.8)	2.0	砂粒を含み、焼成良	外面 赤褐色 内面 黄灰色	
4	H小皿	底部欠	(6.5)	1.6	胎土精良、焼成良	黄褐色	
5	H碗	底部片			砂粒を少量含む、焼成良	赤黄灰色	内面黒色
6	H埴	口縁部片			砂粒を少量含む焼成良	赤黄灰色	現存高 6.3 体部径 7.5
7	S罍	体部片			細砂を含み、焼成良	灰色	
8		把手			細砂を含み、焼成良	黄褐色	断面方形
9	S	脚台部			細砂を含み、焼成良	灰色	脚端部径 (9.8)
10	S	脚台部			細砂を含み、焼成良	灰色	脚端部径 (19.9)

Tab. 106 C区第2号溝出土土器一覧()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高			
1	S蓋	天井部	(12.5)	5.2	砂粒を含み、焼成不良	黄褐色	天井部にヘラ 記号
2	S蓋		(12.4)		砂粒を少量含む、焼成良	青灰色	
3	S蓋	天井部			砂粒を少量含む、焼成良	灰褐色	ツマミ径 (5.4)
4	H杯	復原完	(12.0)		胎土精良、焼成良	淡茶褐色	外稜径 13.2
5	H杯	底部欠	(12.6)	3.8	少量の砂粒を含み、焼成良	黄褐色	
6	H杯	底部欠	(11.0)	(4.0)	胎土精良、焼成良	淡茶褐色	内面に黒褐色 の付着物
7	S杯	体部片			砂粒を含み、焼成不良	外面 赤褐色 内面 青灰色	
8	H高杯	杯部片			砂粒を含み、焼成不良	赤黄色	
9	H碗	略完	10.3~ 10.8	6.3~ 6.6	大きめの砂粒を少量含む、 焼成良	黄褐色	口縁部に歪み
10	H杯	口縁部片			細砂を少量含む、焼成良	内面 赤褐色 外面 黄褐色	丹塗り?
11	H杯	口縁部片			細砂を少量含む、焼成良	黄褐色	内外面丹塗り
12	H小形甕	口縁部片	(16.7)		砂粒を含み、焼成良	黄褐色	
13	H小形甕	口縁部片	(13.8)		砂粒を含み、焼成良	赤褐色	二次加熱
14	H甕	底部片			砂粒を含み、焼成良	黄褐色	外面丹塗り
15	S壺	口縁部片			胎土精良、焼成良	灰色	
16	S甕	口縁部片			少量の砂粒を含み、焼成良	青灰色	

番号	器種	器部	法量		胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高			
17	H高杯	脚部片			少量の砂粒を含み、焼成良	黄褐色	
18	H高杯	脚部片			少量の砂粒を含み、焼成良	黄褐色	
19	H高杯	脚部片			少量の砂粒を含み、焼成良	黄褐色	
20	H高杯	脚部片			少量の砂粒を含み、焼成良	赤褐色	
21	H高杯	脚部片			胎土精良、焼成良	黄褐色	
22		把手			胎土精良、焼成良	赤褐色	一部暗灰色
23		把手			胎土精良、焼成良	赤黄灰色	
24		把手			胎土精良、焼成良	黄褐色	

Tab. 107 C区第14号溝出土土器一覧()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高			
1	S杯	底部欠	12.7	3.7	細砂を含み、焼成良	黄灰色	
2	S杯	復原完	(14.8)	4.0	細砂を含み、焼成良	白灰色	
3	S杯	復原完	(15.9)	3.6	細砂を含み、焼成良	緑灰色	
4	S杯	復原完	(15.5)	5.5	細砂を含み、焼成良	外面 青灰色 内面 紫灰色	
5	S杯	底部欠	(13.8)	4.7	細砂を含み、焼成不良	黄灰色	

D区第1号溝 (Fig. 356, Tab. 108)

D区の最南部を東西に走る溝で、長さ11.1mを検出した。幅110cm、深さ15cmほどで、土師器・須恵器・陶器を出土したが、いずれも小片で図示できない。

D区第2号溝 (Fig. 366, Tab. 108)

第1号溝とほぼ平行して東西に走る溝で、第1号堅穴を切っている。長さ21.0mを検出し、幅110cm、深さ10cmほどである。

遺物は土師器片約60、須恵器片約10、青磁片1を出土したが、いずれも小片である。

D区第3号溝 (Fig. 366, Tab. 108)

D区の北端を斜めに横切る溝で、第1号堅穴を切っている。長さ5.0mを確認し、幅90cm深さ10cmほどである。

遺物は土師器片13、須恵器片1が出土したが、すべて小片である。

これらD区の3本の溝は、ほぼ方位が同じであり、深さも10~15cmと浅く、遺物もほとんど出土していない。歴史時代の溝と思われるが、時期は古墳時代後期以後といえるのみである。

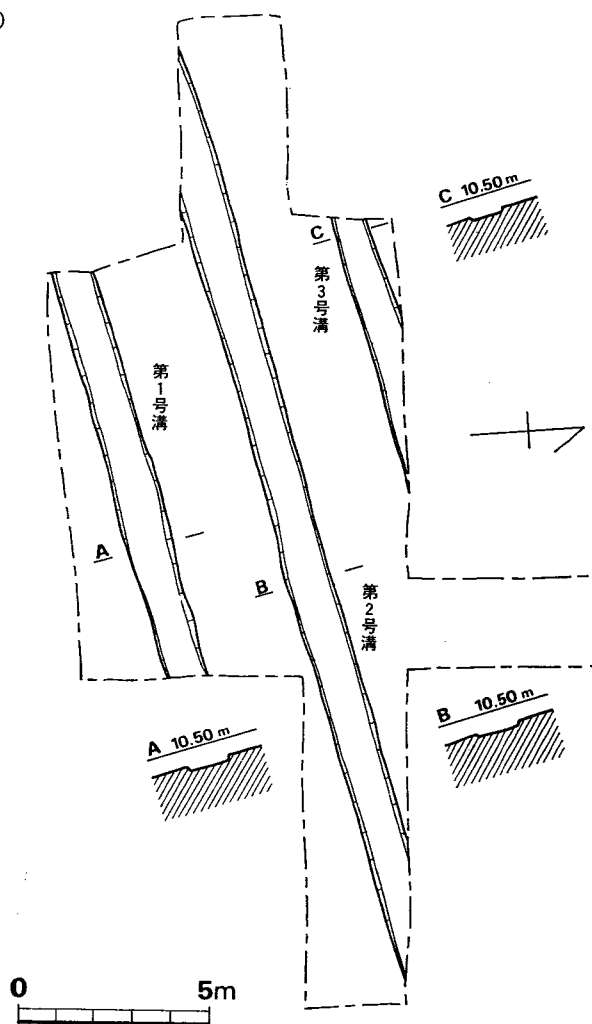


Fig. 356 D区第1・2・3号溝実測図 (縮尺1/200)

Tab. 108 B・C・D区溝一覧(単位 m)

溝番号	長さ	幅	深さ	方位	流れの方向 (推定)	備考
B区第1号溝a	約 50	7~8	0.8	N53°E	NE→SW	
B区第1号溝b	47.5	0.8~1	0.3	N48°E		西部では N19°E
B区第1号溝c	4.5	1.5~1.6	0.25	N49°W		
B区第2号溝	51.3	0.5~0.9	0.15~0.35	N74°W	E→W	東半では N76°E
B区第3号溝	17.7	2	0.35	N73°W		
B区第4号溝	24.5	1.2~2.1	0.1~0.11	N31°E		
B区第5号溝	10.7	0.6~1.1	0.15	N51°W		
B区第6号溝	18.8	0.5~0.9	0.1~0.15	N52°W		
C区第1号溝a	42.1	0.45~1.2	0.15~0.2	N27°E		
C区第1号溝b	32.4	0.4~2.9	0.11~0.25	N25°E		
C区第2号溝	12.1	1.6	0.15~0.3	N66°W		
C区第3号溝	64.5	0.8~1.2	0.7~0.75	N37°E	SW→NE	一部断面V字形
C区第4号溝	58.5	0.8~2.9	0.3~0.45	N41°E		
C区第5号溝	2.6	0.4~1.2	0.15	N39°W		
C区第6号溝	45.1	—	0.7~1.1	N55°E		
C区第7号溝	6.0	2~2.3	0.9	N54°W		
C区第8号溝	6.4	0.35~0.4	0.15	N56°W		
C区第9号溝	4.5	0.7	0.1	N44°W		
C区第11号溝	3.1	0.5	0.1	N58°W		
C区第12号溝	3.6	0.4	0.1	N52°W		
C区第13号溝	3.6	0.35	0.09	N49°E		
C区第14号溝	9.8	0.25~0.75	0.1~0.15	N85°W		
C区第15号溝	6.8	0.5~1.0	0.1	N 7°W		
D区第1号溝	11.1	1.1	0.15	N80°E		
D区第2号溝	21.0	1.1	0.15	N79°E		
D区第3号溝	5.0	0.9	0.1	N78°E		

2. 掘立柱建物跡

Fig. ①のように、発掘範囲内で多数のピットが検出されているが、少数を除いて時期を限定するような遺物の出土はなく、またピットの組合せも不確実である。

ここでは発掘中に気付いたピット群と、平面図上で掘立柱建物跡の可能性があるとと思われるピットの組合せを指適するにとどめたい。

もとより、建築学的な裏付けはなく、素人の想定したものにすぎないことを御断わりしておきたい。

ピット群 I (Fig. 357)

N240~253・O~W10の間に想定したピット群である。A棟は2間×1間の建物で、方位N81°Wをさす。B棟は、2間×2間の建物と考えたが、南西隅が平均距離上に位置せず、また北西隅の該当する位置にピットが検出されていないので無理があろう。しかし、A棟を一まわり大きくした建物は考えられないだろうか。

各ピットの深さ、各ピット間の中心距離はつぎのとおりである(単位cm。以下同様)。

- A 1 (27) 2 (31) 3 (19) 4 (16) 5 (13) 6 (20)・
 1~2 (125) 2~3 (145) 1~3 (270) 3~4 (122)
 4~5 (135) 5~6 (126) 4~6 (261) 6~1 (125)
 B 1 (39.5) 2 (62) 3 (33)・1~2 (150) 2~3 (164) 3~1 (313)

ピット群 II (Fig. 358)

N235~252・W25~38付近のピット群である。

想定した建物は2間×1間で、方位N27.5°Eをさす。北東隅のピット6の中心は平均距離上からはずれてしまう。

- 1 (27) 2 (36) 3 (24) 4 (18.5) 5 (27) 6 (30)
 ・1~2 (158) 2~3 (155) 1~3 (313) 3~4 (142)



Fig. 357 ピット群 I (縮尺1/200)

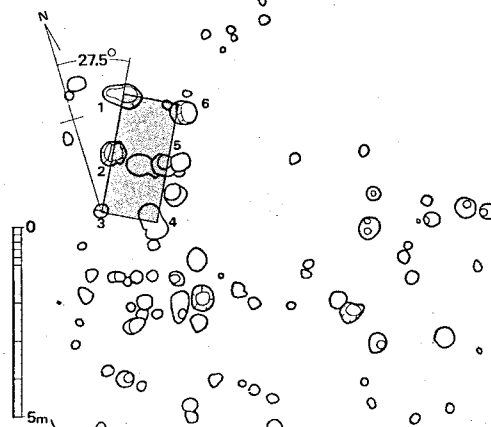
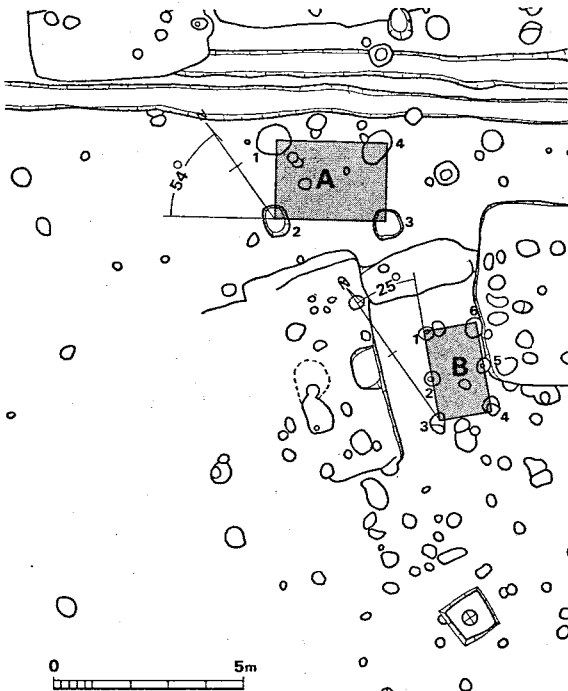


Fig. 358 ピット群 II (縮尺1/200)



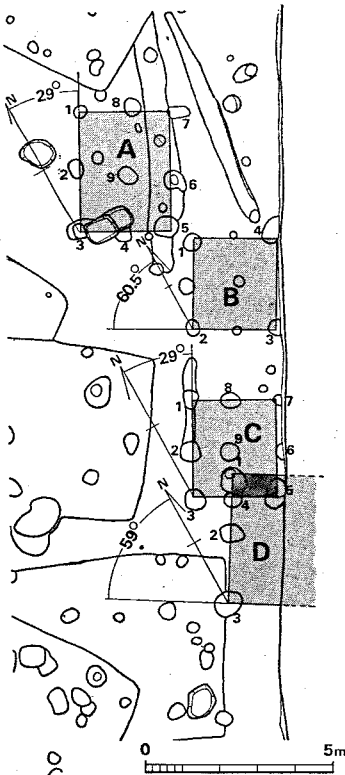
4~5 (161) 5~6 (154) 4~6 (315) 6~1 (176)

ピット群Ⅲ (Fig. 359)

N219~240・W3~17付近のピット群である。A棟は1間×1間で、方位N54°Wをさす。A棟の南側——B棟の西側——に位置するのは第7号住居跡で、その西半が削平されていることから考えると、A棟は竪穴式住居跡の壁が削られたものかもしれない。

B棟は2間×1間の建物で、方位はN25°Eをさす。規模は、ピット群ⅠのA棟に近い。

Fig. 359 ピット群Ⅲ (縮尺1/200)



- A 1 (15) 2 (19) 3 (33) 4 (30) ・1~2 (215) 2~3 (297) 3~4 (213) 4~1 (282)
- B 1 (28) 2 (16) 3 (12) 4 (34) 5 (32) 6 (25) ・1~2 (127) 2~3 (115) 1~3 (242) 3~4 (146) 4~5 (112) 5~6 (108) 4~6 (220) 6~1 (128)

ピット群Ⅳ (Fig. 360)

N193~210・E5~W10に想定したピット群である。

A棟は2間×2間の建物で、方位N29°Eをとる。この方位はC棟と同じである。

B棟は2間×2間または1間×1間で、方位はN29.5°Eをとる。2~3の中間、4~1の中間のピットはやや小形である。このB棟は、南側のC棟とともに一つの建物とも思われたが、B棟の2とC棟の1との距離が、B・C棟の各ピット間の心心距離から大きくはずれてしまうことから2棟と考えた。

C棟は2間×2間の建物で、方位N29°Eをとる。1~9のピットは径・深さともB棟に比べて整っている。

Fig. 360 ピット群Ⅳ (縮尺1/200)

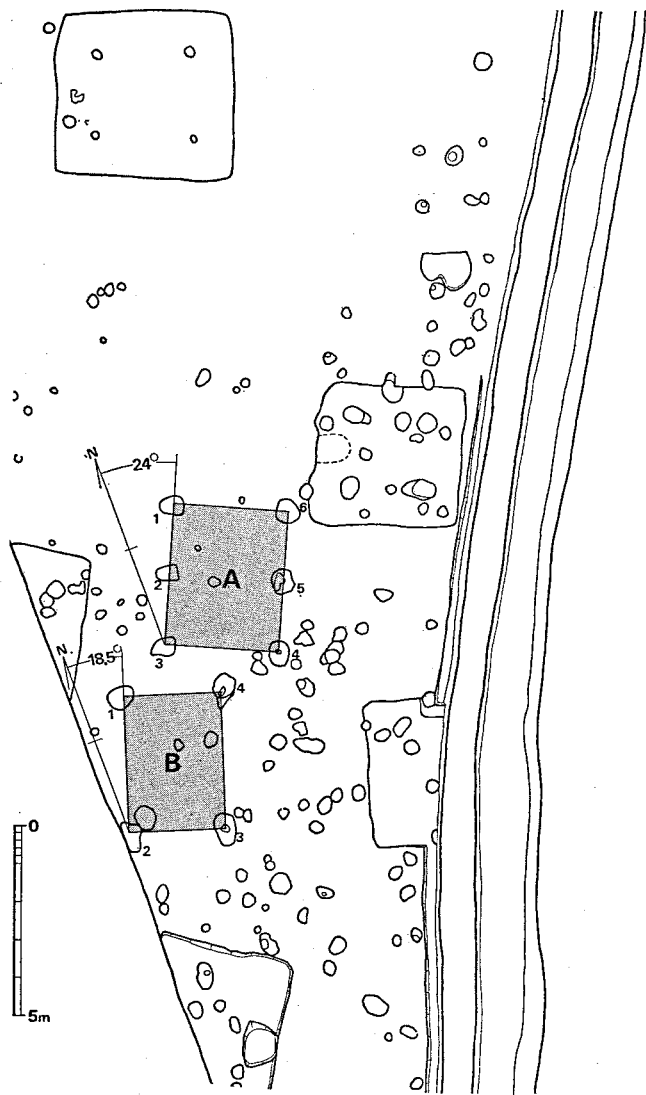


Fig. 361 ピット群V (縮尺1/200)

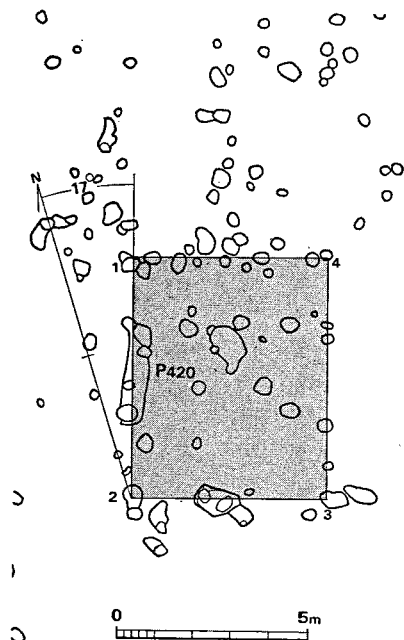


Fig. 362 ピット群VI (縮尺1/200)

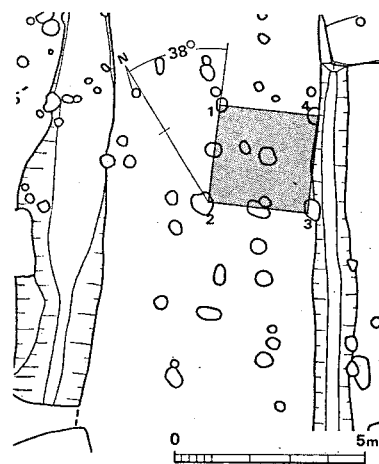


Fig. 363 ピット群VII (縮尺1/200)

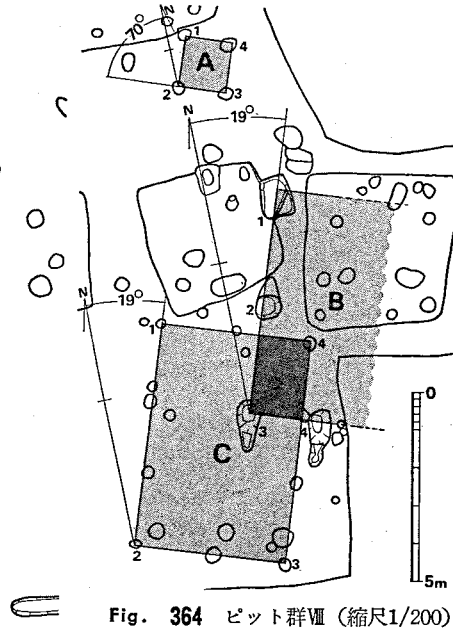


Fig. 364 ピット群VIII (縮尺1/200)

D棟は2間×x間の建物で、方位はN31°Eをとると思われる。東側に対応するピット群は道路下にあるため検出できなかった。規模はA棟に近いと思われる。なお、C棟のピット4とD棟のピット1は接した状態で検出されており、新旧関係は不明である。

以上のA～D棟はいずれもその方位がN30°E前後にある。想像をたくましくすれば、近接した時期のなかで、B・C←→A・Dの移動が考えられるのではなかろうか。

A1 (19) 2 (40) 3 (37) 4 (25) 5 (36) 6 (20) 7 (28) 8 (30) ・1～2 (150) 2～3 (170) 1～3 (316)
3～4 (120) 4～5 (114) 3～5 (234) 5～6 (135) 6～7 (177) 5～7 (312) 7～8 (128) 8～1 (135) 7
～1 (263)

B1 (23) 2 (20) 3 (22) 4 (18) ・1～2 (232) 2～3 (227) 3～4 (265) 4～1 (218)

C1 (30) 2 (30) 3 (30) 4 (29) 5 (40) 6 (16) 7 (16) 8 (33) ・1～2 (138) 2～3 (135) 1～3 (273)
3～4 (110) 4～5 (120) 3～5 (228) 5～6 (113) 6～7 (140) 5～7 (240) 7～8 (125) 8～1 (106) 7
～1 (232)

D1 (34) 2 (29) 3 (32) ・1～2 (158) 2～3 (190) 1～3 (348)

ピット群V (Fig. 361)

N140～170・W15～38付近に想定したピット群である。

A棟は2間×1間の建物で、方位はN24°Eをさす。各ピットの大きさ・深さとも比較的整っている。

B棟は1間×1間の建物で、方位はN18.5°Eである。周辺の住居跡の遺存状態からみて、竪穴式住居跡の壁が削平されたものとは考えられない。

B棟の東・南方にもピットが散在するが、良好な組合せは得られなかった。

A1 (23) 2 (23) 3 (24) 4 (21) 5 (46) 6 (13) ・1～2 (182) 2～3 (200) 1～3 (383) 3～4 (301) 4
～5 (196) 5～6 (179) 4～6 (375) 6～1 (304)

B1 (44) 2 (31) 3 (31) 4 (69) ・1～2 (310) 2～3 (252) 3～4 (354) 4～1 (284)

ピット群VI (Fig. 362)

N143～159・W5～21に想定したピット群である。西側中央に南北方向に長いP420があり、なかから土器が出土している (Fig. 367)。このP420の北端から東側に90°折り曲げた直線は、3個のピットを通りピット4の南側のピットに至る。この直線と2・3を結ぶ線とで構成されるピット群を1棟と仮定すれば、この北側にピット1・4を含む建物がさらに1棟想定できる (Fig①)。

周辺の第23・35・71号住居跡等の残りは比較的良好であることからみて、竪穴式住居跡の壁が削平されたとするよりも、掘立柱建物跡を想定したい。

1 (32) 2 (11) 3 (21) 4 (14) ・1~2 (730) 2~3 (530) 3~4 (655) 4~1 (510)

ピット群Ⅵ (Fig. 363)

N70~83・E3~W15付近に想定したピット群である。2間×2間の建物と思われるが、3・4の間、4・1の間の該当する位置にピットが検出されていない。規模はピット群ⅣのCに近い。東側のピット3・4は、弥生時代後期のC区第3号溝を切って掘り込まれている。

1 (10) 2 (27) 3 (35) 4 (16) ・1~2 (269) 2~3 (290) 3~4 (250) 4~1 (242)

ピット群Ⅶ (Fig. 364)

C区の最南部に想定したピット群である。

A棟は1間×1間で、方位はN20°Eをとる。北東または北西方向にピットを求め、2間×1間の建物を想定することもできるが、ピットが1個不足することになる。

B棟は2間×1間+αの建物で、方位はN19°Eをさす。1~4のピットはいずれも50cm以上の深さで、規模も大きく、かなり大きな建物があったと思われる。

C棟は3間×2間の建物と思われ、方位はB棟と同じN19°Eをさす。ピット1~2の真心距離はB棟のピット1~3とほぼ同じである。しかし、各ピットはB棟のものより小さく浅い。

A1 (2) 2 (26) 3 (25) 4 (25) ・1~2 (144) 2~3 (123) 3~4 (132) 4~1 (120)

B1 (65) 2 (60) 3 (68) 4 (53) ・1~2 (308) 2~3 (292) 3~4 (190) 1~3 (600)

C1 (15) 2 (7) 3 (24) 4 (25) ・1~2 (599) 2~3 (405) 3~4 (600) 4~1 (403)

3 工房跡 (Fig. 365, PL. 28)

N186・W20付近に位置する。B区第6号住居跡の床面下より大量の焼土・炭化物が出土し、そのひろがりを追求めたところ、Fig. 365のような状況を示した。中心部に幅20cmの小トレンチを設定し、掘り下げると、深さ90cmほどの暗茶褐色粘質土のつまった掘り込みが確認できた。この掘り込みの上面には焼土がひろがり、掘り込み内には炭化物が混じっていた。P1・P2はさらにこの焼土・炭化物等を除いた直下から検出されたピットである。遺物は土師器片が少量散布していたのみで、ほかに鉄滓等の遺物はみられなかった。

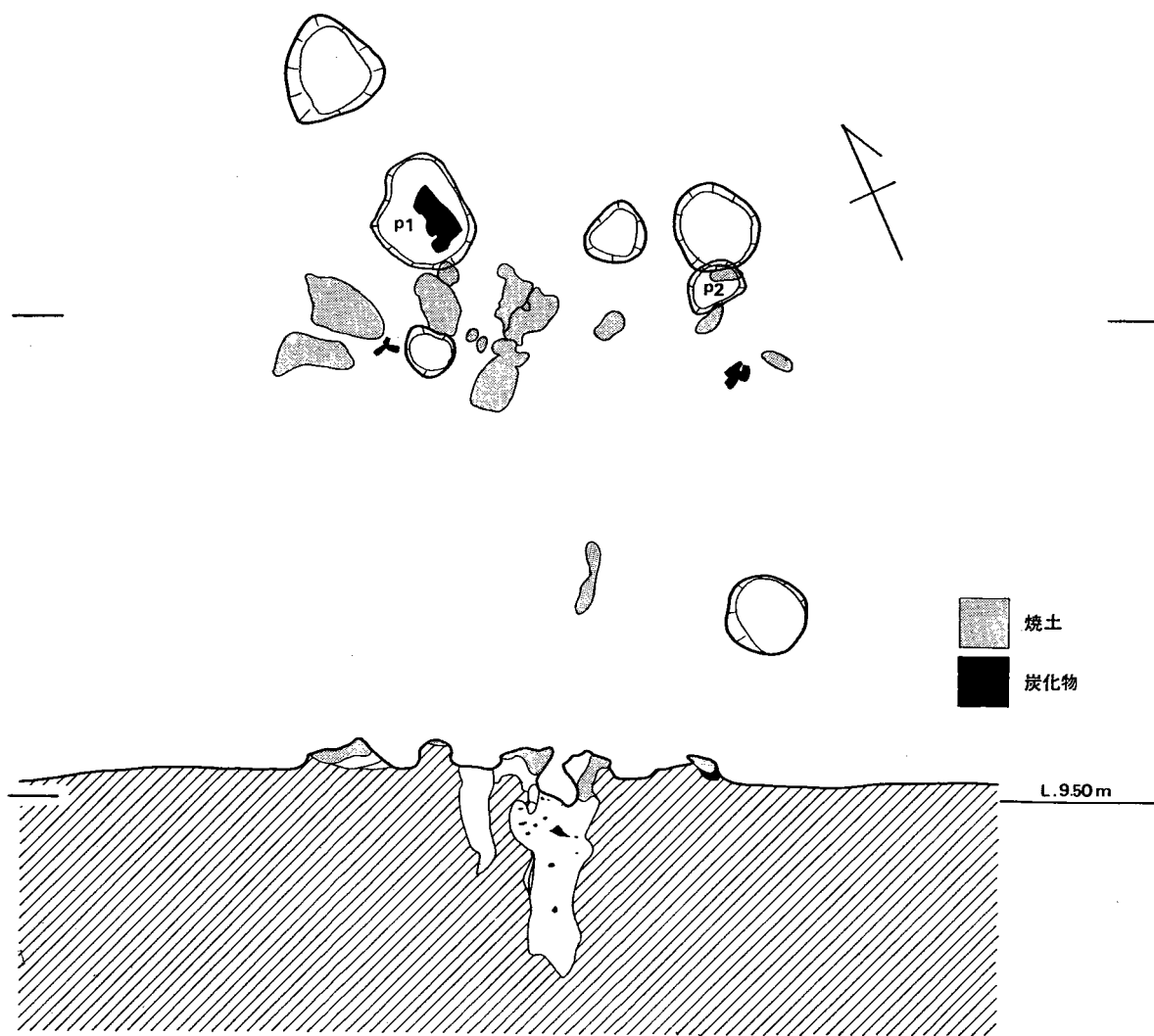


Fig. 365 工房跡焼土・炭化物出土状況実測図 (縮尺1/30)

以上の状況から、本遺構（以後「遺構A」と呼ぶ）を工房跡とするには疑問があり、時期的にもはっきりしないが、発掘時における名称をとって「工房跡」の項目としてとりあげた。

本遺跡内で、住居跡外に焼土・炭化物がまとまって検出された場所が他に2カ所ある。一つはB区の第119号住居跡と第106号住居跡とのほぼ中間（N250・W4付近）のピット群（以後「遺構B」と呼ぶ）で、他の一つはD区に近いB区の北西部（N297・W20付近）のヒトデ形のピット群（以後「遺構C」と呼ぶ）である。遺構Bでは5個のピット内から炭化物の混った土が出土したが、焼土は検出していない。遺構Cは本来5個のピットで、各ピットとそれらの中央部に炭化物まじりの焼土が検出された。これらの遺構A・B・Cはそれぞれ焼土・炭化物の出土状況は違っているが、火を使用した痕跡であることは確実であろう。ここで考えられる作業としては、共同炊飯・土器焼成・製鉄等があげられよう。しかし、積極的な論拠は残念ながらあげることができない。

以上のほかに、B区第70号住居跡（N165・E3付近）では、カマドや炉とは異なった焼土の出土状況を示した。焼土は住居床面より上で確認され、遺構Aに近い分布状況であったが、焼土の範囲は小さかった。

4 ピット (Fig. ①、Fig. 366、PL. 101)

ここでは、B・C区を通して、土器片以外の遺物を出土したピットとその遺物、および比較のまとまった土器を出土したピット420について記す。

Fig. 366—1はB区のピット751から出土した凹石で、径10×7.8cmほどである。長軸の側面には擦痕があり、中央部は両面とも凹んでいる。石質不明。

2はB区のピット127から出土した片岩質の砥石で、一面を使用している。

3はB区のピット458から出土した耳環で（PL.101）、銅地金に銀メッキしたものと思われる。径2.9~3.0cm、内径1.6~1.7cmで、断面径0.6cm前後である。

4はC区のピット951から出土した鉄製品で、刀子基部と思われる。関らしい部分があるがサビのためはっきりしない。現存長5.6cm。

5は4と同じピットから出土したもので、刀子の刃部と思われ、先端部を欠く。4とは接合しないが、同一個体の可能性がある。現存長3.9cm。

以上のほかに、手で握り潰したような粘土の小塊を出土したピットがある。この粘土小塊は住居跡内からも出土しているが、その性格・用途は不明である。大きさは握りコブシ大から指

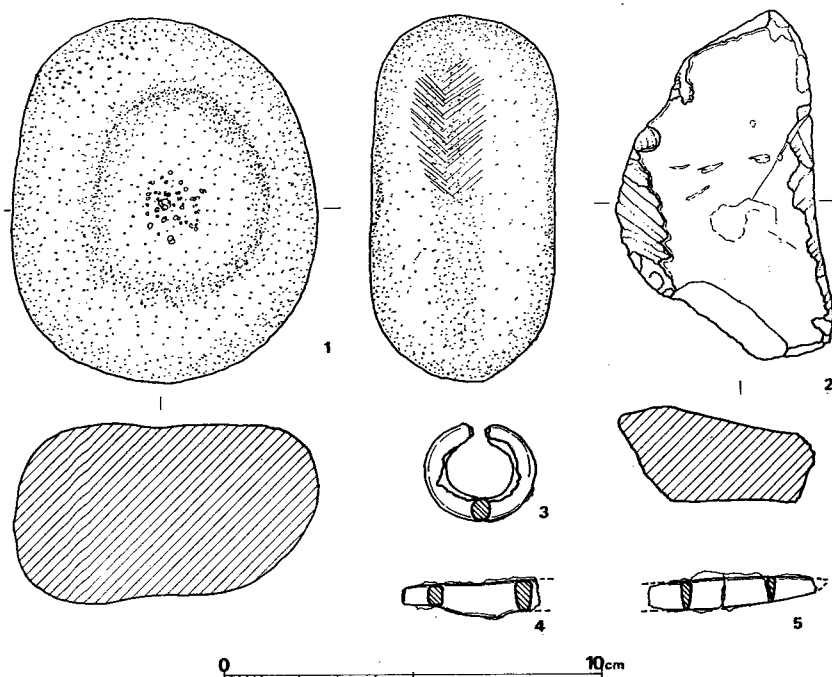


Fig. 366 B・C区ピット出土遺物実測図（縮尺1/2）

頭ほどのものがあり、生焼け状を呈しているものもある。

B区ピット420 (Fig. 362)

N149・W13付近に位置する。いくつかのピットと南北方向に長い溝状の遺構を、ここでは総称してピット420と呼ぶことにした。Fig. 362のピット群Ⅵのなかでは、もっとも遺物量が多

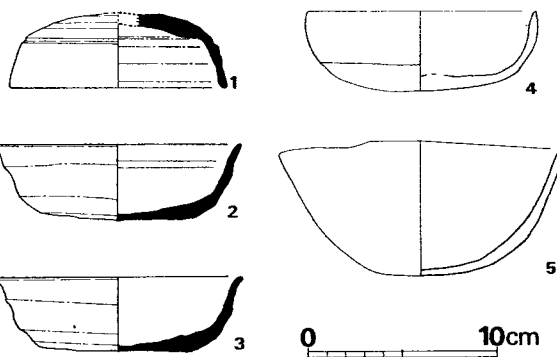


Fig. 367 B区ピット420出土土器実測図（縮尺1/4）

く、ピット群Ⅵと何らかの関係があったと思われる。しかし、出土土器はピットの底面から浮いた状態で発見されているため、確実に本遺構に伴う遺物とはいえないようである。

遺物 (Fig. 367)

須恵器 (Fig. 367—1~3) 1は黄褐色を呈する須恵器の蓋で、天井部の一部を欠く。天井部外面はへら削りで、ほかの部分にはヨコナデを施す。肩部に、鈍い1~2本の凹線による段をつくり出している。復原口径11.5cm、推定器高4.0cmを測り、焼成は良好である。2・3は平底の杯で、体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。底部内面はナデを施し、外面は体

部との境にヘラ削りを一部残すがナデを施している。体部は内外面ともヨコナデを施す。3は復原口径13.1cm、器高4.0cmで、細砂を多く含み、赤灰色を呈する。

土師器 (Fig. 367—4・5) 4は口縁部が若干内彎する杯で、底部内面はやや厚く凸形である。口径12.1cm、器高4.2cmを測る精製品である。4は口縁部が楕円形に歪んだ碗で、口縁部は単純に外方へ向く。体部の方が底部より厚い。口径13.2~13.6cm、器高7.1cm前後で、大きめの砂粒を含み、焼成は不良である。

小 結

1. 遺跡の広がりについて (Fig.②)

大道端遺跡は、九州縦貫自動車道の建設用地内での発掘調査に限られたため、東西方向の広がりを確認することはできなかった。

しかし、南北方向については、C区の南端からD区まで、約340mの範囲内にあることが明らかとなった。これは、A区（B区の北側）のトレンチおよびE区（C区の南側）のトレンチにおいて、住居跡などの遺構が検出されていないことが示すところである。

東西方向の広がりを以下のように推定してみた。

産女谷水門^{ウブメ} (Fig. 8) の西側約200mの水路脇と水田下 (Fig. ②—E・F) から弥生土器・土師器・須恵器が出土しており、さらにその南東約100m付近で、電柱をたてるときに土器が出土したと聞いている。これらの地点は、発掘範囲の東端から約50m東側に位置している。

東の古僧都山山麓との距離を考えると、東限はこの付近にもとめてよいだろう。

西側では、B区の南西端付近に弥生時代後期の住居跡が比較的まとまって発見されており、その西側には確実に遺構の存在が予想される。

さらに西側の Fig ②—C・D・G では、弥生土器・土師器・須恵器・土錘などが採集されており、もっとも西側に位置するG地点は、遺跡の発掘範囲西端から約180mのところにある。

以上のことから、[○] [○] [○] [○] 発掘範囲を含めた東西の広がりを 280 m
— 概略300mとしておきたい。

ただし、

①遺跡が円形状に広がるとは限らず、南北に長いことも考えられること。

②遺物採集地点と発掘範囲との間には、50~180mの距離があり、その中間の調査がないこと、

などから、疑問を残している。

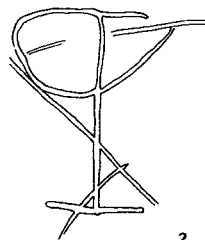
将来の綿密な調査に期待したい。

2. 出土土器について

本報告では、床面出土およびカマド内出土の土器については、土器実測図の各土器番号を丸で囲んで示しており、これらを目安として本遺跡出土の主要な土器について、若干のまとめを述べてみたい。



1



2

Fig. 368 須恵器ヘラ
記号 (縮尺1/2)

比較的まとまった土器を出土した住居跡及び堅穴はつぎのとおりである。

(以下、遺構番号・出土土器実測図番号・頁の順に記す)

B区第18号住居跡 Fig. 60、61—12頁	B区第23号住居跡 Fig. 66、63—64頁
B区第44号住居跡 Fig. 100、88頁	B区第56号堅穴 Fig. 126、105—106頁
B区第94号住居跡 Fig. 176、140頁	C区第26号住居跡 Fig. 259、196頁
C区第30号住居跡 Fig. 267、268、203—204頁	C区第35号住居跡 Fig. 278、209—210頁
C区第43号住居跡 Fig. 299、223—224頁	C区第44号住居跡 Fig. 301、226頁
C区第45号住居跡 Fig. 303、227—228頁	D区第1号堅穴 Fig. 321—325、237—241頁

おもな器種は、須恵器杯身・杯蓋・高杯・土師器杯・甕・甔・高杯・鉢である。

①須恵器

須恵器の杯身・杯蓋は、比較的胎土・焼成とも良好で、ヘラ記号をもつものも多い。

杯身は底部内面をナデ、外面をヘラ削りし、そのほかの部分はヨコナデの調整が一般的である。

杯蓋は、天井部外面をヘラ削り、内面をナデ、そのほかの部分はヨコナデの調整を施すものが多い。蓋の器形では、とくに口縁端部近くの内面の形態に特徴がみられ、外面肩部の「段」または「稜」は、凹線状を呈するものが多い。

ヘラ記号のうち、特徴あるものを2例認めた(Fig. 368)。いずれもD区出土の杯蓋天井部外面にあったもので、1は八女古窯跡群⁽¹⁾の塚ノ谷4号窯跡出土のもの⁽²⁾と近似している。2は遺跡周辺の表採遺物(女山火葬場跡遺跡表採、Fig. 6—5)のものとはほぼ同じ形である。

高杯では、通常青灰色を呈したのものよりも、赤褐色を呈し、砂粒をやや多く含んだ、一見土師器を思わせるものも多く出土している。この種の高杯は、焼成不良のものが多い。

これとは別に、硬質で、胎土も精良緻密な高杯がある。色調のみが赤褐色を呈するもので、ほかは通常の須恵器とほとんど同じである。⁽³⁾

②土師器

土師器杯は、少なくともつぎの2種に分けられる。

I 半球形または内彎をする口縁もち、滑らかに丸底の底部にいたるもので、丹塗りのものや化粧土を施したものがある。⁽⁴⁾

II 口縁部と体部との界に「段」または「稜」があり、底部は丸底である。器形上は須恵器の模倣と思われるもので、器表は丁寧なナデまたはヘラ研磨されているものが多い。

また、丹塗りのもの、化粧土を施すもの、黒色を呈するものがあり、とくに黒色を呈するものが多いとみられる⁽⁵⁾。胎土・焼成ともに良好な精製品がほとんどである。

甕 小形のもの(I)と大形のもの(II)とに分けられる。

I 口径16cm内外、器高20cmほどで、口縁部の形態には若干の差があるが、総じて体部は丸味

をもち、丸底に終る。体部の中位にある最大径と口径がほぼ同じか、または口径の方がやや大きい。口縁部はヨコナデで、頸部以下の内面はヘラ削り、外面はハケ目調整を施す。多くは二次的な火熱を受けており、煮炊き用の土器と思われる。

Ⅲ 口径20cm前後、器高25cm以上で、丸味のある体部をもち、滑らかに外反する口縁と、丸底をもつ⁽⁶⁾。頸部以下の内面はヘラ削り、外面はハケ目調整で、口縁部はヨコナデを施す。とくに、内面の調整は粗く、ヘラ調整痕を明瞭に残しているものが多い。

甔 大別して、単孔のものと多孔のものとの2つに分けられる。

単孔のものには大形品と小形品があり、大形品のほとんどはしっかりした一对の把手がつき、径7～8cmほどの単孔がある。小形品には把手のつくものとつかないものがある。

甔の口部縁は、わずかに外反しながら、ほぼ直線的に開くもので、甔の口縁部とは明瞭に異なるが、調整は甔とほとんど同じで、体部の小片の場合、その区別は困難である。

多孔の甔は、上半の残っているものがみられなかったが、厚手の丸い底部に径0.5～1.0cmほどの孔を穿っている。単孔大形品の孔は、すべて焼成前につくられ、ヨコナデ等が施されるのに対し、多孔の場合には出土例は少ないが、焼成前と焼成後の穿孔が認められた。⁽⁷⁾

甔では単孔の大形品が一般的なものであったと思われ、把手の出土数が多い。⁽⁸⁾

高杯 少なくとも、つぎの3種に分けられる。

I 杯部は小形で丸味があり、杯Iに脚部を付したような形態であるが、器壁は杯よりも厚く、しっかりしている。脚部はなだらかに裾部へと伸びて、端部は単純である。杯部の調整は内外面とも丁寧にナデるかヘラナデを施し、脚部外面は縦方向のヘラ削りを施す。

この種の高杯は胎土・焼成とも良好で、多くは丹塗りされた精製品である

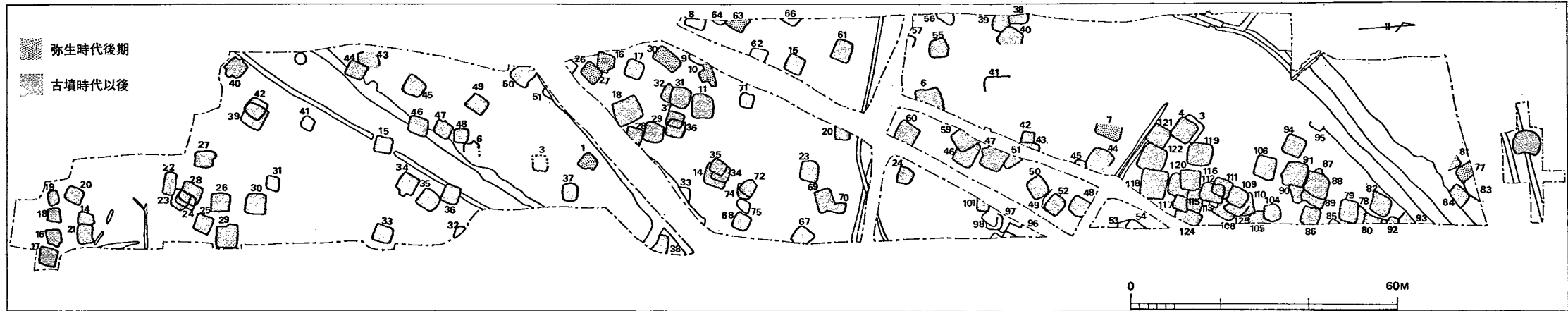
Ⅱ 杯部は大形で、浅く扁平であり、皿形に近い形態である。脚部は、口径に比べて低く、なめらかに外方へ広がり、端部付近は水平に近くなる。杯部の内外面はナデ、脚部は縦方向のヘラ削りを施す。

この種の高杯も胎土・焼成とも良好なものが多く、丹塗りされているものも多い。

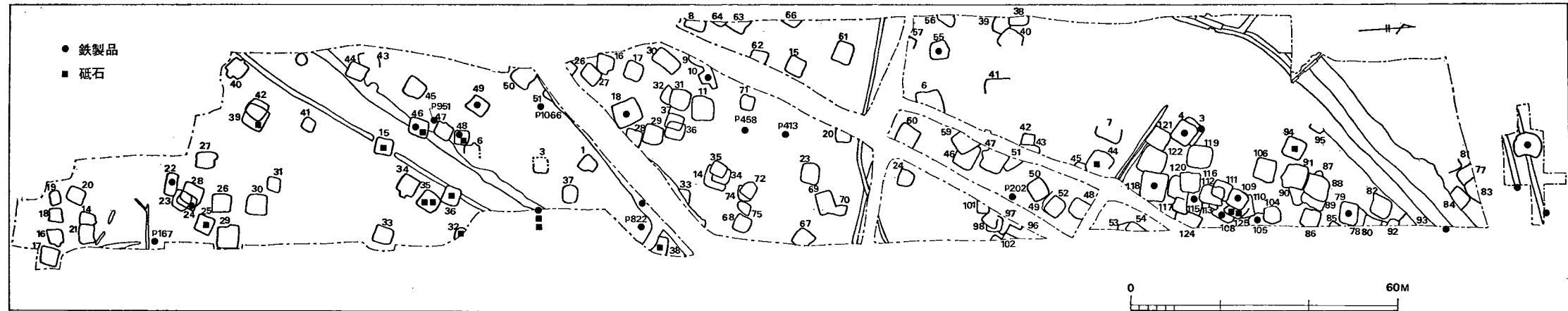
Ⅲ 須恵器の影響を強く受けているもので、胎土緻密・やや硬質の焼成である。脚端部に須恵器的な形態がみられ、また外面には回転性のヨコナデ調整（螺旋状を呈するものが多い）を施し、内面には同様の調整またはシボリ目を残す。

この種の高杯は化粧土を施されるものもあるが、丹塗りされることはほとんどないようである。⁽⁹⁾

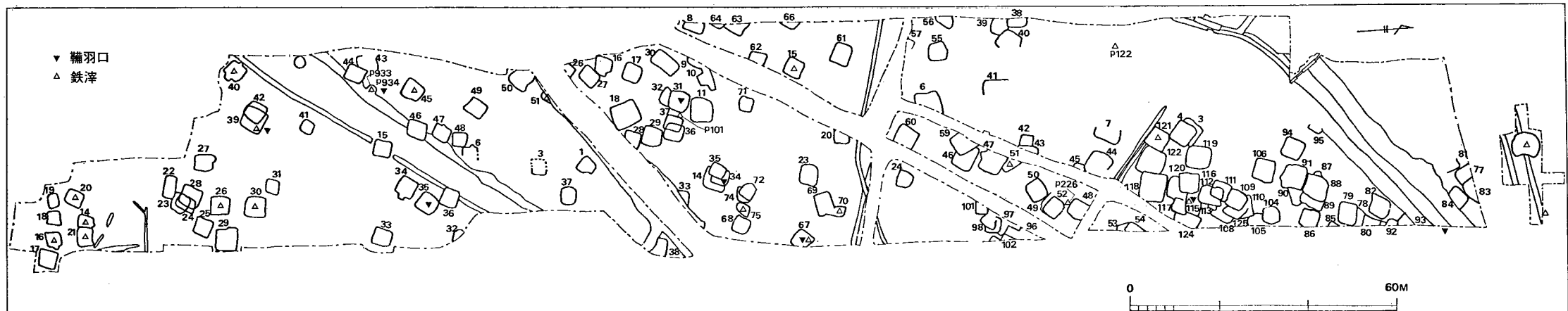
鉢 鉢には一定の形態がみられないようである。ただし、甔の把手よりもやや細い、小形の把手がいくつかあり、それらは丹塗りされていた。おそらく、この種の把手は鉢につくものと思われる。



1. 古墳時代以後の竪穴



2. 鉄製品・砥石を出土した遺構



3. 鑄羽口・鉄滓を出土した遺構

Fig. 369 古墳時代以後の竪穴および鉄滓・鑄羽口・鉄製品・砥石出土遺構分布図(縮尺1/1,200)

以上、大まかに器種別に述べてきたが、これらは一つの「型式」を示したものではない。筆者の力量不足は勿論であるが、それに加えてつぎのことがあげられる——

- (1)各住居跡内出土で、ラベルに「床面」の注記のある土器には丸を付したが、これらを比べてみると、時期的な差がみられること。
- (2)堅穴の壁の多くは削平されており、遺物の遺存が非常に悪いこと。したがって、遺構数が多いにもかかわらず、完形または完形に近い土器は、破片量に比べて少ないこと——などである。

これらのことを御断わりした上で、盲蛇に怖じず式にいえば、住居群の多くは古墳時代後期——さらにいえば、その後半期——に位置づけられよう。

3. 「集落」⁽¹⁰⁾ について

昭和40年代は、大規模発掘の最盛期であった。大道端遺跡も、その一つである。そして、「集落」遺跡を発掘したとき、同時期存在の住居群を位置連関によってグルーピングし、それをもととして「集落の構造」を論じるのが、ここ十年來の通例と思われる。⁽¹¹⁾

しかし、現在のところ、筆者には「同時性を有する住居の抽出(分布状態)」⁽¹²⁾ さえも充分になしえない状態である。

そこで、ここでは大道端遺跡における「鉄」の問題について、若干の見通しを記し、遺跡の総合的な把握は、筆者の今後の課題としておきたい。

まず、遺物の出土状況から。

Fig. 369—2は、本遺跡で発見した鉄器および砥石を、出土した遺構ごとにドットしたものである。本遺跡の遺構の時期的な巾からみて、砥石の出土は間接的に鉄器の存在を表わしていると考えたい。

Fig. 369—3は、同じ方法で鉄滓および鞆羽口について行なったものである。鞆羽口の出土数は、鉄製品・砥石・鉄滓の出土数に比べて少ないようであるが、「集落」内で鉄器生産が行なわれていたことは、ほぼ確実なところではないだろうか。

大澤正巳氏によれば(本書Ⅶ参照)、大道端遺跡出土の鉄滓には、
精錬滓タイプ
鍛冶滓タイプ

の2種が認められるとのことである。

とすれば、大道端に住んでいた人々は、一方で水稲耕作・漁撈を行ない、他方、鉄製品の生産も行なっていたということになる(この場合、時間性は無視している)。

果して、鉄器の供給が充分であったかどうかは不明であるが、「集落」内での生産が可能で

あれば、他の地域から製品を移入することに比べて、自給率はより高くなると推測できよう。

ところで、Fig. 369—2をみると、C区の第15・34・35・36・6・48・47・46号住居はほぼ環状に並んでおり、他の住居の分布状況からみて偶然のものとは思われない。また、西側にやや離れて第43・44・45・49号住居、東側に第32・33号住居が位置している。これらの住居は、その位置関係からみて、すべてが同時期に存在していたとは考えられないが、時期的に大きな差はないと思われる。そこで、これら14軒の半数以下（4～6軒と推定しておく）が同時存在と仮定し、前述の砥石の扱いが許されるならば、鉄器は各住居ごとに保管されていたのではないかと推定される。(13)

注目したいのは、C区第35号住居の床面から5、鑞羽口1と砥石2が発見されていることである。

以上の推定と事実から（実証過程なしに！）大胆に想定すれば、つぎのようになる——これらのグルーピングされる各住居に住んでいた人々（以下〈小集団〉⁽¹⁴⁾と表記する）は、各〈小集団〉ごとに、鉄器を占有・使用するが、鉄製品の製作は、グルーピングされる住居群に住んでいた人々の全員（以下《小集団》⁽¹⁵⁾と表記する）によって共同^{Gemeinschaftlich}に遂行された。この製作過程が共同^{Gemeinschaftlich}的に遂行されることに規制されて、鉄製品は各〈小集団〉によって占有されるが、所有主体は本来《小集団》であると人々には意識され、〈小集団〉には排他的・独占的な処分権はなかった

——と。(16)

Tab. 109 鉄滓・鑞羽口・鉄製品・砥石出土堅穴一覧

遺構番号	鉄製品	土製名	石製品	その他
B区第1号				
B区第2号				
B区第3号	鏃1、鏃1			軽石片3(床面) 粘土塊3
B区第4号	不明1(床面)			
B区第5号				
B区第6号				粘土塊3
B区第7号				粘土塊2、石破片1
B区第8号		土玉2		
B区第9号				
B区第10号	刀子1			粘土塊3、炭化物
B区第11号				粘土塊5
B区第12号				鉄滓付着土器片1
B区第13号				
B区第14号				
B区第15号				鉄滓(1.5g)、粘土塊5
B区第16号			不明1	粘土塊、黒曜石片1
B区第17号			偏平丸石(床面)叩石(床面)石胞 丁未製品(3層)	粘土塊2
B区第18号	不明1(床面)	支脚(カマド)		
B区第19号				
B区第20号			叩石(床面)	炭化物
B区第21号				

遺構番号	鉄製品	土製名	石製品	その他
B区第22号				
B区第23号	不明1		石庖丁(Pit)	粘土塊6(カマド)
B区第24号				
B区第25号				
B区第26号				
B区第27号				粘土塊6
B区第28号				粘土塊1
B区第29号				骨片1
B区第30号				粘土塊4
B区第31号		籾羽口		
B区第32号				
B区第33号				
B区第34号		籾羽口		粘土塊2
B区第35号				
B区第36号				
B区第37号				粘土塊1
B区第38号				
B区第39号				
B区第40号				
B区第41号	刀子?1			
B区第42号				粘土塊2
B区第43号				
B区第44号			砥石(床面)	
B区第45号				粘土塊3
B区第46号				
B区第47号				
B区第48号				
B区第49号				
B区第50号				粘土塊12
B区第51号				鉄滓1(28.5g)、粘土塊4
B区第52号				
B区第53号				粘土塊4
B区第54号				
B区第55号	不明1(2層)			
B区第56号	不明1(床面)			粘土塊3
B区第57号				
B区第58号				
B区第59号				
B区第60号				粘土塊2
B区第61号				
B区第62号	鎌1			
B区第63号	鎌1		石斧(Pit)	粘土塊
B区第64号				炭化物
B区第65号				
B区第66号				
B区第67号		籾羽口		鉄滓1(2.5g)、粘土塊5
B区第68号				粘土塊1
B区第69号				炭化物
B区第70号				鉄滓1(3.5g)、粘土塊6
B区第71号				
B区第72号				
B区第73号				
B区第74号				
B区第75号				鉄滓1(25g)
B区第76号				
B区第77号				
B区第78号				粘土塊、炭化物
B区第79号	不明1			

遺構番号	鉄製品	土製名	石製品	その他
B区第80号				
B区第81号				
B区第82号				
B区第83号				
B区第84号				粘土塊1
B区第85号				
B区第86号				
B区第87号				
B区第88号			石錘1(床面)	
B区第89号				
B区第90号				
B区第91号				
B区第92号				
B区第93号				
B区第94号			砥石	粘土塊2
B区第95号				
B区第96号				
B区第97号				粘土塊4
B区第98号				
B区第99号				
B区第100号				
B区第101号			叩石1(床面)	
B区第102号				鉄滓1(床面、2g)
B区第103号				
B区第104号				粘土塊、小石1
B区第105号			紡錘車1	
B区第106号			叩石(床面)、小石5	
B区第107号				
B区第108号	鎌1			粘土塊2
B区第109号	不明1			粘土塊3
B区第110号	不明1			
B区第111号				粘土塊1、炭化物
B区第112号				粘土塊1
B区第113号				
B区第114号				粘土塊1
B区第115号		罽羽口		鉄滓2(1、1.5g)、粘土塊6
B区第116号				
B区第117号				粘土塊3
B区第118号	刀子?1		石斧	
B区第119号				小石1
B区第120号				粘土塊4
B区第121号				鉄滓1(10.5g)
B区第122号				
B区第123号				鉄滓3(5、6、6.5g)、粘土塊
B区第124号				
B区第125号			砥石2	鉄滓1(8.5g)、粘土塊
B区第126号				
C区第1号				
C区第2号				
C区第3号				
C区第4号				
C区第5号		土玉4		
C区第6号				
C区第7号				
C区第8号				
C区第9号				
C区第10号				
C区第11号				

遺構番号	鉄製品	土製名	石製品	その他
C区第12号				
C区第13号				
C区第14号				鉄滓1(7g)
C区第15号			砥石(床面)、臼玉2(北西隅)	
C区第16号		土玉2	砥石片1	鉄滓1(11.5g)、粘土塊2
C区第17号			石斧	粘土塊
C区第18号		土玉8		
C区第19号				
C区第20号		土玉		鉄滓、炭化物
C区第21号	不明1			鉄滓3、炭化物、粘土塊
C区第22号	不明1			
C区第23号				粘土塊1
C区第24号				粘土塊、木の実、炭化物
C区第25号			砥石(2層)	粘土塊2
C区第26号				鉄滓、粘土塊6
C区第27号				
C区第28号				粘土塊3
C区第29号				粘土塊1
C区第30号	不明1			鉄滓1、粘土塊12
C区第31号				
C区第32号			砥石1(床面)	
C区第33号				
C区第34号				
C区第35号		鞆羽口(床面)	砥石2(床面)	
C区第36号		土玉8	砥石1	
C区第37号				
C区第38号			砥石1	
C区第39号		土錘149	砥石1(カマド)	鉄滓12(計33g)、小石(床面)
C区第40号		土玉(カマド)		粘土塊、鉄滓1(39g)
C区第41号				粘土塊4
C区第42号				
C区第43号				
C区第44号				粘土塊2
C区第45号				鉄滓1(18g)、軽石(カマド周辺)
C区第46号	刀?1	土玉1(床面)	砥石1	
C区第47号				粘土塊5
C区第48号	不明1		砥石1(床面)	粘土塊2
C区第49号	鏃?1			
C区第50号			石錘1	
C区第51号				鉄滓2
D区第1号	不明1			鉄滓4

備考・C区第24号…銀環(紛失)、同39…周辺より鞆羽口、同40…鉄滓分析はⅣ参照

注

- (1) ① 八女市教育委員会『塚ノ谷窯跡群—八女古窯跡群調査報告Ⅰ—』1969
- ② 八女古窯跡群調査団『中尾谷窯跡群』1970
- ③ “ 『管の谷窯跡群』1971
- ④ “ 『立山山窯跡群』1972
- (2) 注(1)—①46頁、第25図—4
- (3) いわゆる「赤焼き」の一種であるが、この種の須恵器が通常のものとは色調が異なるのみであるのに対し、前述の土師器的な須恵器は胎土がやや粗く、肉眼的には表面に気孔が多く認められる。
また、「赤焼き」は杯・蓋・甕・埴等にもみられるが、色調については明るいいんげん色・紫色・褐色等がある。断面観察では、全体に一樣の色調を示すもの・外面のみレンガ色(その他)を呈するもの・内外面ともレンガ色(その他)で、中央部のみ青灰色であるもの、の3種がある。

- (4) 各土器の説明では「膜状」としておいたが、一覧表では「化粧土」の表記を用いた。
これは丹塗りではなく、赤褐色～黄褐色を呈し、土器の胎土とは異なった色調で、精選された粘土を使用している。器表一面に塗りつけた状態のものと、中まで浸み込んだような状態を示すものがある。いわゆる「赤彩」の一種と考えられるが、「丹」と区別する意味で、本報告では「化粧土」の表記を用いたが、字本来の意味のみではなく、水分の浸透を防ぐなどの機能も考えなければならないだろう。
- (5) この黒色を呈するものには、つぎの2種がある。
- 黒色部分はごく薄く、器表を膜状に被っており、塗りつけたような状態のもので、生地は胎土の色調を呈する。岩瀬正信氏の御教示によれば、漆とのことである。
 - aとは違って、黒色部分は土器の器肉内部におよび、多少削っても黒色部分が残るもの。ただし、断面観察では、器肉中央は本来の胎土の色調を保っている。
- (6) 把手のつく甕も出土している (Fig. 324—18・Fig. 402—5) が、本遺跡の場合、一般的ではないようである。
- (7) 一個体中では、どちらか一方の段階での穿孔に限られている。
- (8) 把手のみを出土した場合、甕のものか甗のものかの区別はできなかった。本体の一部が残っている場合には、内面のへら削りの方向と、本体部分の彎曲度 (甕の場合は、体部に丸味がある) によって、ある程度の区別は可能かもしれない。
PL. 137 は把手の接合部の写真で、円筒状の粘土を潰したようなものと、内部に粘土をつめ込んだものの好例である。
- (9) この種の土師器高杯と、赤褐色を呈する須恵器高杯との区別は筆者にとってむづかしく、本報告では直感的に区別したが、「化粧土」のあるものなどはやはり土師器と考えるのではなかろうか。ここでは、須恵器的土師器・土師器的須恵器と表現せざるをえない土器群があることを指摘することとどめ、詳細・正確な区別は、筆者の今後の課題の一つとしておきたい。
- (10) 「集落」はとりあえず「住居跡群」である。
- (11) たとえば、阪田正一氏「南関東における後期古墳時代集落跡の一考察——とくに住居分布とその構成について——」『立正大学文学部論叢』41、1972
阪田氏によれば、「集落」研究の方法は、つぎの5項目を「骨子」とする。
- ① 同時性を有する住居の抽出 (分布状態)
 - ② 小型住居と大型住居の関係
 - ③ 小集落跡と大集落跡の関係
 - ④ 集落跡と諸種遺跡の関係
 - ⑤ 考古学的資料と文献史料の操作 (前掲書 168 頁、番号付は引用者による)
- なお、以下の文献を参照した。
- 和島誠一氏「原始聚落の構成」『日本歴史学講座』1948、のち『考古学とは何か』現代のエスプリ No. 31 に収録。また歴史科学協議会編『日本原始共産制社会と国家の形成』1972 に収録。最近では『日本考古学の発達と科学的精神』1976所収。
- 近藤義郎氏「D、問題の所在」『佐良山古墳群の研究』津山市、1952・「共同体と単位集団」『考古学研究』6—1、No.21、1959・「弥生文化論」講座日本歴史『原始および古代1』1962
- 和島誠一・金井塚良一両氏「集落と共同体」『日本の考古学Ⅴ』1967
- 戸沢充則氏「海戸遺跡における集落 (住居址群) の構成」『海戸 第2次調査報告書』長野県考古学会1968
- 小野忠熙氏編『島田川』1953、第Ⅵ章・同氏「集落と住居」『新版考古学講座4 原史文化 <上>』1969
- 後藤和民氏「原始集落研究の方法論序説」『駿台史学』No. 27、1970
- 下条信行氏「Ⅲ 弥生時代(2)村落構造について」『九州考古学の諸問題』『考古学研究』19—1、No.

73、1972

小林三郎氏「土師時代集落把握への小考」『駿台史学』No. 31、1972

中井貞夫氏「古墳時代後期の集落——東国を中心として——」『考古学研究』20—1、No. 77、1973

伊藤禎樹氏「伊勢湾地方の弥生時代の集落」『考古学雑誌』59—3、1973

宮澤恒之氏「弥生住居址の分析——集落問題についての資料研究——」『信濃』25—12、1973

久永春男氏「東海地方における原始共同体の解体(1)・(2)」『どるめん』3・4、1974

高倉洋彰氏「弥生時代の集団組成」『九州考古学の諸問題』1975・「北部九州における地縁の共同体の出現」『どるめん』8、1976

(12) 阪田氏前掲書

(13) 鉄器の修理要具（砥石は鉄器製作過程でも使用されるであろうが、ここでは一応鉄器の使用過程を考えておきたい）のみが各住居に保管され、鉄器そのものは、集中的に保管されたとするのは無理ではなからうか。

(14) 1住居＝〈小集団〉と考えている。床面積から人口を推定する方法があるが、[○]居住人員と[○]住人員は区別しなければならないだろう。また、とりあえず〈小集団〉＝「家族」とすることはできない。両者は次元の異なる語であるから。ここでは、〈小集団〉という表記によって、1住居内に住んでいた人々を総称しておきたい。

(15) 今は、〈小集団〉の算術的合計を≪小集団≫としておく。近藤義郎氏の「単位集団」は住居跡群のみから措定された概念ではないと理解している。そこでは弥生中期後葉という時期的同一性＝住居跡群の同時期存在性と、「周溝内にはほぼ半円形に並んだ住居址群」という遺構群の位置連関、倉庫かと考えられる遺構群（→食糧貯蔵機能→再生産）、住居定員（→人口→労働力）、鉄製器具の存在（→労働要具）、谷水田を想定した遺跡の立地条件など多くの要素があげられている。≪小集団≫の表現には、これらの要素のすべてを含めず、前述のような意味にとどめたい。そして集落は、今のところ〈小集団〉・≪小集団≫が直接的に（ゲマインシャフト的に）、あるいは間接的に（＝媒介されて→ゲゼルシャフト的に）結びあった複合的全体——^{Gemeinwesen}共同的生活組織——の本拠地としておきたい。この場合、遺跡としての「集落」はその一つの反映である。

(16) 原島礼二氏『日本古代社会の基礎構造』1968

同氏「日本古代社会論」『現代歴史学の課題』1971を参考とした。

なお、以下の文献も参考とした。

和島誠一・金井塚良一両氏「集落と共同体」日本の考古学Ⅴ、1967

大塚久雄氏『共同体の基礎理論』1955

平田清明氏「マルクスにおける経済学と歴史認識」『思想』1966—8・11

同氏「社会主義と市民社会」『世界』1968—2

原秀三郎氏「アジアの生産様式論批判序説」『歴史評論』1969—8

同氏「階級社会の形成についての理論的諸問題」『歴史評論』1969—11

芝原拓自氏『所有と生産様式の歴史理論』1972

福富正実氏『共同体論争と所有の原理』1970

望月清司氏『マルクス歴史理論の研究』1973

林直道氏『史的唯物論と所有理論』1974

竹村民郎氏編『経済学批判への契機』1974

真木悠介氏「疎外と内化の基礎理論—経済形態の存立構造」『思想』1974—5・7・8

門脇禎二氏『日本古代共同体の研究』1970（第2版）

都出比呂志氏「農業共同体と首長権」『講座日本史Ⅰ 古代国家』1970

石母田正氏『日本の古代国家』1971

K. マルクス『経済学批判』序言、邦訳岩波文庫版、1956

同『経済学批判要綱』邦訳大月書店版Ⅲ、1961

「ヴェ・イ・ザスリーチの手紙への回答」邦訳

『マルクス・エンゲルス農業論集』岩波文庫、1975

F. エンゲルス『家族、私有財産および国家の起源』邦訳国民文庫版、1954

K. マルクス/F. エンゲルス『新版ドイツ・イデオロギー』邦訳合同出版社版、1966

Tab. 110 古墳時代以後の竪穴式住居跡発見遺跡

番号	遺跡	所在地	概要	文献
1	有田遺跡	福岡市西区有田	7軒(4C代~5C末・須恵器Ⅰ期) 8C代製鉄関係の工房跡	有田古代遺跡発掘調査概報 福岡市1967 有田遺跡(第2次)有田遺跡調査団1968
2	大又遺跡	福岡市西区大字高崎1108	8軒(弥生1軒)古墳7軒 古墳期はカマドなし	今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集 福岡県1970 今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第3集 福岡県1973
3	浄泉寺跡	福岡市西区片江	6軒(弥生)2軒(古墳・4~5C)	浄泉寺遺跡 福岡市1974 東洋開発株式会社
4	野方中原遺跡	福岡市西区大字野方字中原	94軒(古墳6軒・そのうち2軒は須恵器を伴出、5C代) E4区3~6地点カマドあり(須恵器Ⅲ期)	野方中原遺跡調査概報 福岡市1974
5	宮の前遺跡	福岡市西区拾六町	B地点1軒(工房跡)・D地点約8軒・E地点6軒・F地点8軒(弥生~古墳)	宮の前遺跡A~D地点 福岡市1971 今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集 福岡県1970 宮の前遺跡F地点 福岡市1971
6	湯納遺跡	福岡市西区拾六町	8軒(弥生~古墳)	今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集 福岡県1970 同上第4集 福岡県1976
7	井原・三雲遺跡	糸島郡前原町	八反田Ⅱ-6・仲田・中川屋敷(各1軒?) 八龍Ⅰ-7 3軒(5C前半) 界Ⅰ-2 2軒(5C前半代) 界Ⅰ-2・3・4 5軒(古墳時代中頃) 加賀石Ⅰ-22・23(古墳前期1軒・中期1軒)	井原・三雲遺跡発掘調査概報昭和49・50年度1975、1976 昭和51年度現地説明会資料 福岡県1977
8	和白遺跡群・上和白C地区	福岡市東区上和白	1軒(古墳末~奈良) 製鉄関係	和白遺跡群1971
9	東町遺跡	粕屋郡古賀町大字鹿部	1軒(須恵器・カマドなし)	鹿部山遺跡 鹿部山遺跡調査会1973
10	蒲田遺跡D地区	福岡市東区大字蒲田	7軒(古墳時代) 第2号住居跡(5C末~6C初)	蒲田遺跡遺跡福岡市1975
11	勝浦遺跡	宗像郡津屋崎町大字勝浦字藤三ヶ浦	2~3軒(古墳時代・5C初)	昭和51年1月福岡県教育委員会調査川述昭人氏御教示
12	塩浜遺跡	宗像郡津屋崎町大字塩浜	(古墳時代)	福岡県宗像古代遺跡地名表第1版1969
13		宗像郡津屋崎町大字奴山字椿	(古墳時代)	宗像大社祭祀遺跡総合調査団沖の鳥祭祀遺跡調査団
14	東郷・登り立遺跡	宗像郡宗像町大字東郷字登り立	1軒(弥生~古墳)	東郷遺跡群 日本住宅公団1967
15	田熊・上ノ畑遺跡	宗像郡宗像町大字田熊字上ノ畑	1軒	同上
16	多々良込田遺跡	福岡市東区大字多々良字込田	6軒(古墳時代)	山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告福岡市1975
17	田尻遺跡	鞍手郡若宮町大字金丸・水原字田尻	1軒(古墳時代・6C中葉~後半・須恵器Ⅲ期)	山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第1集 福岡県1976
18	柳ヶ谷遺跡	鞍手郡若宮町水原字柳ヶ谷	西区2軒(古墳時代) 5軒(古墳時代以降および時代不明)	九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅷ 福岡県1977
19	小原遺跡	鞍手郡若宮町山口字小原	8軒(古墳時代)	九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅹ 福岡県1977 くらののむかし3 福岡県1976
20	都地原遺跡	鞍手郡若宮町沼口字都地原	東区第3号住居跡(6C後半~終末)カマドあり	九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅷ 福岡県1977
21	高木遺跡	鞍手郡鞍手町新北字高木長家	4軒(古墳時代3軒)	九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告ⅩⅢ 福岡県1977
22	向山遺跡	鞍手郡鞍手町新北字向山	3軒(古墳時代初頭2軒・後期1軒)	くらののむかし4 福岡県1976 九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告ⅩⅣ 福岡県1977
23	中屋敷遺跡	鞍手郡鞍手町中山字中屋敷	7軒(弥生・古墳)	昭和51年福岡県教育委員会調査くらののむかし4 福岡県1976

番号	遺跡	所在地	概要	文献
24	咲花遺跡	鞍手郡若宮町沼口 字咲花	2軒(古墳時代)	昭和49年度福岡県教育委員会調査 上野精志氏御教示
25	竹ヶ本 遺跡	筑紫郡春日町大字 小倉字竹ヶ本	28軒(そのうち時期推定可能17軒 古墳時代9軒)	福岡県文化財調査報告書第22輯 福 岡県1961
26	原古墳群	春日市大字上白水 字原	2軒(古墳時代・4Cの後半) 炉?あり	山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第2集 福岡県1970
27	門田遺跡 門田地区	春日市大字上白水 字門田	昭和47年1軒(平安時代末) 昭和48年2軒(古墳時代カマドあり)	山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報 (昭和47年度~50年度)
28	門田遺跡 辻田地区	春日市大字上白水 字辻田	昭和48年1軒(古墳前期)+2(時期不明) 昭和49年1軒(中世)、昭和50年4軒 (古墳前期)第18号はベット状遺跡あり	福岡県 1973~1976
29	柏田遺跡	春日市上白水字柏 田	2軒(古墳期)	昭和48年度山陽新幹線関係埋蔵文化 財調査概要 福岡県1974 山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第1集 福岡県1976
30	五十川・ 高木遺跡 A地点	福岡市南区大字五 十川高木町2	3軒(12~13C)	山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告 福岡市1975
31	今光遺跡	那珂郡那珂川町今 光	19軒(弥生~平安) 平安期2軒(そのうち1軒にカマド)	昭和50年福岡県教育委員会調査 田平徳栄氏御教示
32	裏の田 遺跡	筑紫郡太宰府町裏 の田	27軒(古墳時代、カマドあり)	教育福岡No.274、1972 酒井仁夫氏御教示
33	成屋形 遺跡 (第4次調査)	筑紫郡太宰府町大 字水城字成屋形	3軒(奈良時代・7C後半~8C後半)	成屋形遺跡 福岡県1970
34	野黒坂 遺跡	筑紫野市大字針楯 字野黒坂	24軒(8類出土1軒・9類出土2軒・10 類出土21軒)	福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査 報告第1集 福岡県1970
35	池田遺跡	筑紫郡太宰府町池 田	3軒(古墳時代)	同 上
36	大曲り 遺跡	田筑紫野市針楯 569	9軒(そのうち第3号は5C後半、他は 6C後半~7C初頭)	同 上
37	畑添遺跡 第2地点	筑紫野市大字武蔵 字畑添	8軒(6C末~8C)	九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調 査報告Ⅴ 福岡県1975
38	八隈遺跡	筑紫野市大字武蔵 字八隈	第1地点11軒(そのうち古墳時代3軒) 第9号住居跡は5C代のカマド?あり 第2地点15軒(古墳時代・7C前半)	九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調 査報告Ⅶ 福岡県1976
39	塔ノ原 遺跡	筑紫野市大字塔ノ 原	3軒(7C~8C)	九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調 査報告Ⅳ 福岡県1974
40	宮原遺跡 第1・2・ 3地点	小郡市大字三沢	第1地点1軒(古墳時代) 第2地点7軒(古墳時代) 第3地点2軒(古墳時代)	九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調 査報告Ⅴ 福岡県1974
41	西中隈 遺跡	小郡市大字三沢	4軒(古墳時代、6C代)カマドなし	同 上
42	上棚田 遺跡	小郡市大字三沢	2軒(古墳時代)	同 上
43	津古遺跡 群 中台遺跡 町	筑紫野市原田~小 郡市~佐賀県基山	10軒(弥生中期~古墳)	波多野皖三『筑紫史論』1975
44	津古内畑 遺跡	三井郡小郡町大字 津古字内畑1293	1次調査1軒(土師器碗出土) 2次調査1軒(須恵器1式-5C代)	津古内畑遺跡 小郡町1970 津古内畑遺跡(第2次) 小郡町1971
45	八並遺跡	朝倉郡夜須町大字 三並字八並	5軒(そのうち1軒は8C中葉)	九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調 査報告Ⅳ 福岡県1974 考古学ジャーナルNo.56、1971
46	柿原野 田遺跡	甘木市大字柿原字 野田	D地区13軒分(第1号は須恵器有高台杯 出土・カマドなし)(8C代)	柿原野田遺跡 同遺跡調査団1976
47	千潟遺跡	小郡市千潟	(現在までに18軒分)	昭和51年福岡県教育委員会調査 橋口達也氏御教示
48	狐塚遺跡	筑後市上北島	14軒(弥生~古墳) 2軒(奈良時代)	狐塚遺跡 筑後市教育委員会1970
49	道添遺跡	八女市大字室岡	18軒(古墳時代前半8軒・後半10軒)	福岡県八女市室岡所在遺跡群調査概 報 福岡県1972
50	野口遺跡	八女市大字室岡	5軒(古墳時代前半2軒・後半3軒)	同 上
51	広川平原 遺跡	八女郡広川町大字 広川字平原	予備調査4軒(6C後半) 2次調査2軒(カマドあり)	九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調 査報告Ⅰ 福岡県1970 九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調 査報告Ⅲ 福岡県1972

E その他の遺物

1. 大道端遺跡の石器について

副島 邦 弘
平ノ内 幸 治
稲 富 裕 和

大道端遺跡の出土遺物の中の石器は約2,000点ほどである。そのうち tool として考えられるのが約700点である。

出土地点は、A区・B区・C区・D区の表土層あるいは後世の攪乱をうけて、プライマリイな状態で出土したものはなく、まして遺構をともなうものはまったくなかった。

このことは弥生時代以前の石器についてであった。

出土石器について、器種別に一覧表にすると Tab. 111 のようになる。

この中でほぼ先土器時代にはいるものと弥生時代以前の石器（縄文時代関係）について若干の説明を加えて、大道端遺跡の石器時代というものを把握したい。（副島）

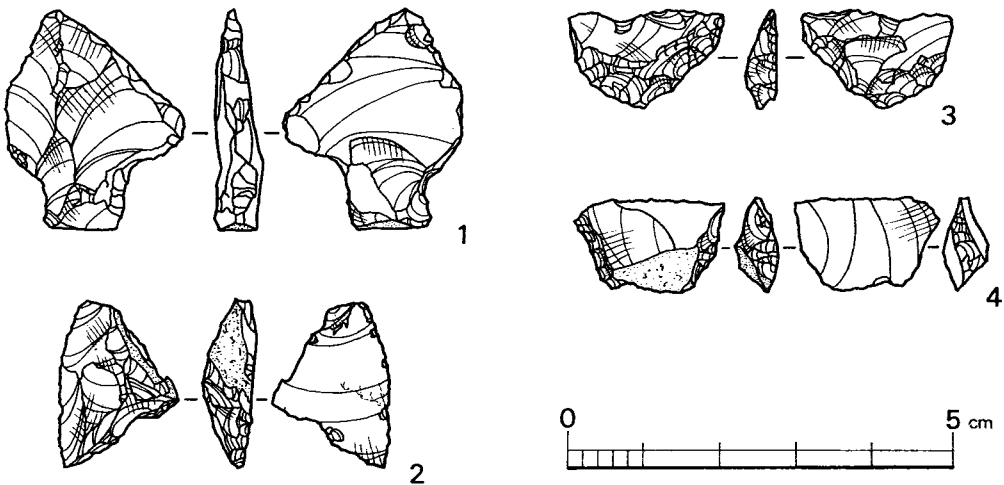


Fig. 370 大道端遺跡出土石器実図測 (1) (実大)

Tab. 111 大道端遺跡出土石器一観表

器 種	石 質	出 土 数	器 種	出 土 数
曾根型石核	黒曜石	4	砥石	17
剥片尖頭器	黒曜石	1	石 錘	9
台形石器	黒曜石	1	叩石	4
台形様石器	黒曜石	1	石 庖 丁	3
グレイバー	メノウ質	1		
スクレーパー	黒曜石	3	石 庖 丁 未 製 品	1
	サヌカイト	27	紡 錘 車	4
石 核	黒曜石	1	凹 石	2
	サヌカイト	3	石 帯	1
石 鏃	メノウ	1		
	黒曜石	12 (そのうち剥片鏃 7)		
	サヌカイト	22 (そのうち剥片鏃 12)		
	ハリ質安山岩	1		
ドリル	黒曜石	3		
	サヌカイト	1		
石 斧	安山岩	3		
	蛇紋岩	3		
	硬質砂岩	4		
	不明	2		
石 鑿	粘板岩	1		

a. 先土器時代の石器 (Fig. 370, PL. 107)

剥片尖頭器(1) B区より出土したもので黒曜石製。打面は自然面で、剥片の基部を両側から挟り込んで基部を作り出し、片側縁に刃潰し加工を加えて先端を鋭利に仕上げている。

ナイフ形石器(2) B区出土。剥片の先端部を断ち切るように刃潰し加工を加えている。片側縁に刃こぼれが認められる。一部に自然面を残し、石質は黒曜石である。

台形様石器(3) 出土地不明。素材となる剥片はすんづまりの黒曜石の剥片で、二次調整加工によってバルブはカットされている。二次調整は、ナイフ形石器(2)、台形石器に普遍的に認められる縁辺のみに急角度で施される刃潰し加工の範疇を脱しており、刃潰し加工が線的加工であるのに対して、素材の内部にまでおよぶ面的加工である。刃部に刃こぼれが多く認められる。

台形石器(4) C区出土。素材は黒曜石製の縦長剥片で、素材を横位に用い、先端と基部を折断し、刃潰し加工を加えている。百花台型の台形石器と比較すると素材が部厚く、一部自然面を残している。

このほかに発掘された剥片のなかに、石器表面の観察から先土器時代のものと思われるものがあるが、数は少ない。(稲富)

b. 縄文時代の石器 (Fig. 371~379, PL. 107~123)

グレーヴァー(1)

メノウ製。横長の剥片の一侧縁よりフルーティング加工を施している。

石核(2)

黒曜石製。非常に小形の石核である。打面は自然面で、打面調整はまったく認められない。剥離面からみて、この石核より剥がされた剥片は形のあまり整わない小形のものである。下部方向からの剥離が一条認められる。大道端の石器のなかには、この石核から剥がされたような小形の剥片を素材とした石器は認められない。はたして剥片を剥離するための石核であろうか。躊躇するところである。D区出土。

ドリル (3・4)

3はサマカイト製で先端部を欠損している。機能部は細長く突出し、断面三角形。4は黒曜石製で、素材となる剥片の先端部に加工を加え機能部を作り出している。

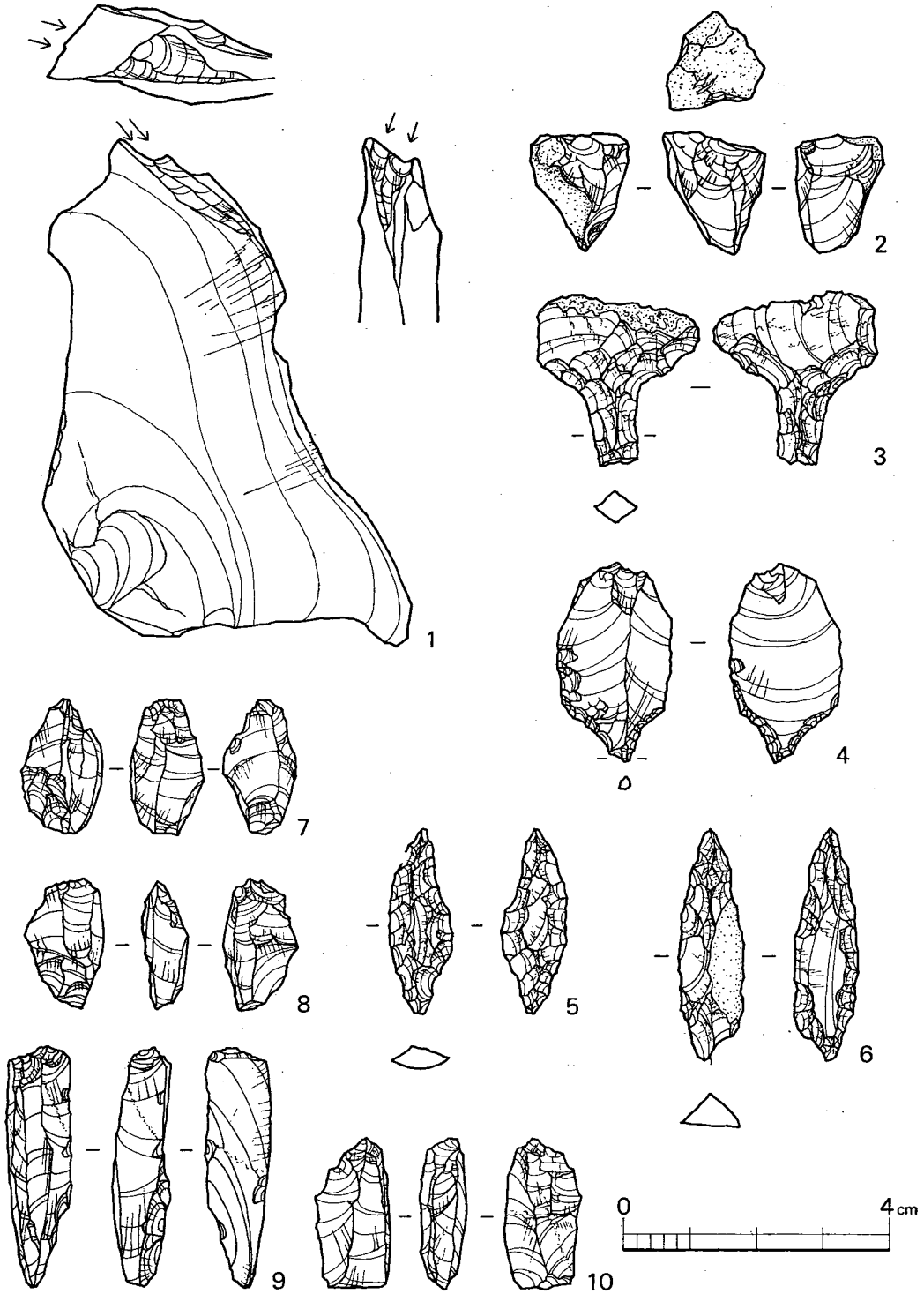


Fig. 371 大道端遺跡出土石器実測図(Ⅱ) (実大)

柳葉形石鏃 (5・6)

いずれもサヌカイト製で主要剥離面を一部分残している。横長の剥片を素材としている。基部には左右より若干の抉りを加えて基部を作り出している。

曾根型石核⁽¹⁾ (7~10)

曾根型彫刻器⁽²⁾と呼ばれ、ピエス・エスキューとして注意を払われている石器である⁽³⁾。図示したもののほかに2点あり、計6点が発見されている。8は出土区不明であるが、B区3点、C区に2点それぞれ発見された。石質はいずれも黒曜石であるが、9は乳白色をした姫島産の黒曜石である。側面観は紡錘形をしており、上下両端からの剥離が認められる。また平坦な打面をもたないことがその特徴としてあげられる。7の両極は、するどい加撃によってできたと思われる階段状剥離痕を残している。階段状剥離痕が残ることは、7~10に共通していることだが、必ずしも両極に残っているわけではない。9は側縁先端部に加工痕が認められる。(稲富)

石鏃 (Fig. 372・373)

当遺跡の石鏃は、①打製石鏃、②いわゆる剥片鏃、③広義的な剥片鏃、④異形局部磨製石鏃とに大別できる。

では、順をおって説明を加える。

打製石鏃 (2・5・7・8・10・11・16・20・22・24・28・29・31・32)

形態的には基部の抉りが深いものと、抉りが浅いものとに分けられる。石質は黒曜石とサヌカイトである。不定形剥片の打面のところに剥離加工によって抉りを入れ打瘤も除いている。両面とも二次加工は大まかで、一次剥離面が残っている。しかしながら、剥離は押圧剥離を使用して、仕上げは綺麗ではない。29はメノウ製で、丁寧に仕上げられている。

いわゆる剥片鏃 (1・3・4・6・9)

素材となる剥片は両節打面をもった、鈴桶形石核より剥取られた剥片を使用し、基部は打面側よりバルブをカットして抉りをいれている。製作技術はまず素材の選択によって、決定されるもので、素材は良質の黒曜石が求められるが、当遺跡の石鏃も原石として、佐賀県の腰岳産の黒曜石を使用している。当時の物質の交流によって理解できるものである。

広義的な剥片鏃 (13・14・15・17・18・19・21・23・25・26・27・30)

サヌカイトを素材として特異の技法によってつくられた小形石鏃である。その特徴はバルブをカットして作っている。バルブはほぼ脚部となっており、基部に抉りを入れて形を整え片面からの側面調整を行なっている。調整剥離は表面だけを中心に仕上げ、裏面については若干の

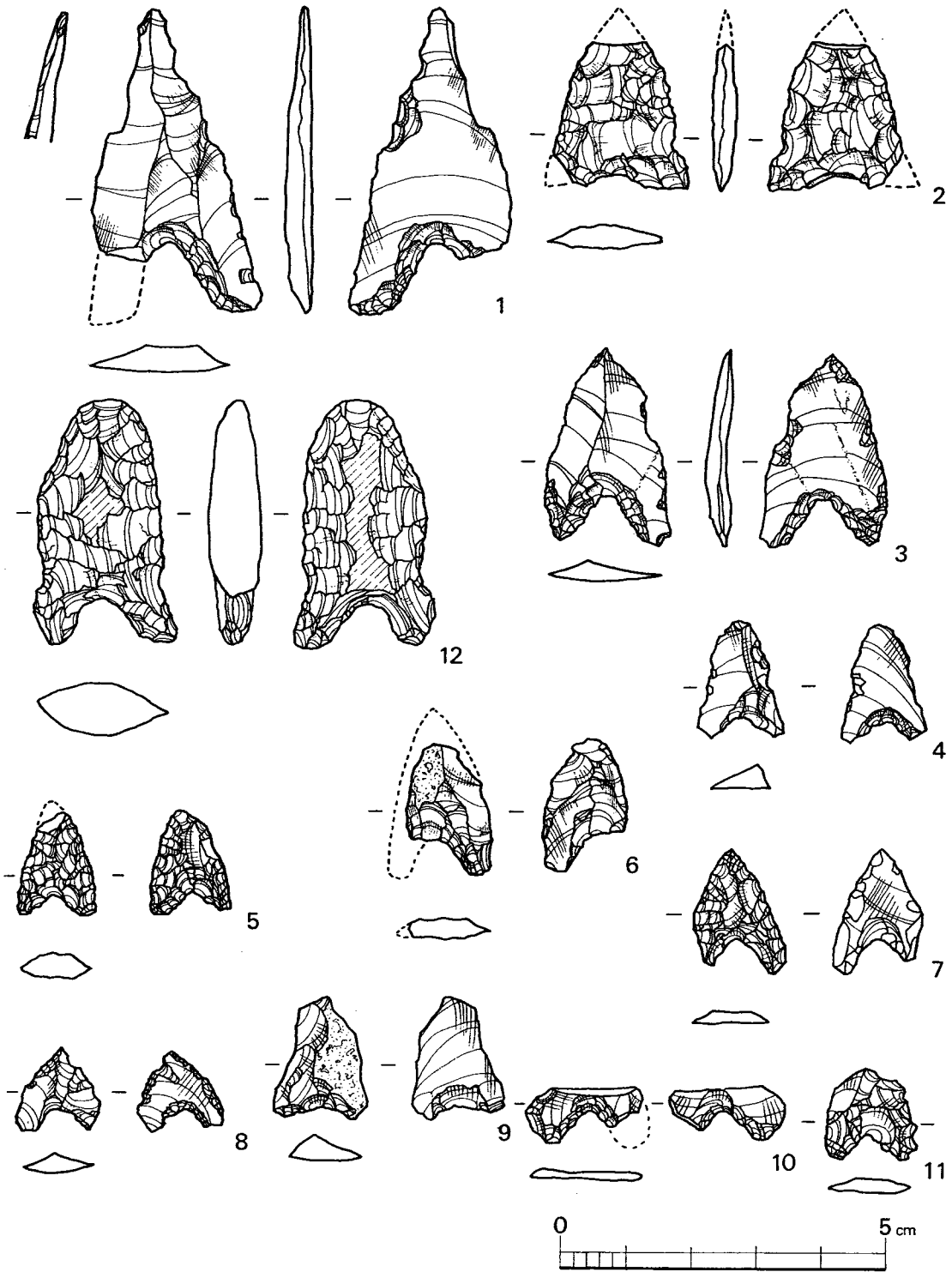


Fig. 372 大道端遺跡出土石器実測図(Ⅲ) (実大)

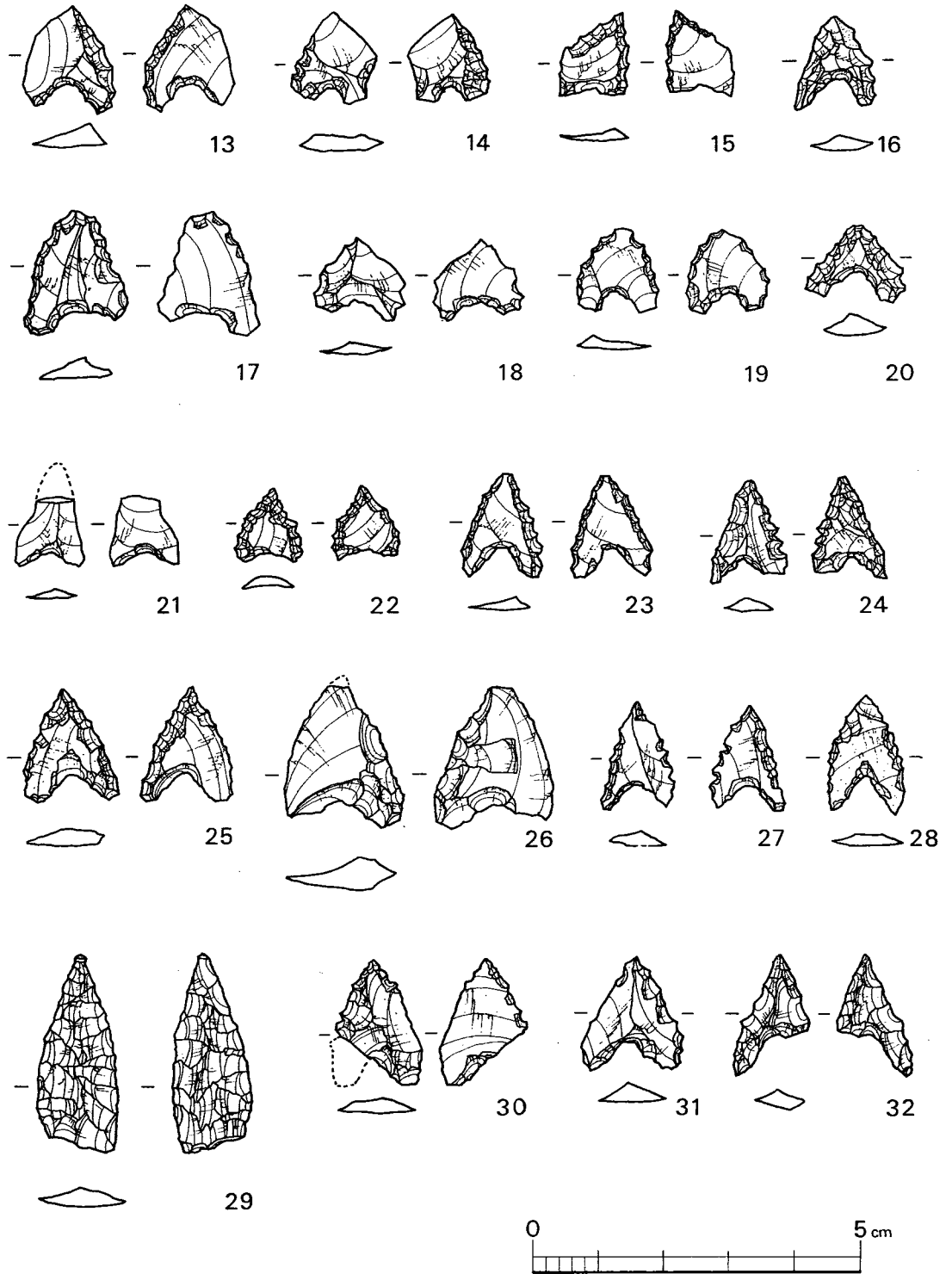


Fig. 373 大道端遺跡出土石器実測図 (Ⅳ) (実大)

調整をしたものである。

異形局部磨製石鏃 (12)

石質はチャートでいわゆる異形局部磨製石鏃（俗にトロトロ石器と称している）。両面の中央部は平坦で、おそらく磨いた部分とみてよい。擦痕は先端と脚部に磨滅してあり、使用痕がみられる。使用痕は斜上面から斜下面の方向に走っている。その部分を拡大したのが Fig.382 である。時期的には今までの例から縄文時代早期の押型文土器にともなうものと考えられていた。これはこの石器の上限を示すもので、下限は新潟県では縄文晩期にも出土しているらしい。以上のことからほぼ妥当な位置に落ちつくものと思われる。

石斧 (Fig. 374)

磨製石斧（局部磨製）と打製石斧に分類できる。

磨製石斧（局部磨製）(2・3・4・5)

完形品は2で、蚊紋岩製で乳棒状に敲打で整え刃先を両面から研磨し、蛤刃状に加工している。いわゆる蛤刃石斧である。3～5は刃部の部分に近いところから破損したもので、刃部は両面から研磨され蛤刃を呈する。4は敲打技法によってよく整えられており、刃部が欠損している。石質は安山岩製。

打製石斧(1・6)

1は安山岩で形はバチ形を呈し、側縁部を敲打で整えている。石器全体がローリングを受けている。6の刃部は片側は欠損しているため刃部加工の状態は明確でない。

これらの石斧の時期は、一般的縄文時代の特徴を有する。

凹石(7)

石質は硬質砂岩製で、石器の中央部に凹をもち、全体に磨痕がはいり、側辺に敲打痕をとどめている。（副島）

スクレーパー (Fig. 375～378)

現在スクレーパーとしてあげられている石器には、石匙、皮剥ぎ、搔器等⁽⁴⁾が含まれており、これらの石器はそれぞれの製作段階で加工技術が異なっており、さらにできあがった時点で形態も異なっている。これは機能的問題も含まれている。

本遺跡では、検出されたスクレーパーはそのほとんどがサヌカイトを石材として用いており、若干の黒曜石のブレイド状剥片を用いたものがある。

ここでは、刃部調整を施した石器をスクレーパーと規定しておく。そして、刃部の位置・状



Fig. 374 大道端遺跡出土石器実測図 (V) (縮尺1/3)

態を分類の規準とし、素材の違い・形態はその規準⁽⁵⁾としなかった。

A類 (1・10・16・17・24)

A類に属するものは、刃部の位置は右側辺から左側辺におよび「V」字形に刃部を仕上げたものである。

1は縦剥ぎの剥片を素材とし、バルブ調整を施し、左側辺は両面から、右側辺は片面からのみ刃部調整を施している。10は大形の縦剥ぎの剥片を用いており、バルブ調整など1と同じである。刃部調整はすべて両面から施している。16は不定形の剥片を素材とし、全面加工を施してポイント状⁽⁶⁾に仕上げている。24の主要剥離面は、バルブ調整および刃部調整の際荒割の加工をくわえ、表面は左側辺部に細かい入念な加工を施し、右側辺部は礫面に若干の加工を施しているだけである。

B類 (2~4・6~8・11・12・14)

剥片の左右側辺のどちらか一边に刃部調整を施したものをB類とした。

2は黒曜石の縦長剥片を素材とし、主要剥離面に刃部調整を施したもので、打面・礫面はそのまま残している。黒曜石は腰岳産のものを使用しており、不純物が多く石質はあまり良くない。3は縦長剥片を素材とし、右側辺下半に刃部調整を施している。表面には礫面を残している。4は縦剥ぎの剥片を素材とし、左側辺のみ刃部調整を施し、主要剥離面にはまったく加工を施していない。6は縦剥ぎの剥片を素材とし、左側辺部に両面から刃部調整を施している。7は横剥ぎの剥片を素材とし、主要剥離面側からブランディングをしバルブ調整を施している。一応、スクレーパーとしてあげているが、形態・加工技術等から考えてナイフ形石器とすることができる。8は2と同様に黒曜石のブレード状剥片を素材とし、左側辺部に刃部調整を施したものである。11は縦長剥片を素材とし、右側辺部に両面から刃部調整を施している。12は横剥ぎの剥片を素材とし、表面は全面加工を施し、左側面の刃部調整は両面から施している。14は横剥ぎの剥片を素材とし、主要剥離面に刃部調整を施している。打面部は折り取った後に頭部調整を施している。

C類 (9・18・22・23)

剥片の先端部に刃部調整を施したもので、刃部の形態はB類と大差はないが、C類の場合、素材が横長の剥片に限定され調整が刃部だけに施されていることからB類とわけて考えることにした。

9の刃部調整は剥片の先端部に両面から施されている。18は9と同様な刃部調整が施されている。22の刃部調整は主要剥離面側からのみ施され、23は9・18と同様の刃部調整である。25は横剥ぎの剥片を素材とし、打面調整を施し、つまみをつけている。刃部調整は両面から入念に施している。いわゆる縄文時代に普遍的な石匙⁽⁷⁾である。

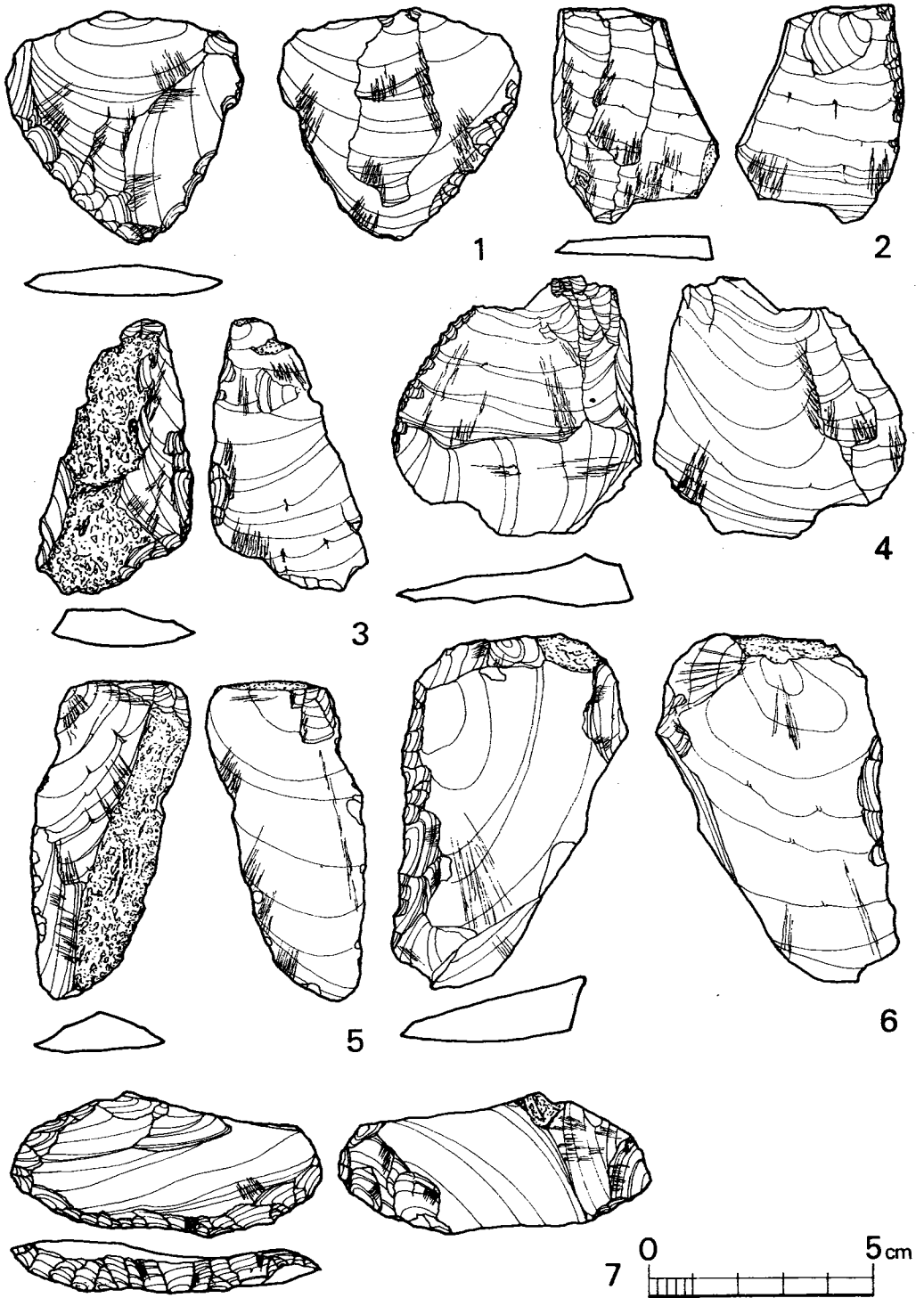


Fig. 375 大道端遺跡出土石器実測図 (VI) (縮尺2/3)

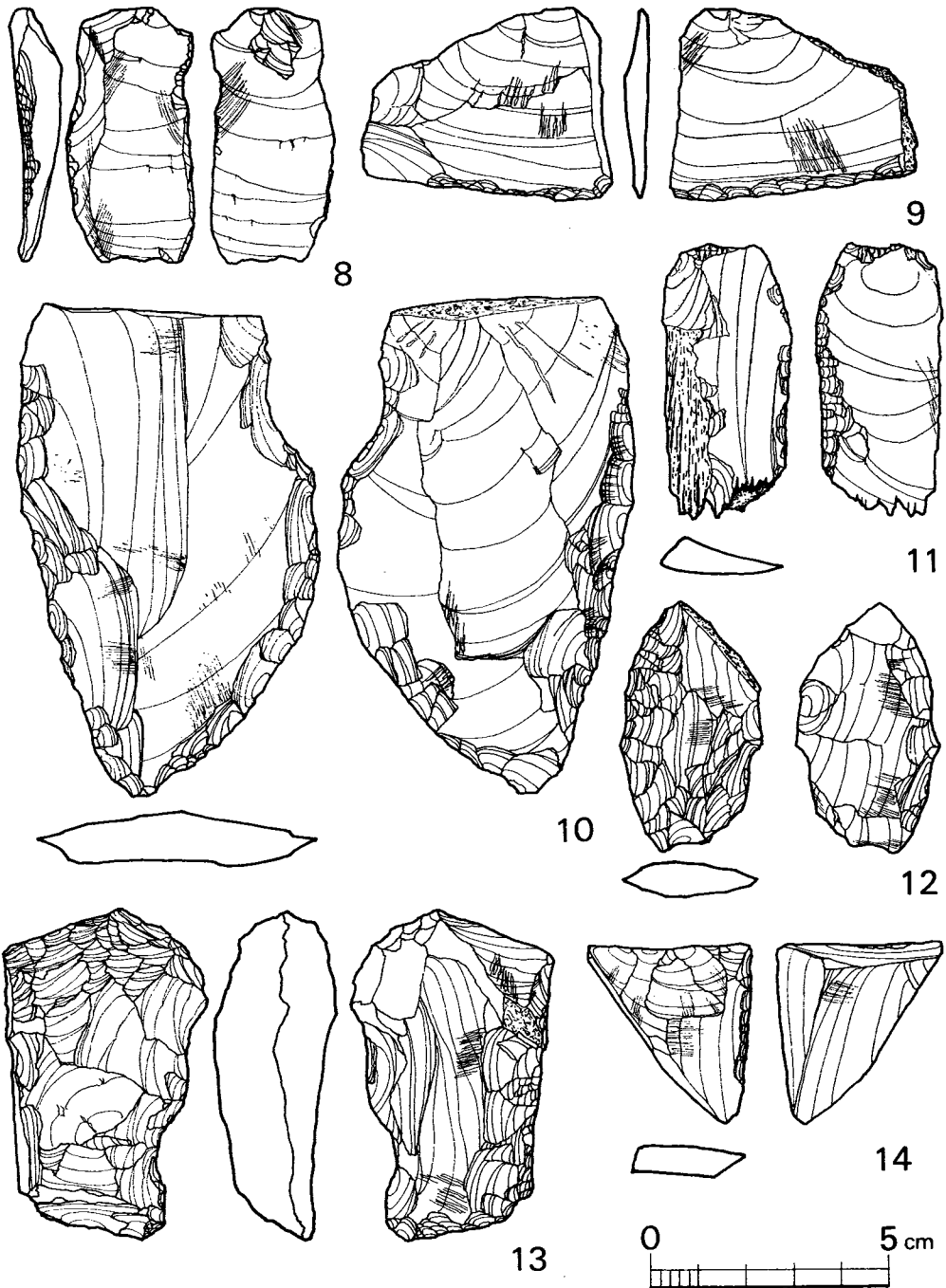


Fig. 376 大道端遺跡出土石器実測図 (VI) (縮尺2/3)

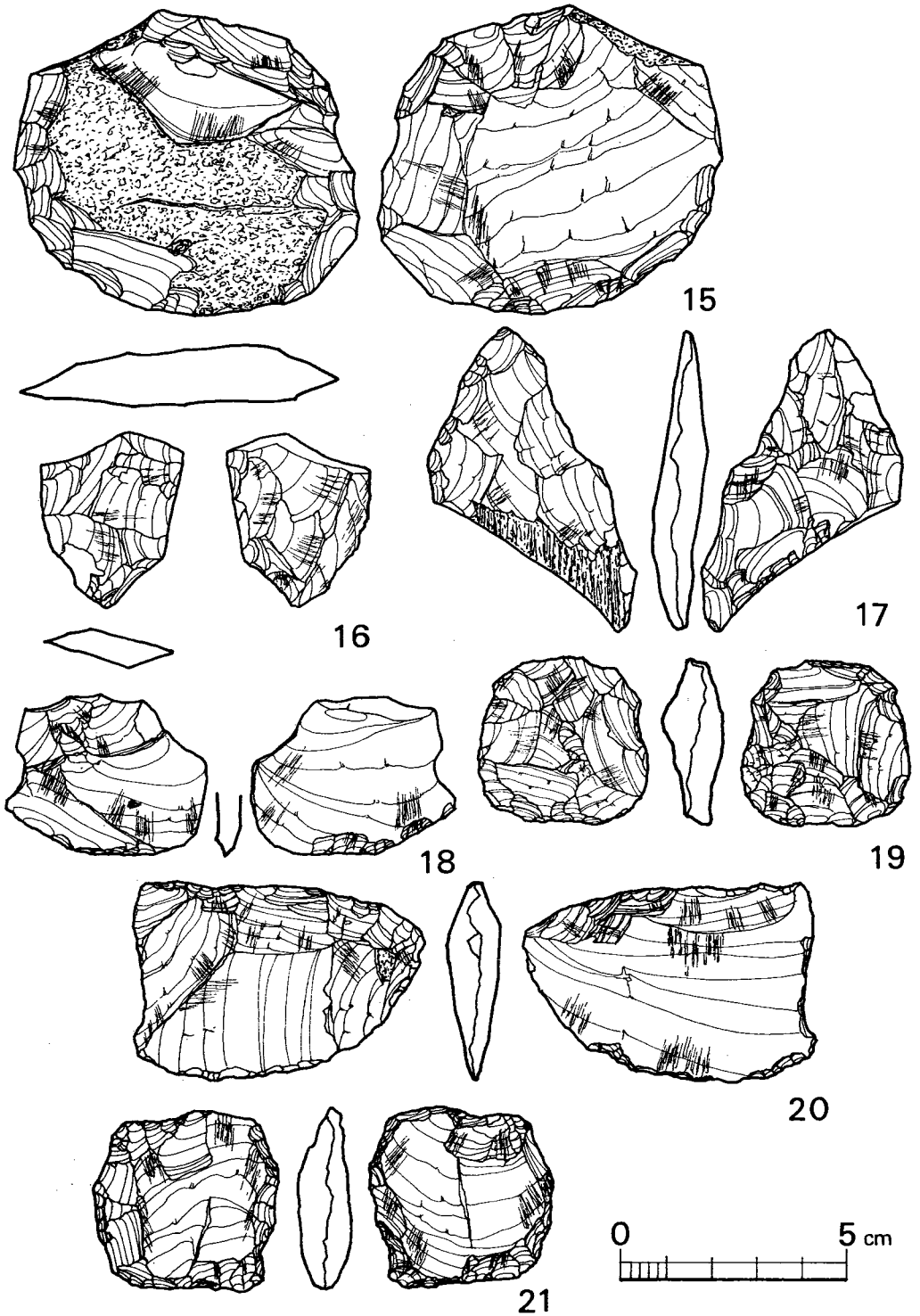


Fig. 377 大道端遺跡出土石器実測図 (Ⅷ) (縮尺2/3)

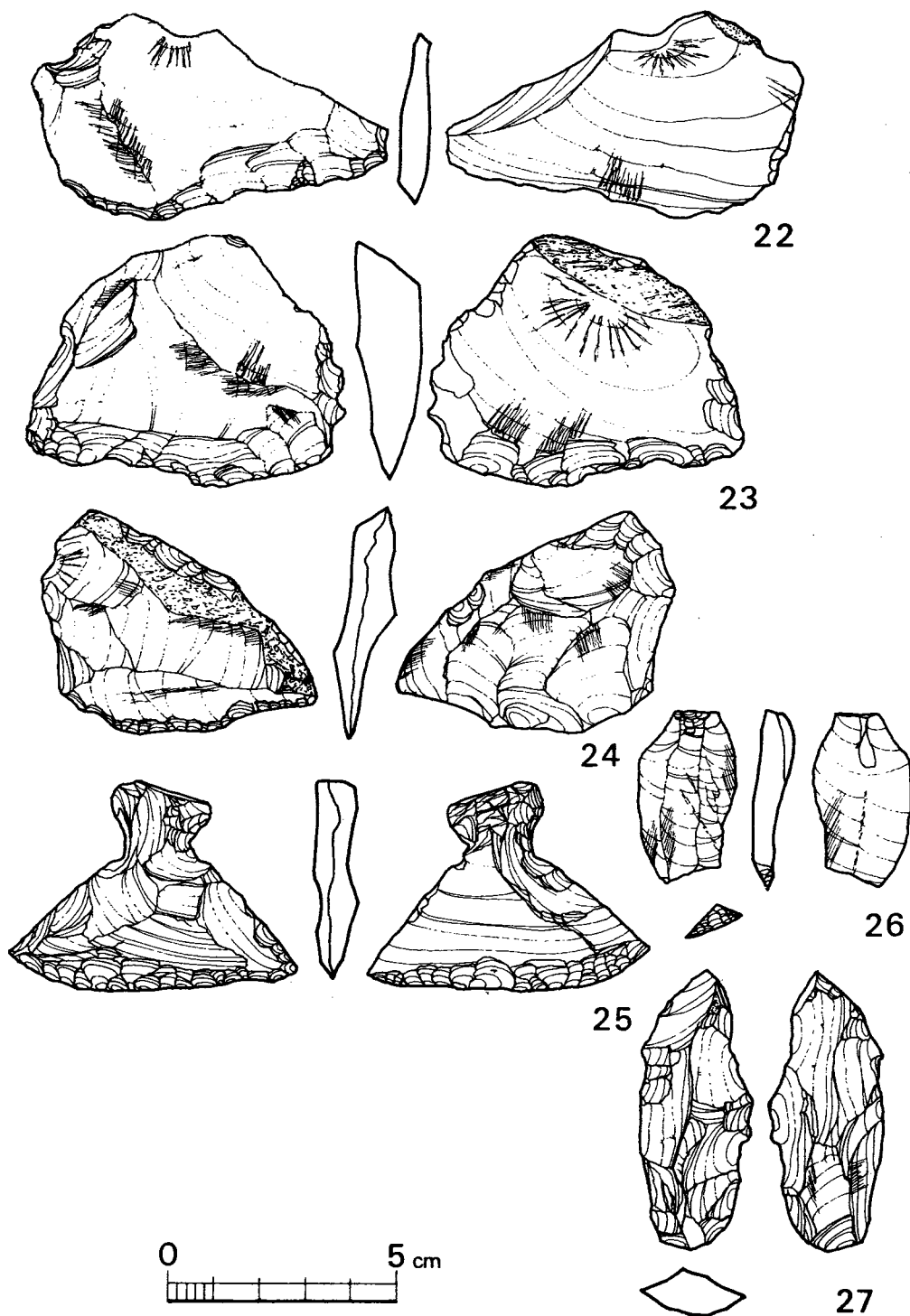


Fig. 378 大道端遺跡出土石器実測図 (Ⅹ) (縮尺2/3)

Tab. 112 スクレーパー一覧表

Fig	番号	器種	素材	素材 (cm)			刃部長 (cm)	二次加工の 状 態	刃部位置	重さ (g)	石 質	自然面	備 考
				最大長	最大幅	厚 さ							
Fig 375	1	Scraper	縦 剥 ぎ	5.2	5.2	0.6	4.1~4.3	刃部のみ両面	両 側 面	16.5	サヌカイト		
	2	Scraper	縦長剥片	4.8	3.6	0.5	2.6	刃部のみ片面	左 側 面	15.9	黒 曜 石	○	
	3	Scraper	縦長剥片	6.1	3.3	0.7	4.2	刃部のみ片面	右 側 面	17.7	サヌカイト	○	
	4	Scraper	縦 剥 ぎ	5.8	5.6	1.2	3.8	刃部のみ片面	左 側 面	29.5	サヌカイト		
	5	剥 片	縦長剥片	7.1	3.0	0.9			左側面使用	21.3	サヌカイト	○	使用痕有り
	6	Scraper	縦 剥 ぎ	7.9	5.0	1.1	6	刃部のみ片面	左 側 面	57.2	サヌカイト	○	
	7	Scraper	横 剥 ぎ	3.0	6.9	1.0	7~2.7	刃部のみ片面	両 側 面	24.8	サヌカイト	○	knife 形石器と考えられる
Fig 376	8	Scraper	縦長剥片	5.4	2.6	1.0	3.2	刃部のみ片面	左 側 面	9.8	黒 曜 石		
	9	Scraper	横長剥片	4.0	5.0	0.5	5	刃部のみ両面	先 端 部	16.1	サヌカイト		
	10	Scraper	縦長剥片	10.3	6.1	1.0	9.5~11.5	全 面 加 工	両 側 面	99.8	サヌカイト	○	
	11	Scraper	縦長剥片	5.9	2.6	0.7	4.5	刃部のみ両面	右 側 面	15.9	サヌカイト	○	
	12	Scraper	横 剥 ぎ	5.3	3.0	0.7	6~4.2	全 面 加 工	両 側 面	12.8	サヌカイト	○	
	13	Core	横 剥 ぎ	7.1	4.2	2.5				71.0	サヌカイト		
	14	Scraper	不定形剥片	3.7	3.4	0.6	3	刃部のみ片面	右 側 面	11.0	サヌカイト		
Fig 377	15	Scraper	縦 剥 ぎ	6.7	7.5	1.3	17	刃部のみ両面	全 周	85.4	サヌカイト	○	
	16	Scraper	横長剥片	現存 3.7	3.0	0.7	4.1~3.8	全 両 加 工	両 側 面	8.9	サヌカイト		point と考えられる
	17	Scraper	不定形剥片	6.7	3.9	1.0	4.1~7.6	全 面 加 工	両 側 面	22.4	サヌカイト	○	point 状
	18	Scraper	横長剥片	3.5	4.5	0.5	3	刃部のみ両面	先 端 部	6.7	サヌカイト		
	19	Core-scraper	不定形剥片	3.6	3.8	1.3	12.5	全 面 加 工	全 周	14.9	サヌカイト		core として使用
	20	Core-scraper	横長剥片	4.3	6.3	1.1	4.3~2.~6	刃部のみ両面	全 周	30.1	サヌカイト		
	21	Core-scraper	縦 剥 ぎ	4.0	4.1	1.1	10.7	刃部のみ両面	全 周	20.7	サヌカイト		
Fig 378	22	Core-scraper	横長剥片	4.6	7.5	0.7	7.5	刃部のみ片面	先 端 部	31.6	サヌカイト	○	
	23	Core-scraper	横長剥片	5.5	7.0	1.4	7.0+5.4	刃部のみ両面	先端一右側	55.9	サヌカイト	○	
	24	Core-scraper	縦長剥片	5.0	6.0	1.1	6.0+6.5	刃部のみ両面	両 側 面	23.2	サヌカイト	○	
	25	石 匙	縦 剥 ぎ	4.6	6.4	0.7	6.7	刃部のみ両面	先 端 部	21.8	サヌカイト		
	26	End-scraper	縦長剥片	3.8	2.1	0.7	1.3	刃部のみ片面	先 端 部	5.4	黒 曜 石		
	27	Core	不 定 形	6.2	2.5	1.0				18.3	サヌカイト	○	交互剥離

D類 (15・19・20・21)

刃部調整が剥片の全辺におよんでいるもので、円盤状ないし四角形をしているものをD類とした。

15は縦剥ぎの大形の剥片を用い、刃部調整は剥片をほぼ全周している。原石から最初に剥離された剥片を素材としている。19は本来石核として用いられたものが最終段階でスクレーパーとして使用されたものである。20は横剥ぎの剥片を素材とし、刃部調整が細かく全周している。21は縦剥ぎの剥片を素材とし、刃部調整は15と同様である。

エンドスクレーパー (Fig. 378—26)

黒曜石製のブレイド状剥片を素材とし、先端部に直角に近い角度で刃部調整を施している。

石核 (Fig. 376—13, Fig. 378—27)

13はサヌカイトを石材とし、あらゆる角度から剥片が取られている。27は両側辺部を打面とし、両面にゆるい角度で交互に剥離がされている。(平ノ内)

以上のことを踏まえた上で、若干の考察を小結のなかで述べたい。

小 結

前項に述べた石器について、若干の考察をまとめてみる。

1. 先土器時代の石器

先土器時代の石器はB区・C区にまたがって発見されており、小川をはさんでいるので同一時期、同一集団によって残されたものとするはできない。剥片尖頭器は熊本県石飛遺跡⁽⁸⁾でナイフ形石器・台形石器、佐賀県平沢良遺跡⁽⁹⁾でナイフ形石器・台形様石器とともに発見されており、二次調整加工技術の特徴から広義の意味でのナイフ形石器 (blunting-tool) の範疇に入るものであり、ナイフ形石器の歴史のなかで出現したものである。層位的な発掘事例としては、石飛・平沢良があげられ、共伴する遺物から先土器時代後半の所産と考えることができるが、blunting-tool の歴史とともに細石刃文化以前に消滅するものと考えられる。なお、今後その出現の時期が明らかにされていかなければならない石器である。(稲富)

2. 曽根型石核について

曽根型石核は曽根湖底遺跡で発見されたのに緒を発し、先土器時代、縄文時代の各期にわたって発見される息の長い石器であることが確かめられているが⁽¹⁰⁾、九州においては今のところ、長崎県の深掘遺跡⁽¹¹⁾と、この大道端遺跡のみである。発見例が少ないのは縄文時代石器研究が十分でないことと関係がある。九州地方においても今後類例が増加するものと思われる。

さて曽根型石核であるが、機能に関しては三つの説があげられている。石核説⁽¹²⁾・彫刻器説⁽¹³⁾・楔形石器説⁽¹⁴⁾がそれである。まず石核説であるが平坦な打面がないこと、石器に残された剝離面からみてこれより剝がされた剥片で作られたような石器がないこと、により細石核とするには躊躇する。大道端遺跡からは細石刃は一点も発見されていない。次に彫刻器説であるが、森島氏は「その機能点は明らかに両尖端と、側縁のエッジにあって、多くの刃こぼれを見ることができる」と述べられ、平坦彫刻器の一種と考えておられるのだが、側縁部に加工痕のある Fig. 371—9をばぶいて、側縁部に刃潰れのあるものはない。よって機能部はその両極にあるものと思われる。平坦な打面を持たないことと、紡錘形になることがこの石器の機能と密接に関係があるものと思われるが、両極の一端は磨滅しているものがあり (PL. 108・109)、

階段状剝離が認められることから押しつけることによって磨滅したのではなく、楔のような機能で、磨滅した部分を、加工を目的とするものに押しあて、相対する極へ打撃を加えて物を加工する用途に使われたものではないだろうか。(稲富)

3. 石鏃について

ここでは、(1)広義的な剝片鏃と、(2)異形局部磨製石鏃を若干まとめてみる。

(1) 広義的な剝片鏃

剝片鏃の名称は今日では広義に用いられている場合があり、そのため混乱をきたしている。

当遺跡においての石鏃の分類は、狭義的な剝片鏃、すなわち黒曜石を素材として用いて鈴桶型刃器技法⁽¹⁵⁾によるものを、いわゆる剝片鏃と考える。定義としては、素材となる剝片のときのカッティング・エッジを一部分または全部を加工の加えられないままの状態に残存させて鏃形に仕上げているもので、しかも裏面には主要な剝離面が認められることと、カッティング・エッジを残存させることが非常に特徴的であるとともに、同位層中に綺麗な剝ぎとりを施した打製石鏃と共伴することに基づくことである⁽¹⁶⁾。

形態的には、剝片によって若干の変化は見られるが、基本的には打製石鏃と大差はなく、基部に抉り込みのあるものとなないものに分類される。ここでは黒曜石を素材にしたもので技術的には鈴桶技法によるものを、いわゆる剝片鏃とした。また、素材にサヌカイトを使い、カッティング・エッジを残して使用された小ぶりの石鏃で、広い意味では剝片鏃の範疇にはいるものを広義的な剝片鏃と分けた。しかし、広義的な剝片鏃の名称では一般的でないので、ここでは類剝片鏃と仮称する。

類剝片鏃の技術的な裏付けは、石核の追及である。それを基にした製作工程の復原を試みたいと思う。(副島)

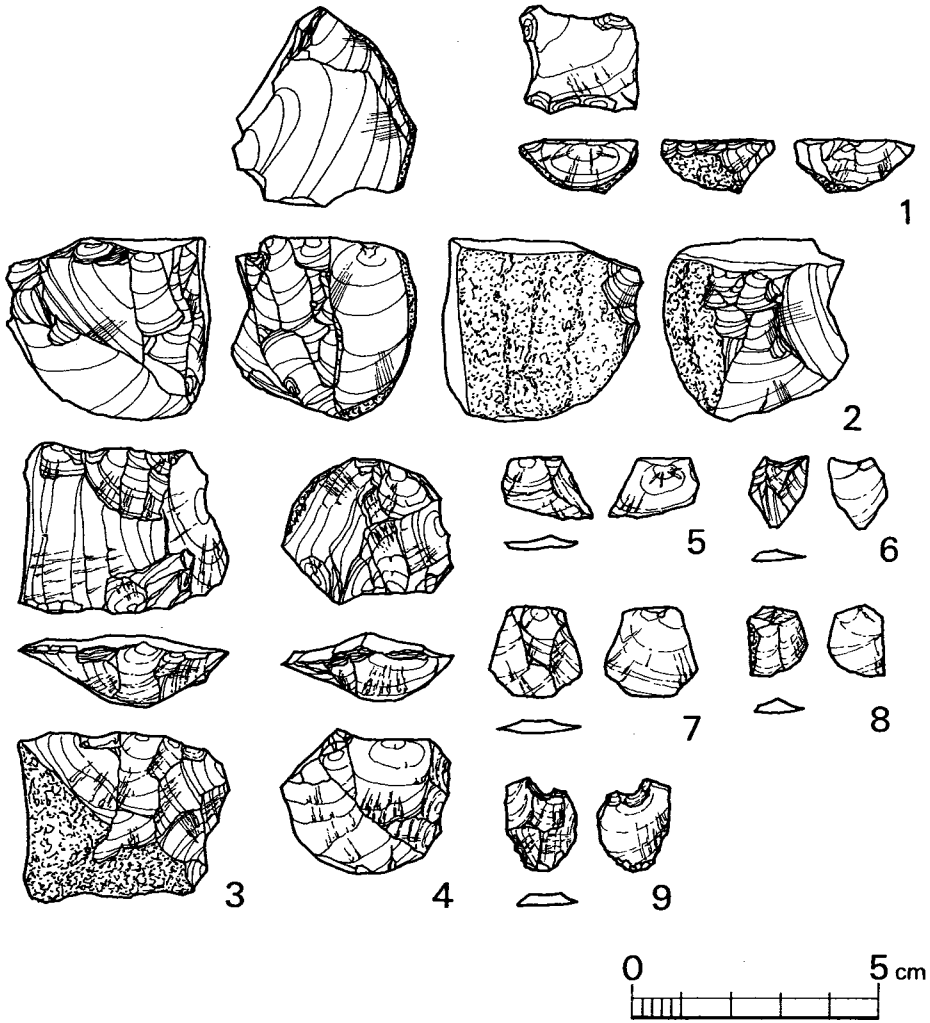


Fig. 379 大道端遺跡出土石器実測図 (X) (縮尺2/3)



Fig. 380 類剝片鏃技法復元図

まず、石核について述べる。

石核 (Fig. 379—1~4)

2は黒曜石の円磔を用いた鈴桶技法による石核である。1・3・4はサヌカイト製の石核で、1は小形の円磔を半割し剝離面をそのまま打面として用いる。3も1と同様に磔を半割したものである。4は打面に若干の調整を施している。これらの石核からは小形の不定形の剝片が剝離されている。

剝片 (Fig. 379—5~9)

5~9はサヌカイトの剝片である。9は剝片に若干の調整を加えた石鏃の未製品である。
(平ノ内)

復元過程

これらの石核が基礎的なヒントをあたえてくれた。すなわち、鈴桶技法以外の技法的復元が推定される。

類剝片鏃技法というものが生まれる要素として考えられる。

Fig. 380はその製作工程の模式図である。

完成品までなるためには第1~第3工程を経て、製品になる。

- ①サヌカイトの原石を選択することからはじまる。卵大の円磔を使用する。
- ②その円磔を半截する。半截した原石の上面から剝離を行なう(第1工程)。
- ③上面からの剝離によって、母岩は断面が紡錘状になるように、周辺から剝離を行う(Fig. 379—1・3・4)(第2工程)。
- ④四辺に出来た稜線を生かす様子上から剝離を行なう。剝片は不整形の剝片であるが小形で、形はそれぞれ類似する剝片が4個ずつ生まれる。(Fig. 10—5・6・7・8)(第3工程)
- ⑤剝離された不整形剝片は、打面上のバルブをカットして加工を調整する。そして基部に抉りを入れる。
- ⑥完成品となる。

この類剝片鏃技法の特徴は第1工程から第2工程まで、母岩の断面を紡錘状にするということとなる。

素材が大きければ、周辺から剝離する過程で稜線を多面化すればよいこととなる。

また、素材が円磔でなく角磔であっても半截後に母岩を断面紡錘状に形成すれば可能である。

以上が製作工程の復元である。一応の目安として、類剝片鏃技法として提唱するものである。大方の御教示を得たい。(副島)

(2) 異形局部磨製石鏃

九州地方での出土例は7ヶ所が知られている。

1. 泉福寺洞穴 (長崎県佐世保市瀬戸越町)⁽¹⁷⁾
2. 岡北側台地 (長崎県平戸市志々伎)⁽¹⁸⁾
3. 深原遺跡 (福岡県春日市深原)⁽¹⁹⁾
4. 蒲田遺跡 (福岡県福岡市東区蒲田)⁽²⁰⁾
5. 法華原遺跡 (福岡県浮羽郡吉井町法華原)⁽²¹⁾
6. 早水台遺跡 (大分県速見郡日出町早水台)⁽²²⁾
7. 大道端遺跡 (福岡県山門郡瀬高町大道端)

俗にトロトロ石器と称されるもので、これについて江坂輝弥氏はつぎのように述べている。

「楕円押捺文出現前の無文土器に若干の山形押捺文を伴う時期に鏃形石鏃を大型にしたような長さ5cm内外の一見石槍状の石器が出土するが、これも先端が磨滅したようにまるく磨研されている。そしてこの大型品もチャート製である」⁽²³⁾

この見解は卓越しており、時期的に九州においてもほぼあてはまって考えられる。

形態的にも二つに大別できる。

タイプⅠ……(蒲田・深原・岡)

タイプⅡ……(法華原・泉福寺・深原・大道端)

タイプⅠ—細長いものと、タイプⅡ—ずんぐりむっくりした巾広いもの。両方とも断面はレンズ状を呈し、先端部を磨滅させている。石質はチャート製であるが、2の平戸市岡から出土したものは頁岩製とあるが、実見していないため、問題である。

いわゆるトロトロ石器の特徴は先端部と脚部である (Fig. 382)。

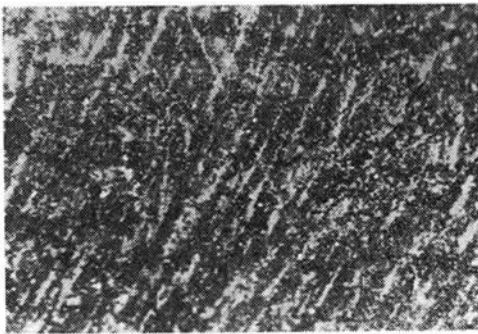


Fig. 382 研磨部分の拡大写真

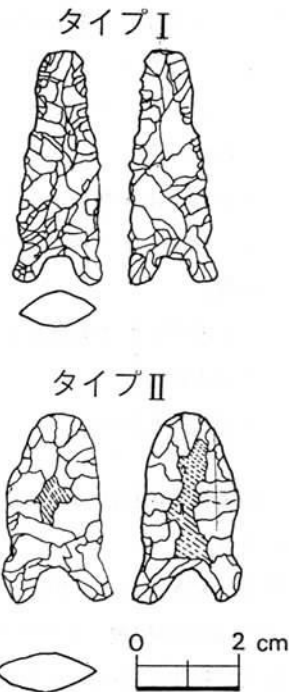


Fig. 381 異形局部磨製石鏃のタイプ

層位的に発見されたのは泉福寺洞穴と深原遺跡である。縄文早期の押型文土器の時代である。分類することによって、新旧関係を導き出すことが可能ではないだろうか。

今後の資料の増加をまち、今後の課題とする。今回は分類だけにとどめた。大方の御教示を仰ぎたい。(副島)

4. スクレーパーについて

本遺跡で検出されたスクレーパーは、素材が多彩なことが特徴である。そのため形態で分類を行なうと、素材の関係で個々の名称を必要とすることになる。今回はその名称の氾濫を避けるために刃部調整を施した石器はすべてスクレーパーの範疇に入れることにした。

これらの石器の素材は一定の技術のもとで作られたものでなく、礫から剥離された剥片はすべて、形に関係なくスクレーパーおよび他の石器として加工されたものである。スクレーパーの場合は剥片の側辺部に両面又は片面から刃部調整を施したものが大半である。このような石器を細かく分類するのはあまり意味のあることとは思えないので、刃部の位置及び状態で分類した。

今までこのような二次加工を施した石器についての研究が進んでいないこともあって、各遺跡で数多く検出された石器にも当遺跡と同様な資料が眠っているものと思われる。(平ノ内)

5. 総括

大道端の石器では次のようなことがあげられる。

1. 先土器時代の石器が検出されたこと
2. 曾根型石核の範疇にはいる一群が検出されたこと
3. 石鏃については、剥片鏃の問題点を出し、サヌカイト製による剥片鏃すなわち広義的な剥片鏃の工作過程を復元し、類剥片鏃技法として提唱する。
4. 異形局部磨製石鏃の出土を見た。
5. スクレーパーについては素材が多彩なこと、すなわち剥片を剥ぎとる技術的裏付けがなされていないことである。
6. 蛤刃の石斧の割合が多いこと。

層位的な裏付けがなされていないので、時期的には、不明点が多いが、一般的に縄文時代中期から後期を主体とする様相をもっている。

個々の項目については多くの問題をもつが、今回若干の考えを述べたことをおことわりして問題の提起としたい。大方の御批判を仰ぎたい。(副島)

注

- (1) 藤森栄一「諏訪湖底曽根遺跡」『信濃考古』No.24 長野県考古学会、1968
- (2) 森島稔「曽根型彫器考」『長野県考古学会誌』121
- (3) 岡村道雄「ピエス・エスキーユについて」『東北考古学の諸問題』1976
- (4) 一般にスクレーパーと称する場合、石堤・皮剥ぎ・搔器・二次加工のある石器が含まれている。しかし、それらはほとんど形態等で分類されていることが多い。ここでは、これらすべての石器の総称という意味で、スクレーパーと呼ぶことにする。
- (5) 当遺跡では、個々の形態に関係なく、明らかに刃部調整を施しているものをスクレーパーと考えている。素材の異なることによって、形態が異なることは当然であるが、刃部の状態・形態には共通性があり、これを分類の規準としている。
- (6) Fig. 377—16 はポイントの先端部が折れたものと思われる。
- (7) 「城山遺跡群発掘調査報告」夜須町教育委員会、1973 のスクレーパーの分類のなかでは、つまみを有するものは石匙として分類されており、刃部の調整および形態は分類の規準とされていないが、ここでは注(4)・(5)により、石匙として特別に考えないことにする。
- (8) 長野真一・池崎讓二・湯田保弘「水俣市石飛分校遺跡調査概要」『もぐら』第8号、鹿児島県立出水高等学校考古学部
 芹沢長介編『最古の狩人たち』古代史発掘1 講談社 1974
 『もぐら』第8号では、
 「大型の刃器状剥片に、側面に調文痕を加えたナイフ形石器である」
 と表現しており、実測図が提示されていないが、『最古の狩人たち』の写真(43頁)の剥片尖頭器であると思われる。
- (9) 杉原莊介・戸沢充則「佐賀県伊万里市平沢良の石器文化」『駿台史学』12号 明治大学文学部 1962
- (10) 前掲、注(3)
- (11) 内藤芳篤編『深掘遺跡』人類学考古学研究報告第1号 長崎大学医学部解剖学第二教室、1967
 報告によれば、縄文後期の包含層と、晩期の包含層からそれぞれ出土しており、石核としてあつかわれている。
- (12) 滝沢浩「本州における細石刃文化の再検討」『物質文化』第3号 物質文化研究会 1964
- (13) 前掲、注(2)
- (14) 前掲、注(3)
- (15) 杉原莊介・戸沢充則・横田義章「九州における特殊な刃器技法」『考古学雑誌』51—3、1961
- (16) 剥片鎌の定義については、これといった規定がない。山崎純男氏は
 「主要剥離面および他の剥離面を残し先端あるいは基部の一部に細部加工をした石鎌を剥片鎌とす

る」(『熊本史学』第40号)とされている。また、縦長剥片についても同様の残存的技術としてみられている。しかしながら、この定義の範疇にはいない一群の剥片鏃がある。

- (17) 麻生優・白石浩之「泉福寺洞穴の第4次調査」『考古学ジャーナル』No.101、1975
押型文土器層の下部から出土している。
- (18) 樋口隆康・釣田正哉「平戸の先史文化」『平戸学術調査報告』京都大学平戸学術調査団、1950
これによると石槍頭として説明されており、石質は頁岩で、表採された資料である。
- (19) 木下修「深原遺跡の調査」『昭和48年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報』福岡県教育委員会、1975
これによると3点出土している。時期は押型文土器と共伴している。
- (20) 飛高憲雄・二宮忠司他『蒲田遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第33集、福岡市教育委員会、1975
この中で、1点出土している。E-I層(表土)から出土したもの(Fig. 10-④)で、異形磨製石鏃として気付いておられず、石鏃分類でⅥ型に分けられている。内容からいっても他の石鏃と相違すると思われる。押型文土器も採集されているので、ほぼ時期がおさえられる。
- (21) 田中幸夫氏の採集資料である。出土した遺跡は縄文早期の押型文土器が多数検出されており、金関丈夫氏等によって昭和25年に発掘調査されている。石質はチャートである。
- (22) 木下修の深原遺跡の中に記載されているが、早水台の報告書のなかにはそれらしきものはみあたらない。
- (23) 『史学雑誌』72-5

中部地方・尾張地方のものについては、

安達厚三「織田井戸遺跡発掘調査報告付総濠遺跡発見の異形部分磨製石器」『いちのみや考古』No. 6、1965「異形部分磨製石器について―美濃、尾張地方発見例を中心として」『いちのみや考古』No. 9、1966を参照。

同氏は、

「瀬戸内・九州など西日本では小形のものが多く、地域によって若干形態差を示す。時期的には押型文土器終末期に所産する」

と述べている。このことは、とりもなおさず、九州においての地域差がでてくるので、時期的には上限は押型文土器以前に位置付けられるのではないだろうか。

追記

九州地方での異形局部磨製石鏃の類例が増加しつつある。稿了後、大分県ヤトコロ遺跡と同県久住町オドリ畑から出土していると聞いている。ヤトコロ遺跡については、近日中に報告書が刊行されるとのことである。

異形局部磨製石鏃は、一般的に早期包含層から出土し、石質はチャートで、先端部は磨かれて丸くなっている、といえよう。

大道端遺跡出土の石器 —その2—

ここでは前項で扱えなかった石庖丁・石錘・石斧をとりあげるが、いずれも遺構に伴わず表採品に近いので一部を除いて詳細な説明を省き、表にまとめることとした。

これらの石器のうち、Fig. 385—4 の石錘と Fig. 384—1 の石斧については若干の説明を加えておきたい。この石錘は両面とも中央が凹み、本来凹石として作られたものと思われるが、のちに石錘として使用されたと考えられる。上・下端の凹部は側面の擦痕より後に作りだされたものである。Fig. 384—1 の石斧は節理面で折れており、本来の石斧としての刃部とは反対の側（折れ部）に打撃を加えて刃部状に作っているのが特徴である（PL. 124・125）。

なお、石器の項に関しては、横田義章氏（九州歴史資料館）の指導・助言をいただいた。深く感謝の意を表します。（関）

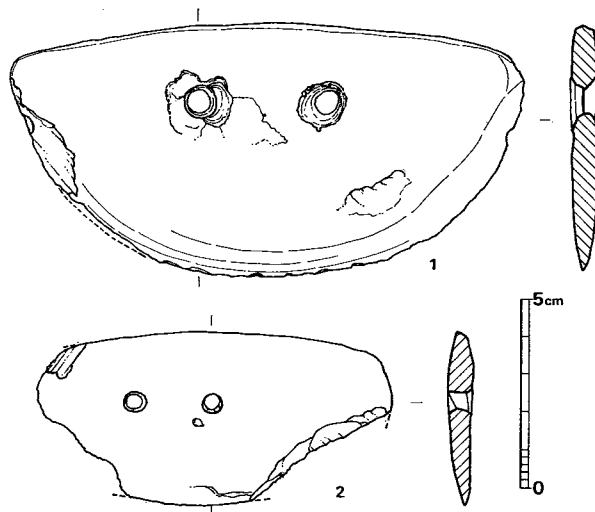


Fig. 383 大道端遺跡出土石器実測図（Ⅹ）（縮尺1/2）

Tab. 113 石庖丁計測表（単位 cm）

番号	長さ × 幅 × 厚さ	刃部の長さ	穿孔	孔径	石質	研磨	備考
1	13.6 × 6.8 × 0.7	18.4	両面	0.6, 0.6	片岩質	全面	103.6g
2	9.4 × 4.6 × 0.7	3.2	両面	0.6, 0.5	片岩質	全面	39.3g+

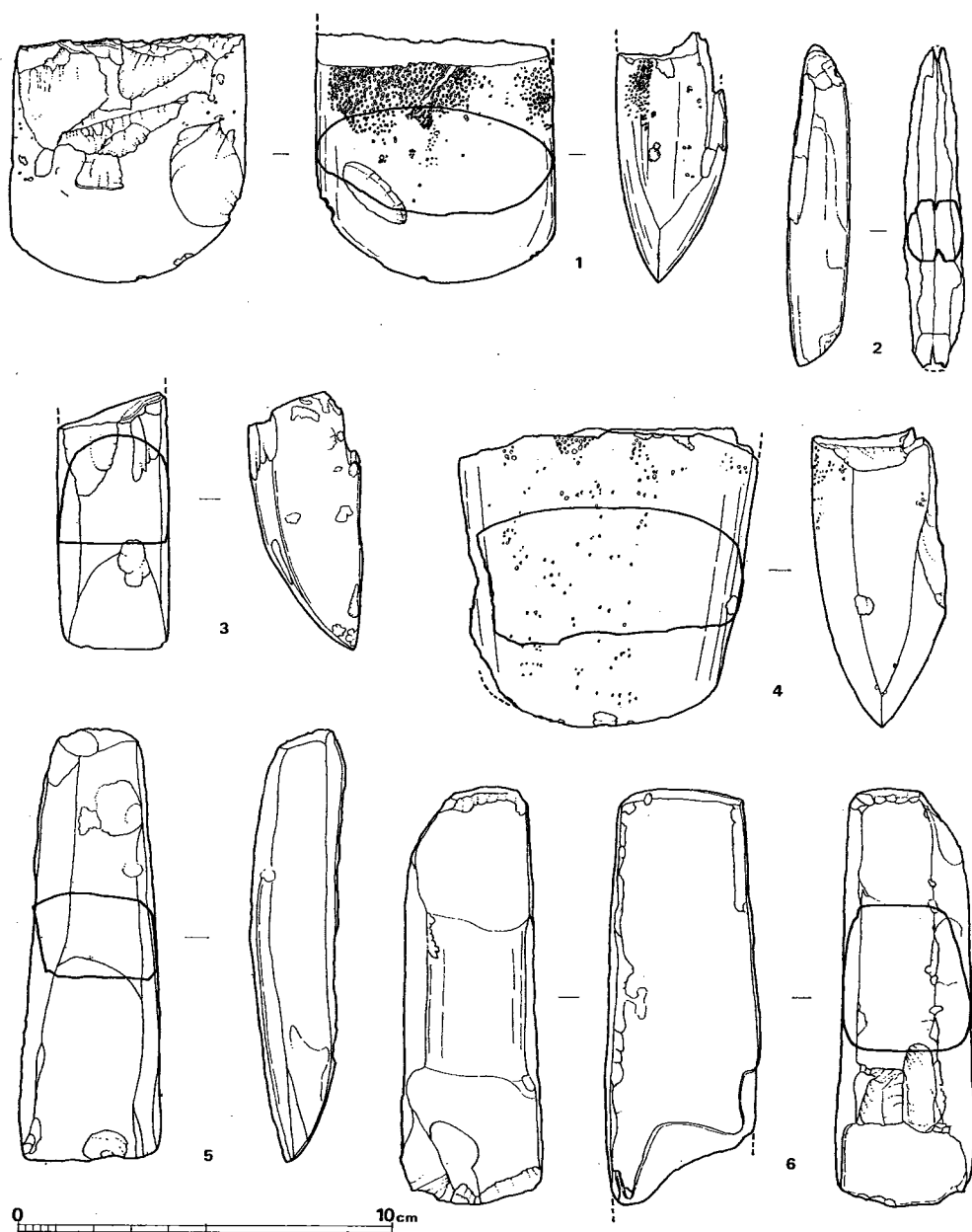


Fig. 384 大道端遺跡出土石器実測図 (XI) (縮尺1/2)

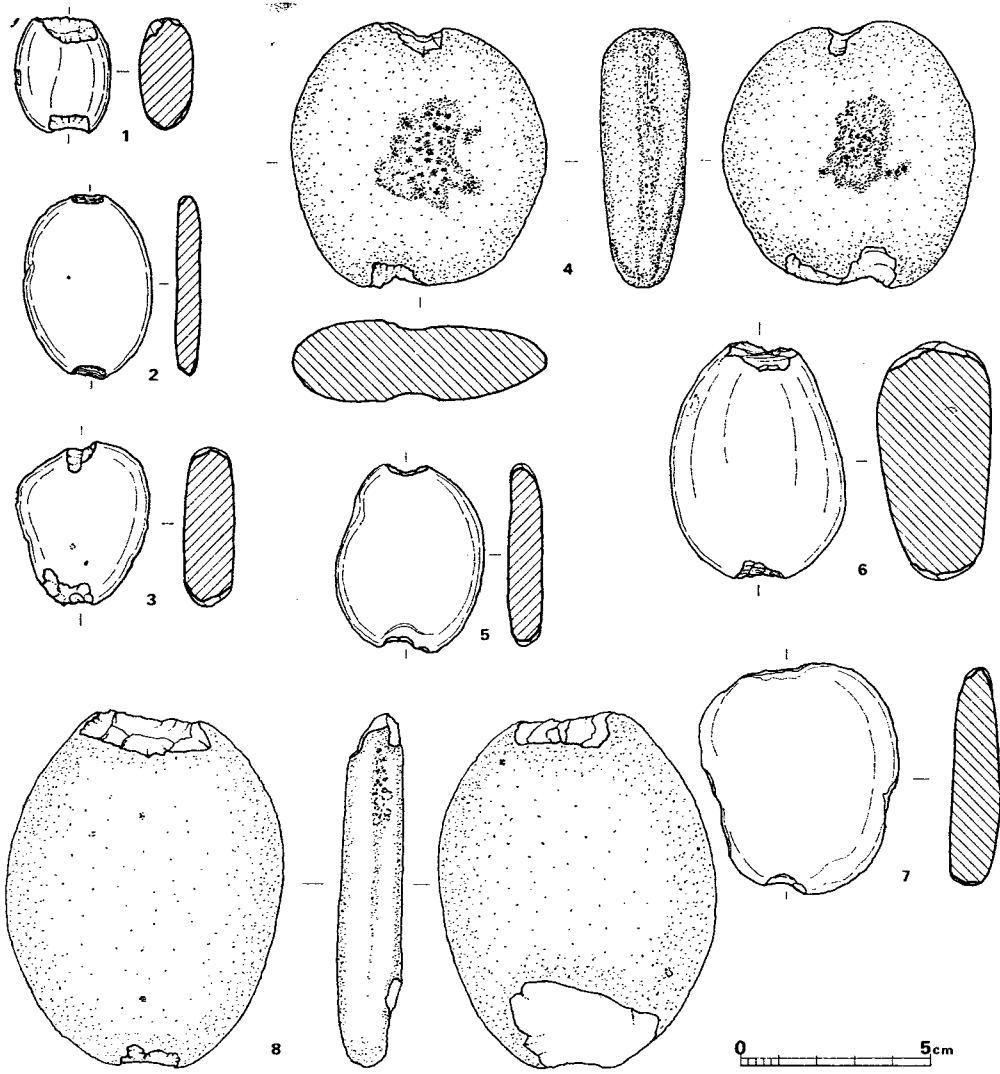


Fig. 385 大道端遺跡出土石器実測図 (XII) (縮尺1/2)

Tab. 114 石斧および石鑿計測表

番号	長さ × 幅 × 厚さ cm	刃部の長さ cm	敲 打	研 磨	重 さ g	石 質	備 考
1	6.5 × 6.4 × 2.9	7.6	有 り	全 面	176.0+		
2	8.6 × 1.5 × 1.6	0.6		刃部を含 む周のみ	33.2	砂 岩	
3	6.9 × 2.9 × 3.0	2.6		全 面	98.0+	砂 岩	
4	8.0 × 8.0 × 3.5	5.5	有 り	全 面	340.0		
5	11.6 × $\begin{matrix} 2.4(\text{基部}) \\ 3.8(\text{刃部}) \end{matrix}$ × 2.3	3.5		一 部	157.6		
6	11.3 × 3.5 × 4.2			全 面	286.0	砂 岩	

Tab. 115 石 錘 計 測 表

番号	長さ × 幅 × 厚さ cm	重 さ g	石 質	備 考
1	3.1 × 2.5 × 1.4	16.0		
2	4.8 × 3.4 × 0.6	57.5		
3	4.3 × 3.5 × 1.35	30.0		
4	4.8 × 3.9 × 0.9	16.2	片岩質	
5	7.0 × 6.75 × 2.2	140.0		
6	6.0 × 4.6 × 3.0	112.2		
7	6.2 × 5.3 × 1.3	57.3	片岩質	
8	9.4 × 7.3 × 1.7	169.5	安山岩	

2. 縄文式土器

宮内克己

田中良之

本遺跡からは縄文時代に属する遺物も相当量出土している。本項ではそのうち土器についての説明を行うが、いずれも二次堆積層よりの出土であり、保存もきわめて悪く、層序関係などはまったく不明である。したがって本報告では、本遺跡出土縄文式土器を、a 轟・曾畑式系土器、b 阿高式系土器、c 磨消縄文系土器、d 御領式系土器、e 底部の5群に大別し、従来設定されている型式⁽⁴⁾に基づいて分類することとした。分類にあたって、型式概念を拡大解釈した気味もあるが、あくまでも所属時期に重きを置き、様式として分類した結果であることを明記しておきたい。

a 轟・曾畑式系土器 (Fig.386、PL. 126)

1は表裏に細かい貝殻条痕を有し、灰褐色を呈するもので、後期中葉以降の粗製土器にも貝殻による調整を行なうものがみられるものの、後期のそれはキメが粗いことから区別されるものと考え、早期末の轟A式土器に比定したが、ただ1点のみの出土なので疑問も残る。2も同様に疑問の残る土器である。やや隆起する口縁部にヘラ描き沈線による幾何学文を施したもので、いちおう前期前半の曾畑式土器として扱ったが、文様構成は曾畑式土器本来のものとはいえず、むしろ出水式土器のある種の文様の方に類似している。しかし、出水式土器ならば外反させて区切った口縁部文様帯の部分と思われるが、同型式の文様帯にしては幅広であり、器壁もやや薄いことから、出水式土器の範疇にも入れ難い。したがって、本報告では曾畑式土器

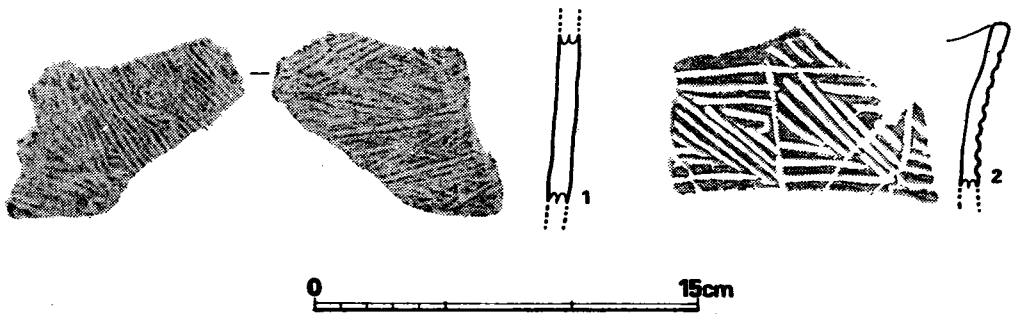


Fig. 386 轟・曾畑式系土器実測図 (縮尺1/3)

として扱ったが、1とともに今後の検討を要する土器である。暗褐色を呈し、滑石は含まない。

b 阿高式系土器 (Fig. 387~391)

阿高式土器には、並木式土器・阿高式土器・南福寺式土器・出水式土器・御手洗式A土器が含まれ、編年的には並木・阿高式土器が中期に、南福寺式~御手洗A式土器は後期に位置づけられる⁽²⁾。本遺跡では並木式土器はみられないものの、阿高式土器以降の各型式の土器が出土している。以下、各型式ごとに記述していく。

阿高式土器 (Fig. 387-1~5, PL. 126)

1は横位の凹線文を有する土器で、波状の口縁を呈し、裏面にはへら削りを行なう。2は凹ませた口縁下に2条の凹線を施し、その上位に三角状の凹点列を配する。それ以下にも文様が展開するようだが、小片であるために明らかでない。口唇部にはへら先による刻目を有する。3は凸字形に隆起させた口縁部にそって凹線を施したものである。4も口縁下にやや浅い凹線文を施す。5は口縁下に1条の凹線を施して文様帯を設け、その中にはほぼ円形の凹点文を2列に配する。

これらはいずれも滑石粉末を多量に混入させ、赤褐色を呈する深鉢形土器である。1~4は断面U字形の凹線文を有しているものの、凹線はへらによるものでやや狭目であり、文様も直線的で、施文もおそらくは口縁周辺に集約されるものであろう。5は、あるいは次に述べる南福寺式土器に下る可能性もあるが、後期前葉前半の中津式土器ともなって出土した福岡県糸島郡志摩町天神山貝塚の阿高式系土器の凹点文が、へらもしくは爪先によるくずれたものであることに比して、本例は断面U字形でほぼ円形であることから阿高式土器の範疇に入れ、1~4とともに中期後葉~終末の所産であると考えたい。

南福寺式土器 (Fig. 387-6~18, PL. 127)

口縁部付近にへらによる直線的な凹線をもつ土器を南福寺式土器として扱った。同式は瀬戸内地方の中津式土器と併行関係にあることが確認されているので⁽³⁾、後期前葉前半に位置づけられる。

6は肥厚させた口縁部文様帯に、へらによる斜行凹線文を有する。7は外反し隆起する口縁部を有し、内面には屈曲部に稜線が入る。凹線によって区切られた文様帯に「く」字状の凹線文を施す。8も凹線によって区切った文様帯に凹線文を有するが、9は丸く外反する口縁部に

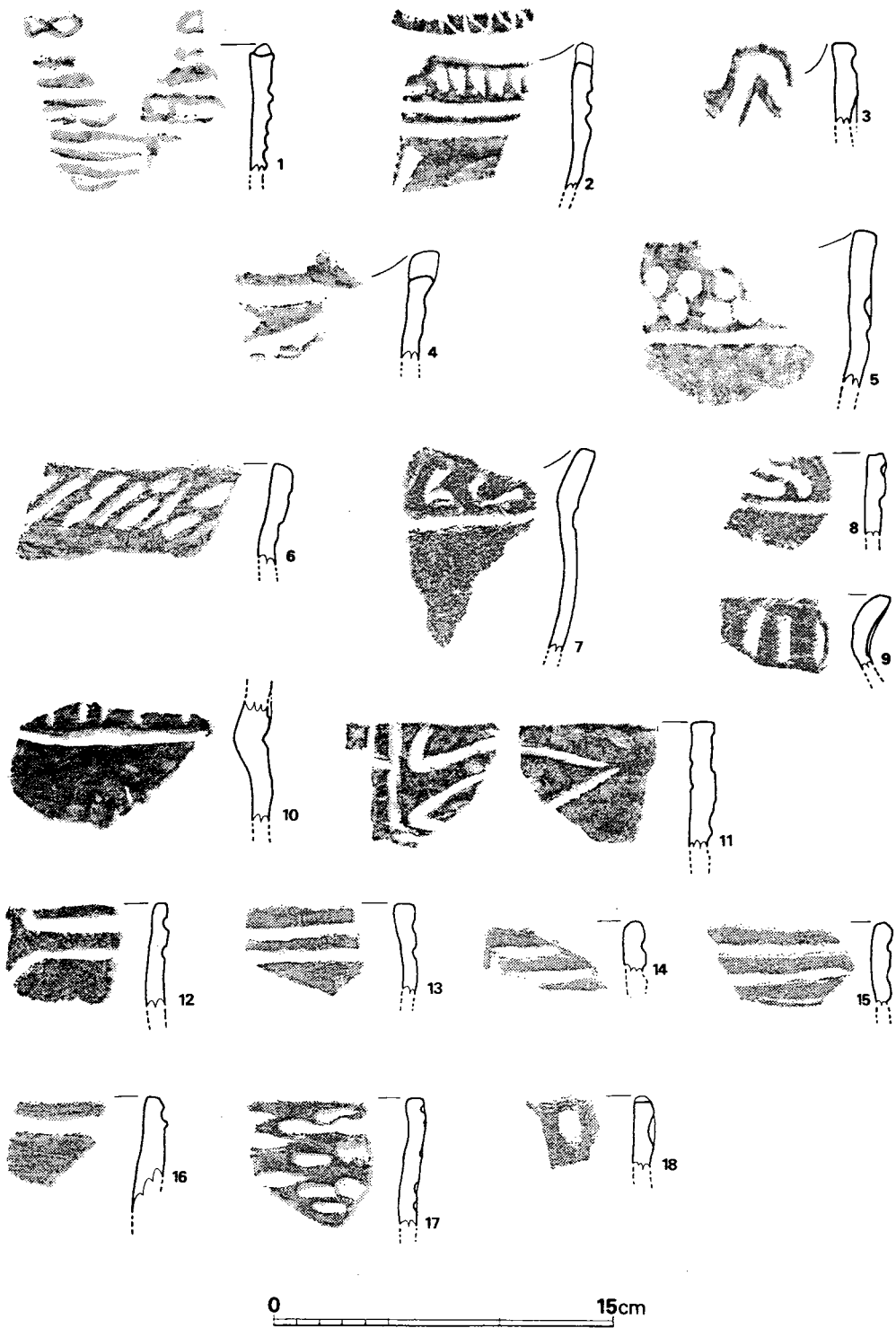


Fig. 387 阿高式系土器実測図(1) (縮尺1/3)

縦位の凹線文を施す。10は口縁端を欠くが、凹線で区切った文様帯に縦位の凹線を施文する。11は縦位の凹線2本と斜位の凹線文を有するが、全体の文様構成は不明である。裏面にもヘラ先による施文がみられる。12～15は平行凹線文を有する土器であるが、12・14のように途中で変化するものもみられる。16は口縁直下に一条の凹線を有する。17はヘラによって左から右方向へと押し気味に凹点文を施し、18は口縁直下に凹点文を有する。

以上、南福寺式土器について記した。いずれも赤褐色を呈する深鉢形土器と思われるが、阿高式系土器の特徴でもある滑石粉末を含む土器は、このうち8・11・12～15・18である。また、なかには従来の南福寺式土器の概念から外れたものもみられるが、前述したように、後期前葉前半の阿高式系土器という意味で、本型式の中に含めた。これは出水式以下も同様である。

出水式土器 (Fig. 388, PL. 128)

口縁部文様帯にヘラ先による直線的な沈線文を施したもの、およびそれにとりなり突帯(隆帯)文土器を出水式土器として扱った。同型式は後続の御手洗A式土器が後期中葉前半の鐘ヶ崎土器に共伴することから⁽⁴⁾、前葉後半に比定される。

1は沈線で区切った文様帯に、縦位2本、横位3本の沈線を有するが、前者を中心に後者が左右に展開するものと思われる。2・3はともに刺突文と沈線文を組合わせたものであるが、2がわずかに外反させた口縁部を凹線で区切るのに対して、3は口縁部を肥厚させて文様帯を作り出し、口唇部に刻目を有する点が異なる。これらは1と同じく左右対称に展開する文様構成であると思われるが、それぞれ片半を欠く。4は肥厚させて文様帯を作り出し、やや太めの沈線で復線山形文を施し、5は横位の沈線と斜行する沈線を組合せる。6・7は口縁部を肥厚させて文様帯を作出するが、7は明瞭な段を形成しない。6は横位の沈線文を有し、7は3列の斜行沈線文による綾杉文をなす。8も口縁部を肥厚させて沈線文を施すが、口唇部にも刻目を有する。9は口縁端をわずかに欠くが、沈線で区切った文様帯に横位と斜位の沈線文を有する。口縁はわずかに外反し、内面に稜線が入るが文様帯を区切る沈線とは対応しない。10・11は沈線や肥厚、外反させるなどの文様帯の作出をみない土器で、10は斜行沈線を、11は横位と斜位の沈線文を有し、11は口縁下に1孔を穿つ。12は外反する口縁部に横位の沈線で文様帯を区切り、斜行沈線と刺突文を施すが、沈線は浅く細い。13～17はいずれも文様帯を作出しないもので、13～16は刺突文や綾杉文を中心に左右に平行沈線文が展開すると思われるが、17は2本の平行沈線と2列の刺突文列で逆三角形の文様を構成する。13は口唇部に刻目を有し、16は裏面をヘラ削りしているが、この16の綾杉文をなす斜行沈線は細くて短く、後述する御手洗A式のものに似る。18も文様帯を作出せず、口縁下に刺突文と沈線文を有するが、全体の文様構成は不明である。19・20は口縁部に隆帯文を有する土器で、19は逆三角形に粘土紐を貼り付けて2列の刺突文列を羽状に施し、20は渦巻状に貼り付けるが外側は一部剥落する。また19の

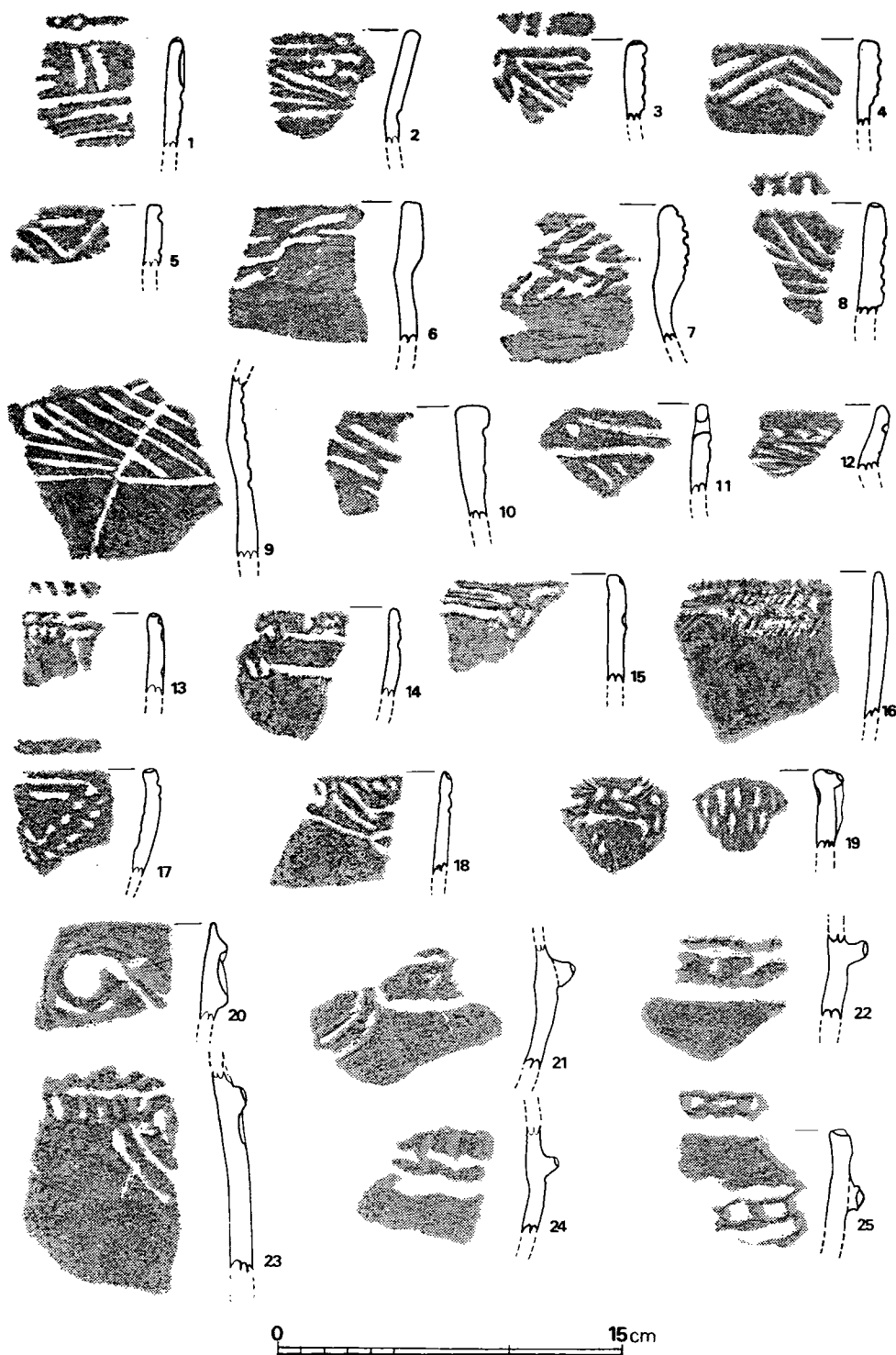


Fig. 388 阿高式系土器実測図(Ⅱ) (縮尺1/3)

裏面には2列の短沈線文を有するが、これは後出の御手洗A式土器に多くみられるものである。そして21～25は突帯を有する土器である。21は突帯上に縦長の刻目を施し、その下に弧状の沈線文を描くが、22では突帯がとぎれて沈綿状となる。23は突帯上に丸い刻目を有し、その上に縦位の沈線文を有する。24は突帯上に斜めに刻目を施し、その上位に刺突文を有する。25は突帯上と口唇部に刻目を有するが、突帯上のは丸く大きい。

以上、出水式土器について記してきた。これらはいずれも深鉢形をなすものと思われるが、滑石を混入させるのは4のみである。焼成はおおむね赤褐色を呈するが、13～19は灰褐色に近くなる。13～19は器壁が薄く文様帯も作り出さず、胎土・焼成ともに御手洗A式土器に類似する。とくに16・19は施文からみても同型式にきわめて似ており、これらが出水式土器のあるものから御手洗A式土器へと移行する過程にあるものと考えられる。また突帯文土器は阿高式土器から出水式土器までみられ、主として突帯と口縁部の間に各型式の文様が施文されるのだが、本遺跡のそれは有文の21・22・23や24をみても沈線・刺突文のみであり、他は無文であることから出水式土器とみてさしつかえないだろう。

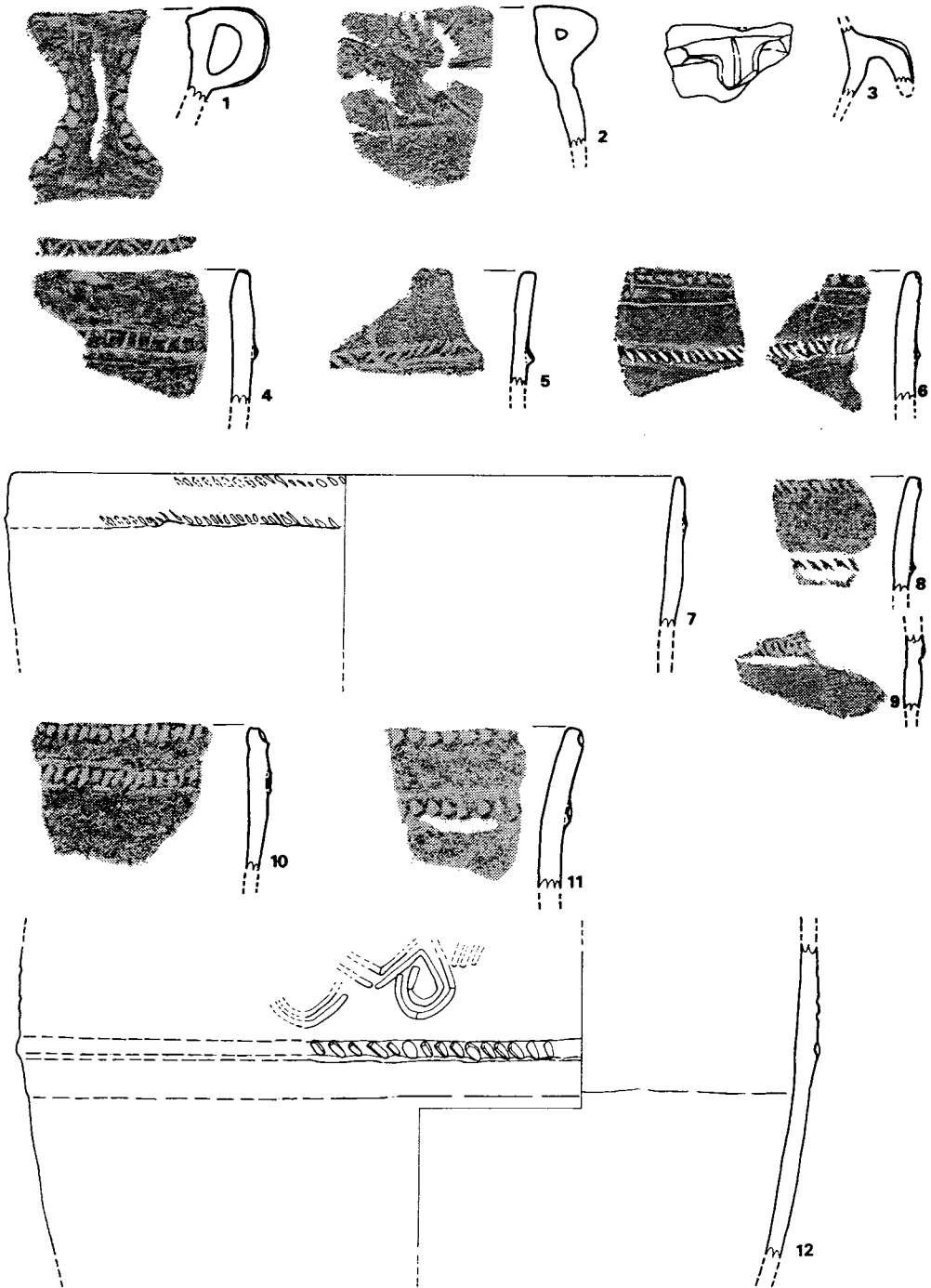
把手 (Fig. 389—1～3, PL. 127)

3点ではあるが、南福寺～出水式土器にともなうと思われる把手の出土をみている。いずれも赤褐色を呈するが、滑石は混入しない。1・2は橋状であるのに対し2は鉤手状で、1は把手部両側に丸棒状の原体による刺突文を有する。また、1・3の把手部中央には1条のヘラによる沈線文を有する。

御手洗A式土器 (Fig. 389—4～12, Fig. 390, PL. 129)

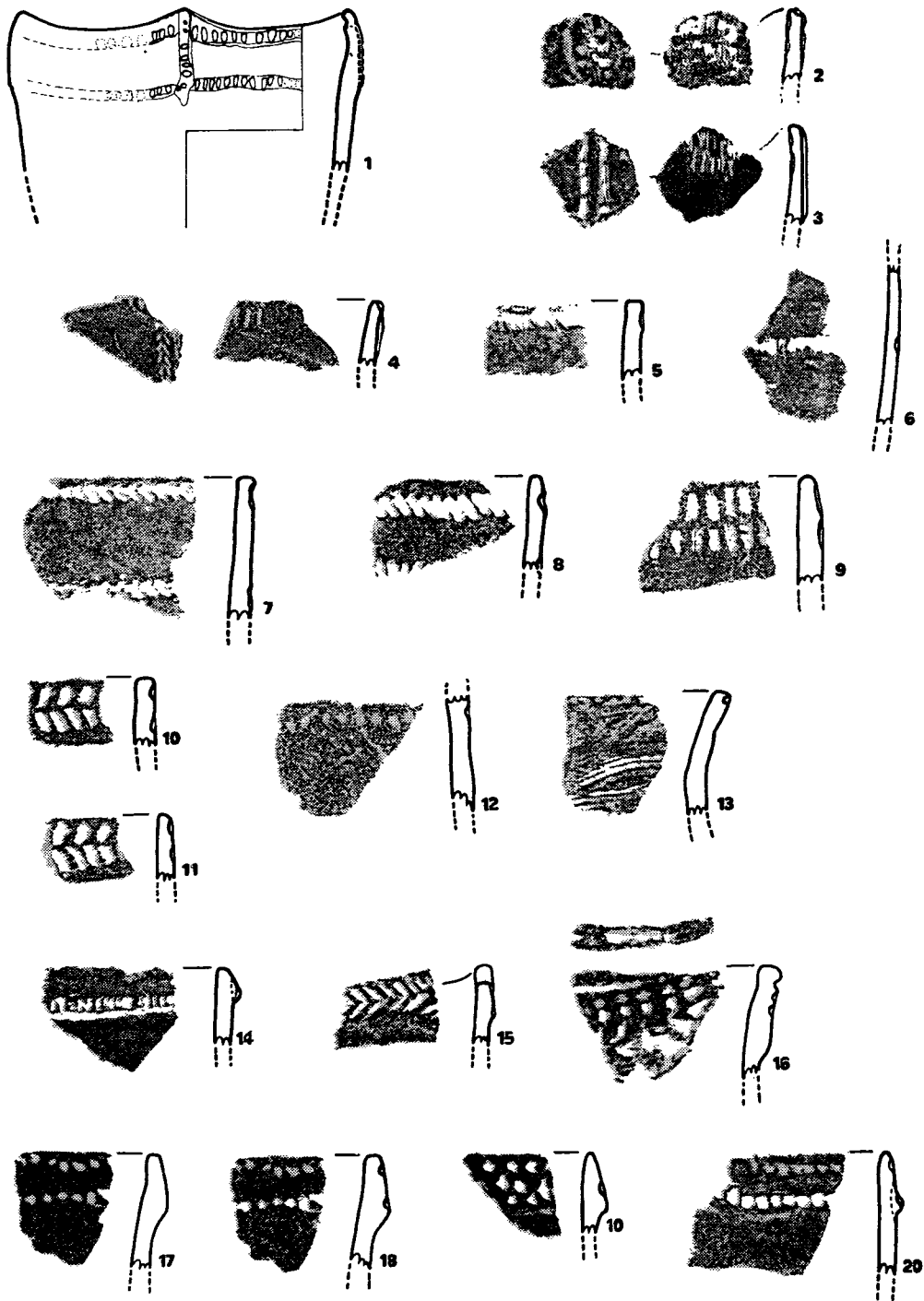
御手洗A式土器は、出水式土器の刻目突帯文土器からの系統をひくものと考えられ、鐘ヶ崎式土器と共伴するといわれている⁽⁴⁾。したがって同型式は後期中葉前半に比定される。

Fig. 389—4～12はいずれも口縁下に一条の低い隆帯をめぐらして口縁帯をなすもので、隆帯上および口縁直下に刺突文などを施す。4は口縁直下には施文しないが、隆帯上と口唇部に刻目を施し、口唇部のそれは複線山形をなす。5も口縁下に施文をみない土器で、隆帯上半部に斜位の刺突文を施すが、その方向は途中で変化する。6も5と同様の刺突文を隆帯上に有し、口縁下にも刺突を施すが、さらにその下に縦位と横位よりなる沈線文を描く。縦位の沈線は、拓本では定かではないがもう1本入るようであり、出水式における Fig. 388—1のような文様構成であると思われる。7・8は口縁直下と隆帯上に斜位の刺突文列を有するもので、7は復原径29.3cmを測る。9は小片であるが、低い隆帯上に刻目を有し、隆帯下をヘラ先で削って凹部をなす。10～12は大きめの施文を有する土器で、10・11は刺突文であるが、12は押し引き文である。また12は復原径34cmを測るが、隆帯の上位に2本一組の沈線で渦巻文を有する。



0 15cm

Fig. 389 阿高式系土器実測図(Ⅲ) 縮尺1/3)



0 15cm

Fig. 390 阿高式系土器実測図 (IV) (縮尺1/3)

Fig. 390—1～4は口縁部に垂下隆帯を有するもので、裏面にも短沈線文もしくは刺突文を施す。1は復原径15.3cmを測り、やや隆起する口縁部から1本の隆帯を下ろし、その横に上下2条の刺突文を施した低い隆帯を有し、裏面にも2列の刺突文列を描く。2・3は垂下隆帯が2本となるもので、裏面はいずれも2列の短沈線文であるが、3は隆帯上の施文が刺突ではなく押し引きとなっている。4は隆帯上に羽状の刺突文を有し、裏面にも短沈線文を施す。

以上はいずれも隆帯を有する土器であったが、Fig. 390—5～13は隆帯を貼り付けず、そのまま爪形文や刺突・沈線文を施文するものである。5・6は爪形文を有する土器で、5は口縁部に、6は胴部にC字状の爪形文を施す。7～11はヘラによる短沈線文を有するもので、8・9は2列に施文してあるが、7・10・11は羽状文となる。12・13は連続刺突文を有し、13は口縁部が外反し二枚貝による調整痕がみられる。

Fig. 390—14～20は口縁部を肥厚させて文様帯を形成するものである。14が段部に刻目を、15が羽状文を有するほかは、いずれも連続刺突文を施す。16は口縁端に横位の沈線を有し、それに対応する部分をヘラで削り取っており、15の口縁部はやや隆起する。これらは、従来御手洗C式と呼ばれてきたものと思われ、市来式土器の中に含まれていたが、施文自体は御手洗A式土器のものと変わりがなく、口縁部の断面観も、市来式の三角口縁とは若干異なることから、後期中葉の阿高式系土器という意味で、いちおう御手洗A式の中に入れておくことにした。

以上、御手洗A式について記してきた。従来からいわれているように、隆帯・刺突文列によって文様帯を区切る点は出水式土器から踏襲しているものと考えられるが、Fig. 389—6のように出水式土器と類似した文様構成をもつものがみられることは、出水式土器との関係を示しているものといえる。また、Fig. 389—12は隆帯上に押し引き文を施す点は明らかに本型式に含まれるものの、渦巻文を有する点は特異である。渦巻文は、本型式の祖形をなすと思われる出水式土器にはみられないことから、別系統の土器群、すなわち、磨消縄文系土器群の影響と考えなければならない。本遺跡出土の御手洗A式土器は、赤褐色を呈する Fig. 390—1を除けば、いずれも灰～茶褐色を呈した深鉢形土器である。

無文土器 (Fig. 391—1～7, PL. 130)

ここで阿高式系土器にともなう無文土器を一括して扱った。

1は暗い赤褐色を呈し、滑石を多く混える土器で、外面は部分的にヘラ削りを行ない、内面は指頭によるオサエののち、貝殻による調整を行なう。口縁はやや外反し、復原径19.9cmをはかる。2～4はいずれも外面にヘラ削りを行ない、口唇部に刻目を有するもので、3・4は波状の口縁をなす。5は口縁下にヘラによる凹線を有し、6は口縁部に刻目を有する。7は波状の口縁を有する。

これらはいずれも阿高式系土器にともなうと思われる赤褐色を呈する土器であるが、胎土・焼成などから考えると、南福寺・出水式土器にともなう公算が大である。

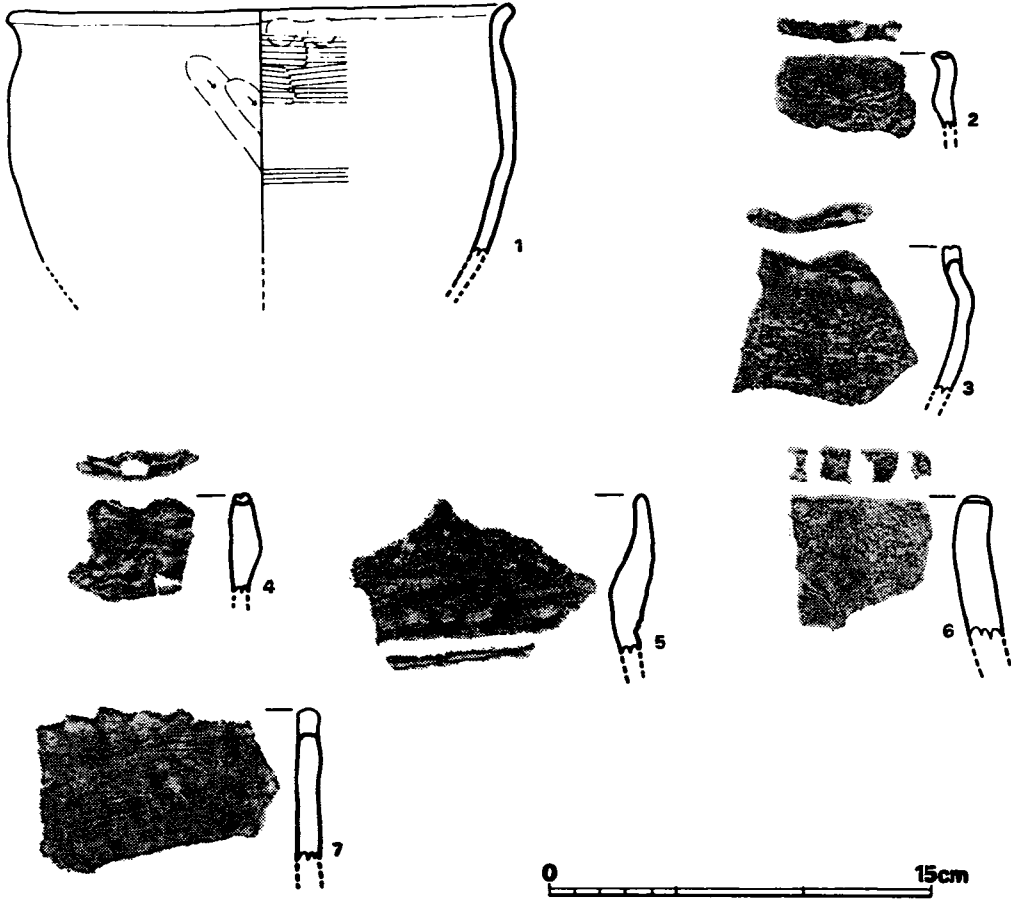
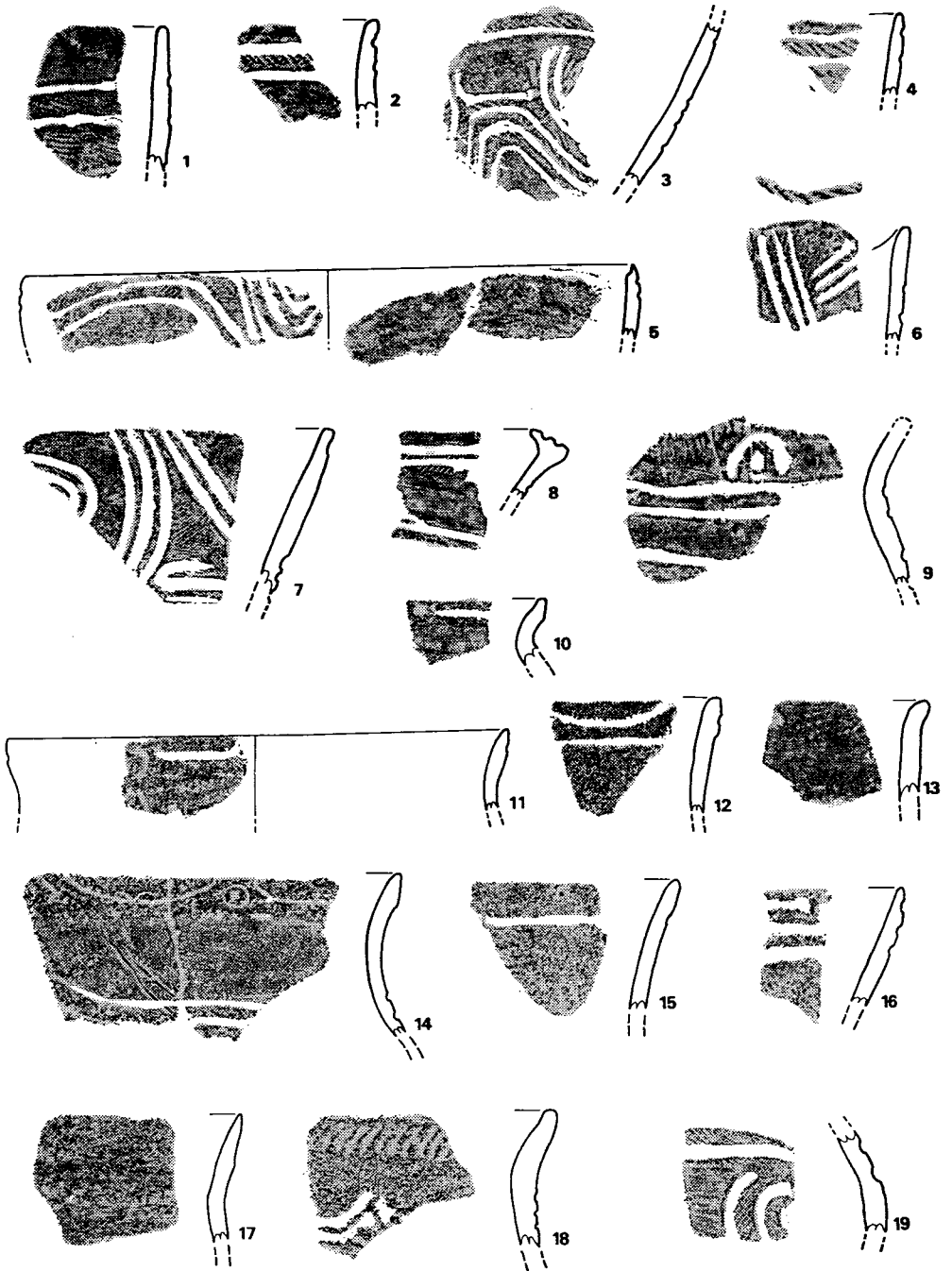


Fig. 391 阿高式系土器実測図(V) (縮尺1/3)

c 後期磨消縄文土器

ここでは、瀬戸内系の磨消縄文土器、九州の磨消縄文土器、およびそれに伴うと考えられる無文土器等について具体的説明を行なうが、前葉に中津式土器・福田KⅡ式土器、中葉には津雲A式土器・鐘ヶ崎式土器・北久根山式土器・西平式土器、後葉には三万田式土器、と大別して述べる。また、後期終末御領式土器については晩期土器と同じ項で取り扱う(PL. 130)。



0 15cm

Fig. 392 磨消繩文系土器実測図(1) (縮尺1/3)

後期前葉

中津式土器 (Fig. 392—1・2)

いずれも平縁の口縁部破片で瀬戸内地方の後期初頭中津式土器に比定できるものである。口縁部直下は無文で、その下に縄文を施しやや幅の広い2本の平行沈線で区切り縄文帯を作る。これらの特徴は中津式土器に一致するものであるが、Fig. 392—2は縄文帯がやや狭いことなどから、あるいはやや新しくなるものかも知れない。

福田KⅠ式土器 (Fig. 392—3～8)

瀬戸内地方の福田KⅠ式土器と考えられる土器であるが、その影響を受けたと思われるものも含む。福田KⅠ式土器には三本沈線間に縄文を有し、植木鉢状の器形をとるものが多いが、新しくなると2本沈線や、やや胴の張るものも知られる。Fig. 392—3は植木鉢状を呈する土器の胴部で、沈線もしっかりしており、胎土・焼成も良好である。Fig. 392—5は口縁端の内側を5mm程削り取り段をつけ、口縁部付近には縄文を施しそれを4本のU字状の沈線と2本の沈線で区画する。この土器は器形的には黒橋貝塚⁽⁶⁾出土の福田KⅠ式に近いが、文様的には立石⁽⁷⁾貝塚出土のもの、および宿毛貝塚⁽⁸⁾出土のものに類似しているといえよう。6は波状口縁の波頂部で、口唇部に刻目を有し、その下から3本沈線を斜めに引き、沈線間には不明瞭ながら縄文をもつ。これは類例をあまり見ないものであるが三本沈線および縄文をもつことなど、福田KⅠ式土器の影響を受けた在地の土器とも考えられることから一応ここに分類した。7も植木鉢状の器形を示す土器の口縁部であるが、沈線がやや太く、2本と3本の沈線による複合文様がある。8は口縁断面が「く」字形を呈する。

これらの土器は茶褐色系統のものが多く、焼成も当遺跡出土の中では割合良い方である。また、3・8のように沈線がシャープなものがある一方、5・7におけるように沈線がやや太く文様的にも後出的な様相を示すものがあることは、福田KⅠ式土器がある程度時期幅を有するものと考えられる⁽⁹⁾。

後期中葉

津雲A式土器 (Fig. 392—9～18)

ここに分類したものは外反する口縁部がやや肥厚し、頸部がしまり胴の張る深鉢形を呈するもので、瀬戸内の津雲A式土器に比定されよう。その特徴は縁帯文と呼ばれるもので、口縁部に縄文を施しそれを数重の同心円文とその左右の2本の沈線で区画する。また従来津雲A式土

器は後期中葉におかれていたが最近の報告によると、その上限は前葉まで遡るとされる⁽¹⁰⁾。

当遺跡出土のものは、10・12・14のように縁帯文の幅がやや狭く、同心円文とその左右の沈線は1条しか施されていないことが特徴的である。13・15・17は無文のものであるが、器形等からすると、津雲A式土器に伴うものであろう。18は口縁部の縁帯文の文様が若干異なり、頸部から肩部にかけて沈線による複合文様を有し、ここに置くには疑問も残るが器形的には津雲A式土器に近い。

北部九州において津雲A式土器を出土している遺跡は、福岡県山鹿貝塚、同下楠田貝塚、同荒田比貝塚、大分県コーゴー松遺跡、同立石貝塚、同森貝塚、同下来縄貝塚等であるが、各遺跡において、中津式土器や福田KⅡ式土器のように、単一遺跡で主体⁽¹¹⁾を占めることはなく、出水式から鐘ヶ崎式に伴って出土している。また、前述の遺跡では福田KⅡ式土器をある程度出土しており、両者はある期間時期をともしする可能性がある。いま、当遺跡の津雲A式土器をみると、口縁部があまり肥厚せず、同心円文および左右の沈線は一条で縄文をもたず、口縁部内側に文様を有するものはない。このような要素は当遺跡における津雲A式土器の地域的・時代的差を示すものと考えられ、おそらく本遺跡のものは津雲A式土器の中でも後出的なものであろう。

鐘ヶ崎式土器 (Fig. 392—19, Fig. 393—20)

いずれも精製鉢形土器の胴部破片で、Fig. 392—19はやや幅の広い沈線で縄文帯を作り、いわゆる渦文を形成する。Fig. 393—20は4条のゆるやかな曲沈線で縄文帯を2本つくる。鐘ヶ崎式土器は福岡県上八貝塚(鐘ヶ崎貝塚)を標式遺跡とするもので、口縁部が肥厚し頸部がすぼまり、やや胴部が張る浅い鉢形を呈する土器である。深鉢形の土器も一部知られているが詳細は不明である。当遺跡出土のものは小破片ではっきりせず、またわずか2片しか出土していないため具体的な考察は不可能であるが、器形・文様に鐘ヶ崎式に比定しうる。

北久根山式土器 (Fig. 393—21)

これも精製の浅い鉢形土器の胴部片で、頸部から胴部にかけて縄文を施し、横に2本の沈線を引き、その上下に2～3本の斜方向の沈線をつけて縄文を区画する。

北久根山式土器の鉢形土器は熊本県北久根山遺跡、同沖ノ原遺跡、同浜ノ洲遺跡等で出土しており、文様をみると横走・斜走する沈線(2本の場合が多い)を基調に縄文帯を形成し、外反する口縁部に縄文を有するものもある。本例も全体の文様構成は前述の特徴と一致し、その中でも沖ノ原遺跡出土のものに類似しているといえよう。

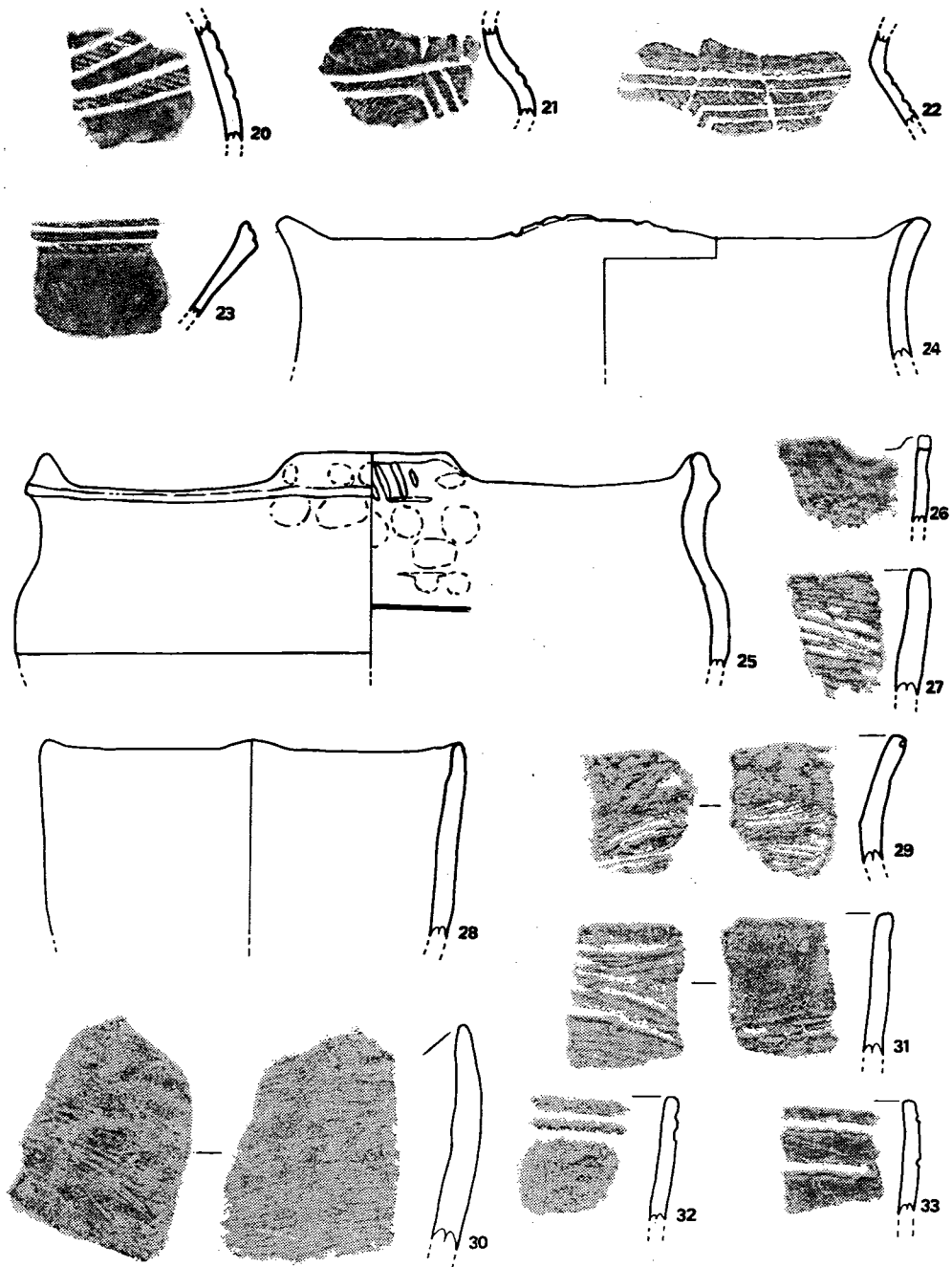


Fig. 393 磨消縄文系土器実測図(Ⅱ) (縮尺1/3)

西平式土器 (Fig. 393—22)

精製の鉢形土器で頸部がしまり胴部が張り、胴部最大径の所に稜がつくものであろう。胴部に縄文を施しそれを4本の沈線で区画し、研磨した無文帯と縄文帯を交互に配して文様効果を高めている。従来このような文様を有するものは西平式土器に伴ってわずかに出土しているものの、いわゆる西平式土器とは文様構成、器形等が若干異なり、ある程度地域・時期差⁽¹²⁾が考えられるが、資料に制限があるのでここでは一応西平式として分類した。

後期後葉**三万田式土器 (Fig. 393—23)**

精製鉢形土器の口縁部で、口縁端は内傾せず、縄文を施し2条の沈線で区切り中央は無文で放置する。三万田式土器の中でも古く考えられるもので、暗茶褐色を呈し焼成はあまり良くない。

無文土器 (Fig. 393—24~33, PL. 130)

後期の無文土器、および粗製土器を一括して取り扱うが、これらは前述の磨消縄文土器に伴うと考えられるものである。しかしながら、無文土器・粗製土器は器形的には明確な時期差を示すものは少なく、精製土器との共伴関係も現在の段階では不明瞭な点が多い。したがって、ここでは大まかな時期を記す。

24は四角が隆起する深鉢形土器で、隆起した口唇部には刻目をもつ。後期前葉から中葉頃のものであろう。25も四角に隆起部を持ち頸部がややすぼまり若干胴の張る深鉢形土器で、細い条痕の上を指でおさえている。器形からすると後期中葉ごろのものであろう。26~31までは後期中葉から後葉に属すると思われる土器で、主に貝殻条痕を有する深鉢である。また、口縁部が直行するもの、やや外に開くもの、わずかに内傾するものなど多様である。31・32は2本の沈線を有するもので、後期後葉頃に置かれよう。

d 御領式系土器（黒色磨研土器）

ここでは、後期終末の御領式土器から晩期終末のものまで述べる。現在晩期の土器は晩期初頭式と呼ばれるものから大石式土器・黒川式土器・礫石原式土器・山ノ寺式土器・原山式土器・夜臼式土器などの型式が知られているが、相互の系譜関係・分布範囲等において不明な点が多い。したがって当遺跡出土の晩期土器は便宜的に晩期前葉・中葉・後葉に分けて述べる（PL. 131）。

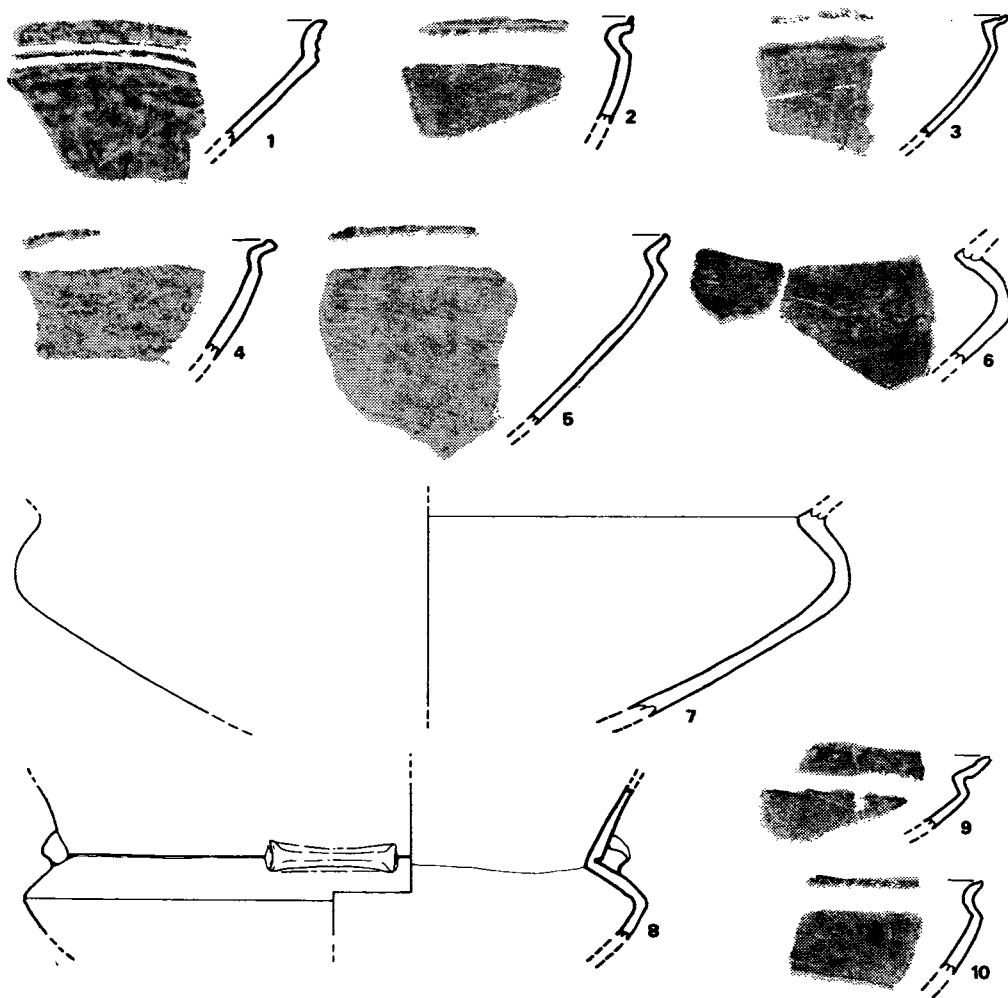


Fig. 394 御領式系土器実測図（I）（縮尺1/3）

御領式土器 (Fig. 394—1)

これ1点しか出土していないが、御領式土器の浅鉢である。口縁部がわずかに開き、2本の凹線が施されているがあまり深くない。御領式の中でも三万田式土器に近いものといえよう。内外面とも丁寧に研磨されている。

晩期前葉 (Fig. 395—1~7, Fig. 397—1)

まず深鉢形土器から述べる。Fig. 395の1~3は口縁部がわずかに内傾し、頸部がしまりやや肩の張る深鉢形土器で、1・3には3本の浅い沈線を入れる。これらは従来晩期初頭式⁽¹³⁾と呼ばれる土器に比定できよう。4~6は口縁部がほぼ直立しわずかに頸部がしまる。口縁部には浅く不明瞭な横走沈線を2~3本施す。7は口縁部が外に開き、頸部が「く」字形にくびれ肩の張る深鉢形の口縁部で、4本の浅い沈線を施す。この土器は器形からすると前葉の中でも新しいものであろう。

前葉に比定しうる浅鉢は1点しか出土していない。Fig. 397—1がそれである。口縁部がやや立ち上り頸部が屈曲し肩が張り、口縁部と肩部直上に凹線に近い横走沈線を施す。

晩期中葉 (Fig. 394—2~8, Fig. 396—1・2, Fig. 397—2)

Fig. 396—1は口縁部が外に開き、ややだだらした横走凹線を1条施し頸部が著しく屈曲しわずかに張る胴部へと続く。口縁部に2個ないし4個の双角状の突起部を有し、あまり類例をみないが、このような突起は中葉の土器にみられることなどからすると、晩期中葉の深鉢と考えられる。

浅鉢形土器は、Fig. 394—2のように口縁部がかすかに立ち上り、浅く幅の狭い沈線をもつものは前葉のなごりを残しているものの、頸部はすでに中葉の特徴をもつ。Fig. 394—3~5は口縁部の立ち上りが著しく退化し、わずかに口縁端を高くする。口縁部から肩部にかけて短く屈曲し、断面「く」字形を呈する。Fig. 394—5などは器形からすると中葉の中でも新しく、後葉への移行型式といえよう。Fig. 397—2は短い口縁部がほぼ直立し、そのままややしまる頸部へと続くもので、中葉から出現する浅鉢である。Fig. 394—6~8は、頸部から胴部にかけて現存するが、頸部はしまり胴部が丸く張る浅鉢で、8は頸部と胴部の境に2個または4個のリボン状装飾を有し、胴部最大径のところ屈曲する。

晩期後葉 (Fig. 394—9・10, Fig. 397—4)

Fig. 394—9・10は浅鉢形土器で、9は口縁部から肩部にかけて短く「く」字形に屈曲し、口縁部内側をうすく削り浅い凹線をつける。10は口縁部が外反しそのまま屈曲する肩部へつづく。

Fig. 397—4は肩部から胴部にかけて現存するもので、口縁部は内傾し肩部がおれまがり、

そこに刻み目をつけ、部分的ではあるが刻目の下に浅く短い沈線を施し、突帯をつけたようにみせる。内外面ともやや荒い条痕が走り、内面では横走条痕が部分的に沈線状になる。色調は黄褐色ないし暗茶褐色を呈する。この土器は貼り付け突帯ではないが、いわゆる晩期終末山ノ寺式に非常に類似しており、その型式の中に含めて良いのではなかろうか。

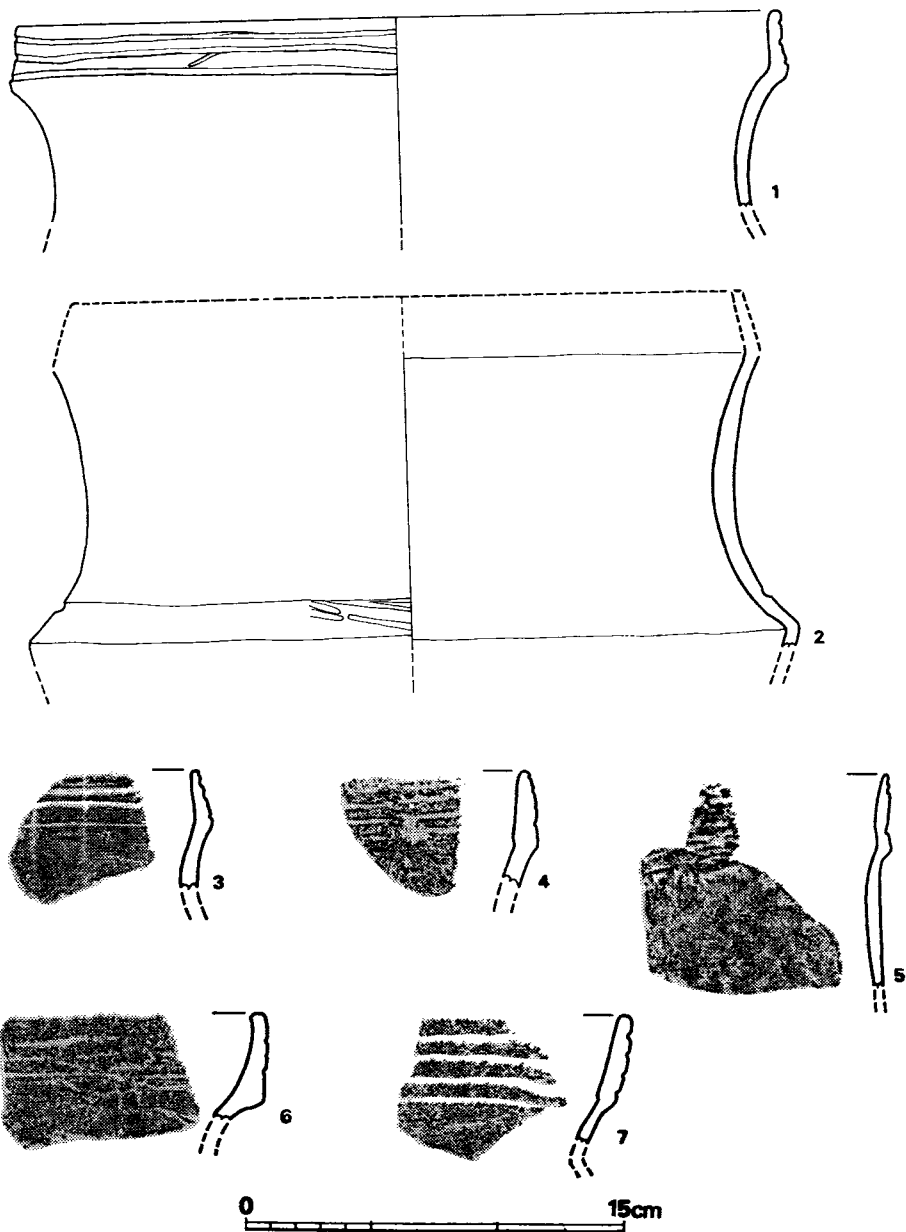


Fig. 395 御領式系土器実測図(Ⅱ) (縮尺1/3)

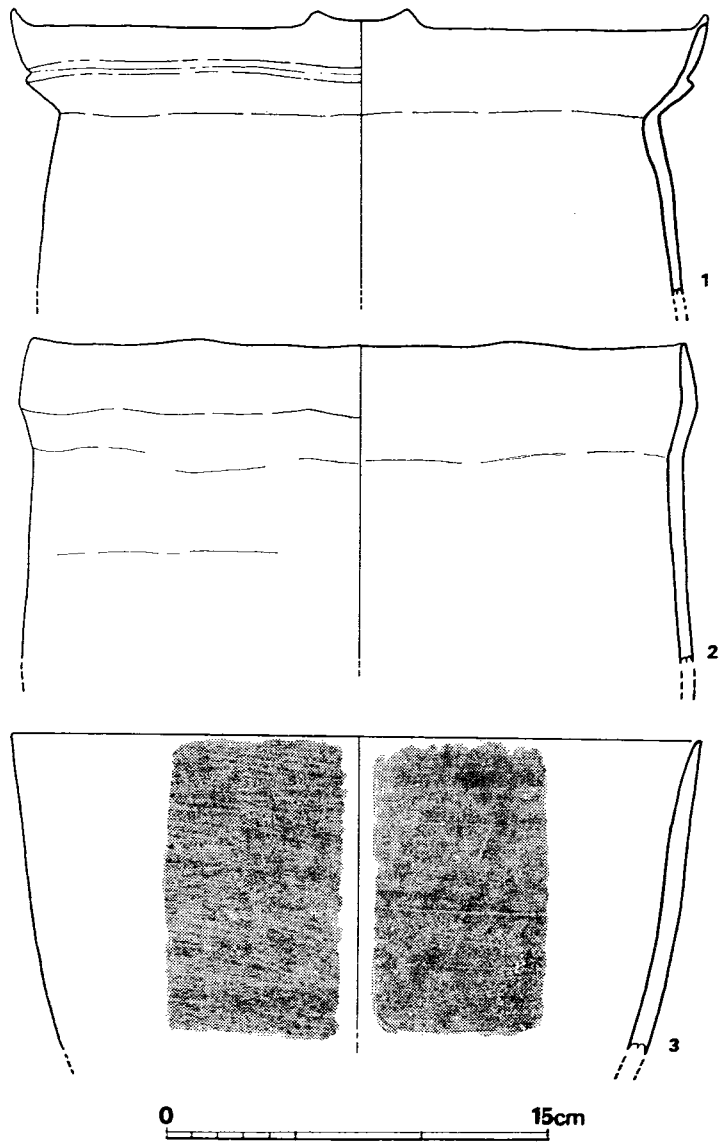


Fig. 396 御領式系土器実測図(Ⅲ) (縮尺1/3)

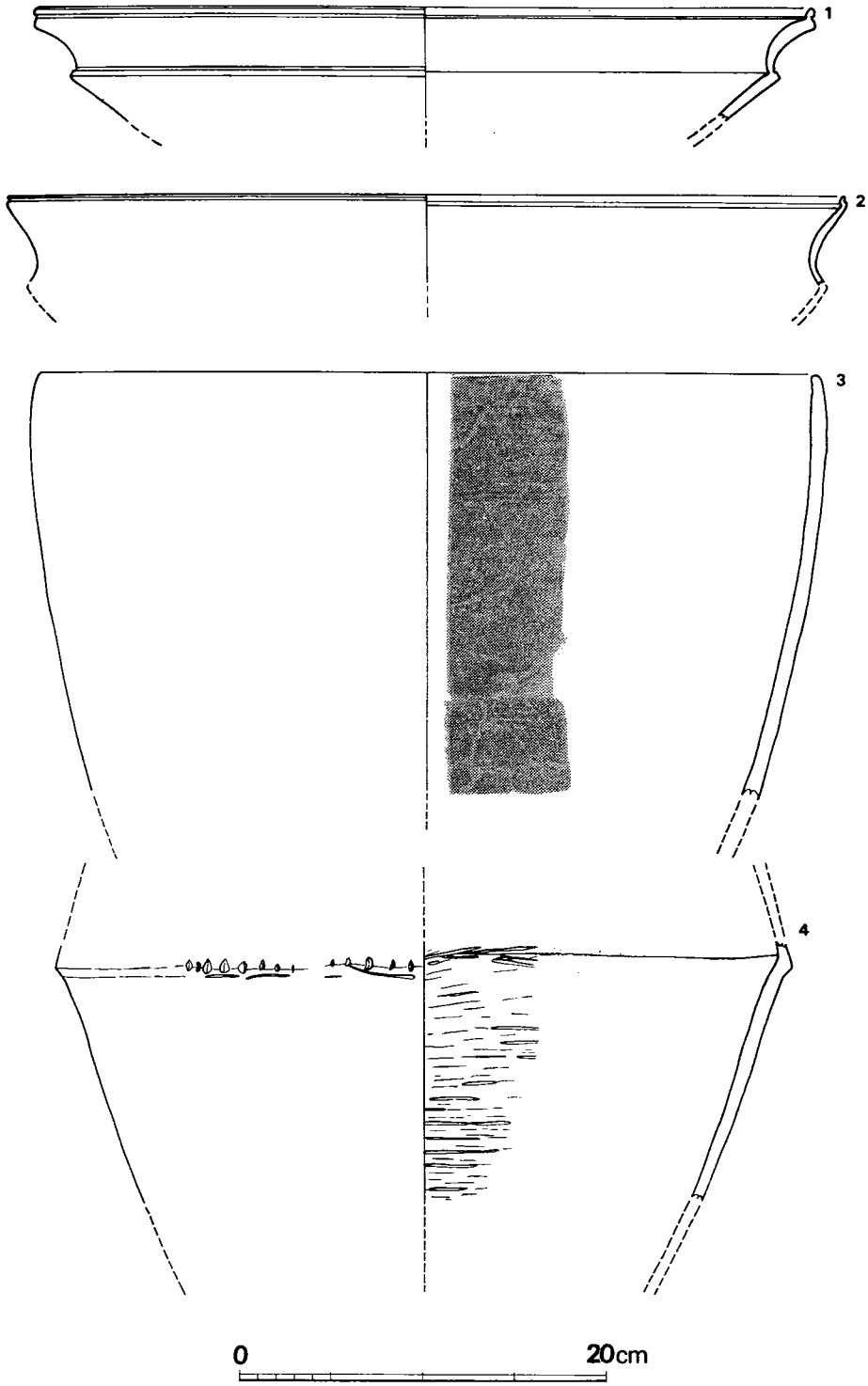


Fig. 397 御領式系土器実測図(Ⅳ) (縮尺1/4)

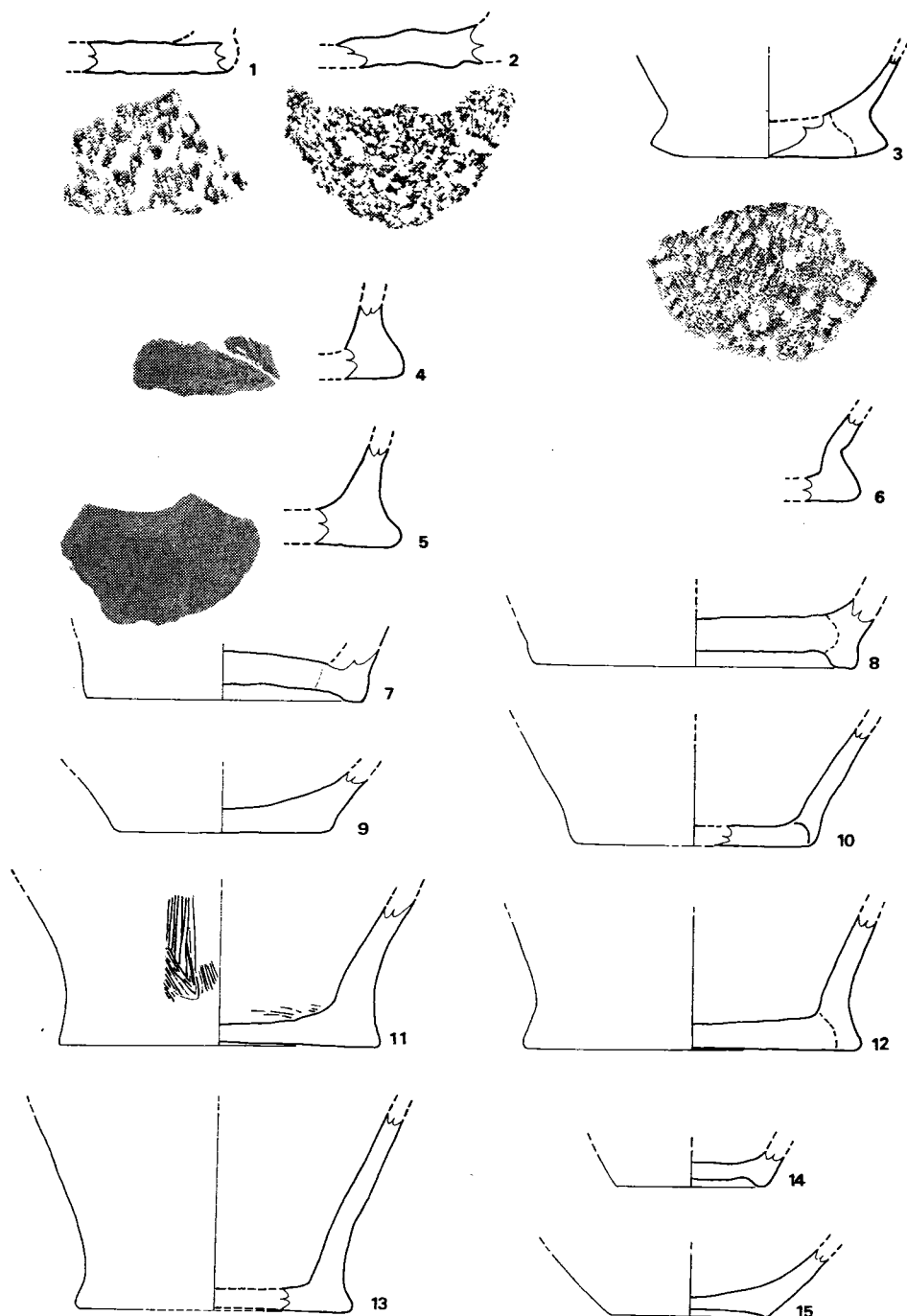


Fig. 398 縄文式土器底部実測図 (縮尺1/3)

e 底部 (Fig. 398—1~15, PL. 133)

これらは中期末から晩期にかけての土器の底部で、それぞれの型式ははっきりしないが、後期のものがほとんどである。

1~3は底に鯨類の背椎骨の圧痕といわれるものをもつ。2には滑石が含まれている。これらは赤褐色を呈する阿高式土器・阿高式系土器の底部である。4~6にはあまり明確でないが木葉の圧痕を有する。黄褐色ないし赤褐色を呈する。11は貝殻の殻頂部から腹部にかけての部分を用いて行ったものと思われるような器面調整の跡が残る。このような調整痕をもつものはこれ1点しかなかった。14・15は後期中葉から晩期中葉ぐらいの精製土器の底部である。

後期の深鉢形土器の製作については、ほとんどがまず中心となる円盤を作り、その周囲に粘土をつぎ足してから胴部以上へと作るものと、円盤から直接胴部へとつなぐものがある。数的には後者のほうが多く認められた。

小 結

これまで記してきたように、大道端遺跡においては、早期~前期には疑問な点が残るものの、中期末から晩期終末までの土器を出土している。これらの主体を占めるのは後期前~中葉と晩期前~中葉の土器群であるが、他の時期の土器も少量ずつ含まれており、大道端遺跡において中期末から晩期終末まで生活が営まれたことは疑いない。これらの時期的あるいは系統的な関係は遺跡出土縄文式土器編年図^⑤を付しておいたので参照していただければ幸いである。

しかし、住居跡をはじめとする各時期の遺構は検出されなかったため集落の規模などは不明であり、遺物もまったくの攪乱状態で出土していることから、本遺跡における縄文時代文化の復原にはおのずと限界があるものと考えられる。したがって、ここでは本遺跡出土縄文式土器をめぐる問題点について二、三検討することにした。

1. 阿高式土器末期における地域相

阿高式土器は、古くから知られていながら、その細分やそれにもとづく型式変化などに関する研究は意外に行なわれておらず、その概念にしても並木式土器と南福寺式土器との間に入る

土器などという漠然とした規定がなされている⁽²⁾。南福寺式土器は後期前葉に編年され、阿高式土器自体は瀬戸内海地方における船元式土器と共伴することから⁽⁴⁾、阿高式土器は中期中葉から終末までの時期に比定されることになるのだが、その細分の試みもわずかではあるがみられないわけではない。乙益重隆氏は、熊本県玉名郡岱明町古閑原貝塚出土の阿高式土器が、器面全体に施文し文様構成にも規律がみられることから、時期的に先行するものであろうとしている⁽⁴⁾。前川威洋氏も、おそらくは同じ理由から、熊本県下益城郡城南町阿高貝塚・長崎県諫早市有喜貝塚・古閑原貝塚出土の大半を占めるもの→福岡県三池郡高田町下楠田（老齡）貝塚のもの→佐賀県西松浦郡西有田町坂の下遺跡のものへ、といった変化を想定している⁽²⁾。阿高式に先行する並木式土器が器面全体に施文するというわけではないものの、口縁部文様帯に施文を集約させる南福寺式土器への移行を考えるならば、器面全体に規律ある文様を施したのから下楠田貝塚出土土器のように口縁部周辺に施文を限るものへ変化したと考えるのは妥当であるといえる。

ところが、そのつぎに置かれている坂の下遺跡出土の土器には器面全体に施文を及ぼすものが含まれており⁽¹³⁾、上記の方向性とは矛盾することになるのである。これは、いずれもヘラ描きによる直線を主とした凹線文を有するものであり、いわゆる阿高式土器の太形凹文に比して細くかつ浅くて、文様の規律も失われつつあることから、明らかに、阿高貝塚や古閑原貝塚出土の、器面全体に施文した土器が退化した型式としてとらえられる。このような土器は、福岡県から長崎県にかけて分布するようであり⁽¹⁵⁾。下楠田貝塚出土土器のような口縁部周辺に施文を集約させた土器が分布する。有明・八代海沿岸にはあまり類例をみない⁽¹⁶⁾。坂の下遺跡ではこのような土器とともに南福寺式・中津式土器が出土しており、中期末から後期前葉前半の時期が与えられているのだが⁽¹⁷⁾、この時期はまた、南九州において岩崎下層式土器が成立する時期でもある。岩崎下層式土器には南福寺式に移行する以前の阿高式土器からの影響がみとめられ⁽²⁾、中期のある時期よりこの地域が、阿高式土器分布圏⁽¹⁸⁾ から分離しつつあったことを物語っている。

こうしてみると、並木式土器を経て成立した阿高式土器分布圏は、中期のある時期、おそらくは後葉から終末にかけて三つの地域に分解し、阿高式土器がそれぞれの地域において異なった形式変化を遂げたことが想定されるのである。そしてこの地域相は後期前葉まで通じてみとめられ、とくに南九州においては岩崎上層式・指宿式土器へとまったく独自の展開を遂げる。これに対して、他の二地域は相互にコミュニケーションを保ち⁽¹⁹⁾、南福寺式・出水式土器へと移行していくものの、たとえば福岡県から長崎県にわたる地域においては、粘土紐を撚り上げた把手⁽¹⁹⁾ や連点文土器⁽²⁰⁾ が多くみられるなど内容的には若干異なる⁽²¹⁾。

本遺跡出土の阿高式土器は、太形凹文よりやや狭目のヘラ描き凹線文を有することから、より後出的なものと考えられるが、坂の下遺跡のものとは施文が大きく異なり、下楠田貝塚のも

のに似る。南福寺式・出水式土器も、阿高式同様じゅうぶんな資料ではないものの、把手などからみれば有明・八代海沿岸地域に含まれるものようであり、本遺跡はこの地域の北部の一角を占めていたことになる。

この阿高式土器分布圏の分解が何に起因し、分かれたそれぞれの地域が何を基盤としたのかは、遅れたこの時期の研究レベルでは今のところ明らかにしえないが⁽¹⁴⁾、今後の課題の一つとして提起しておきたい。

2. 御手洗A式と阿高式系土器の消滅

阿高式土器は後期に入ると南福寺式土器へと変化し、さらに出水式土器へと移行する。南福寺式土器は坂の下遺跡などで瀬戸内の中津式土器と共伴していることから後期前葉前半に編年され、御手洗A式が中葉前半の鐘ヶ崎式土器に伴うので、出水式土器は前葉後半に位置づけられるだろう。南福寺式土器と出水式土器は、いずれも口縁部に文様帯を作出する深鉢形土器を主体とするもので、文様帯は④凹線（沈線）で区切る、⑤突帯で区切る、⑥「く」の字状に口縁部を外反させる、⑦口縁部を肥厚させる、の四種の方法で作出する。このうち④・⑤は、阿高式土器においても口縁部と胴部を区切る際に用いられており、中期からひきつがれた要素であるといえる。これらの文様帯への施文は、南福寺式土器においてはヘラ描き凹線文であり、出水式土器はヘラ先による沈線文となる。両者の間には、羽状文など共通の文様構成も多く、凹線文から沈線文へと変化したことをうかがい知ることができる。

出水式土器のつぎに編年されるのは御手洗A式土器であるが、本遺跡ではある程度まとまった量で出土している。御手洗A式土器は、阿高式土器から出水式土器まで続いた刻目突帯が退化して低い隆帯上の刺突文や爪形へと変化したものとされ、その分布状況が熊本県下を中心としてほぼ有明海沿岸に限られることから、阿高式系土器の最後の姿として理解されている。⁽²⁾ たしかに御手洗A式土器の文様構成自体は、隆帯上と口縁直下に刺突文列をめぐらすことによって口縁部を作出したり、垂下した隆帯を中心に左右に刺突文を展開させるなど、出水式土器の文様構成を明らかに踏襲しており、また同じく出水式土器の影響下に発生したと思われる市来式土器のそれにも似る。本跡出土土器のなかにも、出水式土器と御手洗A式土器との関係を示す土器が含まれており、Fig. 389—6などは、Fig. 388—1の文様と類似し、Fig. 388—16・19は御手洗A式土器的な要素をもっている。したがって御手洗A式土器の祖形を出水式土器に求めることは妥当であると考えられる。そして、上記の系統論をふまえるならば、御手洗A式土器は型式学的には、隆帯上に刺突文等を施すもの（Fig. 389—4、Fig. 390—4）から、隆帯をもたずそのまま爪形文や刺突文を施すもの（Fig. 390—5～13）への推移をたどることができる。同型式は鐘ヶ崎式土器と共伴するとされてきたが、本遺跡や福岡県大牟田市荒田

比貝塚⁽²³⁾では鐘ヶ崎式土器はほとんどみられず、逆に鐘ヶ崎式土器を主体とする熊本市渡鹿貝塚からは御手洗A式土器は出土していない⁽²⁴⁾。富田絃一氏はこのような現象を、鐘ヶ崎式期のある時点で御手洗A式土器が終焉を迎えたものとしているが⁽²⁵⁾、ここでFig. 389—12に示した土器を問題にしなければならないだろう。これは、低い隆帯上に押し引き文列を有する御手洗A式土器で、その上位に2本一組の沈線による渦巻文を施しており、南福寺式・出水式土器には渦巻文はみられないことから、磨消縄文土器からの影響が考えられる。渦巻文をもつものとしては、やはり鐘ヶ崎式土器が想起されるが、本遺跡からは同型式はほとんど出土しておらず、磨消縄文土器では福田KⅡ式・津雲A式土器のくずれたものが主体を占める。Fig. 389—12は型式学的には、前述のように御手洗A式土器のなかでも先行するものと考えられ、鐘ヶ崎式土器と共存する同型式には後出的なものが多いことを加味すれば⁽²⁶⁾、あるいは福田KⅡ式土器的なものの影響を受けた土器であるかもしれない。しかし、ここでは漠然と後期中葉前半の磨消縄文土器の影響であると考えておき、こんごの類例の増加を待つことにしたい。

ともあれ、こうしてみるとやはり富田氏の指摘のように、御手洗A式土器は鐘ヶ崎式期のある時点で終焉を迎えた型式と考えるべきであり、後期中葉前半でも早い時期に比定される可能性が強いだらう。

さてここで、本報告では御手洗A式土器のなかに含めて扱った、肥厚による口縁部文様帯を有する土器について検討してみよう。この一群はかつて御手洗C式土器と呼ばれたものと考えられるが、小林久雄氏はこれを市来式土器の範疇に含めている⁽²⁷⁾。同様の土器は長崎県南高来郡加津佐町水月永瀬貝塚⁽²⁸⁾や有喜貝塚⁽²⁹⁾などでも出土しているが、これらの遺跡からは真正な市来式土器も出土しており、その関係は無視できないかもしれない。しかしまた、それゆえに、御手洗A式土器や出水式土器的な施文手法と出水式土器的な肥厚は、市来式土器との間に明瞭な一線を画してもいる。また、有喜貝塚出土のものには、口唇部に複線山形文を有する御手洗C式土器があり、Fig. 389—4のそれに酷似する。

そこで、出水式土器の口縁部形態の四つのヴァリエーションを思い起こしてみると、御手洗A式土器は主として㊸からの系譜がたどれるのに対して、市来式・御手洗C式土器は㊹からたどることができる。したがって、御手洗C式土器の非市来式土器的な要素とA式土器との類似を考慮に入れば、有明海岸において出水式土器の㊸・㊹形式のものから御手洗A式・C式土器が生じ、この両者はセットをなすことが考えられるのである。そして渡鹿貝塚においては鐘ヶ崎式土器と共存してC式土器のみが出土していることから、C式土器の方がより永くその命脈を保ったものといえるだろう。またこの渡鹿貝塚は北久根山式土器直前の時期であると考えられるが、乙益重隆・賀川光夫両氏⁽³⁰⁾らによって指摘された北久根山式土器における出水式土器的要素は、この御手洗C式土器を介して継承されたものとみることもできよう。

しかし、御手洗A式・C式土器はそれ自体で一遺跡をなすことはないといわれ、本遺跡にお

いてもおそらくは福田KⅡ式～津雲A式的な土器のいずれかと組合わさることが考えられる。後期前～中葉には瀬戸内以東から磨消縄文土器をはじめとする、いわゆる東日本的文化複合体が伝播してくるとされるが⁽³¹⁾、上記の現象も、外来の文化の流入・定着化によって、阿高式系土器がその本来の姿であった滑石混入・赤焼き・鯨骨の製作台使用などの要素を欠落させて変質し、磨消縄文土器と組合わさることによってのみ、その命脈を保っていたことを示すものである。しかしながら、磨消縄文土器とともに阿高式系土器も継承されていることは、後期中葉以降この地において磨消縄文土器を用いた集団が、かつては阿高式系土器を媒体としたものであったことを物語るものといえる。またこのことは、後期中葉以降のこの地域の縄文文化が東日本的要素と在地の要素が組み合わさったものであることからもうかがい知ることができよう。

最後に、晩期の土器について若干の所見を述べるならば、本遺跡における晩期の土器は前葉、中葉、後葉の各期にわたって数は少なながらも存在する。本遺跡においてはとくに浅鉢形土器において一連の系統をたどれる。すなわち、晩期前葉の浅鉢は口縁部の立ち上りと、やや長く屈曲する頸部は御領式土器の影響をまだ強くもっているが、次の中葉になると、Fig. 394—2のように口縁部の立ち上りはわずかに残るだけになり、沈線も浅く不明瞭である。また頸部は短く屈曲し肩部へと続く。さらに、このような口縁部の単純化傾向はFig. 394—3・4を経てFig. 394—5のように口縁端部がわずかにつまみ上げられ、なごりを残すものへ続くと考えられるのであり、最終的には、Fig. 9—10のごとくなるものと思われるが、この他にも口縁部の外反度が異なるものも二、三認められる。

深鉢形土器については前葉のものが多い。その中には御領式土器に近いもの（Fig. 395—1、2）から、口縁部が直立するもの、やや外開になるものなど新しい様相を示す土器もみられる。中葉の黒川式の特徴をもつ深鉢はみられなかった。当遺跡においては晩期前葉のものでは深鉢形土器が多く、中葉では浅鉢形土器が多いことが指摘される。しかしこれは当遺跡における連続性を示すもので、出土数の多少はあまり問題ではない⁽³²⁾。ところで、山ノ寺式土器に比定できる甕形土器が出土している。従来山ノ寺式土器は平野部で発見された例を聞かず、墳墓からしか出土しないこともあってその所属時期が疑⁽³³⁾われている。山ノ寺式土器については資料の絶対数が不足しており今後二期したい。

注

- (1) 主として次の三つを参考とした。
 小林久雄「九州の縄文土器」『人類学先央学講座』11、1939
 乙益重隆「九州西北部」『日本の考古学』Ⅱ、1965
 乙益重隆・前川威洋「九州」『新版考古学講座』3、1969
- (2) 前川威洋「九州における縄文中期研究の現状」『古代文化』21—3・4、1969
- (3) 佐賀県西松浦郡西有田町坂ノ下遺跡などで確認されている。
- (4) 乙益重隆「九州西北部」『日本の考古学』Ⅱ、1965
- (5) 中期以降は、各期を前葉・中葉・後期と三分している。中期に関しては本文中に触れたが、後期は、中津式を前葉の、鐘が崎を中葉の、三万田式を後葉のそれぞれ開始期とし、晩期は賀川光夫氏のいわゆる晩期Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ様式を、そのまま前・中・後葉とした。これらは関東地方における編年との関係も考慮に入れたつもりであるが、併行関係など明らかでない点もあるため、あくまでも便宜的なものにすぎないことを明記しておく。
- (6) 隅昭志・西田道世他『黒橋』1976。黒橋貝塚出土の福田KⅡ式は胴部がゆるやかにカーブする。
- (7) 賀川光夫他『立石貝塚』「大分県文化財調査報告第31輯」1974
- (8) 岡本健児・酒詰仲男『宿毛貝塚』「高知県文化財調査報告書」1951
 岡本健児『宿毛貝塚出土縄文土器の再検討』「高知小津高校研究誌No.5」1966
- (9) 九州地方においては前葉後半から中葉前半にかけて存在したのではないかと思われる。
- (10) 中村徹也『京都大学理学部ノート　パイオトロン実験装置室新営工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の研究』1973
- (11) 中津式土器は福岡県糸島郡志摩天神山貝塚で福田KⅡ式は福岡県北九州市永犬丸遺跡などで主体を占める。
- (12) 福岡市四箇遺跡においてはこの種の土器が多く出土しており、おそらく北部九州の様相の強いものと考えられる。
- (13) 熊本市上ノ原遺跡出土の土器をいう。
- (14) 森醇一郎『坂ノ下遺跡の研究』佐賀県立博物館調査研究書第2集、1975
- (15) 坂ノ下遺跡のほか、福岡県糸島郡志摩町天神山貝塚・長崎県上県郡峰村吉田貝塚・同松浦市姫神社遺跡・同福岡市水の窪遺跡・熊本県天草郡王和町沖ノ原貝塚などで、類似の阿高式土器が出土しているようである。
- (16) 熊本県下益城郡城南町黒橋貝塚や福岡県大牟田市荒田比貝塚・同三池郡高田町下楠田貝塚において類似の土器が数点出土しているが、微量であり、主体を占めることはない。
- (17) 注(14)による。坂ノ下遺跡出土の阿高式系土器が、すべて同時期の所産であるならば、中津式土器併行、すなわち後期前葉前半の土器と考えられるが、凹点を有する土器の中に、凹点が整然としたものとくずれたものの両者がみられることから、二時期に分離できる可能性がある。また、仮に坂ノ下遺跡の土器が同時期のものであるとしても、器面全体に太形凹点を有する阿高式土器を中期中葉に位置

づけるならば、器面全体に退化した凹線文を施した土器を中期後葉に想定しなければならなくなる。

- (18) 注(2)によれば、大分県・宮崎県を除く九州地方であるとされる。この分布圏の南部に位置する鹿島県日置郡金峰町掘川貝塚や、北部の福岡市大濠公園内遺跡からも、器面全体に太形凹文を有する典型的な阿高式土器が出土していることから、中葉中期には、この圏内に同一型式が分布していたものと考えられる。
- (19) たとえば注(2)において前川氏がすでに指摘されているように、鯨類の脊椎骨を配布している事実があげられる。これは土器製作台として用いられたものであるが鯨類の捕獲は、その洄游路にあたることから対馬海流に面した地域、すなわち福岡・佐賀・長崎各県の沿岸部で行なわれたことが想定できる。したがって、それらの外海に面した地域から、有明・八代海周辺地域へと鯨骨が配布されたことになるが、この製作台の使用は出水式期までは継続されていることから、二つの地域間に一定のコミュニケーションが存在したことがうかがえるのである。
- (20) この点に関してはすでに坂田邦洋氏の指摘がある。
坂田邦洋「縄文土器」『深掘遺跡』長崎県大学人類学考古学研究報告1所収、1967
- (21) この点は、西健一郎氏がすでに指摘しているところである。
西健一郎「西加藤遺跡」『対馬』長崎県文化財調査報告書第17集所収、1974
- (22) いまだ、文様・器形の細分や組合せなどに関する研究は少ないようであるが、福岡県から長崎県にかけての地域では逆S字状文がみられないなど、個別の文様構成の組合せに地域差がみとめられる可能性がある。しかし西北九州全体に分布する文様構成が存在することも見逃せず、南福寺式土器が有明・八代海周辺において発生したものと仮定するならば、後期前葉にこの地域を中心として土器分布圏が再編成されつつあったことも考えられる。
- (23) 土器分布圏が何を反映したものであるのかさえも、今のところ明らかとはなっていない。土器の文様に呪術的な規制をみとめるならば、これらは祭式を共有する集団の範囲を示すことになる。呪術性を帯びた遺物として、長崎県～佐賀県では顔面土手(坂の下遺跡)や足形土製品(長崎県佐世保市天神洞穴)、猪土隅(長崎県南松浦郡富江町宮下貝塚・吉田貝塚)などが知られており、この地域独自のものとも思えるが、他地域との比較が現状では不可能であるため、安易に結びつけるわけにはいかない。また福岡県～長崎県の地域は石銛・石鏃の分布範囲とも重なるようであるがこれも他地域の実態が明らかでないために比較することができない。それに、これらの地域は対馬海流域・有明・八代海周辺、錦江湾周辺といったように、海を媒体とした一つの単位としてくられる面もある。仮にこれらの地域が海を中心とした自然地形によって規定されたコミュニケーションの一つの単位としてとらえられるならば、その単位ごとに地域色をもった土器型式が分布することは至当であり、むしろそれらを超えて同一型式が広がる背景の方がより大きな問題となろう。
- (24) 富田紘一「渡鹿貝塚」『渡鹿遺跡群発掘調査概報』1974
- (25) 富田紘一『縄文時代の熊本』「縄文人展」熊本コーナー用パンフレット、1975
- (26) 富田紘一「渡鹿貝塚」『熊本市文化財調査報告書』Ⅲ、1972
- (27) 小林久雄「九州の縄文土器」『人類学先史学講座』11、1939

- ㉘ 九州大学文学部考古学研究室蔵。
- ㉙ 島田貞彦地「肥前国有喜貝塚発掘報告」『人類学雑誌』41-1・2、1925
- ㉚ 賀川光夫「縄文後期土器の再吟味」『コウゴ-松遺跡調査報告』1974
- ㉛ 渡辺誠「九州地方における抜歯風習」『帝塚山考古学』1、1968
- ㉜ 当遺跡出土の土器がすべて攪乱層より出土したことにもよる。
- ㉝ 熊本地方においては、夜臼式土器が弥生時代の板付Ⅱ式に伴っての出土が認められることから、山ノ寺式土器も弥生時代前期の所産ではないかという疑問がある。

最後に、小稿を草するにあたって、岡崎敬教授、西谷正助教授、下條信行助手、木村幾多郎、西健一郎、山崎純男、柳田純孝、沢皇臣、森醇一郎の諸氏・諸先生に多大なる御教授を得た。末尾ながら、深甚の謝意を表したい。

3. 弥生式土器

馬 田 弘 稔

ここでは遺跡内で発見された遺構に伴わない土器について記す。遺物は表採資料に近いものなので、出土地点は省略することにした (PL. 134)。

甕 (Fig. 399, Fig. 400-2~6)

2は口縁中央部で若干内傾し、上半部で大きく外反する。口縁端部は上・下に引き伸ばされて口唇帯を成し、刻み目文を施す。口縁部は内外ともに粗いハケ目状整形痕を残すが、頸部外面はその後のヨコナデ調整を丁寧に施す。胴部内面は指先による成形痕を認める。3は短い脚台部を欠失する。胴外部は剝離が著しい。内面は縦方向のハケ目状整形痕を一部残すがよくナデ調整されている。口縁部のヨコナデ調整は丁寧に器壁は薄く仕上げる。4は口縁端部にシャープさがなく、中位外面は若干ふくらみ気味にヨコナデを施す。胴部外面は密な整形具を使用し、一部ナデ調整を施すが、内面は粗い整形である。これに対して、5・6は口縁端部をシャープにヨコナデで仕上げ、整形痕は内外ともに粗い。

Fig. 399の甕は胴部から「く」字状に屈折して直線的にひらく口縁部をもち、内外ともに丁寧なヨコナデ整形を施す。端部は上下からの強いヨコナデにより若干凹みを呈し、シャープな稜を有する。胴部外面は磨滅して不明であるが、内面は粗いハケ目状整形痕を上半部にそのまま残し、下半部がやや密な整形後、ナデ調整を施す。底部は丸底である。

鉢 (Fig. 400-1)

胴部外面はハケ目状整形の後、口縁部近くのみナデによる調整を施す。内面の調整は丁寧である。

器台 (Fig. 400-7~10)

8~10はいずれもタタキ成形痕を残し、8の内面は指頭によるナデ整形を認め、9は指押え成形の後、ハケ目状整形を施す。

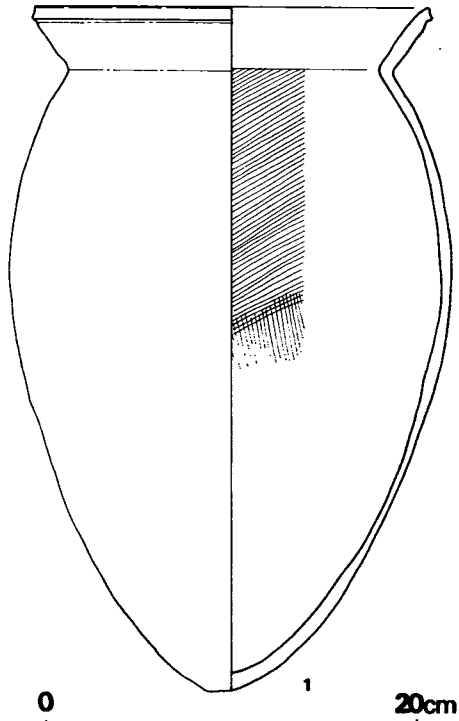


Fig. 399 大道端遺跡出土弥生式土器
実測図(1) (縮尺1/4)

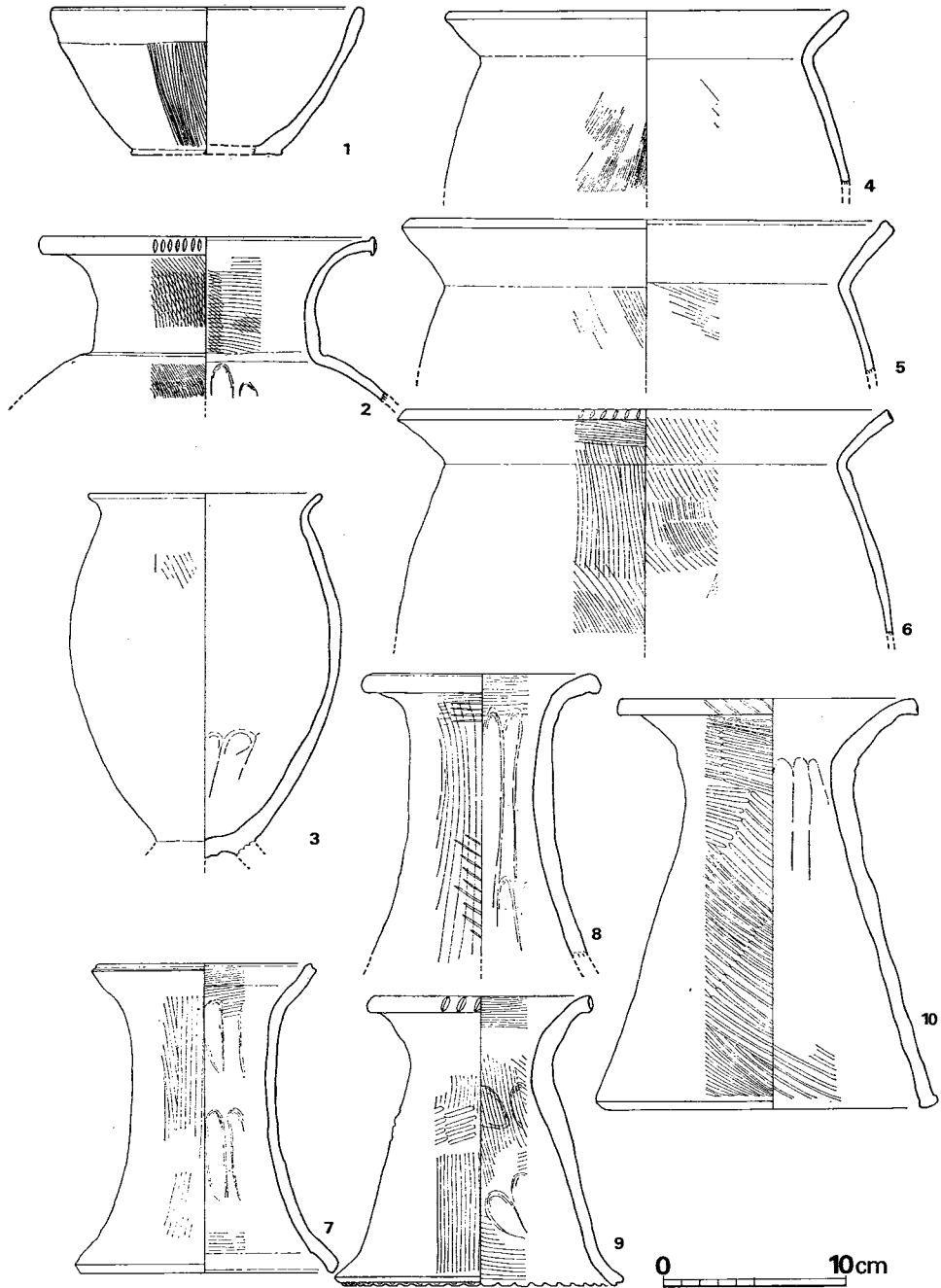


Fig. 400 大道端遺跡出土弥生式土器実測図(Ⅱ) (縮尺1/4)

Tab. 116 大道端遺跡出土弥生土器一覽()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	鉢	底部欠	(17.2)	8.2		砂粒を多く含み、 焼成は良	器内 黒褐色 器外 茶褐色	
2	甕	胴上半部片	(18.5)			砂粒を含み、焼 成は良	淡黄褐色	器周残 1/3
3	甕	脚欠失	(13.0)		14.9胴中位	細砂を多く含み、 焼成は良	黄灰褐色	器周残 1/3
4	甕	胴上半部片	22.4			砂粒を含み、焼 成は良	褐色	
5	甕	口縁部片	(27.2)			砂粒を含み、焼 成は良	白黄褐色	器周残 1/4
6	甕	胴上半部片	27.2			砂粒をあまり含 まず焼成は良	茶褐色	
7	器台	一部欠損	12.4	17.2		砂粒を含み、焼 成は良	黄褐色	器周残 2/3
8	器台	脚下部欠	(13.0)			砂粒を含み、焼 成は良	明褐色	器周残 1/2
9	器台	一部欠損	(12.4)	16.3		砂粒を含み、焼 成は良	褐色	器周残 1/3
10	器台	一部欠損	(16.2)	22.7		砂粒を多く含み、 焼成は良	淡黄褐色	器周残 1/4
	甕	略完	21.0	36.4	胴上位	砂粒を若干含み、 焼成は良	淡黄褐色	

4. 土 師 器

関 晴 彦

ここでは、大道端遺跡出土土師器のうち、遺構に伴わないもの（出土地点不明のものを含む）について記す。

Fig. 401-1は小形丸底壺で、口頸部がわずかに内彎しながら外反する。2・3はほぼ同じ形で、3の方が大きい。4は完形で、底部内面にも刷毛目が残っている。5~7は小形の甕と思わ

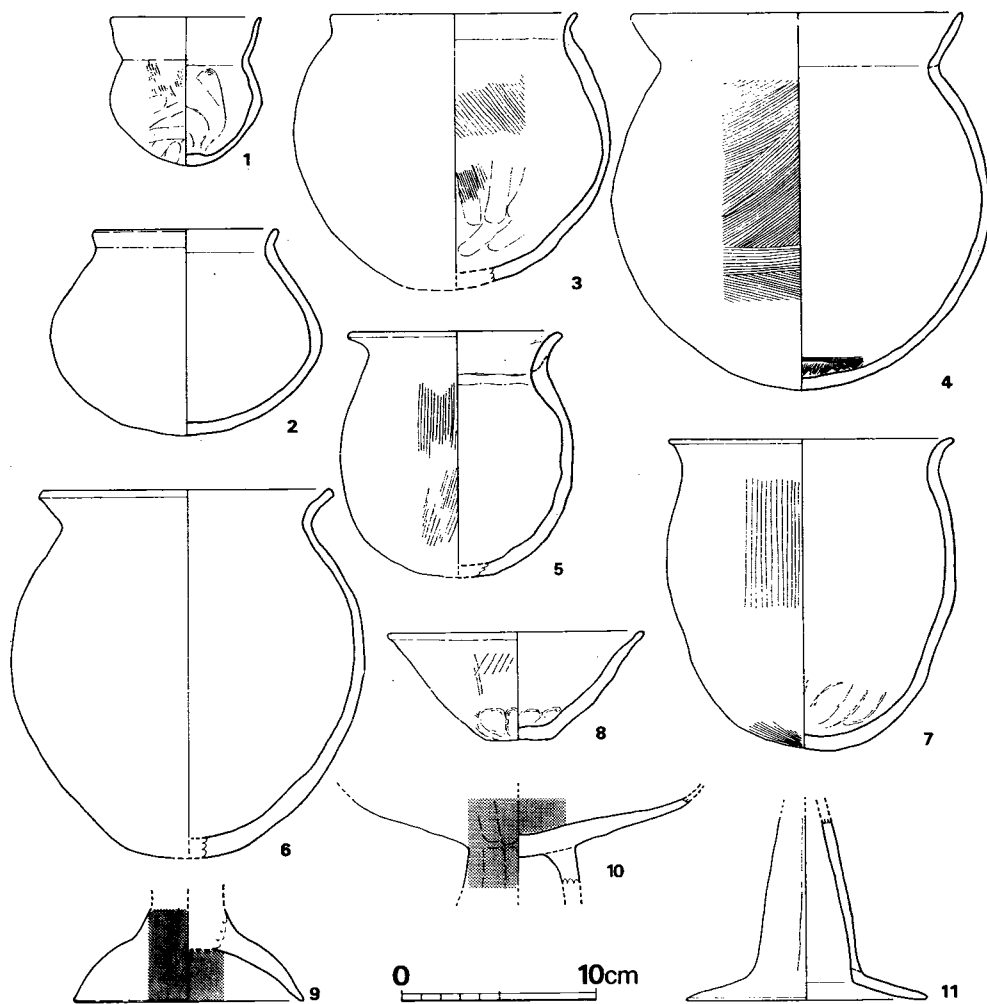


Fig. 401 大道端遺跡出土土師器実測図（1）（縮尺1/4）

れる。8の鉢は底部の内外面とも指頭によるナデを施す。9~11は高杯で、9・10は丹塗りである。11は脚部の中位でふくらみをもち裾部は強く折れ曲る。

1・4・11は出土地点がまったく不明であるが、本遺跡の時期的な空白の一部を埋めるものと思われる。

Fig. 402—1・2・4・5は甕である。5は大形で把手がつき、底部は厚い。3は鉢と思われる。6は外面丹塗りの把手で、胎土・焼成とも良好である。Fig. 402—7は土玉で、径2cm前後、厚さ1cm、孔径0.3cmである。

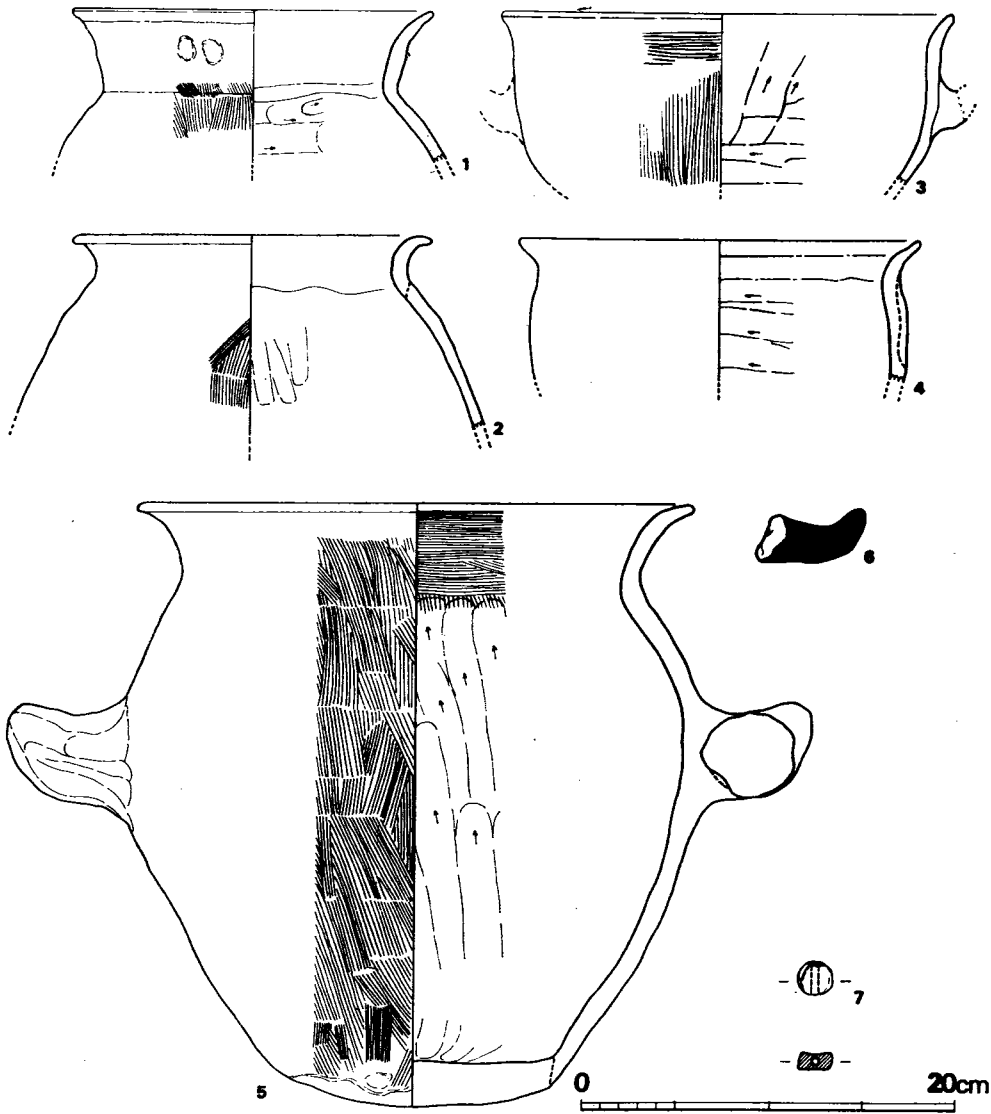


Fig. 402 大道端遺跡出土土師器実測図(Ⅱ) (縮尺1/4)

Fig. 403—1・2は甗で、2は全形が判明する。内面は上へ向うへら削り、外面は縦方向の刷毛目調整で口縁部はヨコナデである。上下端部近くは刷毛目が磨滅している。本遺跡では、典型的な甗である。

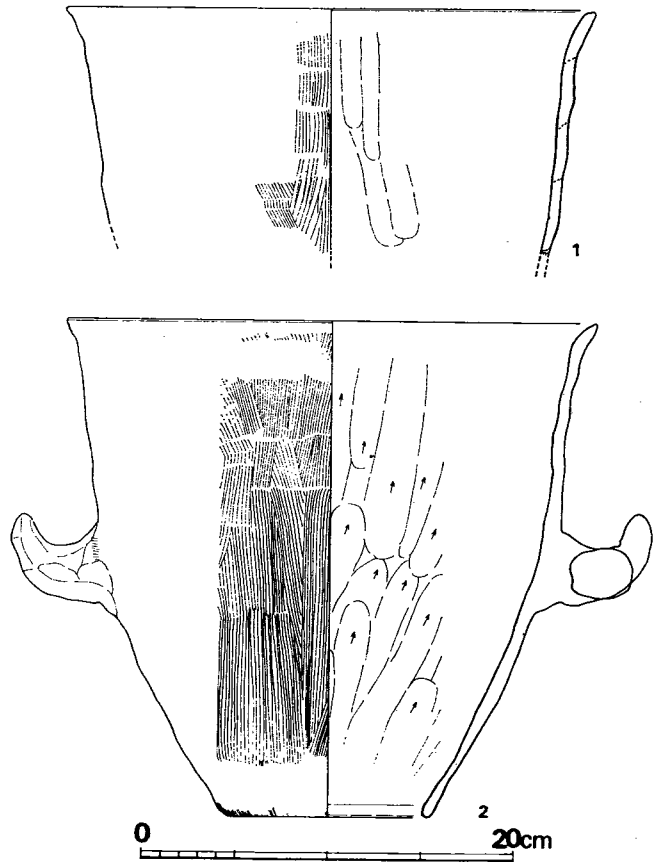


Fig. 403 大道端遺跡出土土師器実測図(Ⅲ) (縮尺1/4)

Tab. 117 大道端遺跡出土土師器一覧 () は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
1	H 壺	完	7.2~ 8.1	7.8	口縁部	胎土精良、焼成良	茶褐色	Fig. 401
2	H 壺	復原完	(9.8)	10.7	体部中位	細砂を含み、焼成良	赤黄色	Fig. 401
3	H 壺	底部欠	11.8~ 12.5	(14.0)	体部中位	砂粒を多く含み、焼成良	淡黄褐色	Fig. 401
4	H 壺	完	17.4	19.6	体部中位	細砂を含み、焼成良	淡黄褐色	Fig. 401
5	H 甗	底部欠	12.0~ 12.5	(12.7)	体部最大径 ≒口径	大きめの砂粒を含み軟質	黄褐色	Fig. 401
6	H 甗	底部欠	(15.0)	(19.0)	体部中位 やや上	大きめの砂粒を含み、焼成良	赤褐色	Fig. 401
7	H 甗	復原完	(15.0)	16.1	口縁部	砂粒を含み、焼成良	茶褐色	Fig. 401

番号	器種	器部	法量		最大径とその位置	胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高				
8	H鉢	復原完	(13.2)	5.6	口縁部	砂粒を含み、焼成良	淡黄褐色	Fig. 401
9	H高杯	脚部				胎土精良、焼成良	黄褐色	端部径(12.0) 内外面丹塗り
10	H高杯	杯部～脚部				胎土精良、焼成良	黄褐色	内外面丹塗り 接合部径 5.5
11	H高杯	脚部				砂粒を含み、焼成良	黄褐色	脚端部径12.5
1	H甕	口縁部～肩部	19.1			少量の砂粒を含み、焼成良	茶黄色	Fig. 402
2	H甕	口縁部～体部	18.9			少量の砂粒を含み、焼成良	赤褐色	Fig. 402
3	H鉢	底部および把手欠	24.4			少量の砂粒を含み、焼成良	茶褐色	Fig. 402
4	H甕	口縁部～肩部	21.6			少量の砂粒を含み、焼成良	外面 赤褐色 内面 黄褐色	Fig. 402
5	H甕	復原完	29.5	31.9	体部最大径 =口径	砂粒を含み、焼成良	胴茶褐色	Fig. 402
6		把手					胴茶褐色	丹塗り
7	土玉						黄褐色	
1	H甌	口縁部～体部	(28.5)			砂粒を含み、焼成良	灰褐色	Fig. 403
2	H甌	復原完	(28.3)	26.3	口縁部	砂粒を含み、焼成良	茶色	孔径(10.6)

5. 須 恵 器

関 晴 彦

ここでは、大道端遺跡出土須恵器のうち、遺構に伴わないもの（出土地点不明のものを含む）、および須恵器甕類のタタキ目について記す。遺物の多くは表採品の性格に近いため、出土地点等は省き、参考資料にとどめておきたい。

須恵器 (Fig. 404)

Fig. 404—1~11は蓋である。1~3は外面肩部に段または凹線をもち、口縁部内面にも凹線をもつ。4~6はかえりをもち、天井部にはツマミがつかない。7・8はいずれもツマミがつくが口縁部の形態を異にする。9は天井部を欠くが、ツマミがつくと思われる。10はツマミが二段になっており、本遺跡ではこの例のみである。12~19・21は杯で、12・13は立ち上りの口縁をもつ。14~17は平底である。18・19・21は高台がつく。20の腕は口縁端部がかかるく外反し体部には浅い凹線3本があり、その下端は突出する。また高台端部が凹線状となっている。22は埴であろう。23は蓋の可能性もあるが、高杯杯部とした。24~26は脚台で、壺・鉢の脚台部が考えられる。27・28は瞭で、いずれも口縁部を欠く。29は把手付の鉢と呼ぶべきか。C区第39号住居跡にも似た形態の体部をもつ鉢があるが、把手はつかない (Fig. 289—2)。30・31は長頸壺の口頸部で、口縁部の形態に若干の差がある。30は焼成不良である。33~35は甕で、34は大形品と思われる。

須恵器甕類のタタキ目について (Fig. 405~408)

本遺跡ではB区の第1号溝を中心に多量の須恵器片が出土したが、甕類ではその全形の判明するものが破片量に比べて少なかったため、ここではこれらの破片に施されたタタキ目その他の整形・調整時の文様について述べてみたい。

須恵器甕類には一般に同心円や格子目、平行線等の文様が認められ、これらは「タタキ目」と呼ばれている。この「タタキ目」は、粘土を叩きしめるために内面に「あて木」（以下これを工具aとする）を接し、外面から叩き具（以下これを工具bとする）で叩いて粘土をより密にする過程で生じると推定される。また、大形品ではロクロによる成形がむずかしいと思われるから、粘土紐または粘土帯を接着しながら思うところの形をつくりあげ、これらをより密着させるためにも「タタキ」という作業が必要となるのであろう。機能上の問題については、や

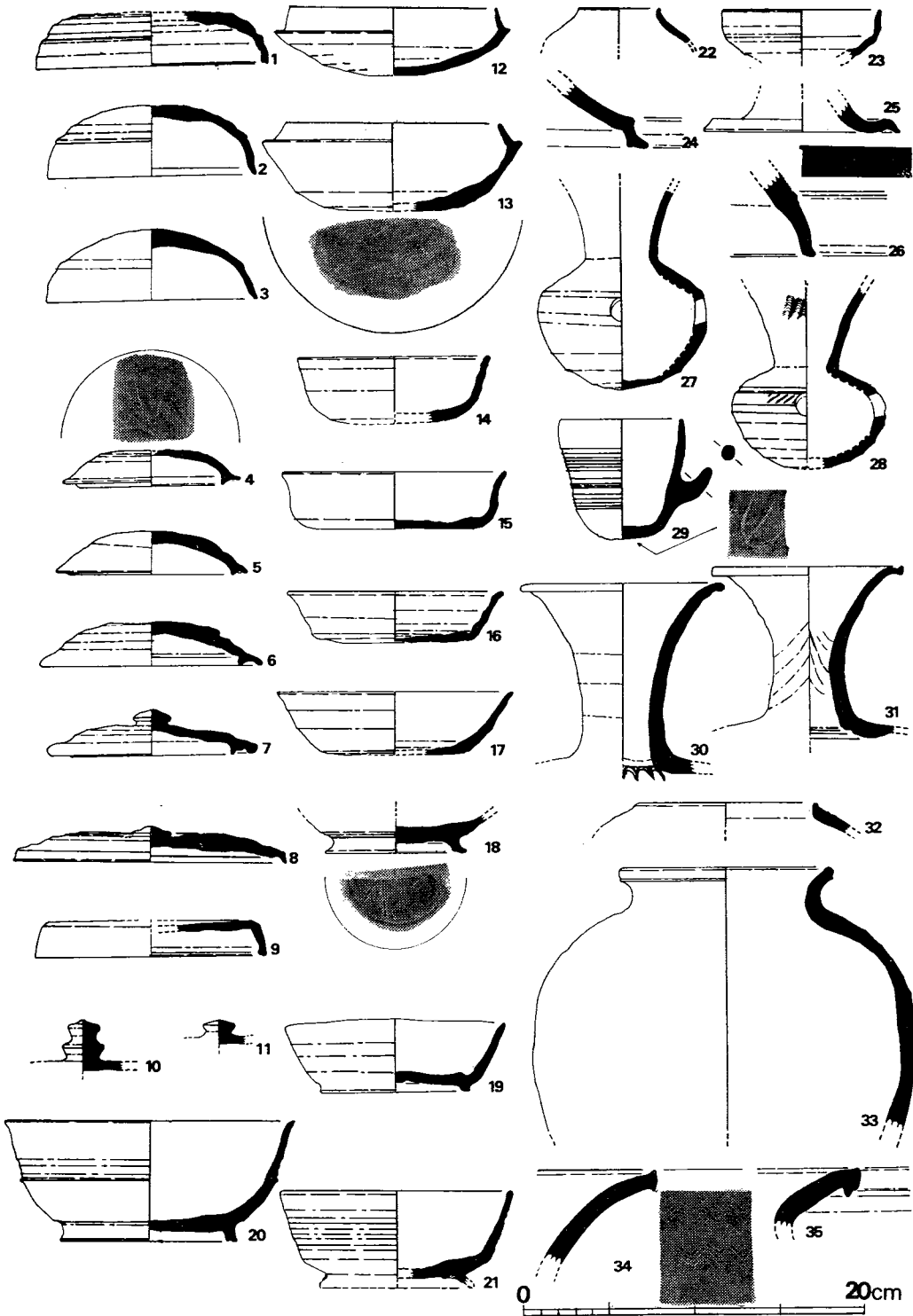


Fig. 404 大道端遺跡出土須恵器実測図 (縮尺1/4)

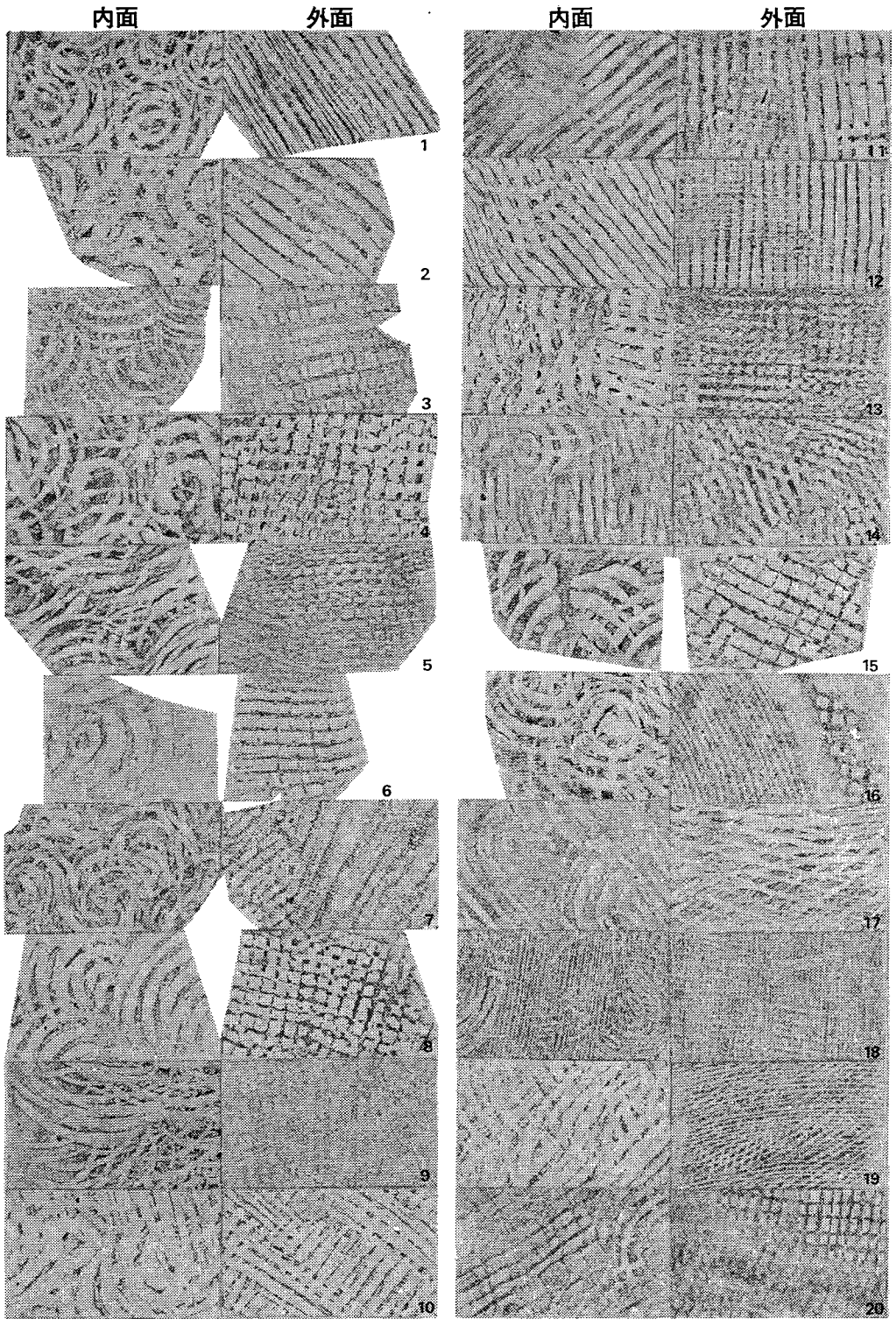


Fig. 405 大道端遺跡出土須恵器壺類タタキ目拓本(1) (縮尺1/2)

はり専門家の助言や教示が必要であり、いまはその用意もないので、前記したように、文様構成について記してみたい。

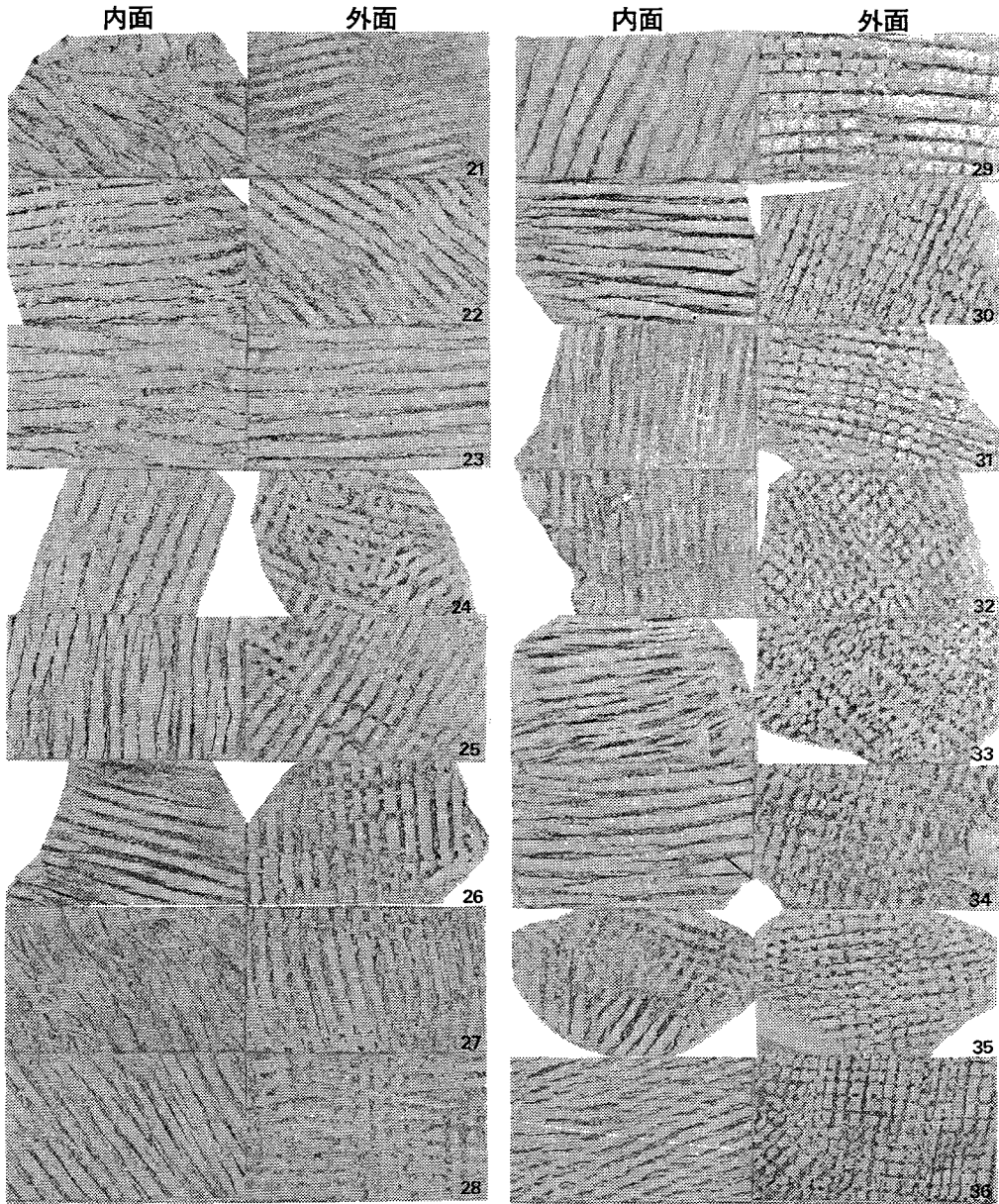


Fig. 406 大道端遺跡出土須恵器甕類タタキ目拓本(Ⅱ) (縮尺1/2)

本遺跡出土の須恵器のうち「タタキ目」のあるものを集め、整理したところ、工具 a と工具 b の組合せにはいくつかの類型が認められた⁽¹⁾。内面のタタキ目によって分類すれば、

I 類 同心円系

II 類 平行線系

III 類 格子目系

IV 類 ⊕系

に分けられる。外面のタタキ目によって分類すれば、

A 類 平行線系

B 類 格子目系

の二つである。外面に同心円を残すものは発見できなかった⁽²⁾。それらのうちのいくつかを Fig. 405~406 に示した⁽³⁾。数量的には、I 類がもっとも多く、次に II 類が多く、III 類はもっとも少ない。

I 類のうち、Fig. 405—1~10 は内面が同心円のみのものである。このうち、少なくとも 1・2 は外面 A 類に属する。Fig. 405—11~20 は同心円+x のものである。x の項には平行線・格子目、18 のようにハケ目状を呈するものなどがある。また、同心円でも拓本上中央が黒のものと白のものがある。20 は内面に同心円+格子目、外面格子目で、III 類との中間的なものである。

Fig. 406—21~36 は II 類である。II 類のうち 21 は偶然であろうか、放射状を呈する部分がある。また、平行線の方向が 90° 変われば、場合によっては格子目状にみえることもある。24~28 の外面はそれと思われるが確実な単位が認定できないため、A 類といえるのは 21~23 のみである。

37~40 は III 類である。格子目系としたが、ナデが加えられているためか凹凸が浅く、確実ではない。ただ、いずれも見た目には同じような表面を感じさせる土器片である。

41~49 は IV 類で、41・42 は残存部分からみると、「十」字状というよりも「米」字状に近い。49 は底部と思われる小片の外面に施されている。

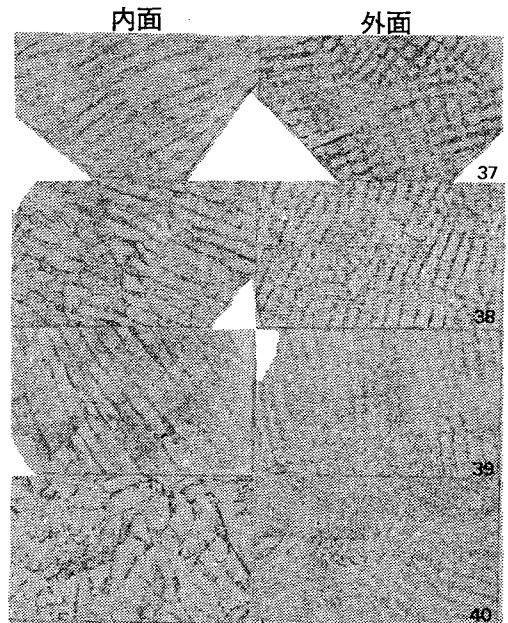
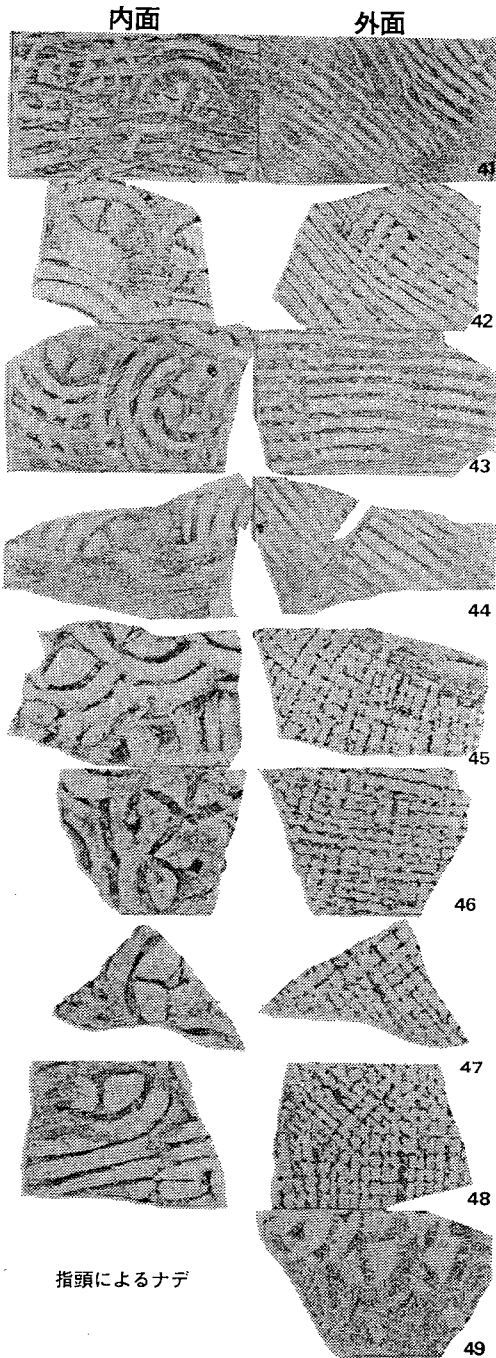


Fig. 407 大道端遺跡出土須恵器甕類
タタキ目拓本(Ⅲ) (縮尺1/2)



以上、大まかに四つに分類したが、ここでは時間性を無視している。タタキ目の施される部位についても同様である。しかし、こうした細部をみることによって、ただし

1. 同一の時空性
2. ある製作者集団は一定の、限られた工具を使用すること。

を前提として、諸製作者諸集団の内容、製作者と使用者との関係——流通の側面から——を明らかにすることができるのではないだろうか。

注(1) 工具aと工具bとは、それぞれ内面、外面に使用される工具としておく。したがって内外面とも同類であってもよい。しかし、将来、内外面とも同一の工具が使用されたことが証明されれば、叩き作業は二段階に分割して考えなければならないだろう。

(2) ただし、外面に同心円タタキを施したのちすべてナデ消し、さらに格子目、平行線のタタキを施せば外面は格子目、平行線のどちらかになったまま残るが、ナデを施すのは頸部内面付近がほとんどで、かつその痕跡をそのまま残していることからみれば、他の部分はおそらく叩いたままと考えてよいであろう。

(3) 拓本における白・黒は土器表面では凹・凸であり、工具では凸・凹である。

拓 本	白	黒
土 器	凹	凸
工 具	凸	凹

Fig. 408 大道端遺跡出土須恵器甕類
タタキ目拓本(Ⅳ) (縮尺1/2)

Tab. 118 大道端遺跡出土須恵器一覧()は推定値、単位 cm

番号	器種	器部	法量		胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高			
1	S 蓋	天井部欠	(14.1)	(3.3)	砂粒を含み、焼成良	青灰色	
2	S 蓋	略完	12.7	4.2	砂粒を含み、焼成良	青灰色	
3	S 蓋	略完	12.8	4.2	砂粒を含む	黄灰色	
4	S 蓋	天井部欠	(8.6)	(2.2)	砂粒を含み、焼成良	青灰色	天井部外面へラ記号
5	S 蓋	略完	11.4	2.6	大きめの砂粒を含み、焼成不良	灰色	
6	S 蓋	略完	10.8	2.6	大きみの砂粒を含み、焼成不良	灰色	
7	S 蓋	略完	8.6	2.7	砂粒を含み、焼成良	紫褐色	
8	S 蓋	復原完	(16.3)	2.1	砂粒を含み、焼成良	青灰色	
9	S 蓋	天井部欠	(14.8)		砂粒を含み、焼成良	青灰色	
10	S 蓋	ツマミ			細砂を含み、焼成良	灰色	
11	S 蓋	ツマミ			細砂を含み、焼成良	青灰色	
12	S 杯	略完	14.2	4.1	細砂を含み、焼成良	灰色	
13	S 杯	底部欠	(12.8)	(5.2)	細砂を含み、焼成良	青灰色	底部内外面叩キ?
14	S 杯	底部欠	(11.5)	(4.0)	細砂を含み、焼成良	青灰色	
15	S 杯	復原完	(13.3)	(3.4)	細砂を含み、焼成良	内面 灰色 外面 茶灰色	
16	S 杯	復原完	(12.8)		細砂を含み、焼成良	青灰色	有高台?
17	S 杯	底部欠	(14.2)	(3.7)	細砂を含み、焼成良	青灰色	
18	S 杯	底部			細砂を含み、焼成良	青灰色	高台径(8.4)
19	S 杯	略完	12.3~ 12.9	3.9~ 4.3	細砂を含み、焼成良	青灰色	口縁歪む
20	S 碗	復原完	(17.2)	(7.0)	細砂を含み、堅緻	灰色	底部は紫灰色
21	S 杯	底部欠	(13.5)		細砂を含み、やや軟質	茶灰色	
22	S 壺	口縁部~体部	(4.8)		細砂を含み、やや軟質	青灰色	
23	S 高杯	杯部	(9.8)		細砂を含み、やや軟質	内面 朱褐色 外面 黄灰色	
24	S	脚台			細砂を含み、焼成良	青黒色	
25	S	脚台			細砂を含み、焼成良	青灰色	裾部径(11.8)

番号	器種	器部	法量		胎土・焼成	色調	備考
			口径	器高			
26	S	脚台			細砂を含み、焼成良	青灰色	
27	S 瞭	口縁部欠			細砂を含み、焼成良	青灰色	現存高 11.8
28	S 瞭	口縁部欠			細砂を含み、焼成良	青灰色	現存高 10.8
29	S 把 手付鉢	復原完	(7.1)	(7.1)	細砂を含み、やや軟質	青灰色	底部外面にヘラ記号
30	S 長頸壺	下半欠	(12.1)		胎土精良焼成不良		
31	S 長頸壺	下半欠	(11.4)		胎土精良、焼成良	灰褐色～茶褐色	
32	S 壺	口縁部	(10.0)		胎土精良、焼成良	青灰色	外面に灰釉
33	S 壺	底部欠	(12.0)		大きめの砂粒を含み、焼成良	灰茶褐色	
34	S 甕	口縁部			大きめの砂粒を含み、焼成良	青黒色	
35	S 甕	口縁部			大きめの砂粒を含み、焼成良	青黒色	

V ま と め

西 谷 正

以上数章にわたって、大道端遺跡で検出した遺構や遺物を紹介してきた。大道端遺跡の主要な遺構は、古墳時代後期の集落跡にあるが、そただけにとどまらず、各時代の遺構や遺物も豊富に含まれている。

山門地方の歴史は、古く先土器時代に遡ることが明らかになっている。山門地方の東辺を塞ぐように南北に連なる東部の丘陵地帯には、海拔50m以上のところで、先土器時代の石器が採集されている。先土器時代の石器は、瀬高町の大谷・獅子穴など十数カ所で出土するが、いずれも礫器を主としている。それら丘陵地帯の出土地に対して、大道端遺跡は海拔9m前後の安定した微高地にあたるが、ここでも先土器時代の石器が出土したことは前述のとおりである。ただ、いずれも剥片石器で、ナイフ形石器を主体とする。丘陵地の遺跡の礫器に対して、低地の遺跡の剥片石器という、遺跡立地と石器形態の差異に、前者から後者への時代差を考え、そこに、海退現象に伴う低地性遺跡の出現を認めることができよう。しかし、丘陵性遺跡の礫器群に共伴する剥片石器や、低地性遺跡の剥片石器群に伴う礫器の問題は不明である。また、礫器・剥片石器のいずれにしても確実な包含層が検出されていないこともあって、山門地方の先土器文化の調査は、これからの課題であるが、大道端遺跡出土の剥片石器は、低地性遺跡に対する注意を喚起する。

この付近の扇状地の形成過程に堆積した地層の最上層は茶褐色の粘質土層で、そこには、縄文時代の遺物が包含されている。このたびの調査範囲に限っても、遺構はまったく検出できなかった。本来の縄文時代の生活遺構がどこにあったのか知る由はない。東側の隣接地域には、古僧都山があるが、その東斜面は急傾斜であるため、そこに住居跡を求めることは困難で、おそらく山麓地帯から現在地にかけての場所であったろう。最近、海拔50m以上の、古僧都山塊の一丘陵上で押形文土器が採集されたと伝えられるが、前期以降になって、山麓地帯へ遺跡は降下するのかもしれない。大道端遺跡の縄文式土器は、中期から後期を中心としつつ、早期末から前期の轟・曾畑式系土器、中期の阿高式系土器、後期の磨消縄文土器・御領式系土器、そしてさらに晩期の前葉型式や山ノ寺式土器まで、じつに長期間にわたるもので、この付近に、長期におよぶ集落があったことがうかがえる。縄文時代の石器には、石鏃が圧倒的に多いが、スクレーパーもかなり出土していて、狩猟活動を推測させる。いっぽう、自然礫の両端を打ち欠いた大小の石錘があって、漁撈への依存度も高かったことが考えられる。山門地方の縄文時代の遺跡を見ると、後・晩期には山麓階から西方へ2km以内のところで、海拔8、9mの沖積

地にまで立地する。奈良時代の海岸線は、さらに西方に遠く7、8kmのところにある。縄文時代の海岸線が奈良時代のそれとほぼ同じぐらいだと仮定すればその海岸線と現在の遺跡分布の西限との間に、さらに遺跡が埋没している可能性がある。しかし、逆に、縄文時代遺跡の分布の現状を固定化して考えると、海岸線は奈良時代よりさらに東方に7、8km海進していることになる。

弥生時代の山門地方は、縄文時代いらい継続して、同じような遺跡立地を示すものが存在するいっぽうで、海拔3、4mの沖積低地に遺跡が定着化する。いわば、弥生時代全般を通じて、矢部川をはじめ数条の中小河川の氾濫と闘いながら農耕地を拡大し、そこを守っていくことが、山門地方の弥生時代人の大きな課題であったろう。そのなかでも弥生時代中期中葉以降になると、山門地方における地域的な国家形成が推測される（『九州文化史研究所紀要』第21号）が、大道端遺跡には、そうした地域社会を構成する集落が存在した。

弥生時代の大道端遺跡は、中期のはじめから後期の末葉まで存続しているが、遺構としては、後期の住居跡と溝である。溝は大道端遺跡の立地する微高地の軸の方向とほぼ一致し、集落の南端を走るの、用水施設というより、むしろ排水施設であったかもしれない。溝は小規模なものであって、少なくとも、集落を圍繞する防禦的なものではなかったであろう。この集落の大きな特長は、3軒またはそれに若干数を加えた程度の小集団であったことといえよう。住居跡個々の規模・形態・出土遺物などは、筑後地方のみならず、北部九州のそれらと変らない通有のものである。

大道端遺跡の調査における最大の成果は、古墳時代後期とりわけ6世紀末ないし7世紀初ごろを中心とした集落跡にある。一つは、集落の規模が、南北約340mであると判明したことにある。東西については、およそ280~300mぐらいで、楕円形に近い範囲が推測される。こんど調査を行なった九州縦貫道用地内だけでも、古墳時代後期の住居跡は、100数十軒に達するが、上記のような集落の全体像を描くと、相当数の住居跡が想定される。検出された住居跡の分布状況を見ると、一定の空間において、数軒ないし十数軒の住居跡が群集しているので、それを、集落を構成する単位集団とすると、集落内部にはいくつかの単位集団があることになる。竪穴式住居と竪穴式住居群、そして、いくつかの竪穴式住居群からなる集落、これらのそれぞれの単位がいかなる社会構成を反映したものであろうか。大道端集落の東に近接した位置に築造されている女山神籠石の列石線の内外には、かつて200~300基の群集墳があったといわれ、現在でも100基以上の横穴式石室や横穴が認められる。大道端の集落と女山の群集墳は相関関係にあると考えるが、群集墳の分析と合わせて、ここに提示した資料をもとに将来の検討に待ちたい。集落と古墳の関係について、遺物の面でも注目すべき事実がある。すなわち、大道端遺跡の住居跡で発見される土器は、土師器が大部分で、90%をこえる高いパーセンテージを示す。同時期の群集墳では、須恵器が圧倒的に多いことと、きわめて対照的である。いっ

ぼう、横穴式石室でしばしば発見される耳環が、住居跡やピットなど集落跡から出土したことも珍しい。

大道端の集落は、おそらく水稲耕作を主体とする農業経営に生産基盤をおいていたと考えられるが、大きな特色は、鉄器の生産にも関わっていたことである。鉄器生産が、大道端の集落の自給を目的としたものか、それとも、さらには地域社会の他の集落にまで供給していたのか、にわかには推断を下せない。いっぽうまた、集落の北方を流れる中小河川での漁撈を思わせる土錘などの漁撈具の検出や、鉄鏝のなかには狩猟具としての使用法も推測されるので、大道端の集落は、じつに多様な生産活動に立脚していたことが考えられる。古代村落における手工業生産あるいは分業の問題に新たな示唆を与えるものと思う。

大道端遺跡にはまた、奈良時代の竪穴式住居も若干含まれている。集落跡の南端から南方へ約60mのところ、現在、東西方向の畦畔と水路が認められる。この地点の地下調査では、その下位に別の畦畔と水路を見出した。ともに条里制の遺構と思われる。大道端集落の終焉が、条里制の実施と関連するかもしれないことをかつて予測(『考古学ジャーナル』第75号)しながら、この問題を深化させるデータに乏しく、ペンディングな問題とせざるをえなかった。ただ、わずかでも奈良時代の住居があったことは、条里制遺構との関連でどう理解したらよいか問題を残したままである。奈良時代の土壙から、わずか一片とはいえ、平瓦の破片が出土しており、竪穴式住居のイメージとは対照的な遺物として注目される。竪穴式住居が立ち並ぶ農村風景とは、際立った対照を示しながら聳える古代寺院が近くにあったのであろうか。大道端遺跡の東方にある女山の神籠石の南限付近では、奈良時代から平安時代にわたる蔵骨器が出土し、大道端遺跡などとの関連が考えられる。大道端遺跡は、さらに平安時代にまで存続し、井戸や溝などの遺構を認めた。遺物のなかで特筆すべきものには石帯や輸入陶磁器があって、平安時代においても、この遺跡が、通常の「農村」ではなかったことを思わせる。古代に、大道端にあった集落は、山門地方でも先進的で、特異な存在であったようである。

大道端の集落の中心部は、中世以後、徐々に山麓地帯へと移動し、こんにち見るような女山の集落を形成していったと思われる。そのことと表裏一体の関係で、大道端の集落は水田下に埋没していったのである。

Ⅵ 大道端遺跡出土の鉄滓について

大 澤 正 巳

1. 緒 言

大道端遺跡出土の鉄滓および羽口先端溶着スラグについて、顕微鏡による鉱物組成、および、定量・定性分析による化学組成の調査を行なった。供試材は、古墳時代後期(6世紀後半)の住居跡および、その周辺から出土した遺物である。

調査した3点の鉄滓のうち、1点は鍛冶滓タイプ、2点は製錬滓タイプであった。

羽口先端部溶着スラグは、高温にさらされてマグネタイト (Magnetite : Fe_3O_4) の微結晶が確認されたが、製錬炉につくものか、鍛冶炉につくものか不明であった。

2. 調査方法

(1) 供試試料

Tab. 119 に示す3点の鉄滓と、1個の羽口先端部に溶着したガラス質スラグの調査を行なった。

鉄滓は、十分に水洗し、乾燥後、二分割して顕微鏡試料と分析試料に分けた。羽口先端部溶着スラグは微量であるため、顕微鏡試料と分光分析を実施した。

(2) 試験方法

顕微鏡試料は、ベークライト樹脂に埋込んだ後、エメリーペーパーで粗研磨し、酸化クロムとアルミナで仕上げた。

分析は、湿式法とスペクトル発光による分光分析である。

(3) 調査項目

調査項目は、①肉眼観察、②顕微鏡組織、③化学分析、④分光分析等である。

3. 調査結果

鉄滓と羽口の外観、および顕微鏡組織を PL. 139 に、また化学組成のうち定量分析結果を Tab. 120 に、定性分析の分光分析を Tab. 121 に示す。

Tab. 119 供試鉄滓の履歴及び調査項目

符号	試料	出土位置及び発掘月日	鉄滓の外観	調査項目			
				外写真	顕微鏡	化学分析	分光分析
3R-6	鉄滓	B区 00 } 東 2 層 72.07.20 203	表皮赤褐色木炭痕あり、比重大 (160g)	○	○	○	○
3S-6	鉄滓	B区 第46~47号住居跡表採 72.07.22	表皮赤褐色木炭痕あり、比重大 (53.5g)	○	○	○	
3T-6	鉄滓	C区 第40号住居跡床面 72.06.01	鉄分ほとんどないガラス質 (39g)	○	○		
7	羽口先端スラグ	B区 第1号溝a内 72.08.19	羽口先端部に溶着したスラグ	○	○		○

Tab. 120 鉄滓の化学分析結果

符号	Sample 明細	全鉄 Total Fe	金属鉄 Metallic Fe	酸化鉄 第一鉄 FeO	酸化鉄 第二鉄 Fe ₂ O ₃	二酸化 ケイ素 SiO ₂	酸化アル ミニウム Al ₂ O ₃	酸化カル シウム CaO	酸化マグ ネシウム MgO	酸化 マンガン MnO	二酸化 チタン TiO ₂	酸化 クロム Cr ₂ O ₃	硫黄 S	五酸化 燐 P ₂ O ₅	炭素 C	バジ ウム V	銅 Cu	造滓成分	造滓成分 Total Fe	TiO ₂ Total Fe
3R-6	B区 00 } 東 2 層 72.07.20 203	55.76	0.14	62.51	10.07	11.23	3.12	2.37	0.85	0.18	0.18	0.027	0.047	0.395	0.049	0.076	0.003	17.57	0.315	0.003
3S-6	B区 第46~47号住居跡表採 72.07.22	57.33	0.08	58.20	17.17	9.50	3.29	2.37	1.67	0.40	5.07	0.053	0.029	0.338	0.055	0.144	0.004	16.83	0.302	0.088

分析は新日鉄八幡製鉄所で行なった。

Tab. 121 鉄滓及び羽口先端付着スラグの分光分析結果

符号	Sample 明細	銀 Ag	アル ミニ ウム Al	比 素 As	ほう 素 B	バリ ウム Ba	ビス マス Bi	カ シ ウ ム Ca	コ バ ルト Co	ク ロ ム Cr	銅 Cu	鉄 Fe	ゲ ル マ ム Ge	カリ ウム K	リ チ ウ ム Li	マ グ ネ ム Mg	マン ガン Mn	モ ブ デ ン Mo	ナ リ ウ ム Na
3R-6	B区 00 } 東 2 層 72.07.20 203	0	4	0	0	0	0	5	1	1	1	5	0	0	0	2	2	1	1
7	B区 第1号溝a内 72.08.19	0	3	0	0	0	0	3	1	1	2	4	0	0	0	3	2	0	2
参考値	春日市門田遺跡出土羽口スラグ	0	2	0	0	0	0	4	0	1	2	4	0	2	0	3	1	0	3

7：羽口先端溶着スラグ

- 0：認められない
- 1：辛じて認められる
- 2：明瞭
- 3：強い
- 4：可成り強い
- 5：非常に強い

ニ オ ブ Nb	ニ ッケ ル Ni	鉛 Pb	ア ン チ ン モ Sb	け い 素 Si	す ず Sn	テ ル ル Te	チ タ ン Ti	バ ジ ウ ム V	タ グ ス テ ン W	亜 鉛 Zn	ジ ル コ ン Zr	磷 P
0	1	0	0	5	0	0	2	2	0	0	0	0
0	1	1	0	4	0	0	1	1	0	1	0	0
0	0	0	0	5	0	0	1	2	0	0	0	0

分析は新日鉄八幡製鉄所で行なった。

試料 3R-6

①肉眼観察

表皮は赤褐色を呈し、若干の凹凸があり、木炭痕が認められる。破面は、色と気孔がコークス状であるが、比重は大きい。160g。

②顕微鏡組織

鉱物組成は、白色粒状を示すヴスタイト (Wüstite : FeO) と、淡灰色長柱状の結晶であるファイヤライト (Fayalite : $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$)、それに地のガラス質等で構成されている。

③化学組成

全鉄分 (Total Fe) の残留が多く、そのうち、酸化第一鉄 (FeO) の占める割合が62.51%と大きい。造滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO}$) は、17.57%と少な目であり、二酸化チタン (TiO_2)、バナジウム (V) 等は微量である。

このように、全鉄分 (Total Fe) が高目で、造滓成分が低く、二酸化チタン (TiO_2) 1.0%以下、バナジウム (V) が小数1桁目で数値がない場合は、鍛冶滓タイプに属するものが多い。⁽¹⁾

④分光分析

羽口先端溶着スラグの比較材として、分析を行なったものである。検出される元素としては、鉄 (Fe) と造滓成分であるけい素 (Si)、アルミニウム (Al)、カルシウム (Ca)、マグネシウム (Mg) 等に感度が強く、他に、コバルト (Co)、クロム (Cr)、銅 (Cu)、マンガン (Mn)、モリブデン (Mo)、ナトリウム (Na)、ニッケル (Ni)、チタン (Ti)、バナジウム (V) 等が弱く存在する。

試料 3S-6

①肉眼観察

破片であるが表皮は淡赤褐色に黒色を混じえている。破面は、黒褐色で気孔少なく、緻密である。比重は大きい。重量は53.5gである。

②顕微鏡組織

鉱物組成は、ヴスタイト (Wüstite : FeO) と、やや灰色がかかった多角状の結晶 (半還元砂鉄粒子?)、ファイヤライト (Fayalite : $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$)、ガラス質から構成されている。

③化学組成

この鉄滓も、全鉄分 (Total Fe) が57.33%と高く、また、酸化第一鉄 (FeO) も58.20%と多目である。造滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO}$) は低目で16.83%であるが、二酸化チタン (TiO_2) 5.07%、バナジウム (V) 0.144%と高目であり、銅 (Cu) は0.004%と極く微量であることから、砂鉄を原料とした製錬初期の排出滓と考えられる。

顕微鏡観察による鉱物組成と、化学分析値はよく対応がとれている。

試料 3T-6

①肉眼観察

比重の小さいガラス質スラグである。表皮は、艶のない黒色飴状を示し、裏面は、いく分滴下気味である。破面は多孔質で黒色又は白色を呈し、場所による色差が激しい。39g。

②顕微鏡組織

鉱物組成はガラス質のみで、鉄分はまったく認められない。黒色円状の個所が気孔である。こういった組織の鉄滓から、製錬時の反応を推定するのは不可能なので、分析は省略した。

試料 7. 羽口先端溶着スラグ

①肉眼観察

羽口は、小さい破片で内・外径の復原は不可能である。胎土は精良で、レンガ色を呈している。外面には鉄滓が溶着していたので、これを一部とって分析した。

②顕微鏡組織

鉱物組成の主成分は、ガラス質であるが、これに、樹枝状のマグネタイト微結晶(Magnetite: Fe_3O_4)が微量存在している。羽口先端部は、送風によってかなりの高温になり、粘土質は一部溶融される。この個所に付着した鉄滓も、当然高温になるため、鉱物組成はガラス質となり、ごく一部に、高温からの冷却過程で晶出したマグネタイト(Magnetite: Fe_3O_4)が認められるのである。

③分光分析

構成成分の元素として検出されるものは、鉄(Fe)と造滓成分(Si+Al+Ca+Mg)等であり、これにコバルト(Co)、クロム(Cr)、銅(Cu)、マンガン(Mn)、ナトリウム(Na)、ニッケル(Ni)、鉛(Pb)、チタン(Ti)、バナジウム(V)、亜鉛(Zn)等が少量加わっている。

3R-6とほぼ、同一傾向にあるが、差異のある点は、鉛(Pb)、亜鉛(Zn)等低溶融金属が検出されていることである。参考のため、春日市門田遺跡出土の羽口⁽²⁾を挙げてみたが、成分的に大きな開きは認められない。

この羽口が、製錬炉につくものか、鍛冶炉につくものか、現在のところ判定できない。今後の資料の集積から解決すべきと考える。

4. 結 論

6世紀後半代に推定できる、大道端遺跡出土の鉄滓は、鍛冶滓タイプと製錬滓タイプの2種に分けられる。

鍛冶滓タイプは、全鉄分 (Total Fe) が高目 (55.76%) で、二酸化チタン (TiO_2) は1%を割って0.18%、また、バナジウム (V) も0.076%と低目であった。

製錬滓タイプは、全鉄分 (Total Fe) が、57.33%と高目で、造滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO}$) が16.83%で低目から、製錬初期段階の排出滓と考えられる。

この鉄滓中の二酸化チタン (TiO_2) は、5.07%含有され、6世紀後半代の他の遺跡の鉄滓に較べると、若干高目である。⁽³⁾

鍛冶滓タイプと製錬滓タイプの鉄物組成は、ウスタイト (Wüstite: FeO) + ファイヤライト (Fayalite: $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) + ガラス質で主構成されているが、製錬滓タイプの方に、半還元砂鉄粒子が加えられる。また、製錬滓タイプの鉄滓の製錬温度は、1200~1300°Cの間に推定できそうである。⁽⁴⁾

羽口先端部の溶着スラグは、少量のマグネタイト (Magnetite: Fe_3O_4) の晶出が認められる以外は、主鉄物はガラス質であった。

この羽口が製錬炉につくものか、鍛冶炉につくものかの決定は、現段階のデータでは無理であろう。

最後になったが、この原稿作成にあたって、分析関係の資料は、清水峯男氏 (旧新日鉄、生産技術研究所部長) の御尽力でそろったことを銘記して感謝の意を表します。

注

① 大澤正己「福岡県の古代製鉄」『福岡考古懇話会会報』第3号、1975。

② 『昭和51年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書』(Ⅲ)として、現在印刷中の論文でも検討している。

③ 福岡市教育委員会刊行予定の『広石古墳発掘調査報告書』で触れているが、福岡市野方新池の新池・カサネ池遺跡の製錬炉の鉄滓、また31個所の古墳供献鉄滓等、二酸化チタン (TiO_2) の含有量は、すべて3.0%以下で1.0%前後が大半である。

この二酸化チタン (TiO_2) の高い砂鉄は、製錬時に金属鉄と鉄滓の分離を悪くするので、チタン分の低い砂鉄の方が使い易い。チタン分の高い砂鉄を使う場合は、優良木炭で大量送風が必要となり、それ相応の技術的背景がないと製錬は不可能になる。

④ FeO —Anortnite— SiO_2 系状態図から推定するのであるが、こん回は時間的余裕がなかったので、結論だけ出した。

編集後記

多くの人々にとって、最初の発掘調査はもっとも印象深いものではないだろうか。大道端遺跡は、私にとって最初の本格的な発掘調査であった。5年前の夏——昭和47年8・9月——、炎天下で発掘した遺跡の報告書が、不十分なながらも、本になろうとしている。

大道端遺跡は、一体何を語っているのだろうか。

「古墳時代の集落構造を明らかにしていこうとする問題意識をもたずに、古墳時代の『住居跡群』を発掘調査している（古墳時代の『集落跡』を発掘調査しているのではない）」

（中井貞夫氏「古墳時代後期の集落——東国を中心として——」『考古学研究』20—1、No. 77. 1973）

という批判に対して、今、沈黙せざるをえない。しかし、佐々木藤雄氏の表現を借りれば、「何故、今、集落論なのか」、「何故、今、共同体論なのか」が問われているのではないだろうか。

本書は多くの人々の指導・助言・援助に負っている。

地元の関係者の皆様

九州歴史資料館の皆様

縄文土器を担当された九州大学文学部考古学研究室の田中良之・宮内克己両氏

鉄滓の分析に関する玉稿をいただいた大澤正巳氏

発掘関係者だからという理由で、半ば強制的な私の依頼によって、執筆を担当された人々

そして文化課諸氏——なかでも、栗原和彦氏・酒井仁夫氏・副島邦弘氏・川述昭人氏・岩瀬

正信氏には終始御世話になった——

最後に、補助員の仲間

皆様に、心から感謝の意を表します。

多くの人々の支援にもかかわらず、私の努力が伴わないため、本書は不十分なところが多いと思う。関係者の皆様に——そして、古代の大道端の人々に——おわびを申し上げます。

最後に、本書の印刷、製本について、御尽力いただいた天地堂印刷の皆様に感謝の意を表します。

（1977、3、5記。 関 晴 彦）

九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 — XIV —
(本文篇)

昭和52年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市中央区西中洲6番29号

印刷 株式会社 天地堂印刷製本所
北九州市小倉北区大手町10-18

九州縦貫自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

— XIV —

福岡県山門郡瀬高町所在大道端遺跡の調査

1 9 7 7

福岡県教育委員会

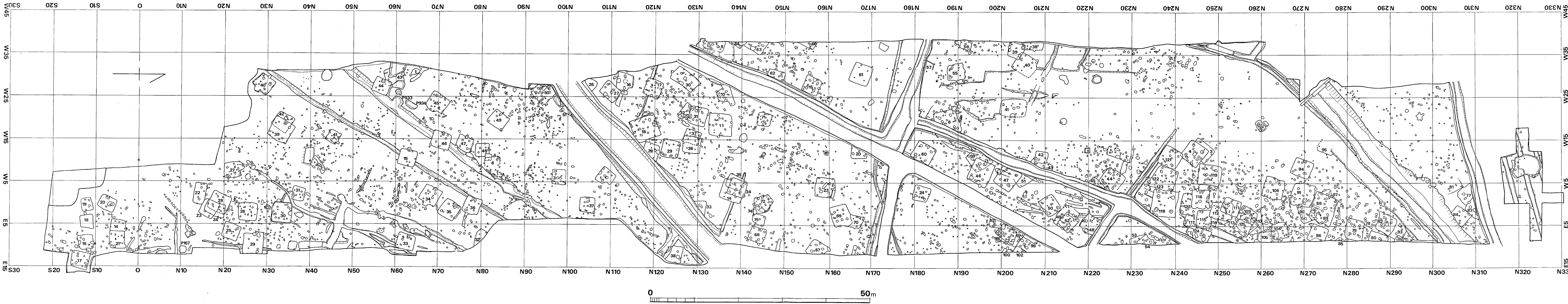
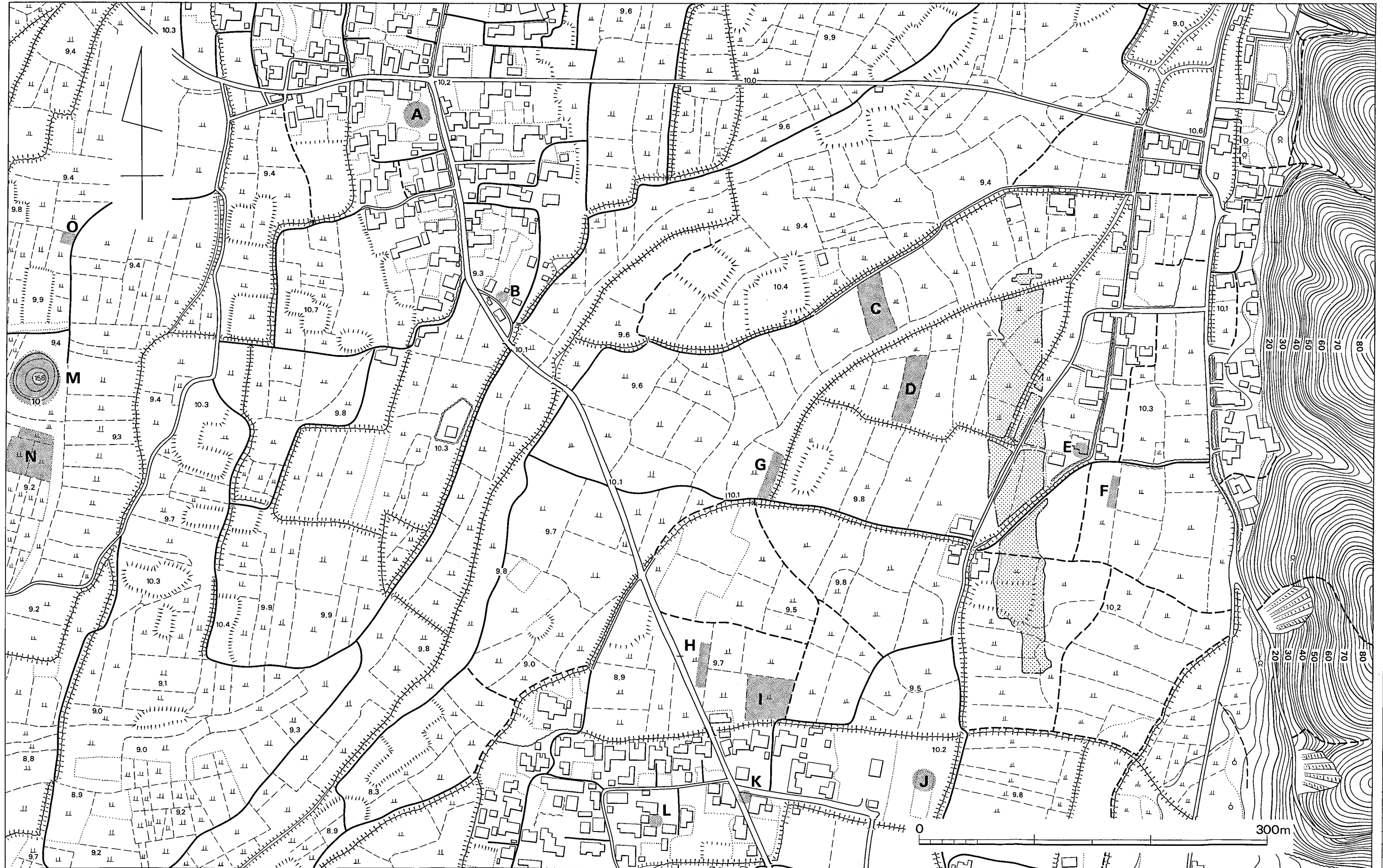


Fig. ① 大東端遺跡遺構配置図 (縮尺1/400) (橋本啓子氏製図)



番号	内容
A	弥生前期
B	横穴式石室(昔、西に開口)
C	土師・土鍾
D	縄文・弥生・古墳
E	弥生
F	土師・須恵
G	弥生
H	弥生・土師・須恵(720627)
I	土師・須恵(720604)
J	弥生 中~後期
K	弥生 後期
L	弥生 中期
M	権現塚古墳
N	弥生・土師・須恵
O	弥生 石棺

Fig. ② 大道端遺跡周辺の地形と遺物出土地点(縮尺1/3,000) (高田弘信氏製図)

時期

大道端遺跡縄文式土器編年図



0 40cm

Fig. ③ 大道端遺跡縄文式土器編年図 (縮尺1/4) (田中良之・宮内克己作成)